THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第四十年第二號　第四百四十號



美術家
商人
事務家
學生
今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥
健腦丸
を要求す
島村博士發明
健腦丸
腦病良藥
KENNOGWAN
主效
腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘
特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を増進す。
藥價
五回分 參拾錢
四日分 六拾錢
一週分 壹圓
二週分
三週分
五週分 四圓
十週分 七圓
全國各藥店に取次す


クリーム
皮膚營養のためにはコールドクリーム。
白粉下にはスムーシンクリーム。艶美人クリーム。
色を白くするには過酸化水素クリーム。
マッサーヂにはコールドクリーム又はトリアノンクリーム。
荒れ止めにはカンファアイス、これは又濃化粧下に用ゐらる。
全國チエンストアーにあり
支店 大阪市東區南久寶寺町
東京 銀座 資生堂

▼說苑

わが交友録





梅　　安田靫彦氏

ゼニトルブ

虚弱者を强健化す

●帝國大學病院 赤十字社病院 各府縣立病院 御採用

醫學博士 山田基氏　醫學博士 土田卯三郎氏　醫學博士 河西健次氏　醫學博士 齋藤秀雄氏
醫學博士 草間要氏　醫學博士 増山正信氏　醫學博士 諏訪豐一氏　醫學博士 川村六郎氏
實驗御推奬

世に販賣せらるゝ强壯劑の種類たるや枚擧に遑あらず。然れ共其の多くは所期の効果を收め得ずして終るもの亦少なしとせず。本劑は所謂「虚弱者を强健化す」を豪語せる如く事實に於て完全に補血强壯の目的を果し得らるゝが故に既に帝國大學病院、赤十字社病院、各府縣立病院等に於て盛んに御採用せられ且臨床諸大家の擧つて推奬せらるゝ所以にして補血强壯劑中の第一位さする又誇張にあらず。

種類及適應症

補血强壯增進劑 單味ブルトーゼ（半月分金二円 一月分金三円）
神經質疾患特效劑 アルゼンブルトーゼ（半月分金二円三十錢 一月分金四円五十錢）
腺病質特效劑 ヨードブルトーゼ（半月分金二円二十錢 一月分金三円五十錢）
健胃補血强壯劑 キナブルトーゼ（半月分金二円二十錢 一月分金三円五十錢）
呼吸器系疾患特效劑 グアヤコールブルトーゼ（半月分金三円五十錢 一月分金五円五十錢）

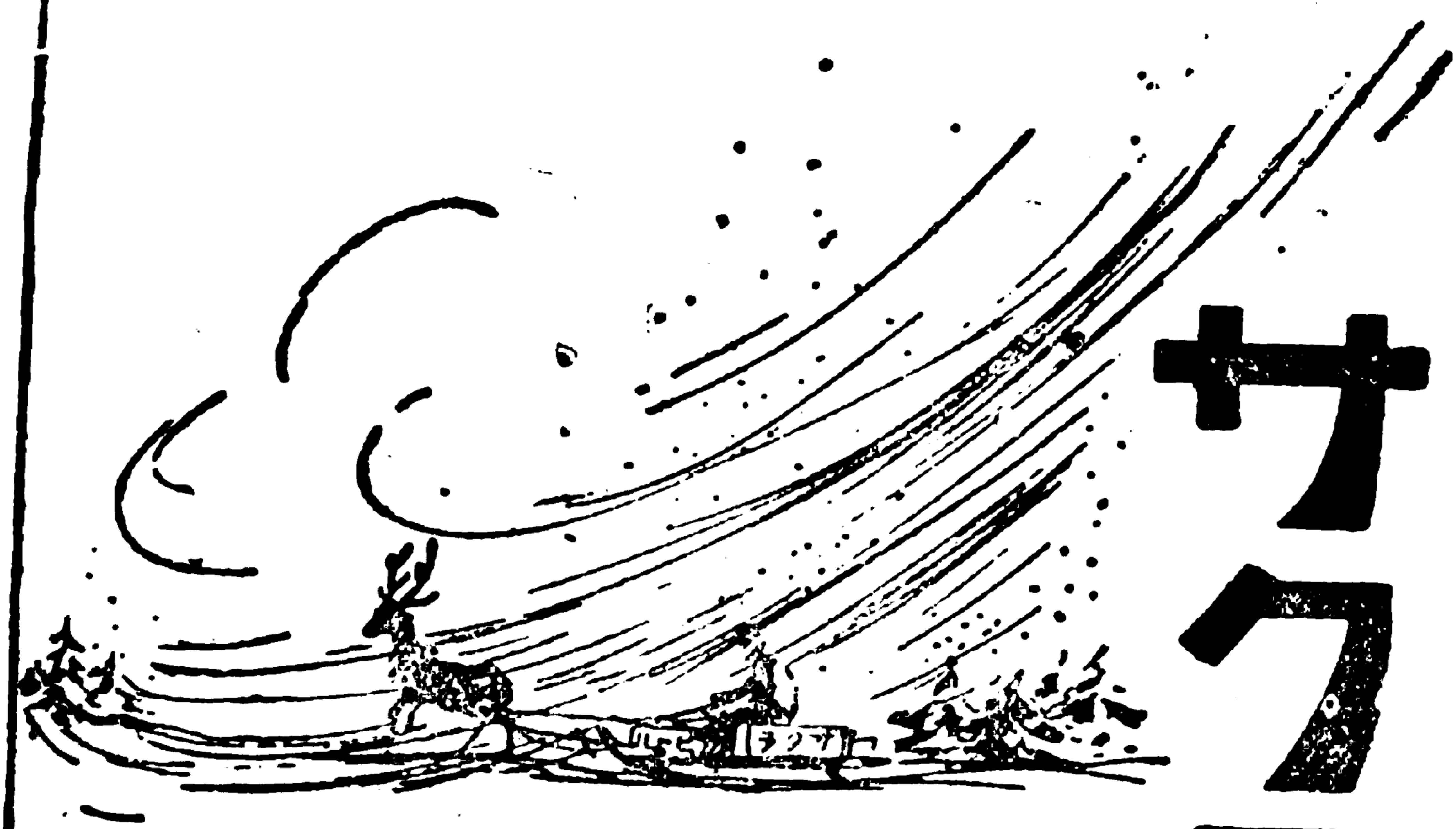
賣捌 各地藥店

説明書進呈

大阪市東區道修町二丁目

發賣元 藤澤友吉商店

東京支店 東京日本橋區伊勢町二一六
京城支店 京城府西小門町四二



大正十四年

中央公論

二月一日發行

二月號

第四十年第二號

第四百四十四號

社會行動の新可能に對する希望

普選、貴院改革、教育費國負擔、これらはいづれも、多少進歩的意義ある國家的時務だ。それらが當面の或實行目錄として主張される限り、それはその主張する人々の純眞なる國家意識、即ちかれらに於ける純眞なる國家人意識の或現實形としての特徴に於て、他のいかなる特徴に於てよりも積極的であるほど、その進歩的意義は確實だ、また安全だ。それがその反對であるほど、それは不確實だ、また不安全だ。

普選は、在野當時の憲政會が在朝當時の政友會にけちをつける策としての意義を、憲政會にとつてはそもそも代表的に帶んではゐなかつたか。眞に普選實施の國家的必要に對する信者だつたと見るべく、かれの最近史にさへも反證的事實があり過ぎないか。

政友會の貴院改革熱が、黨利熱、黨名熱で殆ど全然あり、國家理想熱では殆どすこしもないらしく知覺され、想察される根據は、果たして一擧手の再檢を値ひするだけの疑はしい餘地あるものですらあらうか。

本黨の教育費國負擔熱に、自衞、奇襲の黨算以外の原因があつたか。

たとひ現象的には、普選、貴院改革、教育費國負擔等を、それらが現に扱はれた通りの概形に於て扱ふことに差し當つては滿足するほかないと、疑ひもなく多少適當に、讓歩する立場を選んでさへも、意志と目的に於て、もつと深徹し、もつと遠達したものであつて欲しいと思ふことは、國民の眞實の興味から考へて、決して無責任な希望ではない。現在の憲政會、政友會、本黨の各にとつては、普選、貴院改革、教育費國負擔等は、それ〳〵に、その各者の內實の、正直の理想以上だ。この程度の進歩案は、現代日本の政治意識及び殊にも政治專門家にとつては、內實の、正直の理想からは大いに下向したかたちの妥協でなくては、日本の前途はいかにも悲觀されざるをえない事情が壓倒的に累堆してゐるに拘らずだ。眼高手低的意義ある主張及び施設としてだに物足らないものが、眼低手高的意義を顯著に、確實に帶んだものだとあつては、いはゆる既成政黨と既成

政治家に對する國民の希望と信頼は日比谷原上及び執政屋頂の春雲よりも保存されがたいものであるほかない。

いまはなほ單なる可能として存するに過ぎないすべての團結的及び個人的政治運動または行動に對しては、國民の希望は、なによりも先づその從事者に於ける深い、全い聰明であらねばならん。原則意識の名を値ひする根本智を缺いた知識と意志と行動は、いかに應急的、時務的、改新的ではあつても、國民の心底からいふと、大きなもどかしさを殘す塗り變へ仕事だ。强震と暴風が餘りに早くそれ〻崩剝する。バラック建造も、本建築に對する意識が不明確だと、たちまちに習性と事情の根が張つて、大成は昨の夢と消える。

わが現代には、無批判に觀念や理論や哲學を惜護する風習と、無批判にそれらを愛尊する風習とが併在する。その兩風習のいづれの將卒もが、有意義に、正當にそれらを惜護しまたは愛尊する資格には根本的に缺けた人々だ。かれらは、實質には、觀念や理論や哲學には本質的には無能力ゆゑに無關係の人々であるのだ。

この兩風習からは獨立に、またこの兩風習を折伏するかたちに於て、眞の理論熱が早く雄々しく發生し、發達する可能は絕望だらうか。それが絕望だとすると、日本の將來は餘りに闇いといふ判斷が避けられない。

限りもなく種々の特徵と形式とに於ての社會改正的、社會進化的行動が、いま、わが國に於て、急要事となつてゐる。その目的と方法に對する出來るだけ統一的な、明確な、勿論本質的生命に忠實な、認識は、いよいよ國民の必要意識の中心的位置を確占すべきではなからうか。

表面的巧慧はわれらの天才だ。いまだ持たず、しかしすでに窮盡的に必要な深い知識の泉源を要欲する底熱に油薪を滿投する努力は、行動的努力と相待つ、一層基礎要件的のすくなくとも一大分業たるべき位置を、國民から、この際、多少嚴然的に注意されべき綜合的理由があると考へる。

社會的行動の新健兒群が、大衆及びその指導者のかたちに於て翹望する多少の曙光が東の空を染めて來た。ねがはくば太陽の如くに現はれいでよ。

——杉森孝次郎——

中央公論



第四十年第二號
二月號
第四百四十四號

當來文明の基調たるべき改釋の精神を究明す

田中王堂

一　吾人は當來文明の材料と知見とを何處に求むべきか

今日、一部の人士の間には現代文明の價値に關する懷疑の情が漸く濃厚に結集されて來た。實に、今日現代文明を非難し、其れの感化を呪詛することは一部の人士の間に一種の流行となつて居るとも見られ得る。

元來、人間の生活は絶えずおのれを改造することに依つてのみ獨り其れの存續と發展とが保障されるのを其れの本質とする。さうして、現代文明とは、現代を中心として或る期間に亙つての人間の生活のあらゆるはたらき振りに與へられた總稱である。されば、若し眞に現代文明にして人類の永遠の進行の中に於て當然それに課せられた役目を勤め遂せたのであるならば、(そして、いろいろの事實に基づき、いろいろの意味でさう觀察するのには相應な根柢はあるが、)其れに對して世人一般の心の中にヂスイルウジョンが萠し來たつたとしても、わたくしは尠しも怪みもしないし、又、悲しみもしない。其れは、たゞ、機熟して、成るべきものが成り、來たるべきものが來たつただけのことであるから、つまり當たりまへのことに過ぎない。其れはわたくしに取つて一關心事たり得ないものである。

然し、こゝに、わたくしに取つて極めて重大なる意義を以て一關心事たるもの、一關心事たらざるを得ないものがある。其れは他でもない、現代文明は既に其の用に堪えないまでに朽廢して了つた、隨つて、わたくし共は其れに取つて代はるべき文明を一つ工夫しなければならぬとしたところで、さういふものを創造するのに、わたくし共は實際利用し得るどれだけの材料を所持し、實際運用し得るどれだけの知見を所持して居るかといふことが當面の問題となるが、(何故ならば、空想しては如何なる種の文明も可能であるが、實現される種の文明は必然にわたくし共が實際利用し得る材料と、運用し得る知見とに依つて其れの性質と方向とが制限され、決定されなければならぬことは多言を要しないから)現代文明を非難し、其れの感化を呪詛して、わたくし共は是非とも其れに取つて代はるべき一つの文明を工夫しなければならぬと主張して居る彼等人士は尠しも其等の事柄を問題として考慮せざること、考慮せずして漫然何かしら現代文明と離緣し、其れを超絶した一つのものを架空して居ることが即ち其れである。然し、かういふ氣分と態度とを以てしては何等の文明の輪廓さへも彷彿され得るものでないことをわたくしは斷言する。

わたくしからすれば、この世の中に、創造の名を以て行はれて居るものは、其の實、悉く改造である。最も極端なる形を取つた革命と雖も、其の實進化の一新に過ぎない。わたくしのこの考察は、天が下に新らしきものは無いとしたソロモンの思想と生命は刻々の飛躍の集積であるとしたベルグソンの思想との孰づれとも抵觸せず、其等の兩者を包含しながら、今わたくしがこの論文によつて達しようと志して居る目的に適應して最優の、そして、最適の眞理を道破して居るのである。之れが證據としては、人間の歴史のあらゆる時期に就いて、通常、舊制度、新制度、若しくは、革命前、革命後といふやうに、其れの組織と精神とに於て全然相反するものと目されて居る或る二つの相續した文明を取つて、其等が如何に親密に、如何に微妙に、そして、如何に執拗に互に纏綿し、變態し、塡補して居るかを仔細に點檢して見るがよい。さうしたならば、世人は如何なる場合に於ても、次いで起つた文明の性質と方向とを制限したのみならず、最後にそれ等を決定した材料と知見とは其れに先立つた文明に依つて宿年涵養されたものの唯だ當面の要求に應ずるために自然に自發した變形に過ぎないことを發見するであらう。妙しく奇矯に失するの嫌はあるが、「歐羅巴と佛蘭西革命」の著者アルベエル、ソオレルが、「革命は佛蘭西に新らしき何物をも齎らさなかつた」と語つたのは、この永久眞理に立脚して語つて居るのである。

わたくし共にして一度近世文明が確立されて以後の文明の推移と隆替とを論議の題目とする時其れに特有の事情より如上の考察は卓越して頓に其れの重要さと適切さとを增し來るのを覺える。

わたくし共が近世文明といふ時には、わたくし共は文藝復興の運動に依つて始められた文明、及び、正當にそれの延長、若しくは、其れの發展と見做さるべきあの時代より現代に至るまでの文明を總括して指すことになる。さうすると近世文明は類名であり、現代文明は種名である。近世文明と現代文明とは決して混同されてはならない。十七世紀文明、十八

世紀文明、十九世紀文明、といふものが、それぞれ、其れの特色を保ちながら　當の時代に方つて近世文明の發動が取つた異なる様式であつたやうに、現代文明は現代の下に偶ま近世文明の發動が取つて居る一つの様式に過ぎない。

わたくしは近世文明を以て冷靜にそれの發動に伴なつて露はれた總べての缺陷を計上しても、尙ほ、自己解放の永遠の行程に於て、嘗て人間に依つて計畫され、成就されたあらゆる種の文明の中で最も優秀にして最も有効なるものとするのに躊躇せぬ者であることだけはこゝに表明して置かねばならぬ。實に、人間は其れを通して始めて前代未聞の蒲意で、自然力に關聯し、協同生活に關聯しておのれの欲望の何物であるかと、おのれの叡智の何物であるかとを發見し、體驗したのだつた。勿論公平に言つて、近世文明に先立つたさまざまた文明に於ても、或る民族の間に、若しくは、或る國民の間に、こゝかしこには斷片的に、發作的に　そして、天啓的に優秀なる藝術も養成された、幽玄なる形而上學も攻究された、醇雅にして中正なる政治上の、及び、道德上の格言も構成された、のみならず、其等の或るものは之れが實踐さへも試みられた。然し、苟くも組織的の方法に於て、個人として、社會人として、乃至、國際人として、人間の生活全體の合理化の可能となつたのは、近世文明を通してであつた。最廣義にと等しく、最深義に理會された科學とデモクラシイとはこの事實の二大紀念碑であらねばならぬ。

科學とデモクラシイとに依つて象徵される近世文明の志向は純善のものであつた。然し、其れの實際に發動した結果は、事實に即して一層嚴密に言へば、其れの支配の下に在つて、其れの名に依つて行はれた活動の結果は、總べての場合に於て、純善で無かつたどころではなく、尠なからざる場合に於て、或る人々からは純惡と評價されるほどに善の要素は惡の要素のために壓迫され、强迫されるのを免かれなかつた。この傾向は近世文明が現代に至つて現代文明の形式を取るに及んで一段と顯著になつた觀がある。この狀態を見て、世の嘖々者流は無雜作にも今日苟くも近世文明の支配

の下に在つて、近世文明の名に依つて行はれる活動の結果は、其等の由來の眞相を吟味することなく、一概にこれを擧げて近世文明の業績に歸さうとして居る。そして、彼等は其れの當然の所産として物質主義と、資本主義と、侵略主義との三つを指摘するのを常として居る。

わたくしと雖も、現代社會に於て物質主義と、資本主義と、侵略主義との名稱に相應する事相の存在することを承認し、其等が其れの痼疾の症狀であることを承認し、更らに進んで、其等の増長と近世文明の機關の發達との間には密接の關係のあつたことをも承認する。然し、わたくしは其等を以て近世文明の必然の産物とする如きは誣罔の甚だしきものとして、彼等の見解に反對する者である。さうすることは、確かに相互感化の事實を因果關係の事實にまで捏造するものである。

わたしの理會するところに隨へば、物質主義、資本主義、侵略主義の素因は近世文明の出現に先立つて遠き昔に人間の心の底に植え付けられたのである。そして、近世文明の本來の志向からすれば、其れは人間の生活より物質主義、資本主義、侵略主義の素因を取り除くことを、尠なくとも、そこに其等が發成を逞うする範圍と機會とを出來るだけ減縮しようとして居るのである。然し、この目的を達するために其れの用ゐた方法は全然新らしきものであつた。其れは前代未聞の風に、程度に、根本的に、そして到徹的に人間を解放することであつた。それには、何物にも先立つて彼れをして知識を獲得せしめ、自由を運用せしめることが必須條件となる。知識も、自由も、（生活の道具であるといふ單純なる事由から）、究竟すれば、其れ自づからの中に其れの正用は保障されてゐるのであるが、中途の段階に於ては、此等の孰づれもは反つて生活を破壞するやうに誤用され、逆用されることのあるのを免かれない。知識も、自由も、其れの職能からすれば、智慧に合致せねばならぬ、否、智慧そのものでなければならぬ。然しながら、實際の事實として、知識に

しても、自由にしても、其れがはたらいて智慧に合致せず、智慧とならないことの多いのは今日、世間に横行し、跳梁して居る肉欲や、貪欲や、權力欲がそれぞれ其れをおのれの爪牙としようとして其れのはたらきと其れの自覺の成熟とを途中で阻止するからである。斯くして、其等が知識や自由の本來の志向を枉げて、強いておのれの横暴を遂げる方便とした時に、其等の勢力の増大し、其等の領土の延長されることは隱れなき事實である。然し、この事實あるに拘はらず、其れを以て近世文明の罪科とする彼等沒曉漢の云爲にわたくしは極力反對する者であることをこゝに重ねて言明する。

現代文明には、尠なくとも、現代文明の支配内に在つて、現代文明の名に依つて行はれて居る現代社會の活動にはいろいろと重大なる缺陷が含まれて居る。これだけのことは何人と雖も公平に認識し、嚴肅に考慮しなければならぬ事柄である。然し、わたくし共は如何なる態度を以て其れに接すべきか、如何なる方策を以て其れの匡正を圖るべきかに至つては、わたくしと世のあらゆる有識者とは手を別たねばならぬやうに思はれる。何故ならば、彼等は其れを以て近世文明の志向の開展した自然の趨歸であると想像するに反して、わたくしは其れを以て近世文明の志向のまだ十分に實現されない當然の結果であると思考する、隨つて、現代文明の缺陷を匡正するといふことは彼等に取つては近世文明の志向を超越することを意味するのであるが、わたくしに取つては其れを完成することを意味するからである。

然し、このやうにわたくしが語る時に、近世文明の志向なるものは普通に近世文明の非難者と讃美者とが等しく其れを理會し、其の皮相の理會のレヴエルに立つて論爭を構へて居るよりも、遙かに、遙かに、深きレヴェルに立つて其れを發見しての上のことであることは勿論である。さきに、わたくしは、新たにどんな文明を工夫するにしても、其れの性質と方向とは現にわたくし共が所持する材料と知見とに依つて制限され、決定されねばならぬと言つたが、其の場合

に、知見とはわたくし共の開拓し得る最優のものを意味し、材料とはかゝる知見の到徹した改釋に依つて其れの最眞の、若しくは、最適の意義の發揮されたものを意味することは勿論である。

私はかゝる獨自の考察を離れて、當來文明の精神と形態とが如何なるものであるべきかをトするに多大の興味を有する者である。

二　改釋は改造に先立たざるべからず

わたくしの見るところでは今日個人として社會人として、將た、國際人として、わたくし共が最も痛切に荒涼の感を禁じ得ないのは、正當なる實行の指標たり得る的確なる理論の全然わたくし共に闕如するがためである。成るほど、漫然、理論の名と要請とを以て行はれるものを悉々く理論として取るならば、實に今日は理論の產出と流行とに關して空前の盛時とも見られる。然し、極めて限られたる眼界に立ちて、目前の事件を處理し、目前の破綻を彌縫するに用ひられるものは姑らく措くとして、わたくし共のために生活一般に對して正確なる態度を發見し、精當なる覺悟を工夫するに聊かにても資するところあるものに至つては、其の寥々たる實に晨天の星にも及ばない。其等に共通する缺陷を一口に言つて見れば、其れは現代生活の批判として、概して其の照準を逸してゐるといふことである。わたくしからすれば偶然思索界の女王を以て任ずる哲學の分野に屬する理論の大多數と雖もこの宣告を免かれないものである。

今日ほど生活のあらゆる側面、若しくは、部門に關して之れが改造が叫ばれ、そして、いろいろの意味に於て今日ほどそれに要せられる手掛りの容易に見出だされる時代は曾てなかつた。此れは全く文藝復興以後五百年に亘つて科學の獲得した知識とデモクラシイの涵養した情操との賜であることは言ふまでもない。然しながら、同時に今日の改造が

萬能餘りあつて一心足らざる狀態にあることも事實である。それは現在の生活の要求する風と程度とに順じて、是非とも其れの改造に先立たねばならない其れの解釋がまだ十分なる意味ではたらいて居ないからである。

文藝復興に依つて始められた近世文明は人間の努力の所產として偉大なるものである。其れは生活の殆ど總ての側面、若しくは、部門に對して其等の組織と意義とを一變するまでに偉大なる感化を與へた。然し、實を言ふと、其れの事業は尙ほ途中に在るのみならず、夙に外物の誘惑に出會つて、中途にして迷路に彷ふことになつた。この自然の結果として、當初のヴイジョンを事實化する段になると、個々の事件の成就に沒頭し、其等の各より發しながら、一つの全體として其等の總てを醇化し、統一する意義を閑却するに至つた。斯くして、其れの本來の氣魄と主張とよりすれば、其れと兩立せざるものとして、當然爆發して了はなければならぬ、若しくは、溶解して了はなければならぬ多くの固陋にして陳腐なる傳統と、信仰と、形式と、情操とを平然保留し、そして、事毎に其等より種々の障害を蒙りながら尙ほ自づからはかゝる行動のどのくらゐ不合理であるかの所以を覺らなかつたのである。昔、フランシス・ベエコンは衆に先んじて實驗學を首唱したに拘はらず、實際のところ、彼れの思索方法は依然として彼れが其れの剿絕を聲明して居た形而上學の其れであつたとして、後世の嘲を招いたのであつた。然し、今日まで近世文明の爲し來たつたところには、ベエコンの爲したところに酷似するもののあるのを否むわけにゆかぬ。何故ならば近世文明は生活を革新しようとする其れの衝動に於ては正しくあつたが、其の衝動を全體の關係より的確に、そして、强烈に概念と化し、大膽に、忠實に、其れを生活の改善に運用することに於ては、必ずしも賢くあつたとは言へないからである。

わたくしは如何なる事實に基づいて、斯くは近世文明を裁判するか。

近世文明は其れの本來の志向に背いて、一、改釋を以て生活統一の最高原理とすることを怠り、之れが自然の結果と

して、二、生活のあらゆるはたらきと機關はどこまでも作用であらねばならぬのに、却て其等を曲げて本質と化して了ふ傾がある。わたくしからすれば、今日わたくし共の行爲の調和を障碍し、わたくし共の幸福を紊亂することと此等の二つに優るものは無いやうに思はれる。

わたくしは此等の二つの事實に基づいて、斯くは近世文明を裁判するのである。

然し、かう言つただけでは、大數の讀者に取つて一片の天啓に等しいかも知れないから、わたくしはこの宣言の意味を稍しく說明せねばならぬ。

八面玲瓏なる詩人哲學者、若しくは、哲學者詩人ゲエテは、「存在することは作用することである、」と洞察し、道破したのであつた。彼の意見に隨へば、作用することに先立ち、作用することを離れて、如何なる種の存在も成り立ち得ない、といふのである。彼れはそこに天來の叡智に依つて、人間の文化が其れの極致に達した時、其れは總べてのものに對して如何なる見方を取るであらうかといふことを端的に啓示して居る。近世文明も其れの志向からすれば、「存在することは作用することである」とする見方を以て、總べてのものの關係を考察し、總べてのものの意義を理會することを其れの理想として居る。事實、さうであることは、科學とデモクラシイとが、其等の歴史に於て、暗中模索、幾度か低徊し、幾度か蹉跌しながらも、徐々に其等が取つて來た樣式と方向とを一瞥しただけでも直ぐに解かることである。然し、現在のところ、近世文明に依つて自信を以てこの見方の取られるのは、極めて狹く限られたる興味の下に、極めて僅なく限られたものに對してだけである。其れが生活より派出し、生活に關聯するあらゆるものに對して當然の事柄として無制限にこの見方を取るに至るまでには、わたくし共は、猶ほ、幾多の歳月を待たねばならぬやうに思はれる。

實に、存在することは作用することであるとする見方を以て總べてのものの關係を考察し、總べてのものの意味を理會

しようとするのは、近世文明の本能であるとわたくしは信ずる。それならば、何故にこの本能は今日に至るまで其の本來の發展を遂げて、情操にまで、思想にまで、そして、實行にまでならなかつたのであるか、なることが出來なかつたのであるか。其れは主として近世文明が其れの成立の根柢たり、其れの存續上發展上の保障たる一つの重大なる仕事の滿意を理會せず、隨つて、其れを等閑に附した咎に歸せねばならぬ。この仕事とは何でもない、改釋を以て其れの構成と運用との全精神とし、絶えず生活の要求に順じ、おのれを改造する指標として先づおのれに關聯する、可能せしめらるる總べてのものを改釋することである。「構築の時代は去つた、そして、改釋の時代は來たつた」此れはジョオジ・サンタヤナの言葉である。彼れは此れに依つて現代生活に於ける學問研究の急先鋒たる精神を高調したものとすれば、たゞ事實に合した觀察であるが、若し彼れにして此れを通して學問研究よりも遙かに復雜する、そして、遙かに多く新奇の要素の紛糾する實際生活の氣運を指摘して居るものとすれば、極めて事實に遠さかつた觀察であるとせねばならぬ。固定の時代は猶ほ全く去らず、改釋の時代はまだ十分に來ないといふのが刻下の狀態である。

このやうに、改釋を以て生活統一の最高原理と爲すことゝ、生活のあらゆるはたらきと機關とを作用と理會することとの間には、密切なる相關の理が潜んで居るのである。されば、わたくし共は、たゞ、近世文明の本來の志向を適當し、成就するがために生活のあらゆるはたらきと機關とを作用と理會する必須の手段として、改釋を以て生活統一の最高原理とする聰明を有たねばならぬ、養はねばならぬ。

『眞故新』といふことは千古の箴言とされて居る。然し、何が眞理であるかは生活の要求に相對して決定される場合である。そして、事實として、生活の要求は變化する。さうすると、機械的に考察すれば、この世の中に永久に立つてそのまゝで眞であり得るものは一つもあり得る筈にない。其れは、臨時に適當になされて、始めて、眞なるを保つのであ

る。この單純なる道理よりして、一層痛切に事實を表明しやうとするならば、其れは『眞故新』では無くして、『新故眞』であらねばならぬ。さうして總べての新らしきものの舊に墮するのを防ぐのみならず、總べての舊きものをも新に化するのは獨り改釋の力である。

改釋とは自分の工夫したると、他人の工夫したるとを論ぜず、又、自國民の産出したると、他國民の産出したるとを論ぜず、情操にしても、學說にしても、制度にしても、其の他、何んにしても、苟くも實際生活に關係あるものならば、若しくは、其れを利益するやうに關係せしめられるものならば、其れの要求を標準とし、其れの命令に隨つて、其れの一部とするために適當に其等の意味を變更するのを言ふのである。若しさうするのが改釋であるとすると、其れは個人としても、社會人としても、國際人としても、わたくし共が最も堅固に自己の特殊性を保持しながら、最も自由に、最も博厚に、其れを豐富にして行く唯一の方法であるやうに思はれる。斯くして、適當に改釋が施されて行けば、どんなに外的のものでも内的となり、どんなに舊いものでも新らしくなり、どんなに瀕死のものでも再び蘇生の曙光に浴し續けるのである。斯くして、完全に、到徹に、改釋の行はれて居る生活に在つては、其れの如何たる側面、若しくは、部門に於てと雖も、そこに見出だされる總べてのものは新鮮にして柔軟であつて、枯槁して硬剛なる何物をも見出だされない筈である。そこには作用としての對能はあるが、本質の對立といふやうなものは無い筈である。

然し、翻つて現代生活の實狀を觀察する時に、わたくし共は其れが如何なる理會に依つて鑑賞され、如何なる方針に依つて取り扱はれて居るのを發見するのであるか。個人としての、社會人としての、乃至、國際人としての生活を通して、其れの或る側面、若しくは、部門に於て、苟くも或る組織が成り立つに隨つて、或るはたらきが行はれて居るならば、其れは必然に作用としての對能であらねばならぬが、其れは誤つて本質の對立と鑑賞され、取り扱はれて居るのを

わたくし共は發見するのである。若しわたくしをして近世文明の缺陷を數へしめるならば、わたくしは何よりも先に其等の最も重大なるものとして、この一事より指を屈し始めねばならない。

わたくしは、何故にこのやうに生活に於て見出だされる組織とはたらきとを作用としての對立と固定化せずして、其等を本質の對立と固定化する結果を近世文明の缺陷の最も重大なるものとまでに思惟するか、思惟せねばならぬか。わたくしはこの二つの考へ方は現代生活に於ける二種の二元觀を胚胎するからである。

固定した内容を有つた二つの本質がまづ存在し、さうして後に、どういふ風にかして其等の間に交渉が成り立つたところで、理論の上では、其れに對して無數の說明が可能とされる。然し、さういふ考へ方を發生し、涵養した動機と事情とからして、其等の本質の間に或る交渉が成り立つのは、次の二つの方法の孰づれかに依ると制限されるのである。其等の一つは優者が劣者を壓制し、若しくは、征服することに依るとして居る。神と人間、天理と人欲、乃至、力と物質といふやうに對立者の資格が異なるにつれて、そこにはたらく力の大小と價値とには多大の相違はあるが、兎に角、當の對立者を結合する要素を其等の一方の優者より發して他方の劣者に及ぼす力に求めることは、總べての場合に於て一樣である。其等の他の一つは、二つの對立者は、各、同じやうに善と惡と、即ち、協同的と反協同的との二つの要素より成り立ち、對立者の各に於て、先づ善、即ち、協同的の要素が、惡、即ち、反協同的の要素を壓迫し、若しくは、支配して、前者が後者の上に統制力を得た時に、各、其の成果を將ゐて協同するのであるとして居る。此れは主として總べて同等の價値を有すると信ぜられた二つの對立者、例へば、神と神、人と人、國と國、物質と物質とのやうなものの交渉を說明するに用ゐられるものである。わたくしは此等の二つの方法の孰づれにしても、現代生活のはたらき振りの說明として、大分に其れの志向と關聯したものである、隨つて、其れの活動を混亂し、阻害することの少なく無

いものであるといふのである。尤も此等の二つの方法に就いて言へば第二のものは第一のものよりも進歩したものであることは明白である。第一のものがだんだんに其の用ゐを失つて來たのに、第二のものは今日に於ても一般に用ゐられて居るのも、この理由からである。然し、わたくしからすれば、其れは、猶ほ極めて不妥當のものであり、不滿足のものであることを免かれない。（こゝには此等二つの方法の相違に關して詳細に論議して居る必要はないから）其等の方法の缺陷を一括して言ふことにする。其等の孰づれもは二つの對立者の交渉を其等の全體の發動としないで、纔かに其等を組織する一要素の發動とし、總べて他の要素は死重として無頓著に、若しくは、反抗しながら其れに率ゐられるものとするところにあるのである。

わたくしは此等の二つの間違つた說明の方法を以て近世文明の進捗と發達と小ならざる障碍を呈するあらゆる神話の淵源として其等を排斥する者である。其等の神話は總べての作用の成立に必須なる要請と協同とを一つの原理の二相とせずして、個々二つの原理とするのを其れの特色とする。現今、この考へ方は個人の生活の內にはたらく欲望の關係の說明より、延いて國際間に行はれる關係の說明にまで廣く應用されて居るものである。個人の生活の疾患たる物資主義も、社會人の生活の疾患たる資本主義も、國際人の疾患たる侵略主義に對してはかゝる考へ方は大に其の責に任じなければならぬものであるとわたくしは考へる。何故ならば、此等は等しく互に塡補して一つの原理を形造る要請と協同との二相を誤解して相反撥する二つの原理とした結果であるからである。

わたくしは如何なる場合に於ても、要請と協同とはこの世に在つて唯一種の實在たる作用の成立に必須なる二相であ**ると主張する者である。わたくしのこの主張は如何なることを意味するかを說明するために、こゝにわたくしはあらゆ**る場合に於ける人間の生活を組織する根本要素であつて、同時に其れを支配する普遍樣式たる欲望の性質とはたらき振

りとを考察することにする。

人間の生活の道具として彼れに賦與された總べての欲望は、其等の孰づれもが其れの幸福と發展とに必須のものとして賦與されたものである。されば、其等の孰づれもが必要とされる場合に、若し其の一つにして正しくはたらくためには、其れは同時に二つの條件を滿たさなければならない。其等の一つは出來るだけ強くおのれを發動させることであり、其等の他の一つは其れと同一の權利を有する他の總べての欲望と協調を保つといふことである。かういふ理由から、欲望はおのれの發動を要請することと、他のものと協同することとを其れがはたらく時に現はす其れの內具性の二相として居るのである。

一つの欲望が生じて、其れの內具性に隨つて一つの行爲にまで發展する經過の中に現はれる二つの相に、確かに作用の對能である。然し、歷史的に考察すれば、其れの說明の方法としてさきにわたくしの揭げた第一のものが採用されて居た時期もあつたし、又、第二のものの採用された時期もあつた。そして、今日と雖も、まだ全く其の第二の時期を脫したとは言はれないのである。然し、其等の孰づれにしても、個人の生活にあらゆる種の矛盾と分裂とを齎らす感じ方、考へ方、及び、行ひ方を化釀するものとしてわたくしは其れを非難する者である。そして、其れを根絕する道は、たゞ、其れを總じて作用としての對能とする一事に限られると信ずる者である。

欲望のはたらきを作用の對能と改釋するにしても、欲望の或るはたらき振りが生活を幸福にし、他のはたらき振りが生活を不幸にする事實である以上は、善と惡との概念は依然として存續せねばならぬ。唯、其等の間の差別は一層明確さを增して來なければならない。然し、其等の意味の成立に至つては、大分變更するところのあるのは免はれない。一つの欲望がはたらく時に、生活全體の要求に應ずるやうに、其れに特有の役目を滿たすのが善であつて、この條件に

反すのが惡であるから、關聯することの必要のある限り、其れの決定には成るたけ多くの欲望が參與するだけ其の善の資格を增し、其れに反するだけ其れを減ずることになる。さうすると、惡は一つの欲望がはたらく時に、他の欲望の合議を無視してさうするか、或は十分に其れを尊重せずしてさうすることより生ずる結果の謂であらねばならぬ。

總ての欲望は其れ自づからに無組織である。其れは何等の個性をも有たぬ。其れが發動して他の欲望を呼び起し、其等の合議に依つて透徹され、傳彩されて、始めて其れの個性が形造られるのである。そして、其れが強烈に發動すればするほど、それだけ其れの呼び起す欲望の數は多くなるわけであるから、其れの個性の完成には、其れの要請の相と其れの協同の相との一致作用を必要とすることをわたくし共は知るのである。

以上極めて簡單なる敍述に依つて、わたくしは個人の生活の內容を形造る異なる欲望の間のはたらきを本質の對立としないで、作用としての對能とする時には、其れは新たに如何なる性質と意義とを呈し來たるかを髣しく暗示したのであつた。

人間の生活が個人としての其れより、社會人としての其れに進み、更らに、國際人としての其れに進むに隨つて、其れの內容たる欲望のはたらきに變化を齎らすことは事實である。其れは個人としての生活の場合に於ては、單數なる意思の支配の中に其等ははたらくのであるが、社會人としての生活の場合になると、其等は複數の意思の支配の下に分れてはたらひて、國際人としての生活の場合になると、其等は複數の集合の意思の下に分れてはたらくの相違があるから欲望る。然し、ここでわたくしは之れが細論に入る餘裕を有たないが、さきに個人の生活に關聯してわたくしの爲したであのはたらきの考察は大體に於て其れを移して社會人の生活の場合にも、又、國際人の生活にも大した無理をせずして其れを當て嵌めることが出來ると思ふ。

人間の生活のあらゆる側面と、あらゆる部門とに於て見出だされるはたらき振りを本質の對立と見ることを排して作用としての對立と見ることに依つて、個人の生活より物質主義を、社會人の生活より資本主義を、國際人の生活より侵略主義を取り去るに有効なる情操と思想とを涵養し得ることを、わたくしは疑はない者である。この情操と思想とは直接に經濟制度にも、政治組織にも關係しないことは明らかである。然し、長き歳月の經過する間には、この情操や思想が其等の變更を促す原動力とならないといふことを誰れが斷言し得るか。過去に於て生活の理想の變遷するに隨つて、其れの結果として、若しくは、前兆として、其の生活の指標たる哲學の出現したことは、さうあることを、さうあらねばならぬことを暗示するではないか。

實を言ふと、生活のあらゆる側面、若しくは、部門に於て成り立つあらゆる組織と、そこに行はれるあらゆるはたらきとを作用としての對能とせずして、本質の對立として鑑賞し、取り扱ふことは、決して近世に於て始められたことではない遠き太古に於て總べての經驗と體驗とを不用意の中に固化し、外化し、物化することを常習としてゐた原始人が不可避の氣分を以て沈澱したのである。そして其れの外形に於ては多少の變遷はあつたが、其等の根本概念に至つては、近世文明前の長き時代を通して大體同一性を保つて來たものである。そして物質主義と、資本主義と 侵略主義との素因は其の雰圍氣の中に於て馴致されたものであつて、又、其の雰圍氣を外にしては到底馴致され得ないものである。近世文明が其れの本來の志向に背いて其等を作用としての對能とせず、本質の對立として鑑賞し、取り扱ふことを一掃し得ず、依然として其の誤謬を套襲して居る以上は、其れの新たに供給した便宜に依つて物質主義と、資本主義と、侵略主義とが、刺激され、促進されたことに何等の不思議もない。さうすると、わたくしの考へるところでは、わたくし共にして一擧にして物質主義と、資本主義と、侵略主義との牙城を衝くの道は、獨り其れを本質の對立と解釋することを

止めて、作用としての對能とする改釋を立するに限られるのである。さうであるに拘はらず わたくしの怪訝に堪えない一事は、今日、不具戴天の敵として其等の必滅を期して居る世の反物質主義と、反資本主義と、反侵略主義とが知見と勇氣とに於て其等の敵に一歩も出づることが出來ず、其等と全然等しきレヴェルに立つて其等の攻撃に努め、其等の崩潰を夢みて居ることがある。此等がもつと深く、もつと強く、もつと明瞭に、哲學的に、文明史的に物質主義と、資本主義と、侵略主義との起原と、構成とを理會し、其等に對する方策に謂ふところのコパニカス式回轉を試るに非ざる限り、わたくしは永久に其等の成功を危む者である。

三　當來文明の輪廓と希望

『ファウスト』の序曲に於て、天使ガヴリエルより人間の墮落は其の極に達した、といふ報告を聞いて、神は彼に對つて、『漸らく人間の振舞ふまゝに任せて置くがいゝ、彼等はどんな罪を犯しても、又、彼等自づからの力で其れを償ふ道を知つて居るから』といふ意味のことを言つて彼れを諭す場面がある。近世文明はこれまで人間に依つて工夫され、建設されたあらゆる種の文明の中で最も完全に人間性の發揮された、そして、其れを發揮するに最も適した種の文明である。隨つて、わたくしは其れがあらゆる種の文明に優れておのれの誤謬、若しくは、過失を認識し、其等を匡正する力を有つて居ることを疑はない。當來文明としてわたくしのヴイジョンに映ずるところのものは、近世文明の延長とし、完成として、其れの光輝ある理想の實現を追窮しながら、おのれに内具するはたらきに依つて、途中に於ておのれの陷つた誤謬や、犯した過失を訂正した、若しくは、訂正しつゝある文明である。當初より近世文明の志向したところのものは、それまで人間が經驗しない意味に於ても、自由と、調和と、節約との生活の建設であつたのである。今のところ、

科學もデモクラシイも個人的に、社會的に、國際的に、誤用され、濫用され、惡用され、且つ、逆用されて居る。この結果として、物質主義と、資本主義と、侵略主義とは近世生活より派生したのであるが、此等の孰づれもは專制を意味し、利慾を意味し、消耗と奢侈とを意味するものとして、近世文明が其れの志向の自覺に立ち歸る時、當然其れに依つて滅されなければならない其れの敵である。わたくしは其等が滅される日は近世文明の超越される日であるといふ世人の意見に反して、其等の滅びる日は近世文明がおのれに復歸する日であるといふ意見を懷抱するものである。そして、わたくしの考へるところでは、そして、其れに復歸の機を與へるものは勸懲の說教に依つてではなく、生活の事實の發見と其れの意義の發揮とに依つて、主として叡智の蒙昧と情操の溷濁とより生じ、其等の象徵として立つ、物質主義と、資本主義と侵略主義とを地上隧道に由りて其等の基礎を倒潰する一事であらねばならぬ。

當來文明の內容たるべきものは多枝多葉であるから、こゝに其等の一一に就いて考察を施すことだけの餘裕を有たぬ。富や、産業や、藝術や、科學や、道德や、此等のものの關係や、美と功利との關係や、鑑賞と理會との關係や、價値や、主權の意義やが、總べての組織とはたらきとを作用の對能とする見地より改釋されて、大分此等の面目を新たにすることゝとなければならぬことだけは、今より、容易に、安全に斷言出來ることである。

米國海軍の太平洋大演習を中心として

——（日米兩國民に告ぐ）——

水野廣徳

日米兩國民の間に問題となりたる米國海軍大演習も遂に愈實施せらるゝことゝなり、其の第一期演習は既に一月上旬より開始されて居る。演習區域は布哇を中心として濠洲新西蘭に到る南太平洋の全面に跨がり、演習期限は六ケ月の長期に亘り、大小百數十萬噸を算する米國海軍の殆んど全艦艇が之に參加して居る。區域の廣きと、期間の長きとは、海軍演習として實に空前の大規模である。

演習の目的や、想定や、方略に就きては、今日未だ詳細の情報に接しない。併し軍事常識に依るも其の大要は略ぼ推知することが出來る。抑も演習は實戰の下稽古である。即ち戰時に於ける軍備の活用、兵力運用の試驗である。故に演習の效果を大ならしむる第一要件は、出來得る限り實戰に近からしむることである。惟ふに今回の演習に要する經費は恐らく數千萬圓を算するであらう。米國如何に富めりと雖ども、之だけの巨費を投じて單なる戰術戰技の稽古たる軍艦の鬼ごつこや、隱れん坊のみを爲す爲めではあるまい。必ずや戰時に於ける大策戰の研究の爲めでなければならぬ。

米國海軍は今回大演習の地域として特に太平洋を擇んだ。即ち太平洋に於ける將來の戰爭を假定しての演習である。然るに今日太平洋に瀕する國にして米國海軍と砲火の下に輸贏を爭ひ得る國は唯一我日本あるのである。支那、濠洲、新西蘭、の如きは殆んど無海軍國と言ふべく、米國海軍としては是等の國を假想敵として演習などを行ふ必要は絶對に無いのである。故に今回米國海軍大演習の假想敵國は日本であることは言ふ迄もない。

併し米國海軍が演習の假想敵國として日本を擇んだからと

て、直に米國が日本を敵視するものと早合點することは誤りである。凡そ一國軍備の標準を策定するに想定敵國を必要とするが如く、演習にも亦必ず的確なる假想の敵を必要とする。假設敵國なき演習は唯單なる戰術戰技の訓練に過ぎずして國防築戰上に何の利するところはない。故に若し米國が其の演習區域を大西洋方面に擇べば、其の假想敵國は英國で無ければならぬのである。米國海軍は從來屢々大西洋方面で演習を行つた。併し之が爲め英國民は米國に對し嘗て抗議を唱へたことを聞かない。

獨逸海軍の尙ほ微弱なりし當時、英國は屢地中海方面に於て海軍の演習を行つた。假想敵國は問はずして佛伊であつたことは明らかである。日露戰爭前日本海軍の演習區域は主として西海並に日本海方面であつた。日露戰爭後は多く太平洋方面に於て海軍の演習が行はれる。太平洋方面に於ける日本海軍演習の假想敵國は米國以外に無いのである。故に國防作戰を研究せんとする大規模の演習を行はんとする以上、或る一國を以て假想敵國と爲し、而かも成るべく實戰に近からしむることは、演習の性質上已むを得ないのである。小笠原島を中心とせる日本海軍の大演習と、布哇を中心とせる米國海軍の大演習とは、其の異なるところ唯演習の規模の大小あるのみである。互に他を假想敵國と爲す上に於て何の相違はない。

國家が巨費を支用して軍備を設置する以上、軍備の効率をして最大ならしむるに力むることは國家當然の行爲であると言はねばならぬ。而して演習は軍備の効率を大ならしむる爲めに必要にして且つ有効なる一手段である。元來軍備に演習は付物である。教育に復習が必要なるが如く、軍備に演習は必要である。即ち軍備は本で演習は末である。既に軍備の存置を是認しながら演習のみを責むるは事の本末を誤れるものである。自國の領土と公海とに於ける海軍の演習は其國の絕對自由である。敢て他國の干渉すべき性質のものでもなければ、他國の干渉を受くべき性質のものでもない。唯併し斯かる演習が動もすれば假想敵國民の感情を害し、延いて國交の圓滿を損するに至る事あるは事實である。歐洲大戰前、相互に假想敵國たりし英獨の海軍大演習が兩國民の敵愾心を煽つたことは甚だ大である。今回の米國海軍大演習に對しても、我國民中には之を以て日本に對する米國の示威運動と爲し、甚だ不快に感ぜる者も尠くない。殊に平素より米國に慊焉たる軍國主義者等は米國大演習を反米宣傳具に利用し、對米敵愾心と軍備充實熱とを國民に煽らんとして居る。左れば米國並に米國民にして、彼等が常に唱ふる如く眞に世界の平和を愛し、眞に日米の親交を念とするならば、一事の理否は別とし、事實の上に於て日本國民をして或は誤解せ

しめ、或は憤激せしむるが如き斯かる演習は、或る程度まで遠慮して貰ひたきものである。素より日本は米國に向つて演習中止を要求するの權利もなく、米國は日本に對して演習を中止するの義務もない。唯我等の望むところは米國民の平和好愛心と大國民の寛裕心とに依る德義的遠慮である。

我等は日本人の口より屢「外國に遠慮は要らぬ」との言葉を耳にする。彼等は外國に遠慮することを以て國家の威嚴を損し、國家の自尊を傷つくるものとでも思つて居るであらう。日本が外國に對して遠慮する必要なければ、外國も亦日本に對して遠慮する必要はない。個人の社會生活たると、國家の國際生活たるとを問はず、苟くも他と圓滑なる協調を保たんとせば、法律上の權利義務以外に相互の德義的遠慮が必要である。縱令信仰の爲めと云へ、又縱令法律が禁ぜぬとは云へ、深夜無遠慮に日蓮宗のカチ／＼を叩いて隣人の安眠を妨げては、圓滿なる近所付合は出來ない。國防の爲めとは云ひながら、公海の自由とは云ひながら、隣國民の感情を害してまでも演習を強行せんとする米國は、國際遠慮に富めるものとは云へない。英國前首相マクドナルド氏は日本に遠慮して新嘉坡軍港建設を中止した。然るに現首相ボールドウイン氏は日本に遠慮せずして同軍港建設を復活した。日本人より見たる時、中止したる前首相と復活したる現首相と、果して孰れが賢こき良友であるであらうか。米國今回の無遠慮に顧み、我國民たる者國際遠慮の必要を覺るべきである。我國に於て近く行はれんとする世界無類の軍國主義的強制軍事教育の如きも、外國の誤解を無視したる無遠慮の謗を免れぬであらう。

○

米國今回の大演習が日米戰爭想定の下に於て行はるゝことは自ら明らかである。そこで如何なる軍事情勢の下に日米國交が斷絶するかは、單に此の演習のみならず實戰の場合に於ても戰爭の大局に重大なる關係を有する問題である。即ち宣戰布告の際、日米海軍の勢力及び所在如何の問題である。日米海軍の勢力は華府會議の協定に依り大正二十一年迄は、主力艦及航空母艦は五對三の比率である。巡洋艦、驅逐艦、潜水艦等の補助艦艇に對しては比率協定未成立である。本年夏開かれんとする第二次華府會議に於て協定の成立すると、せざるとに拘はらず、米海軍は日本に對して主力艦同樣五對三の勢力を維持せねば置かぬであらう。即ち大體に於て日米海軍力は五對三の比率に落ち付くであらうと思はれる。

次には開戰時に於ける兩國艦隊の所在である。國際聯盟規約第十二條に依れば、

聯盟國は聯盟國間に國交斷絶の虞ある紛爭發生する時は、當該事件を仲裁々判又は聯盟理事會の審査に付すべく、且つ仲裁裁判官の判決後又は聯盟理事會の報告後三ヶ月を經過する迄、如何なる場合に於ても戰爭に訴へざることを約す。

本條約に依る一切の場合に於て仲裁裁判官の判決は相當期間内に、聯盟理事會の報告は事件附托後六月以內に之を爲すべし

とある。故に米國が國際聯盟に加入し居るとせば、日米間に或種の國際紛爭が發生したる場合、最初先づ兩國間に於ける直接交渉に若干月日を費やし、直接交渉に依つて解決せざる曉、之を仲裁裁判又は聯盟理事會の審査に付するのである。仲裁裁判官の判決期限は相當期間とありて甚だ茫漠たるも、大體に於て聯盟理事會の報告期間たる六月以內と想定することが妥當であらう。即ち仲裁裁判官の判決又は聯盟理事會の報告期間は、最短期一日で最長期六月である。故に紛爭事件を仲裁裁判又は聯盟理事會に附托してより、最短三ヶ月、最長九ヶ月を經過するにあらざれば戰爭を開始することは出來ぬのである。然るに米國は今日尙ほ國際聯盟に加入し居らざるが故、此の規約を直に適用することは出來ない。

併しながら同規約第十七條に左の如き規定がある。

聯盟國と非聯盟國との間又は非聯盟國相互の間に紛爭を生じたる時は、此の種紛爭解決の爲め聯盟國の負ふべき義務を、該非聯盟國が聯盟理事會の正當と認むる條件を以て受諾することを之に勸誘すべし、勸誘の受諾ありたる場合に於ては第十二條及第十六條の規定に、聯盟理事會に於て必要と認むる修正を加へて之を適用す。

前項の勸誘を爲したる時は、聯盟理事會は直に紛爭事情の審査を開始し、當該事情の下に於て最善且つ最有効と認むる行動を勸誘すべし。

勸誘を受けたる國が此の種紛爭解決の爲め聯盟國の負ふべき義務の受諾を拒み、聯盟國に對し戰爭に訴へたる場合に於ては、第十六條の規定は該行動を執る國に適用す。

（下略）

（參照、第十六條）第十二條第十三條又は第十五條に依る約束を無視して戰爭に訴へたる聯盟國は、當然他の總ての聯盟國に對し戰爭行爲を爲したるものと看做す。他の總ての聯盟國は之に對し直に一切の通商上又は金融上の關係を斷絶し、自國民と違約國民との一切の交通を禁止し、且つ聯盟國と、否とを問はず他の總ての國の國民と違約國國民との間の一切の金融上通商上又は個人的交通を防遏することを約す。

（下略）

即ち右規約に從へば、米國は縱令國際聯盟に加入し居らずとするも、國際聯盟は其の正當と認むる條件を以て、米國に對し紛爭の解決を聯盟理事會の審査に附托することを勸誘し、若し米國にして此の勸誘に應ぜざる時は、總ての聯盟國の力を以て米國を討つことになつて居る。故に聯盟規約が成文通りに有効なりとすれば、米國が聯盟に加入せると否とは、多く問題とするに足らないのである。唯實際上に於て米國の如き富强國が聯盟の勸誘に應ぜざりし場合、聯盟が果して其の規約を强行し得るや否やが疑問である。

併し米國如何に世界第一國を以て任ずるとも、總ての聯盟國を敵に廻はす如きことは爲さぬであらう。一應は必ず聯盟の勸誘を受諾して紛爭の審査を聯盟理事會に付托するであらう。故に國際聯盟の有効なる限り日米の間には今日紛爭が生じて明日戰爭が勃發する如きことはなく　其の間に短くて三ケ月、長くて九ケ月以上を經過せねばならぬのである。而して聯盟規約には紛爭に關する仲裁裁判官の判決又は聯盟理事會の報告後三ケ月間は戰爭に訴へないことを規定して居る。併し戰爭準備に必要なる軍事行動に關しては何等の規定も制限もない。戰爭に訴へずと云ふ言葉の中には戰爭準備行爲の禁止をも含めるや否や甚だ曖昧である。左れば米國の如く經濟力豐かにして戰[illegible]と軍事工業とに富める國に在つては、此の三四ケ月の間に全艦隊の臨戰艤裝を完成して之を太平洋岸に集中し、要すれば布哇までも進出せしむることが出來るのである。布哇が米國の領土である以上米國艦隊の布哇回航に對して何人も抗議することは出來ぬであらう。

○

日米戰爭の本舞臺は云ふ迄もなく太平洋である。立役者は海軍である。而して作戰の第一目的は布哇の爭奪戰であるであらう。地理的關係と軍事的事情の下に於て、先づ布哇に占據するものは米國海軍であると信ずる。米國海軍が一たび布哇に占據したる以上、現在比率の我海軍力を以て之を攻略奪取することは、天佑に依らざる限り至大の難事である。堅固なる根據地に據れる優勢なる敵艦隊に對し、四千海里の長航程を越え劣勢艦隊を以て攻勢作戰を執ることは、無謀にあらざれば絶大の冒險である。一歩を誤れば日本海の藻屑と消へた露國波爾的艦隊の二の舞を演ずるかも知れぬ。小銃一つ持たぬ布哇在住十萬の日本人の如きは軍事上何等の意義を有するものでない。左れば日米戰爭は日露戰爭に於けるが如く夜討、朝駈等の奇襲に依りて開戰の劈頭敵に大打擊を與ふる如き放れ業は出來ない。双方と

も有りの僅の兵力を以てチリ〳〵と詰め寄るのである。

之を以て米海軍にして先づ布哇に據る以上、日本海軍は東京灣附近を離れて遠く作戰することは非常に困難であらう。即ち日米海軍は四千海里を距てゝ横須賀と布哇との睨み合ひとなるのである。どちらか猥りに手を出した方が損である。斯くて半歳も對峙せば、日本の艦隊司令長官の家には石が降るであらう。素より其間に於て彼我飛行機の都市攻擊も行はれるであらう。巡洋艦の沿岸砲擊も行はれるであらう。場合に依りては日本軍の非律賓占領も行はれるかも知れぬ。併しながら斯かる補助作戰は、東京でもが燒き拂はるれば兎も角、否らざれば戰爭の大局を動かすに足らない。殊に非律賓の如きは縱令多くの血を流して軍事占領を行ふとも、若し戰爭の終局に於て敗北せば忽ち取り返へさるゝに反し、戰爭の終局に於て勝利を得ば、軍事占領を行はずとも當然日本の有に歸するであらう。故に非律賓の占領は畢竟するに人命の徒消である。斯くて戰爭は漸次經濟の持久戰に移つて行く。

若し何等かの動機に依り、日本海軍が布哇を占領したりとする。日布間の距離は米布間の距離の約二倍である。劣勢海軍力を以て此の長距離兵站線を維持することは多大の難事であつて、果して長期の占領を繼續し得るや否やも疑問である。加之、米國海軍の現存する限り、日本海軍は布哇より更に一歩を進めて米大陸に對し大規模の作戰を爲すことは殆んど不可能と云ひ得る。即ち日本海軍の布哇占領は日本側より見れば、横須賀、ホノルルの睨み合がホノルル、桑港の睨み合ひに替はりたるに過ぎざるも、米國側より見れば、心臓に匕首を擬せられたると等しく至大の脅威を感ぜざるを得ないであらう。故に公平なる軍事的見地より言へば、太平洋岸に有力なる海軍國の存する以上、米國としては布哇の防備を嚴にし戰時敵國に占領せられざることに力むるは、國防上極めて緊要事である。端的に言へば米國は布哇をさへ確實に掌握すれば、現在比率の下に於て日本海軍に對し國防上多く憂ふるに足りないのである。故に今回の大演習の目的が戰時に於ける布哇の防禦に止まるならば、是れ米國國防上當然の行爲にして之に對し他より言議を挾むは米國の自由を干かすものと云はねばならぬ。

然るに米國今回の演習が布哇の防禦に止まらず、更に西方に一歩を進めて日本に對する露骨なる攻擊演習に出づるとせば、夫は我國に對し友誼ある行爲とは決して言へぬであらう。素より戰爭は防禦のみにては、勝利を博することは出來ない。必ずや防禦を完成したる上は更に攻勢に轉ずることの必要なるは言ふまでもない。演習が實戰の下稽古である以上、演習の目的を完

達する爲には攻勢動作を執ることも亦必要である。併し之が爲め國交の圓滑を阻害する如きは、演習の爲めに國交を犧牲に供するもので、現代軍備の眞目的に反するものである。たとへ成るべく實戰に近からしむることが演習の第一要件であるとは云へ、戰時の交戰國と平時の友好國とを同一に扱はれては溜らない。若し米國にして日本に對する攻擊演習を行はんとするならば、我等は米國演習の自由を妨ぐるの權利は持たぬとは云へ、世界の平和と日米の融和との爲め、米國と米國民との反省を促かすことは非禮ではないであらう。

聞く處に依れば米國艦隊は布哇附近に於ける防禦的演習を終へたる後、艦隊の大部分を擧つて濠洲新西蘭方面に進出し、濠洲艦隊との合同演習を行ふ計畫であると云ふ。米國大艦隊の濠洲回航には素より種々の目的と意義とが含まれて居るであらう。單なる軍事的演習の爲めのみでなく、米濠親善と云ふ外交上の目的の存することも我等は疑ふものでない。米濠の親善は太平洋の平和を保つ上に於て誠に結構である。我等日本人は毫も之を嫉く必要はない。米國の艦隊が世界の何國を訪問しようと米國の自由である。我等日本人は少しも之を憂ふる必要がない。唯今回の濠洲訪問が大演習の繼續として行はるゝことゝ、普通の外交的訪問としては餘りに大規模なることゝ、濠洲艦隊が軍事的意義を以て之と合同することゝが、日本國民の神經刺戟するのである。

布哇より新西蘭或は濠洲東岸に到る距離(概略四千海里)は、布哇より東京灣に到る距離と略ぼ同樣である。米國艦隊は濠洲回航中に於て大艦隊の長航訓練も行ふであらう。大艦隊の洋上補給も試みるであらう。斯くて此の回航に成功すれば、布哇より日本に到る大艦隊航海の可能が立證せらるるのである。是れ我が國民が米國大艦隊の濠洲回航を以て、日本に對する軍事的示威行爲であると疑ふ所以である。外交上の目的は別とし、軍事的見地より疑へば、米艦隊の濠洲回航は戰時日本に對する攻擊作戰の實習であるとも言ひ得るのである。

○

米國の大演習に對しては獨り我國民のみならず、米國に於ても相當大なる反對があつた。先づ第一に演習反對の叫びを擧げたるは米國に於ける世界平和協會である。我等は同協會が世界平和の爲め、日米親善の爲め、敢然起つて大演習反對の決議を爲したる、其の主義に忠にして實行に勇なる態に對し敬服せざるを得ない。米國大新聞中にも亦演習反對を唱へたるものが少くない。對外問題と云へば理否を精察せず、我國の爲す處、我國の言ふ處、我國の悉く善と決定し、相手國を罵倒するを以て

能とする如き新聞の正に省鑑すべき點であらう。縦令是等の反對運動は不幸にして米國當局者を反省せしむるを得ず、大演習は遂に擧行さるゝに至りしとは云へ、之が爲め米國亦具眼の士の鮮なからざるを知つて、我等は大に愉快とする。

抑も米國は何を恐れ何を變へて、日本國民の感情を害し、自國民の反對を排して迄も、今回の如き大規模の海軍演習を行ふのであらうか。我等より見れば今回大演習の目的に對して二樣の解釋がある。即ちその一は日米最近の國交狀態に照し、萬一開戰の場合に對する準備の爲めである。其の二は排日米紙の唱ふる如く、大演習に依つて米國の大に爲す有ることを示し、依て以て日本國民を威壓せんが爲めである。華府協定に依つて大に緩和せられ、更に一昨年大地震當時に於ける米國民の厚き同情に依つて改善せられたる日米關係は、昨春米國に於ける排日法案通過以來再び急激に惡化し、今日我國民の對米感情は頗る險惡と云ふべきである。思慮乏しき國民中には隨分不穩なる罵詈を米國に對して加ふるものもある。米大使館の國旗を奪ふて愛國者を氣取る如き半狂人もあつた。軍人中には兵士に對して極端なる反米心を鼓吹する連中も多い事を聞いて居る。「進んで米國を敵とすべし」とか、「米國を膺懲せよ」とか、其他日米戰爭を書ける書物も相當澤山出版せられた樣に記憶して居る。而して斯かる我國民の反米氣分は恐らく全然米國に理解されてあることと信ずる。我等は此際外交的辭令を用ゐて事實を殊更に美化すの必要はない。日米問題に對し比較的冷靜と自認せる我等より見るも、今日我國民の對米感情は上下と都鄙とを通じて極めて不良であると云ふことを斷言するに躊躇しない。曾て日米戰爭不可避論が全世界を賑はしたる歐洲大戰前の空氣よりも、寧ろ一層險惡であるかの如く感ぜられる。無責任なる個人の放言すらも互に針小棒大に報道せらるゝ現代のことゝて米國人より見れば日本の輿論は日米開戰にあるかの如く考へられるであらう。日本の排米主義者や軍國主義者が、米國の排日主義者や軍國主義者の片言隻語を得たり賢しと宣傳に利用するが如く、米國の排日主義者や軍國主義者は、日本の反米主義者や軍國主義者の斷文零墨を捕へて排日の宣傳に利用するであらう。斯くて日本の實質を知らぬ米國民は日本の攻撃を懼れて戰爭準備を急ぎ、日本の實質を知れる米國民は「何をジヤツプが生意氣な」と高壓的手段に出るであらう。之が米國今回大演習の動機では無からうかと思はれる。

今の日本人中に無責任に放言的に日米戰爭を説く者は甚だ多い。彼等は太平洋を泳いで渡り、大和魂と劍付鐵砲さへ有ればロツキー山を越へ得ると思つて居るのであらう。苟くも多少な

りと日米の事情に通ぜる人間にして日米戰爭などを本氣で考へる者は、恐らく一人もあるまいと信ずる。凡そ戰爭をやる以上勝利の確信が無ければならぬ。投機氣分で戰爭をやられては、彈丸の標的に使はるゝ人間が溜らない。眞僞は知らぬが、日露戰爭の際には萬一敗けたら臺灣と何處とかを露國に割讓する積りであつたとか云ふ。今後の戰爭は若し敗けたら日本全國を歿落の淵に沈めねば追つ付かないのである。

戰爭の堅き決心なくして猥りに口先ばかりで戰爭氣分を煽る程國家に對して危險且つ有害なるものはない。不幸にして我國には日米戰爭煽動者が甚だ尠くない。軍人を中心とし、其の周圍に巣食ふ慢性愛國患者や慷慨常習病者等である。彼等は今尙ほ「敵國外患無ければ國危し」との侵略御免時代の陳套語を金科玉條として、國民の元氣を鼓舞する唯一の道は對外敵愾心を煽るに在りと信じて居るらしい。外交の紛議の生ずる毎に之を捕へて、國民の排外心を鼓吹することを怠らない。而して此の種の愛國者は獨り日本のみならず、米國にも相當澤山居る樣である。

我等は軍事的見地に於て米國海軍の大演習に對し何等の恐怖を感ずるものでない。日本海軍が現在の力を有し、且つ無謀の作戰を爲さゞる以上、米國艦隊は日本に對し、空中攻擊以外何事も爲し得ざることを信ずるからである。寧ろ我等の憂ふるところは日本の軍國主義者や愛國病者が、米國の大演習を口實として不必要なる軍備擴張や不利益なる日米戰爭を愚直なる國民に宣傳せんことである。現代戰爭の勝敗を決するに二つの力がある。即ち一は武力で他は經濟力である。而して日米戰爭の勝敗を決するものは武力よりも寧ろ經濟力である。故に經濟關係の人々が戰爭の可能を說くまでは、國民は軍人や愛國者の日米戰爭論に耳を傾けてはならぬのである。

○

我等は最も率直に米國民に告げたい。目下日本國民の對米心理は甚だ不良である。日米戰爭の聲も隨所に聞かれる。併し夫は決して識者の意見ではない。元來日本は米國に對して何等の野心も慾望も抱けるものではない。日本の對米外交は寧ろ常に遠慮勝である。日本は未だ曾て米國の利權を侵害し名譽を毀損したることはない。日本は米國に對し常に先進國としての禮意と大國としての敬意を拂つて居る。左れば感情的疎隔か、人種的毛嫌ひの外、日本は米國より憎まれ疑はるゝ理由はないのである。尤も我が國民は多年鎖國生活の結果、外交上に於ける國民的訓練乏しく、爲めに對外感情を露骨に粗野に表白するの缺點を持つて居る。加ふるに東洋民族の通有性たる、實質よりも面目を重んじ、內容よりも體裁を繕ふ國民性を持つて居る。彼

の排日法案の如きも冷靜に其の實質内容を檢討すれば徒々たる問題なるに拘はらず、國家の體面論よりして日米戰爭をさへ說く者があるのである。我等は排日法案を以て盲目的に米國の邪惡とのみ斷定することを好まない。日本が支那勞働者の入國を好まぬ如く、米國が日本の勞働移民を悅ばざることを情義的に諒とする必要がある。若し夫れ米國を以て日本過剩人口の當然のハケ場と爲し、米國を以て日本失業者の出稼場と考ふる者あらば、誤りは日本人にある。

獨り米國人のみならず、一般外國人殊に同文同種とかの支那人すらも日本を以て侵略慾に燃ゆる軍國主義國、日本國民を以て血に渇せる好戰國民と稱へ、常に警戒の目を以て日本に臨んで居る。米國今回の大演習は言ふ迄もなく、英國の新嘉坡軍港建設の如きも日本に對する警戒に外ならない。一體日本は外國人から疑はるゝ程に軍國主義國であるのであらうか、日本國民は夫れ程好戰民族であるのであらうか。我等は一言の下に外國人の誤解と否定するとなく、或は外人の批評意とするに足らずと肯定するとなく、深く自ら考ふるの必要があると信ずる。

我國は武士萬能の封建制度廢れて以來、年を經ること未だ久しからず爲めに多年の傳統たる尙武精神は今尙ほ根强く國民の頭に宿つてゐる。殊に政治界と云はず、經濟界と云はず、今日社會の要路に立てる人々の多くは何れも武士的洗禮を受けて育つた者である。元來尙武の精神は軍事偏重の精神である。而して軍事偏重の思想精神が政治上に現はるゝものが即ち尙武政策或は軍國主義である。斯くの如く我國民に尙武精神强きのみならず、我國今日の運命を開拓したりと認めらるゝ日淸日露兩役の大勝は自ら軍人の勢力を强大ならしめ、爰に漸く軍閥なるものが形成せられて政治上に活躍するに至つた。而かも軍閥の頭目が元老の第一人者として、久しく國政を左右したる時代もあつた。軍閥が政治上に勢力を張る時、其國の政治が軍國主義に傾くは當然の歸結である。加之獨逸を眞似たる我國の制度には軍國主義的色彩が强い。軍部大臣官制の如き、帷幄上奏權の如きは軍國主義制度の最も露骨なるものである。國民に尙武精神强く、軍閥の政治的勢力大に、加ふるに軍國主義的制度あれば、國家は軍國主義に走らざらんと欲するも得べからずである。今時サーベル人が出て、總理大臣の印綬を帶びるなどゝは、軍國主義國ならずして見るを得ざる珍現象である。國民精神が侵略的なりや否やの內面的問題でなく、表面に現はるゝ政治制度にして軍國主義的なる以上、外國の誤解を避ける譯には行かぬであらう。

惟ふに軍閥なるものは日本ばかりの特產物ではなく、軍隊の存在する以上何れの國にも大小の軍閥はある。而して軍閥こそ

は軍國主義の總本山である。軍備の充實と擴張とを叫ぶは世界軍閥の共通心理である。我等は軍閥が其の職掌たる軍事上の見地より軍備の擴充を說くことを怪しまない。彼等は世界の平和を以て痴人の夢を語るとなし、平和運動を以て人類の反逆者、國家の破壞者とさへ考へて居るのである。若し彼等にして平和が人類の本道であることを覺るならば、最早安閑として軍職に止まることは出來ぬであらう。彼等は夜間動物の如く、常に人類爭鬪の暗黑面のみを見て、人類平和の光明面を見ることが出來ない。之を以て多くの先進國に於ては制度によりて軍閥を政治的に去勢せるに反し、我國に在つては制度に依つて却て軍閥を政治的に擁護せんとして居る。日本の軍閥が政治圏外に勇退せざる限り、日本に對する軍國主義の疑惑は消へぬであらう。軍國主義の疑惑の去らぬ限り、日本に對する外國の武力警戒は緩まぬであらう。我等は今回米國大演習に於ける米濠艦隊の合同を見て、米濠同盟などゝ氣を揉むに先ち、何故濠洲艦隊が大戰當時に於ける我海軍の好意を裏切り、米國艦隊と握手するに至れるかを考へねばなるまい。日本の軍國主義に對する警戒が濠洲をして米國に賴らしむるに至つたのではなからうか。

我等は今の日本に軍國主義の濃厚なることを否定しない。又日本國民が尙武精神に富めることを否認しない。併しながら日本國民が血に喝せる好戰民族と云ふ評に對しては、我等は斷じて同意することが出來ない。我國にも外國同樣古來戰爭の數は少くない。人文尙ほ低く、武器亦發達せず、戰爭が容易なりし時代に於て群雄土豪相爭ひたるは世界歷史の共通せるところである。而して此時代に於ける我國の戰爭なるものは戰爭と云ふよりも寧ろ武術の競技と云ふ方が適切かも知れぬ。後世の作事かも知らぬが、衣川の館に矢を番へながら歌を詠み交はしたる義家貞任や、一谷の熊谷と敦盛や、屋島の沖に扇を射たる奈須與一や、降ては敵に鹽を送りたる謙信まで、殺伐なる戰爭にあらずして人間味豐かなる藝術である。日本の古戰記を繙く時、唯美しき人間味こそ感ずれ、何等血腥き殺伐の情を起さない。昔の日本國民は戰爭をすら藝術化する程の優美性と平和性とを持つて居たのである。都市に外廓を設けざりし一事に徴するも、我國民は戰爭の際と雖ども殺伐徒に血を好む民族でないと云ふことを證するに足りる。若し夫れ震災當時に於ける一部國民の狂燥なる蠻行に至りては、國民的大耻辱として我等は一言明辨の辭を持たないことを遺憾とする。

古來我國民には憎怨骨を刻むが如き宗教戰と、殘忍種を絕やすが如き外國戰の經驗が無い。史實茫漠たる神功皇后の三韓征伐は別とし、其後明治維新に至る迄一千三百年間、外國と干戈

を交へたるは唯僅に蒙古の來襲と秀吉の征韓あるのみである。而かも蒙古の役は九州の一角に止まり、征韓役は朝鮮に於て戰はれた爲め、我國民は直接外國戰の味を甞めたことが無い。從つて我國民は眞の戰爭の殘忍味を知らず、常に太平氣分を以て戰爭なるものを極めて輕く考へて居たらしい。其に加へて明治維新後に於ても亦日清日露の兩役に大術的奇勝を博したるが爲め、戰爭に對する國民の觀念は徐樂觀的となり、戰へば必ず勝ち、勝てば必ず國運の發展を來すと迷信し、寧ろ戰爭を歡迎するの傾向さへ見える。乃ち我國民は戰爭の利點のみを知つて未だ其の害點を知らざるの結果、容易に戰爭を口にするに至つたのである。故に今の我國民が好戰的なりとすれば、夫は本來の國民性でなく、大和魂已惚病と戰爭漫心病との熱に浮かされたる一時的作用であると信ずる。大和魂已惚病は歐洲大戰に依り余程熱が下つたが、戰爭漫心病はまだ容易に醒めさうにもない。

○

世界の地圖を開き見る時、現在獨立國家と稱せられるもの大小五十幾個國の中、白人若くは准白人以外の人種に依つて立てられあるものは僅に日本、支那、土耳其、波斯、暹羅ぐらゐに過ぎない。而かも其中眞の獨立國として白人國と對等の地位を保てるものは、實に我日本帝國唯一である。萬白國中黄一國と云ふか、四面白顔の聲と云ふか、日本としては誠に稀少なき至りである。世界は白人の住む爲めに造られ、有色人は白人を養ふ爲めに生れたるかの感と觀とがある。白人の跋扈跳梁を憎まんよりも寧ろ有色人の庸劣無氣力を慨せざるを得ない。併しながら公平なる判斷に於て我等は遺憾ながら體力に於ても、能力に於ても、有色人種に比して白人種の優越を認めざるを得ない。日本の如きも文物制度悉く白人國の模倣である。物質文化に於ては白人に劣るも、精神文化に於ては白人に優るなど丶と云ふは、安價なる國民的已惚の氣休めに過ぎない。

今日白人が世界の殆んど總てを獨占し、儼然として有色人種の上に君臨する所以は、其手段の是非と其の方法の善惡とを問はず、畢竟するに白人優越の結果である。個人の所有權が正當と認めらるゝ間、國家の所有權も亦正當と認めねばならぬ。先祖が盜んだ金であらうと、奪ふた土地であらうと、子孫は正當に之を相續するの權利がある。切取强盜でも一城の主とさへなれば、其の子孫は華族となつて特權を附與せらるゝ今の世の中である。英國人の祖先が印度を强奪したにせよ、濠洲を拾つたにせよ、今の英國人が印度濠洲を領有することを不當とすることは出來ない。侵略御免の時代に於て、日本人が之を奪はなかつたのが怠慢である。之を拾はなかつたのが失策である。英國を害

むしろ日本人の組織を怨まねばならぬであらう。否らざれば共産主義に依つて個人と國家との所有權を否認する外はない。

我等は素より英國の桎梏の下に在る印度人に同情する。米國の支配下に在る非律賓人に同情する。有色人種と云ふ血の關係を離れて純なる人道の上より言ふも、印度人や非律賓人や其他白人治下に呻吟せる有色人種が一日も速に獨立自由の民とならんことを望むものである。併しながら同時に我等は日本人の治下に臺灣人や朝鮮人のあることを忘れてはならぬ。不完全ながらも自治の政治を有せる印度人や非律賓人を羨む民族の有ることを記憶せねばならぬ。米國が非律賓を占領しながら朝鮮の獨立を煽動する米國宣教師を日本人が不埒とするならば、日本が朝鮮を掌握しながら印度非律賓の獨立運動を尻押する所謂日本の國士なるものも亦英米人より見れば不埒であるに相違ない。

近來頻りに「亞細亞人の亞細亞」とか、「亞細亞大聯盟」とか、頗る元氣の良い語を耳にする。正義の上に於て、人道の上に於て、主義精神には絶對に贊成である。併しながら事實の上に顧みる時、今の亞細亞の大部分は亞細亞人のものではない。故に亞細亞人の亞細亞を實現する爲めには、先づ亞細亞に於ける白人の支配權を驅逐し、亞細亞民族の獨立自由を回復せねばならぬ。而して斯くの如き運動は白人が最も恐れ、最も嫌ばさるところたるは言ふ迄もない。亞細亞人の亞細亞運動は現に亞細亞を支配せる白人に對する公然の挑戰である。若し夫れ日本が亞細亞の盟主を以て任ずるならば、白人の矢は期せずして日本に向ひ集中せらるゝは明らかである。加之亞細亞人の亞細亞主義は其の精神を壓縮すれば日本人の日本であり、朝鮮人の朝鮮であることに歸着せねばならぬ。自ら朝鮮を支配しながら亞細亞人の亞細亞主義は不徹底不合理の譏を免れない。白人達から請ふ隗より始めよと笑はれはせぬであらうか。我等は既に人種平等問題で失敗したる不快な經驗を持つてゐるではないか。

有色人は言はゞ世界の無産民族である。白人種は世界の支配種族である。亞細亞人の亞細亞主義は白人に對する無産民族の解放である。亞細亞大聯盟は無産民族の團結運動である。而して日本が小支配國たる癖に柄にもなく其のリーダーの役を勤めんとして居る。凡そ資本主義國に於て無産階級の解放運動や團結運動が、所謂危險思想として常に支配階級の迫害と彈壓とを蒙り　其のリーダーは安寧秩序の破壞者として牢獄に叩き込まるゝ如く　今の資本主義世界に於て無産民族の解放運動や團結運動が支配種族たる白人國の壓迫を蒙むるは明らかである。リーダーたる日本は世界の平和を攪亂する危險國として國際牢獄に投ぜらるゝに極つて居る。若し日本にして夫れ程の固き決心

を有し、正義人道の爲めに飽く迄盡す覺悟があるならば　亞細亞人の亞細亞主義も亞細亞聯盟も大いに可なりである。縱令國は亡ぶとも大和民族の名は無産民族解放の神として永久に歴史を飾るであらう。ヒマラヤ山頂に大和民族の銅像が建てらるゝ時代が來るかも知れない。併し英國の新嘉坡軍港問題を頭痛に病んだり、米國の大演習に神經を尖らす樣では、此の世界の大業は到底出來ることではない。單に國民の對外元氣を鼓舞する爲めなら、斯かる危險を冒さずとも他に手段かあるであらう。

資本主義の擁護に最も熱心にして無産階級の解放に反對する保守主義者が無産民族解放の音頭取であつたり、常に日米戰爭を口にする軍國主義の元氣者が、米國の大演習を最も氣に病むなど、人心は複雜にして世相は面白い。

米國は新開國である。各國民の寄合世帶である。國としての舊き傳統も因襲も持たない。從つて國民は何等の舊慣古例に捕はるゝことなく、其の爲す處は常に獨創的で、進歩的で、意氣は潑溂、思想は自由である。故に米國には保守主義者がない。殊に國は富んで、民族は豐かに、加ふるに未だ曾て國際の苦難を甞めた經驗がない。恰かも貧苦を知らぬ金持の息子の如く、純眞ではあるが我儘である。已れの思つた儘を言ひ、已の信ずる處を行ひ、良く言へば直情徑行、惡く言へば無遠慮なる國民である。氣が向けば日本の震災見舞に二千萬圓をポンと投げ出し、氣に逆へば「グレーブ、コンセクエンス」の一語に排日法案を無理押しに通過さす如き機嫌買ひの國民である。謙遜とか、氣兼とかは、米國に於ては寧ろ卑屈因循の不道德である。自己屈抑の東洋道德に養はれたる日本の國民性とは根本に於てソリが合ひ兼ぬるは當然である。

斯くの如き直情徑行にして機嫌買の米國民に對し、感情的にして反抗心の強き日本人が眞つ正面よりブツ付かれば到底衝突は免れない。米國民に對しては冷靜にして理知的なる英國人の態度を學ぶことが必要である。今回大演習後米國艦隊の日本訪問の照會に對し、我が政府の之を拒絕したることが事實でありとすれば、是れ米人の自尊心を傷つけたるものにあらざれば、我國の狹量を示したるものにして策の極めて拙なるものと信ずる。悅んで招待し、大に歡迎し、藝者ガールの踊でも見せて震災當時の厚意に酬ゐたならば、太平洋の波を靜むる上に於て軍艦一隻造るよりも遙に大なる效果があつたであらう。

米國民は常に正義人道を口にし、又能く世界の平和を語る。彼等は正義人道の擁護者、世界平和の維持者を以て自ら任じて居るらしい。海軍競爭は世界の平和を亂すも、米國海軍は世界の平和を維持する爲めに有力でなければならぬなどゝは、米國

人ならでは言ひ得ざる放言である。彼等は略の爲めでなく、策の爲めでなく、恐らく斯く信じて居るのであらう。日本に關係ある問題は扨て置き、第三者の立場として見る時、米國は歐洲大戰に六百億圓の戰費を支出し、聯合國を勝利に導きたる大功を有せるに拘はらず、平和會議に於て聯合諸國が獨墺の土地に、償金に、獅子の分前に啀み合ふ際、米國のみは獨り超然として何等の要求をも爲さゞりし如きは、貧乏國の眞似の出來ぬ芸當である。我國民中には米國の國際聯盟不參加を以て其の不信を責むる者が多い。併し米國としては不參加には不參加の理由あるべく、其の斷乎として跳ね付けた處に我儘なヤンキイ氣質の中にも一種痛快なる男性的氣分が漂ふて居る。不平不滿を抱きながらイヤ／＼引摺られて參加し、而かも條約を履行しないよりは却て正義に叶ふかも知れない。聯盟規約不履行の爲め毎年の勞働會議に醜態を世界に暴露する何處かの國よりは寧ろ氣が利いて居る。

我等は素より無條件に米國の正義人道を受入るものでもない。米國の平和主義を盲信するものでもない。米國人にも我利／＼の帝國主義者も多いであらう。好戰的な軍國主義者もゐるであらう。併しながら我等は又米國嫌の我一部國民の如く、盲斷的に、感情的に、米國の正義人道を否認するものでない。米國の平和主義を笑殺するものでない。米國人中にも眞に正義を重んじ平和を愛する人士の甚だ多きを認むるものである。昨年の排日法案や、今回の大演習に對しても、正義と平和の立場より誹謗の議を唱へた人も新聞も尠くなかつた。殊に米國には對外問題に關しても是を是とし非を非とする言論の存するだけでも頼もしい譯である。

米國人と米國新聞とが大演習に反對の叫びを擧げたるは、唯一日米の平和を重んずるが爲めである。日本人は米國人の此の叫びに對して立腹したであらうか、感謝したであらうか。恐らく腹は立たぬであらう。米國人が日米平和の爲めに大演習反對を叫へば感謝しながら、日本人が平和の爲めに軍備縮小を唱ふれば非國民と罵る。何と云ふ勝手な日本人であらう。日本では平和主義の見地より軍事教育に反對を唱へたる故を以て尾崎行雄氏が皇室中心主義を標榜せる暴漢の爲に襲はれた。日本に於て大演習にでも反對しようものなら命は一つで足らぬであらう。

近頃皇室中心主義を標榜する暴力團や直接行動團が續出した。我が皇室が國民の中心、國家の中心たることは彼等の標榜を待たずして明らかである。我が皇室は總ての階級と總ての主義とに對し一視同仁たることに依つて、眞に國民尊崇の中心たり得るのである。決して一階級や一主義の中心たるべきもの

でない。然るに皇室中心主義を振り廻はし擔ぎ廻はして、己と反對主義者を迫害排斥する如きは、自己の爲めに皇室を利用する者で、單に皇室に對して不忠なるのみならず、累を皇室に及ぼすものである。大逆事件の判決文は何を語つて居るであらうか。殊に憂ふべきは軍國主義者或は軍國主義團中に皇室中心主義を擔ぐ者の特に多きことである。皇室が軍國主義の中心たるの疑を生ずる時、世界に對する我が皇室の名譽と信用とは著しく減ずるであらう。

○

日本と米國とは米國海軍卿の言へる如く、相異なれる文明を有する二つの國家が太平洋を距てゝ、對峙して居るものである。太平洋が兩國衝突の狂瀾を捲き起すか、將た融合和平の瑞波を湛ゆるかは、將來世界の最大問題で我國の爲めには存亡興廢の死活問題である。唯幸か不幸か、衝突するには兩國の距離が餘りに遠う過ぎる。融和するには太平洋が餘りに廣過ぎる。不戰不和の間に尚ほ幾年を過ぎるであらう。此の間に惡化して破裂するか、良化して融和するかは、兩國民の心一つである。

元來日本と米國程種々の點に於て相違せる隣國は少ない。先づ其の國體の異なるは言ふ迄もなく、多くの思想的相違は茲に發程する。彼は國大に富豐かに人少く、移民の輸入國である。我は國小に富乏しく人多く、移民の輸出國である。彼の社會は平等的で政治は自由進歩主義であるが、我の社會は階級的で政治は軍國保守主義である。國民性は彼は所謂ザックバラン式で我はシンネリムッツリ式である。彼は能く笑ひ能く巫山戲るも、我は能く怒り能く憤ふる。彼は實質を重んじ、我は形式を尚ぶ。唯相似たる點は双方とも國際的艱難を知らず、我儘で己惚強き點である。

併し斯くの如きはまた以て兩國不和の原因とするに足らない。惟ふに日米兩國不和の眞因は、相互の猜疑に基づく恐怖心と、誤解に因る危惧心以外に何物も無いと信ずる。米國は金持で、日本は貧乏なることは問題でない。唯米國より見れば日本は亂暴なる貧乏人である。日本より見れば米國は傲慢なる金持である。米國は金持なるが故に日本の亂暴を恐れ之に備へんとする。日本は貧乏なるが故に米國の剛慾を惡み之を防がんとする。米國が日本に備へんとすればする程、日本は米國を疑ひ、日本が米國を防がんとすればする程米國は日本を疑ふ。斯くて互に他を侵略又は迫害の野心ありと疑ひ、軍備の競爭が開始せられる。日本を侵略の野心ある亂暴者と思へば米國が之を恐れるのも無理はない。米國を食つて飽くなき剛慾者と思へば日本が之を惡むのも當然である。

日露戰爭までは日本は米國より見れば温和なる貧乏者であつた。米國は日本より見れば親切なる金持であつた。然るに日露戰爭後日本の急激なる發展が米國をして日本を警戒せしむるに至つた。大規模の海軍競爭が始つた。曾ては勤勉なるジヤツプとして歡迎せられる日本移民が危險なる間諜移民として排斥せられ始めた。新勝の餘勇勃々たる日本人は前垂掛のヤンキイ何するものぞ、我に大和魂ありと反抗の肱を張つた。日米不和の端緒は此處に開かれたのである。日本に於ても曾ては開國の恩人と尊ばれたるペルリ提督さへが、何時しか開國強請の悪徒の如く嫌はれ出した。斯くて太平洋の眞ん中に色硝子の壁が造られ、兩國民は互に他を正視することが出來なくなつたのである。されば日米の不和を除く爲めには先づ太平洋の此の色硝子の壁を取り去らねばならぬのである。即ち日本は侵略に燃ゆる劍慾者でなく、米國は貪婪飽くなき剛慾者でないことを互に覺り知らねばならぬのである。併しながら信ずるは難く、疑ふは易しで、一度誤解に陷ゐれる兩國民の相互信用を回復するには多大の努力と相當の年處とを要するであらう。之が爲め先づ第一に執るべき手段は、双方軍國主義者の宣傳中止である。我國に於ける或る方面の宣傳に依れば、米國に於ては目下軍國主義旺盛にして、女學生までが鐵砲擔いで戰爭の稽古をして居ると云ふことである。然るに歐米教育視察を終へて最近歸朝したる教育家が新聞に發表したる處に依れば、米國に於ては中學校は勿論専門學校と雖も強制軍事教育などを施せるものは一つも無いと云ふ。何れが眞實か我等は判斷に迷はざるを得ない。素より我國に於ても兵式教練に依りて大に勇壯活潑の氣を養へる女子師範學校や、兵隊と一緒に戰爭ごつこをして軍國の婦德とかの養成に力める女學校の一つや二つは無いことはない。併し之が爲め日本全國の女學校悉く巴、板額の養成所と宣傳せられては溜まらない。凡そ宣傳術の極意は針少棒大にある。信ずる者に罪はない。宣傳する者こそ不埒千萬である。

日清戰爭には朝鮮と云ふ目的物があつた。日露戰爭には滿洲と云ふ目的物があつた。米西戰爭にはキユウバと云ふ目的物があつた。歐洲戰爭には獨佛の間にアルサス、ローレーンあり、露墺の間にバルカン諸州あり、英獨の間に世界經濟競爭と云ふ夫々の目的物があつた。然るに日米の間には今日戰爭の直因となるべき何等の目的物が無い。支那問題の如きも今日に在つては日米の問題にあらずして全世界の問題である。故に日米の間に衝突起るとせば、唯感情の衝突、誤解の衝突で、左もなければ面目の衝突である。戰爭に訴へなければ解決が出來ないと云ふ重大なる具體問題を發見しない。

唯併し日米關係否な日本對世界關係を論ずるに當り、一事の解決せねばならぬ大問題がある。即ち日本の人口問題である。日本は土地狹く、物質乏しきに拘はらず、獨り人口のみは過大である。年々増加する日本の人口を如何にするとは、我國の最大問題であると同時に世界の恐怖である。米國が日本を疑ふのも一つは之が爲めである。濠洲が日本を恐るゝのも全く之が爲めである。和蘭人は南洋諸島の爲めに、佛蘭西人は安南の爲めに、英國人は印度の爲めに夫れ〴〵憂へて居る。「勝手に産み散らして置きながら養へぬからとて他國に送り出すことは不合理である」との外人の評は冷酷ではあるが道理である。日本は此の問題を他力的でなく、自力的に解決するにあらざれば我に對する世界の警戒は解けぬであらう。人相の悪き怪しき人間が深山の子供を連れて店前に立つ時、菓子屋の主人は疑を抱かずには居られぬであらう。

○

日本と米國との經濟的實力には餘りに大なる間隔がある。日本と米國との地理的關係には餘りに大なる距離がある。故に日本が米國と軍備の競爭を行はんとするは至愚である。同時に米國が武力を以て日本を撃たんとするは不能である。武力の戰爭に依つて日米問題を解決せんとするは、日本の爲めに無謀で米國の爲めに徒勞である。左れば我等は米國との軍備競爭には絶對に反對すると共に、米國の大演習に對して何等の恐怖を抱かない。日米問題の解決は唯兩國の國民的了解に依るの外はない。之が爲めには大國たる米國々民の寛裕と、小國たる日本國民の自省とが必要である。

日本は素より貧國である。併しながら米國に對して何等の領土的野心を有する者ではない。日本の米國に求むる處は精々移民問題位である。之とても唯他の諸國と同等の待遇を要求するに過ぎない。日本は經濟生活に於て米國に負ふ處頗る大なることを知つて居る。日本潰すに大砲は要らぬ。米國娘が三年日本に絹をストライキすれば足るとの評も、僅かに或る程度まで眞である。故に米國と友好關係を保つことは日本國民の等しく望むところであらう。米國と雖もあの國土の大と物資の豐富とを以てして、貧小日本に對し何等の物質的野心も慾望も持たぬであらう。支那の利權の如きも、日本が拔掛の功名に依り獨占の慾を恣にせざれば、日米の協調を保つことは恐らく難くはないであらう。米國の日本を恐るゝ所以は日本其ものに對してゞなく、日本が支那を掌握して武を世界に競はんとする點にあるだらうと思はれる。幸に支那に關する九國條約締結せられ、此點に對する米國の憂慮と危惧は除かれた筈である。既に兩國の間に

互の野心慾望なしとすれば、殘るところは唯誤解と猜疑あるのみである。

我等は米國の世界大演習を恐れない。併しながら日米關係頗る不良なる今日、其の有意識たると無意識たるとを問はず、事實上我が國に對する示威運動とも誤解せらるべき斯の如き演習が、單に我國に對して友誼的ならざるのみならず、徒、我國民の對米感情を惡化し、兩國間に鬱積せる國民的誤解を除く上に一大障害を付加へたることを大に遺憾とする。加之米國は近く第二次軍縮會議を開催せんとするやの報ある際、軍事問題殊に海軍問題によつて我國民の神經を刺戟する如きは時機其の當を得ざるものである。素より今回の大演習は既に數年前よりの計畫と聞けば、米國に於て何等の他意なきことを我等は信ぜんと欲するも、我國民中には米國は大演習に依つて日本を威嚇し軍縮を強要せんとするものであると評せる者もある。軍備縮少の實現を衷心より熱望する我等は、今回の大演習が軍縮會議の支障とならざることを祈るものである。

抑も演習は末である。軍備は本である。軍備ある以上演習は付物である。軍備無ければ演習は無い。演習を非難し、演習を心配する國民は、演習を非難する聲を以て軍備の縮小撤廢を叫べ、演習を心配する心を戰爭を恐れ。資本化し、經濟化したる現代の對外軍備は、貧乏國の堪へ得る處でないことを覺れ。そこに日本の生くる道が開けるであらう。（一四、一、一三）

シモンド・ド・シスモンディの社會思想

——百年前の一社會思想家の研究——

早稻田大學講師　久保田明光

「……之と同樣な變化は又吾人の眼前に行はれつゝある。生產、交換及び財產の諸關係に於ける現代有產者社會即ち此の生產及び交換の大機關を喚起した今の社會は恰も彼の魔術師が其の咒文を以て下界の諸靈を喚び來り乍ら今は既に之を御する力を失ひたるに似てゐる」

——マルクス・共產黨宣言——

（一）彼の時代、生涯、著作

今日恐らく近代社會思想の歴史的發生的研究を爲さむとする人にして、かのフランス革命に遡及せざる人があつても、あの一小島國に起つて世界を風靡した産業革命に關說しない人は恐らくないであらう。それはよく人が書いてゐる樣に、從來の行詰つた封建的生産組織が漸次に資本家的生産組織に變轉して行つた一大社會事實であり、同時に過去の封建的桎梏が打ちくだかれて新らしい經濟的自由が恐ろしい力を以つて盛り上つて來た秋なのであつた。しかし乍ら、やがてこの新生の喜びは瞬く間に新らしい憂ひの初となつた。この時わがシスモンディは既にこの豐饒な富の生産を、「ガンダリンの箒」の比喩をとつて、「最善の物についても吾々は持ち過ぎるといふ事があり得る」と杞憂し、新生産組織に早くも芽生へた社會的不安を豫知したのである。（註一）この豫知こそ實に事實を鋭く察知し得る人々のみがいつも能く爲し得る所のものであり、而もそれは後に學者の研究によつて、事實として立派に裏書きされたのである。尊敬すべき經濟學者ローザ・ルクセムブルグは既にこの、「神の如き資本家的秩序に對する最初の强い疑問が、一八一五年及一八一八――九年のイギリスに於ける最初の恐慌の直接的印象の下に、この有産者的國民經濟の裡に起つた」と述べてゐる。（註二）而も彼女によつて早くも「この資本家的社會に對する大なる非難の聲が殆んど同時に、イギリスに於てはオウエン、フランスに於てはシスモンディによつてあげられた」と指摘されたにも拘らず（註三）已然として社會主義の衣を着けたオウエンのみが殆んど例外なく社會思想の研究書に現はれてゐるに反し、如何に「個限附の個人主義」と呼ばれ、（註四）「經濟的リベラリスト」と呼ばるゝ（註五）わがシスモンディが顧みられて居らぬかを思ふ時に、この拙ない一篇の研究も亦徒爾に終らぬであらうと思ふ。

（註一） K. Diehl und Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Ökonomie, VII. Band. Wirtschaftskrisen. SS. 95–6.

「ガンダリンの箒」の比喩とは、シスモンディが幼い時に聞いた話の事で、昔ガンダリンといふ男が、一人の魔法使を自分の家に同居させ、毎朝此の魔法使が一本の箒の柄を握つて呪文を唱へ、水汲人に化けてガンダリンの望むだけの水を河から運んで吳れるのを見てゐたが。或時その呪文を盜み聞きし、呪文を試みた所が成功して、水汲人に化けた箒は水を運び始めた。然し彼はこの魔術を再び止める爲めの呪文を忘れた爲めに、既にガンダリンの水槽も滿ち、部屋に充溢しても之を止める術を知らなかつた。そして遂に斧で箒を打ちはしたが、再び原型にかへつて水を運びはじめたといふ話なのである。彼シスモンデは終りに書き加へて、「あらゆる科學の實際への新しい應用はガンダリンの斧と同じ樣に作用した」と。（A. a. O. S. 95）

（註二） Rosa Luxemburg. Die Akkumulation des Kapitals. S. 14.

（註三） Rosa Luxemburg, a. a. O. S. 144.

（註四）"unlimited individualist" (Haney, History of Economic Thought. p. 302)

（註五） C. Gide, Histoire des Doctorines Economiques. 1922. p. 255. English trans p. 173）

ジュアン・シャルル・レオナアル・シモンド・ド・シスモンディ Jean Charles Leonard Simonde de Sismondi は一七七三年瑞西チエネヴアに生れた。彼の家はもと〳〵イタリアの出であつたが、十六世紀にフランスにわたり、更にナントの勅令廢止の際フランスからチエネヴアに移つて來たのである。（註一）イタリアへ歸國後の彼の家は更に安全を求めてイギリスへ避難せざるを得ざるに至つたが、間もなく再びイタリアに戻つて來た。其處で彼の父はフイレンツエ附近に土地を購ひ、わがシヤールも亦農業に獻身した。これこそ彼の經濟學研究の最初の機會であつたのである。（註二）經濟學に於ては彼自らアダム・スミスの學徒 discipl d'Adam Smith であると稱してゐるが、（註三）他面又彼自身が書いてゐる樣に、「彼（スミス）から借用した學說からひき出した實際的結論は、屢々彼の結論と正反對になる樣になつた」のである（註四）茲に再び彼の環境を考察する必要が起つて來た。私はジイドの共働者リストが語る所を引用してそれを考へるであらう。（註五）

（註一） Gide, ibid. p. 204. English trans. p. 173）

（註二） Palgrave's Dictionary of Political Economy. Vol. II 408.

（註三） Gide, ibid. p. 206. (English trans. p. 174)

（註四） Sismondi, Nouveaux Principes d' Economie politique. vol. ii. pp. 50—1. (Gide, ibid. p. 206. Eng. trans. p. 174.)

（註五） Gide, ibid. pp. 204-5. Eng. trans. pp. 172—3.)

貧困と經濟的危機は、經濟上の自由がその最初の勝利を得た諸國に於いてすぐに注目を惹いた二つの新らしい事實であつた。そして最早この注目はこの事實から他にそらし樣がなかつた。それ以來この二つの事實は新らしい制度に對抗する武器として殆んど諸々の學派の、人々によつて絶えず使はれたのである。そして多くの人々の心の中に、漸次アダム・スミスの學說の信賴の不足を來さしたのである。或慈善的な論者やクリスト教徒達は、かくの如くに大なる不幸と敗滅の原因であつた所の執念深い制度（註記原文は régime となつてをり、英譯は適當に industrialism となつてゐる）に對してセンチメンタルな憤慨をなし、人生に就いて猛烈な抗議を提出した。他の人々——社會主義者等——は大いに批判を進め例へ私有財產制度それ自身に迄批判を進めて遂に社會の完全な顚覆（ブウルヴエルスマン）を要求するに至つた。畢竟するに之等すべての批判は、上述の諸事態に合致せさるものとして、私的利害と一般的利害の間の自然的調和の說

念を排したのである。

「之等の人々の中に、シスモンディよりも强く之等の事實の證據を支持したものはなかつた。國民經濟學に於ける他の一切の興味は、理論に關しては恐慌の說明の中に要約され、實際に關しては勞働者の狀態の豫警(プレヴュール)と改善の方法の中にあつまつてゐる。彼よりも大なる誠實を以てこの說明を求め、この救濟を求めた考へはない。かくて彼は十九世紀を通じてその影響の止むことなかつた經濟學者の一列の先頭者であり、一方に於ては社會主義者ともならず他方に於ては自由制限(レヂイム・リベラル)(英譯には「自然放任(レエゼエ・フェイル)」とある)の諸害惡に全く盲目となる事なく、自由の原則を保持しつゝその濫用を矯正する平衡的手段(ヴィア・デリアンメ)を求めた人である。(英譯には happy mean とあれども不適當なる譯語と思ふ)

扨てかくの如くにして彼の世に遺した最初の經濟學上の著作は一八〇一年に現はれた「タスカニー農業一般」Tableau de l'Agriculture Toscane であり、次いで二年後の一八〇三年には「商業上の富に就いて。一名商業の立法に應用したる經濟學の原則」De la Richesse Commerciale ou Principes de l'Economie Politique, appliqués à la legislation du Commerce. 二巻が出た。爾後一八一八年迄は專ら歷史的政治的研究に身を委ね、「中世イタリア共和國史」Histoire des républiques italiennes du moyen-âge 十六卷を著し史家としての盛名を馳せたのである。然し乍ら聽て一八一八年には再び經濟學の研究に還つて來た。それに就いてシスモンディは書いてゐる。「この時期に於いて、私は過ぐる年の間ヨーロッパが經驗した商業恐慌と、私自身イタリア、スウイス、及びフランスで實見し、且つ公報によればイギリスに於てもベルジウムに於てもドイツに於ても少くとも同樣に惡い狀態にある工場勞働者の慘い苦惱に鋭く興味を持つた」と。(註一)翌一八一九年には一七九二年以來行かなかつたイギリスへ旅をした。この旅は彼の經濟的見解に大なる影響を與へた。新らしい產業國の諸相が如何に鋭敏なる彼の眼にうつつたか。彼はイギリスを稱して、「世界の他の諸國に教へる爲めに、大なる經驗を爲してゐるかの如くに見える不思議な國」とさへ言つたのである。(註二)之等の新らしい觀察を通して生れたのが、彼の主著「新經濟學原理」別名、富と人口との關係)Nouveaux Principes d'Economie Politique ou de la Richesse adns ses rapports avec la Popula 一八一九年。二巻である。之はもと彼がエディンバウロ、百科辭典に經濟學に就て書く事を求められて爲した論文を基礎とし、之を發展させたものである(註三)

(註一) Gide, ibid. p. 205. Nouv. Princ. 2e édit. vol. ii. p. XXii

（註一） Nouv. Princ. p. IV, Gide. ibid. p. 205.
（註二） Gide. ibid. p 205. Haney. ibid. p 3 3. Haney. ibid p. 303. foot-note.

更に一八三六——八年には「社會科學研究」 Études sur les sciences sociales 三卷が出た。その第一卷は「自由民憲法研究」Études sur les constitutions des peuples libres で、第二、第三卷がよく識られてゐる「經濟學研究」Études sur l'économie politique である（註一）此の著には別に新らしい教說が現はれたわけではなく、既に『新經濟學原理』の中で詳述した觀念を、多くの記述的及歷史的研究——特にイングランド、スコツトランド、アイルランド及びイタリーの農家事情に關する研究によつて說明し確證した（註二）に過ぎなかつたのである。

更に驚くべき彼の著作的努力は、一八一八年から彼の死の年即ち一八四二年迄書き續けられた「フランス史」Histoire des Français に現はれてゐる。之は三十一卷より成り、初めの計畫では三十九卷以上も書く心算であつたとのことであつた。尚彼は Fix と合同して「新經濟學評論」Revue nouvelle d'économei politiques の創刊に力を盡したが、僅か二年（一八三三—三五年）の短命に終つてしまつた。

彼の著作には以上の外に尚多くあるが、その主なるものとしては次の如きものがある。

De la littérature du midi de l'Europe （一八一三年。四卷、一八一九年及一八二九年に版を重ぬ。）

Julia Sévéra ou l'an 420. （一八二二年。三卷。Coves の時代の Gauls の風習の敍述。）

Histoire de la renaissance de la liberté en Italie, de ses progrès, de sa décadence et de sa chute, （一八三二年。二卷）

L'istoire de la chute de l'empire romain et du déclin de la civilisation de l'an 250 à l'an 1000. （一八三五年。二卷）（註三）

（註一） Palgrave's Dictionary of Political Economy. III. p.409.
（註二） Gide, ibid. p. 206. English trans. p. 171)
（註三） Palgrave's ibid. p. 408.

二、彼の經濟學の出發點。正統派との關係

彼が自らアダム・スミスの學派であると稱してゐ乍らも、その主要な點に於いてこの偉大な先驅者に反してゐた事には既に前段に於いて言及しておいた。ジイド及リストは彼を「反對者」les Adversaires の一團に加へ、ヘネエも反對派の中特に「個人主義的批評家」Individualistic Critics の中に數へてゐる。

（ジイド及リスト、ならびにヘネエの前掲書目次分類參照）以下少しく正統派に對する彼の態度の概要を述べ、更に彼の經濟學の出發點を考察するであらう。

先づ第一に彼はアダム・スミスを評し、「スミスは一つ一つの事實をそれ自體の社會的環境の光に照して研究しやうと試みた」と言ひ、更に附加して、「彼の不朽の著作は實に人類の歴史の哲學的研究の所産である」とした。（註一）（然るにリカルドォに就いては、「抽象と性急な概括を行つた」と批判し」（註二）更にマルサスに就いては「非常に力あるそして明敏な心を持つた」人であるとし、「事實を愼重に研究する習慣を養つた」人であると驚異し（註三） セエやマカロックに對してはリカルドォに適用したと同じ論據に立つて非難した。（註四）

（註一） Gide, ibid. p. 206 (English trans. p. 174)
（註二） Haney. ibid. p. 311.
（註三） Gide, ibid. p. 206 (English trans. p. 17)
（註四） Haney, ibid. p. 311.
（附記） リカルドォは一八二二年十二月十六日附でマルサスに書き送つた書翰でシスモンディとの初對面を敍し非常な好感を持つた事を報じてゐる。曰く「…… At Coppet I met M. Sismondi. He, the Duke of Broglio, and I had a long conversation on this points of difference between us; the Duke took my side, but after a long battle we each of us I believe remained in the same opinion that we commenced the discussion in. M. Sismondi has left a pleasing impression on my mind……」(Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus. 1810—18?, edited by James Bonar. 1887. pp 210-211.)

かくて彼は經濟學を、「すべての事實が織り込まれてゐる所の、そして又單なる一事實でも切り離されて注意がそれのみに集中された場合には、何時でも誤れる方法が取除かれる所の道德科學」である（註一）と呼んだ。この點に就いてヘネエが、「倫理的諸考察は彼の思想中に一大役割を演じてゐた。彼にとつては經濟學は多く一の技術（アート）であつた」と書いた事は首肯かれる事である。尚彼が正統派に抗して立つた記述的歴史的方法に就いては彼自身も「經濟學研究」の序言に於いて、「重要な過誤は社會科學に於いて最も屢々なさるゝ推論（概括）から生れて來たものであるといふ事を私は信じてゐる」と書いて自信の存する所を示してゐる。（註二） 然し彼のこの記述的方法は實際問題を取扱ふ場合には甚だ適當であつたが、一度抽象的な研究に入るとかうした方法が、其の實效を失ひ、ヘネエが書いてゐる樣に「常に讀者を混惑させる矛盾」に陷るのであつた。その二三の例示はジイド及リストが上掲書の脚註に引用してゐる所を以つてしても明らかであらう。（註三）

（註一） Gide, ibid. p. 206. (English trans. p. 175.)

（註二） Haney. ibid p. 304.
（註三） Gide. ibid. p. 208. (Eng. trans. p. 176)

次にシスモンディが正統派に反した點、而して彼の經濟學的着眼の存する點は、生産と分配に關する見解、更に溯つては經濟學それ自體に關する見解に存する。一般に考へられてゐる樣に正統派の人々の取扱つた經濟學は富の增殖の科學、アリストテレスの言葉を借りて言はゞ、致富學chrematistiqueであり、主として生産問題の研究に局限されて居つたと言つても過言ではあるまい。ジイドに從へば、蓋し彼等にとつては「生産物の增加はそれ等の分配に於けるすべての發達の必然的條件であつた」からである（註一）然るにシスモンディは之に反對した。而して經濟學の眞の目的は富の增殖それ自體にあらずして、人の物質的福祉に存するとした。即ち「經濟學者達（正統派を意味する）は如何にして國民的富を增加さるべきかを教へたが、彼は如何にせば國民的幸福が增加さるべきかを教へた」とした（註二）のである。よく引用さるゝ所であるが、彼は新經濟學原理の初めに次の如く書いてゐる。「抽象的な仕方での國家内に於ける富の增殖は政府の目的ではない。むしろその富が代表してゐる物質的生命の慰安の爲めにすべての市民によつて分けらるゝ事が目的である。抽象した富と人口とは一國の繁榮に就いて何等示すところはない。それはそれ等相互の關係の裡にのみある」（註三）かくして彼は專ら分配問題に意を注ぐに至つたが更に經濟學に就いていはく、「經濟學は最も廣い意味に於いて慈善の學理 la théorie de la bienfaisance である。最後に於いて人類の幸福を增す結果を持たぬ學理は畢竟この科學に屬しないものである」（註四）とし、遂に前述した樣に經濟學を技術（アート）の學問にしてしまつた。畢竟彼の經濟學といふのは或意味に於いて一個の經濟政策であり、社會政策なのであつた。即ち蒐集した資料の記述的處置の程度を超えて、其處からゾルレンを求めて行つたのであつた。この點に就いてはいささか經濟學の體系的發展に寄與する所少かつたとも言へようが、當時の事情を考へる時、敢然當時の傾向を排して立つた彼を尊敬せざるを得ない。尙この項を終へるに際して、ヘネエが指摘した一事實、即ち「人口と富の分配に關して同一の見解を持つてゐたイタリアの經濟學者オルテス」の名をあげ（註五）その感化がシスモンディにも及ぼしたといふ考證を附記しておく。

（註一） Gide. ibid p. 210 (Eng. trans. pp. 177―8)
（註二） Haney. ibid. p. 374.
（註三） Nouv. Princ., t. I. p. 9.
（註四） Nouv. Princ., t. II. p. 150
（註五） Ortes, Economia Nazionale, 1774.

三、生産過剰及競争に關する反正統派的解見

經濟學樹立に際しての見解——主として其の目的及方法——上の差異が、その結論に迄現はれるといふ事に不思議はない。從つて正統派が主として生産增加の諸方法を考究し、結局自由放任に迄至つたに就いて、わがシスモンディが反對したのも當然であらう。彼は先づ生産過剰なる觀念の根據を「年生産の歳入に對する超過」に置いた。蓋し彼によれば一年の歳入は次年の生産に支拂はるべきものであつたからである。從つて若し或年の年生産が前年の年收入を超過すれば、生産物の一部は不賣のまゝ殘り生産物は衰へるであらうといふのである。(註一)

彼はこの生産過剰の原因として先づ第一に正統派の信條である生産增加への第一義的熱望と企業の自働作用の不合理を上げ次には機械の作用を說き、更に自由競争の不當を數へてゐる。

正統派の人々にとつては、生産增加は望ましき事であり且つ一切の經濟政策の前提であるが、彼に從へば之には二つの誤れる假定即ち第一に生産增加が收入增加を來すといふ假定と收入の增加が消費の增加を來すといふ假定とが先行してゐるのであつて、(主としてリカルドオに就いて言つてゐるのではあるが)共に、「悟性が承認する事の出來ない笑ふべき矛盾に滿ちた刻印」が與へられてゐるのであると嘲笑した。(註二)

更に彼は正統派の人々が懷抱してゐた、物價を通じて自己の收益の自働的法制を行ひ得るといふ觀念、即ち物價の騰落は企業家に自然的に當該生産の相對的過少過多を知らしめ、自働的に統制が出來るといふ觀念を斥け、先づ生産の相對的過多即ち需要に對して過多なるを發見したる場合に、果して當該資本及勞働が容易に縮少され或は他に轉換され得るやを疑ひ、到底勞働及資本の速成的縮少や轉換が大なる社會的不幸を招く事なくして行はれ難いとした。而して曰く、「自働的に定まると考へられてゐるこの危險な平衡理論 La dangereuse théorie de cet équilibre に注意せよ。或種の平衡が究極に於いて設定さるゝ事は事實である。がそれは恐ろしい苦惱の後に於てのみなさるゝものである」と。(註三)シヤアル・リストは之に附記して、「シスモンディの時代に於いては幾分眞であつたとの注意は、現時のトラストやカルテルの政策の基礎となつてゐる」と書いてゐる。(註四)

(註一) Gide, ibid. p. 208. (Eng. trans. p. 178.)

(註二) K. Diehl u. P. Mombert Ausgewählte Lesestücke zum Studium der Politischen Oekonomie, VII. Bd. SS. 108-9.

(註三) Sismondi, Nouv. Princ., t. I. p. 220-21 (Gide, p. 212)

(註四) Gide, ibid. P. 212. (Eng. trans. p.180)

次に、生産に於ける機械の使用の經濟的考察に就いて、正統派はほゞ一致した見解を抱いてゐた。即ち機械は、純然利便であつて、一方に於いて消費者の收入に何等の影響も與へず、他方に於いて廉價に商品を供給し得るのであるから、其の結果更に他の生産物に對する需要を喚起し、假令機械使用によつて一時解傭される者があつても、やがてさうした人々の需要も惹起さるゝものであると考へてゐたのである。(註)

(註) 然しリカルドオはこれに對して其の名著經濟原論 principles of Political Economy and Taxation の第三版に「機械に就いて」On Machinery なる一章を附加して、この正統派一般の見解と異る所に詳細に示した。今煩をいとはず其の大要を述ぶるであらう。(D. Ricardo, Principles of Political Economy, edited by E. C. K. Gonner. chap. XXXI, pp. 377—397) 先づ彼はその章に於いて、「機械が社會の、異つた階級の利害に及ぼす影響に關する研究を試みやう」と冒頭し、而も「これは大いに重要な問題であり、而も未だ或る確かな或は滿足な結果に導く樣な仕方で研究されたことなきが如きものである」とした。(P. 377.) 而して其の章の一三九節では以前からの彼の見解を述べ、「私は勞働者の階級も亦機械の使用によつて、同一の貨幣賃金でより多くの貨物を購求する手段を持つであらうから、同樣に利益を受けると思つた。そして賃金の下落は起らないであらうと思つた。何故ならば資本家は假令新らしい或は何等か異つた貨物の生産に勞働を傭使する必要にあるとは言へ、前と同一量の勞働を需要し且つ傭使する力を持つであらうしも改良された機械によつて同一分量の勞働を傭使して、靴下の分量が四倍され得、靴下に對する需要が只二倍となるのみならば、幾分の勞働者は靴下製造業から必然に解傭されるだらう。然し彼等を傭使した資本は尙存し、それを生産的に用ふる事がそれを所有してゐる人の利益なるが故に、それは社會に有益であり、それに對して必ず需要のあり得る他の貨物の生産に使用さるゝであらうと私には考へられた。」(P. 378) と告白し、一四〇節以下に於いて之に對する訂正を試み、「之等が私の意見であつた。そして之等は地主及び資本家に關する限り變る事なく續いてゐる。然し人間勞働に代ふるに機械を以つてする事には勞働者階級の利益にとつて非常に有害であると確信してゐる」(P.379) とし、「私の誤解は社會の純所得 the net income が增加される時には何時でも其の總所得 gross income も亦增加するであらうといふ假定から生じてゐる。然し私は今、地主及び資本家が彼等の收入を引き出す所の一の資金は增加するとも、他方に勞働者階級が主として依つてゐる所の他の資金は減少するかも知れぬといふ事が滿たさるべき理由を知つてゐる」(P. 379.) と書き、尙ほ實例を設けて之の關係を詳細說明し、機械使用が總生産物の價値の下落を伴ふとし、「そして人口を支持し、さうして勞働を傭使する力は、常に一國民の總生産物により、而してその純生産物に依らないが故に、世には必ず勞働に對する需要に減少を來し、人口は過剩となり、そして勞働者階級の地位は困窮と貧困のそれになるであらう」(P. 381.) と結んでゐる。然し「機械使用の結果として、改良された生産方法が、總生産物を減少しない樣な大なる程度に於いて一國の純生産物を增加するならば」、勞働者

階級をも含む總ての階級の地位も向上さるゝであらうと書いてゐる。(P. 383) 而して彼は此章を結ぶに際し、「一國家に於いて、機械の使用がその國で與へらるゝであらう所の最大の純收入 net revenue を得る事を許されないならば、それは外國に持ち去らるゝであらう。而してこの事は勞働の需要に對して、機械の最も大規模な使用よりも甚だより重大な障害であるに相違ないであらう」(P. 388) と書いた。この結語は以つてシスモンディと比較すべきものではあるまいか。

然らばシスモンディは之に對して如何なる見解を抱いてゐたかと言ふに、暫く彼自身の言葉によつてみるならばかうである。「各々の新生產物は最後にはある新らしい消費を招かねばならない。然し吾人をしてあるがまゝに事物を檢討せしめよ。吾人をして時間と空間の抽象をなす習慣から擺脫せしめよ。吾人をして社會的機構の故障と軋轢に就いて幾分なりとも考慮せしめよ。然らば何を吾人は知るか。機械の直接的結果は勞働者の或者を解傭せしめ、他人との競爭を激しくし、すべての者の賃金を引下げるのである。この結果は消費の低減となり需要の沈滯となる。常に便益あるのではなく、機械の採用が收入增加の後に於て、而してその結果解傭された人々に新らしい仕事を與へる可能性が與へられた後に於いて爲さるゝ場合のみ、機械は有用な諸結果を齎すのである。人が他に傭はれ得る事が出來れば、何人も人間に代ふるに機械を以つてする利益を否定せぬであらう」と。(註一)

シスモンディはかくの如く一般的、社會的顧慮なき機械の使用は必然に勞働失業を惹起する事を强調したが、更に彼は解傭から逐ひ出されない勞働者も機械の使用によつて極限られた利益をしか得られない事をも指摘して正統派の人々と著しく異つた見解を示した。即ち「閑暇の獲得」に關する見解が之れである。抑々正統派の人々に取つては、勞働者及び一般消費者は生產上の諸改良によつて只生產物の價額の下落といふ事のみに於いて利すれば足りると考へて居つた。從つて勞働者は何程機械の利用が行はれても、その結果彼の消費物の質なり價額の點で報ゐられねば何等その機械の利用の結果に與ることがないといふ結論に達するのであつた。然るにシスモンディは機械の採用及改良によりて勞働者は不用となつた時間だけ短縮して貰はねばならぬと考へ、機械の採用の結果「少く働き多く支拂へ」といふ近世勞働組合のあるものの主張の先驅を爲したといふ事は又特筆すべき點であらう。(註二)

(註一) Gide. P. 213. (Eng. trans. PP. 180 81)

(註二) Gide. P. 215. (Eng. trans. P. 182)

次に彼が正統派的見解に抗した點は、經濟上の競爭に就いて

である。即ち先づ限りなき經濟上の競爭は前述した生産過剩を來たす點に於いて競爭を排し、次には競爭の必然的結果であり手段である生産費の切りつめが如何に生産界の人々に影響するか――殊に最下級の生産者即ち勞働者階級に影響するかといふ點を考究して、マルクス流の科學的檢討を欠ぐも實に一個の搾取觀を示したのである、彼思惟らく競爭に當面して最も普通に行はるゝ手段たる生産費經濟は單に原料の經濟に止まらず、必ず人的經濟にも及ぶものである。玆に所謂高價な成人勞働者よりも低廉な婦人幼年者の勞働力が多く用ひらるゝ傾向を産み、更に又一般勞働時間の延長(勿論適當なる賃金の增加を作はざる)が出現するのであると、かくては彼は「勞働者の搾取」une spoliation de l'ouvrier なる觀念を組立てたのである。曰く、「企業家の利潤は或る場合には彼の雇つてゐる勞働者の搾取に他ならない事がある。蓋し利潤は産業が生産費以上のものを生産したから生れたのではなく、勞働者の勞作に充分な報酬を與へないことによつて生れたのである。かくの如き産業は一個の社會的害惡である」と 註)

(註) Nouv. princ., t. 1. p. 92 (ido. ibid. p. 216)

此處に「搾取」なる觀念が組立てられたが、之とほゞ同じ言葉で而も其の意義の異なれるものが、よく識られてゐる樣にサン・シモン主義者(サン・シモンと嚴格には區別する事が必要である)――殊にバザアル、及び科學的社會主義の父マルクスによつて用ゐられた。今簡單にその三者の相異點を述べておく事が必要であらうと思ふ。先づシスモンディは後に詳述する樣に勞働者が相當な生活をなすに充分でない賃金しか與へられない場合にのみ、搾取」spoliation なる言葉が用ゐられるのであるが、サン・シモン主義者のはさうではなくて「搾取 exploitation は現存社會秩序、就中私有財産制に固有なる一缺陷であるとし、シスモンディの言ふ如くに、搾取が行はるゝ産業と行はれない産業とあるのではなくて全私有財産制の所産である不勞所得なのである。從つて勞働する者は獨り筋肉勞働者のみならず、資本家たる私有財産所有者から必要な資金の供給を受けて仕事をしてゐる企業家も其の勞働によつて生ずるもの、を搾取されて居ると考へてゐた。今バザアルの言葉を引用すればからである。「今日勞働者の大衆は財産を利用する人々によつて搾取されてゐる。産業の將師達もこの財産所有者との關係に於ては、只少し程度は低いが同樣な取扱ひに從はねばならない。然し彼等(筆者註―産業の將師即ち、企業家の事)は、その搾取の全負擔を勞働者階級即ち勞働者の大群に轉嫁する事によつて、屢々搾取者の特權に參加する」(Bazard, Exposition de la Doctorine de Saint-Simon p. 176)然るにカール・マルクスに從へば、勞働の生産物が社會諸制度或は交換を通して資本への報酬となればいつでも搾取(Ausbeutung)が行はれるといふのである。畢竟彼の余剩價値學説を知る事なく彼の搾取を理解する事は不可能である。

更に又彼は書いてゐる。「吾人は、現代社會が無産階級の勞作への報酬を切りつめ retranche てゐる事によつて、その無産階級に依存してゐると云ひ得る」(註一)と。畢竟するに彼の

「勞働者の搾取」は前述註記に述べた樣に、勞働者が充分に支拂はれない場合に——それはこの引用によつても理解し得る如くに現代社會の一大社會事實である——起る所のものであつて、かうした考察を以てすれば、充分に支拂はれゝば、假令財産所有者や資本所有者が社會的生産の一部分を取り入れてもその事自體は、不正でも何んでもないといふことになる。彼も亦「すべての人々の生命に供給した後に於いて。餘剩あればそれは富裕者の收入を形成するのである」(註二)と書いてゐる所を以ても明かであらう。

(註一) Sismondi, Études sur l'Économie politique, t. 1, p. 35

(註二) Sismondi, op. cit., t. 1, p. 273

かくて彼は競爭——經濟界に於ける自然的鬪爭を排し、正統派流の自由放任主義に抗し干渉主義を採つたが、その實際上の主張に就いては後段に於いて彼の政策論中に述ぶるであらう。

四、資本集積及集中論及階級分裂論

「社會主義的な結論こそ下して居らぬとは雖も、シスモンディの議論は屢々マルクス自身のそれの趣を示してゐる。而して勞働の搾取に關する彼の思想は疑ひもなく社會主義的批判に影響したのである」(註一)とヘネエは書いてゐるが、私の見る所を以てすれば彼の社會思想の社會主義的に價値ある部分は寧ろ勞働の搾取、不拂勞働の存在等を人道的口吻を以て指摘した所よりも、寧ろ彼が産業革命以後殊に其の勢を増した有産階級と無産階級の分離の説明である。又同時に資本の集積及集中的傾向を論定した點である。即ち、「吾人は、未だ經驗した事のない全然新らしい狀態の下に生活してゐる。すべての財産は各種の勞働から引き離されてゆく傾向にある。……其處に危險の徴がある」(C'est là où je signale un danger)」(註二)と先づ書いて道具と人間勞働——換言すれば資本と勞働との背反的分裂を擧げて危機の徴が來たと言つたのである。今彼に從つて暫らくその所謂資本集積集中論と階級分裂論をうかゞふであらう。

(註一) Haney, ibid. p. 411

(註二) Nouv. Princ. t. II. p. 434. (Gide p. 220

先づ彼は資本と勞働の背反的分離の結果は、明らかに富裕な所有階級と貧困な無所有階級の分裂であるとする。而してこの分裂を促進したものは既に述べた自由競爭であるとしたのである。曰く、「競爭によつてこの一般的鬪爭の眞只中に創造され、この社會の裡に存してゐる一の根本的變化がある……それは人類の中に無産階級(プロレテエル)——ローマの言葉から借りたこの言葉はそれほど古いが、それ等の人々は全く新らしい——が生じたとい

ふ事である」と（註一）而してこの有產階級と無產階級の分裂は他面に於いて資本の集積及集中的傾向に從つて漸次その中間階級を減して行つて、截然二つの大なる陣營の對立を形作つてゆくのであると彼は考へたのである。我々は今やその現實に當面してゐるのであるが、彼は既に百年の昔に於いてよく之を看破した。今一八三四年に經濟學月刊評論に發表した彼の文書を顧みて一層其の鋭敏なる洞察に驚嘆せざるを得ない。日く「中間階級は消滅した。小資本家や田舍の小農や、小さな親方や、小製造家や、農村の小商人等は大企業を管理してゐる人々の征服に耐えられなくなつた。社會には大資本家の爲めにも亦その賃金被傭者の爲めにも之れ以上の餘地がない。かくて吾々は、絕對に財產を持つて居らぬ人々から成つてゐる未だ知らざりし一階級の恐ろしい成長を目擊してゐるのである」と。（註二）茲に於て私はかのマルクスが共產黨宣言（一八四八年）に於いて、「從來の小中間階級、即ち小製造家、小商人、小資本家、手工業者、及農夫といふ總て之等の階級は無產階級の中に沈んでゆく。……かくて無產階級は社會のすべての階級より補充せらるゝのである」（註三）と書いた事を想起せざるを得ないのである。

（註一）Etudes, t. I, p. 34

（註二）Revue mensuelle d'Economie politique, 2e vol. 1834 p. 124. (Gide. p 220)

（註三）Marx, Manifest der Kommunistischen Partei. (K. Diehl und Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der Politischen Oekonomie. XII. B. s. 98.)

既に述べた如く、階級分裂、中間階級の消滅、二大陣營の對立といふ現象の半面は即ち資本の著しい一方的集積及集中なのであるが、わがシスモンディは既に之を觀察して次の如くに書いてゐる。「イギリスに於ける三千四百二十五萬エーカーの土地の耕作が一八三一年には百四萬六千九百八十二人の耕作者によつて爲されたのであつたが、今は其の數がずつと減少したと推定されてゐる。すべての小農が勞働者の位置に落ちて行つたのみならず、多數の日傭勞働者が農業勞働を放棄する事を餘儀なくさせられた。……都市の工業は合力の法則を採用し土地兼併の趨勢よりももつと大きな勢を以つて資本が集積されて行つた。……一千磅の資本を持つた製造業はイギリスで先づ消滅した。やがて一萬磅（二十五萬フラン）を以つて仕事をしてゐた人々が小規模だと思はれそして小規模過ぎると考へられる樣になつた。彼等は衰滅してゆきその位置は大企業家によつて取つて代られた。今日では十萬磅で仕事をしてゐる人々は中庸のものと考へられてゐる。そして之等も百萬磅の資本を持つた製造業との競走に當面せねばならぬ時も遠き日ではなからう。……」註）然し乍ら彼の資本集積及集中論にはかのマルクスのそれに見

らるゝ如き、價値學說や復生產學說や資本構成に關する科學的研究といふものを欠くが故に、單なる事實の誤まらざる發見に止まつたに過ぎなかつたが、滔々たる正統派旺盛の時代に、よく此の事實を發見したといふ事だけでも充分特記に値するであらう。

（註）Nouv. Princ. t. II. p. 174.

以上は主として所有と勞働、資本と勞働の背反的分裂、階級對立に關して彼の述べたところを觀つたのであるが、彼は更にこの資本と勞働の背反的分裂の事實から（或はこの事實を更に確かめる爲めに）二個の系論を導き出した。一は則ち人口理論であり、二は總生產純生產說である。

シスモンディが如何に人口問題を重要視したかは、單に彼の主著たる「新經濟學原理」が、「富と人口との關係」といふ別名を有つて居る事からでも知り得ることではあるが、彼が人間の物質的福祉を常に念頭に置き社會の富と人口との比例に如何に注目して居つたかに就いて前述した所によつても諒るであらう。（本稿、第二、彼の經濟學の出發點、正統派との關係參照）（註一）

近代の大資本產業以前の工人は、經濟的に獨立し自分自ら自分の全生活を規定してゐたからこの點に就いては何の問題も起り得なかつたが、勞働力と資本の所有が別個の人格によつて爲さるゝに至つて、勞働力の所有者は自己の生活資源たる收入に就いて何等の決定權をも有つ事が出來なくなつたので、延いて彼の家族迄もの生活が間接なりとも資本所有者たる赤の他人に全然依存してしまふ樣になつた。この點にシスモンディは人口理論の出發點を定めたのであるが、彼の人口理論の唯一の基礎觀念は、たゞ人口は常に收入によつて決定されるものであるといふ觀念に過ぎないのである。（註二）從つて今や勞働者は文字通り無產階級にあるもので、所有してゐるものは只勞働力のみであるが故に、彼の全生活は全然資本家の左右する所となり、やがて彼の家族の負擔力もこの資本家によつて自由に增大減少の出來るものとなつてしまつた。かくて資本家は人口增減の鍵を有つ事になつたのである。彼は云ふ。「そこに勞働の需要增加し、從つて充分な賃金が提供されゝば勞働者は生れ、需要降れば勞働者は減少してゆくであらう」と。（註三）

（註一）新經濟學原理第一卷の冒頭、九頁にはから書いてある。「私は富が人間の物質上の享樂悉くを示すものであるから、之を萬人の福祉に貢獻せしめるには、其の增加が人口の增加に合致し、且つ其分配が極端な危險を以てして初めて動かされ得る割合で、該人口中に行はれるを要する事を……確定するに努めた。私は凡ての者の福祉には、所得が資本と共に增加し、人口が生活所得を超過せず、又生產が生產した資本と、消費した人口に均しく比例して居る事を要する所以を示す心算である」と。Hume: 前掲書 I. 105 大島氏譯書二〇頁）

（註二） 彼は新經濟學原理第一卷二五四頁に、「かくて人口は單に收入に從つてそれ自身を規整するであらう」と。

（註三） Nouv. Princ. t. I. p. 256.

尙又彼はマルサスの人口理論を否定して、人口は土地の生産する生活資料には制限せられないと言ひ、人口は資本家の意のまゝによつて變化するものであるとした。

次に彼が資本と勞働の背反的分裂の論議から導き出したコロラリイは總生産 produit brut と純生産 produit net の理論である。勞働と資本が分裂しない間は、農夫は必要以下に總生産を切詰める必要もなし、事實切詰めもしなかつたが、勞働と資本が別個の人格によつて所有され、資本所有者はその投下した産業より可及的多量の利潤をあげようとかゝるので、勢ひ總生産より、生産費と賣價との開きたる純生産に全注目をそゝぐ事になるのである。農業に於ても工業界と同じく土地資本の集中即ち土地兼併行はれ大地主が續出すると同時に他面に農業者は單なる賃金被傭者に變つてゆくので、この大地主達は專ら純生産、即ち利潤のみに注目する事になり、總生産はこの純生産の考慮の下に左右さるゝ事になつて來たのである。其の一例として彼はかのロマーナ・カムパーニヤの野が如何に荒れはてたかを舉げ、メルカンテイ・デイ・テヌウテ（mercanti di tenute、投資家の名稱）が、この純生産本位の動機にうごかされてロマーナ、カムパーニヤの殖民と耕作を妨げた事を述べた。かくて今やロマーナ、カムパーニヤには昔日の農業の俤もなく只貧しい羊飼にまもられる羊の群を見るばかりとなつたと。之れ彼の總生産及純生産の理論であるが、要するに利潤本位の經濟現象をとつて批議したに過ぎないので、オウエンの利潤排斥の聲に髣髴たるものがあるではないか。

五、結論

以上に於いて彼が經濟學者として、如何に眞面目に事實を認識したかを述べたが、その文書の中には餘りにその事實のいたましさに感激し過ぎてその冷靜を失ひ、論理の正確を失ひ、誇張さへも示した個處もないではない。然し度々繰返す事ではあるが、一方に正統派の勢旺盛なる時、常に彼等の理論附けを斥けて、鋭い事實の觀察を爲しつゞけた事には多大の敬意をはらはざるを得ない。然らば、彼は此の事實の認識の上に立つて、積極的に如何なる方策を樹立し唱道したか。即ち彼の「如何になすべきか」に想到する時、私は當時の眼を以つては敬ふが、今日の眼を以つてしてはいさゝかその方策樹立の根本に於いて異議を持たざるを得ない。然し今私は玆でその異議を展開して彼を批判しやうとは思はぬ。只彼が折角の事實の認識の上に立

つて時流に溺れなかつたに拘らず、その事實の科學的研究を缺いたが故にさて積極的方策を樹つるとなつて、その根本觀念を誤つたかの如くに考へらるゝ點を述べて置くに止まるであらう。この點に就いて私は實にマルクスを偉くも思ひ起さゞるを得ないのである。

扨て彼の唱へた事實上の諸方策とは何であつたか。既に述べた如く彼は當時正統派の主張した自由放任の政策の結果如何に社會的弊害が多いかを見出した。かくて彼は個人の尊重にはじまる自由放任に代るに社會全般の福祉を目的とする干渉を主張した。即ちあるがまゝにせずして、一定の計畫の下に干渉規整してゆかうとしたのである。その一定の計畫、而してその計畫を導いた根本觀念を樹立するに當つて、幸か不幸か社會主義の範疇を脱してしまつたのである。此の點は深く考へさせられる點であらうと思ふ。

既に述べた如く、彼は生産界の調和といふ事を主たる着眼點としたが故に、この調和を破ぶるが如き方策を全く排し、生産と其の需要との一致を最高原理であると考へ、生産界の不調和によつて生ずる一切の社會的弊害を救濟せんと計畫したのである。かくて彼は先づ資本と勞働の可及的近接一體を目標として自作農の復活を企圖し、小規模工業を主張し、勞働の資本參畫を唱導した。ジイド共働者シャール・リストが書いてゐる樣に「彼が今日生きて居つたなら彼は協同組合の熱心な戰士となつたであらう」（註一）彼は更に發明がともすると無方策な生産發展を來す一因であるとの理由を以つて適當の制限を加へんとし、又近代大規模工業に於ける勞働者の狀態を救ふ爲めに「職業保證」garantie professionnelle と呼ぶ雇主責任を主張して勞働者の不慮の災害、疾病、老年等に對して雇主の費用を以つて其の生活を保證すべしとした。此の他勞働時間の制限、幼年勞働の制限を唱へ、剩さへ勞働者の團結權の認容をさへ主張したのである。（註二）

かくて彼は一個の社會改良家、或種の經濟的リベラリストとなり了つた。然し乍ら之等の實際的方策の項目内容を見て正に百年前の主張である事を考へる時、彼も亦立派な先驅者であつたと首肯されるのである。

今は彼の教説が如何にして何誰の學者に影響して行つたかと云ふ事や、彼の流派を汲むだ人々に迄論及するのは避けておかう。（註三）只幾度も言ふ事ながら、彼が時流に溺れず正しく強く事實をみつめて行つた姿を實に偉く思ふばかりである。この故にこそ彼の經濟學原理に「新」を冠したことが肯かれその強さに打たれるのである。これを思ふと當今いたづらに「新……」

を言ふ論者學者著述家に一考をわづらはしたいと思ふ。

（註一） Gide, ibid, p. 229

（註二） Gide. ibid, p. 229—30 Haney, ibid., p. 310

（註三） 之等に就いては Gide, ibid, pp 232—34 Haney, ibid., pp. 311—12. を參照されたい。

扨て私はこの稿を終るに際しふと事實の正しい認識といふ事から、今は亡きグラスゴオ大學のウイリアム・スマート博士が、グラスゴオからオクスフオードのラスキン・カレッヂに勞働者を依託研究せしめた時の一挿話を思ひ起したのである。博士はこのラスキン・カレッヂの視察報告を受取るや、直ちに報告者に書いて曰く「私は我々の學生に關するかうしたよい報告を聞くことは喜びに耐えない。私は貴方が彼（學生）にプロパガンダではなく事實に自分自身を精進する必要 the necessity of devoting himself, not to propagandas but to facts. をようくいひ聞かして下さる事を望みます」と。事實に對する正しい認識――何時の世の社會思想も之を根基としてこそ價値がある。只いつも恐るゝ事はこの正しい認識がともすると或種の先入觀念で洗はれる事である。私は偉大な先驅者シスモンデイを檢べ終るに際しこの感を特に深くした事である。終りにこの稿を草するに當つて其の著書によつて豐富な資料を供して呉れたシヤール・ジイド教授、シヤール・リスト教授、ハネエ教授に深く感謝を捧げる。

（一九二四・九・八日。自分の誕生日）（完）

旅行者の觀たる地方文化

永井柳太郎

一、南から來た民族

生物學者は、人類の起源を想像して、我等に敎へて曰ふ。太陽と同じ熱球であつた地球表面が徐々に冷却し、岩石層を以て蔽

ふた時に、洪雨が降りしきつて岩石を打碎き、處々に水溜りを生じた。それが後に河沼湖海を成したのだが、其處に不思議にも生物を生じた。それが最初は暫く目的無しに浮游して居る中、軈て植物と化して根を土壤に托し、一處に定着した。他は尙ほ浮游生活を續けて居たが、軈て海月類の動物と爲り、獸類の無脊椎動物と爲り、蛙の如き兩棲動物となつた。植物は水中に充ちて此上繁殖の餘地無きに至り、陸上生活に適應すべき發達を遂げ、種子を地球の全表面に飛散して、到る處榛莽を以て蔽ふに至つた。兩棲動物は其間から蜥蜴の如き爬蟲類を生じ、それが樹上に攀登するに至り、枝より枝に飛び移る必要を感じて、次第に羽翼を生じ、軈て鳥類と化成した。其間に爬蟲類は、行動の不自由を感ずる程に巨大な體軀に發達した事が却て累を爲して、其還境に順應し兼ね、忽然として此世より死滅し去つた。其中又卵生動物から種の繁殖の安全の爲に胎生動物が現れ、哺乳類を生ずるに至り、更に猿猴類から理性を用ふる高等動物人間が來た。初めは單に危險の信號に過ぎなかつた叫聲は、何時しか思想感情を傳ふる言語と化し、茲に吾人々間が發生したと。若し之を然りとするならば、人類發祥の地は、何んぞ必ずしもチグリス、ユーフラテスの流域を選ばん又何んぞ必ずしもナイルの河畔を選ばう。又何んぞ必ずしもイランの高原を選ば

ん。如上の條件に副ふ地球の表面でさへあるならば、何處にでも、人類は發生し、其還境に順應して、特殊の發達をなし得る道理である。だから本居宣長翁の天孫高天原降臨說も絕對に根據なきものとして、一槪に非難すべきでもあるまいけれど、事實に於て、日本國民族は元から日本の國土に發生した民族でなく、大風と海潮とに乘じて移住し來れる民族であると云ふ學說に裏書する徵證は、吾人の旅行中にさへ、常々發見する所である。

我國の神代に於て裝飾に用ひられた管玉、勾玉の類は青玉だが、それは我國產で無い。それは崑崙山に生ずる琅玕製であつて、唐虞時代から北支那より我國に渡來したものではないか。又備前、美作の境から發掘された陶棺は、三千年前の巴比倫の古制に成るものだとも傳へらるゝ。其他石鏃、石斧の類が東北地方から中國に掛けて多く發見されるが、是は又日本海の對岸なる肅愼族等の用ひたものと共通だとの事である。是等の事實に依つても、我國には太古悠遠の時代から、既に遠來の移住民があつたので、我國に特生した民族であつたと云ふべからざると共に、其所謂天孫民族として現存する吾人に就て見るも、其體質、骨格、容貌、態度、風俗、習慣、皆對岸大陸の南北孰れかに系統を有するを認め得るのである。

、我國は廣闊たる極東の一小島ではあるけれども元と是れ島國の常として、地勢平衍を缺き、山河自然の險は自ら交通の便を妨げたるのみならず、封建割據の世となつては、各々の藩境を固めて相敵視し、故らに往來を不便ならしめて居たから、住民移動は甚だ少く、從つて神武創業以來約三千年の長歳月を經たとはいつても、比較的人種の混淆少く、諸國民の淵叢たる三都は除外として、其他には用語、發音、風俗習慣と共に、又國有の體質、骨格、容貌、態度をも大凡そ保存し得て失はないものがある。勿論王政維新以來、藩を廢して縣を置き、國家は完全に統一され、從つて山河自然の要害を利用する必要は去り、峻きは削げ凹きは埋め、道路は續々開通され、陸には汽車を走らせ、水には汽船を浮べて交通運輸の便は全く舊觀を改めたけれども、尙ほ僅に五六十年を經過したに過ぎぬ。自後百年二百年の後は期すべからざるも、現在に於てはまだ、住民の移動が左程に甚しからず、昔乍らの其分布觀が窺はれ得るやうに思ふ。

私は人種學の專門家でない。從て私は、何等の科學的精確を以て之を語る準備を持たぬけれども、之を旅行の瞬目に徵して直覺するに、身を西行の汽車に托して東京驛より東海道を行けば、普通に滿韓型と稱する身幹高くして細面に、白皙の皮膚を有し擧止氣雅にして上品なる者は次第に少く、身幹左迄に長大ならずして、胸廣く、首短くして太く、顔は圓きも角立ちたるもあれど、一樣に顴骨秀でて、平面に低き鼻の開きて觸れる者の多きを見る。是は所謂馬來種と見るべく、これが京阪地方に至ると著しく色彩を異にし　多分滿韓型を混ずる樣に感ずるが、それから中國を經、四國に渡ると、此處には光景一變猪頸に胸幅廣く、顏面角立ちて頗る逞しく、眼は水平に大きく開き、鼻は低く斯る底の人々を多數に見掛けるのである。更に九州に踏み入ると、尙ほ此馬來型に固有の蒙古型を加へたとでもいふか、扁平な顏面に扁平の鼻、大きな口、斜眼にして顴骨秀で、狀貌魁偉の奇い體質の人が、更に多く見受けられる。勿論九州といつても、場所に由つては多少の例外がある。豐後の大分邊になると頗る白面油滑の顏面の多きを見受ければ、長崎に至ると全然異邦に入るが如く、又も滿韓型の顏骨秀でずして柔かな曲線を持つた、瓜核顏の色頗る白く、襟足の長く、且つ美しき優雅な體質を多く見受ける。

史學者の研究に依れば、我國の民族は大凡は之を南北の兩種に分つべく、其南種といふは、朝鮮の南端洛東江口から對馬を經て我筑肥邊に來る蒙古人や、滿、韓人や、中央亞細亞から黃河流域に移住した北支那人や、臺灣琉球を經て我薩摩邊に來たれる馬來人や、若しくは揚子江流域に占據する苗人等を指すもの

で北種といふのは日本海を渡つて直に來るか若しくは韃靼海峽を越し樺太、北海道を經て南下したる直人、沃沮人、肅愼人等を指す。故に、私の前に語る人々は皆是れ南種に屬することと言ふ迄も無い。南種人は黄河流域の北支那蒙古滿韓等から筑前に來るを以て本道としたが、更に韓人は、其東海岸より直ちに日本海を横斷して出雲に來た。是は素戔嗚尊の海原を治め、牛頭山、熊成峯等に赴いた通路であつて、此の往來も頗る盛んではあつたが、これは本道で無く寧ろ裏道である。我天孫民族は南種に屬する遠來人であつたに相違無い。薩摩には山祇家があつて吾田を本據とし筑前には海神家があつて那の津を本據とし共に海上權を握つて、勢威隆々たるものあり、天孫家は代々是と婚嫁を通じ、其助を借りて國家の統一を謀つた。即ち瓊々杵尊が山祇家の女木花開耶姫を娶つて火闌命、彦火々出見尊を産めば、其彦火々出見尊は海神家の女、豐玉姫を娶つて鵜草不葺合尊を産んだ如きがそれである。今日の語を以て言はゞ一つの政治結婚とも見るべく其兩家の有する偉大なる勢力を利用する事が、夫の建國の鴻業に大なる助となつたに相違ない。今尚ほ海神社の連綿として存する所は筑前、壹岐、對馬、隱岐、佐渡、播磨、紀伊等の諸國で熊野以東には海神社無しといひ又山祇社の存する所は伯耆薩摩、伊豫等から東の方伊豆、甲斐、駿河迄も及んで居るといへば、以て兩家勢力の分布如何を概知するに足ると思ふ。

二、北から來た民族

素戔嗚尊が簸ノ川上で退治した高志八岐大蛇といふは、越人が次第に侵略の手を西に擴げて簸ノ川上の八つの峽谷に盤據し八人の酋長があつて各々部下を率ゐ、其峽谷を支配して居た。それを指すものであるといふが此說信を措くべく、此種族は北韓の濊種族の今の咸鏡道あたりに居たものが、日本海を越して來たものである。それに因つて「こし」の名を得たとも傳へらるゝ。それよりは遥に北の方、今の露領沿海洲なる肅愼族も矢張り日本海を越えて越地方に來た事は古史に散見する所で、欽明帝の朝にも肅愼人が佐渡の外海府に來り住み、毒水に中てられて死滅した事が今尚ほ其地の口碑に殘り「片瀨、鹿ノ浦、中の水飲むな、毒が流るゝ日に三度」の俗謠と共に傳へられても居る。佐渡人はラ行ダ行の發音混淆して反對になり「佐渡」を「サロ」といふかと聞けば「論語讀みの論語知らず」を「ドンゴヨミノドンゴシラズ」と發音するが、それが出雲にも共通だと思へば雲州人は「ヒ」を「フ」、「ソ」を「オ」といふが如く、發音に夥多しき轉訛がある。例令ば俗謠を歌ふに「私しや

雲州平田の生れ」を「ソクシヤオンスソノラクノオマレ」と發音する。斯うした轉訛が又日本海岸、越後から出羽邊に迄も擴がつて居るといふから、其處に何となく人種の共通性が現れて居る樣に想ふ。

此北陸に居る外來民を延喜の頃迄一括して北狄と言つて居た。それから富士の裾野の甲斐の御坂から足柄、箱根を經、伊豆天城に連る山々を一系の山脈と見て、其東を阪東と稱し、其處に居る種族を東夷と名けた。而して九州の肥、薩、隅に居る熊襲族をば西蠻と稱し、尙ほ奥州邊に居る者を特に蝦夷といひ、出羽邊に居る者を蝦狄といつて語り分けたが、此蝦夷中には日の本、唐子、渡り黨の三種屬が雜居し後漸く北境に退轉して遠く樺太に入つた。今いふカムチヤータル、ゴリヤークの二種屬は即ち日の本、唐子等に當り、渡り黨はアイヌであるらしい。

此アイヌ族は北方から來た者で無く、原住地は馬來諸島の中に在り、バブア族と呼ばれて臺灣の生蕃と同種である。即ち臺灣生蕃の髑髏祭の變形が、アイヌの熊祭だともいはれ、黑潮を追うて共に東下する中、其一部を臺灣に殘して遙に北進し、我關東奥州邊に上陸した。それがアイヌと呼ばれたものといふ。薩摩隼人は禁裏の門衞に召され、狗吠の擬聲を以て奉仕したと云ふが、蝦夷もそれと同じく、多くは武將等の從僕に召仕はれたのであつた。彼の安部宗任の源義家に仕へた如きが其一例である。是れ彼が伴はれて京に上るや、多くの殿上人から侮蔑の料に供せられた所以である。併し彼等の中にも豪族の名を得た者は往々にして婚嫁を內地人と通じた。即ち平將門を討伐した田原藤太秀郷の末孫と稱する奥州の藤原氏は、經淸の時に蝦夷の酋長安部賴時の女を娶り、其間に淸衡を生めば、淸衡の子の基衡は宗任の女を娶り、秀衡を生んだ。而して義經を庇護した爲に賴朝に忌まれ、其子泰衡に至つて遂に其討伐を受け、空しく憑弔の客をして平泉の古館址に、三代榮華の夢の跡を仰いで暗淚を催さしめるが、而かも左樣な金碧燦爛の豪奢振を誇つた彼でさへ、其鎭守府將軍に任ぜらるゝや、右大臣兼實は、其玉葉に「奥州夷狄秀平鎭守府將軍に任ず、亂世の基なり」と記し陸奥守に任ぜらるゝや「天下之恥何事か之に如かんや、悲むべし〳〵」と歎じて居る。是は秀衡が黃金を以て顯職を買取つたものと見ての浩歎なのだが、其賤まるゝ事此の如きは、彼が夷酋と婚嫁と通じて自ら夷酋となり下つたからである。併し之を以て見ても、當年の蝦夷人等が如何に富強を當時に誇つたかの迹が窺ひ知られる。瀬戸內海に上中下の三關あるは、これは中國四國の海賊に備へたものだが、陸地に三關あるは是れ主として蝦夷に備へたものだ。即ち大寶令に伊勢には鈴鹿、美濃には不

破、越前には愛發の三關を置くとあり、それをば奈良朝終つて平安朝に入るや、近江の逢坂に關を設けて伊勢の鈴鹿に代へたといふが此三關である。近江は本州の中部の最低地なるが故に琵琶湖があり、若狹より伊勢の內灣に達する所本島中最も狹き所であるから自ら本島の頸部の觀を呈して居るので、之を中心として南北日本を分つ事も出來る。此處に三關を設けて蝦賊に備へるを見ば、則ち當時の蝦夷が殆ど其勢力本島を二分して其一を支配するの概あつた事を想察せしむるに足るではないか。其後二百年醍醐帝の昌泰二年に至つて、更に上野の碓氷と相模の箱根との兩處に關を設くる事となり、關東二十八ヶ國の稱がそれから關東八ヶ國の稱と變るに至つた。其處に蝦夷勢力の消長の迹を徵すべきである。之を想はゞ今蝦夷の名亡びて本島に無しといつても、其雜婚の結果多くの血を遺し去つた事も大凡推定し得て誤り無からう。

上野驛を去つて奥羽線、若しくは常磐線に搭乘する者は、語音の著しく關西と異なり、尻上りの調子に鼻音を帶び、それが北に進むに從つて益々甚しく白河關を超ゆれば、更に濃厚となり、郡山若しくは福島より分れて、若松より越後境に入るも、米澤を經て山形に至り、一轉して庄內方面に入るも、更に進んで秋田、弘前、青森に入るも、又幹線を直往して仙臺、盛岡に入り青森に合するも、鼻音は一層濃厚となり、關西語民、即ち九州、四國、中國、五畿內迄の澄める發音の持主をして啞然として之を耳にせしむれば、濁音聞くに堪へざるものあらしめる。それと同時に語音に轉訛の多い事も亦甚しい。宇都宮は日光が一ノ宮である爲に名を得たもの、即ち「イチノミヤ」の轉訛、鬼怒川は毛ノ國の川なる故に名を得たもので、「ケノカハ」と呼ばるべきものゝ轉訛といふが、それを振出しとして、北進の一歩々々に發音の訛は益々甚しく、喉頭、鼻腔に詰つて其音滑かなるを得ぬ。故大隈侯が鈴木萬次郎氏を伴ひ、鐵路仙臺を過ぐるや、驛に鮨と饅頭を賣る聲がした。侯は之を耳にした時、鈴木萬次郎氏を顧み揶揄して曰ふ「それ、誰か君を喚ぶよ」と。鈴木氏驚き、首を窓外に出せど人無し。唯「スヽニマンズー」の聲あるのみであつたとて、長く一笑話となつて居る。或人は此種の發音は氣候の寒冷のためだといふが、寒國の人必ずしも皆然るにあらず、私は別に原因があると思ふ。それは即ち人種の關係によるのである。

北陸一帶、出羽、奥州に跨つて、凡そ寒潮の岸を洗ふ所は大人系とも稱せられ、其冬の兎の細目たるが如く、雪白の肌に滿韓型の妙婷とした優雅の體質を包む者を多く認めるが、併し武藏、房總、両毛から中央山系を右に沿うて北進するに從ひ、其

間に、幅韓比較的短少に、而かも骨格逞しく、毛は濃く、額は秀で、眼は圓くして窪み、睫は長く鼻は直く、總體毛深い特徴ある事に出會ふ事を少しとせぬ。獨人ベルツ博士に依ると、此等の諸點はアイヌ人の特徴とする所であると云ふが、此等の特徴の全部を備へて居る者はなしとするも、多少混和して類型化して居るものが少くないと思ふ。固より今後交通機關の發達、國民移動の頻繁、婚嫁の自由に行はるゝに從ふて、何時かは凡てを化して一種族と爲し、一血塊となし、其間に差異の復た見るべきものなきに至るやも知らぬけれども、今日の儘では、未だ地方文化に種族的色彩なしと云ふことは出來ない。

三、裏日本と表日本

船を浪邪の東に放ち、遙に海上に浮ぶれば、水天相接する處縹渺として三山を望む、是が所謂る徐福が往年始皇に教へて蓬萊、方丈、瀛洲の三神山と說いた所の者、方丈、瀛洲は四國、九州の山々であつて、蓬萊こそ本島の富士山を指稱したものと知られるが、富士が航海者の目標となり、其處に如何にも不老不死の仙藥でも有り相に見える。晴れ〳〵しい氣分に滿つる表日本の太平洋岸は、屈曲多くして一千三百十一里の海岸線を算するに、下ノ關海峽より津輕海峽迄連亘する一大山派に依つて剖せらるゝ裏日本の日本海岸は、屈曲甚だ少くして六百五十一里の海岸線を有するに過ぎない。それ故古代に對岸大陸即ち朝鮮の東岸から、露領の沿海洲に亘る地方との往來の歷史を持つとはいつても、良港灣に乏しく、僅に濱田、萩、舞鶴、宮津、敦賀、阪井、金石、七尾、伏木、直江津、新潟、酒田、能代等を數ふる程に過ぎないから、表日本程に海の恩愛に浴する事少く、加ふるに一帶の中央山派が餘りに高峻であつて、鳥のみ僅に越ゆる底の天險に富み、射す日の影も薄い所から、何となく表日本の陽の國であるに對して裏日本は陰の國の如く、如何にも天女の舞ひ遊ぶ三保松原の羽衣の松が表日本の代表的の傳說ならば、「丹波、丹後の境なる鬼ヶ城は程近し」と謠曲に歌はるゝ大江山の酒呑童兒が裏日本の代表的傳說と言はまほしい程に前者の氣分の快活なるに引き換へて後者のそれは甚だしく幽欝である。それだけ、裏日本の文化は表日本の文化よりも後れて居り、それが自ら人心を支配してか、裏日本には古來卓犖の質有爲の才、必ずしも之を乏しとせざるも、何處かに孤峭狷介の氣を藏し、表日本の產する如き雄偉豪宕、天空海濶の氣魄に富む大人物に乏しい。尼子、山名、朝倉、柴田、富樫、佐々、城、最上、秋田等の諸氏は各々雄を一方に稱し、歷史に片影を留むと雖も、能く表日本の產する様な平淸盛、源賴朝、足利尊氏、

織田信長、豐臣秀吉、德川家康といふが如き人物とは固より其規模を異にする。中に僅に一上杉謙信があつて、遙に三國領を越て關東平野に現れ、關山を橫りて川中島の平原に攻め入り、單騎敵陣を斫つて甲斐の武田と雌雄を角し、更に西の方兵を能越に用ゐて、七尾城外の月を賞し、織田信長の氣膽を寒からしめて居るが、而かも其志遂に中原に伸ぶるに至らずして殂落した。彼をして今少し天壽を長からしめばとの憾は遺るが、而かも此の如きは、單に人物の勝劣、器の大小に因るばかりで無く、峻嶺東西を劃る其天險が志を恣にする能はざらしめたのである。勿論個人としては勇敢なる冒險者も居た。反抗心に富む熱血兒も居た。恰も天水一碧の遙かな水平線下に如何なる國や潜むと、一葉の扁舟に掉して遠洋に漕ぎ出す原人のあつたと同樣に、崢嶸たる高山脈の彼方には如何なる仙境や在る、嵯峨たる崎岩の頂には如何なる眺望や開けると、法螺、錫杖に道を戒めて、深山幽溪の奧又奧へと分け入つた勇者は、決して少くなかつた。彼の愛宕、高尾の峯續き、貴船、鞍馬、比良の山嶽から、伯耆の大山、加賀の白山、扨は羽前の羽黑山、陸奧の恐山迄も今見る臺灣の生蕃のそれの如く、峯又峯と峯傳へに遍歷する所謂る峯入行者もあつたには相違ないが、而かも天險は依然として天險であつて、以て大規模の行陣を爲すに適せねば如何なる野心に滿ちた英雄も終に能く之を超えて志を中原に伸ぶる事は出來なかつた。それ故古來虎と見られた英雄は、之を中原に放たずして、裏日本に幽閉する事が、覇者に由つて試みられた慣用手段であつた。豐臣秀吉が野心に滿つる蒲生氏郷を會津に封じ氏郷は爲に泣いたと傳へられ、又上杉景勝の富强を制すべく擬いて越後を奪つたが、之を移封するに同じく會津を選んだもそれである。德川家康が更に關ヶ原の役後彼を米澤に移したのは一層其心理を鮮明ならしめて居る。又家康が前田利家を加賀の百萬石に封じたのも全く同一用意に出た事は、今や世人周知の事で、地勢が昔の愛發關の彼方なる裏日本の狹長な別天地であればこそ、彼は安んじて百萬石を利家に與へたのである。此形勢は長く王政維新の際迄も其人心を支配し、裏日本に封鎖せられた諸藩中には、一として中央を左右し得る者無く、僅に越後の長岡、羽前の庄內の二藩があつて、會津に味方し、幕末史棹尾の悲劇を彩りたりと雖ども、共に機宜を失して爾來久しく明治政界の落伍者となり了つた事は同一である。

四、南日本と北日本

次に見方を變へて、昔の愛發、不破、鈴鹿の三關を連ねる境界線を畫き、北日本と南日本とを比較せんか、所謂る關東十

六ケ國と呼ばれた昔の北日本は、恰も裏日本と表日本との比較に於て前者が非文明國、後者が文明國の觀ある如く、何となく痛憤、靺鞨の風が吹き荒ぶやうに感ぜられ、之を明るい南日本に比べると、後者の文明國なるに反し、前者は何となく非文明國なる餘臭の存した。源頼朝が覇府を鎌倉に開いて以來、其形勢に漸次の變化があつたに相違無いけれども、皇居は京都を離れず、文明の中心は依然京都に留つた。況んや足利尊氏に至るや、其覇業の基礎を輦轂の下に定めて、鎌倉は一關東管領基氏の手に委ねたのだから、關東の文明の上國に立ち後れた事は言ふ迄も無からう。此形勢の一變したのは全く德川家康が覇府を江戸に開き、帝室はあれども無きが如く、敬して遠くる底の態度に出た以來の事で、江戸が更に東京に改まるに及んで、其文明非文明の境界線は遂に東に移り、東京驛と上野驛とを好對照として、明暗の着色に全く一紀元を劃した。即ち東京驛より西に走る汽車內の空氣は明るく、上野驛より東に走る汽車內の空氣は暗い。前者は二等室まで常に滿員の混雜を見るに反し、後者は二等室と雖も寥廓の感あり、僅に三四五六の客を點在するのが常である。加ふるに前者の客種には衣食調度に流行を競ふ紳士令嬢の時勢粧を多く見受けるが、後者にはそれが甚しく減じ、流行を追はぬ素樸な行裝の客が多く、若しそれ三等室に至つては、前者には快暢な若しくは悲傲な表情、それに相應した小綺麗な粉裝をした鯔背（いなせ）な商人風の者多きに反し、後者にはそれが頗る減じて、代りに陰靜な、若しくは鈍重な氣分を包み、それを裏附けるむさぐろしい衣服を纏ふた農民體の者多きを見受ける。一言にして言へば日に向ふ汽車と影に向ふ汽車との差である。之を物質的にいへば、前者は富を感ぜしめ、後者は貧を感ぜしむる。否、單に感ぜしむるのみでは無い。其感ずる事が、又眞實である。

東北には、概して金貸が多い。西南の金融機關は、寧ろ銀行である。金貸の代表的人物としては仙臺の齋藤善右衞門が常に指を折らるゝが、併し此大齋藤を中心としてまだ幾多の小齋藤の所在に散點する事は爭はれぬ。同じ金融機關乍ら金貸業者の華客と銀行業者の華客とでは非常に違ふ。後者は相應に小金の貯蓄ある者、而して何等か生產的事業に從ふ者の金融機關であるが、前者は多く身に寸金無く、利用すべき銀行を持たぬ者、而して日々の炊烟を揚ぐるに窮する者の金融機關である。其處に斯うした差が生ずる。即ち後者の繁榮は直に生產業の繁榮であり、相互の富の增加であるに反して、前者の繁榮は益々生產業の衰退を兆し、一方の富が吸血鬼の肥ゆるが如く膨滿するに引き換へて、他方の生活は益々窮迫し、地獄の攻め苦に細り行く餓鬼

の姿となる。それ故銀行業者の繁榮は祝すべきも、全工業の繁榮は呪ふ可しといつては過ぎるかも知らぬが、兎に角結構な事でない。斯うした對照を劃した原因は抑も何處に在るであらうか。

勿論大都となれば宛も洋海に見る大渦の如く、諸勢力の集注し、合流し、洄流する所であつて、就中政治的大中心たる東京には、西もなければ東も無い、北も無ければ、南もない。薩摩人も、北海道人も、長州人も、青森人も居る。諸地方に於ける諸勢力の持ち寄り場であるからには、之を詳かに地方的色彩を以て分類する事は難い。それと同じく商業的大中心たる大阪にも、加賀人も居れば長州人も居る、江州人も居れば、備前人も居る、肥前人も、土佐人も皆居るといつた樣に、それ等諸地方勢力の一大坩堝であるからには、是れ亦強いて分類立てする事は無効でもあり、無意味でもある。斯うした取除けにあるが、此等を取除けて尚ほ南北日本を比較して見たならば如何なるか。

政治的中心たる東京と、商業的中心たる大阪との、此二大都市が二大明星の如く光輝を四方に放つて居る中間に、實に中京の名に相應しい名古屋があつて、商業的にも、又工業的にも、次第に殷賑を加へ、東西の兩大都市より發する文化の接觸點、調和點として其獨特の光輝を放つて居る。然し、此等の三大都市を除き、琵琶湖を中心と見立てた地形上自然の限定に基く南北日本を比較して見ると、政治的にも、又經濟的にも、南北日本の間に歴然たる相異がある。

史を按ずるに平安朝以後藤原氏の勢力衰へて兵權武門に移つてより、政權も亦自然に之に歸したが、爾來明治の大變革に至る迄、未だ曾て南日本から擡頭して能く天下を一統し、中央の政權を掌握したものは無い、是れ勢の然らしめた所、必ずしも人に由る者では無いか知らぬが、不思議にも覇者の權力を逞うし、天下を挾んで四方に號令した者は、皆北日本の所産であつた。平清盛、源頼朝を初として、源家を笠に陪臣であり乍ら、執權職として天下を我物顔に振舞つた九代の北條氏でも、繼いで興つた足利尊氏でも、織田信長でも、豐臣秀吉でも、最後には徳川家康でも、皆是れ北日本の産出した偉大な人物であつた事は衆目の視る所だ。勿論是等の人々も其志を成するに當つて南日本の勢力を假りた者のあることは事實であるが、併し自ら能く中央に霸權を掌握し得たものは南日本に絶無であつた。固より南日本は人傑を産出するに不適當の地と云ふのではない。之を個々に就いて見れば、山内、細川、少貳、大友、大内、龍造寺、皆是れ一方の豪強で、一時に睥睨したものであつた事は言ふ迄も無く、智者も輩出すれば、勇者も出現した。由來瀬戸内海を中心として、四國中國九州に據り、海賊が猖獗であつた

が、此海賊衆中傑出したものは、能島の村上、それから河野の徒であつたが、此徒は時には細川山名の亂をも助け、毛利、陶の戰にも加はつて互に攻戰すれば、時には内地に志を得ざる無名の英雄を驅り集めて支那沿海から遙に南洋印度を攻略した。斯うした荒業に武を鍛へ馴れた多くの中國武士、四國武士、九州、武士は、勿論勇敢無比であつた事は之を征韓役に於ける彼等の武勳に徵しても知られる事乍ら、併し、是は長い馴練の後であつて、古い昔からの事では無いらしく、昔は關東勢に一籌を輸した時代のあつたことは爭はれない。

それが如何にして明治の政變には、三關守らず、箱根も亦拒み得ず、十八藩同盟の力も宛ら妖颷の前の枯葉の如く、長州武士、薩摩隼人を中心とした南日本勢の太刀風に脆くも散り失せて仕舞つたのか。會津勢執拗ならざるに非ず、庄内勢剛强ならざるに非ず、長岡勢勇奮せざるに非ず、南部勢最後の國境戰に武士の意氣地を示さゞるに非ず。併し乍ら凡てが統一を缺く烏合の衆、滔々洶々長堤の洪水の如き薩長勢には無念の切齒をし乍らも、其前に恥を忍んで降服の已むなきに至つた。家康の用意周到なる南北日本の境目たる琵琶湖畔の要衝には譜第の井伊を封じ、越前には同族の松平を尾張には同族の徳川を封じたのだが、それも甲斐無く薩長に附けば、江戸城を二重にも三重にも固めた甲駿相房武總兩野の諸藩も多くは手答へ無く官兵を迎へて解體し去つた。是は必ずしも家康の用意疎なるではない。上手の手に水の漏る處があつたのでもない。大義名分の上から、薩長の賴る所に利あり、佐幕側には不利な所があつたからで、參河武士の士氣鈍磨も一因ではあらうが、否東北諸藩全般の武備が時勢に副はざるそれもあつたらうが、それ等が必ずしも全體ではあるまい。錦旗に向つて砲火を酬ゆる事が諸藩の統一を破り、全軍の足並をシドロモドロに亂した所以でもある。敗れた所にも日本民族の長所があつたのだ。それはそれとして、此一戰を以て未だ必ずしも南北日本の勇怯を定め、其氣膽の勝劣を判じ難い事は當然乍ら、勝者對敗者の關係は致方無い。勝つた官軍の羽振は强く、敗れた關東勢、就中東北勢は悄を飮んで所有る屈辱の下に忍ばねばならなくなつた。爾來武勇を語れば薩摩の西鄕、長州の大村、土佐の板垣が謳はれて敗者の東北人の名は其聲に全く壓伏された。政界に於ても、二三の中央に出仕し、多少の榮達を見たものはあつても、松梢に花咲く女蘿(のうぜんかづら)の如く、其處まで伸び得たのは自力では無かつた。薩長土肥の孰れかに攀援阿附したものに過ぎなかつた。此に至つて長い千有餘年の歴史を變へて、關西人が中央に翺翔し、政界に、財界に、百腕を揮つて優勝の餘威を誇るに對し、北日本の人々は

一帶に翼を斂めて偏に羨望の眼を光らすばかりとなつた。而して斯くいふ中にも山陰は自ら南日本の除外であつて、裏日本の不利益なる面目を露はし、中央の權力範圍に牛耳を執る仲間には加り得なかつた。日本の政權が南日本に移り、北日本の振はざる所以は他にもあるけれども、主として此に基くのである。而して上野驛と東京驛との建物並びに其乘客の對照が其最も好適の說明者として、吾人に無言の教訓を與へて居る。

五、均衡を求むる振子の動搖

勝つは驕り何時かは氣が弛むが、敗者は戒めて必ず雪辱の爲に報復の日あらんことを期待する。そこで弱者必ず見棄てたものでなく、强者の運命も久しきを保ち難い。長い歷史の一卷を繰り擴げて徐に之を諦觀するに、弱者强者の地位は恰も時計の振子の如く、常にエクイリブリアムを欲して不斷の轉變を續ける。それ故平治の戰に源氏の勢力を掃蕩した筈の平氏は、蛭ケ小島に謫つた賴朝の叛旗に敵し兼ねて、壇ノ浦回に悲慘な最後を遂げたが、其又源氏は三代にして血族續かず、北條氏に實權を奪はれて了つた。諸國の源氏の欝憤は遂に衆望を收めた尊氏を扶けて北條氏を亡した。新田義貞は大義名分に於て誤らぬけれども、素と一介の武辨にして、一族間の德望は遂に尊氏に及ばず、尊氏を奉じて南北朝の爭の後に天下一統の覇業を爲さしめた。其末葉振はず、天下は七花八裂して群雄割據の戰國時代となり、其中から織豐二氏が傑出して遂に天下を掌握したが、すると新に德川家康が、源氏の長者として擡頭し來り、豐臣氏を亡して之に代つた。關ケ原の一戰は實に天下分け目の一大決戰であつたが、それは自ら南北日本の頡抗であつた。石田三成首を梟木に懸けて、大勢一去如何ともすべからず、大阪冬夏二度の戰役に由つて南日本は長く北日本に屈服するの餘儀無きに至つたが、併し後には遂に薩長が南日本の牛耳を執り、土肥が之を助けて、遂に德川氏を積弱の餘に挫き、結果に於て北日本に對する復讐戰を了つた。參河武士の末裔が、金齒銀齒に笄を分ち髮付け油をベタ〱と髮に塗り附け、紫紐を括り、切齒、鍔、目貫に金銀を鏤め、名工の技巧を誇つた朱鞘細身の大小を落差しにして、女たらしに浮身を窶す時に、長州藩士の家では母が其兒を寢かすや、故らに足を江戶に向はせ、「汝必ず成人の後此足を以て關東を踏み碎け、關ケ原の敗北を忘れるな」と戒れば、薩摩藩士は一種の定まれる儀式として、島津氏の參勤交代の節、三田四國町の薩摩屋敷を引き上げるや、必ず千代田城に向つて一發の鐵砲を放ち去りつゝあつたのだ。茲に强者勝者の陷り易き通弊を併せて、又弱者敗者の自然に抱く感情をも見ら

れる。毛利、島津とて共に秀吉の太刀先に征服されたもので、高風を景慕して心服したものでは無かつた筈だ、然ば其關ヶ原の役には必ずしも大阪方たらざれども思へば思はるゝ者を、之を敢てせずして徳川氏に反抗した者は、豐臣氏に對する忠節といはんよりも、寧ろ力豐臣氏より強大ならんとする家康の鋭鋒を挫く事が、自己の勢力を恢復するに有利なりと見たからであらう。それが挫敗して空しく邊隅に沈默を守るを餘儀なくされたから、茲こそ深恨を結んで斯様な臥薪嘗膽の擧に出たに相違ない。此事情は米澤の上杉氏に於ても同様である。上杉氏の會津移封後は一向ら越後の故土恢復に汲々たるものであつた。此心理が却て關ヶ原の役に徳川氏に抵抗した所以であつて、必ずしも大阪方に忠節を抽んでんと欲したものではなかつた。然るに此も同様に失敗の運命を見たのだから、それが深恨の基を成すべくんば、戊辰の役には遂に薩長に呼應して起つこそ本懐であるべく想はれるのだが、其然らずして佐幕黨に味方し、却て頻に兵を越後に出して官軍に抵抗したのは其志巧に此機會を利用して依然祖先の故領を恢復するに汲々たる爲であつたのだ。されば庄内の酒井氏は頻に秋田口の官軍を窘迫し、會津も亦目に餘る官軍の大勢を向ふに廻して健鬪しつゝあるに拘らず傍觀して救はず、形勢を達觀して頽瀾の既に廻し難しと見るや、倉皇として降を假に官軍の轅門に納れた所以であつた。薩長と志を同じうして唯行ふ所を異にした迄である。一び屈した者は必ず復た伸びんと謀る。斯うして歷史は不斷に勢力のエクイリブリアムを求る振子の動搖を續ける。

六、尊王攘夷論の經濟的背景

資本主義的經濟組織に必然に伴ふ貧富の懸隔は昔からあつた。そこで之を平均する政策たる德政は天武帝や持統帝時代から行はれて來た。之を現代語に換言すれば、高壓的ではあるけれども、一種の社會政策たるを失はぬ。以て國民の生活問題が如何に重んぜられたかを見るべきである。左れば如何なる權力ある專制政治家も民力に限度あるを知つて苛斂誅求を恣にする事をしなかつた。藤原氏の國政を怠るや、百姓は多く私田を社寺領に寄附して名義をそれに托し、納租を免れたから、社寺領甚だ膨脹して官府に納むる租額は著しく減少した。是が淸盛の一方に於て興福寺燒打の如き寺院壓迫を試みれば、他方に於て音戸ノ瀬戸を拓き、經島を築き、福原に都を遷して、大に海外貿易を試み、其利を以て國庫の空竭を救はんと欲した所以だが、其政策は遠大乍ら當時國民の理解する所とならずして止み、却て此爲に憎嫉を招いだ。賴朝は此機に乘じて蹶起したの

だから、大に社寺を尊崇して民心を得るに勉めた。北條氏は皇室を壓迫し奉り、承久の亂迄惹起したから、大義名分上からは國民の指彈を免れぬ乍ら、而かも能く九代の存續を許されたのは、其民政に力を用ふる事甚だ大なるが爲であつた。其故に民政を怠るに及んで、國民は彼を棄てて直に尊氏に走つた。尊氏は南北朝正閏の爭の爲に長く後世の誹を受けたが、併し度量寛宏、財を集めて能く散じた所から、輿望當時に並び無かつた。而して彼も亦天龍寺船を仕立てゝ海外貿易に勉め、國庫の不足を補ふの策を取つた。降つて織豐二氏以下徳川氏に至る迄皆此の如く、民望を收むる者獨り能く天下を取り、其然らざるに至つて忽ち天下を失つたのである。さればこそ僅に三日天下の稱ある明智光秀さへも、其信長を殺して京に入り國政に臨むや、直に租税を減免して民心を繫ぐに勉めた所以である、宮廷史家の手にのみ成る我國史には、到底民衆の生活問題を重要視する歴史あるを望むべきでない。從つて國民は自ら其眞相に疎きは免かれ難きことであるが、然し事實を檢討すれば我國の歴史とて矢張り大部分は民衆的且つ經濟的に動きつゝありしことを否認することは出來ない。維新の際徳川氏を倒すに熱中した薩長政治家等が、當時の人氣に投じた尊王攘夷の標語を利用した事は明に此民心の機微を測つたものだ。

彼の維新當時の尊王攘夷論は、僧侶、神官、國學者等を中心として、專ら守舊的思想家に騷がれたものであつたが、併し其金穴となつて背後に彼等を操縱しつゝあつた一勢力に大阪の豪商のあつた事を知るものは今人に多くありや否や。所、蘭二商の持ち渡る長崎の外國品は、一度奉行所の檢査を經て官庫に收められるとはいへ、直に其處では賣捌かれず、更に大阪迄船廻しになり、其處で初めて陸揚げされて大阪商人の手を經て一般の華客の手に渡るのであつた。此外にも當時公然の秘密となり了つた幾多の密輸入品があつて悉く大阪商人の手に渡る。其利計られざる者があつたから、彼等は外國貿易の利を自ら受けつゝあり乍らも、却て其特權を失はん事の爲に斯く開港を恐怖し、其專有特權を永久に維持せんが爲に、故らに從來通りの鎖國制度の持續を欲した。其故を以てのみの尊王攘夷論者であつたので、扨こそ資を給して潜に浪士を養ひつゝあつたのである。それで無くて何んで彼等寄る邊無き浪士の痩せ腕を以てして、祇園町に出沒し、痛飲淋漓、熟柿臭い怪氣焔を揚げる事が出來やうぞ。當年の浪士の眞面目らしい運動の裏面にも、覗けば斯うした大阪商人の惡戯があつたのだ。

七、南日本はブルジョア北日本はプロレタリア

大阪商人の希望は酬いられなかつた。從來の長崎一港以外、神戸、横濱、函館、新潟の四港が開かれ、海外貿易が一般に公許されて、ボロい巨利を占めた彼等の個人的世襲の家業は失はれた。けれども大阪はそれが爲に衰へなかつた。他の諸港と共に、否他の諸港を凌いで神戸が繁昌し行くと共に大阪も亦繁昌した。烟突林立工業の都として黑烟濛々全市を蔽ふと共に、大阪は居然全日本の商業的中心地となつた。

大阪は昔の難波の津時代から、宇治川の河口を扼し、瀬戸内海を控へ、中國、四國、九州より京都往來の唯一の水路であつたから、出船入船の頗る賑はつた所ではあつたが、それが今新に世界的に開放された神戸と連るに於て、其規模は一大跳躍的進歩を見た。昔し神戸ならぬ泉州堺が、大内氏の領地として海外貿易に時めいた時代もあつた。大内氏は勘合印を有して當時對明貿易の主權を握つて居たので、山口を京都化し、宮殿樓閣堂塔伽藍は勿論、扨は一町に六人宛の京人を住まはせて、言語態度、粧飾に迄偏に都樣を學ばせたといふ其榮華振も、皆資を此對明貿易の巨利に仰いだものだといふ。鎖國時代に於ける文明の通路は偏に長崎の一港から開け、而して直接其空氣に觸れた藩には、長崎御番の任務を帶びた佐賀、福岡の兩藩があつたのだ。そこで之を羨望し、折もあらば代らんとの希望を繫けてゐたものに熊本があつた。併し實際には更に薩摩があつて、其領島たる琉球を通じ、盛に外國貿易を行へば、尙ほ拔荷と稱する密貿易を營む者も少からず、土佐の如きも、幕府の末年には長崎に吏員を派して海外貿易を行つた。彼の有名な海援隊は實に其貿易船を率ゐるものであつて、後には後藤象二郎、後には岩崎彌太郎が共に土佐の役人として其指揮權を執つたものであつた。斯うして見ると維新の革新運動の牛耳を執つた薩長土肥の四藩中、少くも薩土肥の三藩迄は、不思議にも早くから泰西文明の風表に立つた因緣を有するもの、否長州迄が矢張り昔の大内の舊領を代つて支配した因緣を辿れば、自ら海外文明に浸つた歷史を有する者なので、滿更異理ではなかつた、斯うした四藩の主盟的活動が、明治以後の我政界の大勢を左右し、それに因つて泰西文明は新に開かれた諸港の通路から大潮の如くに間斷無く打寄せて來た。

文明は石炭を要求する、鐵を要求する。石油を要求する。而して九州には三池、高島、佐賀關、芳谷、岸嶽、北方、又は天草の新山炭礦等、極めて多く炭礦に富み、貝島、堀、伊藤、麻生、安川、鷹取等、所謂る炭礦成金が轡を並べて居れば、又枝光、若松等の制鐵所が興り、福岡から若松、八幡而して門司等の各市町が實に新生の活氣を以て繁賑を加へつゝある有樣は、側

の見る目にも目覺しい極みである。尙ほ四國にも別子、銅山がある。尙日本の工業は當然として勃興の意氣盛んなものだ。勿論北日本にも幾多の鑛脈がある。就中越後の東山、西山、金津の油田、下野の足尾銅山、常陸の日立銅山、若しくは石炭鑛、陸前の釜石鐵山、秋田の小阪、尾去澤の銅山、佐渡の相川の金鑛、更に津輕海峽を越えては石狩の夕張炭山其他の諸炭鑛等枚擧に堪へざる程にあるが、而かも尙ほ北日本の主要産物はと問はゞ、依然とし米、木材而して養蠶であらう。併し乍ら米や木材は南日本にも全く共通なるを想はゞ、北日本の代表的産物は養蠶を數ふ可であらう。これは猶ほ九州には鹿兒島の金鑛、福岡の織物、肥前の陶器、宮崎、大分の漁業等あるに拘らず、其代表的産物は石炭に指を屈すると同樣である。勿論四國にも土佐の鰹節を主として漁業の盛なる、讃岐の直島の鉛鑛、其他の製鹽業等もあれば、中國諸國にも備前柵原の硫化鐵鑛、其他の製鹽業、セメント製造業等もあるけれども、尙ほ東見初、沖山等の諸炭鑛の産額頗大なる者がある、之を通ずるに石炭は南日本の表代表的産物といへやう。即ち南日本の工業的なるに對して北日本は農業的である。從つて動靜を以て分てば、固より比較的の事ではあるが、依然として南日本は動的であり、北日本は靜的である。其處で南日本の銀行利用が、盛なるに對して、北日本が金貸業利用の盛なる所以も理解されやう。勿論農業は原料の生産であるから自ら工業に連る。既に養蠶が代表的産物といふが、さすれば當然生糸業、織物業の盛なる事は云ふを待たない、加賀越前、越後、兩野州其他の絹織物等がそれであつて、此に至ると自ら工業に屬し、都市的であるけれども、大體に於て農業は土に屬するが故に村落的である。從つて是又比較的の事乍ら大地主は北日本、特に東北に多く、宛然一城主の觀を爲して今尙ほ多數の小作人の汗に左團扇で豪奢を極める者が多い。肥前では鍋島閑叟の貧富平均政策が効を奏して、今日尙ほ自作農多く、極貧者を存せぬといふが、其代りに著しい大地主なる者が多い。それを以て逆に推究され得る通り、大地主の多い事は必ず貧困に泣く小作人の多い事を物語るのである。北日本には地理的不便の場所が多いが、それが必ず沈滯的氣分を養ふとも限らない。人間には環境に對する反抗的氣分なるものを多量に有する。是れ四面山に圍まれ海を有せぬ近江、甲斐、信濃等の諸國人が却て敢往有爲の氣象に富み、積極進取の行動に出る所以でもある。日野、八幡の布織物が代表する江州商人、甲斐絹が代表する甲州商人、生糸を代表する信州商人の名が天下に著聞する所以は全く此處に在る。其他一方海に瀕して山國同樣四隣に僻在し、交通の便利に乏しい處にも、此種の反抗的氣分の刺激

に因つて反對に活動的習性を養ふ所がある。富山の反魂丹賣り越後の若布賣り、毒消賣り等の足迹天下に普き事が之を證すべく、又若し伊勢商人外に出て成功したのも矢張り類型の地理的關係に因るか、等しく交通の遮斷される點からいへば、山を以てすると水をもつてするとに變りは無い、そこで島人にも亦同樣な反抵的氣分が却て其遠遊を唆る所は少くない。順德院や日蓮の配所で名高い佐渡の島民が、「住めば都」の諺の氣分を持たず、北海道へ若しくは越後から東京へと、競うて島外に遠遊して少からず成功者を出す所以も其處に在らう。彼の高田愼藏や、益田孝などといふ一大富豪が共に其島の出生である。從つて是等の地方は比較的一般の文化に後れて居らず、就中信州の如きは、讀書人の多きを立證すべく新聞、雜誌、新刊書類の最もなく賣れる所だとは、專門業者の常に悅んで語る所で、言ふ迄もなく、一般に智識の程度が高く、比較的世情に通達して居る。それは地方演說若しくは講演に赴く者の、親しく經驗して直感し來る所である。

此の如く、北日本必ずしも沈滯的氣分に滿つるといふではないが、只それ資本が一方に偏在して居つて、一般には甚しく其缺乏を感ずるが爲に、資本的活動が缺けて、未だ大に製造工業の勃興を見ず、從つて住民に活氣乏しく、曾て奧羽の大飢饉に經驗した如くに、五風十雨の利順を失つて、一年米産の資らぬ事でもあると、餓莩道に滿ちて一家離散の果敢無き運命を喞つにも至るのである。それ故此頃の如く勞資問題が盛になり、大地主對小作人の研究が六かしくある時、夫のプロレタリアに味方する一種の議論が最も早く彼等の耳に魅力を感ずる所以ともなるのだ。

八、今後の政界のリーダーは南北何れより出づるか

我明治の薩長を主腦とした新政府は、幾多の產業獎勵政策に出つて、其中當時の國情からして頗る合理と見られもしたのだらう。無意か有意かは知らぬけれども、兎に角長い間政府の保護が民業に加はつて、ブルジョアの成功を助けて來た。此空氣が次第に政商を養ひ、其後二十三年に至つて議院の出現してからは、政治家と資本家の結託は益々甚しきを加へ、薩長政治家が常に之を慣用したのみならず、在野政治家迄が何時しか之を模倣し、議會を擧げて一に資本家の爪牙に供せんとするが如き傾向が、時を追うて增長して來た。是れ從來の納稅資格標準の選擧制度が之を然らしめた所以もあるが、一方に政治運動には財源なかるべからず、而してそれには資本家と結託するを捷徑

と考へた、目的の爲には手段を選ばぬとする心機の一轉にも因るのである。此試みの最も露骨に決行されたのは星亨だといはれて居るが、此星亨は北日本の産した近代の怪傑であつた。彼は前半生を猛烈な薩長の閥族政治の攻擊に委ねて、奇禍を犯した事も屢次なる歷史の所有者であり乍ら、忽焉として其長閥と握手し、又金權にも近づいて行つた。彼は薄志か、變節か。其心術には側るべからざる者があつたけれども、彼は其眞意を明にする時機に達せずして、不幸にして中途に兇刄に斃れた。次いで原敬が其故智を奉じ遺策を行ふ者の如く、又薩長の閥族に近づくと共に、資本家と握手するに努めた。彼は亦北日本の所産であり、特に維新の際幕賊の殿軍とも稱すべき南部藩の家宰の家に生れた者である事を銘記すべきである。從て彼は薩長藩閥に服するもの丶如くにして、實は之を倒さんとした。彼は初め長閥に結んで自家の地位を築いたが、其一成功を見た後、今度は薩閥に結んで前者を一擲した。而かも其薩閥に結ぶ事も餘りに濃厚でなく、其威望失墜の危機を見るや、又之を棄てて、薩長孰れも其握手を固くしない。窃に其瓦解の氣運を作つて遂に自ら取つて之に代つた如き形迹がある。彼は內外の形勢に善處する國政の大方針よりも、寧ろヨリ多く藩閥政治を根絕する大方略を熟慮密計しつ丶あつたではないかと思ふ。然し彼は餘りに露骨にして、常に八面に應酬し、薩長藩閥に結ぶもの丶如く、又敵するもの丶如く、プロレタリアに味方するもの丶如く、又敵視するもの丶如く、其態度に幾多の矛盾があつた。然るに我國民の間には次第に階級的意識起り、プロレタリアはブルジョアを抑制する必要を痛感するに至つた結果、遂には衆怨の的となつて、奇禍を買ひ、非命に斃れた。北日本の生んだ政治家としては今朝に立てる加藤子あり、野に居る後藤子もあるが、尚ほ其外に政友會を率ゐる前の子爵にして、今一平民たる高橋農相が居る。彼は仙臺の人即ち原と等しく東北の出身であつて、今又原と等しく一平民政治家たらん事に一念發起して其所信を斷行し了つた。彼も亦維新當時に於ける大敗者であり、被征服者であつた仙臺藩の出身なるを思へば、其處に今政友本黨を率てる薩人床次氏と手を絕つた處に無限の妙味がある。

由來政治的に敗れた北日本には、上に推輓者を缺く懸念から、是迄は南日本に比して政治家、軍人家たらんとする希望は青年に乏しく、それよりも、實業家、教育家、醫師、辯護士、理學者、工學者といふ如き、比較的生活の安全を保障し得る方面に希望者が多かつた。然らずんば純正なる思索家たらん事に興味を求めて哲學者たらんとするか、或は文藝家か、若しくは宗教家たらんとする者を輩出したのであるが、其取殘された少

數の政治希望者中には、自ら反閥族的氣分を僅かに蓄へつゝあるかに見へる。而してプロレタリアの生活苦を直視するに從つてそれに同情して立つ思想家運動家が漸增しつゝある傾向が、最近に於て益々鮮明になりつゝある。今南日本の地盤がブルジョアで築かれるに對して、北日本の地盤はプロレタリアで固められつゝある。生活苦に泣くプロレタリアが今次第に結束して一勢力となりつゝある現狀は是が必ず政界に反映せずして濟むものではあるまい。

今や中央の政權掌握者は、次第に南日本より北日本に向つて移動しつゝある。固より吾人は何時迄も島國根性地方感情に捉はれて、猫額大の小境地に、南北日本の對立を語るべきでない。今や南日本にあらず、又北日本にあらず、全日本が一心一體となつて世界に對立すべき秋である。惟ふに交通の發達教育の進步とは、早晩地方感情又は地方利益に基く南北日本の對立を一掃するに相違ないが、同時に又共通の經濟的壓迫と共通の階級的反感とより南北日本を通じてプロレタリア對ブルジルアの抗爭時代を出現し、恩儲一變の形勢あることを認めざるを得ない。是が全日本的思潮の主流たらんとしつゝある。而して其流れは日々强烈を加へつゝある。然し其間にも尚且北日本はプロレタリアの根據地、南日本はブルジョアの資源地として、南北日本對立の舊態を、或程度迄、其政治地圖に染め出さんとして居ることは、エクイリブリウムを求めて止まざる社會必然の勢と云ふべきであらう。

學生の社會科學研究團解散問題

社會科學研究に對する非科學的壓迫

長谷川如是閑

社會進化に對する人間的態度は、いろいろあるであらうが、これを二つに大別することが出來る。一つは本能的の態度で、他の一つは意識的の態度である。前者は人間の動物的根柢に基ゐた殆んど宿命的のそれであつて、如何に人間が進化しても、何等かの形でこの根本的の傾向が働き出されないわけに行かないものである。そしてそれが社會生活の上に動かすことの出來ない結果を持ち來す。今一つの意識的態度は、もつと後天的な經驗が人間に取らしめる組織的の行動であつて、生存の可能性を持つものと持たないものとを識別して後者を淘汰する働きである。一言で云へば、生存的行動の意識的撰擇である。

本能的の行動は、それが如何に意識的の外觀を持つに至つても、本質に於いてその本能性を捨てない。宗教や形而上學等がそれである。これ等の意識は本能の絶對性を意識づける作用を働いてゐるのであつて、その根抵は宿命的の信仰そのもので、これはその後の經驗によつて動かすことの出來ない、固有のものである。科學の進歩がそれ等を修正することはあつても、出來るだけそれを排斥しようとし、又それと妥協しても、本能的な信仰狀態が根本的な決定力を持つのである。

これに反して意識的態度は全く經驗が最後の決定力を持つものであつて、その經驗的睿智がその行動を動力づけるのである。これは廣い意味で云ふ科學的知識であつて、人間的行動の眞に意識的なものは、この態度であると見なければならぬ。無論人間を生存行動に推し進める力は本能的の衝動である。人間が危險を冒して海上に乘出すのは、先づ海に關する科學的知識

を得て而る後に行ふのではない。生存の衝動が盲目的にそれをさせるに過ぎない。が、人間が海に對してその盲目的な本能だけで推し進んで行つてゐる間は、決して海上に於ける人間の行動が發達するものではない。南洋土人がカノーを以つて海を行くのさへ、船に關する科學的知識がそれをさせたのであつて、ただ盲目的に海に乘り入ることは出來ない。が、經驗的叡智がその程度の極めて幼稚なものである間は、決して海上に於ける人間の行動は進歩しない。もつと複雜な經驗が與へた科學的意識の發達によつて、初めて人間が海を陸地同樣に活動の舞台とすることが出來るのである。即ち本能的態度は根本的の力ではあるが　それだけではただモーターが廻轉してゐるといふだけであつて、それが生活の上に働き出すには、その本能的の作用を種種なる生活行動に轉化させなければならぬ。電力を光や熱に變化させたり、種々なる機械を動かせたりするやうに、意識的態度が初めて生活の上に具體的に働いて、そこから文化が起るのである。

ところがこの意識的態度は生活に取つて極めて危險な性質を持つこと、本能的のそれと異らない。本能的態度は意識の作用を壓迫して、人間を本能的單純の無智蒙昧に固定させようとする。宗教や形而上學は本能的衝動をその流動的性質から固定的性質に移して、却つて本能の、生活衝動としての力を失はさせる。本能から出た迷信が、本能の生活力を壓迫してゐるのがそれである。と同時に、本能はまた理知を壓迫して、衝動の作用を盲目的に推し進めようとする。それは生存を推し進める強い力が、生存を妨げる力となつて働くのである。本能にさういふ危險があるやうに、意識にも亦本能の生存に對する強い力を意識によつて壓迫する作用を持つ。迷信的な意識はそれである。だから我々は意識的態度のうちから、さういふ種類の意識を排除しなければならない。さういふ意識は多く本能の盲目的作用に隨伴する意識であるから、これを本能的態度の方に入れなければならぬ。で、この生存の衝動を壓迫する意識を、意識的態度から除き去るといふと、人間の意識的態度は、謂ゆる科學的意識を根柢とするそれであるといふことになる。即ち意識的態度は、言ひ換れば、科學的態度であらねばならぬ。

この科學的態度を發見するのが即ち科學的研究である。而して科學的研究は科學の歷史が示す通り、物理的のそれに初まつて次第に生理的心理的社會的といふやうに、物質的感覺的の對象から次第に心理的對象に進むのである。社會科學は畢竟生活現象の最も複雜な集團關係の科學であつて、今日極めて未だ幼稚である爲めに、社會現象に對する科學的知識なるものは、今

尙ほ私が前に擧げた本能的態度の意識に支配されてゐることが多い。言ひ換れば、宗教的意識や形而上學的意識が未だこの方面を深く支配してゐる。が、凡ゆる方面の科學的意識がさうである如く、この方面に於いても、科學的意識は自ら特殊の科學的現象を對象とする叡知となつて現はれる傾きを持つ。即ち社會生活に關する科學的叡知は、盲目的な獨斷的な信仰を排して、より生存的な生活の組織と理法を發見しようとする。この叡知を外にして人間の生活をよりよくする途はない。本能的態度による迷信と獨斷とに固着して行動するのみであつたならば、その民族は滅びる。

社會科學の研究は、この意味に於いて決して亡國的でもなければ、頽廢的でもない。それは生活の科學の發見に外ならない。自然現象が科學的に研究されて、初めて人間の物質的生活の文明が成立つたのである。更に社會現象の科學的研究は、社會生活の文明を建設する途である。今日までの軍國文明は、社會を武力と迷信とで壓迫して築き上げられた文明であつて、その物質文明には科學が盛んに應用されたが、社會組織そのものは非科學的な權力關係によつて決定され、この方面の意識は迷信と獨斷とが支配したのである。法律・道德・風俗・習慣等が凡べて本能的盲目的に決定されてゐたのである。而してそれが生活組織を窮地に導いた結果、自然科學の次ぎに社會科學が起らなければならない順序なのである。それは天文學の次ぎに物理學が起り、物理學の次ぎに生理學が起るのと同じ必然の順序である。自然科學を奬勵して社會科學を壓迫するのは、化學を許して生理學を禁ずるやうなものである。

然し乍ら現在の支配階級が社會科學を壓迫する理由は、單に右のやうな科學的錯誤ではなく、一つの積極的意欲の結果である。社會科學を壓迫することに一つの意識目的を持つのである。即ち現狀を維持する本能的態度の意識を尊重し、社會生活をその本能的意識に基礎づけやうとするのである。そこで科學的意識がより生存的な生活の理法を求めることは、現狀に對する反抗を惹き起すものと認めるのである。

無論科學的意識は現狀に滿足する意識ではない。現狀が非常に安定した狀態であるならば、科學的意識は寧ろ起らない。だから科學的意識が起つて現狀を動すのではなく、現狀が安定を失ふから科學的意識が起るのである。その場合に科學的意識を壓迫して現狀を安定させようといふのは、事理顚倒である。科學的意識は寧ろその現狀の動搖に對して、本能的の盲動に依ら

ずに、科學的秩序でそれを支配しようとする人間的意識である。そこに何か生活に反する狀態を發見した時に、軍隊を以つて又は叛亂によつてその狀態を破壞するならば、科學的知識は要らない。その生活に反する狀態を科學的に研究するのは、さういふ暴力でその狀態を破壞することをせずに、これに對する秩序的の運動を意識的に營まうとする爲めである。醫者が病人の生理を研究するのは、その病人を打殺さずに、その健康狀態を恢復する手段を發見しようとするのである。本能的態度はこれに反し、生存の盲目的衝動によつて行動するのだから、この場合、獅子が弱い子供を嚙み殺すと同じ態度に出る外はない。

故に本能的態度は多くの場合暴力的である。迷信や獨斷が人間を殺すことを躊躇しないのは、野蠻人の行動を見ても分る。今日でも社會に對して暴力を振つてゐる支配者は、必ず迷信的であり、獨斷的のそれである。同じく社會を改革せんとするものゝ側に於ても、暴力を振ふものは何時も迷信的獨斷的の連中である。フアシスチも其一例に過ぎない。社會に關する科學的叡智は軍隊や暴力を以つて社會を改革しようとするやうな意慾を產み出すことは出來ない。科學を否定した場合に、初めて衝動的の非科學的行動が持ち上がる。

文部大臣が學生の社會科學研究を壓迫するのは、この意味に於いて科學的叡智を否定して暴力を推奬することゝなるのである。社會を改革するに方つて――改革する必要のない社會といふものはない――科學的叡智に依らなかつたならば、暴力に依る外はない。今日日本の暴力を弄ぶ人々は、決して社會に關する科學者ではない。科學的研究を壓迫するのは、さういふ暴力團を生み出す最も手近な方法である。

人間には生存の衝動がある。社會を改革しようとする意思は、生存意思の働きである。この意思は本來本能的であるからその生れた儘の形でこれを放置すればそれは動物が嚙み合うと同じやうに、暴力的になるのは已むを得ないことである。反動團體の暴力は必ずしもさういふ生存衝動ではなく、他にもつと複雜な心理によつてゐるのであらうが、急進的な團體の暴力は必ず科學的意識を缺くか、若しくは科學的手段に絶望した場合に起る。前者の場合は學問的教養の缺乏によるのであるが、後者の場合は科學的手段を壓迫する支配狀態によるのである。而してこの二つの場合は即ち科學の缺乏と科學の壓迫とであつて、禍は一般が非科學的であるところに原因する。社會を改革するのは、一つの工學的技術に比較すべきものであつて、たゞ本能的狂熱のみがそれを爲し遂げる筈のものではない。正確な科學的知識がそれに伴はなければならぬ。若しこの場合本能的狂熱

を保存して、科學的叡智を禁止したならば、その狂熱の發揚は、非科學的盲動となる外はない。社會科學を壓迫する危險は實に其處にある。

文部大臣は或ひは云ふであらう、科學的叡智を否定するのではない、過まつた知識によつて盲動する危險を防ぐのであると。それならばいよいよ科學的研究を壓迫するのは矛盾である。中學の化學の試驗で生徒を負傷させる例が頻繁にある。水素瓦斯から空氣を排除しないうちに、それに點火して爆發を起して大怪我したりする。文部大臣はかやうな例が頻發するに拘らず、自然科學の研究を中學校から取除かないで、いよいよそれを奬勵する必要を感じてゐるではないか。社會科學の研究が危險であると感じるならば、その危險を排除する爲めに、ますます科學的叡智の發達を冀ふ筈である。要するに現狀に對する懷疑的精神を危險視するのである。而してこの精神が科學的叡智の結果である爲めに、科學を排除するに過ぎないのである。さうなるとそれは反動團體の暴力と同じく、ただ力を以つて人間的叡智を押へつけやうとするに過ぎない。それは不可能なことである。

文部大臣は嚮きに學生の演劇を禁じたが、これ亦同じやうに危險な壓迫である。難しいことは暫く措いて、常識的に考へても、學生が芝居を演ずるといふことは、實は極めて安全な處世法なのである。生活に對する懷疑、現狀に對する反逆心――それは如何なる時代に於ても青年の心の奥にある力強い衝動的傾向である。それが無かつたならば青年は無い。――さういふものを藝術的情操で現はすといふ働きは、人間が野蠻部落を營んでゐた時代から、社會的平和を維持する一つの方法だつたのである。和歌が猛心を柔げると云はれたのも同じ働きであつて、直接行動が藝術的情操に轉化する爲めに、同じ心が平和な形で發揚されるのである。野蠻部落に踊がなかつたなら、彼等の性慾は蛙合戰のやうな、血腥い爭鬪となつて現はれるのである。舞踊はこの性慾の發作を藝術的行動で緩和するのである。青年の反逆心を柔げるのは藝術である。或る意味に於いて、實は青年は藝術などに入つて呉れない方がいゝ場合もある。それでも藝術に行くことは平和に行くことである。

成る程さういふ藝術は一種の宣傳である。同じ若い心持を一般に湧き立たせる恐れがある。然しそれは如何に湧き起つても、藝術的情操として働いてゐる間は平和である。而してさうして湧き立たせた若い心は、次の時代の血と肉とに供給される酸素である。さういふ心が青年になかつたならば、次の時代に老衰者

の衝動を持ち來すに過ぎない。學生の演劇の如きは、青年の心理を保存しつつ、而かもそれを本能的盲動に持ち來たさない一つの社會的作用である。それを壓迫することは殘忍な老人の心に外ならない。さういふ頑固な氣分は、決してよりよい次の時代を持ち來たさしめる性質のものではない。

社會科學の壓迫といひ、藝術の壓迫といひ、軍事教育の強制といひ、今の文部大臣のすることは凡べて平和な青年の心を攪亂せしめてこれを暴力に赴かしめるものである。科學的素習と藝術的情操を奪はれたならば、人間がどんな風に行動しなければならないかを考へて見るがいい。其處へ軍事教育を強制するならば、全く鬼に金棒である。

寧ろ學生に社會科學研究を獎勵せよ

千葉龜雄

或る日或る新聞の見出しを讀んだら、某派の今度の貴院改革案は、非常に合理的なものだから、今度こそ貴族院も屈服するだらうと書いてあつた。凡そこれほど當り前であり相で、その癖まちがつた話はない。合理的なところで話がつくなら、内閣一つを賭けてまでも、貴院改革でもめ合ふ手數は始めからちつともいらぬ。いはゆる合理といふものがどうしても非合理なものでなければならぬと、心の髓から信じきつてる手合との相談だから、そこで、どこまで行つても握手が出來ぬのである。文部省の、現代學生に對する遣り口も、やはりその手だ。文部省は、正に遠眼鏡を逆さに見て居る。だから遠くが近くで、近くが遠くで、合理が不合理に見えて、不合理が合理に見えるのだ。その癖、誰れが注意しても、いや違はないと言ふ。その自信だけは日本一だ。

學生の手から、机から、研究室から、社會科學の書類を取り上げる。ひどいのは焚いて了ふ。勤儉貯蓄の今日にも似合はぬ、大腹な仕草はそれとしてもよい。けれども、私がそれを不合理だといふのは、單に世間で數へられそうな三つの條件からばかり云ふのではない。が、もとより、その三つの條件にも、

尤とも至極な筋はある。

第一、現代の學生は、次代の國家を作るべき國民だ。國家や大衆の生活に對して、何一つ知らずに居て良いといふ學問が無い。また學術そのものの本體に、正邪とわけられる筈のものがある譯は無い、ましてや苟くも現代からの國家、もしくは國際生活に棲もうとする者が、社會構成と經濟組織の土台になる所の、社會科學の何ほどかでもの、眞實の知識が無くて、どうして生きて行かれやうか。殊にそれは政治や經濟を學ぶ者にとつて、どうしたつて取り離し得ない必要な學問ではないか。もしそれを學ぶことによつて、何ほどかでもの不穩な行動が起るとなれば、それはその學問の責めではなくて、そうした行動を採らねば止ましめないところのその社會なり、環境なりが惡いためであらう。さらばその社會環境を作つて居るものは何者か。

第二、當局がかく總立になつて騷ぎ立てる結果が、それほどに思はぬ學生の神經さへをもどれほど、いら立たせ、それが爲に、彼等をしてどれほど反抗心を起させ、或は特別な好奇心を與へることになるか。この例も、われ等は飽きるほど見て居る。

第三、それでも學校寄宿室での、社會科學書を燒き棄てることによつて、一切の撲滅が出來るものならそれでもよい。が、新聞の日日の外電すらも、一々斬り取つて配付するだけの人數が學校に居るか。また到る所の書店に、內務省許可の下に出版されて居る書籍を、學生だからとて店主が賣らずに居るか。それとも全國到る所にある活版機械を、悉く文部省一手で買收するか。或はもつと大仕掛けに、大洋書店頭に山と積んである、何千冊の新舊社會科學書を、一つ元氣に焚き捨てて了ふか。それが出來ない限り、また學生が足が在つて自由に出てあるく限り、そんな禁制は何にもならない。

けれども私は云ふのである。當局は禁制するどころか、少くとも大學、高等學校、專門學校程度の學生達に、社會科學を研究してもらふことは、むしろ獎勵してよい事である、それが合理以上に合理な方策なのであると。そしてそれは、前に擧げた三箇條以上にも、もつと適切な事實であると。

たとへ當局者がどんなに嫌忌し、どんなに目をそむけようとしても、勞資二大階級がげん然として對立して居るのは、掩ふことの出來ない世界の事實だ。そして、それがいつまでも、このまゝの形で續いて行つた日には、遂には何等かの大衝突を來すのは免かれない事實だ。そこでその衝突を未然に回避するか。或は、たとへそれが來たにしても、實害を最少限に止めやうとすることは、誰しもが望む所であらう。そこで相對する二

大階級の、どちらの生存が、より多くの眞理をもつて居るか、人々はそれを討檢することによつて、より多くの眞理内容の保持者に對し、他の階級の上にその生存を認め、保障するであらう。しかしこの二つの階級の、生活原理のどれの側に、果してより多くの眞理があるかは、已にあまりに明白に證明が濟んで居る筈だ。そして、無産者階級は、鐵鎖の外に失ふべきものが無いやうに、讓歩し、妥協すべきものは、もう何一つ殘さないのだ、彼等の捧げてゐる條件はたゞ一つだ、生活權の要求。だからその眞理は明白で單純だ。それ以上にもう一度考へ直したり、立て直したりする餘裕もないのだ、また必要もないのだ。そこで、新たに考へ直したり、これまでの態度に大に新らしい省察を加へて、未然を最上の形に置くべき準備を用意すべきものはたゞ資本家階級の側のみにある。現代社會新教育の洗禮を受くべきものが、だから無産者の側にはなくて、却つて有産階級にあるべきだといふのである。また有産階級の次には知識階級である。知識者はまたその特有するところの知識によつて、かく有るべく、已み得ない社會の將來をいち早く洞察し、自分から先きがけて、その將來を出來るだけ安定に置くやうな、丈夫な線路を敷く役目をつとむべきものだからだ。

ことにそれは、遠い先は知らず、知識と有産者が、國民の利福を支配して行く政治が、まだまだ續くであらう事を想ふと、によつて、ますますその重大さを感ずるのである。

そこで今日の學生を考へる。彼等こそは即ち將來日本の知識者と、有産階級の中心で、だから、同時に、將來の日本を支配する當事者なのである。或ひは學生にも、無産階級があるといつても、とにかく高等專門教育まで與へられる機會を持つものは、擇ばれた有産階級でなければならぬ。已に彼等が支配し、もしくは彼等が中心になつて作つて行く次代の社會である。さうした資格を立派に持つ筈の學生である。その學生が、その準備と討檢のために、社會科學の討究に熱心することが、何で不合理といへるか。合理以上にそれは必要なのである。なぜなら、社會科學の何ばくをも知らずに、現代世界と社會生活の脈動を、かすか乍らでも知らうとするのは殆んど絶望だから。またこれを知ることゝなくして、どうしても將來社會の安全な航路は描き得ないから。また、それは彼等の將來に持ち、生きる社會だ。それなのに、彼等が、そこで好き好んで、危險で不安定な進路をわざわざ採らうとするだらうとは、狂人以外に誰が考へられやう。で、一切は彼等に任してよいのである。そして彼等の熱心な自由討究を任すことによつて、將來社會の可及的安定は、始めて、そこに立派に保證されて來る筈のものなのである。安心

してよい。

然るにそれが安心されない。役にも立たぬことをやきもきと騒ぐ、それは取りも直さず、今日の支配者であり、有産階級である人々が、前に擧げたやうな社會の過現未にわたる學的研究などは一向にやらない證據である。そしてそれは、だから學的研究が、なほ必要なのだといふ反證にもなるわけである。彼等には已にその學的研究から生れる世界の合理的生活が飲込めぬから、一度目新らしい物象に突き當つたが最後、何一つ正しい判斷が出來ずに、たゞ無闇と狼狽する。何一つ適法と見るべき療治を下せぬばかりか、却つて方圖もない壓制政策で、どんなものをも押し伏せられると思つて居る。いつも柳の下に鰌が居るか、蟲のよいこと夥しい。だから今日の社會不安は、不安の本態そのものが不安であるよりも、むしろ知識を缺いた無知者の恐惶が、無用の不安を醗酵させる方がよほど多い。その醸造者には、今日の有産階級があり、支配者が加担して居る。少しはイギリスの勞働黨の、足の爪でも嘗めて見るがよい。

そうした不安の蓋をふさぐものが、今日の青年學生であるのにその人々からさへも、彼等はその安全瓣たるべき科學書を採り上げて了つた！ そして、それが何よりの、社會安定の合理法だといふのだ！

こんな不合理な合理が、世の中にまたとあるものか。

が、この事だけでは忘れてはいけぬ。現代では、いつの時代よりも、より以上に、どんな悧巧な親よりも子の方がずつと賢しくて、時代生命の眼が、もつとはつきりと開いて居るのだ：：と。その結果、取締られる者と、取締るものの價値もしくは地位が、どうやら顛倒して居るやうだと。

青年の思想果して惡化せりや

高島米峰

一

資本家階級は、勞働爭議を以て、思想惡化の結果と言ひ、地

主階級は、小作爭議を以て、思想惡化の結果と言ひ、貴族階級は、水平運動を以て、思想惡化の結果と言ひ、總じて以て、現代國民思想の惡化を斷定せむとし、これに對して、水平社、小作人、勞働者は、これ當然の成行きにして、善惡の標準を以て、批判斷定すべきものにあらず、强いて、善惡孰れかに評すべしとならば、言ふまでもなく善なりと主張す。一は無產階級、一は有產階級、一は保守的、一は急進的、全然その立場を異にせるがために、その利害得失を異にし、利害得失を異にするがために、その主張を異にし、その觀察を異にせざる能はざるなり。

保守的思想と、急進的思想との衝突は、今にして始まれるにあらずと雖も、輓近、一般民衆の自我の自覺の鋭くなるに從つて、いよいよますます、その衝突の度を高むるに至れり。由來、貴族富豪と稱せらるゝ人々は、特に聰明にして敏感なる少數の例外を除き、多くは、人に上下の階級あることは、先天の制約なるが如く妄信し、從つて差別の觀念牢乎として拔き難きものあるに反し、自我に自覺したる民衆は、平等と自由とは、人生に於ける天則なりとなし、これを要求し、これを獲得せむとす。而して、この要求の容れられざるところ、そこに不安あり、動搖あり。この不安の狀態と、動搖の事實とを目して、直に惡化と呼ばむとするは、理に於て未だ盡さゞるものあるが如し。

二

日本の政府が、……何人の組織せる政府も……思想に對する態度は、必ず『取締』なり『抑壓』なり。何故に、思想に對して、此の如く、消極的態度に出づるかを考察するに、彼等政治家は、常に財閥を背景とし、金力に依賴して、政權の運用を計りつゝあるがためなることを、その一原因として數ふることを得べし。大政黨とは、大金を散じたるに對して酬ゐられたる、多數黨人の集團なり。從つて、大政黨の首領とは、大金を散じ得る、可能性を有するものゝ謂なりとも解し得べし。即ち、政權を握るものが、財閥の代辯者となりて、一般民衆と疎遠になること、必然の勢ならざる能はず。かくて、兩者の間、理解なく疏通なく、到底越ゆべからざる溝渠に隔てられ、茲に、一般民衆に依りて代表せらるゝ時代思想は、時の政府者より、惡化と目せられ、危險と恐れられ、而して、遂に抑壓せられ、取締らるゝに至ること、誠に已むを得ざることとなりといふべきか。

思ふに、思想を取締らむとするが如き、畢竟、夫の、無心にして岫を出づる、雲を縛せむとするにも比すべきか。雲が自然

に去來するが如く、思想も亦、自由の發達に放任すべし。ただ、その思想の哺育せらるゝ環境に對しては、最も周到なる注意を拂ふことを要すべし。政治家の思想に對する合理的態度は、實にたゞこの一點に在つて存す。

三

磯馴松が、曲りくねりて、一種の風致を有するを賞玩すべしと雖も、矗々亭々として天に參ずるが如き大森林中の杉が、能く棟梁の材たるに比すべくもあらず。慘風悲雨の間に育ちたるものと、惠風慈雨の間に養はれたるものとは、その性格に於て、到底、同日に論じ得べからざるものありて存するが如く、思想の發達も、亦此の理に背くこと能はず。險惡なる環境、求めて與へられざる世界、そこに生長せる思想は恐らくは、健全なるものとは稱し難からむ。

政黨者流が、黨利黨略以外、國家の發展、社會の進步、國民の幸福を念とすることを知らず。世界のため、人類のためといふが如きに至つては、全く、風馬牛相關せざるが如き現代。女性をして、政治にも教育にも職業にも、すべて機會均等ならしめざる現代。女性をも含めたる、徹底的普通選擧の行はれざる現代。高等學校、大學等の不足に基する、入學難の深刻なる現代。華士族平民といふが如き、無用の族稱の保存のために、階級的差別的觀念を生ぜしめつゝある現代。飲酒のために、年々十五億の富を有害に消費しつゝある現代。賣淫を制度として公許しつつあるがために男女の道德觀を、根本的に破壞しつゝある現代。敬神崇祖の念次第に薄く、殊に、毫も、子孫の優良なる繁榮を念とせざるが如き現代。宗教心の涵養に無自覺なる現代。凡そ此の如き環境に於て、健全なる思想の生長を求めむこと、到底、不可能なりと言はざるべからず。

四

こゝに注意せざるべからざるは、研究と實行とは異なり、思想することゝ、運動することゝは、異れりといふことなり。曾て、幾年前なりしか、早稻田大學の研究室に、警官が闖入（？）せりとか言へることありて、思想界に、波瀾を生じたることありき。又、東京帝國大學の森戶辰男君が、クロポトキンの學說を紹介したることよりして、遂に、その職を辭せざるを得ざるに至りしことありき。苟も、大學の研究室なり、研究室が、研究室としての、當然の職能に忠實ならむ限り官憲の足、一歩と雖も、此處を踏ましむるを要せざるなり。されど、若し、假りに、この研究室が、政府が認めて以て、安寧秩序を妨ぐると為

ナところは、運動の策源地なりしとすれば、官憲が、こゝに手を下し、足を容るゝこと管に止むを得ざるなり。森戸君の場合の如き、單なる研究の發表なりしならば、問題を起したるものの誤りなること言ふまでもなく、若し假りに、幾何か、宣傳の意を含み居りたりとせば、政府としては默止することと能はざるを當然となすべし。而して、かゝる政策を、是とすべきか非とすべきかは、自ら別問題に屬す。

五

現内閣の文部大臣は、就任後間もなく、學生劇を禁止して、全國學生の、强硬なる反對を受け、幾何もなくして、又、直轄學校に於ける、社會問題研究會の解散を命じたりとかにて、大に思想界の物議を醸しつゝあるなり。學生劇禁止の如きは、その弊害の、漸く甚だしからむとするを看取して、これを匡正せむとしたるものにして、最も聰明にして且つ機宜を得たるの處置と稱すべきが如きも、事實は、嚴禁に等しく、角を矯めむとして、却つて牛を殺すにも類するものとなりしがため、學生は、學生の世界が俄に陰慘の氣を以て覆はれたるが如くにも感じたるべし、從つて、その反對運動も、高潮せざる能はさりしが如し、その弊を擧ぐれば、近時、國際的機運に乘じて、運動競技の急速度の進歩と普及とは、自稱スポーツマン輩をして、學業を怠らしめ、品性を墮落せしむること、決して少しとせず。殊に、恐るべきは、生活の不規則なると、練習の猛烈なるとのために、彼等運動家志願の青年中には、種々なる疾病に襲はれて、中道にして斃るゝものも少からず。又、槍投げ砲丸投げベースボールの如き、屢々、觀覽者を傷づくることさへこれあり。體育奬勵といふ意義を除けば、その弊害、或は、學生劇に比して一層甚だしきものなきやを保すべからず。しかも、彼は嚴禁せられ、此は賞を懸けて激勵せらる。この盾矛の中に生きむことは、純眞なる青年の、頗る苦痛とするところならずむばあらざるなり。

六

然るに、更に、社會問題研究會を解散せよといふが如きは、明に、文部當局の頑冥に基くものとなし、舊式なる『勿れ主義』を强要するものなりとして、非難攻撃の矢は、文部當局に蝟集したるが如きも、こは、文部大臣自ら釋明せるが如く、文部省の發令するところにあらずして、各學校長が、自發的協議の結果なりと言へば、これを以て、直に文部當局を攻むるは、聊か酷に失するを思はさるべからず。されど、若し、各學校の社

會問題研究會が、最も嚴正なる研究のみを、事としつゝあるものならむには、學校長が、これを禁止し、若くは、解散せしむることの不合理なること、前已に說けるが如く、若し又、各學校の社會問題研究會なるものが、研究の領域を脱して、實際運動化せるものならば、學校長が之れを禁止し、解散を命ずることの、不合理にあらざること、亦前に述ぶるところの如し。而して、各學校の社會問題研究會は、東京に中樞を有する、社會運動の支脈なりとの觀測の下に、解散せしめられたるものなりといふを事實なりとすれば、今の日本の對策に、從順ならざるべからざる、直轄學校長の立場としては、誠に當然の處置として、これを詰とせざるべからず。

七

思想の取締、若くは抑壓は、却つてこれを激發せしむること、古來その例乏しからず。中世紀は、即ち基督教の全盛時代にして、基督教の教理に背反する思想の發表は、斷じて許されざりしなり。當時の民衆は、國民としては皇帝を頂き、教徒としては法王を戴き、政事的には皇帝より取締られ、思想的には法王より抑壓せられ、二重の束縛に、毫末の自由をも得ること能はざりしなり。かくの如き、極度の抑壓は、遂に、ベーコンの如き、デカルトの如き、勇敢なる自由思想家を生み、バイブルの教權を否定し、法王の抑壓より逃れて、ベーコンは科學の研究に專ら心を致し、デカルトは「我疑ふ故に我存す」と喝破して、彼一流の哲學を唱道し、共に自我の自覺に徹底し、依つて以つて、近世文明の端を發せり。これを、自我が、知識的に自覺したる時代とも言はゞ言ふべし。降つて、十八世紀に入り、佛蘭西革命に依つて、自我の自覺は、政治の上に起り、國民と國家との關係についての、在來の思想を根柢より覆し、國家は國民の國家にして、國王のみの國家に非ざるに、しかも、國王の壓制、苛斂誅求至らざるなきは、非道の極なりとして、遂にルイ十六世を弑し、完全に、專制政治を覆して、共和政治を布くに至りしなり。

八

然るに、此くの如き知識的自覺、政治的自覺に伴ふ變革も、尚未だ、腕と腦との力に依つて、額に汗して、自らを養ひつゝある、勞働者を幸福ならしむるには至らず。こゝに於て、彼等勞働者の自我は、經濟的に自覺して、經濟組織の改造を要求し、謂はゆる社會運動、社會政策、同盟罷業、救濟問題等の、論議及び實行、ます〳〵繁きを加ふるに至れりしなり。

此くの如く、歐洲に於て、三四百年の長時日を要して、漸く到達し得たる自我の自覺は、日本に於ては、實に僅に、最近五六十年にして、到達し得たりと言ふべきか。畏けれども、明治維新の後、先帝陛下の五ヶ條の御誓文中『知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ』と宣らせ給ひしに依りて、國民は、知識的に、自我の自覺を促され進んで、政治的に自我の自覺を生じて、國會の開設を見るを得、經濟的に自我が自覺して、水平運動となり、小作爭議となり、勞働爭議となるに至りしなり。勿論、甚だしく粗製濫造の嫌なきにしもあらずと雖も、起るべきものを起さしめ、有るべきものを有らしめたる點に於て、日本の五六十年は、歐洲の三四百年に、匹敵するものと稱すべきなり。

九

自我の觀念の旺盛は、人をして、利己的個人主義に墮落せしむ。これもとより、眞に自我に自覺したるものとは稱すべからず。此の自我の存在は、他の自我の存在に依つて許容せらるゝものにして、從つて此の自我が、自我の尊嚴を要求せば、他の自我も亦、自我の尊嚴を要求し、此の自我が利を欲する時、他の自我も亦、利を欲するものなることを思はざるべからず。かくて、此の自我と他の自我と、互助し協調し奉仕して、こゝに始めて、眞に、自我を擴大し、自我を永續せしむることを得べく、若し單に、この自我のみ尊嚴ならむことを欲し、此の自我のみ利せむことを思はゞ、こゝに此の自我と他の自我との間に鬪爭絶えざるべく、從つて、求めてしかも與へられず、叩いてしかも開かれず、依然として、人心の不安を除くこと能はず、思想の動搖を沈靜すること能はず、漸くにして、起るべきもの起り、有るべきものを有らしむることを得たりと雖も、しかも個々の問題、一として解決を見ること能はざるに至らむ。

十

貴族の水平社に對するが如く、地主の小作人に對するが如く資本家の勞働者に對するが如く、全然、相手の立場を理解することなく、同情することなき態度を以て、老人が青年に對することも、亦甚だしく妥當を缺く。青年は希望に生き、老人は追憶に生き、青年は理想に向つて邁往直前し、老人は過去を語つて僅に自ら慰む。從つて、青年の急進的なるに對して、老人の保守的なるは、自然の數なりと謂ふべし。これを以て、老人が青年をして、老人らしからしめむとするは、無益の努力にして青年が、老人らしからむと欲するは、有害の所行なり。然るに

世の老人達が、やゝもすれば、自己の思想を以て、青年の思想を律せむとし、世の青年達が、進んで、老成の言行を爲すを、喜ぶが如き風あるを、見ること少からざるは、甚だしく遺憾とするところなり。

十一

最近、東京帝國大學辯論部主催の、全國各高等學校學生の雄辯大會なるものを聽く。時恰も、彼等が、社會問題研究會の解散非解散が其の視聽を聳かしつゝある場合、辯士中の幾人かは必ずこの問題を掲げて叫號するか、少くとも、この問題に言及するもの、必ずや二三人にして足らざるべしと期待したりしに彼等の或るものは愛を說き、彼等の或ものは宗教を說き、彼等の或ものは反省を說き、一人の、研究の自由、思想の獨立を叫びたるものなかりしは甚だしく、裏切られたるの憾なくむばあらざりしなり。彼等或は、如實に、校長の訓誡を遵奉したるものなるか、抑も亦、君子は危きに近よらずと、當世才子の常套手段たる利巧を弄せしものなるか。

青年の世界は、華やかに、明るく、元氣横溢、生氣躍動するを特色とす。然るに、選ばれて演壇に立ち、公衆に向つて、自己の所懷を述ぶるに當り、老人の言はむと欲するところを言ひ、老人の語らむと欲するところを語るに止まるべくば、敢て青年を煩はすに及ばざるなり。繫累なく、情實なく、遠慮なく、忌憚なき、青年の叫びこそ、實に天の聲なり。然るを、左右を顧みて、衷心の鬱抱を吐露することを憚り、却つて、老人の口吻を模するが如きは、明に青年の墮落と言はざるべからず。

十二

言ふまでもなく、人生は、生老病死の衢なり、そこに老人あり、壯年あり、青年あり、少年あり、赤ん坊あり、男性あり、女性あり、動物あり、植物ありて、青黄赤白黑、五彩燦爛たるところに妙味あり。意義あり。然るに、青年も壯年も老人も、共に同一鼠色となり了りては、正にこれ生垣を見るが如く、何轉折もなくして、世も末なりと言ふべきにあらずや。冀くば、世の青年諸君、取締られ、若くは抑壓せらるゝが如き、實際運動に陷らざる範圍に於て、社會問題、思想問題、風教問題、信仰問題等、苟も、青年が取つて以て、研究の對象の爲すに足ると信ずるものあらば、自由にこれを研究し、思想して、大膽にこれを發表するに躊躇することなかれ。何を以てかこれを言ふ、曰はく、此くの如きは、即ち、惡化にもあらず、又、危險にもあらざるが故なり。

（大正十四、一、十一）

學校教育を社會生活より分離する迷妄から

安部磯雄

學生の社會科學研究會に對する當局者の壓迫が近頃問題となつてゐるが、現在に於ては主として官立學校の夫れに對して干渉が加へられてゐるだけであつて、未だ私立學校には及んでゐない。併しそれは決して安心の出來ないことであつて、今後私立學校にも多少の壓迫の手は延びて來るかも知れぬ。今は當局者の干渉の及んでゐるのは主に高等學校であつて、大學程度の學校に對しては少いやうであるが、併しそれも將來はどうなるか分らない。高等學校の問題であるからとて大學に關係がないといふことは考へられない。何故ならば高等學校の制度は殆んど外國の大學に相當すべき制度であつて、米國に於けるカレッヂは日本の高等學校に相當するものであると云つて好い。英國に於ても、獨逸に於ても、米國に於ても、高等學校といふやうな名のつくものは殆んどなく　外國では中等學校から直ちに大學に進むことになつてゐる。高等學校は中等學校に屬すべきものであるか　大學に屬すべきものであるかといふに、それは寧ろ大學に屬すべき性質のものでなければならない。此立場から考へれば、高等學校内に於ける社會科學研究會に干渉することは取りも直さず大學生の思想研究に干渉することになる。外國でも日本でも大學生は紳士として取扱はれてゐる。外國などでは教師が學生に演説をする時には學生諸君と云はずにヤング、ゼントルメンといふ、其意味から云へば高等學校の學生、若くは大學生に向つて種々思想上の取締りをするといふことは紳士として學生を取扱ふ道ではない。此度の文部當局者の態度は甚だ時代思想を理解しない悲しむべき態度である。我々は高等學校の學生若くは大學生に對しては完全なる思想の自由を許さねばならぬ。それは當然のことである　其理由は明白であつて、第一、學校に於て社會科學研究會を取締る時には學生は他の方法に依つてさういふ思想に接する機會を作ることが出來る。學校の教室に於て接しなくとも、書物に依つて、雜誌に依つて、講演に依つて　若し學生がさういふ方面の研究を望むならば自由にそ

れらの思想に接することが出來る。從つて學校に於て社會科學研究會の存在することを許さぬ方針をとるのは結局所謂頭隱して尻隱さずの諺の如く餘り効果のないことである。第二に、青年時代に於ては總ゆる思想に接觸せしむることが教育の目的である。社會科學の研究の如きは其一つの好い機會である。殊に將來大學に進んで專門に理科、工科、醫科の如き自然科學を修める學生は社會科學を研究する機會は殆んどないから、斯かる人人は高等學校に居る中にそれに接する機會を得ることは彼等にとつて非常に幸福であつて、又教育の立場から云つても彼等に各方面の思想に接觸せしむることは必要である。此場合それは必しも進歩的思想に限つたことではなく、又保守的と反動的であるとを問はず總ゆる種類の思想に接觸せしむることが肝要なのである。一體日本の學生は中學時代に於て偏した教育を受け、思想に於ては保守的、傳統的な思想を多く吹き込まれてゐる故に、其儘社會に出る時は一方に偏した狹い考を持つた人間となり易い。其點から云つても高等學校、大學に於てはなるべく一方に偏しない、總ゆる方面の思想に接近する機會を多く與へなければならない。第三に、思想を壓迫する時には結果は却つて反對になることが普通である。今回の如く文部當局者が學生の間に社會科學思想の普及することを恐れて其研究に對して壓迫を加へると、大概の場合には目的を達せずして反つて其思想の宣傳を助けることになる。從つて忠實に社會科學を研究する人々から見れば文部當局者の此度の干渉の如きは寧ろ歡迎さるべきものであつて、そのために社會科學の思想が宣傳されることになるのである。以上述べた理由から云つても、學生の社會科學研究會を解散せしめる政府の方針は極めて拙劣であると云はなければならぬ。

我々の常に希望するものは自由であつて、それが總ての方面に於て行はれることが人類の目的であるやうに思はれる。自由の第一歩は思想の自由といふことであつてそれが根本でなければならない。國家は常に出來るだけ國民の思想の自由を尊重することが必要である。行爲はそれが有害なる行爲である限り法律に依つて嚴重に取締らなければならぬが、思想は假令其當時の立場から危險有害と見らるべき性質のものであつてもそれを取締ることなく、自由に放任して置くことが最も當を得た策である。日本の社會を見る時に何れの方面に於ても自由が尊重されてゐない。自由は悉く束縛されてゐないまでも少くとも阻害され妨害されてゐるのが現在の社會の實情である。日本人を外國人に比較する時に、概して甚だ快活ならざる五月雨頭の陰欝な氣分に一般が滿ちてゐるが、其主なる原因は日本人に自由を

享樂することが出來ないためであつて、言論の自由があつて總て人間は內に思ふ處を吐くことが出來るやうになれば日本人ももう少し快活になることが出來ると思ふ。元來思想は其性質上取締ることが不可能であつて、當局者は寧ろ其自由を尊重する態度をとることが望ましいのであるが、又實際に於て思想は決して恐るべきものではないのである。それが外に出て社會秩序を亂し、治安を害するやうな場合には法律がそれを取締ることが出來るのであつて、恐るべきは思想其物ではなく、寧ろ表面に現れて取締を必要とするやうな有害な行爲が恐ろしいのである。文部當局者は學生の思想に就いて心配してゐるが、本當に心配すべき點は寧ろ學生の行爲にある。學生が腕力を振つて亂暴を働いたり、學校當局者を毆つたり、旅行先の宿屋で暴れて器物を毀したりするやうな行爲こそ嚴重に取締るべきであつて、斯くの如き行爲は學生の恥辱であるばかりではなく、社會的に見て寒心すべき傾向なのであるが、學生の社會科學の研究の如きは何等懸念すべき事柄ではなく、自由であるべき學生の思想研究に對して當局が干渉するが如きは時代遲れの間違つた態度であるといふより外はない。

社會科學の研究といふことは寧ろ文部當局者の歡迎すべき事柄である。古來我日本人には哲學がないと云はれて居るが、それは哲學の有無の問題ではなく、元來我國には思想の發達がないといふのが本當である。殊に社會に對する理解もなく、理想もないのが我國人の實際の狀態である。現代の政治家、實業家と云はれる人々に就いて見ても、其點に於ては殆んど失望するより外はない。外國の政治家や實業家の中には思想家として立派な多くの人物を見出すことが出來る。而も此政治家は勿論實業家中にさへ立派な思想家のある外國の例に比して、我國の政治家、實業家の中に公表し得べき自己の思想を持合せて居る人物の甚だ稀なることを知るのである。彼等の大多數は理想も何も持たない人間に依つて占められてゐることが、やがて我國の政界、實業界を墮落せしめる結果となつたが、其根本の原因は全く現代の教育に缺陷があるが爲めであつて、我國の政界、實業界の墮落は今日の教育の失敗を證明するものに外ならない今迄の教育は技術家は作つたが思想家は作らなかつた。現代の殆んど總ての人間が利己主義者であつて、今日の學生の大體の傾向が又利己中心主義であり、其考が物質的である。斯くの如き大勢の中にあつて、其中の小數でも學生の一部が社會科學の研究に興味を有つといふことは喜ぶべき現象でなければならない。それをもう少し強く云ふならば、社會科學を研究することが、やがて今日の教育の缺陷を補ふとも云ひ得るのである。我

國の政治家や實業家は何に依つて自己の思想を養つて來たかといふに、それは主として支那哲學、殊に昔の政治家は孟子などを讀んで自己の思想の根底とした。今日の政治家や實業家が若し孟子を讀んだならば、其主義の理想的なるに反して、現代の社會の餘りに現實主義的なることを感じて、孟子の思想の餘りに夢の如きを嘆ずるに相違ない。私共は孟子を讀んで猶興味を感じることは出來るが大體に於て今日此種の本を讀む人間は少くなつて居ることは爭はれないのであつて、昔の人間が支那哲學などに依つて教育されて來た如く、現代はそれに代るものとして社會科學あるのみである。近代の大多數の學生は倫理學で教育することは最早困難であつて、又學生もそれに對して興味を有たないが、社會科學は現代の青年の興味を牽く力を持つて居るのである。社會科學の對象は社會と國家である。從つて社會科學に興味を有する學生は常に社會、國家に對して比較的廣い關心を持つ。換言すれば其思想に於て自己中心から團體中心に進むことが可能である。斯くの如くして從來の支那哲學や倫理學に代るに社會科學が學生の興味の中心となり、それに依つて從來の教育の缺陷を補ふことが出來るとも云はれ得る社會科學の研究に對して、當局者がそれを危險視することは全く謂れなきことであると云はなければならないのである。

併し以上私の云つたことに對して必ず反對論はあるに相違ない。現に文部當局者の如き社會科學の研究の結果は社會問題に人々が興味を有することになり、延いては其思想を社會主義にまで進めることになつて、我國の社會のために危險であると考へて居るのである。今一歩を讓つて斯かる社會科學の研究は危險思想に導くものであるとしても、それを防止するには又自ら他に途がある。直向からそれを禁壓することは決して賢明なる方法ではない。或る一の思想を防止するには他の別の思想を以てするより外はないのである。運動競技に於けるフエアープレーは、競技の際に審判の不公平や、應援隊の力に依つて勝たうとする卑怯な精神を排斥したものであつて、實力と實力の競爭を意味するものであるが、思想上のことに關しても正に斯くあるべきであつて、若し文部當局が社會科學の研究を以て危險と考へるならば、たゞ無暗にそれを壓迫しやうとするが如き卑怯な方法を以てせずに、宜しく他の公平なる方法に依るべきである。曾て獨逸のテユビンゲン大學に於てかういふ事件があつた。獨逸の大學に於ては神學部が一部門となつてゐるが、テユビンゲン大學は昔から宗教に就いては、自由思想を抱く教師が少くなかつた。然るに大學の教師は思想に關しては絕對の自由を許されてゐるから、宗教に關して如何に自由思想を持つてゐ

ても、そのために其教師の職を奪ふことは出來ない。從つて保守的宗教家はテュビンゲン大學の神學部に如何に慊らぬ感じを抱いてゐても、そこでは常に思想の自由が保障されてゐるためにどうにもしやうがなかつた。で彼等はかういふことを當局に願出た。それは其當時保守的な思想を有つ有名な宗教家があつたが、其人をテュビンゲン大學に入れて貰いたいといふことなのであつた。此事は非常に興味のあることである。大學の神學部の自由思想に對抗するに保守思想を以てしたのは、思想上のことに關しては所謂思想を以て思想に對抗するものであつて、そこにフエアープレーがある。文部當局が社會科學の研究を危險視してそれを解散せしめやうとするのは明かにフエアープレーの精神に逆ふものである。若し當局者が眞に社會科學の研究に對して心配するならば、それに對抗する他の思想研究を奬勵すれば好いのであつて、當局者に自信さへあれば二宮尊徳の教でも、又浪花節が思想善導に有効だと考へるならば浪花節を以てするも差支ない。さうなればそれは初めてフエアープレーであると云ひ得る。私共に反動的行動は恐れるが、保守的思想や反動的思想は恐れぬ。學校などに於てさういふ研究團が幾つも出來るならば、我々は飽く迄も公平な態度を以てそれに對抗することが出來る。現に日本中の總ゆる學校には、宗教に對する自由が許されて居るために、佛教青年會もあれば、基督教青年會もある。而も政府は決してそれに干渉することをしない。將來は天理教の團體なども學校の内に出來るかも知れぬが、我等は斯くの如き總ゆる團體の出現を歡迎するものである。種々な研究團が幾つも出來ることは結局其中の最も有力なものが最も多くの青年を牽きつけることになるのであつて、それに關しては自由競爭に任せて當局などの干渉すべきものではない。英米の大學などでは學生が社會主義の團體を作り、各大學の所謂社會主義に屬する青年聯盟が成立してゐる位であるから、我國などに於ても未だ社會主義を標榜しない社會科學の研究團が高等學校の中などに出來て、それが聯盟して研究し、實際運動をするのは不思議ではない。今日では斯くの如き思想を受け入れることの出來る程日本人の頭は進んで居るのである。

乍併斯くの如き理由あるにも拘はらず、何故に文部當局者が學校内に於ける思想研究會に壓迫を加へるのであるか。それは學校と社會の關係が我國に於ては歐米諸國に於けるそれと餘程趣を異してゐることが一の原因となつて居るのである。西洋に於ては學校は社會生活の一部分に過ぎないが、我國に於ては學校生活と社會生活は非常な距離があるのであつて、學校生活は恰も兵營生活の如く、その時代は一種特別な時代であるかの如

く考へられてゐる。譬へば服裝の如きも學生時代は制服を着るとか、和服でも粗末な綿木綿に袴をつけて如何にも書生らしい服裝をするのであるが、それを社會が要求し、又それが學生の特色であるとされてゐる。然るに歐米の學生の服裝はさらに普通人と變ることなく、それだけでは大學生が街を歩いて居る時には教師か學生かを見分けることが困難な位である。それに反して我國では學生が學校を卒業すると其翌日から服裝が變つて學生時代の面影を止めない。そのどちらが好いか悪いかは別問題として、然し斯くの如き習慣に於てさへ學校と社會との全然別種の生活であることを示すものであつて、學生とは學問が專門であつて、他の社會上の出來事、政治運動であるとか、社會運動に目をやることは悪いことであるといふ結論が其處から出て來るのである。此意味から云へば學生が社會科學の研究をしたり、實際運動を起したりするのは學生らしからぬことであると云つて此度のやうに當局者がそれを壓迫するのに不思議はないが、しかしそれもおかしな話であつて、我國に於ては普選が行はれるやうになつても選擧權者は二十五歳を以て資格とするのであるが、フランスの如く滿二十歳で選擧權者であるならば、當然高等學校や大學の學生は選擧に際して投票をすることが出來るし、又政治運動にも携はることが出來るのであつて、學生は實際政治に關係してはいけないとは義理にも云へなくなつたものである。今日でも學生が社會と接觸する現象は決して珍らしいことではなく、又當局も學生は社會事業に關係してはならぬとも云はぬ。學生が社會事業に携る一例としては帝大學生などのセツツルメントがあるが、それは貧民に接觸したり、勞働者の教育をすることを目的とするものであつて、斯くの如き例は歐米に於ては普通の事になつて居る。而も此事さへも文部當局者の眼から見れば學生の領分以外の仕事と見えるかも知れないのであつて、社會科學の研究の如きも學生の本分に背くと思はれるのは、文部當局者の頭に學生とは要するに社會生活から離れて特種な生活をするものであるといふ觀念があるがためである。若し果してさうであるならば文部當局者の思想が保守的である證據であつて、自體其考からして甚だ變である。學校は決して兵營の如く見るべきものではなく、學校生活は社會生活の一部分であつて、學校はなるべく社會に接近することが必要なのである。此點に文部當局者の考慮が費されたならば、社會科學研究の如きは獎勵こそすれそれを防止するやうな必要は生じなくなるのである。

當局の迷夢を醒せ

文學博士　三宅雪嶺

二十個の高等學校中、社會科學研究とか、社會思想研究とかの名で會合するのがあり、それが穏かならぬとて、禁止する事になつたのは、何の順序に於いてしたか、詮索すれば種々の事情あらうが、文部省關係の歴史から觀、又始めたと云ふ位にしか思へない。何等珍しい事なく、活き辭引連は尋常普通在り來りの事として居らう。三派協調とこそ云へ、歴とした政黨内閣の下、かかる事あるのは怪しからぬと云ふのがあるが、政黨内閣も一定せず、中堅なる憲政會は世帶主で普選案を通つた事があり、政友會は普選を危險として衆議院の解散に與つた程であり、その上首相も外相も三菱の看板を掲げ、他も資本家と切つても切れぬのであつて、平素から社會主義など毛蟲のやうに思ひ、苟くも之に近寄る嫌ある者に對し、反感を催さずに居れまい。特に自身の利益を考へず、國家社會の上より斷然處置せねばならぬと心得て居るのであつて、正心誠意に出でて居ると云へぬでもない。根本に立入れば、由つて來つた所の掩ふべくもないけれど、自ら意識する限り、國家の爲めに社會主義の蔓延を防がねばならぬとし、文相は管轄範圍で爲し得べき所を爲し、閣僚も尤もの次第として首肯いて居らう。今に初まつた事でなく今に初まつたにしても不思議ないのであつて、高等學校に贊成を與へた所、臨機の處置の宜しきを得たものと思はれやう。それが政府を取捲く所の空氣であり、寧ろ政界の大部分を取捲いて居る。社會主義の噂が世間に高まつても、政界は容易に動かず、之を考へやうともせず、何處かで寢言を聞く位にしか感じない。文部省の處置は當然過ぎる程當然と思はれやう。當然としなくても、不當然とするのがなく、あれば例外に屬する。それならば其の儘でよいかと云ふに、從來の教育がさういふ狀態で經過し來つたと云ふのであつて、教育の實質より考へて、遺憾とすべき事が尠くない。日本のみの問題でなく、最も教育の進んだ國でも、疑問を招いて居るけれど、日本で今の儘でよいとするのが大いに誤つて居るを察せねばならぬ。

蘇格蘭ウエルスで議會を創設した時、教育が肝要と云ふので、同時に大學を創設したが、議會の空氣と大學の空氣と別の方向を指し　教育の効果ないのを怪しむだ事がある。日本では教育が明らかに効果を表はし、官吏は大學出身を順當とするに至つたが、憲法政治となつて之に適當なる教育を何處に見出したか、私立學校でいくらか見出しても、官公立學校は服從を奬勵し、强制するに止り、自由の精神を發揮するが如き　絶えて無かつたとして差支へない。自由の語は封じ込まれて終つて居る。議會開設以來卅幾年、自由の語を聞いて血の湧く思ひしたものが何處にあるか。教育は自由の語を拔きにして居り　ただ政黨內閣の初まつてより、いくらか之を匂はして居るに過ぎない。國民に元氣がないとか、意氣が揚らぬとか云ふのは、一の原因よりせぬにしても、自由の精神に餒えて居るのに基く所あるを忘れてはならぬ。此處は學政當局者が眼が利かず、力の及ばんなだ所とせねばならぬ。日本で自由の精神が發揚せずに、憲政の運用を見るが、略ぼ憲政の整ふか整はぬに、社會問題が起り、前の自由に代らうとするの勢を呈した。自由は兎に角も數百年來の歷史があり、朧ながら見當が付くとし、社會問題は歷史が淺く、何を意味するかを解せぬのが相應にある。世界に社會主義の語が出て僅に百年、一般に注意を惹いたのは數十年來の事、日本では漸く名を聞く位いであつて、社會問題、社會政策は勿論、社會學でも何んでも社會の語の付くものは、警戒を要するやうに考へられて居る。年齡が長ずれば刺戟を受け難く、兎角若い者は刺戟を受けるのに容易であり、新に世界に起つた運動も、日本で若い者の中に注意を拂ふのがあり　動もすれば熱を加へさうであつて、頭腦の固定し、骨化したものは眉を顰め、一大事として處分法を考へずに居れない。帝國大學には社會問題、社會政策等の名で研究する者あつても、社會主義を振翳すのがありさうに考へられなんだ。それでも數十人が勞働運動に携はるとあつて、當局者は意外に感じ、警戒する所があつた。高等學校の學生が社會主義にかぶれるなど、もはや眉に火が付いたやうに思ひ、極力消し止めるに努めねばならぬやうになつた。學生が徒らに動搖し、課業をおろそかにするは十分に警めねばならぬが、社會に興味を感ずるは決して惡い事ではなく、早く興味を感じてこそ、社會で運動することも出來、適當な方法を案出する事が出來るのである。社會主義は今尙ほ議論眞最中であつて、利害得失を決定するのが難しく、大學教授でも惑ふを免かれず、個々學生で適當に判斷し得るを望む譯に行かぬ。併し社會主義と云はうか、非社會主義と云はうか、社會に關する問題は、畢竟誰が取扱ふか。現に高等學校に居り、大學

を經て社會に出づべき者でないか。大學出身者はさういふ事に與るべきでなく、社會とかを口にして運動するのは、私立か何かあふれ者の爲る事と云ふのは、所謂危險をいよいよ危險にするの所爲でないか。國民の意氣を高めるには、自由の精神を吹き込まねばならぬ、社會の活動を健全にするには、高等教育を受け得る者をして社會に興味を感じ、身を以つて社會に投ぜしめねばならぬ。學生生徒は悉く教員となるべきでなく、教員となるは一部分に過ぎない。教員は學生生徒が悉く教員となるやうに指導すべきでない。教員は自ら擔任することの外に出でないとならば、校長又は特殊職務を帯ぶる者が、學生生徒に社會の興味あるを告げ知らすべきである。教員となるには、或ひは傍目も振らず、課業に專らなるもよからう。國家社會に活動する者は、國家社會に興味を覺え、何處までも活動し　倒れて怨む所ないやうにするがよい。

　日本の社會も進歩發達と共に、何等かの變化を免かるべきでなく、如何にかして變遷の宜しきを得るやうにせねばならぬ。マルクスが間違つて居るならば、別に適當なる案を立つべきである。社會主義が惡るければ、之を改造するに憚るべきでない。何にしても世は何時までも同一狀態で續かず、多少變更するの已むを得ないならば、高等教育を受けた者の進んで變改に從事するに若くはない。それには何よりも社會に對する興味、及び運動に堪へるの氣力を欠いてはならぬ。興味及び氣力は、大學を出た後に養つてよいと云ふかも知れぬが、さうは行かぬ。丁年を越ゆる事幾年まで學校外に對し、見ざる、聞かざる、言はざるの狀態では、習ひ性となり、書齋に閉ぢ込もるを好み、十字街頭に出づるを厭ふやうになる。課業を怠つたり、規則を犯したりするのは嚴に取締るべきにせよ、社會に興味を感じ之に關する知識を得やうとするは、よし未熟でも、相當に用捨し、事によつて奬勵するを當然とする。何分にも社會問題は半世紀以來注意を惹き來り、明かに解釋するに困難であり、個個學生の頭に不適當と思はれても、不適當か何うか、今少し進行を見て居つてよい。校長又は或る職員が之に關り合ひ、誤りを正せば更によい。社會問題は複雜を極め、一身の生涯を費して尙ほ盡くる事が出來ない。在學中より興味を感じ、出でゝ全力を注ぎ、いくらか解決に近付くの希望がある。興味ない者は何程理解力が鋭くても、特別の結果を獲らすに至らない。曾て自由の精神を鼓吹せしめた學生當局者は、社會に對する興味を消え失せさせてはならぬ。學生を取締るの親切心は、やがて無教育者をして社會に活躍せしむる所以となる。二十個の高等學校中、校長又は或る職員が、進んで學生を會し、社會問題を討

究し、他日社會に活動するに利益を得せしめるのが無いか。學生生徒が卒業の肩書を得るが爲めに學ぶが如く、學校の職員がたゞ徒らに規則を勵行して足れりとするは、教育の甘味を失ひ、ダシ殺にするものでないか。日本は何處もかもダシ殺にならうとするの疑があり、其邊で要心せねばならぬ。形式萬能の夢は早く破るべきでないか。學政當局者及び一般教育家は日本の將來を考ふるに於いて人後に落ちる者でなからう、篤と此邊に思慮するやうにありたい。

社會思想研究團の解散に就て

法學博士 堀江歸一

學生が團體を設けて專攻の學科に關する研究に從つたり、專攻外の問題に就て、知識を交換したりすることは、今日に始まつた次第でない。近年學生の趣味とする所の漸く多端なるに隨ひ、斯る團體の種類も自ら增加したるやに見受けられる。社會思想研究團の如きも詰り學生の趣味性の然らしめる所として、起つたものであつて、今日の如く學生の知識欲が擴大し、殊に社會萬般の問題に對して、研究心を持つに至つた以上は、斯る團體の發生亦當然とす可きである。此種の團體は其性質上會員たる學生の自治的精神に據つて、行動す可きこと勿論であるが、尙ほ適當の指導者を置いて、學生に嚮ふ所を示したり、或は研究の方法を敎へたりしたならば、學生の思想向上に資する利益の大なるものありと考へられる。學生が教科書以外に何ものにも眼を觸れない、社會の狀勢が如何なる方嚮に動いて居るかも知らず、只管幾點幾分の多少を爭うと云ふのも、學生々活の一型式には、相違ないであらう。斯る學生々活は官立諸大學が夙に奬勵し、鼓吹したものであつて、誰某は何點何分の記錄を破つたとか、何某は其れにも勝る點數を得たとか云ふことを世間に吹聽して、學生をして教授の口授した講義筆記の暗誦以外に何ものをも知らざる點取り蟲たらしめたのである。斯る教育の下に、一定の鑄型に造り上げられた人物は官界に入つて、法

令の解釋、先例の適用を生命とする官僚と爲り、循吏と爲るに適するかも知れないが、活社會に出でて、學問上の知識を實際に應用するに當つて、劣敗者となることは已むを得ざる所である。

多年官僚養成を主眼とした官立大學の教育法に對して、學生自身の間に反感を懷き、自由を叫ぶ者の生ずるに至つたのは、誠に時勢の然らしめる所であつて、彼等が社會思想研究團を組織し、講堂教室内に於て、教授講師の口授する舊時の定まつた教科書的知識以外に、何等か日新しき知識を求めようとするが如きも、青年學生の純眞を欲する熱誠の現はれと認められる。學生監督の任に當る上長有司の如きは、彼等の斯く旺盛と爲り來つた研究心なり、熾烈を加へ來つた知識慾なりを指導し、學生をして正しき方嚮に於て、社會思想を理解し、又社會其ものを正視せしめる道に出でなければならない。斯の如くして學生が學窓に居る時代から、社會に對して廣い知識と正しい見解とを持つたならば、成業の曉に、社會に出でた場合に、彼の點取り蟲の輩に比較して、活動上に有利であり、又意義ある行動を爲すを得るものと考へられる。

近來部下の官私大學を通じて、學生の間に社會思想又は社學科學研究に關する團體の設立したことは、右の見地から考へて、私の贊成を辭せざる所である。隨つて官憲が其支配下に居る官立大學の同種團體に對して、現行の壓迫を加へることを以つて、甚だしき曲事であると認めざるを得ない。加藤内閣は政黨を基礎として組織されたものであり、立憲の大道を遵守することを聲明したものであるにも拘らず、其の文政上に於て文部當局者の爲す所を見れば、個陋保守を旨とし寸毫も進歩自由の跡の見出されざることを遺憾とする。學生が英語の練習を目的として行ふ英語演劇を禁止したり、整理の爲めに、失職する軍人に糊口の道を與へることの必要から、專門學校以下の諸學校學生に軍事教育を強要したりするが如き、何れも文部當局者の反動的意見に基くものであつて、官僚内閣の下に於ては兎に角、政黨内閣に於て、似合しからざる所業であるとして、吾人の唾棄するを禁ずる能はざる所である。社會思想研究團に對する文部省の態度の如き、即ち從來幾多の機會に於て示された固陋頑冥の思想から割出されたものであつて、文部省としては當然爲す可き所を爲したと云へるであらうか、廣大なる社會上の見地から云へば、斯の如きは漸く萌芽を發するに至つた學生の對社會的興味を摘取して、將來に成長する餘地なからしめるものであつて、教育上に於ける一大退步としなければならない。教育は講堂に於ける教授の講義のみに依つて、與へられるものでないと

同時に知識は教科書の埒内に限られるものではない。教育を完成し、知識を向上するには、社會に對する理解を重しとし、又社會の活事實を取つて、資料に充てることを必要とする。然らば當局者が一片陋隘の見解に基いて、社會と學生との接觸を遮斷するの當らざるや、論を俟たざる次第である。

唯玆に考ふ可き二個の問題がある。第一社會思想の研究に從ふ學生の種類なり、範圍なりは如何なる程度を以つて、限りとするか、第二斯る研究に當る學生が實際運動を爲すに當つては、如何なる方面に發展せしむ可きかと云ふことが即ち其れである。

第一の問題に對しては、我國に於て、客臘文部省が高等學校内に於ける社會思想研究團に解散を命じた爲めに、世間の物議を招いたことがある。私は解散の命令が當を得て居つたかどうかに、就ては、直ちに判斷を下すを得ないが、高等學校程度の學生の社會思想研究に對しては、大なる注意を要することを認める。蓋し彼等は概して年少であつて、丁年未滿のものもあり、社會思想を研究し、理解するに必要なる基礎的知識を收めて居らない。經濟學、社會學、政治學の一斑に通じないで、一足飛びにマルクスや、クロポトキンに趨り、一知半解の知見を以つて、社會組織や、國家組織を云々し、幼稚なる頭腦に先入した斷片的知識を以つて、社會の事相を批判するの危險に至つては、勘少なりとするを得ない。高等學校學生の如き、豫備教育の時代に居る者が漫に社會思想を云々するが如き、武術の一端をも修めざる者が正宗村正の銘刀を弄ぶの嫌なきを得ない。彼等をして常識教育の一端として、社會思想に親ましめる必要があるとすれば、第一には彼等に先づ基礎的知識を授けること、第二には適當なる指導者を付することを條件とす可きである。文部省が之等の注意を爲さず、單に社會思想研究團に對する壓迫を以つて、能事としたのは、固陋の僻の之を然らしめたものとするの外はないのである。

第二に社會思想の研究に從ふ學生が研究の結果を實際に施すに就いては、私は飽くまでも彼等に向つて、隱忍自重の態度を守ることを勸告せざるを得ない。今日の經濟組織は資本主義に根據を置くものである。社會思想の研究者が此組織を肯定するか、否定するかと云へば、否定の方面に居る可きは勿論である。既に研究者が現行經濟組織を否定するものとして、如何なる態度に出づるか。直接行動に依つて、目的を達しようとするが如き、年少客氣に驅られる輩の陷り易き所であるが、斯の如きは唯自己の一身を傷けるのみであつて、事功を擧げるに、何等の益はない。經濟組織の改造にせよ、社會組織の改造にせよ、何處までも議會政策に依らざる可からざるものである以上

は、其事は政治運動に依つて、決せらるべく、隨つて研究者の干與す可き所ではない。研究者としては、先づ自家の思想を清新にし、豐富にし、思想的に社會萬衆を支配することを期すべきのみである。斯くて餘りに研究者が机上の狹きに束縛される嫌ありとすれば、社會思想の研究によつて、了得した社會の缺陷を救濟する爲めに、社會救濟運動に從うことは、當然學生に許され可きことであると考へられる。如何にして貧民窟の生活を改善す可きか、貧民の兒童に知識を授け可きものであるか、將た又病床に惱める人々に慰安を與へ、治療醫餌を備へ可きかと云ふが如き諸種の案件に對しては、社會問題に理解あり、且つ貧民の生活に同情ある學生の至情に依つて、解決することを要する。社會思想の研究者は徒に上司長上に反抗する態度に出です、自家の身邊に働く可き場所の備へられて居ることを認めるのが、自他に取つて、大なる利益であらう。

文部當局及び社會思想研究會員に對する希望

内ケ崎作三郎

一

一月上旬より二回東北の寒空を巡遊して十六日の朝に郊外の書屋の人となつた。中央公論よりの課題は正午過ぎに受けた。餘す處一夜あるのみ、しかも來客の約束あるが故に一そのこと御斷りをしようかとも思つたが、問題が興味あるので、引き受けることにしたのである。

私の理解するところでは與へられたる問題は官立高等學校に於ける社會思想研究會を文部省が解散を命じたのが果して善いか惡いかといふ批判であると心得る。さて批判する前に材料を集めなければならぬ。文部省側の言分も聞きたい。解散を命ぜられたる團體の反對意見を叩いて見たい。しかしかゝる時の餘

務は當頭ない。そこで材料がないので、具體的議論をすることは躊躇せざるをえない。勢ひ抽象的議論となるはやむを得まい。

最初に考ふべきことは公平なる立場よりみて、高等學校に於て社會主義研究の會合の成立は望ましいことなりや否やの檢討である。實をいへば既に存在してゐた學校もあるのであるから解散を命ぜられたので、かゝる疑問を發するだけ野暮の骨頂だといふ批難もあるであらふ。しかしもう一應この問題を吟味するは決して徒勞でない。

高等學校の目的は文化教育を授け、且つ大學教育の準備をすることであると私は考へる。實際は外國語偏重の嫌ひがあるが、その眼目は一種のリベラルエヂケーションを授ける教育機關である。中學の四年より五年は訓練を主とするが、高等學校にはより多くの自由の空氣が流れてゐる。人生根本の問題や自國の歴史、文化、世界文化の發達、近代科學の進歩等について十分なる理解を青年に與ふべきである。青年も亦進んで學校の課程を利用し、更にそれ以上に進んで、より完全なる人たらんとする修養をするを目的としてほしい。此意味に於て、高等學校の教育は一方に偏せず、あらゆる事物に對する興味を感ぜしめたいのである。哲學や宗教や文藝の研究は勿論奨勵して差支へはない。特に青年は青春期に於ては理想に憧憬するものである。人生の理想を哲學や宗教や文藝に求むるは誠に喜ぶべきことである。かくして彼等の品性の基礎が築かれ、情操が淨められ、理想が高められるのである。私は七年制度の高等中學校で學んだものであるが、途中で學制が改革せられて、高等學校と改稱せられ、最後の三年は大學豫科であつたが、この時代に於て多くの益友を作り、恩師の刺戟を蒙り、眠れる靈魂が次第に醒めかけて來たことなど、追懐すれば愉快なる事どもが多い。

二

然らば社會主義の研究も差支ひはないではないかといふ問が起る。一般的に考へて差支はあるまい。青年から考ふれば社會主義に於て一種のユートピアを想像するのである。また彼等は實生活より離れてゐるので、社會現象を極めて單純に判斷する傾向があるから、資本主義が悪いと聞けば矢も楯もたまらず、直ちに突進したくなるから社會主義は現代の缺陷を補填する唯一の救主と心得て、之に興味を有するもあるに違ひない。更に進んで、社會主義に基いて社會改造の先驅者となつてみたい、犧牲者となるも敢て辭せずと悲壯なる覺悟を有する極めて小

の青年學徒もあるに違ひない。然らば社會主義の研究を主とする思想團體が或る學校に現出するに至つたのは當然の當然といつてもよいかもしれぬ。

しかし高等學校程度の教育機關に於て社會主義は儒教とか、佛教とか基督教とか、哲學とかいふものと同一視せられない特色があることをも私は認めなければならない。

儒教とか、佛教とか、基督教とかいへば、いづれも何千年の歴史があつて、多くの國々と多くの時代に於て試驗濟となつて、その長所美點と短所缺點とが十分に闡明せられてゐる。しかるに社會主義は極めて近代的運動なるが故に十分に試驗濟みとならず、國家として之を試みてゐるは露西亞位のもので、獨逸も幾分か之を行つてゐる。英國に於ては勞働内閣成立すると共に失敗してゐる。米國に於ては政治的勢力猶未だ甚だ微弱である。佛蘭西に於てもエリオの内閣が永續することが出來ない。伊太利に於てはムツソリニーの國粹内閣が猶存續してゐるのである。

かゝる形勢から見て社會主義は世界の一大運動ではあるが、まだ〱試驗濟みとならないのであるから、官立高等學校に於て、堂々として團體的組織をして研究をやるはやゝ仰山すぎる傾きはありはしまいか。個人が研究するは差支ないが、あまりに表向にしてまでやらなければならない理由も不十分だと考へる。

もう一つ述べたいことがある。それは一の運動にあまり早くからはまると中年に至つて興味を失ふことが往々にしてあることを忘れてはならぬ。私が明治二十四年に仙臺の第二高等學校に入學した頃に上級生中に多くの青年雄辯家があつた。が私は後世恐るべき人々と思つてゐたが、そのうち二人は大學までも半途にして了つて、全く社會的存在を失つた。之に反して私のやうな演説の晩學生は（私は大學一年生頃から稽古をした。その前は殆んど試みたことがないといふて差支はない）永續きをしてゐるのは面白い。社會主義の研究もあまり早くやり出すと中途で厭氣が生ぜぬとも限らぬから、かゝる場合には大學に進んでからやりまじめても遲くはない。特殊の個人を除いては、高等學校から研究をせずともよかりそうにも思はれる。

三

さて文部省側でどういふ考へか私は直接之を聞く機會がなかつたことを遺憾とする。いつぞやの新聞に文部當局は高等學校に存することの種の團體は中央にある或團體のために操縱せられ

る恐れがあるといふ口吻を洩してあつたのを見た記憶がある。若し私の記憶違ひとあれば訂正するに吝なるものでない。私はかかる事が斷じてはないと思ふが、若しかゝる杞憂を當局者に懷かしむるやうな關係があるとすれば各學校のこの團體の會員は眞面目に考慮しなければならぬ。萬々一この風聞が正しいとすれば、學校内に一種の政治運動がはいることゝなるのであるから、當局者として之を禁ずるのはやむをえないのでもあるかもしれぬ。學生諸君は單純であるから、そんな馬鹿氣た事があろもんかともいはるゝであらふが、學生の團體を利用して、之を社會的勢力の一部としたいと操縦する智慧者はないとも限らない。若し文部省がこの點を心配してやつたことゝすれば、官立學校の事でもあるから仕方がないと言はねばなるまい。

しかし思想に對するには思想を以て對抗するは最も賢明なる方法である。思想を壓迫して何の利益もない。蓋し一思想のあらはるゝにはそれ丈の社會的背景や、原因が存在するのである。この背景なり原因なりが存する限り、その思想がなくなる筈があるまい。

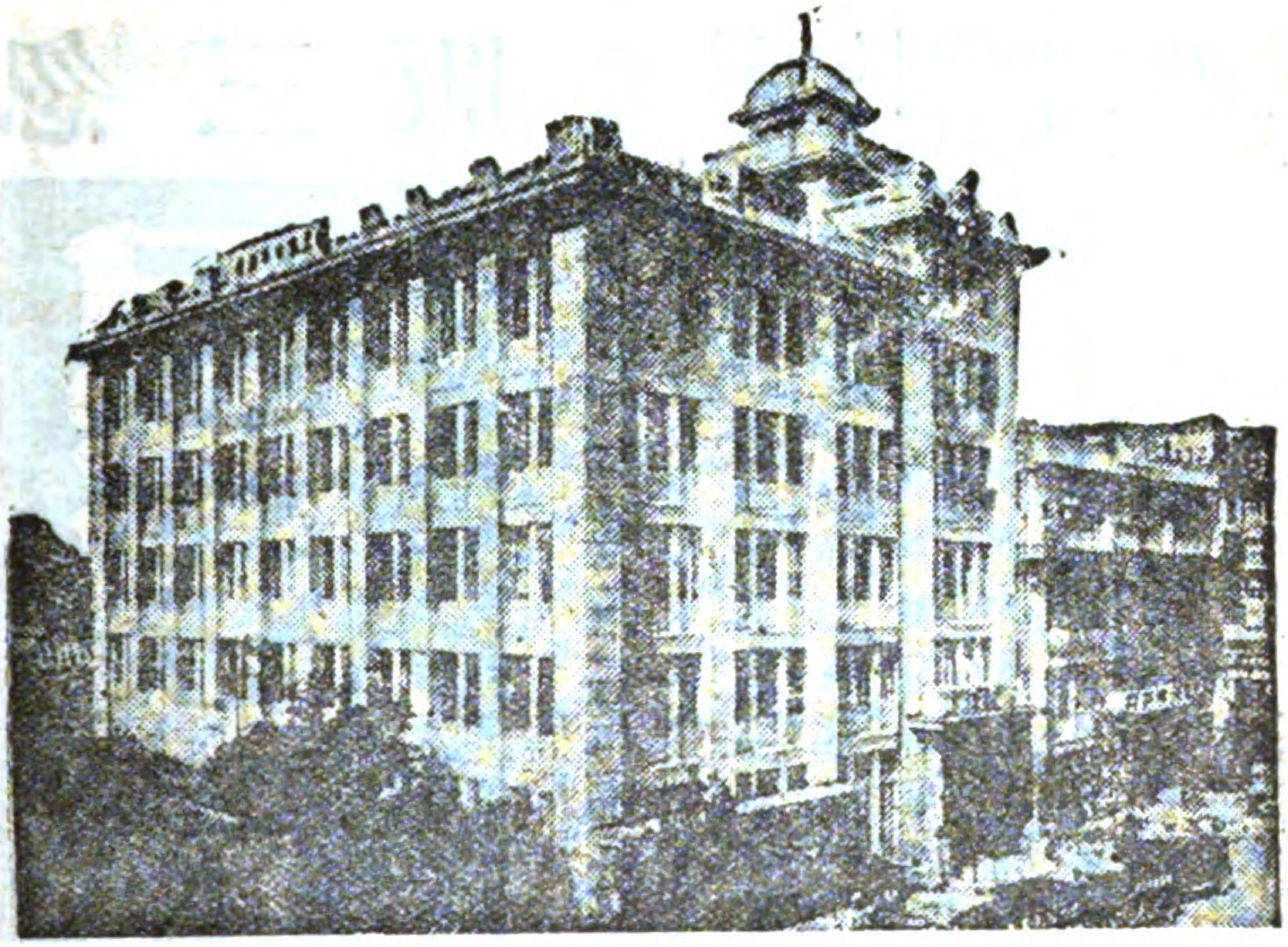
若し或る高等學校に於て、社會主義研究の團體が生じたとする。學校長は之を壓迫するよりも、自分もしくは適當なる教授をして社會主義の批判をして學生の參考に供すべきである。壓迫は却つて學生の熱心を加ふる丈である。エマーソンは迫害の歷史は砂で縄を綯ふが如しといつたのは尤である。

又學生諸君も各學校に申しあはせたやうな同一名稱を有する會合にせずもよいでないか。名を捨てゝ實をとればよろしい。又各學校の團體との關係もあつさりして置いてよろしい。どうせ研究會であつて、實行團體でないし、學校にはかゝる團體の存在する餘地がないから、飽まで研究團體とすべきである。又中央より講演者を招待するは差支はあるまい。しかしいかなる事についても御手先とならぬやうに用心しなければならぬ。日露交渉も芳澤公使とカラハン氏との間に次第に圓滿な終局に達せんとしてゐるが、日本政府は露西亞政府に對して、互に宣傳機關を設けぬといふ取極めがその一條項となるらしい。從來露西亞は盛に宣傳を行つて來たのであるから、中央の操縦者が露西亞と關係のもしあつたりしては迷惑千萬のことであるから、學校内の研究會は斷じて自主獨立であるべきである。

私は明治四十一年より四十四年まで三年間オックスフォード大學に學んだ時、フエビアン協會オックスフォード支部の會員に三四名の友人がゐたので、この運動のことを聯想せざるをえ

ない。人の知る如くこの運動はバーナード・ショー氏やシッドニー・ウエッブ氏等によりて、一八八二年に組織せられた會合である。會社主義の主張によつて英國の政治を導こうとするにあるが、最初は主としてロンドン市政を指導することが眼目であつた。選擧毎には大活動をやつた。後次第に英國全體の政治的問題を取扱ふやうになつた。オックスフォード支部は二十四五の學院に散在する數十名の學生の結合であつた。各學校に多くも四五名、皆無の學院もあつたやうだ。折々研究會をやる、對論會をやる位で、別に宣傳もせず、壓迫もない。しかし會員にはパンフレットを頒布してゐた。私の友人のフエビアンはいづれも學者的の人物が多かつたせいか、極めて落ちついたものであつた。

私は我國の高等學校内に社會主義の研究團があらはれることがやむを免ぬとならばオックスフォードのフエビアン協會支部のやうなものであつてほしい。自主的で、研究的で、飽までも進んでほしい。思想界の混沌期に於て之を光明に導く分子として働いてほしい。自ら混沌たるものに墮せないやうに、眼は高く理想を仰いで進んでほしい。（一月十七日朝）



東京日日新聞

（朝夕刊）

完備した通信網、迅速な報道、穏健な批判、汪溢した趣味、新聞紙が當に具ふべきあらゆる施設と企畫とを全世界に向つて誇示し得るわが『東京日日』。今や帝都第一の發賣紙數を有し、西『大阪毎日』と相呼應して、斯界に君臨してゐるのであります。

東京丸の内　東京日日新聞發行所

忽四版

矢田挿雲著
清水次郎長

◆四六版六百余頁箱入美本――定價二円八十銭　送料二十銭
◆水島尓保布装幀

矢田挿雲が「日本一の名文」で、清水の次郎長といふ「日本一の男」の生涯を描いたものだ。面白いか面白くないか、報知新聞の読者に聞いてくれ。本当にタンカの切れる、血の出るやうな小説、人間らしい人間―男の中の男―を描いた小説で、維新といふ大きな芝居の楽屋を書いてゐる。神田伯山の「次郎長」には血と骨とあるが、挿雲の「次郎長」には、その上更に肉と皮がある。世の所謂「文藝講談」と一緒にしてもらい度くない。

東京丸の内
報知新聞社出版部
振替東京四二〇六五番



小形光琳

――本朝畫人傳の八――

村松梢風

一

本阿彌光悦が、家康から洛北鷹ケ峰の地を賜はつて、其處に居を相したのは、元和元年の事で、其の時光悦は五十八歳であつたが、家康は其の翌年七十五歳の老齢を以て駿府の居城で歿したのだつた。光悦と家康とは極く關係が深かつた。それは光悦の父光二の代からのことで、光二は本阿彌宗家の長女妙秀と結婚して分家を立てた人だつたが、本阿彌代々の家業である刀劍の鑑定、磨礪、淨拭の三事にかけては特に秀でた技倆があつて、早くから今川義元や織田信長等の寵遇を受けてゐた、或年駿府の今川家へ行くと、其の時分は家康がまだ竹千代時代で、人質となつて今川家へ行つてゐた時のことで、其の時竹千代の小脇差の磨礪を云ひ付かつたことがあつた。それが最初で、其の後家康から御用を仰せ付かつた事も度々だつた。光悦の代になつてからは、家康は特に光悦の人と爲りを愛して屢々眷遇を賜はつてゐたが、元和元年大阪歸陣の砌所司代板倉伊賀守に向つて「本阿彌光悦は何としたるぞ」と尋ねられた。其の時伊賀守が「光悦は壯健に罷り在りまするが、風變りの人物のことゝて近頃は京都にも居飽きたによつて何處ぞ邊土に住居を致したいと申して居ります」と申し上げると、「然らば近江丹波等より京都への道に、不要心で辻斬追剝等の出るやうな所があるであらう、左樣な土地を廣々と取らせて遣はすがよい」と家康が云つ

たので、光悅は地所を詮索した結果、丹波街道に沿ふ鷹ケ峰の麓に、東西二百間、南北七町の土地を拜領して愈々其處へ移り住むことになつたのだつた。そも／＼鷹ケ峰といふ處は、京都の西北に當つて、王城より僅か廿町餘しか離れて居らぬが、地域は餘程高くなり、東は加茂山、比叡山、如意ケ嶽と相對し、北には鞍馬、貴船を脊負ひ、鷹ケ峰は西に當つて纔かに二町許り、其の麓を紙屋川が流れ、南は一面に開けて洛中洛外を一眸の下に集めてゐる、風景絕佳の土地であつた。光悅は此處に間口六十間の屋敷を構へて自分の住居に宛てた。光悅が鷹ケ峰に住むことになると、同時に其の一門眷族や、友人や、或ひは彼の配下にある各種の工人達や、さういふ人々が翕然として鷹ケ峰に集まつて來た。光悅はそれらの人々に各々土地を與へて住はせた。忽ちの間に、其處へ五十七軒の屋敷が門を並べて造られたのだつた。學者あり、茶人あり、陶工あり、蒔繪師あり、筆屋あり紙すきあり、大工あり、殆んど餘す處なく網羅されてゐた。寺も四軒建てられた。爰に於て荒寥たる草原は一朝にして筆硯勞作の美術の里と變じ、風流韻事の淵叢となり、又唱題不斷の法華の聖域と化してしまつた。鷹ケ峰の名聲は天下に籍甚たるに至つて、縉紳貴族高士雅客競ひ來つて歡を共にし、智識學僧も亦之を崇めて歸依を捧げた。それは古今に未だ例の無い大規模な藝術的集團生活が現出されたのだつた。

此の有名な鷹ケ峰の一類の中に尾形宗柏といふ名が加はつてゐた。其の屋敷は、光悅の屋敷と向き合つた間口二十間の構へで、其の左隣りは是れも間口二十間の、幕府の御用達茶屋四郎次郎の屋敷だつた。併し、茶屋四郎次郎にしても、尾形宗柏にしても、此處の住居は別莊であつた。

尾形の本宅は京都中立賣にあつて、其の家業は、女院御所と關東將軍御臺所の、吳服御用を勤めてゐた。そして、當主宗柏の母親は法秀と云つて、本阿彌光悅の姉であつた。さういふ關係から、光悅が鷹ケ峰を經營するにあたつて、宗柏も其傘下に馳せ參じたのだつた。

尾形家は、今でこそ京でも指折りの大家となつたけれども、當主宗柏の父道柏の時代には赤貧洗ふが如き有樣だつた。其の家は、北野天神の傍らにある緒方神社といふ小さな祠の神官をして、僅かな其の奉納物に依つて辛うじて生活をしてゐる位に過ぎなかつた。併し、道柏の父、宗柏には祖父の伊春といふ人は、一時將軍足利義昭に仕へて祿五千石を食んだ人だつた。それが、義昭の沒落後浪人して窮迫に陷り、道柏の代になつてから貧しい乍らも緒方神社を預るやうになつたのだつた。

處で、此の尾形家といふのは、更に遡ると、非常に古い系圖

を持つてゐる九州の名門の後裔なのであつた。

尾形氏は元は緒方と稱した。其の遠祖は大神太郎惟基と名稱つた。此の先祖の出生については一つの神話めいた傳説が殘つてゐる。それは、昔日向國鹽田といふ處に大太夫といふ德人があつた。一人の娘の名を花御本と云つて、容顏も鄙には稀らしく麗はしかつた。そこで聟になりたいと望む者も澤山あつたが、兩親は聟撰みをして容易に聞き入れず、後園に屋を造つて娘を住はせて置いた。すると何時しか人知れず一人の若者が花御本の許へ通ひ始めた。若者は何處から來たとも知れないが、立烏帽子に水色の狩衣を着て、年頃二十四五だが優美な顏かたちで、夜毎々々に通つて來るのだつた。何時しか其の事が父母に知れた。父母は駭いて、娘を呼んで問ひ糺すと、娘は羞らひ乍らも漸う男との契りを打ち明けたけれども、其の戀人の身柄の事は娘自身も何一つ知らないのだつた。父母は益々呆れてしまつた。水色の狩衣に立烏帽子は覺束ない話、是れが太宰府の近くなら京家の人と推量する處だが、此の邊ではそんな事はありさうもない。併し、たとひ上﨟であらうと下﨟であらうと、娘の心にかなふた男とあれば聟にして遣り度いが、さてどうしたら其の男の行先きが分るであらうかと思案した揚句、母は或る手段を娘に教へて其の通りにするやうにと云ひ付けた。其の夜も戀人が來てそして曉方に歸る時、花御本は母から與へられた苧環の端に針を貫き、其の針を戀人の狩衣の頸の上に刺して遣つた。夜が明けると親の鹽田の太夫は、娘子息家人等四五十人も伴れて其の糸のしるしを頼りに尋ねて行つた。すると糸は山を越えて行く程に、行けども〳〵絶えず、最後に日向と豐後との境の嫗嶽といふ山の、とある大き「洞穴の中に引き込まれてあつた。穴の口で立ち聞くと非常に苦しみ呻く聲がしてゐる。誰も恐れて近付く者はなかつた。其の時花御本が穴の口で糸を引かへて「此の穴の底には如何なる者の侍るぞや」と云ふと、穴の中から「我は汝の許へ夜な〳〵通ひつる者なり、然るべき契も緣も盡き、此の曉頸の下に針を立てられ、大事の疵にて、今は命も絶えんとする、我本身は大蛇なり、在りし形ならば出でゝ見え奉り度くこそあれ共、日頃の變化今は盡きぬ、我の貌は畏れ給ふべきなれば見え奉らざる、よに名殘も惜しくこそ覺ゆれ」と云つた。「縱ひいかなる貌にて在すとも、日ごろの情いかでか忘れ申すべき、出でゝ御顏見せ玉へ、つゆ畏るしとは思ひ侍らず」と云ふと大蛇は穴の中から這ひ出て來た。長は知れないが太さは五尺もあり、眼は銅の鈴を張るが如く、口は紅を含めるに似て、頭に角を戴き、耳を低れてゐる。頭には髮があつて獅子の頭のやうである。其の恐ろしげなる貌にも似

大蛇はおめ／＼と涙を浮べ、頭ばかりを差し出した。花御本は我が衣を脫いで大蛇の頭に打ち懸け、頤の下の針を拔いて遣つた。大蛇は喜んでから云つた。「汝が腹の內に一人の男子宿せり、已に五月になりぬ、若し十月にして顯れたりせば、日本國の大將ともなりべかりしが、五月にて顯はれぬ、九國には並ぶ者あるまじ、かゝる役しき者の種なればとて必ず捨て玉ふな、我れ子孫の末までも守護すべし」と云つて、大蛇は穴の中へ引つ込んで死んだ。大蛇は嫗嶽明神の垂跡であつた。花御本は月滿ちて男子を生んだ。其の子は成長するに從つて容顏もゆゝしく、性質も猛かつた。母方の祖父の片名を取つて大太童と呼んだが、裸足で野山を走り步くので足には夏でも皸が切れてゐた。そこで異名を皸の童と云つた。皸の童は、成長して大神太郎惟基と名乘つて、剛勇無双の人物となつた。――是れは名高い苧環の傳說である。

惟基から五代の孫に、緒方の三郎惟義といふ人があつた。惟義は大蛇の末といふ驗であらうか身內に蛇の尾の形と鱗があつた。そこで尾形又は緒方と名乘つた。傳說の子の後裔は、惟義に至つて初めて歷史上著名となつた。壽永年間、平家は木曾の冠者の爲めに都を追ひ出されて、主上を初め一門悉く天涯の漂客となつたが、やがて筑前國太宰府に着き、此處を假の皇居と定められた。此の時豐前の國司刑部卿三位賴輔の子賴經に向つて、平家追討の院宣が下つた。賴經は當國の住人緒方三郎惟義を召して下知を傳へたので、惟義三萬餘騎にて太宰府に押し寄せ、平家は一溜りもなく落ちのびて、筑前國山鹿の城に逃げ入つたが、惟義又もや十萬餘騎にて寄すると聞き、此處をも落ちのび、豐前國柳といふ所へ逃げた。が、其の柳の御所にも七日しか留まれなかつた。やがて此處へも惟義が押し寄すると聞えたので、一門悉く小舟に乘り移り、風に任せ浪に從つて漂うてゐたが、漸く四國へ落ちのびたのだつた。其の平家の末路の哀れな光景は源平盛衰記等に詳しく書かれてゐる。併し、縱ひ敗殘の平家とは云ひ乍ら、殆んど緒方惟義一人の爲めに九州から追ひ出されてしまつたのである。惟義の勢知るべきである。其の後判官義經が罪を得て都を落ちる時も、義經は九州へ行つて惟義を賴んで支へて見やうと思つて、大物ケ濟から船を出さうとしたが、平家の怨靈に仇されて波風高く、何遍船を出しても磯へ打上げられてしまつた。さうかうするうちに敵兵は追ひ迫つて來たので、主從三百餘騎はちり／″＼ばら／＼となつて、義經の行方も知れなくなつたのだつた。惟義は義經に一味の廉を以て賴朝の憎む處となり、上野國へ配流になつたが、後免されて國へ歸つて、大友能直の下に雌伏して一生を終つた。

惟義以後の子孫は零落して振はなかつたが、何時の頃からか都近くに出て來て、一と頃は淺井家に仕へた時もあり、惟義からでは十數代の孫、緒方新三郎伊春の時、前に云つたやうに足利義昭の家人となつたのだつた。伊春より道柏、其の子宗柏と、累代字を新三郎と云つた。是れから私が記述しようとする尾形光琳は、此の尾形宗柏の孫に當るのだつた。

二

前にも云つたやうに、尾形家は、宗柏の父道柏の時までは非常に貧乏だつた。それはあながち道柏一人のせいばかりではなく、道柏の父の伊春といふ人も正直一遍の世故にうとい人物だつたので、浪人以後は極度の窮乏に陷つたのだつた。餘程貧乏だと見えて、道柏の時に「恁んなに貧しくては、祖先の名を瀆す恐れがあるから」と云ふので、それまでの緒方の姓を尾形と改めたくらゐだつた。

そんなに貧乏な尾形家へ、當時隆々たる本阿彌の娘がどうして嫁に行つたのかと云ふと、それは尾形家が聞えた名門であるので、仲人口に乘せられて、それ程貧しい家とは知らずに娘を緣付かせたのだつた。が後で直ぐに其の貧乏なることが分つたので、娘の父親の光二は大層此の緣組みを後悔したのだつた。併し、光二の妻の妙秀は有名な賢婦人だつたので、これをなだめて「貧しい者の方が宜しう御座います。富貴の人はとかく、けんどんで疎くなり易いものです。それに聟どのゝ親御は正直正路な人で、大變孝行だつたといふことです。此の事は慥に聞いて居りますから間違ひはありません。さういふ先祖の善心に勝つた家の寶はありません。それから第一夫婦仲の事は御心配に及びません」といつたのだつた。それは事實だつた。娘自身も尾形家へ嫁したことを悔ゐてはゐなかつた。彼女は實家の親達に向つても「尾形の家の人達はそれは〱心掛の美しい人達です、だから今は貧しい暮しをして居りますけれど、末は必ず榮えるだらうとわたしは思ひます」と云つたくらゐだつた。

彼女――宗柏の母も賢婦人だつた。さうして彼女の云つた言葉はやがて事實となつて現はれて來たのだつた。

徳川秀忠の室は、淀君の妹で、淺井長政の娘だつた。淺井家は滅亡したけれども其の娘達の身には幸運が惠まれたのだつた。秀忠の室が入輿になつたのは文祿四年のことだつた。其の時、尾形新三郎宗柏は、有緣に依つて御供の員に加はつて、其の後も常に式臺に詰めて御用を承はることになつた。そして崇源院が關東の御臺所となつた後は、尾形家で其の呉服の御用を勤めることになつた。又同じ縁故によつて大阪の淀君からも、

々用命を蒙つた。さうかうするうち、元和六年六月になると、秀忠御臺所の姫君が入内になられて、東福門院と申された。そこで尾形家は、更に又女院の御用をも承はることになつた。かうして尾形家は圖らずも、女院並びに關東御臺所の呉服御用達を勤める家柄となつたのだつた。

それ迄は、尾形家は武家であつたのが、宗柏の代から町人となつて、屋號も雁金屋と呼んだ。かうして尾形家は俄かに富限となつたのだつた。そして京都中立賣に大きな家を構へて盛大に暮してゐた。鷹ケ峯の家は別邸に相違無かつた。其の時代の呉服業といふものは、現今とは趣きが變つてゐて、寧ろ染物の方が主であつた。下繪に依つて染物の注文を受けるといふ遣り方であつた。又染縫といふ種類もあつた。是れは染の外に縫箔を施すことである。とにかくかういふわけで、尾形家は呉服の商ひを始めて、俄かに富限者となつた。雁金屋の富がどれ位あつたかといふことは分らないが、宗柏の代では、關東の御用だけでも年額五六十貫目を上下してゐた。銀六十目を金一兩とすれば、小判八百兩乃至千兩に上るのだつた。東福門院の御用は、元和九年の分で見ると、七貫八百六十四匁になつてゐる。當時千兩の商ひをする者は大した商人だつた。

宗柏は道柏の長男で、其の下に男の兄弟ばかり三人あつた。次男は出家して日佛と云ひ、日蓮宗の有名な高僧で、後に京都小川頭妙顯寺の上人となつた。宗柏は大變な子福者だつた。男女合せて十五人の子があつた。勿論一つ腹の子ばかりではなかつた。長男を新三郎宗甫と云つた。是れが家督を相續した。此の人に就いては別段大して傳はつてゐることもないが、大猷院上洛の時洛中の家毎に銀三錠を賜はつた。當時雁金屋は四つの家を有ち、四戸の課税を納めてゐたので、十二錠の銀を下賜された。處が宗甫は是れを固辭して一戸の分だけを受けたといふことが傳はつてゐる。家光の上洛は寛永十一年七月の事である。此の時供奉の同勢は前後合せて三十萬七千餘人に達し、六月廿日に江戸を發して、七月十一日入洛した。同月十八日家光は至尊の外戚の資格を以て參内して初めて龍顔を拜した。當代の帝は正明天皇と申す女帝に在しまし、それは秀忠の女東福門院のおん腹より生せられた御方であつた。次に仙洞、女院兩御所へも參上し、獻上物を奉り、御料を增し、それらの儀が滯りなく終つた後、親王公卿諸門跡を始め、地下官人の端まで殘る方なく銀或ひは時服を贈つた。且つ將軍家上洛のみやげとして、京中へ白銀五千貫を賜はつた。當時京都の家數は三萬五千四百十九軒で是れを配分すると毎戸銀百三十四匁八分二厘になつたといふことが京都の記録に殘てゐる。初め家光が卅餘萬の

同勢を率ゐて上洛すると聞えた時、かくも多人數を以て上洛は何か仔細あるべしと洛中の風評取々で、禁裏諸公家に於ても暗に疑惧したのだつたが、結果は頗る圓滿平穩で、上下に行き亘つて供進恩惠殘る所なかつたので、京中舉つて手を額にして其の德を謳歌した。蓋し幕府の意志は、京中不滿の聲を鎭壓せんがため、故らに大勢を引率して、將軍一度動けば三十餘萬の兵立所に集り、しかも百數十里の長途を幾日にして往來すとの威を示すと同時に、敬上惠下の意志も亦斯の如しと、所謂恩威兩全を實施したのだつた。家光は序でに大阪、奈良、堺等も巡視して、京都の流儀で、みやげとして一般の地子を免除した。彼の此政策は非常な成功で、それ迄は京都でも大阪でも德川とは緣故が薄い爲め人心が根柢から幕府を信賴せず、頗る治め難い土地だつたが、此の恩惠を垂れた爲め果して人心が漸く幕府に歸嚮するやうになつて、此の時以來京大阪の人々は將軍の事を「お江戶樣」と云ふやうになつた。維新前迄さう云つた。――

―是れは、尾形家の記錄に殘る一事から、當事の事を演べて見たまでゝある。

宗市の弟妹は男女合せて十五人あつたが、中には早世した者もあり、女はそれぞれ緣に付き、男では別家した者もあつたが、其の中の一人の弟は佛門に入つた。其人は法號を日意と云つて、是れは後に叔父日便の後を聞いで妙顯寺の貫主となつた。其の次の弟は宗謙と云つた。光琳は、此の宗謙の子であつた。

宗謙は本名主馬と云つて　妾腹の子だつた。で　家督は取れなかつた。併し、宗謙の母親は、初めは宗柏の正妻ではなかつたけれ共　本妻が早く沒した爲め其の後妻に直つて正式に雁金屋の内儀となつた。そして其の宗柏を自由に操つて誰よりも勢力を振つてゐたが併し、彼女に取つて只一つ思ふに任せぬものは雁金屋の相續問題である。彼女としては自分の生んだ子を相續人にし度い。そこで彼女は夫の宗柏を巧に動かし　一方先妻腹の宗市に向つて樣々の壓迫を加へるといふやうたわけだつた。

雁金屋の暖簾の蔭には淺間しい暗鬪が常に渦卷いてゐた。が、流石に宗柏も鷹ケ峯の一類であるくらゐだから、閨門の紛鬪に卷き込まれてもさう間違つた所置は取れなかつた。そして順當に宗市が相續をしたのだつた。さうなると失意に沈むのは宗謙とその母親とだつた。母子二人は雁金屋の身代を他人にでも奪はれたやうに思つた。そして二人は總領を憎み、呪ひ怨んだ。宗謙母子と宗市とは非常に仲が惡かつた。こゝに至つては最早、本阿彌家から道柏に嫁した法秀が云つたやうに「尾形家は心掛けの正しい」一人ばかりではなくなつてしまつた。それも

畢竟するに雁金屋の富の罪だつた。法秀の母親の妙秀が　娘を貧乏な尾形家へ與れた時「身の貧なるは苦しからず、富貴なる人はけんどんにてうとくなりつるやらんと心元なし」と云つたのは至言であつた。

處が廢れ掛けてゐた宗謙の運命が急に芽をふいて來た、といふわけは　兄の宗甫が比較的早く死んだのだつた。其の時宗甫には子があつたか無かつたか分らないが、とにかく宗甫の跡目は宗謙が繼いだ。多分其の時宗甫にも子があつたらうといふことは、弟宗謙でさへ二人の男の子の親であつたといふことでも考へられる。

宗謙の子は　長男を藤三郎と云ひ、次男を市之丞と云つた。市之丞が、後年の尾形光琳である。そして、それは萬治元年の生れで、父宗謙が三十八歳の時の子であつた。宗甫が歿して宗謙が雁金屋の當主となつたのは、市之丞が生れてから二年のち萬治三年のことだつた。宗謙は四十一歳であつた。市之丞より五年後れて、三男が生れた。三男は權平と云つた。是が、後の乾山であつた。

宗謙と其の母親は今や自然に目的を遂げて得意の時代となつた。宗謙といふ人は、別段惡人でもなかつたらうが、併し特に心掛の美しいといふ言葉で飾るわけにはいかない人であつたかのやうにも考へられる人物だが、――其の事に就いては後に述べるが――とにかく中途でうまい具合に雁金屋を自分の物にして、――たとへそれが兄の病死といふ偶然の機會から惠まれた幸運であつたとは云ひ乍ら、――其の上自分の子に光琳乾山と二人までも後世に名を傳へる天才を生み出して家名を擧げさせたといふのは、何んにしてもその身に具はる德のあつた人と云はなければならない。が、又、一方から觀察すると光琳乾山に依つて家名は不朽にしたけれども、肝心の尾形家は、宗謙の子供達の代で絶えてしまつたのである。尾形家の歴史を看ると、彼の本阿彌の老尼の言葉を藉りずとも、そこに何かしら佛家の因果律めいた感慨を起させずにはおかないものがある。それは追ひ／＼說くことにする。

三

處で雁金屋は、宗謙の時代になつて益々身代を太らせた。それは代々の富の蓄積による自然の結果であるが、同時に、其の時代が極めて順調であつたことにも由るのである。それは將軍家綱及び綱吉初政の時代であつた。德川幕府の基礎は家光の代に於て既に磐石の上に据へられたので、以後は最早天下に亂を思ふ者が根絶してしまつた。國内は全く靜謐に歸し上下擧つて

泰平を謳歌するのみの世の中であつた。社會制度が完備するに伴れて産業が增進し、交通は頻繁になり、都會殊に大江戸の繁昌が生み出され、文化に浴して人は奢侈を覺へ、都鄙を通じて四民の生活が著しく向上して來た。それは直ぐ後の元祿の極盛期に到達しようとする前の順風帆に孕むが如き時代であつた。さういふ時代に於て、社會の最上級を顧客とする呉服所の雁金屋の營業が繁昌しない道理はなく、身代の太るのも當然である。其頃雁金屋の商ひがどれ位あつたかと云ふと、延寶六年の記錄に依れば、同年の正月から九月迄の賣上代金は、合銀九十四貫五百八十一匁と出てゐるさうである。銀貨の換算は面倒であるが、とにかく大した金額なのである。そこで、雁金屋は諸大名へも澤山金を貸し付けてゐた。家屋敷も京中に六ケ所ばかり持つてゐた。

然し、宗謙といふ人も凡庸兒ではなかつた。彼は幼少の頃は父宗柏と共に鷹ケ峰の邸に多く暮したゝめ、其の頃光悅に就いて書道畫道を學んで何れも其の骨髓を得てゐた。彼は浩齋と號し、書道に於ては同門の小島宗眞と並んで二名手の稱を得た位であつた。光琳乾山兄弟の藝術的天稟は其の父から受け繼いでゐると云へるのだつた。然し、宗謙は、諸藝の中でもわけて能を好んで、是れは餘程熱心にやつた。で子供達にも皆能を稽古させた。市之丞も幼少の時から能を稽古した。兄弟の中では市之丞が一番筋がよくて、自身も大變能が好きだつたので、熱心に稽古した。同時に彼は繪も大變好きだつた。繪は一番初めは父に習つたが、少しやつてからは本式に師を取つて狩野派を學んだ。けれども、彼の師承に關する說は一定しないのである。或ひは狩野安信と云ひ、狩野常信と云ひ、山本素程と云ひ、或ひは又住吉具慶とも云ふのである。從つて其の時代の逸話は傳はつて居らぬのである。併し、兎に角狩野派を學んだと云ふ事は動かし難い事實である。

三男の權平は、子供の頃から靜かな性質で、能のやうな事は餘り好きでなかつた。併し繪は相當好きらしかつた、が、是れも中兄市之丞程ではなかつた。權平が一番好きな事は讀書だつた。好學的なことでは兄弟中で一番抽んでゝゐた。

處で、最後に長男の藤三郎はどんな傾向であつたかといふ問題である。猶其の前に、吾れ〳〵はかういふことも考へられる。こゝに三人の兄弟があつて、其の中の二人は非常に豐かな天分を有つてゐたゝめ千年の後迄も輝くやうな名を殘してゐるのに反して、一人だけは凡庸兒な人間に生れ付いたゝめ、ありふれた人間の一生を送つて、そして死ぬと同時に其の名も消えてしまつたといふ場合である。其の時吾れ〳〵は、其の無名の一人

に對して、彼はよい兄弟をもつて幸せであつたとは云ひ得るだらう。一人でもよい子を有つた親は幸はせであるが、餘りによい兄弟を有つことは寧ろ悲慘の部にはいる。値の石ころも値にあれば普通の存在である。が、生なか稀代の名石の間に並び置かれたならば、石自身に愧死しなければならなくなるだらう。光琳乾山の兄藤三郎の立場はてうど其のやうな比喩に相當するのであつた。此意味で私は藤三郎を氣の毒な人だと思ふのだ。

藤三郎は非常なる遊蕩家だつた。彼に關する事では、遊蕩家であつた爲めに父から勘當を受けてゐたといふこと以外に餘り傳はつてゐない。讀者は、西鶴の小説中の一主人公を聯想して、そして藤三郎といふ人物にあてはめて考へて見れたならば、大した相違はあるまいと思ふのである。それは丁度島原の全盛時代であつた。社會の文化は一時に發翔して、風俗は奢侈浮靡に流れ、江戸も京都もおしなべて、惡所の全盛此の時に如くはなかつた。西鶴の小説は單なる假構の文章ではなく其の當時の世相の活描寫であつた。かやうな時勢に於て雁金屋の總領息子として生れた藤三郎が遊蕩家になつたことは寧ろ當然過ぎる現象である。然し藤三郎も、父に習つたと見えて光悅流の字をよく書き、書では光琳乾山の二弟を遙かに凌いでゐる。かの吉野太夫を身受けして艶名を後世に遺した佐野重孝の風流韻事は無かつたにしても、大家の若旦那として相當の教養を受けた人であることは其の筆蹟を見ただけでも肯かれる。

然し、餘程遊蕩が劇しかつたと見えて、彼は到頭父から勘當されてしまつた。勘當されても、何れは何處ぞから根引の花と共に浮世をよその侘住居をしてゐたものと思はれる。是れが宗謙の頭痛の種だつた、雁金屋の大黑柱に蟲がくひ始めたやうに思はれた。宗謙は、弟の身で雁金屋を相續して得意の時代に入つたが、同時に一方家庭内に於ては其の後頻々として不幸に襲はれた 寬文十一年に宗謙の母秋場氏と娘が死んだ。此の祖母が亡くなつた時、光琳の市之丞は十四歲、乾山の權平は九歲だつた。長兄藤三郎の年齡は不明だが、同じ年に彼もまた娘を亡なつてゐる。して見れば、彼は旣に妻帶して子まである年配であつた。是れが雁金屋の不幸の始まりで、それから五年後の延寶四年には宗謙の妻木下氏と、娘二人とが死んだ。更に又同七年には娘二人が死んだ。數年の間に宗謙は母と妻と娘五人とを亡なつたのであつた。男三人女五人の同胞のうち、女は全部死んでしまつたのだつた。流石の宗謙も重なる不幸でがつかり氣を落してしまつた。そこへもつて來て總領は勘當中だつた。宗謙は餘程無常を感じたに相違無かつた。彼は諸所の寺へ田地や金

を寄進したりした。深草の寶塔寺に田地一反歩ばかり寄進したのも延寶八年のことだ。其の時彼は先祖代々や自身の妻子の名前などを一々認めて永代供養の料として寺へ上げた。それにも係はらず彼は其の名前の中へ自分の先代である腹違ひの兄宗甫の名を書き入ることをしなかつたのである。宗甫に對する惡感情はそれ程根深く彼の心に喰ひ入つてゐて拔けなかつた。其處に宗謙といふ人物の救はれない性格があるのである。

其の頃から宗謙は老衰で病褥につきがちだつた。最早齡が齡なので何時變があるとも知れなかつた。其の頃になつても嫡子藤三郎の勘當は許されなかつた。宗謙も藤三郎が實子である以上は憎い道理はないのだが、何故か彼は此の長男を嫌つてゐた。親子の仲へはいつて取りなしを試みた人もないのではなかつたが、宗謙は決してきかなかつた。

「私には他に子供が二人もあるからあのやうな心得違ひの者を家に入れる必要はない」

と宗謙は云ふのだつた。で口を利いた人も手を引いてしまふのだが、さてさうなつて來ると、傍觀してゐられないのが市之丞の立場だつた。兄の勘當が許されなければ、いきほひ自分が雁金屋の家督を繼がなければならなくなる。事實父の量見はさう決つてゐるらしかつた。其の爲めに近年大名方へ金を用立てる時なども、證書の宛名を自分と市之丞の二人の名にしたり、或ひは市之丞一人の名儀にしたりなどしてゐるのだつた。然し市之丞の身になると、長兄を差しおいて家督を相續する氣はなかつた。其の頃は既に彼は繪を以て身を立てる決心もしてゐた。藝術の爲めに一身を捧げようと覺悟した彼に取つては、御所樣御用達でも呉服所の營業には餘り興味もなかつた。寧ろ自分は氣樂な境遇に居て藝術三昧の生活を送り度いといふのが彼の希望でもあつた。そこで市之丞は樣々に說いて兄の勘當の許されんことを父に乞ふた。其の結果、宗謙の心も動いて、藤三郎は永年の勘當を許されて中立賣の本宅へ歸ることゝなつた。それは天和三年の事だつた。同時に宗謙は、庶兄への財産分配の案も別に立てたのだつた。

藤三郎は、歸參說が叶つた際に、弟市之丞に對して左のやうな一札を入れたのだつた。

一札之事

一我等儀老父宗謙御勘氣を永々蒙り罷有候處に此度御赦免中並其方取持故御免被成中立賣本宅へ罷歸候就其家督井諸道具迄被下請取申候所實正也此上者宗謙より其方へ被讓與候家屋敷金銀諸道具其外如何樣の御支配御座候共中分無之候宗謙御當置之表毛頭違亂申間敷候各之事疎略に存間敷候仍爲後日之一

札如件

天和三年五月二日　同氏藤三郎維永（華押）

尾形市之丞殿

藤三郎は、身から出た錆とは云ひ乍ら、生涯弟に對して頭が上らなくなつた。

其の翌年の貞享元年に、宗謙は市之丞と權平の兩人に各讓狀を與へた。市之丞に對する讓狀は次の文面であつた。

讓狀之事

一山里町家屋敷　但シ門町高臺院へ拔て有
一西京の屋敷
一能道具一式
一諸道具見合半分
一買置候諸物萬半分
一金銀御大名方諸方へ取替置候分並手前に有之候分權平と其方と半分に分て可取事

右之通讓與申候權平と申能萬事致談合身上相續仕候樣に可仕者也同氏藤三郎儀我等心に叶不申候へ共各勘當を御佗候故屋敷中立賣の二軒並家財金銀御所樣方御用金迄讓與時明け置申候則市丞權平へ違亂無之旨銘々に藤三郎一札爲書相渡し申候誠に敬佛神心正直に守儉約祭先祖を子孫相續仕候樣に心懸専要也仍讓狀如件

貞享元年甲子五月十三日　同姓宗謙（印華押）

尾形市丞へ

それから四年目の貞享四年六月廿九日に宗謙は死んだ。

三人の兄弟はそれ〴〵讓られた財産を相續して獨立したのだつた。其の時三人共叔父の日意上人宛に受書を差し出した。右の權平の受書は左の如くである。

一札之事

一老父宗謙書置之通室町花立町家屋敷一ヶ所本淨花院町家屋敷一ヶ所鷹峰家屋敷一ヶ所印月江器蹟書籍一式自分へ被讓與候金銀諸道具萬事之儀者市丞と我等と半分宛に立合配分仕書置之通請取申此已後跡式之事に付少も違亂無之候爲其仍如件

貞享四年丁卯八月十七日　尾形權平惟允（印華押）

日意上人樣

興善院樣

日意上人は前記の如く彼等三人の伯父で、當時妙顯寺の住職であつたが、宗謙の沒後三人の子に遺産分配を執行するに當つて、伯父役として萬事の世話をしたのだつた。興善院は同じ寺の尾形家の宿坊であつた。

右の讓狀並に受書に依つて見ると、光琳には能道具を一式、

乾山には、江岑點と書籍一式を讓られてゐる。是れは宗謙が、子供達の趣味好尚に應じて、それ〴〵分配したのであることは勿論だつた。それに依つても知られるやうに、光琳は非常に能をよくした。そして彼の生涯を通じて能は常に深い關係をもつてゐるのである。彼の藝術もまた能から生れて來たと云つても差支へない位であつた。

四

光琳の藝術に說き及ぶ前に、私はもう少し彼の家庭生活に立ち入つて記述の筆を續けることにしよう。

父宗謙が沒した貞享四年には市之丞が三十歲の年だつた。權平は廿五歲だつた。彼等兄弟は父の莫大の遺產を相續して思ふ儘の趣味生活に入ることができた。

權平は獨身であつたが、市之丞には既に妻があつた。妻の名は多代と云ひ、同じ京都の吉田八兵衛といふ者の娘だつた。多代は、父宗謙の沒した年は廿三歲だつた。然し、市之丞には、妻の外に妾が一人あつた。勿論それは最初から妾として家へ入れたのではなく、初めは小間使として雇ひ入れた女だつたが、何時しか其の女に彼が手を付けたので、自然妾のやうな恰好になつてしまつたのだつた。其の女の爲めに彼の家庭が圓滑を缺くやうな場合も屢々あつた。尚お、其の妾は、主人市之丞の胤を宿して一子を生んだ。男の子で、名前は次郎三郎と付けた。本妻の多代にはまだ子が無かつた。玆に於て家庭に問題が生じて來た。此の儘此の子が成長したならば、たとひ妾腹でも總領のことだから、本妻に男の子が生まれない以上嫡子となるわけである。さうなつては多代を始め面白くない者が多いのだつた。で彼も、家庭の平和を亂すまい爲めに、初めての子ではあるが其の子を何處かへ呉れて遣ることに極めた。そして適當の貰ひ手を探してゐると、同じ京都の松屋莉左衛門といふ者が子が無いので養子を探してゐる處で、早速莉左衛門との間に談が纏まつて、次郎三郎に相當の金を附けて松屋の養子に遣ることになつた。其の時松屋の方からは「此度貴殿の子を貰ひ受けた以上は、自分の嫡子としていつ迄も育てる、自分に實子が出來ても家督は次郎三郎に繼がせる」といふ意味の一札を尾形家の方へ入れた。是れと同時に妾にも金を遣つて暇を出したので、一度にすつかり埒が明いた。それは父宗謙の沒した貞享四年の出來事だつた。

妻の多代は先づやれ〳〵と安心したのだつた。翌年は年號が改まつて元祿元年となつた。だが、彼女の骨折甲斐もなく間もなく同じ事が繰り返されてしまつた。市之丞に又もや別の妾が

て、それに又子を生ませたのだつた。一體市之丞は、兄の藤三郎みたいな放蕩家ではなかつたけれど、色道にかけては矢張りした〻かの達人であつた。彼は遊女よりも多く素人女を愛したやうだつた。そして金錢に不自由の無い自分であるから、女を手活の花として眺めなければ氣が濟まなかつた。

今度の子も矢張り男の子で、元之助といふ名を付けた。多代は依然として子がなかつた。で、此の前と同じやうな悶着が生じた。然し市之丞自身も其の子を自分の嫡子に直す考へはなかつた。それに其の子の母親――つねといふ女だつた――は、餘り性質の善い女ではなかつた。そして彼女の背後には更に彼女を操るやうな心柄の善くない人間が付いてゐることも分つて來た。そこで市之丞も自分から進んで其の女と手を切ることにした。勿論それには相應の條件を付けたことは勿論だが、女の方ではなか〳〵承知しなかつた。で悶着が大きくなつて、最後に女の方では事件を表沙汰にして町奉行へ訴へ出たのだつた。併し奉行所でも示談にせよといふ命令で、其の結果漸う女との緣を切り、子供も女の方で引き取つて、其の代り市之丞の方から家屋敷其の他に金を附けて女に讓るといふやうなことで解決が付いた。解決は付いたけれど、此の一件は一時京中の評判に立てられたので、さすがの市之丞も面目なくて其の後は當分外出らへもせず閉ぢ籠つて、茶事三昧の日を送つてゐた。

其の頃彼は市之丞といふ名を廢して、光琳と改名したのた。

光琳は非常に豪奢な生活をしてゐた。それが爲めに父から讓られた處の金は數年ならずして蕩盡してしまつた。それでも依然として同じ生活を續けてゐるので、自然借金をするよりほかに道はなかつた。彼は手當り次第に借金をした。彼も同じく藤三郎と同じく「一代男」の典型的人物だつた。

家屋敷だの諸大名に貸金の證文などは持つてゐても、當座つかふ金に困るやうなことがしば〳〵あつた。信用で金が借りられなくなつて來ると、彼は傳來の道具類など質に入れてまで借金した。妙顯寺の宿坊である興善院などからも大分借りてゐた。弟の乾山からも借金した。彼が、先祖傳來の光悅の硯箱を質入れしたのも其の頃のことだつた。此の證文は古畫備考に載つてゐるが、其の後轉々して現在は高橋箒庵氏の手に歸してゐる。

質物手形

一光悅鹿之硯箱　壹面
　但内ニ硯水入有之
一信樂水指　壹
　但塗ぶた有之

〆弐包

右者金子急々依二要用一右之道具質物ニ入金子七兩利息月一分ニシテ來春亥の三月切ニシテ借用候處實證也右ノ日限ニ元利相調請戻し可申候若一日に而も相延候はゞ御賣拂成共其方御所持に成共御心次第に可レ被レ成候尤一言の斷申間敷候右之道具不レ殘我等代々所持にて外より構さゝはり毛頭無之候其内火難盜失不慮之義有レ之候者可レ爲二兩損一定レ之爲二後日之一仍而如件

元祿七年戌十月晦日　　尾形光琳（印華押）

光琳は、借金だらけではあつたが、然し相變らず呑氣な豐かな生活をしてゐた。

其の以前から彼は二條家へ親しく出入りを許されてゐた。二條家の當主は綱平卿と云つたが、此の方は堂上方の中でも極く趣味の廣い人で、書は勿論能くし、畫にも心を寄せてゐたが、更に能樂謠曲から、淨瑠璃、操りなどにも心を寄せて樂みをするといふ風だつた。で光琳は卿の御伽役として度々館へ召されて一緒に淨瑠璃を聽いたり謠をやつたりしてゐたのだつた。綱平卿の御供をして諸方へ行つて御能を見物して歩いたりした。又或時は卿の御前で光琳自身で能をやつたことなどもあつた。かうした殿上人との交遊が彼の趣味性に影響した點は尠くなかつた。彼が二條家に出入りをし始めたのは元祿四年頃からの事で、それが後年まで續いてゐた。綱平卿は餘程光琳がお氣に入りだつた。只一と頃例の變の一件で奉行に訴へられ、其の後で謹愼してゐた間だけは一二年二條家へも顏を出さなかつた。すると綱平卿は使を遣はされて頻りにお召しになるので、光琳は又もや頻繁に二條家へ出入するやうになつた。さうするうちに又もや茲でも一寸した失態を仕出來したといふのは、二條家の奥向きの婦人の一人と戀愛關係が結ばれたのだつた。是れも直きに卿の耳に這入つてしまつたが、お氣に入りの光琳の事なのでさしてお咎めもなくうやむやで揉み消してしまつた。

其の頃光琳は自宅へも情婦に妾を入れてゐた。本妻の多代には結局子が生れなかつたので、今となると妾を置くことも後繼者を得る爲めに必要なことにもなつて來たのだつた。今度の妾はさんといふ女だつた。さんが光琳の處へ女中の名目で來たのは元祿九年頃の事であつたが、間も無く胤を宿して壽市郎といふ男の子を生んだ。今では多代も自分には子が出來ないと諦めてゐるので、其の子は手許で大切にして育てることにした。此のさんといふ女は氣だての良い女でもあつたので、多代も氣に入つてゐて、其の儘引續いて乳母といふ名目で家に置くことにしたが、さんは其の後十三年間寶永七年迄尾形家に勤めて、

の年齢を取つて嫁入仕度をして貰つて、茶人の町田秋波といふ者の所へ片付いた。さんの解決ばかりは非常に圓滿に行つたのだつた。それは次の一札で分るのである。

一札の事

一わたくし事十三年巳前より御家に御奉公いたし候所辰次郎様たん生いたし御やういくのためにすぐに乳母に被成めしつかわされ御やういくいたし御せい長被成此度御いとま被下町田しうは殿方へ妻に御ありつけ被下右入用として黄金壹枚小袖たんす壹小袖入長持一よるの物其外入被下忝請取申候此上は辰二郎様へ御身の上の事に付少茂申ぶん無御座候爲其兄孫兵衛が判いたし一札指上ケ申候仍而如件

寛永七年寅四月二十七日　乳母　さん（判）

兄　孫兵衛（判）

小形光琳様

御おく様並

御一家中様

元祿の中頃に至ると、光琳の畫風は既に十分に確立したのだつた。そして彼の畫家としての名聲も漸く重きをなして來た。世間は其の獨特の繪畫に對して驚嘆の眼を以て迎へた。そして其天才的手腕は世上に喧ましく讃美された。

五

光琳は前にも云つた通り初めは狩野を學んだ。師系は不明であるにしても、彼の畫の基礎が狩野派にあることだけは爭はれない。併し、彼の研究は何時迄も一つ所に留まつては居なかつた。彼は種々の試みをした。其の結果、彼が着眼した所は、純日本的の大和繪の復興であつた。

顧つて其の時代の畫界の形勢を見ると、探幽以來繪畫は狩野派獨專の形で、尙信常信のやうな大手が續出した後であつたが、併し此狩野派の畫なるものは、畢竟するに支那畫の模倣に過ぎなかつた。それは足利以來の形勢で、東山時代に勃興した漢畫の脈絡が繼續してゐるのだつた。併し、如何程狩野派の人人が奮勵努力して見たところで、支那畫は支那の人々には及ばなかつた。牧溪、李龍眠、顏輝、仇英――さういふ人々に相抗して遜色の無いと云はれるやうな畫家は古來日本には一人も現はれなかつた。支那畫は飽く迄も支那人の物だつた。光琳の着眼は其處にあつた。支那の畫の模倣をして生涯を終るよりも、方向を一轉し、純日本の大和繪に立ち戻つて、其處に新機軸を出すに如くはないと考へたのだつた。そこで光琳は古土佐の畫を研究した。

かうして日本繪に向つて走つて行つた光琳の前に一番手近い粉本となつた物は、本阿彌光悅に依つて始められたところの一種の裝飾畫風の繪畫であつた。

本阿彌光悅は、初め海北友松に畫法を學んだが、後に本朝の古畫、就中古土佐の高風を慕つて、足利時代の枯淡に陷らず、桃山時代の華美に捉はれず、各時代の妙所を斟酌し、是れに自家獨特の見識を加味して、渾然たる、一派豪宕なる筆格を獨創し、嶄新な意匠を案出したのだつた。彼は繪畫に於ては殊に草花に長じ、各種の圖案を作つて是れを蒔繪にも應用し、又は色紙を作つて諸種の意匠をこらし、流暢闊達なる其の畫風との調和を試みたりした。金銀の泥畫の如きも光悅獨特のもので、風雅洒脫の趣をそなへて、見る人を恍惚たらしめずにはおかなかつた。光悅はもとより畫家として立つたわけではなく、其の本業は飽く迄も本阿彌の三事にあつたが、天性非凡の意匠家であつたので、書畫はもとより、彫刻、蒔繪、陶器、園藝と、ゆく處として其天才を發揮しないものはなかつた。

光悅と同時代の人で、光悅の畫風に私淑して其の畫を學んだ人に、俵屋宗達があつた。宗達は金澤に住み、姓は野村、一名伊年、對青軒と號した。普通俵屋と云つてゐる。宗達は京の生れで、初め住吉如慶に學ぶと云ひ、或ひは狩野永德に學ぶとも云ふが、後年畫に依つて獨得となり、[illegible]。宗達の畫は頗る豪邁なるものがあるかと思ふと、或ひはまた沈厚に、水墨に金泥を交へて畫いたものなどもあつて、剛柔共に通じてゐた。

光琳は、此の光悅宗達の畫風を最も深く研究した。光悅を研究するには、彼自身の家に傳はつてゐる處の粉本が澤山あるので都合がよかつた。そして彼は遂に其の畫風を大成したのだつた。光琳の描くところの畫は、裝飾的な、一種の象徵畫であつた。併しそれは意識せざるところの象徵畫だつた。そして、畫面全體の感じは飽く迄も豪宕で、意匠が頗る奇拔で、そして色彩は思ひ切つて濃厚だつた。

光琳畫は、元祿時代の、上方の趣味を、端的に表現してゐるものでもあつた。同時代に光琳と並び稱された江戸の英一蝶の畫は、輕妙洒脫で何處迄も平民的だつた。それは江戸の趣味を代表する藝術であつた。光琳畫は、豪放で、濃厚で、貴族的で、それは桃山以來流れを引いてゐる處の上方趣味の極致であつた。そして光琳自身は、元祿時代の上方を代表するところの人間でもあつた。

元祿時代は、上方の文化が極度に發達した時代であつた。其の頃の江戸はまだ〳〵粗野であつた。江戸の文化が爛熟したの

、は、遙か遅れた文化文政年代に至つてからだつた。元祿時代は上方の文明であり、そしてそれが一時に滿開した時だつた。

それは、近松門左衛門が生れた時代だつた。井原西鶴が生れた時代だつた。坂田藤十郎が生れた時代だつた。淨瑠璃が極盛になり、演劇が目醒ましい發達を遂げ、能樂も盛んになつた。美術工藝はおしなべて駭くべき進歩をなして、其の他各種の遊藝雜伎が流行した。風俗は極端に華美に走り、都會は益々繁昌し、其の結果花街は一時に發達した。そして爰に元祿の世相を出現した。それが光琳の時代であつた。光琳の畫が豪放濃彩に走つたのは時代の表現であつた。

其の華やかな元祿時代を代表する光琳は一大流行兒だつた。その渾然たる畫風は洵く社會の嗜好に投じて、所謂光琳模樣、光琳菊、光琳水等といふ新熟語が生れ出たのだつた。

光琳は時には婦女子の衣裝の模樣も畫いた。島原に全盛を謳はれる太夫の衣裝に金泥を交へた墨繪の松を描いて遣つたこともあつた。

光琳風の繪が衣服の染模樣として大いに流行を見たのは稍降つて享保の頃であつて、當時はまだ彼の畫が直接染色工藝に應用されてはゐなかつた。其の方面では友禪の方が一歩先んじてゐた。友禪の傳記は詳かでない。或ひは一人の名にあらずして代々其の業を繼いだ者が皆其の名を稱したのかも知れぬと云ふ。或ひは又、友禪は宮崎氏、または深江氏と稱し、加賀の人で、京都へ出て祇園町に住み、加賀染を應用して衣裝の上繪を畫き、終に友禪染の名を博するに至つたのだとも云ふ。或ひは又曰く、友禪は僧侶である。されば扇面畫帖などには畫きもしたらうが、衣服の上繪まではいかゞであらう、是れは染工などが友禪の筆を眞似てかいたのをすべて友禪模樣と稱したのであらうといふ說もある。何れにしても友禪は一個の繪法師であつた。そして一流の扇の繪を畫き出したのが時好に投じ、われもくと其の扇を持つやうになり、是れに依つて衣服のひな形を作つて呉服屋に與へたのが友禪染の始りであると云ふ。友禪は餘情雛形、和歌物あらかひ、梶の葉等を刊行した。それらの畫の卷末には扶桑扇工友禪、又は洛陽畫工友禪子といふ名が署してある。とにかく、友禪は光琳よりも一歩先んじて天和の頃には其の畫く處の友禪扇は京の一名物になつてゐた。其の後間もなく作り出した友禪染も非常な勢で流行になつた。併し、友禪模樣はかうして一代の流行を作り出し遙かに現代迄其の流れを引いてゐるけれども、友禪の畫は、光琳に比較すると纖細巧緻で繪畫としての價値は遙かに劣つた物であつた。晩年友禪は加賀へ行つて終焉したといふことになつてゐる。

光琳は又蒔繪も試みた。そして所謂光琳蒔繪の名を後世に遺したのだつた。彼の蒔繪は光悅蒔繪の風に倣つて更に新意を出してゐた。其の法は大概、鉛、錫、銀、もしくは青貝などを蒔繪の中に嵌入するものであつて、彼の畫と同じく豪宕で、しかも雅趣のあるものだつた。それは彼の畫の力量を蒔繪に其の儘移したもので、蒔繪に金屬や貝類を厚く切つて嵌めたのは、繪畫の場合に胡粉を高く絹の上に盛つて之れに彩色を施したのと、全く同じ風趣の物だつた。

かうして光琳は元祿時代に於ける美術界の第一人者となつた。が其の時分彼の兄弟達はどうしてゐたか、私は藤三郎と乾山の其の後の消息を少しく書いて、更に光琳の傳を進めようと思ふ。

先づ乾山の事から話して行かう。兄の光琳が繪畫の道に進むのに對して、弟の乾山は陶器に志を立てたのだつた。勿論其の頃はまだ乾山の號も無く、幼名の權平で居つた頃からのことだつた。彼は父の死を堺として其の名を深省と改めた。そして父からの遺產を讓られて獨立したのは廿五歲の時であつたが、其の後愈々陶器の研究に進むに當つて、京都の附近に土を求めた結果、京都の西北に當る鳴瀧村の泉谷といふ處に適當の土を發見したので其處に窯を築いて燒き始めた。此の鳴瀧といふ土地は其の以前野々村仁淸も一度窯を築いた處だといはれてゐる土地である。乾山が窯を設けた處は、泉谷の黃檗宗の寺で滸雲山といふがある其の隣りだつた。彼は其の時から、鳴瀧は京の乾に當るところから乾山と號したのだつた。

乾山の陶器は、仁淸の後を襲つたものだつた。彼が直接仁淸に就いて學んだものか否かといふことは不明だが、彼の作品が仁淸の風を慕つて作られたことだけは確かである。猶其の頃舶來した古オランダ燒を見て、其の非常に雅致に富んでゐるところを愛して、是れをも倣つたところがあつた。併し、其のオランダ燒なるものは、實際はオランダから來たものは少く、當時ポルトガル人の經營した印度コンパニーの商人等が作つた物が多かつたのである。で其の陶器は純然たる支那風の古染付に西洋風を加味したものであつた。そして其の陶器は中は全く瓦器で樂燒のやうな物であつたが、其の畫が甚だ面白く、繪や書をかいても箍意の色が最もよく現はし得るので、乾山は非常に之を興味深く感じて、熱心に研究したのだつた。

乾山は、晩年は繪も上手になつたが、其の頃は繪は下手だつた。彼は繪を兄光琳に就いて學んだ。陶器へ畫く繪の手本を光琳が多く畫いてやつた。又、光琳が素燒の陶器の上へ繪を畫いて、其の上へ乾山が釉をかけて燒いたりしたこともあつた。

乾山は陶器で遂に成功した。彼は仁清以後の名人となつたのだつた。彼が鳴瀧の窯で燒いた作品を、世に鳴瀧乾山と稱して最も珍重されるのである。

乾山と光琳とは全く反對の性格だつた。光琳は何處までも派手で表面から出る藝術家だつたが、乾山は反對に質素で隱遁的な人であつた。だから此の兄弟は、初めのうちは仲が良かつたが、兩者の傾向が年一年と反對の方面へ進んで行つた結果、最後には極く疎遠になつてしまつた。兄弟合作の陶器などは遂に見度くても見られなくなつてしまつた。

乾山は、終生無妻で通つた。彼は學問が好きで、茶道に深く心を寄せ、又禪に歸依した。尾形家は代々日蓮宗の信者で、是れ迄にも日饒、日意のやうな學僧を出した程で、日蓮宗の信仰は深く〳〵浸み込んでゐた家柄であつた。それにも係はらず乾山は禪に走つた。そして西嵯峨の直指庵といふに赴いて、禪宗の僧獨照和尚に就いて剃髪して、學問書道共に指導を受けたのだつた。

乾山の交遊する人々には、僧侶や文人學者が多かつた。そして其の生活は極く質素粗朴であつた。彼の作る陶器も其の性格と同じく超俗で、枯淡であつた。光琳が豪奢な生活を營み、殿上人だの富豪だのを遊び相手にしてゐるのとでは、兩者の環境には甚だしい相違があつた。其の上[illegible]日蓮宗の信者であつた。本阿彌家と共に同宗の信者として知られてゐる尾形家に生れ乍ら、乾山が法華を捨てゝ禪に走つたことはいたく光琳の感情を損ねたに違ひなかつた。猶其の外にも物質上の關係もあつた。乾山は無欲恬淡な人だつた處へ、其の陶器の研究の爲めに家財を蕩盡してしまつた。それでも兄光琳には金を貸してゐた。其の貸金の催促をしたと云つて光琳が大層立腹したこともあつた。かうして、この偉大な藝術家である二人の兄弟は段々離れて行くのだつた。

次に、長兄藤三郎はどうなつたかといふと、之れは飽く迄も一代男だつた。勘當の詫が叶つて、宅へ戻つて雁金屋を相續したけれ共、揚屋の風が腹にまで浸み込んでしまつた。藤三郎は、何時迄も商賣大事と神妙にしてはゐられなかつた。父が死んで恐い者が無くなると忽ち地金を露はして遊びを始めた。彼は四十にも近い分別盛りの年頃だつたが、其の分別を捨てゝ遊蕩生活に浸つたのだつた。其の結果は、數代續いた雁金屋の暖簾も外してしまはなければならない羽目に陷つて、家屋敷まで人手に渡し、遂には京の土地にも居られなくなつて他國へ走つてしまつた。最早親類一門も彼を顧る者はなかつたのであらう。かうして藤三郎は、何處へ行つたのか行方も知れずになり、其の終りさへ知る人はないのだつた、

元祿十四年の春匆々光琳は畫に依つて法橋に叙せられた。それは當時畫家として最高の名譽とされることだつた。

光琳は今や志を遂げて得意の絶頂にゐた。

間も無く、諸所から花の便りが聞かれるやうになつた。すると例年のことで、光琳は知人の人々と相携へて嵐山の花見に行つた。此の花見はお互ひに豪奢を競ひ合ふのが習慣だつた。そこで中食といふ時になると、人々はめい／＼善美を盡した行厨から山海の珍味を取り出して食してゐるのに、光琳はと見ると、彼は只一人竹の皮の包みから握り飯を出して食つてゐた。人々はそれを見て、光琳ともある者が如何に儉約でも程があると云つて嘲笑したが、いづくんぞ知らんよく／＼見ると、其の竹の皮の裏には金銀を以て精巧驚くべき花鳥山水の蒔繪を施してあるのだつた。人々が一驚を喫してゐると、光琳は悠々と辨當を濟ひ終つて、其の蒔繪の竹の皮を惜し氣もなく、舟の上から大堰川の流れの中へ捨てゝしまつた。

それは光琳の奢侈と豪放を說明するところの有名な挿話である。併し彼は日常も非常に贅澤な生活をしてゐた。平常黒羽二重の衣服を着してゐるので、人は彼が何時も一つの衣服を着て[illegible]と思つたところが、[illegible]つて、何時も新しいのを取り出して着てゐるのだつた。

花見辨當の話は忽ち京中の好話柄として、廣まつた。すると其の話が公儀の役人の耳にもはいつた。其の頃世上一般奢侈に赴くに就いて、幕府では去ぬる元祿十一年三月法令を發して庶民の奢りを禁じたのだつた。それには

常用につかひ捨つる雜具に金銀箔用ふべからず。金銀の水引もこれにおなじ。菓子入盃臺等に小兒翫具の類も同じ。諸雜具金銀梨子地粉泥蒔繪等今より後華麗に過ぐべからず、諸調度金物などに金銀みだりに用ふべからず云々。

とあるのだつた。しかしながら時代の赴く處は、一片の法令位では抑制することは出來なかつた。奢侈は滔然として風を爲した。恰もそれは江戸に於ては、紀ノ國屋文左衞門、奈良屋茂左衞門が、累々たる巨萬の富を重ねて豪奢榮耀を極め、明け暮れ花街に放浪して一擲千金を惜まず、豪興一世を駭かした時であつた。京都の中村内藏助、難波屋十左衞門、大阪の淀屋辰五郎が、居住衣服飲食の奢りに一代の精を聚めて、殆んど大名を壓して世を駭かした時だつた。是れ等は豪華なる時代に於ける町人の豪華を就中代表した者だつたが、猶世上一般の風習も年々奢侈に走つて留る處を知らなかつた。而も當時は幕府に法令

を發して奢侈を禁ずる旨を布告したのだつた。さういふ際であつたから、光琳の竹の皮に蒔繪をした辨當の一件は上役人の神經を異常に刺戟せずにはおかなかつた。光琳はやがて奉行所へ呼び出されて取り調べを受けたが、事實それに相違ないので「公儀の布告を蔑ろに致し驕奢の振舞重々不屆千萬」とあつて嚴しく叱責された上、京都市中の住居お構ひといふことに云ひ渡された。けだし公儀の意志は、名の高い光琳に鐵槌を下すことに依つて、世上一般の富豪の覺醒を促す積りであつたのに違ひ無い。

光琳は思はぬ奇禍を招いて京都を立ち退かなければならなくなつた。親戚や知友に暇乞ひをする暇も無かつた。永年恩顧を蒙つてゐる二條家へすらも罪科を着た身では顔出しもならなかつた。彼は匆々旅裝を整へて江戸へ向つて出發した。

光琳は江戸に一年餘り滯在した。其の間の事蹟は餘り傳はらないのである。が、彼は其の間、深川の豪商冬木氏の許に足を留めてゐたやうである。畫名一世に高かつた光琳のことであるから、恐らく非常なる厚遇を受けつつ冬木氏に滯在して居つたものだらうと思はれる。其の頃彼が冬木氏の妻女の爲めに衣裝の模樣を畫いて遣つたといふ其の小袖が、今も猶殘つて帝室博物館に所藏されてゐる。

冬木氏以外にも、光琳を歡迎して呉れた人は少なくなかつた。だから彼は、追放に遇つて江戸へ來た身ではあるけれ共、江戸で佗しい生活をしなくてもよかつた。殊に、其の頃、酒井家の當主雅樂頭忠擧といふ人は、學者でたか〱風流な人だつた。忠擧は甚だ光琳の畫を愛して、屢々光琳を屋敷へ招いて厚く待遇した。そして光琳に向つて「いつそ家族共々江戸へ移つてはどうか、さうなれば予が扶持を取らせよう」とまで云ふのだつた。光琳も心が動いた。今度の事で上方では世間を狹くしてしまつた。いつそ江戸に永住しようか、とも考へるのだつたが、京都には妻子も置いてあり、家屋敷もあり、直ちにさうとも決し難い事情もあつた。

さうかうするうち、一年ばかり經つと、光琳は京都へ歸ることを許された。それは彼の親しい人々が上へ向つてさま〲運動して呉れた結果だつた。光琳は一年半振りばかりで京都へ歸つて、人々と對面の喜びをわかち合つた。

併し光琳は、今度の江戸行きに依つて、急に江戸の生活に興味を持ち始めたので、近く京都を引き拂つて江戸へ移住を決行しようと考へてゐたが、いざとなるといろ〱故障が生じて容易に實現出來なかつた。さうして四五年經つてしまつた。すると江戸から酒井家を初め親しくした人々から是非やつて來る

ようと云つて度び〳〵催促を受けた。そこで光琳は意を決して其の前に談が進んでゐた家屋敷を人に賣り拂つて、妻子を一時別宅へ置き、取敢へず單身で出府した。それは寶永三年の年末であつた。一先づ冬木氏へ足を落ち付けてそれから年が改まると度々酒井家へ顏を出した。

酒井侯は大層喜んで、さま〴〵にもてなし、其の上彼が江戸在府中は出入十人扶持を與へることになつた。光琳は面目を施すと同時に、是れで生活の安定も得られるわけなので大いに喜んだ。

其の年の四月、光琳は京へ殘してある妻子を引きつれて參り度いからしばし御暇を賜はり度いと云ふと、酒井侯は快く承知して、はなむけとして、泡盛一樽、寒洗鮭二尾、絹二匹を光琳に賜はつた。

光琳は京へ歸つて、いろ〳〵家財の整理などをして、其の年の秋頃妻子を引き具して江戸へ出て來た。酒井侯は、どうかと思つてゐた處へ光琳が約束通り遣つて來たので大に喜ばれて、其の後、彼が在江戸中出入二十人扶持を賜はるといふことになつた。

寶永五年は一家揃つて江戸で正月を迎へた。酒井家に御信筆の瀑布の圖があつた。非常に美事な筆力であつたが、畫面に巨瀑を描いてあるばかりで何となく淋しかつた。そこで酒井侯は光琳に向つてそれへ何か描き加へるようにと命じたのだつた。光琳は、其の年の元旦試筆に、其の巨瀑の下へ、墨汁に金泥を和して飛龍を描き添へたのだつた。

江戸に於ける光琳の生活は、酒井家の外に冬木氏が常に有力なる後援者を以て任じてゐたので、京都にゐた頃よりも遙かに安泰だつた。何と云つても江戸は將軍の膝元であつた。繪畫の需要も多かつた。此の間に彼は後世に殘る名作を澤山描いたのだつた。

七

寶永六年の末頃、光琳は京都へ歸つた。江戸も二三年で住み飽きると、矢張り故郷が戀しくなつたのだつた。それに彼は其の間に、經濟狀態が非常に善くなつてゐた。

其の年光琳は又一人男の子をまうけた。それはあやといふ妾の腹から生まれたのだつた。其の子には勝之丞といふ名前を付けた。其の時分もまだ先の妾のさんは乳母といふ名目で彼の家に仕へてゐたが、辰次郎も最早十三歲になつたので、さんには暇を出すことにして、尾形家で心配して彼女の爲めに良緣を探して茶人の町田秋波の許へ緣付かせたのだつた。

其の頃京都銀座の年寄中村内藏助は、京都隨一の金滿家で、日本國中に名を知られてゐた。此の中村と光琳とは前々から親交があつて、光琳に取つてはそれは第一の保護者でもあつたが、光琳は中村の娘の勝といふのを預かつて養育してゐた程の深い關係だつた。すると此の中村からの談に、中村と同じ銀座役人の小西彦九郎には子供がない。で養子を探してゐる處だが、光琳には男の子が二人になつたから長男の辰次郎を小西の養子に遣つてはどうかといふのだつた。尤もそれに就いては、光琳が預つてゐる中村の娘勝をゆく〳〵辰次郎にめあはせて小西家の跡を繼がせようと云ふのだつた。光琳も、可愛い悴を他家へ養子に遣るのはふびんだけれども、併し深く考へて見れば有難いはなしである。自分は繪師といふだけで別に子孫に讓るべき生業はない。妻子は誠に心細いわけである。さう思ふと、辰次郎を小西家へ遣る方が我が子の將來の爲めに幸福であると考へたので、自分の家は勝之丞の成長を待つて嗣がせることにして、辰次郎を小西家の養子にやつた。其の時から辰次郎は小西壽一郎と改名した。

光琳は、江戸へ行く時家屋敷を賣つて行つたので、今度歸つて來ると匆々家を造らなければならなかつた。そこで彼は新町に地所を買つて新らしく住居を建築した。其の普請は正德元年に着手して、翌年の春竣工した。そして彼は其の家に引き移つた。

妾のあやは、勝之丞と一緒に別宅の方に住はせてあつた。正德三年には、あやが又男の子を生んだ。其の子には才次郎といふ名を付けた。

其の時分光琳は軀の具合が思はしくなかつた。江戸を引き上げて來たのも一つはそれが原因だつた。正德三年は彼は五十六歲だつた。彼の華やかだつた生涯も最早終りに近付いて來たやうに自身の心に感じられた。彼が心に懸るものは妻子の行くすへばかりであつた。其の年の正月光琳は妻子に宛てゝ遺言狀を認めたのだつた。

妻多代に宛てた文は

ゆづり狀の事

一、當丁家屋敷、南側表口十一間餘、裏行廿四間餘、東町表口十間、裏行十五間餘、右二箇所、並に諸道具又我等親宗謙ら讓られ候、御大名樣方へ御用立申候金銀御手形、兩替への枝手形とも、殘らず其方へ讓り申候、右家屋敷は御望の方へ賣り拂ひ候て、其金子慥なる御方へ御預け、其利息を申受、其方渡世致さるべく候事。

一、別宅に勝之丞と申す悴、實母と一しよに差し置き申し候

まゝ、我等死後には勝之丞事、此方へ引取り、養育いたし、小形と名乘らせ、成人の後は、先祖の遺跡相續いたし申すやうに、取計ひ申さるべく候。
一、勝之丞母あや事、當丁北側ぬし小ひやく（？）なだいの屋敷一ヶ所、ひがし町北側家屋敷一ヶ所、合て二ヶ所、並に別宅の諸道具一式遺はし、相應の方へ緣付いたし候やうに、よろしく計ひ申さるべく候。勝之丞母事、樣子ある者に候、其の上すきと（一向に）たよりもなき者にて候まゝ、此後はなつましくいたし申さるべく候。
一、小西壽市郎事、われら方に定りたる家督なく候ゆへ、小西の家へ養子に遣はし申し候、これ又ふびんの餘りにかやうに致し候まゝ、壽市郎成人の後、此わけよく〳〵申しきかせ申さるべく候、腰の物、屛風讓り申候、壽市郎へ家屋敷も讓り度く候へ共、あのかたに家屋敷も御座候ゆへ、其方勝之丞へ讓り申し候、壽市郎へよろづ談合候て小形先祖の御遺跡、殘り申すやう致され候事かんやうなり、其ため讓狀くだんの如し（原文おほむね假名、隨意當字）

正德三年癸巳正月廿五日　　小形光琳（印）

多代へ

同時に壽市郎へも次のやうな遺書を認めた。

（原文の儘）

遺書之事

一、其方事我等嫡子に候得共、我等事唯今相究たる家業も無之、末々其方身上之安否難斗不便に存候に付、幸中村内藏助樣御懇意故、小西彥九郎殿方へ養子に遣し候、中村内藏助息女お勝殿其方妻女に被相究小西家名跡相續候事、偏に内藏助樣御厚意に候間隨分御意に相叶申樣に孝養可致候、お勝殿事疎略有之間敷候。
一、我等家屋敷諸道具は後家多代へ讓與申候也、多代死後には弟勝之丞へ讓與我等名跡相續せ候樣に申遺候、其方事家督相備たる名跡を相續被申候事に候間、我等名跡に付聊違亂の事有間敷候事。
一、爲遺物脇差一腰屛風讓與申候、弟勝之丞事名跡相續仕候樣に助力可給事以上。

正德三年癸巳正月廿五日　　小形光琳（印）

小西壽市郎殿

光琳は、晩年に至つて、尾形の姓を小形と改めた。そして子孫にも小形を名乘らせる積りだつた。それは姓名判斷に依つて、光琳といふ名には小形と書くのが最も適してゐると云れたからだつた。

併し、光琳の病氣は追ひ／＼快方に向つて、其の年あやが才次郎を生む時分にはすつかり以前のやうな健康を恢復してゐた。翌年の正月は一條家へ伺候して「江口」と「梅が枝」を御殿で舞つた。

花の咲く頃だつた。或日中村内藏助が光琳に向つて云ふには「近く東山の茶寮で諸家の妻室が參會の催しがあるが、何れも衣裝好みのことであるから定めし綺羅びやかなることであらうと思はれる。それについて、貴殿に何ぞよい物好きがあらば、趣向を授けて貰ひたい」との話だつた。光琳は暫し考へてゐたが「然らば斯樣になされては如何」と顧々と教へた。「成る程、それは一段と名趣向である」と内藏助は滿悦した。誰云ふともなく東山の衣裝競べといふ評判がぱつと立つた。さてその日になると京中の指折の富豪達の妻女は、思ひ／＼に意匠をこらせ、金に飽かした時の衣裝を着飾つて東山へ集つた。何れもあまたの腰元が前後を取卷き、靜かに乘物を出た其の有樣は宛ら天女の影向の如くであつた。内藏助の妻女一人が來やうが遲いので皆々待ち佗びてゐる處へ、少し程あつて中村家の乘物があないをして操り入れられた。皆々あはやと其のいで立ちを見ると、打掛帯付ともに黑羽二重の無地、兩面の下には雪のやうなる無垢を幾つも重ねて着し するりと乘物を出て靜かに座についたので、人々は案外に思つた。さて其の後で諸家の妻室達は我も／＼と間もなく納戸へ立つて、前に勝つたる結構なる衣裝を着代へること數度に及んだ。内藏助の妻もその度び毎に着替へたが、幾度び着替へても同じやうな黑羽二重白無垢であつた。一通り見た時は何でもなく思はれたが羽二重は衣裝の絶品である。時の會ゆへ是を多く用意したのは蜀錦にまさる物好きであつた。あまつさへ其の侍女等にはいとも華かな裝ひをさせて 中村の腰元達はむしろ他家の妻女達よりも立ち勝つて見へるのだつた。其のありさまは如何にも拔群で一座恐くけをされてしまつた。そして之も京中の評判となつた。

豪華な其の時代にはさうした衣裝競べなどいふことも往々あつた。衣裝競べで人口に膾炙してゐる話は、其の頃江戸の富商石川六兵衛の妻が 遙に京都に出掛けて、難波屋十左衞門の妻と衣裝競べをしたことである。兩方の妻女は日を期して東山遊で出會ひをして群衆の間を徘徊したのだが、其の時難波屋の妻女の着て出たのは、緋綸子に金絲銀絲を以て洛中の圖を縫はせた眼の醒めるやうな衣裝だつた。石川の妻女はと見ると、是れは黑羽二重に立木の南天の染小袖を着てゐた。人々は是を見て見比べるまでもなく京の方が結構ぢや、何の衣裝競べぞと思つたが、よく／＼近付いて見ると、石川の衣裝は、南天の實が

悉く寶物の珊瑚が碎いてひしと縫ひ付けたものだつたので、人々はあつと驚いて、軍配は石川に上げられたのだつた。石川六兵衛は、天和五年五月、將軍の東叡山御成りの時、自宅の前に黄金の垂簾を掛け渡し、妻子眷族美粧して鹵簿を拜した爲めそれが將軍の眼に留つて「あれは何方の簾中なるぞ」と御前の者に尋ねられた。其の爲め遂に捨て置けなくなつて、六兵衛夫婦は遠島に處せられ、家は闕所となつた。黄金の垂簾は少々誇張であらうが、とにかく幕府の富豪征伐の第一の槍玉に上げられたのであつた。

中村内藏助の豪奢も當時世に鳴り響いてゐた。ある時、冬の夕べ、庭前の池に薄氷が結んだのを眺めつゝ酒宴をしてゐたが、其の時内藏助は左右の取卷末社の者共を顧みて「此の氷つた池の中へ裸體で入る者があれば三百金褒美を遣らうがどうぢや」と云ふた。すると其の言葉もまだ終らぬうちに、末座の一人が突つ立ち上り、衣服を脱ぎ捨て池の中に躍り込んで、横倒しに臥して顏ばかり出して、暫くさうしてゐた後で上つて來た。内藏助は殊の外興を催して即座に其者に三百金を與へた。

また或時内藏助が何れかの盛場へ遊んだ時、神樂といふ類の者が案内して或茶亭に入つて、「中村樣御出」と云つた儘奥の間へ導いたので内藏助は幇間四五人を隨へて悠然として入つた處が、こはいかに其の座敷には既に先客があつて、京の商人が藝子を伴れて來て居つて打解けて遊び興んでゐる最中だつたので、内藏助も大に驚き、急に立つわけにもいかず、「是れは案内の卒爾にて門違ひを致した」と云つた儘互ひに興を醒まして顏を見合つたが、其の時相手の方の男が中村に向つて「和主はどれ程幅を利かす人かは知らぬが、己達は和主とは赤の他人だ、かうして打解けてゐる處へ無斷で這入つて來るといふ法があるか」と言葉あらく咎めて掛つた。中村も赤面して「案内の者に任せて入つて來た爲め門違ひして誠に迷惑千萬」と云つて過ちを謝し、取卷の者もそれ〴〵謝罪すると「これでは此方の云ふやうに佗證文を書け、書いたら免して遣る」と先方はかさにかゝつて出て來たが、仕方がないので云ひなりに謝り證文を認めて漸う勘辨して貰つた。すると彼の商人は早速其の謝り證文を表裝して掛物にして、一夕友人知己を招いて酒宴を催した其の席で「偖今宵は何の風情も御座らぬが、近頃一幅の妙墨を得ましたから御覽に入れませう」と云つて、彼の謝罪状の幅を床の間に掛けた。當時中村内藏助と云へば洛中で飛ぶ鳥を落す勢ひだつた。「是れは珍らしい物を手に入れられた」と云つて中には其の文章まで寫し取る者もあつた。商人は來る人毎に出して見せたので、終ひには其の評判が大阪邊り迄傳はつてしまつた。内藏助

は大に迷惑して人を以て其の狀を返して貰ひ度いと掛け合つたが、商人は容易に承き入れなかつた。段々大勢の人が仲へ立つて、漸う最後に示談して、内藏助は金千兩を出してそれを買ひ戻した。

内藏助の豪奢は幕府からも、睨まれてゐた。すると爰に計らずも彼の身上に大打撃の下る時節が來た。それは、將軍代替りになり家宣大統を繼ぐに及んで、諸政を改革して前代の悪弊を除くことに大につとめた結果、正徳二年九月勘定奉行萩原近江守重秀の職を奪つた。重秀は初め勘定所百五十俵の下役から出身して、柳澤吉保の登用を受け勘定奉行に上り、三千七百石を領してゐた。彼は國用を掌ること卅餘年に及んで、其の間に様々の奸曲を爲したことが今度明白になつたのだつた。其の一例を擧げると、彼は國を富ますといふことを口實として屡々金銀を改鑄して次第に貨幣の品質を劣らせて行つた。彼は常にかう云つてゐた。「凡そ貨幣は大政府の極印一つあれば瓦石なりとも通用するのである。」そこで彼は、金には銀銅を加へ、銀には銅錫を加へて、千兩を二千兩に改鑄して、そして是れを富國の術だと云つたのだつた。重秀はかうして一同の改鑄に依つて卅六萬兩を私し、其の家來の永井半六といふ者が六萬兩を私した程だつた。其の外彼は有りとあらゆる奸曲を恣にして私財を蓄すことに心掛けたのだつた。然るに今度新井君美の切諫に依つて忽ち家祿全部を召し放たれてしまつた。

萩原重秀の失脚は諸方面へ波紋を及ぼしたが、其の一番手近い處が金銀座役人であつた。正徳三年に至つて京都の銀座役人にも私曲のあつたことが露はれた。幕府では豫々京銀座役人の豪奢に眼を付けてゐた際であつたから、此の取り調べは用捨なく行はれた。其の結果、銀座年寄四人の内、中村内藏助は親子共に追放、深江庄左衛門、中村四郎右衛門、關善右衛門の三人は遠島となり、家財は殘らず闕所になつた。

闕所になつた四軒の家財の競賣は數日續いて行はれた。其の總銀高は、千貳百九拾九貫十匁七分といふ高額に達したのだつた。それは東山の衣裳競べがあつてから間もなく突發した出來事だつた。

有爲轉變の世の有様をまざ／＼と眼の前に見たのが、それが自分の骨肉に等しい中村内藏助の身の上だつたので、光琳は殆んど喪神する程に落膽してしまつた。それ以來彼は急に衰へてしまつた。

すると、其の翌々年は、愛兒の勝之丞が病死をしたのだつた。光琳は益々世を果敢なまずには居られなかつた。其の頃から彼自身で再び健康を損ね始めたが、享保元年丙申六月二日

に、新町の家で光琳は歿したのだつた。行年五十九歳、京都小川頭妙顯寺の先祖代々の墓所に葬られた。戒名は、長江軒寂明青々光琳。

八

乾山は其の頃も鳴瀧で陶器を燒いてゐた。光琳が死んだ享保元年は乾山五十四歳の年で、彼の製作には一層油の乘つた時代だつた。併し彼は益深く禪道に入り、清貧に甘んじた生活をしてゐた。陶器を作るにも別段職人を使ふではなし、自分一人でコツ／＼やつてゐた。彼の製作は全く彼自身の趣味の仕事だつた。だから數は幾らも出來なかつた。眞に悠々自適の生活だつた。彼は藤村庸軒とは特に親交があつた。庸軒は當時有名なる茶人であつたと同時に、世に隱れたる宋學者で、頗るよく詩文に通じてゐた。從つて乾山も文學的教養が深かつた。彼は深省、靈海、逃禪、紫翠老人等の別號があり、繪畫の作品には自畫讚が多かつた。陶器にも、茶碗や向ふ皿や鉢などに大概詩句を畫き聯ねた。此の點で光琳とは大に異つてゐた。光琳には文學的素養は無かつた。それは確かに彼の一つの缺陷であつた。乾山は、光琳と疎遠になつて後は、畫を山本素程に學んで、風韻雅致に富む畫を描くやうになつた。彼の作る陶器は、少しも職工臭味のない、いかにも藝術的の匂ひの高い、雅致があつて、形狀と云ひ紋樣と云ひ、一種獨特の妙味があつた。

併し、彼は確かに、一種の變人だつた。そして極く頑固だつた。だから彼と交る人は少なかつた。光琳との仲は晩年は殆んど絶交同樣になつてゐた。

さういふ仲ではあつたけれども、光琳に死なれて見ると、彼は何となく急に世間が淋しくなつたやうな氣持がした。

すると其の翌年、彼は或る機會から江戸へ移住することになつた。それは、閑滿院一品發鈴親王と仰せられたお方に、大變陶器に趣味をもつて居られて、かね／＼乾山を贔屓にされて居たが、其の宮樣が此の度江戸東叡山寛永寺に御轉住のことになつたので、宮樣は乾山に向つて「其方も一緒に江戸へ行かぬか」と仰せられた。乾山は、京都の土地も住み飽きたし、懷かしい者も居ないので、其の仰せに隨つて江戸へ行くことになつたのだつた。

乾山は江戸へ出てからは、入谷村（下谷區入谷町）に地所を賜はつて其處に窯場を設けて製作に從事した。又一説には、入谷に移つたのは遙か後のことで、乾山は江戸へ着くと深川六間堀の材木商讃岐屋某方に落ちついて其處を假の宿とし、其の裏の空地へ窯を築いて、上野から御召しがあると泥着物の儘河川

から出向いて行つたとも云ふ。併し之は寧ろ前者の方が正しく、深川に窯があつたとすればそれは別窯と見る方が至當のやうに思はれる。

覺寶親王は、輪王寺第六世を繼ぎ、一品に叙し、天台座主となられ、御名を公寛と改められた。其の時御齢廿二であつたが非常に風流な御方で、茶事のみならず趣味の範圍の極く廣く在らせられた。陶器は就中お好きで、御娯しみに御庭燒などをなされた。折り〱御家來を遣はして乾山を御召しになると、乾山は土弄りをしてゐた其の儘の姿で伺候するのだつた。乾山が餘りむさくるしい着物を着てゐるので、或時宮樣から白羽二重小の袖を賜はつた。せめて宮樣の御前へ出る時には此の衣服を着たら宜からうと仰せられた。乾山は大層喜んで拜領して歸つたが、其の後宮家の御家來の者が行つて見ると、彼は其の白二羽の衣服を着て庭へ下りて土を弄つてゐるのだつた。

乾山は宮樣から別に定まつた御扶持を頂いてゐたわけではなかつたが、度び〱下さる物があり、御用代は過分に頂戴する、氣が向けば製作をするが、それを賣る道などは彼は知らない、全然商賣氣のない人間だつたけれども、たつた獨り住居なので食ふに困ることはなかつた。

公寛親王は鶯がお好きだつた。其の時分上野には鶯が澤山來たが、俗に云ふ藪鶯で鳴く聲がわるかつた。宮樣が江戸へお下りになつた翌年のこと「關東の鶯は聲が惡い、京の鶯を又聽き度いものだ」と仰せられた。それを伺つた乾山は早速自分から京都へ上つて、京都の鶯を澤山捕へてそれを籠へ入れて遙々入谷迄持つて來て宮樣に獻じたのだつた。宮樣は大層お喜びになつた。

宮樣は、籠の中に入れらてゐる鶯を御覽になつて、出家の身として小鳥を斯樣に窮屈な目に逢はして置くのはふびんであると仰しやつて、其の鶯を全部御本坊のお庭（現今博物館の後庭）へお放しになつた。すると其の鶯は靈廟の邊りから方々へ飛び散つて、根岸の方まで來て鳴いたので、其の邊を鶯谷と名をつけ、また根岸のことを一名初音の里と呼ぶやうになつた。

乾山が、入谷へ來て燒いた作品を、後世人は入谷乾山と稱してゐる。彼が窯を築いた場所は、現今の入谷町の卅五、六、七番地の處だといふことに、考證家の説が一定してゐる。其處はつい近く迄燒物屋敷の名が殘つてゐた。

入谷乾山は、鳴瀧乾山に比べると少しく劣つた物だと云はれてゐる。それは京都のやうな良い土が無いことが原因してゐるのである。入谷では乾山が何處から土を取つてゐたかと云ふと、其の附近には昔から陶器にするのに適當な土は無かつた。

て乾山は多分龜井戸邊りから土を取つて燒いたものであらうと云ふ說もある。

其の頃常陸の佐野で陶業を興さうとして土地の有力家が努力してゐたが、うまく成功しなかつた。そこで佐野の奉行の手で江戸邊の陶工の名手を指南番に傭はうとして探しに來ると、京の乾山が入谷に來て住まつてゐるといふので、乾山に會つて是非佐野へ來て陶法を敎へて貰ひ度いと云つて懇請した。そこで乾山も承知して佐野へ行つた。佐野には三年居た。其の土地の山村といふ素封家に泊つて、人々に製陶の法を傳授し乍ら自分も燒いてゐた。其の間の製作品を後世では佐野乾山と云つてゐるのである。併し、佐野はことのほか土質が惡かつた。陶の土釉　鐵釉などの釉の彼獨特のものもあるけれども、概して陶質が劣つてゐた。三年經つて乾山は江戸へ歸つたが、其の後で佐野の窯では、凡庸な職工が乾山の模造品を澤山拵へて世に出したので、佐野乾山は一層聲價を落すやうになつた。

江戸へ歸つて來ては從前通り入谷で燒いてゐた。

乾山は、其の實江戸といふ土地は好きではなかつた。たゞ、輪王寺の宮樣がおいでになるから自分も居るといふだけだつた。と云つて京都にも會ひ度いやうな人は殘つてゐなかつた。光琳の遺族とは音信も絶えてゐた。それでも、京都の山水は慕はしかつた。彼は其の身が江戸に住んでゐたから、晩年にたつてまで其の作品に京兆逸民、或ひは華洛散人などゝ署名してゐた。

元文三年は乾山にとつて限りなく傷ましい年だつた。それは公寬法親王が其の年おかくれになつたのだつた。親王は其の前に天台座主を退かれて、崇保院と稱したが、其の後間もなく薨ぜられたのであつた。御年四十二であつた。

其の時乾山は年七十七だつた。彼は、浮世の名利はとうから捨てゝゐたけれども、餘命幾許もない此の年になつて斯かる悲痛な經驗に遇はふとは考へてゐなかつた。それ以來彼は殆んど何處へも顏を出さなかつた。御代替りになつて以來は、輪王寺からも別段お沙汰はなかつた。乾山の方から伺ふといふやうなこともなかつた。彼はたつた一人で寂しく暮し乍ら、時たま思ひ出したやうに土ひねりをしてゐた。

親王が薨去されて其の三回忌の寬保元年に乾山は次のやうな追悼歌を詠んだ。

前輪王院准三后御宮の第三回忌を迎へ奉りて崇保院の御名を何のかみにかきて六首の和歌を獻ずること、實におそれみ〳〵かしこまり奉りて

袖の露はまだかはかぬにうききはを

みと世の春のけふにむかへて
うつゝとも夢ともわかずあたにのみ
きえなで露の身はのこりけり
ほがらかにひらくる花のうてなより
るりのひかりやそらにみつらん
うけつきし法のともし火かけたかく
あきらけき世をなをやてらさん
いくちと世さかへんものか梅かほり
たちばなにほふ玉のみはしは
むさし野の草葉おしなみのへふすも
たえぬ御法の花の春風

其の頃から乾山は滅切り衰へた。仕事も出來ず、貯へは無し、非常に哀れなる有樣だつた。病氣をして寢てゐても藥餌を口に入れるではなし、世話をして吳れる者も居なかつた。住み荒した長屋に影のやうに生きてゐた。

寬保三年六月二日のことだつた。其の長屋の戸が何時になつても明かなかつた。近所に住まつてゐた者が、どうしたことだらうと思つて戸を明けて這入つて見ると、乾山は既に死んでゐるのだつた。

辭世が書いてあつた。

放逸無慚八十一年、一口吞却、沙界大千
うきこともうれしき折も過ぎぬれば
たゞあけくれの夢ばかりなる
靈海深省居士

地主の次郎兵衛といふ者がそれでも時たま見舞つたりして遣つてゐたのがさて死なれて見ると全く無緣で葬式をする者もないので弱つた。近所に住んでゐる者でも、乾山がそんなに偉い人物だといふやうなことを知つてゐる者はなかつた。が、何でも輪王寺の宮家に多少緣りのある者だといふ事だけは分つてゐたので、其處で次郎兵衛から乾山と懇意だつた醫者の某に話して、其の醫者から輪王寺の御用人迄此の趣を話して貰つた。すると輪王寺から、御先代が御目を掛けられた者とあらば不便であるに依つて、是れにて取仕廻萬端致すようとあつて、地主次郎兵衛へ金一兩下げ渡された。そこで、右の金子を以て葬式を出すことになつて、寬永寺の末寺の坂本善養寺を賴んで葬つて貰つた。

九

光琳には前に記した以外に女子が一人あつた。矢張り妾腹で、名はそね後にとみと云つて、元祿八年の出生とあるから小

田彥九郎の養子になつて壽市郎と云つた初名辰次郎より五歳ばかり年上である。これは江戸の町人小島屋田井庄兵衛妻となると系圖にあるから、多分光琳が江戸住ひの時分に縁付いたものと思はれる。が、どういふわけだか後には京都へ來て住んでゐたとしてある。一番初めの子の次郎三郎は養子に遣られた後の消息は不明である。二男の辰次郎も養子に行き、三男の光琳か嫡子と定めた勝之丞は夭死し、四男才次郎は、後宗右衛門と改め大阪の石井吉右衛門の養子となつた、屋號を河內屋と云ふとしてあるが、其の後がどうなつたかは勿論分らない。

光琳の妻多代は寬保元年迄生きてゐた。光琳の死後廿五六年も後家暮しをしたのである。それから、勝之丞と才次郎の母のあやは寶曆二年に死んでゐるが、彼女は光琳の歿後勢州の桑名の山田彥左衛門といふ者に嫁いだが、其の後も絕えず尾形の家に往來してゐたとある。かういふわけで、光琳の家は彼の妻が死ぬと同時に全く家名も斷絕してしまつたのだつた。併し、血統だけは壽市郎に依つて瞭然と繼がれた。小西家は壽市郎が四代目を相續したのだつたが、其の後維新迄十代續いて銀座役人として、連綿として續いて來た。

光琳の兄藤三郎は他國へ出奔して終つたらしく其の消息は全く不明となり、弟乾山は述べたやうに、深山の枯木が朽ちるやうに人にも知らずに逝つてしまつたあとは、血統も全く絕えてしまつたのだが、不思議にも此の方は家名だけは傳つた。それは、乾山に就いて、陶法を學んだ野々村伊八といふ者があつた。是れは仁淸の家の子である、と云つても初代仁淸の子ではない。京都御室燒の仁淸もまた數代襲名したものと見える。此の伊八が、乾山の口述した物を筆記して「乾山陶法」の書名を題し、乾山の歿後自から二代目乾山と稱して陶業に從事した。其二代目乾山の弟子に宮崎富之助といふ者があつて、「乾山陶法」を師から讓られて三代目乾山と名乘つた。後世二代を伊八乾山と云ひ、三代を宮崎乾山といふのである。

乾山は三代目で終つて、「乾山陶法」なる口傳書は、三代目乾山から酒井抱一に傳へられた。

酒井抱一は、文化文政の頃に出て、光琳の畫風を慕うて元祿の畫風を復興した人であつた。抱一は、光琳を愛して出入させた酒井忠擧から四五代後に當る忠以の弟であつた。其の頃酒井家には光琳の作品が澤山遺つてゐたであらうから、其の研究には至極便利であつたらうと思はれる。抱一が光琳畫を研究するに至つた動機は、或時文晁が抱一に向つて說いて曰く、光琳の畫は最も崇仰すべきものであるが悲しいかな今その遺法を承くる者がない、自分も之れが復興を想ふけれ共、彼の畫を描くに

は使用の絹の具が精選を極めて、價を問はざる者にあらざれば其の作に當り難い、公の如き富貴にして閑散なる人はすべからくそれを爲すべきであると。そこで抱一もこれに志して尾形流を學んだといふ話が傳はつてゐるが、むしろ信をおき難い話である。成る程抱一も初めは狩野、歌川派、南蘋派等諸派の畫を學んだ後に光琳畫に及んだことは確かだが、一通り諸派に亙つて研究することは當時の畫家のすべてが踏んだところの極めて普通の修養であつて、あながち文晁の勸説を俟たずとも、彼の境遇や其の高踏的な趣味性から云つても、遂に光琳に走つたのは寧ろ當然の歸結である。況んや酒井家と光琳とは深い因縁のあるに於ておやである。

とにかく抱一は、非常に熱心に光琳を研究した結果遂に尾形流を復興して化政年代に於て文晁と並ぶ大家となつたが、彼は光琳を景慕するの餘り、文政某年は恰々其の百年忌に當つたので「光琳百圖」「尾形流印譜」を刊行し、猶自身京都へ行つて妙顯寺中の光琳の墓が荒廢してゐるのを更に新たに建碑して、法會まで營んで歸つた。其の時抱一は京都で、光琳の弟乾山は江戸で沒したことを初て知つて、江戸へ歸つてから乾山の寺は何處にあるか百方手を盡して探したが、皆目知れなかつた。そのうち、不圖したことで判つた。

或る時、抱一は鑑定家の古筆了伴の茶會へ行つた。其の席上で偶然乾山の話が出た。抱一が、乾山の墓を探してゐるが判らないので困るといふと、主人の了伴が「乾山の墓ならば、貴下の雨華庵の直ぐ側の坂本の善養寺にあります」と教へて呉れたので、抱一は大いに喜んで早速歸途に善養寺を訪ねると直ぐに知れた。其の墓は、七八寸角に丈一尺五六寸の至つて小さな碑で、碑面には乾山の辭世の句を刻し、其の脇に

居士皇都人也其先屬緒鳴瀧之後世稱乾山、以陶匠鳴世既久、質者緒方氏也、行年八十有一歲、寬保三癸亥六月二日寂とし

てあつた。そこで抱一は早速善養寺の門前に百年の「乾山深省之墓」と題する高さ四尺程の石碑を建立して後世に紀念したほかに、寫し取つた畫を集めて「乾山畫譜」一冊を上梓した。それは文政六年のことで、乾山が沒して八十一回忌に當る年だつた。

此の石碑は、現在は寬永寺の中に移されて殘つてゐる。

旧記　京洛悠遊

一

是れ迄光琳に關する研究として發表されてゐる物の中では、

大正四年「藝文」所載福井利吉郎氏の「光琳考」及び、同年の光琳二百年忌に當る三越呉服店主催の光琳紀念會席上に於ける福井氏の「小形光琳の生涯に就て」と題する講演筆記、同じく大正四年の書畫骨董雜誌所載相見繁一氏の「小形光琳並に尾形家の事」等が私の寡聞を以てしては白眉である。二家共に研究精密で考證する處頗る正確である。二家の研究以外にも、斷片的資料に古來相應傳はつてゐるが、多くは大同小異である。光琳の家即ち尾形家の家系に關することは古くより知られてゐるが、光琳の私的生活に亘る傳記的資料は殆んど傳はるものがなかつた。然るに先年光琳の子孫である小西家で、其の家に傳はる處の樣々の光琳の遺物と共に諸種の文獻の類を學界に提供された爲め、光琳の生涯は俄かに光明世界へ出されたのだつた。前二氏の發表は何れも小西家の文書に主なる資料を求められたもので、其れに二條家日記、或ひは酒井家の士松下高徐といふ人の隨筆「摘古採要」等の中から光琳に關する記述を拔いて考證されたものである。尤も「摘古採要」の記事に就いては前田香雪氏等の其の以前の發表があり、私は讀んでゐないが故久保田米僊畫伯の如きは餘程以前に光琳に關する他の新事實を發表されて居るさうであるが、とにかく諸家の努力に依つて此の元祿の代表的藝術家の生涯を明かにすることを得たのは學界の爲め喜ばしい事實である。乾山に關する事歴も同時に知られたわけである。

が、陶匠としての乾山の事歴は比較的前から知られてゐたやうで、當代に至つては今泉雄作氏等を初め諸家の研究がある。乾山臨終前後の事柄などは、輪王寺第七世公寛法親王の御納戸日記寛保三年六月の部に記してあるのを、抱一上人編著の「乾山遺墨」へ拔萃してあるので明瞭である。近年乾山研究として纏まつて發表されたものには　春山武松氏著「光琳と乾山」彩壺會講演錄中大河内正敏氏述「尾形乾山」等がある。是れ等は單なる傳記でなく、專門的に其の作品の研究をするのが、寧ろ主眼になつてゐて、乾山研究家の必ず一讀を要する良書である。

私は、小形光琳傳を草するに當つて、主として以上諸家の研究を參考とし、部分的にはそれ〴〵關係の書物を調べて書いたのである。だから、私の光琳傳は大體に於て正鵠を得た物と自信するが、其の代り私自身の創見は無いのである。若し些かそれに類する物ありとすれば、それは私の獨斷的の一點である。猥りに古人の心理を解剖し、或ひは不明瞭の事實に對して勝手な推定を下すが如きは由來學者の避けて取らざる所であらうが、學者でない私は往々極めて無造作に其の點を敢てするのであるから、間違つた部分は全部私の創作と見なして、讀者は寛大に恕されんことを希望する次第である。猶、光琳の姓は在來

多く尾形と書かれてゐるが、晩年は小形と改名して、子孫にも其の姓を名乗らせるつもりであつたことは、彼の自筆の文書に依つて明瞭である。由つて古人の遺志を尊重して、題名は小形光琳とすることにした。

光琳傳の資料關係は大凡右の通りであるが、私は此の機會に京都へ行つて、光琳の墓に詣でゝ來度いと思つた。其の序でに鷹ケ峯へ行つて、尾形家とは深い縁故のある光悦の舊蹟を見物したり、また小西家を訪ねて光琳の遺物を拜見させて頂くやうなことが出來るならば、筆を執る上の助けともなるだらうと思つたので、大正十三年も押し詰つた十二月廿五日といふ日に、清水港の家を出て京都へ向つた。

二

廿六日の朝九時頃宿で起きて見ると雨が降つてゐる。きのう迄は上天氣だつたのに何たる不幸せだらうと思つた。宿の朝湯につかつて座敷へ戻つて來ると、火鉢に澤山さくら炭がおこしてあり、別に風呂をかけてチン／＼湯が沸らせてある。梅茶を飲み、朝の膳に向ふ。外は寒いであらうが、座敷の内は暖かだ。障子を明けて玻璃戸越しに雨に濡れた小庭を眺めてゐるのも風情がある。京都の宿屋は落ち付きがあつて何時來ても氣持が宜い。六疊の座敷に三疊の次の間、別に四疊半の茶席風の控への間があつて、厠も洗面所も備はつてゐる。閑寂極まつて市中とは思はれない。麩屋町の澤文といふ家で、先年も一度泊つたことがある。

雨が降つては出不精になる。が、考へて見る迄もなく暮の廿六日だ、宿屋の座敷でつくねんと暮してしまふのも勿體ない。そこで午頃から俥を呼んで貰つて光琳の墓へ詣ることにした。

外へ出ると粟の如く凝る程寒かつた。御所の内を拔けて小川頭の妙顯寺へ行つた。妙顯寺は驚くやうな大寺だつた。山門及び堂塔總て頗る宏大で結構を盡してゐる。先づ本堂の後ろにある本寺へ行つて、案内を乞ふと、人の聲はしながら返事がない。床の高さは五尺許り、百疊もありさうな板の間の中央にテーブルや椅子が置いてある、いくら呼んでも返事がない。車夫が氣を利かせて横へ廻つて大きな聲で呼ぶと、漸う一人の婆さんと中位の爺さんが出て來た。「今日は管長様は大阪へ行かれてお留守だが何御用か」と云ふ。實はしか／＼で尾形光琳の墓へ參詣に來た者だと云ふと「へえ」、尾形さんて何處の方でおまつしやろ」と爺さんと婆さんは去年あたり亡くなつた人のやうなことを云つて腑張り埒が明かぬ。すると其處へまた一人かなつんぼの爺さんが出て來た。此の爺さんはつんぼだけれども物は

歸つて、其の寺は泉妙院といふ宿坊で預つてゐるから其處へ行つて頼むが宜いと教へて呉れた。そこで泉妙院へ行つた。それは門を入ると直ぐ右手にある坊だつた。玄關で案内を乞ふと住職が自身出て來られた。これ〱と來意を述べると「それはようこそお出でなされた、直ぐに御案内申します」と住持は勝手口の方へ廻つて鍵と傘を持つて出て來られた。私は傘を持つて來なかつたので、無心を云ふと、「さあ〱」と住持は自身の傘を私に貸して、又戻つて傘を取つて來た。住持のあとに從つて行くと、本堂より東側の方に一間幅位の直つ直ぐな道が附いてゐて、其の片側には一間〱圍ひをした墓所が並んでゐる。其の一つが光琳の墓所だつた。墓所の廣さは二坪位で、簡單な土塀を廻し、杉の木や南天を茂く植ゑ込んだ中に細い道を附け、其の奥に墓碑がある。墓は、墓石は一つで、高さ四尺許りある。碑面には「長江軒青々光琳墓」としてある。横へ廻つて見ると、「文政六年○月、江戸酒井抱一建之」の文字が辛じて讀み下せる。杉の植込の中に南天の赤い實の色合宜しく、苔の匂ひが古い時代を思はせる。墓前にぬかづいて先づこれで氣がすんだ。すると住持が「まだ別の所に尾形家の墓がありますから其處へ御案内致しませう」と云つて案内して呉れた。今度は本堂の西側の方へ行くと、其處に普通の墓が澤山ある墓地があつた。其の中に尾形家の墓が三基ほど並んであつた。道伯、宗柏、宗謙などの名が見える。併し、何れも後代に建て直したものらしく見えた。前に見た光琳の墓は抱一の建てたもので一種の紀念碑であるから場所も埋葬の現場ではないだらう。光琳は矢張り此處の先祖代々の人々の葬られてゐる場所へ埋葬されたものに相違無い。

光琳の祖父宗柏の弟が出家して、日蓮宗の僧となり、日備上人と申して、妙顯寺の住職となつたことは本傳中にも、一寸記載して置いたが、此の日備は仲々の學僧にて、教相の學を深く窮め、一時南都に往つて、倶舍華嚴等の學を修め、又儒術に通じ、嘗て寂悅に代つて淀主へ送る文書を認めたりした程だつた。日備が妙顯寺上人となつた時は、妙顯寺には堂閣も何も無く、茅ら屋の如き假だつた。日備は先づ堂閣を建て次に塔を建立した。其の施主は松平肥前守利光の妹であつた。かういふ風で日備は歷代の妙顯寺上人中でも最も功勞のあつた人だが、名僧として、尾形家に對しても權勢があつたので、彼の宗柏の後妻秋場氏が庶子宗甫を退けて己れの生んだ宗謙を相續人にしようとした時なども、日備上人が斷乎として、反對した爲めに彼女の意の如くならなかつたといふことが系譜の中に載つてゐる。日備の甥の日意は、宗謙の兄で、叔父日備の後を繼いで妙

顯寺上人となり是れまた聞えた學僧だつた。かういふわけで妙顯寺と尾形家との關係は普通の寺と壇家の間柄以上に大變深い緣故があるのである。猶、宗謙の兄には、維方八左衛門惟直と云つた人がある。其の子に維文、字は宗哲、謙光先生と云つた人がある。即ち光琳乾山の從兄弟に當る人であるが、此の人は立派な儒者で、土佐藩の文學となつて、藩主三代に歷事して四十餘年仕へ、享保七年に、七十八歳で歿した、其の人の墓も此處にある。墓銘は伊藤東涯が書いてゐる。由來尾形家は名門なるに本阿彌家の血統が加はり、其の後累代斯樣に有德學識の人を多く出してゐるのである。其の家から光琳乾山の如き大藝術家が生れたといふことも蓋し偶然ではない。

光琳の傳記は、特に家系に興味があるのであるから、讀者の參考に資する爲め次に尾形家の系圖を掲げて置く。是れに依つて詳しくは承知して戴き度い。

尾形家系圖

（大神太郎惟基五代之孫／維方三郎惟義之後裔）

- 伊春
  - 道柏
    - 宗柏
      - 女子
      - 宗甫
      - 元庇
    - 日饒
    - 道意
  - 久兵衛
- 彌兵衛
  - 女子
  - 五郎助
  - 女子
  - 八左衛門
    - 維文
  - 女子
  - 女子
  - 左近
  - 日意
  - 女子
  - 宗謙
    - 藤三郎
    - 市之丞（光琳）
      - 次郎三郎
      - 女子
      - 辰次郎（小西家へ嗣ぐ）
      - 勝之丞
      - 才次郎
    - 權平（乾山）
    - 女子
    - 女子
    - 女子
    - 女子
    - 女子
  - 女子
  - 三右衛門

三

廿七日は雨かあがつて氣持よく晴れたので今日は鷹ケ峰へ行

くことにした。午前十時半俥で宿を出る。天氣は佳いが、比叡おろしが身を切るやうに冷たい。俥夫は昨日の男で、廿五六の屈竟な體格である。今日も御所の中を拔け、北へ／＼と走る。雨後で道は甚だ惡い。

堀川通のとある大きな寺の前を通ると、門前に「蕭白先生の墓あり」と新しい石に刻んで出てゐる。俥屋一寸待つたと飛び下りて空地のやうな廣い境内を通つて寺へ行つて尋ねると、若い僧が出て來て墓地の在所を教へて呉れた。「曾我蕭白でせうね」と念を入れると「左樣です」と云ふ。序でに寺の名を聞くと興聖寺。教へられた通り行つて見ると墓地があつた。其の一隅に古い車井戸がある。其の井戸の眞後ろに蕭白の墓がある。立派な墓で、碑面には「曾我蕭白之墓」と鐵齋外史が書いてゐる。明治四十一年に修復したものだと記してある。墓の背後は直ぐに大きな竹藪であつた。一拜して直ぐに引返して俥に乘る。是れが本當の行き掛けの駄賃といふものだが、それにしては、蕭白先生の墓を一つ稼いだのは飛んだ儲け物だつたと私が喜んでゐると、俥屋馬鹿にしたやうな顏をして振り向いて「旦那樣京都へお出でになつて、お寺やお墓に一々感心して居ると日が暮れてしまひますぜ」と云ふ。

道普請があつたりして中々俥の運びが容易でない。場末の小汚い町をあつこち曲つて餘程行つた時分にやうや非常に大寺の側へ出た。俥屋に「此處は何處か」と尋ねると紫野大德寺だといふ。何となく紫野大德寺といふ所は、春は菫や蓮華草の咲く野道でも通つて行く所かと思つてゐたら、餘りに場末の貧民町で是れは又意外千萬だ、が兎に角一寸下りずにはゐない、成る程是れでは日が暮れさうだ。そこで大急ぎで覗いて見る。境内は流石に木立も深く、幽邃で、塵外の感がある。山門から奥に、一二三と殿堂が奥へ／＼と立ち續いて行く處も、其の外部内部の構造も、純然たる支那風である。園内には松樹が多く颯々の聲が聞えて如何にも靈域の氣分がある。併し、此處で感心してゐると遲くなるから、寶物拜觀等は後日に殘して先へ進む。

大德寺の南に「鷹ケ峰光悦寺道」とした道しるべの出てゐる所から田舍道へはいつて行く。翠綠の畑が間近くに見える。道の際に、なにがしのみかどの御陵があつたりする。其の邊から坂道になる。そして漸う鷹ケ峰に通ずる丹波街道へ出ると、往來の幅も廣くなつた。四邊の光景は俄かに田舍めいて、大都會の近郊とは思はれない。道を行く女は皆頭に物を載せて、それに附けた綱の端を片手に持ち乍ら、腰で巧みに調子を取つて歩いてゐる。大原女といふものはあながち大原の產とばかりは限

らぬものと見える、遊んでゐる子供も皆たつゝけといふ袴をはいてゐる。何處迄も古風な土地である。とかくするうち鷹ケ峰村に着いた。此の邊は、地圖に依つて見ると京都の御所附近より約三百尺地勢が上つてゐる。だから一體に眺望がよい。

其の街道は、やがて横に通つてゐる、道にぶつかつて、其處が丁字形の三の辻になつてゐる。此の道路に沿うた一帶の地が、光悅が家康から拜領した地域である。私は其處で俥を降りた。南北筋東側の光悅の屋敷のあつた邊りは、表側に荒物屋だの駄菓子屋だのさうした家が十軒ばかり並んでゐる。其の裏手の方には廣い竹藪が續いてゐる。光悅屋敷と向き合つて、西側角から二軒目に在つた尾形家の屋敷の趾は畑になつてゐる。西側は大概畑だが、石が積んであつて、一つ〳〵屋敷の形が殘つてゐる。尾形家の右隣りの角屋敷は、幕府の御商茶屋四郎次郎の住居だつたが、其所だけは村の物持らしい黒塀を掛けた立派な住居になつてゐる。茶屋四郎次郎は宗以と號し、茶道に堪能で家康無二の御氣に入りだつた。其の家は呉服所賄をしたり、海外渡航の御朱印船を出したりして、京都屈指の富豪だつた。元和二年正月家康が駿州田中の城へ鷹狩に行つた時、四郎次郎が偶々京都から下つて其處で家康と行き遇つた。其の時家康が四郎次郎に向つて「今京ではどんな料理が流行るか」と尋ねた。

そこで四郎次郎が「別に是れぞといふ物もございませぬが、鯛を油で揚げて醬油で受けて食べますのが法外味が宜しいと申して人々賞美致しまする」と答へると、家康は急に其の料理が食べて見度くなつたので、城主榊原内記照久に命じて燒津濱から上つたばかりの鯛を以て其の料理をさせて味はつて見た處が成る程法外うまいので、一人で鯛を三枚まで平げた。其の食べ過しの結果霍亂を起したのが病原となつて、其の年の四月十七日に黄泉の客となつたが、七十五歲の老翁にして大鯛三枚平げるのだから、戰國武將の健啖想像に餘りある。

光悅寺は三つ角を左へ取つて一丁餘り行つた處の左側にあつた。往來から深く引つ込んで門があり、それより敷石に苔蒸した道がだん〳〵下つてゐて、左右は美事に青い竹林である。其の邊りはえも云はれぬ寂びである。東向きに堂があり、それと向き合つて、寺の住居がある。案内を乞ふと、六十位の僧體の老人が出て來て「お上んなさい」と云ふ。座敷へ通ると澁茶を一杯出し、それから光悅の色紙の掛物と外に何かを出して見せて、呉れた。

座敷の障子には暖かさうな陽が當つてゐる。それを明けると庭が見える。地勢は矢張り先に行く程下つてゐる。向うに溪谷を隔てゝ鷹ケ峰の帽峰がまん圓くそびえてゐる。園には老松の

亭々たるがあり、庭園としての技巧を見るべきものはないが、地形がいかにも秀絶である。庭下駄を借りて園内を逍遙すると、其處らに新らしい茶室らしい建物が幾つも建つてある。何びとの物好きか知らないが、園の雅趣を削いでまことに眼觸りである。太虚庵の在つたといふ場所にも同樣の建物が出來てゐて「太虚庵」とした額まで上つてゐた。

鷹ケ峰の地は　光悦の曾孫光傳の代、延寶七年に至つて、幕府へ返上した。それ以來星霜幾度か移り變つて、光悦寺も殆んど廢墟と化してゐたのを、近年此の土地に光悦會なるものが與つて此の名蹟の保存を圖り、寺を修復したのである。

光悦の墓は　庭の中頃から東の藪の方へ奥深く這入つて行つた處にあつた。

四

光悦寺を出て、以前の三つ辻へ戻り　更に其の道を眞直ぐに東へ一丁程行くと常照寺の前へ出た。此の寺には有名な吉野太夫の墓がある。是れも今では鷹ケ峰の一名物になつてゐる。それを見ようと思つて門内に入つて行くと、正面の本堂で女の人が二人して正月の仕度と見えて忙がしさうに掃除をしてゐる。一人は四十位の尼さんである「吉野太夫の墓は何處ですか」と云ふと、尼さんは端折りを卸し襷を外して「はい〳〵、吉野太夫の墓なれば私が御案内致します」と氣輕に御堂から下りて來て裏手の墓地の方へ案内して呉れる。美しい松林で園まれた明るい心地のよい墓地である。墓地の中央に此の寺の開山の祠がある。其の後ろの方に、松林と接近して一基の古い立派な墓がある「是れが吉野の墓で御座います」と尼さんは云ふ。碑面は磨滅して讀みにくいが、供養の塔婆が書いてある。戒名を讀むと

「開玄院妙蓮日性信女。」

「其の蓮は達の間違ひで御座います、開玄院妙達日性と申すのが本當で」と尼さんが横から云ふ。墓地から一寸低くなつた處の、山の傾斜に臨んで、彼方の山を見渡す眺めのいゝ場所に小さな茶席が造つてある。近年吉野會といふもので建てたものだといふ「此の席を吉野好みの窓と申すのださうで御座います」と尼さんが説明してくれる。それは一間四方の壁へ殆んど一杯に切つた圓窓であつた。

本堂の方へ戻つて來る。

「此のお寺は尼さんばかりですか」

と私が尋ねると

「否え〳〵、あなた、此の寺はこんなに荒れては居りますが大層格式のある寺で、代々立派に樣子のある僧が住職に直られるの

です。只今の住職も妻子のある立派なお方です。が、悲しいことにあなた此の寺には食べるものが御座いません、で住職は此處は兼住で他に寺を持つて居られます、私は只の留守居に頼まれて居るので御座います」

と尼さんは云つた。立派に妻子のある僧も可笑しいが、さう云ふ此の尼さんは平安朝時代の物語に出て來るやうな尼さんだ。併しさう云はれて見れば、山門と本堂だけで、住居と云つてもほんの茅ら小屋同然の體裁である。成る程是れでは立派に妻子のある僧は住んで居られまい。

一體吉野太夫と此の寺とはどういふ關係があるかと云ふと、これは吉野が灰屋紹益に身請をされない前のこと、六條三筋町の遊女であつた頃、或る日一人の僧が揚屋へ來て「吉野とやらんいふ女を一目見たければ御取計ひ下されたし」と云ふ。主人が謝絶したが僧は立ち去らない。止むを得ず吉野にかくと告げると、吉野は何と思つたか直ぐに出て來て僧に對面して「何卒奥へお越し下されよ」と云ふ其の花の姿を僧はつくづく見入つて「さてさて吉野とやらん、よくぞ見せつる、見れば實に止る要はない。さてもわれ聞く處には、彼の女見るには一百錢の金子を要すとか、今見料を置き申さん」と云ひ、財布から一百錢の金子を出して主人に渡した。主人は驚いて「かくばかりのことに、代銀を受くるには及びませぬ」と云つて返すと、僧は呟いて「さては人がわれを欺いたのか、吉野を見れば見料を要すと聞きつるに」と云つて、禮を述べて揚屋を立ち出でた。吉野は不思議に思つて、人をして其の後を追はしめると、それは當時鷹ケ峰に談林を設けて門生を教化してゐる日蓮宗の高僧日乾上人であつた。日乾は慶長七年身延山久遠寺第廿一代の主となり、後陽成天皇より紫衣を賜はり、其の後各所に寺を開基し、或ひは中興し、晩年京都妙覺寺に住した。寛永四年には鷹ケ峰に談林を創めて此の寺を常照寺と稱した。後世日蓮宗中興の三師の一人と仰がれる一代の高僧であつた。

是より後、吉野は深く上人に歸依して、常照寺の爲めに獨力で總門を建てゝ寄進した。此の門を吉野門とも太夫門とも云ふのである。それは今私が通つて來た門であつた。其の門を見ると、瓦葺二脚門で、左右に潜戸が附き、元は朱塗だつたと見えて所々に其の痕跡を留めてゐる。一度倒壞したのを近年立て直したのだといふ。

古來我が朝には名妓も澤山あるが、吉野ほど才色双絶の傾城はゐなかつたやうである。彼女は諸藝に通じ、殊に和歌の道は深く究め、手蹟は頗る美事だつた。吉野がいかに美しかつたかといふことに就いては様々の逸話が殘つてゐるが、傳に曰く、

明の呉興の人李湖山といへる者、或時夢寐の中に吉野と會ひ、言を交してより益彼を愛慕眷戀し、遂に一詩を賦して贈つて來た。其の詩にいふ、

日本曾聞芳野名　夢中髣髴覺猶驚
淸容未ㇾ見恨無ㇾ極　空向二東海一數二鳳行一

寛永四年のことだつた。其の翌年支那から吉野の畫像を懇望して來た。茲に於て日本の遊客相議して、畫工に命じて吉野の像を寫さしむること七幅、之れを支那へ贈ると、彼國からは見事なる綾羅を贈り返して來た。吉野の艶名は漢土迄傳はつてゐたのだ。

或る時太夫十八人の集會があつた。さなきだに華美を衒ふ上﨟ども、今日を晴と綾羅錦繡を纏ひ金色燦然として座に滿ちた。此の日吉野は上客があつてまだ出席しなかつた。最早いかにと尋ねて遣ると、晴迄起きてゐたので今はまだ臥戶にあると云ふ。さらば夢醒かして遣らんと座中より使を立て、出席を求ると、吉野は眼醒めて、早や何れの人々も來給ひつるか、然らば直ちに參ぜんと、御所にて手水をつかひ、寢亂れ髪のまゝ座に出でた。肌着は白綾で上に墨地の黑の衣を二枚重ね、紫のくゝし帶を廻し／＼て客に入り來り、上座に着いた儘に、一座の太夫ども其の美貌風格に壓倒されて挨拶するものもなかつたと、「色道大鏡」に載つてゐる。或ひは又ある日錢店の弟子が吉野を見染め、吉野の一夜の情を受け「最早此の世に思ひ遺すことなし」と一通の書置きを殘して桂川に身を投じて死んだとか、様々の話が傳へられた。灰屋紹益に身請せられ、爲めに紹益は勘當となり、吉野と二人清水のほとりに佗住居をしてゐると、そこへ圖らずも紹益の父紹由が雨宿りに立ち寄つて、吉野の容色言語態度の艶やかさに感動し、後でそれが悴の思ひ者であることが分ると、あの女では我が子の迷ふのも無理はないと云つて、即座に勘當を許して正式の結婚をさせたといふ話は殊に有名である。紹益は本名佐野重孝、京都の富豪で、幼き時から本阿彌光悦の許に至つて薫陶を受け、和歌、抹茶、蹴鞠等風流の道に詳しく、又文學の素養があつた。光悦が歿した時紹益は卅八歳であつた。後年其の著書「賑ひ草」に於て光悦の人となりを叙し太虛庵の風致などまのあり見聞した事を載せてゐる。愛妾吉野を正妻にすることを得たのは、光悦が紹益の父紹由を說いた結果だといふ說もある。吉野と紹益は比翼連理の樂しみをわかつたこと十二年、寛永廿年八月廿五日、吉野は病魔のため卅八歳を一期として白玉樓中の人となつた。紹益は悲嘆遣るかたなく、

都をば花なき里となしにけり

　　吉野を死川の山にうつして

と手向の一首を詠み、愛着の餘り其の遺骨を灰にして、酒に混ぜて飲んでしまつたといふ。

私は吉野門を潜つて出た。歸途は下り坂で俥の走りが速かつた。眞直ぐに西の京へ下り、序でに北野天神へ行つて、緒方神社といふが今もあるかしらと思つて尋ねて見たがそれは判らなかつた。

五

二十八日は昨日迄の寒さが消えて、暖かい日が靜かに歳晩の京の町を照してゐる。併し京都といふ所は不思議な處で、今日は暮の二十八日だといふのに、一向暮らしい慌たゞしさはない。巷には埃一つ舞はず、道往く人の顏ものび／＼としてゐる。僕等のやうな泰平の逸民が借金取りを逃げて來るにはよい處だ。さて今日の日程は、淀の木津といふ處に往つて居られる小西家を訪問するつもりだ。午頃三條から京阪電車に乘る。卅分位で淀へ着いた。電車を降りた處に煙草屋が一軒ある。煙草屋で木津へ行く道を聞くと、「木津へ行くならあの人と一緒においでなさい」と亭主が云ふ。そちらを見ると一人のお百姓體の男が天秤棒の端に籠を一つぶらさげて擔ぎ乍ら線路の近くを南の方へ行く所だ。そこでそのお百姓に追ひついて「貴君は木津へ行くのですか」と云ふと「左うだ」と答へる。あとを隨いて畑の間を行く。線路を隔てゝ西側には淀城の石垣ばかりが殘つてゐる。玩具のやうに小さい城だ。沼地のやうな處が方々にある。お百姓は途々話す、此の邊の荒地はみんな舊藩士稻葉子爵の持ち地だ、こゝらで坪四十圓の地價がある、稻葉家の持ち分だけで何千坪とか何萬坪とかあるのだから、大した物だ、是れを賣拂つて與れると土地の發展の爲めになるのだが、殿樣が慾張つてゐて賣らないでかうして荒して置く、まことに勿體ない物だと云ふ。成る程さうかと感心しながら隨いてゆくと、今度は美事な竹藪の側を通つた。廣い竹藪で奥の方にはチラ／＼と白い光線が漏れてゐるばかりだ。風流がるわけではないが私は竹林が大好きだ。あらゆる植物の中で竹を見た時ほど心のすがすがすることはない。自分の家にも種々の竹を蒐めて娯しんでゐる。が、竹は京都附近の物のやうだ。京都の竹は幹が思ひ切つて青い。あの青さは竹以外の何物にも見られないものだ。そして京都の竹は節と節との間の伸がある。いかにもすこやかな伸び方だから氣持がよい。東京附近では玉川の街道あたりに相應な竹林を見るが、併し竹は到底京都近郊には及ばない。私の氣分で少し誇張して云へば、京都近郊の美しさは大部分竹にあ

ると云ひ度い。併しこの京都の竹よりも、支那の西湖附近の竹は更に又一層美しかつた。

私がいゝ竹藪ですねと見惚れてゐると道伴れのお百姓も立止つて、此の竹藪は何町歩とかあつて、一年の收穫が何千圓とかに上る　それから此邊も坪四十圓位だから、竹を代つて地所を賣り拂へば何萬圓とかになると又もや坪四十圓を持ち出す。池だか川だか分らぬ長い水溜りがある。狹い橋が架つてゐる。向うに大きな橋が架つてゐて淀の町が見える。昔から淀の川瀬の水車と云ふが、其の名高い水車は何處にあつたのだらうと私が坪四十圓君に尋ねると、水車かな、水車なら此の邊の何處にでも幾らもありましたよ、つい近頃までと坪四十圓君は云ふ。それを淀の川瀬の水車と云つたのかねと念を押せば　左うですとも。併しこんな水溜りでよく水車が廻つたものだと私は不思議に思つた。水溜りを越すと木津であつた。そこで坪四十圓君と別れて、子供に小西家を尋ねると直ぐに分つた。

杉垣門構への住居、案内を乞ふと十八位の綺麗な娘さんが玄關へ出て來た。來意を告げると一旦奥へはいつて又出て來て、「父は病氣で臥つて居りますが、病床でもお構ひなくばお通り下さい」と云ふ。座敷へ通される。其處が主人の病室である　主人得三郎氏は、年頃五十位の一見[illegible]者風の人だつた。氏は小西家十一代目の相續者で、光琳の子壽市郎からでは七代目に當るのである。得三郎氏の父君の代迄は代々京都銀座の役人を勤めて來て、維新となり、得三郎氏は土木を事業とされるやうになつた。一昨年富山に行き、山中で足を傷めたのが原となつて爾來二年間脚疾で苦しんで居ると云つて、病床に座した儘で話された。

主人は大層快く諾されて、家人に命じて三尺位の大きな木櫃を座敷に運ばせ、其の中に一杯はいつてゐる書類やら畫稿やら遺印やら樣々な物を順々に出して私に見せて下すつた。それは全部小形家にあつた物だが、光琳の妻多代が歿して小形家が絕えた後で、壽市郎が小西家へ引き取つたものであらう。其の後二百年來此の木櫃に封じ込まれた儘先年迄恐らく一度も開かれたことがなかつたらうとのことで、紙も頗新しく、墨色も昨日書いたやうに鮮やかである。遺物を大別すると、記錄、文書、帳簿、畫稿、遺印等が主なる物で、就中珍らしく思はれる物は　光琳の父宗謙より光琳への讓狀、光琳乾山の受書、光琳より妻多代への遺言狀、光琳の兄藤三郎が勘當を許された時光琳へ宛てゝ入れた一札。或ひは光琳の能の稽古の覺え帳、雁金屋の賣上帳、衣裳の模樣、下圖の帳面、銀座年寄四家闕所に付家財入札の調べ上帳、さういふ種類の物から、光琳の畫稿、寫生帖等であつた。

光琳の寫生帳は、大型の畫帳へ、西の内のやうな紙へ色類の寫生をしたものが一枚乃至三枚位まで貼り込んである。寫生の筆は頗る確かなものである。そして實に綿密に描いてゐる。孔雀の寫生等に至つては、雌雄の孔雀の形態を十數通り寫生してゐる。孔雀が尾を擴げた處を前後から見て、肛門の周りだけの局部寫生をしてゐたりするのを見ても其の注意深さが想像される。着色も要所々々に施してある。あのやうな裝飾的な象徴畫を描いた光琳であるが、其の根柢に此れだけ確かな寫生があることを知つて、初めてその深さが肯かれるのである。

畫稿の方には、例の光琳獨特の圖案風の繪が澤山あつた。爰で、彼の此の畫稿と、宗柏宗謙時代の雁金屋の衣裳の下圖とを對照して見ると、そこに著しい共通點を發見することが出來るのだつた。光琳があのやうな繪を畫き出したのは偶然ではない。前に光悅宗達の流れを引いてゐると同時に、其時代全般の趣味性の發露である。偶々それを光琳が代表して最も力強く表現したに外ならない。有らゆる藝術が其の時代の産物であるやうに光琳畫が元祿といふ時代が産んだ藝術であつて、光琳といふ人間は其の時代を代表する人間なのである。猶、光琳畫と、當時流行した加賀紋、加賀染等との交渉も研究して見ると面白いと思ふが、爰では省略する。

全部一と通り拜見した後で、暫く主人と雜談する。小西氏は病氣療養かた〲京都の住居を人に貸して、二年以來此の淀に住つてゐるが、淀も來て見ると餘り氣に入らないから近く何處かへ轉じやうと思つてゐると話される。私が鷹ケ峰の話をして、尾形家の屋敷跡が畑になつてゐる。あの邊でも住まはれては如何と云ふと、主人は大層乘氣になつて、専門だけに直ぐ樣精密な地圖を書架から取り寄せて丁寧に調べらる。それから昔のこの淀附近の地勢などを話される。現在の淀川は町の東を流れてゐるが、昔の淀川は遙か西を流れて、淀城の西側の石垣に沿ふて流れてゐた。そして淀の南で木津川と合した。そこで淀といふ處は、少し雨が降ると二つの河水が溢れて忽ち床上に侵水するといふ有樣だつた。其の當時淀城の中の泉水へ用水を入れる爲めに、淀川に水車をかけ、それで城内へ水を汲み上げたものだ、それを淀の川瀨の水車と云つたのだと詳しく說明して下すつた。先刻の畔四十則の出鱈目が思ひ出されて可笑しかつた。

日暮れ近くにお暇を告げて、私は元來た道を戻つて來た。

炬燵酒戀し北國の旅

松川二郎

料理王國金澤

◇百萬石の匂と彩り

金澤に來て、『さすがに日本一の大藩、百萬石の舊城下町だなあ』とおもはせるものは、兼六公園ではなくて、その公園の入口にある圖書館である。こゝに縣立の圖書館あることが、すでに一の誇りとしてよい、何故ならば？、私は曾て廣島市に滯在中、一寸調べたいものがあつて圖書館を探したけれども、見當らなかつた。後になつて、師範學校内に、有ることは有るのだと聞いたが、師範校の附屬圖書館では私の欲むるものは得られさうに覺えなかつたので、とうとう行つては見なかつた。文化が進んだ、敎育が普及したといふが、五六の大市街を除いては、圖書館らしい圖書館を有つた市街は殆んどない、東北の學府を以て自ら居る仙臺市の如きすら然りである。

金澤の圖書館は堂々三層の洋館建で、特別閲覽室の如きはヘタなホテルの應接室よりも設備が行屆いてゐる、無論上野や日比谷の圖書館の比ではない、而も閲覽料は僅に金一錢で、普通閲覽室は全部無料なのである。この特別閲覽室の御定連は四高の學生だ。しかし彼等はこゝに來て書物を借りて讀むのではない、たゞ彼等の爲に設けられたるかの如き、靜かな、快よい、「共同の書齋」として、こゝに集つて勉强してゐるのである。疲れた眼を擧ぐれば、意外には公園の翠微濃やかに、柔かな日光と融け合つてゐるし、耳を澄ませば、池を落つる水の音がほのかに聽えてくるのであつた。藏書も可なり多い。縣營にはなつてゐるが、此圖書館が出來る迄には前藩主の力が與つて頗ぶる大きいと聽いてゐる。——どうしてもそこに、百萬石の匂ひがある。

『金澤は非常に感じの好い市街ですね、私はもうすつかり好きになつてしまひましたよ。若しおやぢがさう云ふなら、東京を引揚げて金澤に行つて住んでもいゝ位に思つてゐますよ』

と、私の友人のTといふ男は、——彼の兩親は共に金澤の人な

のだが、彼は東京で生れて東京で育ち、まだ一度も金澤を見たとが無かつた、今年の秋その老父につれられて、初めて「生れざる故郷」金澤を訪ふて歸ると、すぐ私の家にやつて來てから云つた。今後は一年に一度位は是非金澤へ歸りたい、誕生地は東京でも、矢張り私の故郷は金澤であるやうな氣がする などと云つてゐた。たゞの一遍でこんなに金澤に惚れこむ人間も少いけれども、兎に角人なつツこい市街であるには相違なかつた。

薄手輸出向の加賀羽二重を始め絹織物、漆器、銅器、陶器などに、商況も相當活潑だし、街衢も取分け立派だし、市街電車も通じてゐるし、押しも押されもせぬ北國第一の大都である。それで且つ毫もコセ〳〵したところがなくて、おつとりとしてゐる、仙臺のやうに暗い感じがない、土地が明ろくて、人間がまるい。——やアや、御座いみす、何ぢやき、と云つたやうな丸い言葉使ひとともに人間が皆圓い。ぼやあツとして、少しくピントの合はないやうな點も、あるにはあるが……。

犀川、淺野川の二川が平行して市街を貫流し、市街は自から三區に分たれてゐる。が其の三區がしつくりと連接せられて、放れ離れになつてゐない。仙臺市は廣瀨川があつて、市街の趣を添へてゐるのだが 一面には、此川ある爲に、町家街と河内方面とが全く分離せられてゐる形である、市街の中を川の流れてゐるのはいゝものだが、其流れ方で市街の趣は餘程異つてくる。

金澤の市街の中でも、淺野川筋と犀川筋とでは、其カラアが異つてゐる。金澤は元來坂になつてゐる市街で、新開地である停車場附近と、ずうつと奥まつた天德院附近の臺地とでは、四十米突以上五十米突餘の差があつて、勢ひ市街は山手と下町に分れてゐるが、此外右の川筋によつて、それ〴〵異つた特色を有つてゐるのを、私は面白いと思ふ、無論大體の感じではあるが、淺野川筋の古色に富み、何程か陰鬱なのに比して、犀川筋は明快で、新味に富んでゐる。それは地勢にも由らうし、又市街の發達して來た順序なども關係があらう。今日は、市街の重心は犀川筋の方に片寄つて來てゐる。そして犀川左岸の平地へ向つて、發展して行かうとしてゐる形勢を、明らに看取することができる。

中心街は香林坊。北は石浦町南は片町に通ずる大通りで、銀座と淺草を一緒にして、小さくしたやうな處である。乃ち金澤の『香ブラ』は東京の『銀ブラ』だ。賑やかなのは香林坊から片町かけてであるが、石浦町通は名產九谷燒の大きな店舗が、左右に軒を並べて、何ともいへぬ美しい町だ。金澤の九谷店は、甲府の水晶細工店と共に、市街の美觀を添へるものゝ双璧と云へよう。其殷盛な——金澤の銀座である香林坊から、ほんの一歩裏手に入ると柿木畠、落木町、そこらは昔の士族屋敷町で、坂に

なつた細い道を[illegible]に登つてゆくと、築土塀を廻はした古びた家の中から、のんびりした謡ひ聲などがもれてくる。

或る日、二人の老人が途上での立ち話。

『何處へ行きまつしやるがやい？』

『今日は増村んことで素謡のある日ぢやけ、お前さん行かんがか。』

『俺んとこへは何も通知やないが。』

『左様け通知やないがけ。増村も近頃もうろくしくさつたて。そりや好い處で逢ひみした、一緒に行こまいけ。』

『押かけて行くがけ？、だらくさい。』

『何のかまふことかい、向ふが忘れたがぢやもの。お前さんの顔みれば、増村奴「こりや失敗た」といふ位のものぢやわい。』

『あんた何をうたふがけ。』

『俺や今日は船弁慶と小督ぢや……。』

秋は暮れむとしても、金澤の日は長いらしい。

人のまるいのは「百萬石」の餘澤、生活難に追はるること比較的少く、而も冬四ケ月は雪に埋もれた陰鬱の天候、人々爐を擁して閑談に耽るとき、誰か口舌の美を思はざらむとするも得べけんやだ。「諸藝能がゝりでそろり〳〵と參らふ式の人間たのに、食ひ物にかけては不思議に敏捷に立廻り、殊にまづい材料を使つて旨く食ふ獲得の手腕に至つては驚かざるを得ない。否、鼓腹せざるを得ないのだ。

三都を除いては、西にして長崎、東では金澤、これを地方の二料理國として推さゞるを得まい。何人も異論のないところと思ふ。博多の「水たき」、鹿兒島の「豚コツ」、馬關の「ふぐ」、土佐の「鰹のたたき」、その他等々、お國自慢の名物料理は多く、その味亦ほこるに足るとしても、要するに其の數は二三品を出です、料理國といふ一般的名稱を與へる譯にはゆかない。仙臺に伊達料理、南部地方には松前料理といふ一種の式があるが、その技、長崎金澤には比し難いやうにおもう。長崎は支那及び泰西文化の入口であつたと同時に、支那料理も西洋料理も、總てこの關門を通過して我國に入つて來たので、從つて此地に先づ特殊の料理術の發達したことは當然のことであつた。長崎料理が東京大阪に對して、今日尚ほ隱然一敵國の觀を成せる素質、——むしろ今日の東京、大阪地方の料理が長崎料理の影響をうくること多き事實を、否認する譯にゆかない。

その點にゆくと、金澤は支那や泰西の文化からは遠ざかつてゐた爲、その料理も專ら内地的に發達し、すこしも切支丹バテレンの影響をうけてゐない。そこが特色だ。バタ臭からぬ、野趣に富んで、輕快淡白なものが多い、けれども、系統は江戸趣

味といふより、京都の脈を引いてゐるやうである。

が、私はつねに客旅として、甲地から乙地へと過ぎてゆく一旅客である。料理を論ずる資格はもたない。『加賀の食倒れ』といはれる金澤市を中心として、この地方の珍味二三を御紹介せんとするに止まる。

◇金澤の冬の珍味

友あり遠きより來る。『お久しゆう、どうぢや一杯やるけ』金澤の人がかう云つて客を誘うてゆく家は、犀川がしの錦甚である。錦甚は金澤の代表的料理店で、犀川に臨んで見晴らしがよい。かうした座敷は無論夏のものであるが、硝子戸越しに、川面にちらちら雪の降るを眺めるのも、旅の客には又なき風情のものであり、白い雪の中に輝く夜の灯を、川越しに望むのも亦趣があつた。此家の十八番は「ジブ」であり、同時に、「ジブ」は此のシーズンに於ける金澤の代表的料理でもあるのだ。

この「ジブ」に就て、最近のある婦人雜誌に、次の如く記載されてをるのを私は見た。

金澤には他の國で見ることの出來ない自慢の「ジブ」といふ御馳走があります。「ジブ」といふのは牛肉又は鷄肉を中心とした割合に濃厚なる御馳走で、寒い季節には仲々賞味されます。

料理法——最初醬油と砂糖(味淋を加へれば尙結構です)とで比較的濃厚な汁を煮立てます、その間に牛肉或は鷄肉を薄く切り(丁度適度する程度のもの)、それを表裏ともメリケン粉をつけて、煮立てゐる汁の中に入れます。それから百合か玉葱を、これ亦すき燒に用ゐる切方のものにして、肉の半分乃至三分の一位を入れて、肉が充分煮えると同時に火を引きます。かうして出來上つた品を、漆器でも陶器でも構ひませんが蓋附の器物に入れて、ワサビ或はショウガを少々すり込んで食膳に上せます。

と云ふのである。もし金澤ッ兒が讀んだら『何をだらな』と嗤ふであらう。而もこの筆者、金澤の某と名乘つてゐるから驚ろく。「ジブ」は肉にころもをつけて煮ることが一の特色ではあるが、材料はおもに小鳥の肉を以て第一とする)で、鷄肉も使ふけれど、牛肉や豚肉を使ふことはない。其は時として、魚肉をも使はぬではないが、それは「ジブ」の應用である、眞正の「ジブ」ではない。例へば、薩摩汁と云へば世人は多く豚汁を連想するが、本場鹿兒島で行はるる眞正薩摩汁とは、骨つきの鷄肉に限つたもので、決して豚肉を使はないとおなじことであらう。「ジブ」は上等の料理である。從つて取合せにも芹、みつ葉、松茸などを用ゐる。香辛料はワサビに限り、生姜を用ゐないといふ事もないとだ。——と筆は思ふのであるが、或る今日では金澤市に

於ても、牛肉に豆腐、生麩などを材料として「ジブ」をつくり、それを「ジブ」と心得て食べる者が多くなつたのかもしれない。

鮒のつくりも亦、金澤珍味の一つで、金澤は鯉よりも鮒を珍重する土地である。鯉と鮒と、何方が美味しいかは、往々食通の間に問題になるところであるが、濃汁としては鯉が優る、と云ふより鮒は問題でない。然し、刺身としては鯉は鮒に及ばない。尤も、それは寒鮒のはなしで、夏の鮒などは金澤でも決して賞美せられぬ。その寒鮒も犀川や淺野川の下流で漁つたものを最上とし、河北潟でとれた鮒は河の生洲に數日かこつて置いて、泥を吐かせてから用ゐるのである。

寒鮒の小さいのを、鱗をおとして、頭からぶつぎりにして大根おろしの中に入れ、柚實の汁を絞りこんで醬油を少々たらして食べる、これを「鮒のそろばん」と稱し、單純な料理ではあるが、淡白で、風流で、酒徒の間に喜ばるゝものゝ一種である。

鮒の外、金澤地方が川魚料理に於て特殊の發達を示してをることは、すでに一度書いたことがあるし、今は又その時季でもないから省略するとして、冬の珍味――殊に正月の珍味として『かぶらずし』あることを逸する譯にゆかない。或る人この蕪ずしを讃して曰く、

……北國に蕪ずしといふものあり、蕪を皮とし、鰤を肉とす外は精進にして内は魚類、漬物にして漬物ならず、鮓にして鮓ならず、形はサンドウイツチに似て其のハイカラに倣はず、重厚撲實頗る野趣に富み、酒によく、又茶によし云々。

金澤の正月に、蕪ずしの無くてならぬことは、恰も秋田地方に於ける「はた〳〵鮓」に同じである。これは馴れ鮓の一種で、鹽鰤の肉を適宜の大さ及び厚さに切つて、よく鹽を拔いて水を切つておく、一方中位の蕪を二枚ひらきに切つて、二三日鹽に漬けこみ、よく水氣を切つて中に右の鰤肉を挾む、即ち蕪と鰤のサンドウイツチのやうな形になる。それを、酒を加へて炊いた飯と一緒に桶につけ、上を板昆布で覆ふて、壓蓋をして石を置く。一箇月ほど經て食べ頃となる。鰤は美味しくないが、蕪には何とも云へぬ味ひが出てくる。

『鯡のすし』も亦珍味である。鯡は北海道渡來の所謂身かき鯡、それを二日ばかり水に漬けてよく水を切つておき、半乾しの大根（大きくないもの、二つに開く）と共につけこむので、漬け方は先づ大根を一列に敷き、その上に鯡を敷いて鹽と麴とをふりかける、如斯もの數回繰返してだん〳〵積み上げ、上に昆布を覆ひ蓋をして重石を置くことは蕪ずしの場合に同じだ。これも鯡よりは大根の方が美味しく、酒の肴としても、御飯の菜としても、その味はちよつと忘れかねるものである。

更に『コヌカ漬』に至つては、酢にあらず純乎たる漬物で、野趣滿々といふよりも野趣そのものである。材料は鯖、鰯、或は河豚の類で、それを米ぬかと鹽で漬けこんだものである。無論上等な食料とは云へず、且つ馴れない人はその臭氣に辟易もするが、由來臭い物に旨い物の多いことは、奥羽地方の鹽汁や朝鮮の朝鮮漬の例に由つて明らかであらう。干鰰（はたはた）の濃味も、コヌカ漬としたものは、却つて一種の旨味が出てくるやうである。生のまゝでも炙つても食べる。

生の河豚は、金澤では餘り賞美されないやうであるが、三枚におろして、皮を剥いで肉ばかりを乾して、粕漬又は糠漬としたものを、「ふくのすじ」と稱し、（金澤の人は決してふぐと濁つてはよばない）、盛んに珍重せられる。特にコヌカ漬の「ふくのホーラ」は珍中の珍として、酒徒の嘆賞措からざる所のものである。ホーラとは卵巣の意か？鰾のことである。ふぐ料理の本場下の關でも、さすがに鰾までは食べないやうであるが……

◇名物「ごり」料理

「ごり」といへば、すぐに金澤を聯想せしむる程、金澤の「ごり」料理は有名なもので、「ごり」料理は即ち金澤の代表的料理とも云へるであらう「ごり」料理と云つても、その料理法は幾種もなく、多くは「ごり汁」とするもので、「ごり汁」を看板にしてゐる料理屋を一般に「ごり屋」と呼ぶ、犀川筋では杉はの一二三樓、淺野川筋では常盤町の扇五樓が即ちそれだ。「ごり汁」は東京の鯰汁と同じく、「ごり」を主とした味噌汁で、取合せには矢張りそぎ牛蒡などが用ゐられる、鯰汁ほど濃厚でなく、私は寧ろ遙かに「ごり汁」をこのむ。

「ごり」の最も通な食べ方は、生きたまゝ水と共に鍋に投じ、中央に豆腐を入れて火にかける 水の熱するにつれて、「ごり」は苦しまぎれに鍋の中で縦横に猪突し、結局は悉く豆腐の中に頭を突きこんで最期を遂げる。それを「ちり」のやうな鹽梅式にして食べるのだ相である。成る程それはうまいかも知れない、又それが特別に殘酷な仕方であるとは云へないかもしれない、――味噌汁の場合でも「ごり」は常に生きたまゝ熱湯の中に投りこまれるのであるから。然し私は何うしても、それをさう迄し 食べる氣にはなれなかつた。

「ごり」は淺野川のは味劣り、河北潟産は最も下等、犀川の「ごり」を以て最上とせられてゐる。角場町に白山屋といふ鰍の問屋があつて、各地で漁られた「ごり」は一度こゝに集まつて、それから市内の料理屋、魚屋等へ供給されるのだと聞いてゐる。金澤土産として評判のよい「ごり」の佃煮や千歳煮も、此の家が本家であるといふ。千歳煮といふのは他國で云ふ甘露

煮のことか。佃煮には多く河北潟の「ごり」を用ゐ、千歳煮の方は「川ごり」を使用する由、これも聞き事である。

處で「ごり」とは何んな魚か、これが一の問題である。東京の人は「ごり」とは、カジカのことだと云ひ、金澤の人はカジカをも「ごり」と稱してをる。「ごり」とカジカは、極めて近似の種類ではあるが、實は全く異れる魚である。實物について、是は「カジカ」「これはゴリだ」と區別することは比較的に易いが、それを誌上で説明するには、徒らに紙幅を費さねばならぬ。が、大體から云へば、鰍は形鯊に似て頭が割合に大きく、口扁たく、身長は最も大なるもので三四寸にすぎず、體の背部は灰色又は淡青黑色とでもいふべき色合で、五箇の黑い斑點を有し、腹部は黄白色を帶びてゐる。清い流れの淺瀬に棲んでゐる。ごりも形は鰍によく似てゐるが、大きいのは六七寸に達し、全體褐色で、暗黑色の斑點と不規則な横斑とを有し、鰭にも亦斑點がある。腹に皿があつて、清い流れの石の間に吸ひつ いてゐるので一名「石伏」ともいふ。東京でいふダボハゼは是である。「ごり」はカジカに比して、味がおとる。金澤の「ごり」が旨しいのは、ひとつは料理法にも由るけれど、主としてカジカを用ゐるからである。處が近年は、盛んに眞正の「ごり」をも交ぜて使ふやうになつた。『いかん／＼。』

鰍、河鹿、話音がおなじである爲に、昔に鰍が鳴くごとく勘違へられてゐたものだ。「常陸紀行」に、

……久慈川は更なり。那珂川、その外諸處の溪川にかじかといふ魚あり。此魚、味も頗る美なり。土人云、是の魚春半より秋晩まで朝夕鳴くよし、その聲さやかにして愛すべし云々。

古人の句に『かじか鳴く夜のあはれを勝のさき』。

谷川にかじか鳴なる夕まぐれ。
こいし流るる水の落あひ。

この連歌も、どうやら履き違へてゐるらしい。尤「ごり」とは鰕類ほどの關係にある黄顙魚といふ魚は、摑まへるとギキと云つて啼くが、とても河鹿のやうに朗らかな聲ではない。――話がだいぶ横道へそれかけた。

へかんとう燒　胡生笙

加賀の近海で冬季最も多く漁れる魚は鰤、鮭、鱈、鰈、蟹の類で、その味も亦頗る美であるが、是等は若狹越前から越中方面へかけて一帶に漁れるもので、特に金澤の珍味とは言ひがたく、且つ鮭や鱈はむしろ越中が本場で、蟹と鰈は越前の名物となつてゐる。鰯は、東京附近に於ては十一月がシュンで、十二月に入れば味の落ちるものであるが、金澤地方に鰯の出盛るのは四月の半ばから下旬、尸崎山の麓に溜まつてゐた雪が先づ消

え、次で白山の連峰漸やく晴みわたつて、犀川にたぎる雪しろ水もぬるむ頃になつて、こゝに始めて、

『鰯しよん、鰯しよん。』

といふ景氣のいゝ聲が、市中隈々までも觸れまわり、閭巷到る處に、鰯燒く煙棚びいて、春來にけらし霞ぞ立つとまがうばかりである。その頃北陸の海濱に押寄する鰯の群といふものは、實際素ばらしいものである。刺網で漁るので「刺網鰯」と呼んでゐるが、年とともに別れた「鰯のぬた」に、翌年櫻の咲く頃北陸地方でめぐり會ふといふのは、旅の面白味である。

かんとう燒　これも金澤名物。人目しのぶの誰そかれや、浮世小路の往きかひに小さな屋臺を桁にとり、串より細き生業も、身を切賣りと云へばとて、浮川竹の、嘘の情を賣るではない。僞りない味ひは嚙しめてこそ知り給へ、――なんかと云ふたら乙に聞こえよう、事實又、今川燒や義士燒ほど野暮なものでもなく、かんとう燒と云つても、關東地方には類のないもの、鰯を骨ぐるみぶつ切にして、串にさして蒲燒としたものである。店は屋臺でも酒は灘の生一本！、と來れば嬉しいんだが、えいへいろくな酒が無いとは氣が利かない、但し酒屋の前を選んで店を出すのは、考へたものだ。車夫、馬方、その他野外勞働者は飯だけを家から持つて出て、このかんとう燒を買つて菜にする。すなはちかんとう燒の屋臺は、晝間でも出てをるのである。固より、上つ方の召上るものではありません、が、かんとう燒まで食べて見たんでなければ、金澤の食通とは云へない。文字通り珍らしいといふ意味での珍味。

金澤は料理よし、酒もよし。「北陸の灘」と稱せられる程あつて、地酒にはなか〱佳いのがある。量に於ても、年産額何萬石とやら、何百萬圓とやら、兎に角縣下の工産品中第二位を占めてゐる。それも一昔以前迄は、酒は灘に限るとあつて、地酒を顧みる者は殆どなかつた。そこで金澤の酒は悉く灘へ買取られて、レッテルを貼替へて逆移入されてゐた。それに氣付いて、じつくり味つてみると、地酒の佳いことがわかつたとは笑ふべからず何處にもある話である。甘口では「福正宗」辛口では「猩々舞」どつち付かずでは「いち姬」「友白髮」など、相當飲める酒である。盃には青九谷がある。九谷燒といへば俗惡な物のやうに考へられてゐるが、青九谷は九谷にして九谷にあらす、高雅にして洒脫、この盃なら酒にも、味が出る。

花街は、淺野川の大橋を渡つて右へ折れると、卯辰山に寄つた一圓が「東新地」、金澤一の花街である。橋を渡らず左岸の下流、川に沿ふた片側町に御神燈の灯やいてゐるのは「加計町」これは一寸京の先斗町と云つた情景がある。加計町は藝妓專門

で、俗に「ながれ」と呼ばれてゐる。犀川縁には石坂町に「西」「北」の二遊廓がある。加賀も美人系の圏内に屬する地であるから、兎に角美人は多い。――是れ以上を知り度くば、家へでもやつて來てくれ給へ。

料理に附屬して、名物「朝生姜」のことをも一寸紹介しておきたい朝生姜と、唐辛（金澤兒の所謂ナンバ）を原料とした煉り物で辛甘その味ひ宜しきを得、土地の人は刺身、湯豆腐、めん類等凡そ何物にも之を添へて賞美すること、長野市に於ける「七味唐辛」の如きものがある。みやげ物として、曲物に入れても賣つてゐる、春日町二丁目大豆田屋といふのが本家である。

◇北陸名菓「長生殿」

筆は、まんべんなく、甘黨の領域にもおよぶ。森八は金城一の菓子舗で、同時に縣下屈指の素封家、森下森八の名は曾て貴族院議員名簿にも載つたことがある。御所落雁『長生殿』は古くから此家で製造販賣せられてゐるものである。御所落雁は落雁の元祖で、利家時代若しくはそれ以前に於て創始せられたものらしく、當初は白色長方形にばらばらと黒胡麻を振かけたものであつて、三代の藩侯利常の時、これを後水尾帝に獻上した處、賞はせられて「田の面に落つる雁のやう」と御諚があつた、その御言葉に因んで落雁と命名し、小堀遠州に囑して意匠を加へしめた、今日の態――即ち短册形にして、上に長生殿の文字を書いたのは遠州であると。かゝる來歴を有する名菓だけに、石州の「[illegible]雪」、長岡の「越の雪」と併せて、北陸の三名菓と稱せられてゐるが、或ひは、鹿兒島の「輕かん」松江の「山川」と併せて、地方の三名菓と稱して不可ないであらう。

御所落雁に次で石川屋の「壽せんべい」も、金澤名物の一つだ。煎餅とは云ふけれど實は干菓子で、圓形の上に紅と白で「壽」といふ文字を浮き出してある。婚禮その他の儀式の席上には、金澤では無くてならない菓子となつてをる。

この外森八の羊羹、石川屋の「月並餅」なるものも、甘黨の舌を喜ばせるに足りる。月並餅といふは一月の初音餅、二月の梅餅、三月の蓬餅、四月の櫻餅、五月の草もち、六月の柏餅、七月の葛餅、八月の萩餅、九月の月見餅、十月の菊餅、十一月のあられ餅、十二月の水仙餅。月々趣向を違へて賣出すところ一寸風流であらう。

停車場で賣る「柳もち」。昔、卯辰山の櫻木街道の附外れ今森川町と云つてる處に、藤を植ゑて藤の茶屋、柳を植ゑて柳の茶屋といふ二軒の休茶屋があつて、その柳茶屋の名物が「柳團子」であつた。その株を讓受けて襲用したのが此の柳餅なのであるが、柳ケ瀨で賣る柳餅と同じ物で、うまいといひたいことは

津幡の「きび團子」と伯仲の間にあり、松任名物圓八の「あんころ」の半分ほども賣れない。

柳團子は、兼六公園の休茶屋で賣つてゐる。

越前・越中の珍味

◇セイコ蟹の卵と甲羅酒

ひゆう、ひゆう、とみぞれ交りの北風が吹すさむ日、

『セイコガやニセイコガーニ。セイコガニ買ひなはらーんかあ。』

四箇浦あたりの漁の女が、越前訛丸出しで觸れてくる聲。あゝあの聲は哀れにも痛々しい聲だ。冬來れば、私は彼の蟹を賣る女と、旨いセイコ蟹の卵とを想ひ出す。

『お神あん、セイコ蟹買ふとくれんか。』

女は、さう云つて勝手口から覗きこむ。爐燵へずり込んでぬくぬくと尻を溫めてゐるお神あんは、情もなく『まあ、よつかつたわの』とくる。

『そう云はんと買ふとくれ、安うまけとくがの。』女はかまはず荷を下す。

『眞個に安けりや、買ふといても好いんぢやけどォ。』

と、お神あんそろそろ爐燵から這ひ出す。初めから買ふ氣なのである。値は十尾二十錢位のもの。賣手は値切れるのを承知で二十五錢といふ、買ひ手は『ほう高あ。十五錢にして置きなさい、そしたら十尾買ふわの』さうは負けないと承知で値切る。他から見たら誠に餘計な手數だと思ふが、これが此地方――特にセイコ蟹賣買上に於ける慣習的儀式なのだから仕方がない。

かくして賣り買ひせらるゝセイコ蟹とは、越前名物として世に知らるゝ大きな蟹のことではない。形も遙に小さく、茹でても甲殼は彼のやうに鮮かな朱紅色を呈せず、黄褐色乃至は朽葉色のもので、普通は肉を食べず、赤子「味噌」などいふ臟物と、卵とを食べるのである。土地の人々は、普通の蟹よりも寧ろ此のセイコ蟹を珍重する。

卵は暗紫色をした砂粒のやうな小粒で、一腹に數萬顆をかゝえてゐる。それを二杯酢にして、酒の肴にも飯の菜にもするがシャリシャリと音して頗ぶる乙なものである。然し最も旨しいのは、た色たしたその「赤子」で、味は雲丹に似て一層上等である。いゝ加減つゝいた後で、甲羅に酒を注ぎこんで、溫める所謂甲羅酒なるもの、是亦風流。燗にしたのは引風の妙藥とある。

雲丹と鰈も越前の名産。天草地方の泥雲丹は「鬼がぜ」を原料とし、越前の練雲丹は「貝がぜ」を原料とする、越前雲丹の色が美しく味の良いのは、製法に由るのでなく海膽の種類に原くのである。但越前の雲丹も、市中で桐の箱に詰めて賣つてゐるのは多量にメリケン粉がはいつてゐる、寧ろ泥雲丹の純なるも

のに如かずである。いづれにしても、雲丹は海膽の卵巣の鹽辛で、天草地方では寒中に製造するが、越前では盛夏につくる。

鰈は大分縣日出町の「城下鰈」、これの刺身は天下一品と稱せられるが、不幸未だその味ひを知らぬ。越前の鰈は中頃の大さの肥つたのを、一夜鹽にして生乾したものが旨しい。「若狹鰈」の名の高いのは、昔小濱と京都との交通が盛んで、小濱から京阪地方へ移出されたのが原因であらう、若狹鰈も越前鰈も同じ鰈である。かうした例はよくあるもので、舊幕時代福井藩主から年々將軍家へ獻上の寒鱈は、街道往來の山度笠を土下座せしめ、越前の寒鱈は「諸國名物往來」にも掲げらるるに至つたが、鱈は越中の名産とする方が、どうも正當のやうに思はれる。

生鱈は淡汐昆布と一諸に鹽煮としたものが一番旨しく、北陸地方は一般に行はれる。此の頃此の地方を旅行すれば、どこの旅館の膳部にも、恐らく此の一品を缺くことはあるまい。さり乍ら一旅人の曰ひけらく、

『たまに食べるから旨しいので、處かはれど品變らず、日々の鱈こぶ責めにはあやまる』と。

◇**鮟鱇と酢かぶらの富山**

鱈の卵を卵巣のまゝ鹽漬にしたものが、越中名産の「もみぢ子」で、名はその鮮やかな紅葉色から來てゐる。粒子極めてこまかく風味も甚だ勝れてをる。近年北海道でもこれを製造し、歳末から歳首にかけて、東京及び京阪地方の市場に移出されるやうになつたが、色彩に於ても、風味に於ても、越中産のものに比すれば、著しく遜色がある。

『鱈の卵にしては、粒子が細かすぎる。鱈の卵といふものは、もつと粒の大きいものだ。』

と、不審を懐く人があるかもしれない。それもさうだ。もみぢ子は「スケトウ鱈」の卵で、普通の鱈の卵ではない、顆粒の大きい普通の鱈の卵は味の頗ぶるまづいものである。スケトウ鱈は朝鮮では「明太魚」と稱し、昔から朝鮮水産業の首位を占めてゐる魚で、鮮人が明太魚の眼玉を嗜食することは、驚くべきものである。朝鮮を旅行する人は、彼の地の店頭にぶらさがつてゐる干鱈を、少しく注意深く觀察せよ、悉く眼玉のくり抜かれてをることに氣付くであらう。干した鱈の眼玉をばりばり囓りながら、酒精分の強い酒を呷るとは、鮮人の上下を通じて、最大快樂とする所、――と云ふよりも、是がなくては、彼等は到底收まらないのである。

神通川の鮎と鱒とは、俱に日本一の定評あるものであるが、今は鮎の時季にあらず、鮭と鱒の卵なる「すずこ」に就ては、曩に利根川の鱒を論ずる際に述べてゐるから、茲には省略す

る。冬の富山の炬燵酒情趣を濃やかにするものは、鮟鱇鍋である。鮟鱇料理の盛んな土地は、水戸地方を以て第一とし、これに次ぐものは越中であらう。無論漁穫量の多いことが、原因の一つではあらうが。

鮟鱇の一番旨しい食べ方は「チリ」である。「チリ」の材料としては、第一に河豚を推し、第二に鮟鱇を推さねばならぬ。兎角愛嬌者が「チリ」としては上等なるらしく、「鯛チリ」は到底「鮟鱇チリ」の敵でない。

しかし、鮟鱇の皮を嗜食するところは、日本國中富山縣だけであるらしい。鮟鱇を三枚におろし、皮を除いて、肉ばかりを薄鹽にして乾燥し粕に漬けたものを「鮟鱇の條」と稱して珍重するが、その「すじ」を作る際剝ぎ取つた皮を、板に貼付けて乾かして貯藏して置く。そして不漁のときや、不時の來客の際などに、之を熱湯に解いて柔かくして、吸ひ物の實としたり、或は三杯酢にして酒の肴とする。木くらげ等と取合せると、一寸おつなものが出來るのである。河豚の皮も亦、同じ様にして此地方では用ゐられてゐる。

金澤の「かぶら鮓」に對して、富山の正月に無くてならない肴は「鮓かぶら」である。其作り方は簡單で、小蕪を薄く切つて、蕪子昆布及び鰑切にした唐辛と共に、二杯酢に漬けて輕い重石をしてくればよい。小蕪特有の芳香と甘味とに、昆布のマントとグルタミン酸とが融けこんで、白色の滑らかな肌に、おい精氣となつて舌の上から食管へと、するすると辷つてゆく。彼の京都名物「千枚漬」に徴して見ても、蕪と昆布とは、特別な抱和力を有つてをるもの丶の如く、私には感ぜられるのである。

此外、昆布卷の蒲鉾、烏賊黒作り、越中バイなど。富山及び其附近は珍味に富む地方であるが、已に「舌の旅」に掲げてあるから、爰には説明を略せねばならぬ。烏賊の黒作りとは、烏の肉にその墨囊を叩きまぜた鹽辛で、風味に於て、土佐の「酒盗」と共に斯界の双璧。又酒田名物蝶螺の鹽辛、平潟名物鮑の鹽辛と丶もに、鹽辛界の三珍と稱することが出來よう。

◇滑川名物『螢烏賊』

烏賊と云へば、滑川の螢烏賊は、魚津の蜃氣樓と丶もに、富山灣頭の二大奇觀と稱せらる丶ものである。魚津と滑川は僅かに二里を隔て丶をるのみで、蜃氣樓は滑川海岸からも見えるし、魚津沖でも螢烏賊は漁れるのだが、矢張り本場は爭はれない、蜃氣樓を觀望する位置は魚津を最上とし、螢烏賊の八割までは、滑川沖に群集するのである。

螢烏賊の産地は世界でも極めて稀であるのみならず、我が富山灣の螢烏賊ほど、強力な發光器を有するものは、恐く世界に

絶無だといふことである。即、我が螢烏賊は、ひとり富山灣頭の誇りのみではないのだ。だが、此の烏賊は假小さく、味わろく、「舌」の旅客に取つては問題でない。

さても辛氣な螢烏賊
なんの思火に燃ゆるやら
……………こいかゑ。

螢烏賊を思ひ、螢烏賊の唄を思ふと共に、私は滑川の或る一人の女を思ふ。――女が胸に燃やす火を、知らず、顔に、情なく別れて來た女をしぞ思ふ。誰だい變な咳をするのは？　ナニ奇劇なのだよ、旅中には有勝ちの小奇劇として、聽き給へかし。

五六年以前の話、昔越中守であつた萬葉歌人大伴家持の遊跡を探るの目的で、半月ばかり富山縣下に遊んだことがあつた、頃は師走の半、毎日霰が降つたり、ちらちら雪の降つたりする時季だつた。滑川町の、中島樓といふ旅館に二晩泊つた。今は多分滑川ホテルと云つてるであらう、丁度その増築が出來たばかりの時であつたが、此の中島樓といふのが頗ぶる變挺な家で、旅館と料理店と洗湯と芝居小屋と妓樓と、一口に言ひ切れぬ程澤山の商賣を兼業し、それが皆廊下つゞきになつてゐた。私も隨分各地を旅したけれど、こんな妙な家は初めて見た。

冬でも、私は矢張海の見える室を選んだ。室内の設備も相當に整ひ、滑川一の料理屋だけに、食べ物も旨しかつたが、風呂場の汚ないのには一驚した（洗湯で、町の人達と混浴だから）。風呂から上つて室へ歸る時、道を間違へたと見えて長い廊下をぐる／＼廻つて居ると、忽然として劇場の樂屋へ出たのである。

『いよう是は、妙な處でお目にかゝるもので御座います。』

『いや全たく、變な處でお目にかゝつたものだね。』

變な處で變な男に會つたものである、今夕から二日間、此の劇場で開演する新派劇△△座の座長なにがしは、東京の劇壇でも少しは名を知られた男で、或る關係から私は一寸知合つてゐた。田舎廻りの俳優生活といふものが、私の興味を引いて、樂屋へも遊びに行けば、その男及び幹部と稱する者五六人を招んで、一緒に飲んだりもした。一座の大半は樂屋に起居してゐたが、彼と幹部俳優とだけは、私と同じ旅館の他の部屋に泊つてゐたのである。

さて其女（私の室の受持）だが、旅館の女中とは言ひ條、かうした田舎の料理兼業の家の常として、歌もうたへば三味も彈き、客と一緒に酒をも飲む女で、色は淺黑いが、口元に愛嬌ぼくろのある小意氣な女であつた、年は二十二三。――前置が長いやうだが、是だけ説明をしておかないと、後の話がわからない。

雪の北國路にうれしいものは、炬燵であつた。

『お炬燵で召上りますか。』

『あゝ左樣して貰ひたいね。炬燵のない世界から來ると、この炬燵といふやつが莫迦になつかしくてね。』

『では茶辨當を持つて參りませう。』

炬燵の櫓の上に茶辨當をのせて、硝子戶越しに海を眺めると云つても、月は無かつた。漆黑の闇にちらちら漁火の動いてゐるのを眺めつゝ、例の烏賊の黑作りや鮟鱇のちりで、ちびりちびりとやるのは、實際何とも云へない氣分だ。『是だから旅はやめられない』と、改めて感激せざるを得ない譯である。

さても平氣な炎烏賊何の烈火に燃ゆるやらを、唄つて聞かせたのも、此の女であつた。

二日といふ日は、茫惘として流れた。と今日となればこんな感傷的な言葉も、一寸使つて見たくなる。明日は出發といふ二日目の晩、家の棟も三寸さがる午前二時頃、紙門がすうと開いた。慌てるなよ化物ぢやない女だ、長襦袢に伊達卷をしめて、いと艶めいた姿で、手には炭籠をさげてゐる。——『炭籠とは考へやがつたな』と私はおもつた。

『お火が無くなりはしませぬか。』

と女は云つて、炬燵の中を掻廻して炭を活けたらしかつた。

『今時分迄、未だ寢ないでゐたのかね。』

ときくと、女は、

『はあ。お風呂のすむのは大抵今時分ですの。』

と答へて、はくしやん、『おゝ寒む』と來た。北國の冬の夜は、長襦袢一枚ではちと寒い。

『そんな薄着をしてゐちや風をひくぜ。』

『濟みません、少しあたらせて下さい、いゝでせう。』

『いゝとも、澤山あたり給ひ。』

然し、私は斯う見えても（諸君に何う見えるかそれは知らないが、）かゝる場合、無責任な、破廉恥な、放埒な氣分には、なり得ない人間なのであつた。女は暫時無駄話をしてゐたが、やがて『おやすみなさい』と云つて去つた。私はほつと息氣を吐きつゝも、尙且、流星光底逸長蛇の感も無いではなかつた。實際のとこさ。

これで第一卷の終り。

芝居の連中は新湊といふ町へゆくと云ふので、富山へ歸る私と、同じ汽車に乘合せた。田舍廻りでも、座長とか幹部とか云はれる俳優は二等に乘るのであつた。連中が連中だから、車中の話題は女郎買ひに行つた話、女中を引張つた話、そんなことに花を咲かせて笑ひどよめいてゐた。私もつい釣込まれて、

『彼家の女たちは、深實ぢやないかね。』

と前提して、女の擧措の一端を物語つた。

すると一座の頭取をしてゐる男が、ゲラゲラと笑ひ出して、

『浮氣たア可愛想ですぜ。さう仰在るなら白状しますがね、斯うなんです。』

と、其の男の語るには、

『御馳走になつた翌日、即ち昨日の正午頃です、彼の女が、——御承知でせうが彼の女の名はお芳さんといふのです、私の室へ遊びに來ましてね、煙草でも買へとつて、三圓呉れたんです、オヤ此奴俺に氣があるなと思つたので、オホンと反繰かへつて、さあ遠慮なく此方へ寄り給ひとか何とか、まさか其處までは云ひませんがね、兎に角大に收つてゐると、奴さん初心らしく、少時もぢ〳〵して居ましたがね、實は一人取持つて貰ひたいのがあるつて言ふんです、まるで喜劇でさあね、何だい人を莫迦にしてやがると思つたけれど、然し取持つて呉れゝばお禮は別にすると言ふのです、色と金、何方かつて云へば金の方が結構ですからね、よし來た頭取（おれ）の命令をきかない俳優（やくしや）は此一座には居ない安心したまへ、だが一體それはどの男だつて聞くと、彼の松の間の方だといふんです、がつかりしちまひましたよ。

ありやアいけないよ。

何うしていけないのよ。

何うしてつて、彼の方は俳優ぢやないよ。

俳優でなくたつて關はないことよ。

お前の方は關はないだらうけれども、彼の方に俺からそんな話を持出すとはできない。

彼の人、そんなエライ人なの?。

どうだね俺と振替えないか。

人を莫迦にしてるのね。

と云つた樣な次第で、奴さんとう〳〵三圓を棒に振つちまつた譯なのです。あはゝゝゝ。』

すると、座長の男が笑つて、

『そりや怪からぬ話ぢやないか、兎も角一應こちらへお通ししないで、君の獨斷で斷つて了ふといふのは僭越だ。ねえ先生。』

『むゝ、さうとも。』

と私も一緒になつて笑つたが、何となく、變に、淋しい氣もした。

炬燵酒の情調

「炬燵酒」の情趣は、雪を知らない、炬燵を知らない暖國の人々に取つては、其面白味を說いても一寸分りかねるかもしれない。

『北陸や奧羽地方を旅行するなら冬のことだよ。炬燵のある時季だよ。』

私は常にさう云つて友人に勸めた。北國の旅のおもしろみ

は、矢張り雪の積もつてゐる時でなければ、旅客には分からない。雪に埋もれた三四箇月は、屋外に仕事がなくて、屋内に炬燵があるのだ、どうしても人間は淫蕩にならざるを得ない。

炬燵酒の情調を説くには、東北でも、北陸でも、山陰でも、舞臺は何處でも好い。土地は異つても情趣はひとつである。されば茲では舞臺を福井に取らう、福井は織場(はたば)で、工女の多いところ女の働らくところ、而して冬は炬燵の在る土地である。同じ北國の中でも、淫蕩な點にかけては、自慢になることではないが、屈指の中に數へられてゐる。市街は、縣廳所在地としては北國でも一番小さな市街に屬するけれども、感じは悪い方でなく、藝妓に美人の多いことと、衣裳に贅をつくしてをる點では、富山も金澤も福井には及ばない。流石に織場だとおもはせる。此の市街に足跡を印した名士にして、足羽山公園の旗亭「五岳樓」を知らぬはなかるべく、名妓と謳はれた老妓錦屋の琴吉は、都人士の間にも何程かは知らた名であつた。

宴會用の大廣間の外は、冬はどの室にも炬燵が設けられてある。炬燵は東京の四疊半でも時に見受けることができるが、行火の上に櫓をおつかぶせて布團をかけたもの、彼れは炬燵にして炬燵にあらず、押すと櫓がずるずると移動し、空氣と水は溫まれば輕くなるてふ原則に從うて、暖かみが上すべりをしてお尻がぬくもらない。甚だ情趣の薄いものである。雪國の炬燵といふのは、室の中央に小さな爐が切つてあつて、それに火を入れて櫓をかけるのだから、櫓も動かないし、まづ足先からお尻の方が溫まつてくるものなのである。

柔かい緞子の布團をかけた櫓の上に、紫檀の一枚板を置いて、肴は越前名物の雲丹と蟹、それに鰤のぬたと云つたやうな、比較的淡泊(あつさり)したのが三四品、酒は灘、すでに炬燵の熱でお尻からぬくぬくと溫もつてゐる處へ、銚子が一本形づく頃には、もう可なり陶然としてくる。煙草を召上る前に先づ一粒、それは仁円の廣告、酒をうまく飲むには雲丹だ。小豆粒ほどの分量を箸の尖に引かけて、舌の上に溶ろかして置いてぐつと飲むと、酒に一種特別の味、含んで持つやうな味ひが出てくる。

ぱた、ぱた、ぱた。――廊下を小走りの音。室の外で『おゝ寒ぶ』と一つ云つてから、すうと紙門(からかみ)を開けて『今晩は、おほけに』。おほけには有難うの意である。

『あら、旦那はんでしたんけ。お珍らしいこと。（こゝで今一度おゝ寒ぶを云つて）一寸溫らして貰ひんすや。』

と、何は兎もあれ先づ炬燵に入る。外は吹雪か、鼻頭と耳朶を赤く染めて、鬢に雪が一ひら二ひら、消えもやらず引かゝつてゐる

『また降り出したと見えるね。』

『へえ、牡丹雪がぼたぼたと降つて居んすんやわれ。………何日、東京からお出なはりしたんですいね、へえ今日ですけ。』などゝ云つて、それからぽつ／＼お酌をはじめる。

吹雪の夜は、風が時々がたがたと音立てゝ戸障子をゆすぶつてゆく、ひゆうと笛鳴りしてゆく。その度ごとにぞつと寒さが身に沁むやうに感ずるが、風の無い日は、障子の硝子を通して、漆黒の闇の中に、音もなくちらちら白いものゝ落ちてゐるのを眺めるところに趣がある。月の夜は、古い形容詞だが一面の明鏡皎々として、その冷たい光が川の瀬にふるえて、川千鳥がピピと啼いてゆく。――淺酌低唱には五層樓などより、足羽川の右岸に、手頃な家が多かつた。

炬燵の櫓といふものは、言ふ迄もなく四角に出來てゐる、そこに客は相對して座つてをる。藝妓たるもの炬燵に入るには、勢ひその間に入るより外に仕方がない。手が觸れる、膝が觸れる。北國の冬の料理屋は、東京の待合の四疊半よりも、一層濃厚な情調を有つてゐるものなのである。

雪の山中、山代にも、忘れられぬ想ひ出がある。彼處らの溫泉情調も、矢張り夏にあらず冬の物であるやうな氣がする。山中で「獅子」、山代で「太鼓の胴」、粟津で「綿帽子」、片山津では何と呼ぶか知らないが、矢張りさうした湯女の名殘である一種の女がゐた。近年風儀の惡い溫泉場は漸次排斥せらるゝ傾向を有し、湯女は殆ど全くその跡を斷つに至つたが、石川縣下に限つては、溫泉場に溫柔氣分を漲らせることが、一種の惡習であるかのやうに見える。炬燵のある國で、湯町で、しかも湯女式の女の居る土地、此處の冬に濃厚無比の溫柔情調の釀成せらさる理由がない。かくて、

　お前のお側と蟋蟀橋は
　離れともない何時までも。

てふ湯槽の湯氣の中から生れた小唄は、今尙ほうたひ續けられてゐるのである。が、すでに書きふるされ、語りふるされた「冬の湯泉場情調」など、今更ら私の書くことでもなからう。

眞の「炬燵酒」の情趣は、かうした市街や溫泉場などよりも、もつとずつと田舍、例へば、福井縣下であるならば勝山、大野などいふ山間の都會へはひつて行くことによつて、一層純眞な、面白味が加つて來るのである。そこは眞實の山嶽にちかい九頭龍川の上流地方で、冬でなくても一種特殊のカラアを有つた山都なのであるが、冬は特に雪が深いから、町の中でも俥の通せぬやうな日が多く、藝妓は着物を膝から折つて帶に挾み、緋縮緬の長繻袢を雪に艷めかせながら、雪靴といふものを穿いてやつて來る。あでやかにをかしきもの、雪靴に長繻袢の

のこぼれたる、都育ちの清少納言は此の情景を知らなかつた。
此處は岐阜や、蟹や雲丹の世界ではない、鴨か猪の肉でもジワ〳〵煮ながら、熱燗でやるに限る。

　龜山城中千尺雪　往者無路不能回
　高低一色銀世界………
　東隣西隣絶往來　家家鎖戸閉爐座

大野は福井市から電車に依て僅か一時間で行ける町であるが、北陸筋では名うての雪深い土地で、一夜の間に一丈餘を積んだレコードをもつてる處である。夜更けての吹雪には、わづか二三町を隔てた家へ歸ることが出來ないで、女はよく客と雜魚寢といふことをやる。これ等も亦、雪國特有の情趣の一つであらうか。

◇九頭龍川の鮎と風光

大野町は、「舌」の旅客にとつては素通りの出來ない土地である。勝山町の如く直接九頭川に臨ます。川からはちよつと離れてゐるが、山間のひろびろとした平野の中央に、物しづかに、山都特有の落付を有つて横つてゐる態(かたち)は、充分旅客のこゝろを引くに足りる。冬の鴨、夏の鮎、これが此町の昔からの名物で、武鑑の「時獻上」の中に

大野藩　十二月中　鹽鮎・　寒中　鹽鴨・
福井藩　九十月中　子籠鹽鮎　臨時　雁、鴨
　（子籠は卵ごめの意であらう）

とあり、慶長年間の古文書にも、

　覺
一、大野領河筋鵜川之事
一、同鮭川之事
一、於大野領わなさし鴨取事
右之役儀仕上候大野領如先例只今迄被仰付置候條其紛無之候者也
　小野田三郎太夫
　金塚中務輔

とある。金塚は大野町の舊稱で、鵜飼、鮭漁及び鴨獵は、一の特權として認められてゐた土地である。

九頭龍川の鮎の美味は、神通川の鮎と伯仲の間にある。縣下の鮎の總産額中、二割五分は九頭龍川の産で、價格は約四割を占めてゐる。即ち九頭龍川の鮎は、値がぐつと高いのだ。その九頭龍川の鮎の本場は大野町である。

今日、北陸筋では、鮎を漁るに殆んど鵜を使はないが、昔は却つて盛んに鵜飼が行はれてゐた。高槻時代に、神通川（婦坂

川）で鵜飼の行はれてゐたことは、家持の歌に出て有名であるが、同じ頃越前地方でも矢張りそれが行はれてゐた事は、同じ集に、同じ作者の「鵜を池主に贈れる」二首の歌によつて明かである。

　叔羅川瀬をたづねつゝ吾背子は
　鵜河たゝさね心なぐさに。
　鵜河立ちとらさむ鮎のしがはたは
　吾にかきむけ思ひし思はば。

池主は大伴の一族で當時の越前の介、叔羅川は今の日野川である。從つて當時九頭龍川に於ても、鵜飼の行はれてゐたであらうことは推定に難くない。起源は詳かでないけれども、「金塚鵜匠」の名は古來頗る著聞し、九頭龍川の一支流打波川の鵜壁には、野生の鵜が夥しく巣づくつてゐたとが、古い文書にも口碑にも傳はつてゐる。しかも、其は左程古い話ではない、今日六七十歳の老人ならば、子供の時分に、野生の鵜の群集してをるのを觀た筈で、

『全く盛んでしたよ。どれ程つて、勘定をしたこともないが、兎に角何百といふ數でした、盛んな時は川面が真黑く見える位でしたからね。それに面白いことは、鵜群の後には必ず青鷺がくつついてあるいてゐるものです。鵜のこぼした鮎を拾はふつてんです。黑い鳥と白い鳥とがもつれ合つて翔んでゐるんですから、隨分奇觀でしたよ。』

　私は大野の或る老人から、こんな話を聽いてゐる。鵜に二種あることも、矢張り其老人からきいた。

『つまり鹽水性と淡水性ですね。鹽鵜は大柄で力も強いが、性質は少し愚鈍です。然し水の清い川には是種がいゝのです。川鵜は體は小さいけれど眼力が強いので、濁つた水でも平氣で鮎をとります。足羽川や南川に適し、九頭龍川でも水の濁つた場合は、此の鵜でないと漁れないのです。大野地方で飼つてゐた鵜は主として是種でしたが、只今岐阜の長良川で使用してをるものは、おもに知多半島產の鹽鵜です。』

　和名抄に曰く「鸕鷀。大曰鸕、小曰鵜鶘二」即ち鸕鷀は鹽鵜、鵜鶘は俗に曰ふ鵜（川鵜）に當るらしい。然るに日本紀私記には鸕鷀を志滿津止利なりと曰ひ、シマツトリは神武天皇の御製「伊那佐の山」の歌には、鵜の冠語として使はれてゐるやうである。――さる論議は兎に角に、神通川の鮎、ひとり盛名を恣にして、我が鄕國九頭龍川の鮎の美味、未だ弘く天下に知られざるを遺憾として、斯くなん。

　神通川が飛彈の宮川の下流で、後立山々塊の水を集めて日本海に朝する名河であるが如くに、我が九頭龍川は源を濃越國境

に發し、白山別山の諸水を合せて同じく日本にそゝぐ、北陸屈指の名川で、その水の清冽なることは前記鵜飼の話の條に於て明かであり、奇勝佳景亦隨所に展開し、特に「ハシリ」の奇勝の如き、木曾の寝覺床を凌ぐとも讓るものではない。

雪に埋もるる山村

大野町の奥には上穴馬、石徹白、五箇などいふ山村が在つて、美濃、飛騨、加賀の三國に堺してゐる。素晴らしい寒村だ。日本アルプスに於て見る如き俊嶺高峰は無いが、千五六百米突から千八九百米突程度の山岳が、波濤の如く起伏せる間に、ところ〴〵、ぽつんぽつんと人家の聚落が散點して見える。實に、斯る避地にまで、人は住まなくてならないのかと、座ろに日本の國の狹いことを嘆ぜしめるやうな光景である。

是等の地方に於ては、一年は二季である。即ち殆ど半夏半冬夏は蚊帳も要せず、年中炬燵を廢せぬ。冬季に入ると、五箇村の上打波地方の如きは郵便も全然杜絶し、石徹白、上穴馬方面は、北陸・東海兩線を迂廻して山向ふの岐阜縣から辛じて配達されるといふやうなことが少くない。それ程、此の山地帶の吹雪と來ては、全く猛烈を極める。雪が空から眞直に降るやうな日とては殆んどない、地平線と平行か若しくは十五度角位の角度を以て、横飛斜吹とくるのだ。空に飛行器が飛ばふとも、鐵道哩數が幾萬哩に達しようとも、電氣といふもので御飯が焚けるんだ相であらうとも、其は此地方の人々の生活とは、何の交渉もない別の世界の話だ。文化の恩惠を蒙むることは極めて少くても、日清日露の兩戰役には、分相應の戰死者を出してをる。國民としての義務だけは、負擔してゐるのであつた。

かうした山村の生活に就ては、同じ縣下の人々の間に於てすら、殆んど何事も知られてはゐない。數年に一回、議員選擧の際などに二三の候補者に依て、さう云ふ村々のあつたことを、僅かに想出される位のものである。北國の旅の序に、一年の半を雪中に埋もれて、大正十三四年といふ時代に、まだ粟や稗を食べて生きてゐる人間の話をしやうぢやないか。

◇日本一の大杉見物

石徹白村は、大野町から油坂峠を越えて美濃の白鳥に出る美濃街道の下穴馬村旭といふ所から、北西へ、石徹白川に沿ふて三里半程溯つたところで（大野町から十一里）、其處は白山の支峰三ノ峰の裾野、南北六里、東西三里、面積二十餘方里にひろごり二縣三國に境すてふ大村で、小さな郡ほどある。そこに百八

十戸の人家あり、千二百の人が住んでゐる。一平方里九戸六十人の割合になる。此の村の内、今清水社の境内に『十二抱の杉』と稱する、日本一の大杉がある。私はそれを觀る爲に、わざ／＼斯る山中迄分入つたのであるが、『成る程そんなもの丶有り相な土地だ』と思つた。

その杉は、全く魂消るほど大きなものであつた。幹の太さを計るには、眼通と云つて地上五尺の所をはかるのであるが、六十二尺あつた。試みに根元を計つてみたら八十五尺あつた。然もそれが空洞にでもなつてゐることか、樹高二十五間、隆々として聳立してゐるのだつた。

『えゝと圓の直徑を出すには〇・三一四を乘ければ好い筈だから、此木を根元から伐倒すと、根株の直徑は二十七尺有る譯だ。……武裝した一個大隊の軍隊をそつくり載せることが出來る。俺の家を此の上にのつけると、玄關が食み出す代りに、横手には大分空地が生ずる……。』

と計算して見て、餘りに大きいのに、改めて驚嘆の聲を發せざるを得なかつた。暇な人は其の材積を量つて、此一本の木から何十軒の家屋が建てられるかを、計算してみるがいゝ。

樹齢は?……千二百年と稱してをる。其養老元年泰澄大師が白山開基の紀念として植栽したといふ、口碑から割り出したものである。紀念として植ゑたか何うかに疑問だが、白山開基と同時に、此村も亦開けたことに事實らしく、此杉と此村とが、略ぼ年齢を同じくするものであるとは、認めていゝと思ふ。因に此杉は大正十三年十月内務省から「天然紀念物」の指定を受けた。

◇全村神に仕ふる社人村

白山の開基と同時に生れた石徹白村は、全村擧げて神に事ふる「社人の村」として、頗ぶる特色をもつた部落であつた。即ち泰澄大師は、白山登山の濃飛口として、此地に宿泊所を設け、白山別山の中宮「中居神社」を鎭座せしめたのである。で村内には中居社の幣司、神頭、神主、神樂司の各職を世襲する家があり、其の他の一般村民も、社人或は末社人等の名稱を貰つて神に奉仕し、昔は帶刀して、日本全國に神符を配つてあるいた。丁度伊勢神宮の御師のやうな生活を營んでゐたのである。

地は越前の國に屬するが、舊幕時代には美濃の郡上侯金森氏の支配を受けてゐた。支配すとは言ふもの丶、神の領地ではあり、農商に從事せぬ民でもある處から、無税無高の特別扱ひを受けてゐた。だから斯る深山の間に住み乍らも、彼等は頗る裕

福であつたらしい。山一重隣りなる五箇村の、赤貧洗ふが如きに對して、甚だ奇妙なコントラストを成してゐる。往時然りしが如く、今尚然かあるのである。

彼等は神への奉仕に由て、生活に充分な定收を得てゐた上に全然無税無高の特權を有してゐたから、各自に土地を私有する必要が無く、村内の土地は全部村有の姿であつた。維新後に至つて、土地を分配して、私有としたけれども、尙ほ剩地が多く、自然村有財産から生ずる收入が多い。村税などは徴收しなくても、何うにかやつて行ける。斯様な關係で、もと穴馬村の大字であつたのを、不利益だといふので獨立して村制を敷くに至つた。だから石徹白村は、今も一村一大字である。

とは言へ、信教上の關係から、村民は歴然二派に別れてゐる。其は、中居社は神社とは云ふもの丶、白山權現は例の僧徒の御便宜主義から生れ出て本地垂跡の神であるから、實は神にして佛、佛にして神である。仍で維新後の神佛分離に際し、社人村は奉神派と奉佛派とに分れて、激しい紛擾を續けた。結局兩道併立といふ事に妥協成り、神道を奉ずる者は、中居社のお膝元たる上在所に集合するし、佛敎派は社人の格を返上して、中・下在所方面に退去して歸農するに至つた。かくて今日でも、上在所の方は純眞神徒の部落である。——然し、佛敎派の村民と雖も、中居社を崇敬することは、毫も疇日と異るなく、一村を擧げて敬神の念は頗ぶる厚いと聞く。

中居社は字上在所の北端、石徹白川の本流と宮川の會流點に在つて、一の溪橋を渡れば即ちその神域で、さすがに、社殿も壯麗であるが、殊に境内は神寂びて神々しい。周圍二丈餘から三丈にあまる老杉が、すくすくと、隙間もなく密生してゐる樣は、宛ら伊勢内宮を彷彿せしめて、その壯嚴さは寧ろより以上である。神域の地積は八千坪といふ。

『晴らしいものだね。この杉林だけでも生仲の金高ではなからう。』

と云ふと、案内の男、立所に此の森嚴觀を金額に換算して曰く、

『さあ、時價に見積つたら、かれこれ三十萬圓ぐらゐのものはありませう』と。

◇山國の珍味

粟や稗は常食として居るのは五箇村の方で、石徹白は昔から白山參詣者の宿泊地になつてゐた處であるから、食物などは比較的贅澤である。か丶る山間に於て、最も旅客の舌を喜ばせるものは鮎であるが、鮎は眞夏の候よりも、谷川の水のぬるみ初

むる、四五月頃を以て最美味とするものであるから、夏期の山岳旅行家は、遺憾ながら此魚のほんとうの味を知ることは出來ない。私が曾て此地で食べた、鹽漬蒲鉾と岩茸との吸物は、蓋し珍物と言はざるを得ない。岩茸は、深山の斷崖絶壁などに野生する木くらげを大きくしたやうな茸で、味も亦木耳に似て、俳味を帶びてゐる。これと澤芹とを配した鷄の吸ひ物は、山國最高の珍味と稱して宜しからう。

珍物と云ふのは鹽漬の蒲鉾のことで、やゝ奇想天外の感があるが、その後信州松本市の旅館でも、此の鹽漬蒲鉾に再會した。山國の食料には屢々吾人の意表に出づるものがある、干鰈の味噌漬の如き、其の一例だが、是などは上等の部に屬する。鹽漬蒲鉾け勿論鹽出しをして用ゐるのであるが、鹽氣は全く去りやらず、而も往々にしてぷんと鼻に來る。琵琶湖名産「鮒鮨」や紀川有田の「鷹巻鮨」を旨いと言ふ「舌」に、蒲鉾の少々ぷんと來る位は何でもない筈だが、事實有難からず、『海の魚は鹽水に棲むものだもの、鹽辛いは當然だ』といふ先天的智識をもたぬ「舌」には、浦の鉾鹽辛いのも甚だ難物である。

越前大野町で、鹽漬蒲鉾を賣る家を求めたけれど、遂に探し當らなかつた。故に石徹白へは美濃方面から輸入せられたものとおもふ。石徹白から美濃國上の保川の河畔へ出るには、檜の峠を越えて僅かに二里だ。檜峠は海拔九六〇米突の標高を有するが、石徹白の標高がすでに七五〇乃至八〇〇米突だから、その比高は二百米にすぎず、割合樂な道であるから、交通も通商も、專ら此の方面へ行はれてゐるらしい。

越前の山村に通有の各の前馳走は「大根めし」と「鹽鮭のおから汁」である。「大根めし」は、大根を銀杏の葉に切つて、米飯に混ぜて炊いたもので水つぽくて、大根くさくて、甚だ旨しくないものだ。雜炊中の白眉は八丈島名物「麥雜炊」であらう、是は麥粥ではあるけれど、八丈特産のトコブシ、シタダミなど云ふ貝の肉を混ぜて炊いたもので、一杯二杯は珍らしくて旨しい。越前で「おから」といふは東京邊の花 即ち豆腐の絞り粕のことで、是れに鹽鮭の頭や肉を細かく切つて、五分切のねぶか（葱のこと）と一緒に煮立てた汁が「鮭のおから汁」。醬油を加へないでも鮭の鹽が出て程よく味がつくものである。卯の花の代りに酒の粕を用ゐたものを「粕汁」と云ひ、これは腹が喫まるので、寒い頃には特に珍重せられる。

更に山國の情味津々たるものは「蕎麥燒だんご」である。蕎麥粉を練つて丸めて 圍爐裡の榾火でこんがりと燒いて、醬油をつけて食べる。生味噌に刻み葱を入れて蕎麥で包んで、丁度大福餅のやうにして燒いたのは・材料がかゝつてをる丈に味は

上等だ。山路の旅に雪に吹きこめられた或る日、大きな爐の火を圍んで猪獵の話でも聽くには、かう云ふ物も亦、旅客の好奇心を滿足せしむるには足りるが、然しと斷る迄もなく、その味たるや決して旨しかるべき美ではない。都會の蕎麥屋の、徒らに饂飩のみ大々的にて、蕎麥の蕎麥くさからざるも興さめるが、蕎麥粉ばかりで固めた、蕎麥の餘りに蕎麥くさきも、ゆめ結構な物とは思ひ給ふな。

苟くも、こんな物どもを、「珍味」てふ題の下に書連ねるのは私も辛い。辛いが、是は事實だ。悲慘なる事實である。是より語らうとする五箇村、特に奥地たる上打波の如き瘦寒の地方では、「大根めし」や「鹽鮭のおから汁」は、事實無上の珍味として、嘆美せられる所のものである。彼等の常食は、重ねて云ふやうだが粟、稗、蕎麥粉、それから甘藷。甘藷も川越地方でとれる如き上等の品種ではない。水藷と云つて、水分の多い下等な種類である。越前と美濃と飛驒、三國の山が重なり合つた奥地では、或はそんな物を食べても居るだらうと、讀者の感じは鈍いかも知れない。然らば、帝都を去る僅かに三十五里、東京市民とは最密接な關係を有つ多摩川の水源地、市之瀬の住民は、何を食べて生き居る？馬鈴薯とタウモロコシではないか。タウモロコシ粉を團子にして馬鈴薯と一緒にぐつぐつと煮たもの、それが冬期の常食ではないか。

緊縮政策の掩護的宣傳らしい「勤儉週間」の催しも、都會人にとつては一興でもあらう、必要でもあらうが、同時に是等山間避地に貧しく住める人々には、責めて一年に一二回は、「奢侈週間」「美食週間」を與へたい。——と、珍味を索めて、「舌の旅」をする私にも、否寧ろであるが爲に、涙ぐましい感慨をもつ。

◇打波の出作、牛首の乞食

五箇村も亦略ぼ石徹白と同じ位の廣袤を有する山村で、打波川の兩岸に沿ふて、北端は別山の支峰「三ノ峰」の峰頭に達してゐる。石徹白村の西側に境して大野盆地に近いから、石徹白ほど山は深くないが、土地は極めて瘦寒である。上打波、下打波、佛原、東勝原、西勝原の五大字から成つてゐるが、戸數は總計二百九十戸。その內上打波は百八十戸、下打波五十戸、上打波は更に嵐、櫻久保、木野、鍋ケ平中村、鳩ケ瀬、奥平、芋ケ平、上小池、下小池等の小部落に分れ、下打波も亦四五の部落に分れてゐる。結局二十戸と家の纏まつた部落は無い譯で、それが數町乃至數十町を隔てゝ、點々と山に谷に散在してをるのだ。

五區の內最も特色を有するものは、最大區で同時に最奥の區たる上打波で、こゝの農民は凡て「地家」及び「出作」と稱する。家を二軒づゝ有つてゐる。地家といふのは本宅で、出作とは每年五月から十一月迄半歲の間、開墾耕作の爲に一家が擧つて移轉する耕作小屋の事である。「出作」が、眞に雨露を凌ぐだけの堀立小屋であるべきことは、想像する迄もないが、本宅たる「地家」とても、穴居生活から幾何も進步しない堀立家屋で、疊を敷いた家などは殆ど無い。中央に大きな爐を切つて、その周圍に四五枚の席が敷いてあるつきり。夜具等備へて居る者は極少數で、夜は爐の火を圍んで、着のみ着のまゝごろりと寢る。燈火も同じく爐の火である。最も簡易な生活者は、唯だ鍋と椀と箸とを所持してゐるに過ぎないと云ふ。

彼等は殆ど土地を所有してゐない。區內の土地の大部分は五六者の所有に屬し、自作者も十戶內外、他は悉く小作者なのである。而も彼等は耕作する前に先づ開墾せねばならぬ。山腹の荒地又は山林を開墾して切替畑として、稗、栗、大豆を撒き、桑を植立て蠶を飼ふ。或は楮を栽へて皮を剝ぎ、雜木を伐つて炭を燒く。其以外にも殆ど仕事はない。從つて其の收入の程も察せられる。

十一月下旬山を降つて地家に歸り。翌春四月迄約半歲に亘る冬を、こゝに蟄居する。蟄居てふ文字は、最もよく其の實に適つてゐる。そして夏の間に作つた食糧、稼ぎ出した貯へは、殆ど悉く此の間に食潰してしまふ。

冬になると、福井、武生、三國などいふ縣下の大きな町々には、幾群れかの山男が現れる。中には子供を連れたのもある。

『もう牛首（うしくび）の乞食が出る頃になつたぞな。』

その寒さうな、穢（きた）い姿を見て、町の人は山の雪の深さを知る。殘飯、殘菜を與へると、『お有難うございます』と、木綿の頭陀袋にあけて又次の家を訪づれる。殘物が無ければ一錢二錢を惠む。一喝を食つて恨めしさうに出ることもある。時には犬の如く、塵芥箱を漁りつゝある姿を見かけたこともあつた。

牛首といふのは、白山の表登山口白峰村（石川縣能美郡）の內最も山に接近した部分の地名で、『雪に埋もれて居食するよりも、責めて一人分でも食祿がう』と云つて、彼等は糧を町家に求めるのである。然し乍ら「牛首の乞食」は必ずしも牛首の者ばかりではない。上打波の內小池あたりの住人は、「牛首の乞食」となつて町へ出たと云ふ話である。――牛首の乞食も、近年頓に其の數を減じた。或は全く姿を見せなくなつたと云てもよい。其は彼等の世界にも、漸次敎育が普及し、生活も何程かは樂になつた結果だと、判斷すべきであらう。

上打波の小池の三部落は、もと牛首の出作であつたのが、維新後納稅上の關係か何ぞから、原籍を五箇村に移したもので、村內でも此の一箇だけは、全く風俗習慣を異にしてをる相である。

「打波の普請」と呼ばるゝ奇妙な風習が、此の上打波には、昔から引續き今日までも行はれてゐる。それは村民が共同で屋根の修繕を仕合ふ習慣である。修繕を希望する者は、その旨を村の世話人迄申出る。すると雪が消えて出作に出る前に、區民が集つてそれを葺替える、屋根と云つても一樣に萱葺であるが、萱代も勞賃も仕拂ふ必要はない。又希望者が多數あつて、それが爲に出作の時期が遲れるやうな場合があつても、全部の葺替を終る迄は、決して出作をしない規定である。だから家は見すぼらしくても、屋根だけは常に厚く新らしくて立派だ。それを他の者が冷かして「打波の普請」と言ふのだ相である。

◇佛御前と化石溪

平淸盛の愛妾にして、絕世の美人であつた京の白拍子佛御前は、此の五箇村字佛原の產である。平家物語には『加賀國の者也』と云ひ、謠曲には『加賀ノ國佛原とやらむと申候』とある。而して謠曲通解は『今は越前國に屬し佛原山月窓寺といふ寺ありと云ふ』と云つてゐる。その月窓寺といふ寺、今は無いから東勝原の即現寺を以て之に擬する。證跡は餘り確實でないが、兎に角おもしろい話。仍で、

　靑瓢簞名を佛とぞ申しける。
　腹の空たやうに踊るが佛なり。
　ビタミンAでも飮ませろと淸盛言ひ。

などは如何なものだ。

古事記に見ゆる古志國の「和那美水河」とは、此の打波川を指すのであらうと、言つてる學者もある。直に贊同はできないが、先年石徹白村から先住民族の遺物たる石器や土器の堀出された事實から考へると、此の山地帶が意外にも、早く太古時代に開けてゐたことは明らかである。深く研究したら、何か面白い事が發見せられ相に、思はれる土地である。

それに打波川の沿岸は、頗ぶる奇勝佳景に富んでゐる。法音壁、鵜壁、三隈嵯峨の峨岩など皆行人の眼を喜ばせるに足り、鳩ケ瀨には鳩ケ湯といふ溪谷の鑛泉があつて、探勝者の爲に、好箇の根據地となつてゐる。泉質は含鹽炭酸泉で、浴樓は、お粗末ながらも二層樓である。

さて最後に紹介する「化石溪」、是だけは、確かに世界的奇觀であり、又我が學界の至寶でもある。もし越前電氣鐵道（福井

ー大野間）が省線の一部であつたら、化石溪の名は夙に鐵道旅行案内に特筆せられて、一躍天下の名所となつたであらうものを……。と申しても、此頃新らしく發見せられたものではない。本草紀聞、類聚國誌、歸雁記、享保書上、東遊記、………此外にも尙あるかも知れない。極めて古い名所なのである。就中南谿の「東遊記」は、最詳細を極め頗る面白い記事だから、玆に全文を掲げる。

越前國大野領分の山中打波村といふ所に、何にても石に化する谷あり。予も彼地に遊ばんとせしかども、折節極月なりしかば、通路雪に閉ぢられて到る事能はざりき。其邊の人に詳しく尋ね問ふに、大野の城下より山道九里にして細き谷川あり、其の水の流に、諸器物何にても半月或は一月程入れ置く時は、皆石と成る。筆、紙、下駄、草履、膳椀の類にても、皆石になるとぞ。予京都にて、先年、木の枝に雪の積れるが、其雪ともに石となりたるを見たり。半紙一束を嚢にてつかねたるが、其嚢ともに化して石と成りたるを見たり。是皆此谷にて作りたるものとぞ。

其頃思ひしは。極陰の地ゆゑ水中に寒氣の時久敷漬け置きて石と化するにやと考へしが、左にはあらず、夏日にても、同じく石となるとぞ。其は如何して化するぞと委敷尋究むるに、谷川の水上より泡の如き物流れ來りて、漸々に其物に粘着して石と成るなり。然れば、其谷の奥に玉液ありて流れ出で、物に附て石となるにやと思はる。蠻夷諸國の事を書きし書を見し事のありしが、其中にも、蠻國の内に諸物の石を化する地あることを載せたり。此谷も其類にや。

今日科學的常識の有する讀者が、これを讀んで、其は多量に石灰分を含有する鑛水の沈澱作用に原くものではないか、と推定するのは當然のことであるが、天明といふ時代に於て、略ぼ眞相を穿つた是だけの斷案を下した南谿は、さすがに博識の旅行家であつた。

「化石溪」の源泉は、紛ふ方もなき炭酸灰泉で、鳩ケ湯の上流右岸の小丘の中腹に湧出してゐる。湧出孔は直徑四五寸も、ある大きな洞穴で、絶えずもくもくとして、盛上るやうに漲溢し、それが小さな川となつて十間程も流れると、忽ち一大岩角に到着して、高さ二十五間、幅二十間餘もあらうといふ安山岩の大岩壁を、恰も霧降の瀧のやうな姿で、跳躍迸散する。その際沈澱結晶した岩酸石灰は、岩壁一面に附着して、殘雪に擬はれた如く眞白に見えてゐる。奇觀、壯觀たるを失はない。

箱根の蛇骨石、鹽原の木の葉石、栃木縣湯灣温泉の噴泉塔、將た羽後駒ケ岳山中の白瀧等、いづれも炭酸石灰の沈澱作用に

外ならぬものであるけれど、此の「化石渓」の如く、規模が大きく作用の著明なものは、全く他に類が無い。私の知れる限に於ては。

又、南谿の記せる通り、何なりと此の液中に浸しておけば、欲するまゝの化石が獲られるとも、無論事實である。豈夫それは半月か一ヶ月では、完成しない、二年ぐらゐは要するものであるけれども。

蒲萄嶺雪に歩す

◇雪中をころげ廻つた南谿

「蒲萄嶺、雪に歩す」は東遊記中の一篇で、江戸時代の大旅行家橘南谿が、越後村上から北陸街道中の難所と云はれた蒲萄峠を越えて、庄内方面に出た時の記録。東西遊記二十卷一百六十二章の中、私の最も興味深く讀んだものゝ一である。雪國に人となつた私には、雪中の山の旅の面白さも、苦しさも、共に能く想像することができた。雪に歩すといふのがすでに僭越な表題であつて、京育ちの町醫者である南谿は、ただ最う鞠のやうに、雪中をころげ廻つてゐたのにすぎない。須く、蒲萄嶺を辷り落るの記とでも改題すべきものだが、兎に角雪中旅行記として、此一篇は無類の傑作と言はねばならぬ。

今日も縣道は、村上から蒲萄峠を越えて大川谷勝木へ出てゐるが(而して此間今は自働車が通じてをる)、昔も矢張りそれが本街道であつたので。南谿は第一日の朝平林(村上の南三里)を立つて、峠の南麓蒲萄驛に一泊、此間約八里、翌曉導者を雇ふて峠を越え、大澤、北中(此から以後道を違へた)中継、蒲川、小股、小名部の諸村をすぎ、小國に辿り着いて其夜は泊つてゐる、此間亦八里ある。小國に着た時は顏色土の如く、殆ど生ける心地は無かつたとは言へ、雪の山路を實測距離十六里ただの二日に踏破してのけたのは、流石に彼は大旅行家だ、その健脚驚くの外はない。

尤、前にも云へる通り、歩くと云ふよりも轉がつて居たのであるが、就中最大遭難は角間寥峠(地名を書いてないが、此處と推定せられる)附近の轉落で、案内者先づすべり落ちた。南谿此體を見て『案内の人の歩みやうこそ悪けれ、雪少し柔かになりたれば、一足づゝ足を踏付て、静かに下らば何事かあらんと云ひつゝ』、一歩踏出すと、同じくするくとすべり落ちて、雪に埋み残つた大木の梢に引かゝつた。木の枝を掴んで息をついてゐると、同行の養軒が後から落ちて來て、兩人重り合つて、『千仭の谷底迄唯夢の如くに落着きたり』とある。角間谷から

道を迷つて、大畑山の北の谷へ落ちたとすれば（彼處こゝに處より外に考へ様がない）、確かに二百メートル以上を一氣に轉落してゐる。――物好と嗤はれるも知らないが、私は南谿の取つたコースを踏査して見たのである。

私の不思議に堪えないことは、よし雪國の生れでないにしても、南谿ほどの旅行通が、雪中道無き山路を行くのに、何故「カジキ」を用ゐなかつたかである。「ソリ」と「カジキ」は雪國には缺くべからざる旅行具だ。彼れが名所方角抄や金澤江戸道中記くらゐを讀んで居ない譯はない。

越路にはそり行く程に成にけり
となみの關の雪の明ぼの。

橇といふものして、北國の人雪中に乗つて行なり。かじきと云物は別か、歌などには見えず云々。

カジキの歌も無いことはない。

かじき穿く越の山路の民すらも
雪にしづまぬ身をかまふとし。（讀人しらず）

南國の人は「カジキ」を御存知ないかもしれぬ、雨具に穿く「極めて小さな橇だ」と思つたら、間違はない。雪國の獵師は今日でも之を使用してゐる。

北中から勝木川に沿ふて、海岸道路へ出ないで、――さうするのが本街道でもあり、雪も少いに拘らず、山の中へ山の中へと、深く踏入つて行つた理由も、私にはわからない。而して此の奇難に遭遇した南谿は、甚だ愚のやうでもあるが、罪は寧ろ案内者の方にある。變な所で同情する譯ではないが、私が今夏秩父山中で負傷した際も、案内者先づ轉落し、而して私が續いて轉落したのであつた。

◇蒲萄の古驛の一夜

蒲萄峠は北陸道中の難所で、北陸道記行にも『上下一里、坂路甚悪しく難處也……道の左右林木覆ひ重り、晝と雖道暗し。昔は盜賊多く住めりとぞ』とある。村人の話に依ても追剝の多かつたとは事實らしいが、峠はさう大して大きな峠ではない。元來蒲萄嶺そのものが八百米突内外の山で、而も峠は蒲萄嶺とは何の關係もなく、蒲萄嶺と鰈嶺との裾合谷にある小突起にすぎない。峠頂は僅かに二百六十米突、それも海拔計算であつて百五十米突の標高を有する蒲萄宿との比高は百米突にすぎず、峠などゝは烏許がましき次第である。然し山は相當深い。

峠の南麓に蒲萄宿、北麓に大澤宿があつて、此の間約一里半昔の北陸街道と今日の縣道とは、大體は同じ線を行つてゐるけれども、部分的には可なり變化してゐる。即ち今の縣道は長坂

峠を通過せず、蒲萄驛を脚下に覷て直に峠にかゝり、矢伏明神からは明神川の谷に降つて、大澤宿の如きは全く交通圏外に除外せられた態である。

然し、蒲萄宿の方は、尙昔の宿場の俤を殘して、カラアに富んだ古驛である。名に負へる如く昔から蒲萄畠の多い土地で、今も矢張り蒲萄が名物になつてゐる。戶數の割合にしては、旅館の數の多いのも、いかにも古い宿場らしい氣分で、秋田屋、伊勢屋などいふ旅館は、當時本陣とか脇本陣とか云はれた家ださうである。

この古驛に一泊した夜、私は三四の老人と共に、此の村で造られるてふ地酒を汲んで、いろいろな昔語や想出噺を聽いた。老人達は皆心地よく醉つて、げら〱笑ひ乍ら、面白さうに秩序もなく話した、私も亦それを其のまゝ斷片的に、玆に記錄して置かうと思ふ。

今は唯歩いても三四十分、自動車なら五分間で行つて了はふが、昔は何うして斯んな峠でも半日がゝりで越したものである。評判通り全く氣味の惡い峠で、

蒲萄山中おそろしい所
賊が出ますよ山賊が。

全く此の歌の通りであつた。

『道路は良くなる、自動車は通じるで、今はもうすつかり寂れてしまつたけれど、昔は後ろに峠を控えてゐる丈に、なか〱榮えた宿場で、一日に十荷や二十荷の入荷出荷の無い日はなかつた。此宿の受持は北は峠向の大澤、南は鹽野町迄で、村の者の主な仕事と云ふのは、その荷擔ぎであつた。

『ブウブウブウと竹法螺が鳴ると、それ出荷があるぞと、すぐ小走が庄屋の處へ飛んでゆく。すると今日は津輕樣の下り荷物が何荷々々、定人夫を幾人立てろ、と云ふ樣な命令が出る。小走は村中に觸れて人足を集める、人足が揃ふと特に庄屋から、津輕樣の御荷物を持て大澤迄行て貰ふのだが、道中よく氣を附て行くやうにと、馴れ切つた村人にすら、こんな注意を與へる程物騷な山路だつたのである。

『峠を越えると明神樣がある。やあ明神迄來たぞ、先づ明神樣を拜んで行かう。明神樣何卒道中安全にお守を願ひます、歸りには禮參致しますからと、お拜み申して又大澤峠へかゝるのである。彼の明神の境内は大木しんしんと茂つて晝も物凄い處で、獨り旅の者などは非道く氣味惡がつたものである。

『景氣の好いのは何と云つても早飛脚だつた、ブウブウブウ、今方津輕樣――此街道往來で一番金使ひのいゝ行屆いたお大名は、津輕樣だつた、だから何うしても、津輕樣の名が頭の中に

こびり付いてるのだらう――の早飛脚が來るから、力のある者が揃つてくれと云ふ吩付か、早く／＼愚圖々々してると首が飛ぶぞ。ヨシ俺が出ると元氣な若い者が、鉢卷をして肩を揃へて待つてる處へ、早籠が飛んでくる、そら來たと肩で受取るなりヨツショ／＼エンサ／＼と、宙を飛んで一息に大澤迄走り通す、苦しい代りに旨い酒も飲めた。

『馬も立てた、馬士も居た。馬士は馬士唄を唄つた、さうだ馬士唄にはこんなのがあつたてよ。〽須戸は百軒やぶ村よ、大名通らぬ大行小村で籠が通る、ホウイホイ。

こゝらは未だ夜は石油ランプの世界であるが、蒲萄宿の北十町蒲萄礦山部落の一廓だけは、燦然として電燈が輝やいてゐる。優秀な亞鉛礦山で、月に九十噸づゝ採堀した相である。こゝの礦夫は皆おとなしいと云ふので、村の人達とよく睦み合てゐる。金も相當落としてゐる。村の人々が、一番羨ましげに眺めてをるものは、長屋の隅々まで萬燈の如く連なつて、夜を晝の如く照らしてゐる「電燈」といふものである相な。

此山中は一の鑛山地帶で、附近には尚高倉鐵山、大澤金山、大毎金山等四五の鑛山がある。御西山、銚子瀧、地の平の池、矢伏明神、明神岩、天井官山鑛泉などの名所、いづれも半里乃至一里の距離に在る。

然し、羽越線もいよ／＼全通したので、――而して其の線路は舊街道とは全く別な、海岸線を通つてゐるので、此宿は又一層寂びれてゆくであらうと、村の人達は皆淋しさうな顔をして居る。雪は昔ながらに深い處で、冬季は乘合自働車も通らなくなり、旅客の影もはたと杜絶えて、殊にさびしくなるのである。（一三、一一、二七。）

孔子の素描

高須芳次郎

（一）

私の小さな心の玻璃鏡に偉大な孔子の俤が映つたのは、いつ頃からであらう。はつきりした記憶がない。もし四書五經を手

にした時が孔子を知つた最初だとすると、十二三歳の折、もうかすかに孔子の映像が私の心に影さしてゐたと思はれる。が、それは余りに覺束ない印象である。それから四五年の後、私がある漢學塾に通つて、支那文學の味をいくらか知るやうになつてから、孔子の影が次第に私の心に濃く印象せられて來た。

その時分、私はどんな風に孔子を見てゐたか。私は唯世界三聖の一人として、クリスト、釋迦と同じやうに超人だと信じただけで、『論語』に現はれた孔子についても深く考へて見たことがなかつた。それは凡人の思慮をかけ離れて人間の最高峰に起つ人だと思つた。つまり、私は遠くから富士山の靈姿を仰ぐやうな心持で孔子に對したのである。かうして私は孔子を尊崇したが、その人格や思想や心理については、ぼんやりした概念をかすかに把持しただけで滿足してゐた。また滿足しなければならなかつた。

もしこの時代に友人から「孔子とはどんな人か。」と問はれたら「世界三聖の一人だ。」と無造作に答へるよりほかがなかつたであらう。當時孔子の言行を略ほ如實に記した『論語』の味さへ、わからなかつたから、孔子の人物についても亦理解し得ないのはやむを得なかつた。が、三十歳を過ぎて、いくらか世味を知つてから新たに『論語』を味はつて見ると、孔の心子がそそこに反映されてゐることが、稍はつきりして來た。それと共に孔子の俤も亦多少鮮かに近くなつた。それ迄私は孔子を人間の最高峰として容易く近付き難いと思つてゐたのが、次第に親みを加へて來た。超人孔子もやはり人間である、人間の惱み、苦み、悶えを長い間體驗して、いろいろの心的葛藤を重ねた末、はじめて超人の城に入つたといふことが、おぼろ氣ながら私にわかつた。

孔子の一生を見ると、クリストのやうな深酷な悲壯味は少い、また奇蹟の展開もない。釋迦のやうな超越味にも乏しい。いづれかといふと、割合に平凡に生活して、平凡に終つた傾きがある。が、その平凡は地上の平凡ではない、大海の靜かな姿を見るやうな平凡さである。私は小さな平凡の生でなくて、偉大な平凡の生を孔子に見る。その一生の行實は靜かに味へば味ふほど、探れば探るほど、いろいろの意味を見出してくるのである。それにつれて、私の解釋の仕方も亦いくらか動搖することを免れない。所詮、凡手を以て、孔子を描くことは、むづかしい。けれども私の小主觀の窓に映つた孔子をその儘、紙上に投影することは、一つの新しい試みとして、まるで無用でないやうな氣がする。そして玆には主として『論語』を透ほして見孔持子を描かう。

孔子の上に著しく見ゆる特色はその行實にゆたかな人間味が流れてゐることである。また孔子がいつも現實に立脚して生の中核をはつきり摑んでゐることである。超人といはれ、聖人とあがめられた人々の生は、ニイチエや莊子、列子などが理想したやうに、余りに神秘的、象徴的、幻怪的な霧の中に包まれてゐる。奇蹟、不可思議に蔽はれすぎてゐる。孔子の一生には、神秘的なところが少しもない、幻怪的な色合もない、奇蹟や不可思議もない。『論語』に直面して、孔子に接すると、人間味のゆたかな聖者に逢つた感じがする。

か、在來漢學者と稱する群は、孔子を尊崇する余りそれを偶像化してしまつた。血も肉もない冷たいミイラのやうな聖人に祭りあげてしまつた。私は孔子を欽仰する上に強い熱情を持つけれども、無暗に孔子を偶像化したくない、窮屈な玉手箱の中に堅く封じこめてしまひたくないのである。私は尊敬と親みとを抱いて、人間孔子に直面したい。

『論語』のうちには、孔子の簡潔な自傳が出てゐる。それは「子曰く、吾十有五にして學に志し、三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に從へども、矩を踰えず。」と記されてゐる。その文句はいかにも短い、けれども人間孔子の歩いた道が適確にはつきり示されてゐる。孔子は天分のゆたかな人にちがひなかつたが、最初から奇蹟的に飛躍して超人の境に入つたのではなかつた。凡人が重い荷を負うて生の行路を辿るやうに、進化の段階を一つ宛のぼつたのである。そして孔子が眞の内的自覺に到達したのは五十歳頃である。それまで孔子は自己の道を信じながらも周圍の事情に動かされて、ともすると焦燥したり、嘆息したりした。孔子が匡に於ける受難、陳蔡の厄、桓魋の難などに刺戟せられて先天の使命を荷ふ自覺の叫びを發したのはすべて五十歳以後のことである。また孔子がその經綸を魯國に行ふことが出來たのも五十歳以後のことである。

かうして孔子は五十歳で天命を知つたが、決して枯木死灰のやうに悟りすましてしまはなかつた。魯の司寇の地位を去つてから、根氣よく、弟子たちと長い漂泊の生を續けた。それは孔子の信ずる道を廣く世に布かうとした止み難い熱情に驅られたからである。が、運命はいつも孔子に幸ひしなかつた。彼れは不調であつた、貧乏であつた。何處へ至つても、その經綸を行ふ機會を得なかつた。名君、賢主にも逢はなかつた。時には、再三その生命さへ失はうとした、時には一週間以上も饑渇に苦しめられて絶息しようとした。或はその力と恃む最愛の門人らを失つた。その間、孔子はどんなに悩んだか、どんなに悶えた

か、またどんなに嘆いたか。彼れはいつもその眞情の流露するのを抑へなかつた。堪え切れない不遇の淋しさが心の髓に泌み入ると、孔子は緣地に入つてその經綸を行はうといふやうな焦燥した氣分に囚はれた。孔子が顏回や子路の死に逢ふと、吾を忘れて烈しく慟哭した。そしてその悲痛感、孤獨感のどん底に沈むと、孔子は全く沈默したり、或は音樂、詩歌などによつて、自己を慰めようとつとめた。私はさうしたところに暖い人間孔子を見る。そしてそこに深い親みを感ずる。

孔子が人間味を多分に持つたのは、老莊らの人々とちがつて、いつも現實に上に、しつかり足を着けてゐたからである。老莊は獨善の寂靜境に逃避して成るべく人間から遠ざからうとつとめたが、孔子は人間の眞只中へ這入つて始終人間と接觸した。彼れは人間を愛した。人間を信じた、人間に好感を寄せた。つまり孔子は一日も人間から離れ去ることが出來なかつた。人間の弱さ、醜さを知つても、人間を見捨てなかつた。それは孔子が混亂の風潮に感化されたすべての人間をどうして純化するか救ひ出すかといふ一念に驅られた爲めで老莊のやうに人間から超越して、風光三昧に入り浸るに忍びなかつたによるであらう。そして孔子の研究が人間が上に專ら注がれたのは、孔子その人に人間味が多い爲めで『論語』一卷は生きた人間學の原理を記したものであるといへやう。人間はどうして正しい道を歩くことが出來るか、それに適切な解答を與へたのが『論語』である。その『論語』に力強い裏付けをしたのが孔子の行實である。

が、現代人のうちには、孔子を遠い過去人として敬遠して現世と沒交渉であるやうに思つてゐるものが相當に多いかも知れない。また『論語』を黴のはえた舊思想の殘滓であるやうに解釋してゐる人があるかも知れない。それは在來、偶像視せられた孔子や形式化せられた『論語』談義について、さう考へるのは理由のない事ではない。新しい生命の呼吸を吹きかけない限り、孔子は益々偶像化され、『論語』は愈よ黴臭くなるであらう。けれども孔子及び『論語』には現代思潮と共通した現實尊重の流れがはつきり見える。現實を離れて、孔子も『論語』も何もないのだ。孔子はいつも現實を凝視して、現實について語つた。複雜多樣な現實を單純化して、それから一系の原理を抽出して人々に話しかけた。さうした現實感が強く『論語』に滲み出てゐる。それは空想や夢語ではない。孔子は天命を語つても、鬼神を論じても、理想を說いても、つまり、現實から離れない。そこには暗いところ、陰氣なところ、消極的なところがなくて、明るい、陽氣な積極的色彩が渦卷いてゐる。この現實

衆庶の考へや希望と光明とを象徴した點が現代人と密接な交を持つ。少くとも、私一個が孔子に共鳴するのは、それがためである。今、『論語』を透ほして孔子を現代に活かし見るのは無意義ではない。

（二）

孔子は一體、どんな時代に出現したか。私は先づこの事を前提としなければならぬ。孔子の努力、その遊說、その漂泊、その不遇、その煩悶、その嗟嘆、その教化、その悟入などは、孔子の背景となつてゐる時代に見到らないと、はつきりした意義を掴む事が出來ぬ。孔子が生れる前もう支那は非常に亂れてゐた。それは惰力に生きた周室が衰へて蠻族の爲めに皇帝が西都を追ひ出されて東部に遷つた前後の頃に始つたのである。一時花やかに見えた周代の文化も形式に囚はれ、末技に流れて、全く行詰つたことやがて周室を衰運に導いたのである。それにつれて四方から蠻族が侵入する。覇者が現はれる。戰爭が續く。この勢に附け込んで、齊の桓公、宋の襄公、晋の文公、秦の穆公などが頭を擡げ、それから晋楚、吳越の爭ひが起つて、孔子の一生はそれらの血腥い戰爭と終始した。戰爭の慘禍！それが先づ孔子の頭に早く染みこんだ。

かうした時代は强者本位で、大抵のものは利己主義、唯我主義の虜となつた。彼等の間には、在來命脈を保つて來た道義の存在が認められなかつた。甘美な人情も輕蔑せられた。冷酷、殘忍、陰險な空氣が濃厚に漲つて、唯力の價値のみが重んぜられた。大きい力をもつものは道義を踏みにじり、在來の文化を破壞して主君を殺したり、肉親のものを犧牲にしたりして、すこしも良心の呵責を感じなかつた。名分は紊れる、下剋上の思想は到るところにはびこるといふ危勢を示したのである。

時代が新生の惱みに苦みもがいて、根底から烈しく動搖してゐる時、どうしても社會不安を免れなかつた。民衆の生は日夜脅かされる、幸福の途は全く絕たれる、暗い考へのみが人々の間に勢を得ていろいろの迷信に囚はれたものが少くなかつた。どの方面を見ても、そこに希望がなかつた、光明がなかつた、安定がなかつた。多くの民衆は運命に呪はれた小羊のやうに、はかない境遇に沈んでゐた。

この時勢の暗潮にゆらるゝ諸侯の多くは、偶像破壞者であり、權力の渴仰者であり、歡樂の追求者であつた。彼等は權力を握るために、その手段を選ばなかつた。あらゆる策略、詐術を用ゐても、權力にあり付くことにつとめた。また彼等は歡樂に耽るために、人民を虐げることを何とも思はなかつた。切那

の享樂に浸つて、美女や芳烈な酒やいろいろの饗宴、遊戯に心を傾けた。中には、齊の桓公のやうに賢者管仲を用ゐて善政を布き、蠻夷を中國から追ひ拂つた名君もないではないが、それは例外ともいふべきであつた。

かうした時代に生きてゆく人間には、唯三つの方法があつた。その一つは、傍觀者となつて、運命の弄ぶ儘に萍のやうな生を送ることである。今一つは逃避者となつて、獨善の生に安んずることである。多くのものは恐らくこの二つの方法を選んだであらう。ところが心ある少數者のうちには、暗黒時代に一道の光明を投げかけるために、自己を犠牲としようとする心持を示したものがあつた。孔子及びその徒はこの少數者に數へるべき人たちである。暗黒のうちに黎明の光りを仰がうとする覺醒者の澄んだ眼には、戰爭の慘禍がいかに深酷であるか、虐政と詐謀とがいかに民生を毒するか、不義の心、不徳の思ひがいかに人の內生命を害ねるかといふことが明かにわかつた。それと共に人々が平和の道へ善政の世界へ幸福の國へ道義の光明へ進むであらうことを祈願する熱情が湧き出づるのを抑へ難かつた。かうした精神と要求とが孔子の心の底に強く動いて、スツルム・ウンド・ドラング時代に直面しつゝ、新生の道へ急いだのである。つまり、時勢は鋭く孔子を刺戟し、孔子は正しく時勢に報つて故に生の創造と闘進とを實現しようとしたものと私は見る。

が、孔子がこの自覺を持つたのはいつ頃のことであらうか。はつきりわからない。孔子が告白したやうに十五歳で學に志した時であつたか、「三十にして立つ。」といつた時であつたか。私は孔子の胸に濟世の念が漸く強く動きはじめたのは三十歳前後でなかつたかと思ふ。それ以前にもおぼろ氣ながら、苦痛のどん底に沈む人々を救ひたいといふ念慮だけは動いてゐたであらうが、學問、道義の上に強く足を据えた三十歳前後に入つて、その念願がはつきりして來たらしい。孔子が三十六歳の時、齊に赴いて、始めて政治のことを景公から問はれたといふ傳說があるところから察すると、私の推想が當つてゐるやうである。

孔子を刺戟したのは、ひとり、時勢のみでなかつた。この鄕土魯國も亦彼れを刺戟した。魯は周公旦の封ぜられたところである。周公は文王の子、武王の弟で、武王の子成王を輔けて周室の基礎を作つた人である。周の文化が燦爛たる光彩を放つたのは、主として周公の力による。孔子は殊に周公の事業を欽仰して、時々その弟子たちに讃嘆の意を洩らした。孔子が「甚しい矣吾が衰へたるや、久しいかな、吾復夢に周公を見ず」といつた言葉は誰れもよく知つてゐるが、この嘆聲に聞いても、孔

子がいかに周公の人物、事業に共鳴したかゞわかる。その周公のゐた魯國に生れたことは、孔子に取つて一つの誇りにちがひなかつた。

魯國に於て著しく目につくのは、その文學、美術の進歩、禮樂などのよく整うてゐたことであつた。その知識階級は古詩の趣味を解し、繪畫の嗜みを持つた。科學、哲學、政治、兵事などの素養をも略ぼ備へてゐた。彼等は禮節について相當の習熟を重ね、音樂に特殊の興感を持つた。それらの點からいふと、魯は詩歌の國、音樂の國、禮節の國といつて宜かつた。かうした空氣を呼吸した人たちの中から、孔子が出たのは、よき土壤によく實つた麥が出來たのと同じ意味合ひである。が、魯國にも時代に共通した弱味がないではなかつた。それは迷信が割合に旺んに行はれてゐたこと、余り高尚でない音樂が次第にはやり出したことなどである。魯の士民は幽靈の存在を信じた、その幽靈が特に復讐したり、報恩したりすることをも信じた。それに石に靈あることを思つたり、山川の神に祈つたり、吉凶を判ずる占ひを萬事にあてはめたりする風があつた。彼等はまた夢を氣にしたり、方角のことを心配したり、呪ひや祟りなどを重く見たりする傾きがあつた。かうした空氣が孔子を取卷いてゐたけれども、彼れはよい方の影響を受けて、わるい方の感化から遠ざかることが出來た。それに「道は魯にあり。」といはれて、魯には周公の政治の遺り口が殘つてゐたので、この事も亦孔子に好印象を與へたにちがひなかつた。

孔子が生れたのは、周の靈王の二十一年十一月二十一日——魯襄公の時代——である。家は昌平郷陬邑にあつた。彼れの祖先は宋の公子微子の後で、父は叔梁紇、母は顏徵在といつた。古來すべて超人や聖人の誕生には必ず奇蹟的な傳說が附け加へられるが、ひとり、孔子にはこの事がない。この點も最初から人間味が多い。支那流に誇大な傳說を作れば、いくらも出來たであらうが、誰れもかうした方面に想像を加へることをしなかつたものと見える。

孔子の家柄はよかつたが、財産はなかつた。それに父が四歲の時に歿したので、一家は生活に困つたやうである。孔子の母はどんな女であつたか、そしてどういふ風に孔子を育てたかはまるでわからない。唯孔子の天分が少年の時から優れてゐたことだけは、略ぼ想像し得べき傳說がある。それは「兒たりし時、嬉戲するに俎豆を陳ね、禮容を設く。」とある通り、祭りの眞似事をしたり、禮儀作法をしたりして、遊んだと傳へらるゝのである。それは想像か、事實か、わからないけれども、この傳說があるのを見ると、孔子が尋常の少年とちがつてゐたことが知

られる。

孔子が學問したのはいつ頃か、これもはつきりわからない、古代の學制によると、八歳で小學に入り十五歳で大學に入つたから、孔子も亦七八歳の頃から獨學をはじめたらしい。彼れが「十有五にして學を志す。」と云つたのは大學の道に志した意味である。孔子はその時分から特に學問に興味を持ち、進歩の度合も加はつたと察せられる。が、孔子には常師がなかつた、すべて自分で講學の工夫をして、新しくその境地を開いていつたのである。各國に傳へられた文學、美術、政法などについても、孔子は比較的に早く通達したと思はれる。

孔子が結婚したのは二十歳の時である。この事は孔子の生活に一轉機を齎らした。孔子はそれまで學問のみに身を委ねたが、妻が出來ると、先づ生活の資を得なければならなかつた。それで極地位の低い委吏――倉庫の番人と解釋せられてゐる――となり、間もなく、牧場の役人となつた。もうその時分、孔子の抱負は高かつたであらうが、微職を侮らないで眞面目に勤めた。それと前後して孔子は愛兒伯魚を得た喜び、母を喪つた悲みを味つた。

長い間の貧乏、度々重ねた俗世の辛酸、伸びてゆかうとする望はあつても思ふ儘にならぬ周圍の事情、それは度々孔子を苦めたが、また孔子の人物を鍛錬して、次第に内的な力をゆたかにしたにちがひなかつた。そして孔子の燃ゆるやうな功名心、治國平天下の志が、ともすると、孔子の青春の情熱をはげしく煽り立て、いろいろの夢想を胸に描かせたであらう。孔子を描寫する人々のうちには、孔子を最初から智、情、意の圓滿な超人だと解するものがあるけれども、青春の孔子は、寧ろ鋭い感情の所有者でなかつたか。

孔子はその青年時代に於て、懺悔、告白をしてゐないけれども、やはり、凡人と同じやうにいろいろの誘惑に逢つたのでなかつたか。芳烈な酒、樂慾に伴ふ色彩の魅惑が孔子の心を動揺させたことはなかつたか。その喜怒、その哀樂の情が發する度に吾を忘れて、勃然と情の波のうちに身をゆだねたことはなかつたか。大體平凡人と同じやうな行路を辿つて、相當の段階を經て進んだ孔子には、それらの誘惑、それらの動揺から免れ得ないある時期があつたやうに察せられる。が、それと共に彼れはその體驗を深めて、知識、意力の調攝にも省みるところがあつたにちがひない。が、三十歳の頃まで、孔子は鋭い感情を中心にして進退したらしい。知の働き、意志の力なども相當優れてゐたらうが、情の勢力が一番强かつた。それがために彼は人生の行路に躓かないまでも、失望、焦慮、苦悶の感をつくづく

味はつたのでなかつたか。

それに茲に見逃すことの出來ぬのは孔子が時々、ひとり靜思した姿である。靜思は孔子の若い時分から續いたにちがひない。その思想は古代聖者に淵源してゐるけれども、孔子自身のものとして、それを心の胃腑に消化し新しい生命の美液とするには、靜思の力にまたねばならぬものがあつた。が、この事について、在來の傳記者は何も記してゐないやうである。孔子は歴史を好んだ、現實を愛した。それと共に靜思を自分の糧とした。孔子は時々、文武周公を思ひ、古代の聖賢を思ひ、また眼前の人生を思ひ、人のゆくべき道を思つて、その冥想をある一點に凝集したであらう。そこから精神界に於ける新しい力ある泉を汲み出したのであらう。また孔子は喜びにも、悲みにも、苦痛を感じた時にも、失意に陷つた時にも、それらについて、ぢつと思索を重ねたであらう。孔子の人間哲學は、體驗を土臺とした靜思の所産でなかつたか。少くとも、私一個はさう思はないでをられない。

(三)

傳説によると、孔子は二十八歳の時、郯子について學び、三十四五歳の頃、音樂を萇宏といふ人に敎へられ、また周都洛陽に赴いて禮を老子に問ふたとある。知識欲に渇し、藝術愛に燃えてゐた少壯時代の孔子が他から敎へを求めることを喜んだのは事實であらう。そして一時、二三の人たちから、それぞれの學科を授かつたことも亦あつたらう。けれども孔子が禮を老子に問ふたといふことは首肯し難い。『論語』を見ると、老子について一言も費してをらぬ。老子の思想は、表面から見ると、孔子に正反對の思想である。もし孔子が老子を先輩として、禮について敎へを求めるほどであるならば、一言、老子について語るべき筈である。孔子の弟子たちも亦老子の思想を何とか批評しさうなものである『史記』の作者は故らにその老莊列傳に異彩を附け加へるために老子が孔子を說破した言葉を錄して「子の言ふところのものは、その人骨と共に皆已に朽ちたり。ひとりその言あるのみ。且つ君子その時を得れば則ち駕し、その時を得されば則ち蓬累してゆく。吾れこれを聞く、良賈は深く藏して虚しきが若く、君子は盛德容貌愚なるが如し。子の驕氣と多慾と態色と淫志とを去れ、これ皆子の身に益なし。」と戒めたとしてゐる。それを聞いた孔子は、ひとく驚歎して「私は今日はじめて龍を見た。」と門人に告げたと傳へられてゐる。後年の孔子とちがつて、感情が鋭く、神經が尖つてゐた少壯の孔子が老子に頭から喝破せられて、何の辯駁もしなかつたとは思へ

ない。どうしても唯「龍を見た。」の一結語に甘んじ得ないにちがひない。もし眞に孔子が老子と逢つたとしたら、當然、その論爭を見なければならぬ。殊に孔子の所說は大體、前人の思想を結收したものにちがひないけれども、また孔子自身の創開もある、發見もある。「三十にして立つ。」といつた孔子が相當の主張を把持してゐた以上、唯老子に叱られて默つて引込んでしまふほど無氣力ではなかつたらう。

それに魯は禮儀の國である。「道は魯にある。」といはれたほどで、禮については、孔子自身、傳統的に早く精通してゐたと推すべき理由が充分にある。故らに孔子の徒から見て異端とすべき老子に禮を問ふ必要はないのである。いづれから見ても、この事は單なる傳說であるのみならず、寧ろ抹殺し去るべきものでなからうか。それを抹殺したとて、孔子の傳記が淋しくなるわけでないと同時に老子の價値にも何の增減がないのだ。

洛陽から故鄕へ皈つた孔子は、魯衛の青年に一層尊敬せられて、その門下が殖へたと傳へられる。孔子が私塾のやうなものを開いて、弟子を導き始めたのは、いつ頃か、はつきりしない。二十二三歲の頃からとも、三十歲前後からとは云はれてゐる。傳記者のうちには、孔子の學者としての名が早く四方に聞えて、弟子が多くのその門にあつまつたやうに記してゐるのもあるけれども、孔子が眞に世に認められたのは、やはり三十六七歲から四十歲前後のことであるまいか。

いづれにもせよ、孔子は政治家として起つ前に先づ教育家、學者としての生活を始めたのである。自分の教養に於て得た體驗と知識とを若き人たちに頒たうと思つたのである。かうして孔子はその弟子たちを集めて、人間學の原理や政治道徳の要領を敎へた。孔子の仕事は教育の方へ伸び、やがて政治にも伸びてゆかうとしたのである。けれども所詮、孔子は教育に終始すべき人であつた。政治家としても優れてゐたが、實際の仕事をしてゆく上では、寧ろ失敗したのである。が、教育については、少しも頓挫しなかつた。その門下三千を數へられたほどである。それは孔子の素質や趣味や傾向や人格が教育者、思想家として、より多く適當してゐたからである。實際の政治に當るには、孔子の理想が餘り高きにすぎたのみならず、その行き方がまた嚴格で率直で、すこしも融通が利かなかつたのである。

この事は孔子も多少意識してゐたにちがひない。けれども孔子はその信ずる道をひろく天下に傳へたいといふ一念に促されて、自分に成功しさうもない政治に開顯作用を行はうとしたのである。凡俗政治、虛僞本位の政治を根底から打破つて、道義中心の政治を世にかうとしたのである。腐敗、泥濁のうちに沈

んでゐる政治を一新して、民衆のための哲人政治を高調しようとつとめたのである。が、それは孔子の豫期を裏切つて、僅かな手答へを示しただけであつた。

先驅者の運命はいつの世にも悲壯である。新しい時代の黎明色を見て、曉鐘をはげしく打鳴らすけれども、一般人は舊時代の殘夢から容易く目ざめないので、その心持を理解しない。先驅者の中には、俗衆に呪はれ、疑はれて時代の犠牲となるものがある。クリスト、ソクラテスなどはかうして悲壯な最後をとげた。孔子も亦萬人に先驅した爲めに長い間、漂泊の生を續けて、あらゆる辛酸を嘗めさせられた。逆運がいつも孔子に附き纒うてゐた。けれどもこの事は孔子の人格を鍛練する上に非常に役立つたのである。

孔子が魯國に用ゐられて、眞にその經綸を行ふことが出來た時期は僅かに三ケ月にすぎなかつた。他は多く用ゐられないで終つた。晩年の彼れは故郷へ歸るまで、その大部分を漂泊に費した。窮乏と失意の旅が途方もなく、長く續いた。が、孔子はすこしも倦まなかつた。また疲れなかつた。孔子の人格の光りは、この時に於て、最もよく輝いた。私がいつも、孔子に共鳴するのは疑ひもなくこの苦い漂泊時代の上にある。私は直ぐにこの時代の光景を描き出したいのだが、順序として、孔子が政治家として、どんな開顯作用を行つたか、それを回顧して見よう。

(四)

孔子が政治について、最初にその意見を洩らしたのは三十六歳の時、齊の景公に逢つた際である。この折、魯が亂れて、國主昭公が齊に身を寄せたので、孔子も亦齊に赴いたのである。當時、景公は政治に倦んで、寵姫の愛に溺れ、當然立てなければならぬ太子をも立てなかつた。それに大夫陳桓が勢力を張つて、君臣の間が紊れてゐた。それで孔子は景公の召しに應じて政治のことを問はれると、先づ君臣の分を正さうと思つたので「政道の要は君が君たるべき道をつくし、臣が臣たるべき道をつくし、父は父らしく、子は子らしい道をつくす上にございます。それは人道の大經で政治の根本生命かと存じます。」と述べた。景公は孔子の言葉に多少感動して「成程、貴君の御說はいかにも最もだ。君臣父子が各その道をつくさなければ、どうしても國を治めてゆくわけにゆかない。たとひ金銀、米穀などが倉に滿ちてゐても仕樣がない。」と云つた。けれども景公は孔子の言葉を用ゐるだけの決心が付かなかつた。一說によると、景公は孔子を拔擢して要路に置きたいと思つたが、晏嬰が「儒者

などいふ迂遠極まることを大切にする人間を御用ゐになつても仕様がありませぬ。」と反對したので、到頭、孔子を用ゐなかつたと傳へられる。

かうして孔子は齊に用ゐられなかつたけれども、後、魯國へ歸つて、中都の宰に任ぜられ、更に司空となり、大司寇の重位を占めた。それは工務官から司法官となつたのである。後には相のことを行うて、宰相の椅子を得た。それらは孔子が五十二歳から五十五歳までのことである。この間、孔子が外交の上で魯のためにつくした事蹟は、夾谷の會に見ることが出來る。

その時分、齊は强大で魯は弱小であつた。夾谷の會合は齊、魯二國の和親、提携を旨として行はれたのであるが、その實、この會は魯の運命に重大な關係があつた。齊では最初から魯を侮つて、威嚇を加へ、魯を屬國同樣に取扱はうと思つてゐたのである。孔子は早くこの事を知つてゐたので、魯の定公に從うて夾谷の會に赴く前、屹と決心するところがあつた。それで定公が居城を出る時、孔子は特に注意して「文事あるものは必ず武備がございます。武事あるものは必ず文備がございます。この際、左右の司馬（軍事を掌るもの）を從へてゆかるゝが宜しうございませう。」と云つた。定公は孔子の勸めを容れて、司馬を從へ、夾谷に赴いた。そして齊の景公と握手して、互ゐに獻酬の禮を畢つた。その際、孔子は始終、座上の樣子に眼を配つて、すこしも油斷しなかつた。

齊では豫めその用意があつたものと見えて、その有司が「四方の音樂を余興にお聞きに入れませう。」と云つて、旗旄劍戟などを閃かして、鼓躁した。それと見ると、孔子は袂を擧げて固く有司を抑へ「わが兩君が好會をされてゐる最中、夷狄の音樂を奏せらるゝのは、その意を得ない。」と云つて、到頭、それらを斥けた。また齊の有司が宮中の音樂を奏して、優倡、侏儒らに踊らせると、孔子は嚴かに姿を正して「匹夫の身分でありながら、諸侯を熒惑するものは斷じて死罪に處しなければなりますまい。」と有司に迫つた。有司は孔子に迫られて、仕方なく、法に處した。その樣子を見て、今まで傲然としてゐた景公は急に畏懼した樣子を顏色に示した。魯を威嚇するために開かれた夾谷の會は、孔子一人のためにすつかり打破られて、景公はひどく悄げてしまつた。

景公は居城に歸ると、その重臣に向つて「今度の會合をどう見たか。魯國は弱小だが、侮り難い。それは君子の道を以てその主君を輔佐するものがあるからだ。ところが、お前らは私にひとり夷狄の道を敎へるものだから却て魯のために破られるやうな破目になるのだ。」と述懷した。そして景公は曾て占領

した郈、汶陽、龜陰の地を魯に還して陳謝した。孔子の正義に根ざした態度が景公を深く動かしたのである。

孔子は定公のために政治に全力を注いだ。魯國の勢を強うするために、人知れぬ苦心をした。それには、國主の次位にゐてともすると、國主の權勢を殺がうとする三卿——季氏、叔孫氏孟孫氏——の居城を毀つて定公の一身に權力を集中させようと計つたのである。ところがひとり、孟孫氏は手強く反抗して容易く屈しなかつた。孔子はまた魯の政治を紊した大夫少正卯を誅して賞罰を明かにした上、善政を布いた。かうして孔子が宰相となつてから、三月ばかりの間に魯は見事に治められた。

この頃は孔子の最も會心な時代であつた。久しい間、抱いてゐた經綸が次第に實行の上にうつされてゆく、弟子たちに語つた理想が徐ろに形となつて現はれてくる。それは恰度蕾を持つてゐた花が春風に吹かれて、一時に微笑して咲き綻びたやうな具合であつた。孔子の眼は希望に輝き、その態度は生々して、はち切れるやうな元氣に滿ちた。當時、孔子は季氏の宰に任用した子路（季路）に向つて、その魯國を君子國とするについての計畫や希望などを告げたことと察せられる。

かうして今まで弱國と思はれてゐた魯國が急にその勢力を充實させたのを見ると、憂惧したのは齊國の君臣である。彼等はもし孔子が引續いて、魯の政治を行ふならば、魯は必ず覇業を成就するであらう。さうなると、我國は一番近いから、當然、魯のために併呑されてしまふ。今からそれを防ぐべき策を講じなければならぬ。」とあせり出した。彼等はいろいろ考へぬいた末、多くの女優を魯に贈つて、その君臣の心を溶かさうと計つた。それで國中に命令して、美貌の女八十人を選び出した。

齊では、それらの女にめざめるやうな美服を着せ、念入りに化粧を凝らさせて、魯へ行かしめた。魯では八十人の女優がくるといふので、巷にその噂が高かつた。それはやがて孔子の耳にも入つた。孔子は眉をひそめた。彼れは齊が巧妙な手段で、國主定公や權勢ある季桓子らを魅して、女色に溺れさせようとする策略を早く悟つたのである。

孔子は定公の政治を輔けて、次第によい方へ向けようと來たが、まだ前途遼遠な感じがした。それに定公も季桓子も兎角、享樂に傾きやすい風があつた。孔子が誠實に道を説けば説くほど、彼等は何となく窮屈に感じたらしかつた。定公らは孔子の堅苦しい話よりも、色彩と音樂の世界に興味を持つた。かうした折に齊から女優を贈つたことは彼等をどの位、喜ばせたか知れなかつた。殊に季桓子は女優が來る前から、強い憧憬を感じてゐた。

春風が吹いて池の水がぬるむ日、魯の城南にある高門の外に八十人の女優が着くと、魯の人々は驚嘆の眼を瞠つた。彼の女らが一心に装を凝らして、康樂といふ舞曲を始めると、山のやうに群れてゐる見物はうつとりとしてしまつた。季桓子はその群のうちにそつと混つて、女優が月界の女神のやうに氣高く、落花のやうに柔かく舞ふのを見てゐたが、思はず、感嘆の聲を洩らした。彼れはその女優の一人宛に深く見入つて、飽くことを知らなかつた。その翌日も、翌々日も女優の舞を見てその魂を打ちこんでしまつた。季桓子はかうして三日間、國政を投げやつて置いたのみならず、定公にも女優のことを話して、見物を勸めた。

齊の策略は圖に中つた。定公、季桓子らは毎日、女優のことを話し合つて、政治を忘れたやうに見えた。孔子はそれを見て次第に失望を感じはじめた。孔子が賢君に仕立てあげようと思つた定公が、孔子の苦心をまるで忘れてしまつて、女色に氣を惹かれるやうでは、魯の中興もむづかしかつた。が、孔子は今少し留つて、その經綸を行ひ、魯の國勢を固めて置きたいと思つた。孔子は成るべく平靜な氣分を保つて、折を見て定公の覺醒を促がさうとしてゐた。それにしても魯の三卿はいづれも孔子を目の仇にしてゐるので、孤立した孔子が思ふ通りに筋を運ぶのは、非常に困難であつた。それに定公は全く女優に溺れて、どうにも仕様がないので、孔子は到頭「私が魯を去る時が來た。」と思つた。

孔子は、ある日、そつとその門弟子路に自分の胸中を告げて「今迄私は我慢に我慢を重ねて來たが、もう今日のやうに魯の君臣が政治に冷淡になつたのを見ると、何事も共にしたくない。私があせればあせるほど、効果がうすくなるであらう。私は愛する鄕國を離れて、暫く衞にゆかうと思ふのだ。」と云つた。孔子の顔には淋しい色が浮んで、聲が沈んでゐた。

間もなく、孔子は魯を去つた。齊の君臣がそれを知ると、いづれも手を拍つて喜んだ。魯の覇業は緒についたのだが、孔子がゐなくなると、俄かにくづれはじめた。周公が封ぜられた國、その遺業のあとがかすかに光つてゐる國、そして孔子が生れた國が、かうして衰亡に近付いてゆくことは、孔子に取つて、大きい苦痛であつたと思はれる。衞に至つてからも、孔子はその鄕土を夢裡にも忘れかねたであらう。

（五）

孔子が魯を去つて以來、長い漂泊の生が續いた。それは凡そ八九年の間であつた。孔子は時に魯に歸つたこともあるけれど

も、大抵旅にゐた。孔子がその足痕を印した地は、齊、衞、陳、鄭、蒲、宋、蔡、葉、楚などである。それらのうちで、孔子が割合に長く留まつてゐたのは齊、衞二國である。それは衞が魯に近くて、兩君主同姓の親みがあり、文化も亦略ぼ同じ程度にあつたからであらう。齊は魯と交渉が深い上に人情、風俗も似寄つてゐたので、孔子はそこに親みを感じたのであらう。孔子は齊、衞でどういふ生活をしてゐたか、はつきりわからないが、その理想を行ふ機會に逢はなかつたのは確かな事實である。孔子はいつも失意の境涯にゐた。

　孔子の漂泊は唯わけもなく、四方に旅してあるいたのではなかつた。孔子は自分を正しく用ゐる賢君を見出して、その人と一緒に道を行ひたいと熱望したからである。孔子は「今の天下が亂れて、いつ迄も落着かないのは、私の信ずる道が一向、行はれないからだ。もし私の道が行はるなら、爭鬪は必ずやむであらう。下剋上の思想や行ひも自然消えてしまふであらう。人々はいづれも至善の道に安住して、幸福、平和、樂天の生活を送ることが出來よう。それにしても、斯の道を天下に實現する名君がない限り、また自分がその局に當らない限り、どうして天下を救ふことが出來よう。それを考へると、私はぢつとしてをられない。愛する鄕土から思ひ切つて離れたのも、道のためだ。民生の苦痛、悲嘆、絶望を見ると、私は自分の生などはどうでも宜い、先づ萬衆を救ひたいといふ氣になるのだ。どんな艱難も不自由も窮乏も、私の志望の前には風前の塵にひとしい。ゆかう、ゆかう、私は私の志をとげるために諸國をめぐらう。唯一人の名君を見出すまでは、幾年も漂泊の旅を續けて宜い。」と思ひつめた。が、孔子の熱情と至誠とは容易く酬はれなかつた。孔子は長い間かかつて、唯一人の名君をも見出すことが出來なかつた。

　孔子は衞の靈公にも失望した。齊でも用ゐられる折がなかつた。無論、孔子の事蹟は、はつきりしないので、どの國に仕へたかもわからないのである。傳說によると、衞に仕へ、また陳に仕へたらしいが、それは傳記者の想像かも知れない。晩年、孔子は楚に於て、重く用ゐられやうとしたが、反對したものがあつたので、空しく魯に歸つた。が、孔子は一時、衞にゐて、そこで彼れの經論を行ひたい望みを抱いたが、靈公の人物に服しなかつたので、到頭、衞を見捨てた。

　元來、衞にはいろいろの弱味があつた。靈公とその世子蒯聵との間が不和で、靈公は到頭、その世子を追ひ出した。のみならず、靈公の夫人南子はその妖艶な姿を恃んで、よくない噂を立てられた。孔子が南子から強いて面會を申込まれて、やむを

得ず、南子に逢つた時、門人子路は「先生、何故あんな妖婦にお逢ひなされたのですか。彼奴らの機嫌まで取つて、政に與るに及びますまい。」と言つたほどである。それらによると、衞の政治は頽廢に傾いたらしい。それに靈公は平和を愛する心がなくて、いつも戰爭に氣を取られてゐた。ある日、孔子が靈公に逢ふと先づ戰陣のことを突如問ひかけた。孔子はそれについて失望を感じた。國主が最も謹まねばならぬのは戰爭である。干戈は漫に動かすべきものでない。公はそれらについて反省しないで、私に殺伐な話を聞かうとするのは誤つてゐる。それも別に專門家がいくらもあるから、その方で聞くなら、まだしものことだ。平和を高唱する私に向つて、戰爭を談じやうとするのはその意を得ない。孔子はかう思つて「俎豆のこと――禮教については、私も聊かながら研究いたしましたが、戰爭のことは、まだ學修いたしませぬから、何とも御答へいたしかねます。」と云つた。それには衞の禮教頽廢を諷ずる心持がほのかに出てゐた。けれども靈公はやはり無反省であつた。孔子は「衞國もこれでは致方がない。到底、私の道を行ふ國でない。」と思ひあきらめて、翌日直ぐに衞を去つたのである。

この種の失望は、孔子が度々味はつたところである。最初、孔子は隨分、それについて遣る瀨ない思ひを抱いたにちがひなかつた。が、次第にそれに馴れると、孔子はもう力を落すやうなことはなかつた。孔子が自ら「天命を知る。」と云つた時代は過ぎた。思慮、學問共に圓熟しようとする六十歳の時期が、もう眼の前に迫つてゐた。先天の使命――その道をひろく宣傳するのが自分の荷ふてゐる役目だと強く自覺した前には、失望のために、勇氣を挫折してしまうやうなことが、次第になくなつたのである。孔子は失望の今日が、やがて希望の明日であることを思つた。

この時代に孔子の身に匡に於ける受難が起つた。續いて桓魋の難があつた、陳蔡の厄があつた。その度每に孔子は、その生命を奪はれやうとしたり、ひどい饑渇に苦められたりした。孔子が匡の受難に逢つたのは、五十六七歳の時である。當時孔子は衞を去つて陳へゆく途中、匡といふ邑の郊外へさしかゝつた。孔子は曾て魯の陽虎が匡へ攻めこんだ話をその弟子から聞きながら、道をあるいた。ところが、いつの間にか匡の人々は武器などを携へて、孔子の行く先をふさぎ「圖々しい奴め、この前、私らを苦めて置きながら、よく來たな。」と怒鳴りちらした。孔子には、それが何の意味かわからなかつた。匡の人々は勢こんで孔子を取り卷き、五日間、孔子の自由を奪つてしまつた。

その時、孔子の弟子たちは、顔色を失ふほど、師の身を心配した。顔回は一時、孔子の姿を見失つて、あとでやつと一緒になることが出來た。孔子が捕へられたのは、その容貌が陽虎に似てゐた上に、その當時の話をしたので、匡の人々は、すつかり陽虎と思ひ込んでしまつたのである。さて弟子たちは、匡人がどんな危害を孔子に加へるかわからないので、いづれも不安な樣子をしてゐた。

孔子はそれに氣付くと、弟子たちの心のうちを思つて、何とか安心させてやりたくなつた。孔子は先天の使命を自覺してゐるので、たとひ、匡人がどんな復讐をしようとも、別に氣にかけないで宜いと思つてゐた。それで「君たちは何も心配しなくとも宜い。私らは大丈夫、この難を免れ得る。私らが信ずる尊い道は文王によつて傳へられたが、その後を受けて、私らがその宣傳につとめてゐる。もし天がこの道を亡ぼしてしまふつもりなら、現在私がこの道を與り知る筈がないのだ。けれども天がこの道を亡ぼす心がない以上は、匡人がどんなに亂暴を働いても、高の知れた彼等に何が出來よう。私の生命は天が預つてゐる。天の意志に背くものどもは、私をどうすることも出來ないであらう。まあ安心するが宜い。」と慰めた。その言葉には力強い響が籠つて、嚴肅な氣分が孔子の眉の上に動いた。

この受難は孔子の道に對する確信を强めた。どんな艱難が起つて自分の生命を危くしようとも、道は自分と共にある。その道の宣傳は天が自分に命ずるところだ。道はこの世の鹽だ、人類の光りだ。それを必要とする上は自分の運命も亦退縮せぬ。萬一、道のために自分が倒れるとしたら、それは自分が最初から豫期したことであるので、すこしも不滿はない。大きい歡喜のうちにこの世を去る迄である。道のために破れ、道のために苦しみ、道のために惱み、道のために祈ることは、自分にとつて、この上ない光榮である。孔子はかういふ風に强い確信の上に起つた。

その後、孔子は六十一歲の時、桓魋の難に惱んだ。桓魋は宋の司馬で孔子を異端者として叱つてゐた。ところが、孔子が宋に赴いて、ある日、大樹の下にその弟子たちをあつめて樂しさうに道を説いてゐる樣子を見ると、桓魋はかねて孔子を殺さうと思つたので、大樹が倒れて孔子が傷けたやうに裝ふつもりで、俄かにその樹を拔いた。幸ひに孔子は災を免れたが、弟子たちは、匡の受難の時のやうにひどく心痛して「早く他へ行きませう、茲に留まつてゐると、またどんな災難にかかるかも知れませぬ。」と孔子を促がしたてた。が、孔子は落着き拂つて、急がうとしなかつた。そして弟子達に「死生は皆天の意にまか

せるより仕方がない。天が私に德を與へて、この世に出現せしめた上は、天の命ずるところ必ず、私に民生を救はせようとするにあらう。だから、桓魋などが、私を殺さうとしても、天祐が私にある間、一指を染めることも出來まい。」と諭した。その時、悠然として青空を仰いだ容貌は光り輝いて、大きい權威ある人のやうに弟子たちの眼に映つた。かうしてこの第二の受難は、一層孔子の自信を固くして、天人合致の妙境を自得するに至つたものと思はれる。

それから孔子が陳蔡の厄に逢つたのは六十四歳の時であつた孔子の遊說について考へると、何人も陳蔡の厄を胸に描き出すのである。それほどこの受難は、一般にひろく印象せられてゐる。眞の事實は、孔子が楚に赴く時、偶ま呉と陳との間に戰ひが始つて、蔡は呉に身方し　陳は楚に屬してゐたのである。その時分、陳は亂れて、その戰禍が孔子一行に累して、七日間、食糧を絕たれた爲め　一行はひどく饑渴に苦んだ。そこへ楚の昭王が出兵して陳の困難を救つたので　孔子らも、はじめて食にあり付くことが出來た。かういふ事實に少し潤色したのが一般に知らるゝ傳說である。

孔子が漂泊の生をはじめてから茲に八年　その間、二年ばかり、魯に歸つてゐたが、他の六年はすべてを旅のうちに送つた。一身の計を拋ち、家と妻子とに離れて、此處彼處を歩くうちに、孔子の得意の日は唯一日さへもなかつた。もし孔子に道を信ずる意氣がなかつたら、犠牲、獻身の誠がなかつたら、滿頭の白髮を撫でゝ滅入り込んだかも知れない。もし孔子に詩歌、音樂の趣味がなかつたら、また眞實な弟子たちに擁せらるゝことがなかつたら、慰安のない生の索漠にぐつたりしてしまつたかも知れない。それにしても、孔子はもう六十四歲である。この先き、どの位生きてゆけるか、それは超人孔子にもわからなかつたが　墓穴へ少しづゝ近付いてゆく寂寥と苦愁とが、旅寢の夢さめた時分、折々、孔子を沈鬱に導いたかも知れなかつた。

その時分、孔子に一縷の光明となつたのは楚が孔子を重用するかも知れぬといふことであつた。それもはつきり定まつてはゐないので　孔子を充分力付けるわけにゆかなかつた。が、兎に角、孔子は蔡を出て、楚の都へ赴く途に就いた。それを聞いて、一番喜ばなかつたのは陳蔡の大夫らである。彼等は「哲人孔子がもし大國たる楚に用ゐられて善政を布くと、陳蔡は楚の威勢に壓倒されるであらう。この危急に臨むのを防ぐには、孔子の行く道をふさぐよりほかがない。」と思ひ定めた。

彼等は人知れず　兵を用意して、突如として孔子一行を陳蔡

の野に包圍した。一行は非常に驚いたが、もうどうすることが出來なかつた。陳蔡の兵は一行に糧食を供せぬようにしたので、饑死の憂ひが人々の心を重くした。孔子と顔回とはさうしたことを忘れてしまつたやうに見えたが、子路、子貢らは饑えの苦みにひどく困りぬいた。その第一夜、彼等は空腹のためにうすら冷めたい秋の夜氣に侵されて夢を結び得なかつた。

それでも朝になると、子路も子貢も新たに元氣付いた。露にぬれた草を踏んで、大きく呼吸しながら、地平線の彼方に現はれた太陽に向ふ彼等を見ると、孔子は新鮮な朝食にあり付いたやうな喜びとすがすがしさを感じた。が、やがて眞晝が近付くと、孔子も亦空腹の苦みから免れることが出來なかつた。さうした時、孔子は自ら勇氣付けるやうに、老人に似合はぬ若々しい朗かな聲で詩を歌つた。弟子たちは、その聲を聞いて勵まされた。

第二夜が過ぎた。

子路は魂を抜かれた人のやうに地上にへたばつた。彼れは草などを口に入れ、露を吸うて、僅かにその氣力を支えた。が、日を重ねるにつれて、子路は不滿に堪えかねた樣子を現はした。彼れは何か口のうちで、ぶつぶつ呟いた。さうかと思ふと、うめくやうな聲を出した。孔子は樹の蔭に座つて、ぢつと子路の樣子から眼を離さなかつた。その眼にはかすかに涙が光つてゐるやうに見えた。

孔子は自分の飢餓よりも、弟子たちが日に衰へてゆくのが一番氣にかかつた。自分はもう墓に足を踏み入れて、餘命が幾何もない。道を傳へるために、陳蔡の野にのたれ死にしたとて、思ひ殘すことがないのだ。けれども顔回や子路、子貢などはいづれも未だ若い。彼等はその長い前途を持つてゐる。それがこの儘、饑死したとすると、これほど悼ましいことはない。自分はどうでも宜い。せめて弟子たちだけは、一日も、一刻も早く饑死の境から免れさせたい。孔子はそればかり思ひつめてゐた。

その時、子路は俄かに孔子の方を向いて「先生。」と呼んだ。

「何だ。」と孔子が微笑しながら答へた。子路は「先生、私は今度の災厄に逢つて、私の信念が急にぐら付き出しました。小人どもが不善を働いて、困りぬくのは、わかり切つたことで、それは當然の應報です。けれども先生のやうに道を傳へる聖者が度々難に逢つて、天にも振り捨てられたと思はるるやうなひどい目に逢はれるのは、どうしたことでございませう。善を行ふものにはよい報ひがあり、惡を行ふものには、わるい報ひが必ずあると先生はいつか私に仰せられたやうに思ひます。が、今

の有樣を考へると、實に殘念です。道に殉ずる氣になれませぬ。」と不平らしく云つた。

孔子は始終、優しい眼をして、子路の言葉を聞いてゐたが、やがて穩かな調子で「まあさう激昂しないでをりなさい。君は何事も一徹に思ひこむ癖がある。善人必ずしも善報を得るわけでない、惡人必ずしも悉く亡びるのではない。人の窮通はすべて天命だ。昔から君子人で窮愁の生を送つたり、悲痛な犧牲となつたものが少くない。殊に戰亂の世は、價値顚倒のことが多いから、君子人であつても、宜い報ひを得ない人たちが往々ある。生きた世の中のことは、さう一律に解釋することが出來ない。」と諭した。孔子は子路が尙ほ呑みこめぬ樣子をしてゐるのを見て、更に言葉に力を入れ「玆に見逃がすことが出來ない一事がある。それが眼目ぢや。君子人はたとひ窮しても、天命に安んじて怨恨しない。儼然としてその守るべきところを保つてゐる。ところが、小人は一たび困窮すると、人を怨み、天を咀ひ、自棄して非を爲すものが多い。どうしても彼等は法度の外に溢れ出てしまふ。私たちは、この事理を考へて、窮迫に落膽してはならぬ、絕望してはならぬ。進んで新生の光りを見出すべきぢや。な、由よ、わかつたか。」と云ふと、子路は覺えず頭を垂れて「はい。」と答へた。

かうして弟子たちは、孔子に勵まされて、空腹に堪えた。そのうち、子貢が百姓から米を買ひ、顏回がそれ焚く番などして、辛くも餓死を免れた。そして七日の後、楚の兵が來て、孔子らを救つた。一行は、はじめて生色を浮べた。それから孔子が楚の都に赴いたかどうか、はつきりわからない。唯楚に用ゐられずに陳から故郷へ歸つたのは事實である。

（六）

孔子はその最後の十年を多く故郷に送つた。弟子思ひの孔子は、他郷にゐても、常に故郷の青年を忘れかねた。殊に楚に用ゐられないことがわかると、最早、名君を探す根氣もなくなつた。それは一つの空想にすぎぬのを自覺したのである。この調子では、いくら周遊をしても、自分の希望を遂げる機はない。仕途は斷然思ひ切らう。そして退いて、靜かに教育と著述とに身をゆだねて、自分の志を後世に傳へよう。孔子がかう思ふと「歸らう、一日も早く歸らう。郷にゐる門人らを導くほど愉快なことはない。それは私の重い任務ぢや。」と叫んだ。

故郷へ歸つてから、孔子の生は極めて平靜であつた。漂泊時代のあはただしさは、まるで見られないやうになつた。孔子がその親[illegible]弟子たちに[illegible]貧しいうちに幸福

を感じた。また孔子が筆を執つて、その思ひを述べてゐる時、王侯さへも知らない清い滿足を覺えた。かうして歳月が流るゝやうに過ぎ去つた。

孔子が眞に家庭の愉樂を味はつたのも、この十年間であつた、殊にその前半であつた。それまで家のことは、すべてその妻にまかせてゐた。が、今は親しく故郷にゐて、その子伯魚夫妻その孫子思らと團欒して、無邪氣な日を送ることが出來た。孔子の妻はどんな風であつたかよくわからぬけれども、正しく留守をして、孔子を内助した賢婦であつたらしい。伯魚はよく孔子の教へを守つて、謹直な生活を續けた。孔子が故郷へ歸つた時、伯魚はもう四十四歳になつてゐた。

さて孔子の日常生活及その門弟との關係は『論語』に如實に反映せられてゐる。孔子とその弟子の間は恰度親子のやうであつた。孔子は彼等を自分の子のやうに愛撫した。弟子は孔子をその親のやうに敬愛した。クリストはその弟子のうちから背逆者を出したが、孔子にはまるでその事がなかつた。双方の關係は孔子が歿するまで暖かく續いてゐた。それらの弟子たちの中で、孔子が信じたのは顏回であつた。また孔子は殊に子路、子貢、曾參らを愛した。門下三千、堂に入つたもの七十余人を數へられるが、特に目立つたのは以上の人たちであつた。

孔子はよく弟子の性質を知りぬいて、その個性に應じて臨機說法した。仁について、弟子たちが孔子の教へを仰いだ時、その答へは皆ちがつてゐた。顏面に向つては「仁とは克己復禮を意味する。」と諭した。仲弓には「敬恕即ち仁だ。」と云つた。更に司馬牛には「愼言こそ仁の要旨だ。」と教へた。蓋し顏面は最もよく孔子の旨を得て、英明の資があるので、仁の第一義を直下に示したのである。司馬牛は輕躁で、多言を好むので、孔子は先づ愼言を仁の一端としたのである。すべて孔子の云ふところは、同じ意味、同じ内容でも、相手の氣根につれて、その表現をいろいろに變化した。

孔子は彼等をその傍にあつめて、教訓するのを第一の樂みとした。ある時、孔子の側に四人の弟子が侍してゐた。閔子騫は中正で和いだ樣子をしてゐた。子路は剛强の氣を顏に浮べてゐた。冉有、子貢は和平の色を漂はせてゐた。孔子は彼等の有爲の氣象を察してその將來を樂んだが、唯子路が剛强のためにその生を全うし得ないであらうことを心配した。孔子の推察はすこしも違はなかつた。子路はその氣象のために殉難したのである。

孔子はまたその弟子たちに志すところを述べさせて、ぢつと聞いてゐるのを好んだ。ある時、孔子の側に子路、曾皙、冉

有、公西華の四人が侍座した。孔子は機嫌よく、彼等に向つて「今日は諸君が遠慮をしないで、平生志すところを私の前で打開けてほしい。もし茲に君たちの才能を知つて採用しようとする人があるとしたら、君たちはどういふ具合にそれに應じて、期待に負かぬやうするつもりか。」と問ふた。

その言葉が終るのを待ちかねて、子路は第一に口を開いた。その抱負は「今、兵車千乘を出すべき國——魯、衞などの如く、齊、晉などの大國の間に分在して、國勢困難を極めたところに私が政治を掌つて、兵禍の惱み、凶作の苦みを帶めながら、統治に力を入れるといたしまするると、私は三年の間に必ず士民に勇氣付け、すつかり道に入らせるつもりです。」といふのであつた。孔子はそれを聞いて、子路がいつものやうに大きく自分のことを吹聽するのに興を催ほした。

その次ぎに曾皙が何か云ふ筈であつたが、彼れはまるで無關心の體で靜かに瑟を彈じてゐた。それで孔子は冉有に向つて「求よ、君の志すところは何だ。」と問ふた。彼れは謙遜した調子で「されはでございます。私は地方六七十里、或は五六十里の小國に於て、私の小さな試みを實行して見たいと存じます。先づ私がさうした地方を三年かかつて、治めるといたしますならば、確實、與養にうんと力を入れまして、民の富を増加させ、教化の礎地を築きあげたいと存じます。が、禮樂を以て彼等を薫化することは、とても私の力に協ひませぬから、それだけは有德の君子に委ねたうございます。」と答へた。

孔子はまた公西華に聲をかけて「赤よ、君の考へはどうだ。」と尋ねた。公西華は平生、禮樂に心を傾けて、その方に相應の造詣があつた。今、冉有が禮樂のことを有德の君子に待ちたいと云つたのを聞いたので「それは自分の任だ。」と思つたが、子路のやうに大きく物を云はないで「私は宗廟の祭祀や諸侯の會合には、及ばずながら、相の下役をつとめることに努力しようと思ひます。」と謙遜した。

やがて曾皙が答へる番が來た。ところが、彼れは尙ほ無關心の體で、人々の話を妨げぬよう、そつと瑟を彈いてゐた。孔子は彼れに「點よ、君の志はどうだ。」と促がし立てたので彼れはすがすがしい絃の響きと共に瑟を傍らへ推しやつて、その志を述べた。彼れは他の三人とまるで考へを異にしてゐることを明かにして「何分、私は國を治めなどすることの出來ぬ愚かものでございます。」と云つた。そして暫く默つて、控へ目にしてゐるので、孔子は「そんなことは構はない。各自の志を率直に告白すれば、それでよろしい。」と勸ました。

曾皙は仕方なしに靜かな、しんみりした聲で「私は暮春三月

の好季に重苦しい綿服を軽快な新衣にぬぎ變へて、青年五六人、少年六七人を伴ひ、沂水の温泉に浴し、また雨乞台に上つて春風に吹かれ、少年たちと唱和してから家に歸りたいと存じます。それは私の平素の望でございます。」と述べた。曾晳の志はまるで功名の念を離れて、超然としてゐた。孔子はひどく感動して「君は誠に宜いことを云つた。私は君の言葉に最も共鳴する。」と賞揚した。それらによると、孔子は、その弟子たちの志望を聞くことを喜んだと同時に、一段高いところに地歩を占めて、窮通いづれにも處してゆく應機の心持を失はなかつた。

孔子がその弟子に對する愛情の濃かなことは顔回及び子路を失つた時、ひどく哀傷したことを見てわかる。孔子が七十一歳の折、顔回の訃を聞くと、氣絶せんばかりに慟哭して「噫天は私を亡ぼしたのだ、私を亡ぼしたのだ。」と續けて叫んだ。それは道の後繼者として第一に數へた少壯の顔回が孔子に先立つて世を去つたことは、道の亡滅を豫言するやうに思はれたからである。この前後、孔子はその妻に永別した、その息伯魚を失つた。其後に七十三歳の時、子路が衛で蒯聵の徒のために殺された悲報が來た。晩年、孔子は泌々、その衰へを自覺した頃に、前後幾度も悲みを重ねたことは、孔子の健康の上に宜い影響を與へなかつた。自分もやがて彼等のあとを追ふのだといふ、さびしい、やる瀬ない思ひが執念深く孔子を捕へた。が、孔子はその尊い使命に回顧して、強ゐて自ら勇氣付けた。彼れは死を恐れなかつたが、その道が中絶しないやう、それが永遠に傳はるよう、熱心に祈つた。それと共に孔子は述作に勵んで詩書を整理し、『春秋』を書いた。彼れが世を去つたのは七十四歳の春である。

孔子の死！

これほど深く私らの心を打つものではない。釋迦の死、クリストの死と同じやうに、私らの無限の感慨を與へる。が、在來の傳記はこの事について何も記してゐない。その病狀も、最後の光景もまるで傳へてをらぬ。私は貧しい想像の力によつて、孔子の最期を胸に描くよりほかに仕様がない。

孔子の死ほど偉大平和な死はなからう。孔子はその生涯のすべてを道に捧げたのだ。それがために最善の努力を死の一瞬間前まで續けたのだ。孔子は政治の開頭をしたあとでその道を千萬年の前に傳へるやう、詩書を纏め、弟子たちを育成した、もうするだけのことは、略ぼ爲し遂げたので死の前の孔子には何の思ひ殘すところがなかつた。が、顔回、子路の二人が孔子の最期に臨んで顔を見せずに草の下に眠つてゐることを思ふと、孔子も幾分さびし味を覺えたであらうが、孔門の四科十哲に數

へられた人たちは、大抵孔子の臨終に會した。これらの人々は或は一國の宰相となり、或は社會に有力な地步を占め、或は恩師の道をひろく四方に宣傳した。そのすべてが、孔子を父のやうに敬愛して、一人も背くものがなかつた。これに孔子の愛孫子思も枕頭に侍座して、祖父を見守つてゐた。そこに暖い、つつましやかな平和の空氣が漂うてゐた。

孔子の死は恐らく胃腸の疾へから來たのではないかと思ふ。これへ妻子らを先立たせた悲み、多年の心勞、粗糲が手傳つて、孔子の身を害ねたのであらう。孔子は割合によく衛生に注意したが、その漂泊時代は度々粗食を重ね、時には飢渇に悩み、その上、可なり不規則な生活を續けた。そのため、胃腸の病を得て、それが次第にわるくなつたのではなかつたか。

弟子たちは、孔子の病を深く心痛した。平生父のやうに思つてゐる恩師が冷めたい死の手に奪はれて、もう昔のやうに親しく慈訓を與へないであらうことを思ふと、彼等は堪らなく、さびしかつたにちがひない。それに思想界の有様、世の動揺、不安を思ふと、國の柱、人類の光となつてゐる聖者を失ふ悲みが深かつた。彼等は何とかして、師の生命を取留めて、今一年か二年は延ばさせたいと心に祈つたのであらう。が、運命は孔子を導いて、刻々、その最後へ導いてゆかうとした。

臨終の孔子はすこしも死を悲、怖みれる様子がなかつた、從容として、平生のやうに穩かに靜かに怡々たる色を顏に浮べてゐた。彼れは、はつきりした意識を持續して、弟子たちと快く話した。その聲は朗かに澄んで力があつた。氣分宜い時は、そつと詩を歌つて、弟子たちに聞かせた。そして彼が世を去つた後、弟子たちが仲よくして、道の宣傳につとめるやう、柔かた教訓した。かうして孔子は秋の日が靜かに大海のはてに殘照を輝かせて蒼波のうちに沈みゆくやうに、些の苦悶をも示さないで、平和に安らかに世を去つた。弟子たちは靜かにその溫顏を見守つた。

（七）

次ぎに私は孔子の日常生活を少しばかり描かう。孔子は平生、打くつろいで、和易、穩正の色を浮べてゐたが、何となく、犯し難い威嚴があつた。そして公私の禮儀については、それを混合しないで、はつきりした區別を立てた。故郷にゐる時などは、その學問、知識を人の前に誇ることをせずに力めて沈默を守り、控へ目にして、質朴、恭敬の姿を守つてゐた。が、朝廷に出ると、必要なことを一々はつきり述べて、澁滯しなかつた。而もそのうちに謹愼の態を示した。公人としての孔子の一擧一動には、ある一定の線があつて、その一詞も苟くもしない風が見えたけれども堅苦しい力へ流れないで、怡々として和氣が溢れてゐた。

孔子は平生、音樂を如愛した。孔子の故郷は音樂の國である。その素養は少年時代から積まれてゐたらしい。それで自ら磬といふ樂器を鳴らしたり、瑟を取つて歌つたりした。また琴を習

つたこともあつた。かういふ風で音樂に對する愛が深かつた。孔子が齊にゐた時、舜の樂音だと云はるゝ韶を聞いてその善美の樂律に魅せられ、三ケ月ほども肉のうまい味を忘れて、それを學習した、また孔子は周室の衰微につれて、音樂が廢れたのを嘆き、魯の音樂長に樂律の原理を說いた。それらを思ふと、孔子が「詩に興り、禮に起ち、樂に成る。」と云つた言葉に藝術教育の要義が開顯せられてゐるのを氣付かないではをられない。

孔子は飮食、衣服について淡泊であつた。それについて「粗飯を食し、冷水を飮み、寢るのにわが肱を曲げて枕の代りとするなどの貧乏さでも、わが眞の樂みは減じない。」と孔子は云つた。が、孔子にも多少の嗜好があつた。飯はよく精げたのを喜んだ。酒は好きであつたが、亂醉せぬほどに飮んだ。また薑は口や喉を爽かにし、毒を解くので、始終食べたが、度を越えないやうにした。孔子はかうして衞生に注意して飮食のために身を害ねるのを避けた。

孔子は衣服について多少の注意をした。色彩の上では、紺色、緅色、紅、紫の二色などを用ゐなかつた。前の二色は齊や喪にゐる時に限つて用ゐらるゝからであつた。紅、紫は女子にふさはしいが、男らしくないので避けた。そして夏は單の葛布、冬は皮衣を着た。そして孔子はその色の調和を重く見た。黑色の衣の下には黑羊の皮衣、白衣の下には鹿の子の皮衣、黄衣の下には、狐の皮衣を着用した。その居宅にゐる時、孔子は貉や狐の皮衣を常用した。

以上、私は孔子の輪廓をおぼろ氣ながら素描した。順序としてもう約束した紙數を越えてゐるので、私は極簡略に私の見解を約言したい。孔子の思想を一貫して、その根底となつてゐるのは仁の一字である。古來、幾百人かの學者が、仁について、各自の解釋を下したが、今も尙ほ要領を得ない。所詮、仁は唯仁といふよりほかがないのだ。それを愛の義に解したり、慈悲の意に引直したり、人道だと說いたりしても、仁の意義にぴたりと當てはまらぬのである。强ゐて云へば、至善の道とでも解釋すべきであらう。けれども廣く見ると、仁は眞善美の總稱でないかと思はれるやうな場合がある。

至善の道、乃至眞善美を根本生命として、その具體化によつて、社會、國家、民衆を救濟しようといふのが孔子の本願であつた。忠恕や博文約禮や克己復禮などいふことは、いづれも孔子の主持する根本生命の分出であり、また根本生命を體達すべき一方途である、最好方便である。孔子が詩歌、音樂の美を高調したのも亦根本生命の一表現として尊重した結果である。

孔子が以上の思想から展開した宗教觀、社會觀、政治觀、文藝觀、倫理觀などは、大體に於て、功利的である。そして常識以外に出ない。孔子は晩年に入つてから、いくらか哲學的思辨に耽つたが、やはり、一體の調子が常識を離れなかつた。けれどもそれは大なる常識であつた。それは體系化され、組織化されてゐないけれども、鋭い直覺の閃き、貸い體驗の結晶を見せた。

また功利的な傾きも程よき調和を得て極端に流れなかつた。

　孔子の宗教觀は往々不徹底のやうに見られてゐる。が、私一個の考へでは、寧ろ徹底したものでなかつたかと思ふ。『論語』に於ける言葉だけ見ると、孔子は天を説きながら、天とは何でるかを明かにしてゐてゐない。唯漠然と敬天の思想を披瀝してゐるだけだ。それに孔子は怪力亂神を語らぬとか、生さへ知らぬのだから、どうして死について知る事が來出よう、鬼魂談などは無用だと意を表明してゐる。またその口吻だけでは運命論者の傾きがある。孔子が、さうしたことを云つたのは、當時迷信がはげしく流行したので、彼れ自身は天について深く考へたけれども、強いてその問題を表面に差出さなかつたものと思はれる。孔子には、明白に強い宗教的情操があつた。天によつて、すべてが統一され、規制され、生命を賦與せられてゐる事を信じた。天人合一！それが孔子の思惟した絶對の妙境であつたのだ。かうした意味に於て、孔子の、宗教觀は一神教的色彩を帶びて、彼自身に於ては徹底してゐたと思はれる。

　孔子は政治觀の上で、明白に德本主義を執つた。人生を一貫する仁の意義と合致した道德的基礎の上に政治が築かれるに及んで、始めて正しい平和と幸福とが來ることを信じた。また孔子は實踐に於て、閑邪と利己とを排し、人性を至善に導いてそこに禮樂を中心とする共存、共榮の世界を開くことによつて、社會生活に新意義を生ずべきことを思つた。更に文藝觀に於て、孔子は仁に至る一道程としての藝術を尊重して、生の内容を豐かにし、個の生命を充實させる點に於て、文藝の使命と意義とを認めた。倫理觀に於ては、仁と忠恕とを目標として、その實現、その體驗、その向上、その努力を必要として、調和中庸を旨として、名分を正し、秩序を整ふべき事を主張した。

　その内容に深いところ、新奇なところはないが、穩健、中正の旨を得たところに普遍的價値を持つた。孔子が政治上、文武、周公の善政を理想としたことは、回顧的、守舊的の空氣を濃厚にしたと難ずるものがあるが、それは孔子の謙遜であり、一時の假托であつて、その責任は孔子にない。

　所謂、孔子の言説は社會衛生の先驅として人間學の原理、原則を示し、延ゐて政治社會に於ける、規範を創定したものである。それは老莊のやうに幽妙な思索の産物ではなく、又宇宙の根本義を究明した第一原理などに觸れてゐないけれども、しつかり現實の上に起つて、生の中核を把握してゐる。其言葉はすべて現實から抽出せられた滋味に滿ちてゐる。現實に執し、現實を尊重する現代人は孔子の一生及び其言説に於ける現實味に觸て、そこから生の新意義を展開し來るとは、必ずしも絶望ではない。

（附記）孔子の思想については茲に論語の一部を書いたに留まる。別に一論文を書いて細説する機を待つ。次ぎに『論語』を現代的に讀むには二宮尊德の『論語』解釋が最も參考になるであらう。尊德は孔子の言葉を一々百姓生活にあてはめて農民たちにもわかるよう、適切な解説を下してゐる。尊德は當時の新人だ。

南都ところどころ

岡田信一郎

弟を送つた私達の秋の旅にまだ三四日續いた。昨夜は徒らに感傷的になつて、夜深けるまで寢られなかつたが、初冬の雪と、晩秋の雨とを交へた夜來の寒さも、蒸氣暖房の寢室はさすがに暖かく、朝は快い睡から目覺めた。十一月十日は灰色の雲が低く蔽ふて、時雨して寒かつた。窓から目近に見える若草山も代赭色に黝んで、もう冬の色であつた。窓の直ぐ前にある一本の櫻は綺麗に紅葉して、すき透る赤褐色が美しかつた。此櫻紅葉の麗しさは、此宿に着いた時から不斷に私の心を吉野へと誘つた。此度の旅行では正倉院拜觀と、斑鳩や西の京の古寺見物とは變らない豫定であつたが、其他に必しも何處とは限りなかつた。室生へも、當麻へも、吉野へも、行きたかつた。併し少ない日限の事故どれか一つを選まねばならなかつた。吉野へは二十年前大學の建築科學生として行つた限りであるので、行つても見たいと思つて居た。昨年（今は一昨年）大震災の後、灰燼の内から甦して青葉を見たい。秋の錦も見たいと思ひ乍ら、果さないでいら／＼して居る時、香取秀眞君が吉野から便りを呉れた。其歌を今も忘れずに居る、「吉野山暮れ行く秋は紅葉ばのうつろいがてら木枯の吹く」香取君は鋳師の名匠であり根岸派の歌人である。私は悠々する香取君を羨んだ、此の秋も吉野の櫻紅葉は美しからう、特に南朝の遺跡を弔ふには、落花深きあたりより、或は櫻の落葉を踏み分けた方が適當ではあるまいか、等とも思つて居た。其處に此櫻紅葉の美しい誘惑を受けたので、私の心は度々動搖した。併し今日の荒天で女連れの吉野行は、病後の私には斷行しきれなかつた。自動車が通ふと聞いて室生へもと迷つたが、中將姫の檀像は妻の心を捉へて居たので、今日は奈良近郊の古寺を訪ひ、明日は當麻から、飛鳥、藤原の古京へと定めた。

新薬師寺

朝は先づ新薬師寺へと向ふ。寺は市の東南の外れ高畑町にある。淋しい町を行くと、舊い都を思はせる両側の崩れかゝつた築地塀は、依然美しい。秋は別して赤く實つた柿の木が、塀を見越して枝を張る。築地の崩れからは萱がそよぐ。小さい寺の薬師門傍の塀にからまつた蔦が美しい紅葉を見せて居た。新薬師寺は先年修理を了り、築地塀もさすがに崩れては居なかつた。車は東門に止る。併し参詣するものは、やはり南門に廻つて正面から入るがよい。

南門に立てば美しい建築がすぐ目の前に出現する。夫れは装飾もない眞の形態の美しさである。七間五面單層入母屋本瓦葺の、大きからぬ此建築は、殆ど何の装飾もない。組物も簡單な大斗肘木で、大きく突出した二軒の檐を受けて居る。正面の中央三間と背面中央一間と左右側面の各中央一間が扉である他、其他の間は皆壁で、櫺子窓もついて居ない。緩かに撓ふ屋根の流れの美しさ、低い軸部と屋根との程よい權衡、素朴なしつかりした構造、此等が数多の奈良の優れた遺例の中でも、此建築に特殊の美しい價値を與へて居る。東大寺の壯麗な、偉大な巨構を追想する時よりも、反つて此の小さい美しい建築に對する時に、奈良の建築家達を一層畏敬し、称讃する。一に唐朝の規模に準じた奈良の建築でも、此處にはもう明かに萬葉の人達の呼吸がふき込まれて居る。而して私は茲にしみ〲民族の誇りを自覺する。

此の建築を見るときに、いつも私は希臘の建築を聯想する。此の典雅整齊の美、優麗な風姿、且は彊健な構架の感は、決して彼の雅典アクロポリスの上に建つものに比して譲らない。權衡や、形態の美は反つて優れても感ぜられる。或は法隆寺の堂塔の柱のエンタシスや、雲肘木の麗はしい曲線を希臘の建築の細部に比較して、希臘的であると云ふ事がある。寔に此等の細部は美しい、併し其の全形は決してアクロポリスの祠堂のやうに典麗とは感ぜられない。寧此の小堂宇の方がより希臘的と見られねばならない。唐招提寺の金堂は其の吹抜きの前廊が、特に希臘の連柱式祠堂に似て、希臘的であるとも言はれる。誠に其の風姿も美しい。此等の建築の洗練された形態の美しさと、簡勁な構架の表現とを見るときに、いつも私は私達の民族の藝術的な特質を希臘人の特質に比べて考へる。

古來藝術的に最も優れたと定評さるゝ希臘人は、其の古代のエーヂ文化を基として、埃及や、波斯の種々な藝術を綜合して、雑多な材料から洗練して、小數の併し特に優れたものを仕

上げた。彼等の建築は殆とドリヤ式に限られて僅かにイオニヤ風の小變態があるばかりだ。羅馬はエトルリヤ、希臘、東方諸國の長を採り、短まで捨てずに、偉大な雜多なものを造り上げた。寔に土壤を讓らざる泰山の如くに其大をなした。私は日本の建築と及其の基く支那の建築とを比較して、希臘と羅馬との相違を想ひ起す。日本の建築家は小數の完全なものを成就した。此點で希臘人と同樣である。而して其の健かな表現も、洗練した手法も殆と同趣であるやうに思はれる。特に寧樂の工匠はドリヤの建築家イリチノスや、カリクラテスと比肩して耻ぢない名匠であつた。

今の此の新藥師寺の本堂は果して當初の本堂であるかに就ては、多少の疑問がある。新藥師寺は或は香藥師寺と呼び、聖武天皇の歳月に亘る御病氣平癒の御祈願の爲めに、天平十九年三月光明皇后が御創立あらせられた尼寺として傳へられて居る。創立以後諸大寺の列に加へられて皇室の御尊崇を厚くした。而して本寺は夙くから東大寺の別院のやうな深い關係で、今も東大寺の末寺である。初めは藥師金堂と東西兩塔、鐘樓、僧坊其他の諸堂が備はつたと傳へらるゝが今は南門を入ると右に鐘樓があり、左に地藏堂、香藥師堂と東翼とが並び正面に本堂が建つて居る。

本寺草創の藥師金堂は九間の佛殿と傳へられて居るが、今の本堂は七間五面である。此の相違と及今の本堂の内部が天井なく、極めて簡單な化粧屋根裏であつて、佛堂の體を備へない事から或は之は講堂であつて、金堂ではないのであらうとも考察されて居る。講堂でも、金堂でも、奈良時代の美しい優れた建築である事に變りはない。本堂の前に暫く停立して見惚れて居る間に、車夫が案内をして呉れたので、尼僧は本堂の扉を開いて、私達を請じて呉れた。

本堂の内部は極めて簡單率直の構架で、よく裝飾的構造の眞髓を捉へて居る。周圍一間通りを外陣とし、其内の内陣は正面五間、奥行三間で、内陣周圍の柱は總て獨立した露柱である。上に天井はなく化粧屋根裏で特異の構造を示して居る。尤も中世の補修になる天井が近年まで存して居たが、之は元來無かつた事が明かになつたので先年大修繕に際して撤去された。化粧屋根裏は長大な比較的細い大虹梁の上に合掌を作り、之に斗及肘木を載せ、それで棟や母屋を支へて居る。母屋束等を使用しないで極めて合理的な構架で、泰西建築の屋根の小屋構造と通ずる點がある。柱頂部の大斗や肘木等も極めて大膽雄健な木割で、簡單無造作であるが、裝飾的にも充分の効果を擧げて、しつかりした印象を與へる。三月堂の内部でも感じた事である

が、寔に天平の工匠達は、率直に、巧ますして、あるがまゝを示して直ちに人の心を捉えたのである。彼等の仕上げた仕事は、ゴシツクの工匠達のあの壯麗な穹窿のやうに偉大なものでは無かつたけれど、其の眞實さは同趣である。今の建築家は屢々構造の眞實とか合理とかを口にしながら、苟合と妥協の範圍を出てない事が多い。今此の天平の些細な堂宇に對して、構架の眞實と、形態の美と二つながらに敎へらるゝ處が多い。新藥師寺の内陣の柱には、藤原時代の卷柱の裝飾繪のやうに、寶相華や、佛菩薩の繪が描かれて居る。鎌倉時代の作とされて居るが。あまりはつきりは殘つて居ない。

本堂の須彌壇は圓形で、其中央に本尊藥師如來の座像が安置され、その左右に木彫十一面觀世音立像が各一體、と木彫四天王の像とがあり、此等を周つて圓形に塑像の十二神將が配置される。本尊は木彫で高六尺余、總體一木造で、彩色は今は殆んど全く剝落して、眞つ黑に煤けて見える。光背には藥師の化佛六軀が付いて居る。此の佛像の製作時代は、平安朝の初期、所謂貞觀時代と推定されて居る。肉どり豐かに刻まれた、肥滿した堂々たる姿體と、顏面の鋭い大きい眼とは、嚴然とした强い感を與へる。今奈良の博物館に陳列されて居る、東大寺木造彌勒菩薩の坐像、俗に試みの大佛と言はるゝものと同一系統に屬する作品である。佛壇を圓形に圍る十二神將は、等身の塑像で、止利佛師作との寺傳だが天平末期の作とされて居る、あんまり誇張した觀のない、好い佛像である。

神藥師寺では、此等の諸佛よりも、もつと私達を惹きつけるのは、香藥師如來の立像である。之れは二尺程の白鳳期の金銅佛だが今は庫裡脇の少さな藥師堂に安置されて居る。暢やかな圓滿な面相で、豐滿な姿體は柔かい曲線の流麗な衣紋で包まれて居る。柔かい情緒を罩めた美しい佛像で、尼寺の本尊としては、本堂の藥師よりも反つてふさはしい氣がする。

大佛殿前銅燈籠

新藥師寺に參詣して居る時から、初雪に冷えた初冬の寒さが身にしみて酷しいので、旅宿に戻つて、重ね着して約束の戒壇院に向ふ、實は昨夜ホテルで會つた奈良縣技師の岸君に、戒壇院四天王拜觀の件を賴んで貰つたら、今日午前東大寺事務所に來れば案內するとの事であつたので、先づ東大寺南大門内の事務所に向ふ。酷しい寒さに、まだ役僧の出勤が無かつたので、待つ間の暇を惜しんで、大佛殿に參詣する。中門の間から透して見た東大寺大佛殿は、さすがに壯大である。美しさは無いが、其の偉大な質量から、莊嚴の氣は生れる。銅瓦を葺く圍らした

前庭も、廣漠たる所がふさはしい。其の中に、大佛殿の正面に立つ金銅の燈籠のみ獨り美しく際立つて居る。古い社寺では本堂の正面の中央に一基の燈籠が据えられるのが通例で、其多くは美しい石燈籠である。三月堂でも、唐招提寺でも、當麻寺でも、皆有名な美しい石燈籠が建つ。石燈籠は永い時代の風雨に磨滅して、或は其の古色のために一層美しく見える。併し此の大佛殿の燈籠は金銅で、形も又大佛殿に釣り合つて大きい。而して其美しさは古色の助を借りて美しいのではない。作其物が美しい稀世の珍品である。

大佛殿が燒け、大佛が熔け、總て其の舊容を失した間に、獨り此の燈籠だけは、或は其燦然たる鍍金の影を失ひ、或は其の一部は後世の補作を交へては居るけれど、總體に於て殆んど舊態を失せず、在りし昔の美しさを傳へ、當初の大佛殿の壯麗豪華を偲ばせる樣子となつて居る。此燈籠は高一丈五尺餘、八角形、金銅製である。其の火舍は八角形で比較的大きく、高さ五尺七寸、蕨手のついた八角形の屋根を頂き、上に火焔のついた寶珠を戴せて居る。下部は八角形一重、八棱形一重、蓮華一重の各座、と八角形の棹と、蓮華一重、八棱形一重の各部から成り立つて居る。總體の形態は落付いた堂々たる趣を示して、巨大な大佛殿の建築に壓倒されない重味を持つて居る。火舍の扉は美しい薄肉の鑄物である。八角の火舍の東西南北の四面の扉は兩開きで縦長の菱格子に寶相華唐草をあしらひ、一扉に二匹宛の獅子を現はして居る。(北面二扉は寛文の作)八角の内、東西南北を除いた他の四面は、各一枚扉で、菱格子に寶相華唐草を附し、眞中に大きく音聲菩薩像がついて居る。此の菩薩の薄肉の鑄物の豐艶な肉取りや、褶袖、天衣の優麗、獅子鑄物の雄大な感、唐草文の優美は、天平時代の美術工藝の精華である。下の棹の八面は蓮草文樣の上下縁をとり、各面に線彫で經文を彫り付けてある。

此燈籠は本邦に現存する最古のものとして知られて居る。佛殿前の獻燈は古來行はれたので、藥師寺金堂前にも在つた事が記錄されて居るけれども、それは殘つては居ない。「六角、一面左右扉半出金剛力士形一、五面皆半出高聲菩薩形一」とあればやはり此燈籠のやうに菩薩像を浮き彫りにしたものに想像される。

私は先年嘗て此の燈籠の音聲菩薩浮彫の扉に示唆を借りて、或る納骨堂の青銅の扉を造つた事がある。美術學校教授の渡邊香涯君の下繪で、同じく美術學校の香取秀眞君が、自ら原型を造つて鑄造して呉れた。美しく出來上つた扉は、一丈六尺巾三尺五寸で、此の燈籠の扉より遙に大きかつた。腰唐戸の形式で腰の鏡板には薄肉の獅子を現はし、扉の上部はやはり菱格子に唐草をあしらひ、天女の像が鑄出された。それは此奈良の燈籠の

扉とは、又別趣の味で、大正の工藝の優品として、後に遺るに違ひない。

此美事な扉を持つ納骨堂は、冬は雪深き、信濃川の河沿ひの丘の中腹に設けられた。丘は船を伏せたやうな其形から、船岡山と呼ばれて、其頂上には維新の際、官軍として長岡藩の討伐に向ひ、信濃川の沿岸で戰つて陣沒した薩長人士の墳塋があつた。其處は信濃川の大きい流を眼下に見て、遙に上越の國境に立つ峻山に對して、實に美しい景觀である。此丘の中腹に某氏一族の納骨堂が造營され私が其設計意匠を作り百工を督した。納骨堂は地下室で、地上には單に五輪の塔を置いたのみである。地下の室は鐵筋コンクリートで築造され、周圍を磨き出した御影石で築き、數十の納骨函を造つた。其の堂の正面は純白の大理石で內陣莊嚴を造り、阿彌陀佛の座像を安置した。像は奈良美術院の新納忠之助氏が各古寺の彌陀像を參酌して、新しく刻んだものを、香取君が鑄造した金銅佛である。藤原風の美しい蓮座に座して、光背まで麗しく鑄造された。須彌壇は雪白の大理石で、中尊寺光堂の壇の裝飾極樂鳥に基いて、浮彫の極樂鳥を刻んだ。香瀧氏の下繪で、彫刻家の武石弘三郎君が鑿を揮つた。純白の須彌壇を飾る鍍金寶相華唐草文の金具は香取氏の作で、白と金と映じて美しい光彩を放つた。彩光窓はステーント・グラスで、惠心僧都筆と傳はる高野山の聖衆來迎圖の右端にある風景を現はし、小川三知君苦心の作である。私の意匠設計は拙くとも、かゝる大正現代の名匠達の苦心協力になつた此納骨堂は、大正の工藝的作品の一異彩と信じてゐる。

堂が出來上り、佛體が奉安されて、開眼供養の其の日、淡紅の花崗石柱と、白色の大理石の莊嚴の中に、金銅の阿彌陀佛の光まばゆく、香煙縹緲としてたなびく中に、衆僧の讀經が、石室に響いて聖つて聞こえた時には、不信心の私も何となく有り難く感じた。而して夫れよりも、自分の描き設計の下に當代の有數な工匠達が協力して成就して與れた大きな光榮に醉つて、建築家の功業を心から感謝せずには居られなかつた。私は今更に、此東大寺の大佛殿が出來上つた時、聖武天皇の御歡感は申すも畏いが、建築家工匠達の榮光と歡喜とを想像する事が出來る。寔に其藝術的な作物の成就した時、建築家の光榮と、滿足とは大きい、併し其勞苦は之を償するものがある。

大佛殿

今の大佛殿は元祿年間に建立されたものを、明治に大修理をしたもので、國庫の補助と、民間の寄附の下に明治三十六年七月一日修理の工を起し、大正二年六月卅日に竣工した、落成後

まだ日も淺く屋上の鴟尾の金色も目映ゆい。大佛殿修理の工を起す前に大佛露佛、非露佛の論爭がかなり喧ましかつた。高山樗牛を始め美學者や、文藝に携わる諸氏は、露佛說で、修理を要なしとした。妻木博士や伊東博士を始め建築家達は世界唯一の此の木造の大建築の壞滅を惜んで修理を主張した。當時若年の私はまだ建築に志しては居なかつたが、其等の論文の或るものを讀んだ事を記憶する。今の大佛殿は莫大な費用をかけてまで保存する程の優良な建築ではないかも知れないけれど、今の大佛も堂宇を壞してまで露佛として保護する程の優れたものでもない。今の東大寺の大佛の問題を離れて、大佛が露佛である可きか、然らざるかの根本の論議では、私は勿論露佛に賛成する。併し此の大佛殿の現實の場合では、私も建築家として、やつぱり大佛殿の修理に賛成した事であらう。

大佛は小供の時、話に聞き繪に見てあこがれた大佛さんの方がもつと藝術的である。僅かに當初の遺影をのこす其の蓮花座花瓣の彫刻も今日は見る暇がない。其尊前に飾られる、大佛殿落慶の儀に際して、古式に造られた法座諸調度の類も、今の大佛殿内では、餘りふさはしく似合もしない。堂も佛もあまり感興をひかなかつたが、堂の一隅にある奈良時代創立當初の東大寺復舊の模型は、當時の壯觀を想起せしめる。今の大きな堂宇を見、又此の模型を見て、古昔の堂塔門廊を具備した七堂伽藍を想像すると、其の偉大な規模、雄麗な大觀は幻のやうに彷彿する。小車に譬へられて輪輻は絕えず囘る。國家鎭護の四天王護國之寺も、或は建ち、或は燒けた。治承の役に堂塔の炎上した壯觀は、去年の震火災の火雲により、目のあたり思ひ起される。私は一方に劫火をのろひ乍らも、一方に其の悲壯な光景まで聯想した。

東大寺の創立は聖武天皇の朝、天平十三年三月二十四日、鎭國の爲めに、金光明最勝王經と妙法蓮華經との教義によつて、國分僧寺と同尼寺、即金光明四天王護國之寺と法華滅罪之寺と造立の詔があつた事に濫觴し、又天平十五年十月十五日、盧舍那佛大像造立の勅願があつたことが合一して、此の壯大な大伽藍の偉觀が生れたのである。大佛造像については先づ近江國紫香樂の地が開かれたが、後奈良に遷り、爰に東大寺は今の現在の地に大倭國金光明寺として、總國分寺として建立されたのである。造營の事漸く運んで、天平勝寶四年四月九日の大佛開眼供養によつて、此大偉構が完成したのである。此勅願の東大寺は一個の寺院たるに止まらない。佛教を本とした、政教一致の當代の國家組織の觀念の爲めに、文化史上極めて重要な地位に立つて居る。天平の文化に聖武天皇を巡つて發展をする、而し

て東大寺は實に此文化の具體的の代表者であつた。平安朝となつて、文化の中心が京都に遷つてからは、東大寺も多少の消長はあれ昔日の偉觀はなかつた。夫れでも法城を護る衆徒の一團は、政治的にも、後には武力的にも、或る勢力を維持した。併し廢滅は遂に此の大伽藍を脅かした。治承四年十二月二十八日夜、頭の中將重衡の率ひた平家の軍卒の兵火は、東大寺を燒き併せて興福寺を燒いた。

平家物語は傳へる「夜軍になつて、大將軍頭の中將重衡、般若寺の門の前に打立つて「闇さは暗し、火を出せ」と宣へば、播磨の國の住人、福井の庄の下司、次郎太夫友方といふ者、楯を破り、松明にして在家に火をぞかけたりける。頃は十二月二十八日の夜の、戌の刻ばかりの事なれば、折節、風は烈しく、炎本は一つなりけれども、吹き迷ふ風に、多くの伽藍に吹き懸けたり。」と而して「東大寺は、常在不滅、實報寂光の生身の御佛と思し召し準へて、聖武皇帝手づから親ら瑩き立て給ひし、金銅十六丈の盧遮那佛、烏瑟高く現れて、半天の雲に隱れ、白毫新に拜まれさせ給へる滿月の尊容も、御首は燒け落ちて大地にあり、御身は鎔き合ひて山の如し。八萬四千の相好は、秋の月早く五重の雲に隱れ、四十一地の瓔珞は、夜の星、空しう十惡の風に漂ひ、烟は中天に充ち滿ちて、焰は虛空に隙もなし、眼前見奉る者は、更に眼を當てず、微に傳へ聞く人は、肝魂を失へり。法相三論の法文、聖教凡て一卷も殘らず、我朝は申すに及ばず天竺震旦にも、是れ程の法滅あるべしとも覺えず。優塡大王の紫磨金を磨き、毘須羯磨が赤栴檀を刻みしも、僅に等身の御佛なり。況んや、是れは南閻浮提の中には、唯一無雙の御佛、長く朽損の期あるべしとも思はざりしに、今、毒煙の塵に交つて、久しく悲を殘し給へり。」と、定に源平二氏の爭ひの傍杖で、さしもの偉構が灰塵になつてしまつた。

平氏の滅亡につぐ源氏の興隆は、再び本寺の復興を齎らした。天平の文化の遺構は焚けたが、鎌倉の文化を體現する建築が之れに代つて出現した。天平の文化は唐の文化を祖述するに對して、鎌倉の文化には宋朝文化の影響が著しい。政治上では源氏の出現に對して、文化の上では、宋の餘風が色濃くなつた。建築の方面で著しい事實は、從來の奈良の建築から平安朝の建築に次第に展化した和樣建築に、新たに唐樣、天竺樣の新式が加はつた事である。唐樣は支那から新たに禪宗と共に渡來したもので、主として新しく建立された禪刹の建築に行はれた。唐樣がかく新宗教と隨伴したに對して、天竺樣は多く日本の舊宗教の寺院に入つて、在來の和樣と並存した。東大寺の如きは其の最も著明な例である。新造の大佛殿も南大門も此の制に

よつて天竺様の手法である。鐘樓や三月堂の禮堂の如きも此影響を受けて居る。

　天竺様の最も特異なる點は、其の組物に於てゞある。主として挿肘木によつて組物を構成する事である。此の手法は特に大佛殿のやうな大建築に於て、其効果を發揮する。大建築に於いて、巨大な柱を建て、大きな軒を支へる場合に於て、數段の挿肘木を重ねると斗拱の構架は具合よく解決される。大佛殿や、南大門に於て特に此の天竺様の適所に使用されたのを感ずる。其故に天竺様は或は大佛様とも稱されるくらいである。此の從來に無かつた新手法は其れが東大寺の諸建築及山城醍醐寺經藏、播磨淨土寺本堂等、俊乘坊重源が關與した場所に於てのみ使用されるが故に、或は重源が渡宋に際して將來した新手法が、日本に特殊の發達をしたものかとも考察されて居る。支那に於ける實狀に見ると、挿肘木の制は南支那に行はれる、蓋し南宋の影響によるのであらう。

　東大寺の再建は後白河法皇の叡願と、五畿内及七道諸國總勸進重源上人の努力と、及頼朝の後援によつて成就した。治承五年六月廿六日には造寺官が任ぜられ、養和元年八月には重源が勸進を始めたと傳へられる。かくして今遺る南大門は正治元年六月に上棟された。鎌倉時代に建立された此第二次の大佛殿もあまり長くは傳はらなかつた。永祿十年十月十日、彈正少弼松永久秀の兵火は、大佛殿及諸堂、廊、門等を焚き、大佛の佛頭は三度地に墮ちた。今度は治承の時と異つてすぐ再建の運びにも至らなかつた。佛頭は僅かに銅板を以て假に修補せられたけれど、夫れは露佛のまゝ、猶百二十餘年を過されればならなかつた。新らしい大佛殿は公慶上人の功業により元祿元年四月二日經營を始め、寶永二年四月上棟し、寶永五年六月に落慶した。此れが今に殘る大佛殿である。而して此の造營に際しては鎌倉時代に見たやうな、文化の大轉機に際會しなかつた、從つて建築の新手法が生れ出づる機運も無かつた、大佛殿は、中門、廻廊と共に、燒殘つた鎌倉時代の南大門の手法に則して出來上つた。其新しい變化は徳川建築の通弊に基づくものが多い。而して元祿の再建に於ては大佛殿の規模は著しく縮小された。其の間には約三分の二に縮小され、面積は千三百餘坪から八百七十坪ばかりに減少した。其の美しさに於てばかりでなく、其大さや威容に於ても比較にならぬ程、小さく成つた譯である。加之、堂塔の配置、其他の規模も今は全く舊態を止めては居ない。併しそれでも木造建築としては世界一である。

戒壇院四天王

再び東大寺の事務所を訪れたら、もう役僧も出勤して、雛僧に案内を命じて與れた。戒壇院は大佛殿の西二町許の處に、土塀を圍らした構内に建つてゐる。天平時代に於て、佛教史上意義ある一事蹟は、戒律制度の整備である。夙に佛教が我國に傳來して以來、此時代までに早くも百五十年の歳月を經て、歷朝の宮室並に臣下の崇仰の下に次第に興隆したけれど、戒律授受の制には猶大きな缺陷があつた。此の缺を滿すために師を迎むべき旨の勅命を受けて、聖武天皇の天平五年四月に僧榮叡、普照の二人が遣唐大師多治比眞人廣成に從つて入唐した。時に唐玄宗皇帝開元二十一年である。玄宗の天寶元年十月此の二人は楊州龍興寺の大德鑑眞に我聖旨を傳へ、東征を乞ふた。當時鑑眞は既に名僧として衆庶の尊崇を受け、授戒の第一人者で、道俗の歸依するもの多く、授戒大師と呼ばれた。鑑眞は此の聘招に應じ翌年十二月僧衆八十餘人を率ひて東征の途に上つた。此の名僧が遙る〳〵の東上を諾したのみならず、非常な困難を犯して此の企圖を果した事は、如何に聖武天皇の聖旨が厚かつたか、又鑑眞の弘法の熱心が強かつたかが窺ひ知られる。鑑眞の東征は決して安らかに成就しなかつた。先づ其の寺を出づるには、歸依した衆庶に阻まれた、海に浮ぶと暴風に企圖を覆された、斯くして十餘年の間數次の企圖と失敗とが連續した。夫れは東征傳に記載されて殘つてゐる。

鑑眞は遂に日本渡來の願望を捨てなかつた。天平勝寶五年の十一月、我が遣唐使が歸朝するに際し、此に從つて渡來し、翌六年正月十六日鑑眞、法進等八人は入唐副使大伴宿禰古麿に隨つて、漸く我國土を踏んだ。二月四日奈良東大寺に入つた。而して爰に天平勝寶六年四月五日、東大寺盧舍那佛尊前に戒壇が築かれた。先づ聖武太上天皇は沙彌勝滿として御登壇あり、親しく鑑眞等十師より御受戒遊された。かくして日本佛教界の缺陷が滿されたのである。次で光明皇太后、孝謙天皇の御受戒、さらには沙彌四百四十餘人への授戒も行はれた。五月一日には戒壇院建立の宣旨が下され、天皇御授戒の戒壇の土を以て、大佛殿の西に地をトして造營が行はれた。今の戒壇院の場所が之である。翌年天平勝寶七年九月に成り、十月十三日大會が行はれ、十五日その新壇上に授戒が勤行された。斯くして東大寺戒壇院が成就したのである。やがて天平寶字三年八月招提寺が出來上ると、其處にも戒壇が建立され、又次で天平寶字五年、勅によつて、下野藥師寺、筑紫觀世音寺に同じく戒壇が建てられ、當時の日本佛教界は四戒壇によつて守られた。併し猶東大寺の戒壇は最も重視された。

始め東大寺の戒壇院はその壇上に多寶塔と守護の四天王像と

を具へた戒壇堂と、及講堂と、他に軒廊、廻廊、及戒師等の宿房等から成立つてゐた。然し其後數回の火災に罹つた。治承四年平氏の兵燹と、文安三年の火災と及永祿十年七月二十三日松永久秀の兵火とに、戒壇院は三度灰燼となつた。今の戒壇院の建築は慶長七年に起された假堂を、慧光和尚の功業で享保十六年に補正したもので、建築としては、五間四面重屋のあまり優れたものではない。

戒壇堂の内は一面の壇で、壇上には、多寶塔一基を置き、四隅に壇上鎭護の四天王像が立つ、之れがすばらしく優れた佛像である。私達は雛僧に案内されて堂内に入つたが、堂内はガランとして塵だらけで、空き家へ入つたやうた感がした。大佛殿の間近でも此處へはめつたに訪ふ人もないと見えて荒廢して居た。それでも横の入口の處には上草履が、用意してあつた。戒壇は内陣の全體を占めて、廣いもので、其中央に寶塔がある。壇の四隅に四天王が内側を向いて立つて居る。壇上へ登ると、低い臺の上に邪鬼をふまえて立つ等身の四天王と殆んど肩を並べて立つ關係になる。委しく見やうとして像のそばへ立寄ると、薄暗い堂の中ではあり、寫實的な等身の像は生きて居るかと思はれて、不思議な感になる。名作を見つめて、吾知らず呼吸を止めると、像の胸が鼓動して居るかにも感ぜられる。實際此の四天王は見る人の息を止める程の名作である。

此像は等身よりやゝ小さい塑像で、甲冑袴靴等を裝ひ、足下には邪鬼を踏んで立つ。塑土は總て雲母地にして上に朱、綠靑、紺靑、褐等の岩繪具と金泥、截箔とで一面に彩色され、手や顏等の内部も色どられた上に、墨で毛描きして居る。瞳は黑燿石を嵌入して、增長天や、持國天は大きく見開いた眼から、廣目天や、多聞天は僅かに半眼に開いた眼の底に、鋭く見透すやうに光つて居る。其の持物と臺座とは後代の補修になるものである。

塑像の技法の遺存する最古のものは、法隆寺五重塔の檐を取りまく、群像で、此れは和銅四年に作られたと知られて居る。其後塑像は屢々造られ又其の遺品も少なくない。次第に修練され圓熟して、遂に此の像の如き名品を出す迄に至つたが、此の技法は天平に於て大に榮えたけれど、奈良朝と終りを共にして其後あまり流行を見ない。鑄銅や、木彫と、及同じく天平に流行した夾紵像等の技法とは別趣の特徴を持て居る。今日の歐洲渡來の彫塑と同理で、材料の取扱が比較的容易で、技法が自由である。從て作品は、デリケートな、優美な、柔味のあるものが作り得らるゝ。天平の塑像では、寫生的に發達して行く當代の傾向と、塑像の自由な技法とが合一して、優れた作品が現は

れた、其の隨一が此の四天王像である。遂には寫實と、及天平に完成されて來た類型化との渾然たる溶合を見る事が出來る。希臘の彫刻と其現はれかたは別趣ではあるが、根本に共鳴する點が認められる。

此の四躯の像の各には、自由の變化があり且、其の間には類型的な統一もある。形象の正確と、釣合の整齊と云ふ大極からも、鎧や衣裝の細部に於ても、感心させられる事が多い。特に此の像を見る誰でもを惹きつけるのは其顏面の表情である。其處に怒りと、力の表情の下に、活き活きとした生命と緊張された意力と、が押さへられつゝ溢れ出るのを明瞭に感ずる事が出來る。其爲强烈な雄大な氣が漲り立る忿怒尊像の陷り易き缺點、誇張にすぎて、時としては滑稽にも近い奇怪な表情は全く認められない。此の四天王の忿怒は私達の父や伯父の怒りであつて、奇怪なる鬼神の憤りではない。其故に純眞の畏怖、恐敬、尊崇の感も湧くのである。天平の彫刻家は、其の建築家と同様に巧ますして自然を率直に見た、而して其の建築には後代に見るやうな、虚僞な虚飾や誇張がないと同じく、其の彫刻にも謙抑の氣が溢れた。此の四天王の踏む天の邪鬼も、單なる脚下の裝飾ではなく、其の踏まれ倒れた苦悶の狀態に、四天王摧折の力を示して、之れが爲に天王の威嚴を益す事は尠少ではない。四天王の甲冑や裝身具や、其の上に施された文樣は當代工藝の一端を示して、私達を教示する所が多大である。此の如くにして此の像は、優品に富む天平彫刻の中でも、特に完璧であり、傑作である。

硯阿居士の墓

戒壇院を辭してから、東大寺事務所に相對する眞言院に硯阿居士の墓を弔した。眞言院は今東大寺の圖書館になつて居る。其庭前に大きな面白い形の墓がある。私は再昨年此の墓に模して、東京の某氏の墓を青山に建てた因縁から、何時か此の墓を訪わうと豫てから期して居た。奈良の新納氏から此の墓の寫眞と、略圖とを送つて來て、同氏の知人某氏の墳墓を青山墓地に建造する事を囑して來た。其形は安定で、風雅で、非常に面白いので、私も大に乘氣になつて建設に盡力した。墓石の下には、鐵筋コンクリートで小室を造り、其中に銅の納骨壺を安置した。壺と錢原の鑄銅紋章とは香取君が作つた。私は又某氏の紋章三つ巴に象つて、袈裟形にならつて、巴形の水鉢を造つたりなどした。今其の本歌に詣づるのである。

墓は數段の段石の上に方形の石を置き、其上に饅頭形の自然石を置いて墓とした。現代の普通の墓石は段石の上に割合に高

い竿石を建て、之を墓標とする。形としては安定の觀もなく、又永久的な感じも與へない。然るに此墓は極めて安定な形で、然も割合に巨大であるために、永遠的な感を與へて、墓石としては適當な考案である。又頂上の自然石も和らかない感じを與へ風雅に見える。方形の塔石の正面には圓相を劃して、自醉菴觀阿居士之墓と刻してある。他の三面には墓碑銘や、墓表が刻してある。銘は自選で和氣行藏の書である、墓表は抱一上人の書である、共に婉麗はしく刻まれて居る。

觀阿道人は、芳村太郎兵衛、號を物外又は指月と稱した。文政、文化の數奇者であり、好事家であつた。而して家には古書畫、珍器を多く襲藏して好事を以て世に聞えた。後三十四才の時、出家して北花車に庵を構て、自醉と名付け、又樂此軒と言つた。其出家する時、家財珍寶を皆悉く友人に贈與して、たゞ俊東坊重源の親書になる化緣簿一冊を珍藏して、身を離さず愛護した。此の化緣簿こそは俊東坊重源が、東大寺再建をはかり、大勸進の號を賜はつて、四方を募化した所謂勸進牒である。墓表には「實希世之珍而價當連城」とある。時の東大寺の公般上人、之を聞いて大に懇望して千金で之を購はうとしたが、觀阿は、此勸進牒を寄納して、永く東大寺に保存した方が適當であると考へて、上人に贈つて、其家がやはり大和國から出た因緣により、東大寺中に、少許の地を得て交換せん事を申し出した、「上人感其志與闔山僧許乃於俊東坊道蹤之傍劃諸藏地以賜之、又作換帳一通以付與之」其地に此墓が出來たのである。其銘は自撰し其墓表の撰は龜田興に、書は抱一暉眞上人に托した所を以て見ると、此墓の意匠はやはり、彼自身の考案から出來上つたのであらう。墓表の結句は「嗚呼道人亦可謂奇士矣」とある、定に然りと言はざるを得ない。此墓はあまり知られて居らぬけれど、南都を訪ふ好事家の一度は見る可きものであらう。

唐招提寺

遲く晝食してから西の京に向ふ。道は再昨日法隆寺へ行つた途である。今日は雨雲が一層低く、時に微雨とさへなつて、風は朝から續いて寒かつた。私達は再び唐招提寺の南門に立つた。松の疎林の中を透して見る此の金堂の建築は、やはり美しい。屋根が急勾配で重すぎる等との批難が下されるけれど、均齊の典雅な形に、クラシカルな情緒を罩めて、麗はしく建つて居る。屋根の曲線も軒の反りもやつぱり美しい。重い屋根には力強さと同時に、爽かな輕さがある。降り棟の反りと、軒先の反りとが集合する屋根の、四隅の先端には、工匠の苦心と、拔

術の神秘が潜んで居やう。薄暮に見た時と違つて、此建築に特異な、前列の離れた連柱が、希臘祠堂の前廊の柱のやうに浮き出して後に深い影を宿して、一層立體的にしつかりと見える。實際に陰影の問題は、建築美の上でいつも重大な要素である。近代のコンクリートの建築では、多くの建物は、平面で取り圍んだ四角な固まりに過ぎない。而して壁體が薄いために、特に薄つぺらな感が伴ふ。幾何學的に言へば、面で圍んだものは立體には違ひないが、藝術的には之れでは立體の感は浮ばない。此點で建築には色々な面の要素が移入されて、もつと彫刻的な、即藝術的に立體的である外觀をもつ事が必要である。同時に陰影の問題が研究され、或は深い影がやどり、或は淡く流れ、輕くかすめて、建築がもつと立體的に深味をもつ事が肝要である。深く澱んだ影の中には久遠もある。安靜もある。神秘も宿る。淡く漂ふ陰には、輕快もある、明暢もある。而して其等の變化と、流動とから建築の生成の氣が浮き出して來る。近代の眞つ四角な建築が、もつと彫刻的になると言ふ事は、同時にもつと多趣多様の陰影を宿すと云ふ事になる。泰西の建築でも、其優良なものは屢々陰影によつて活かされて居る。クラシツクの或はルネサンスの、又はゴシツクの建築でも、陰影は絶えず大きな働をして居る。又最近の近代建築でも、微妙な影の働きに、成効の秘鍵を握つて居るものも少くない。

日本の建築は、深い軒の出が澱んだ影を宿すのと、屋根の曲率のある勾配が、微妙な陰の變化を與へるので、建築に和らか味が多くなる。而して日光まばゆく照る時には、此の深い陰影が、あまりに強過ぎる事もあるが、散光に照らされて穩かな陰影がたゞよふ時、日本の建築は、泰西の建築の企て及ぶ可からざる落付を示す事が多い。唐招提寺金堂の連柱の前廊は、日本に唯一の例だが、此點で又唯一の成効を收め得た。日の照る時には此處に陰影の面白い戯れがある。夕日が西に廻つて、生駒の山に落ちかゝつて、八つの列柱が吹き放しの壇上に各々の影を投ずる時、其興趣は絶頂に登る。今日のやうな曇り日にも、深く淀んだ和かい影は、此の美しい建物に一層の深味をもたせ落付きを與へる。而して神秘の香までたゞよふやうに思はれる。佛殿として此の又なき意匠が後代に遺らずして、單り此堂のみで終つた事は不思議にも、又遺憾にも思はれる。

軸部と屋根との關係も優良な釣合をもつて居る。建築の成功の最も肝要な要素は總恰好である。之れが總體の釣合に基く事は云ふまでもない。天平の工匠達は此の要綱を逸しはしなかつた。其上に細部に關する注意も驚く可き細心で施工された。新藥師寺本堂と同じく、比較的低く長大な軸部を、突出した深く

蔽ふ軒と、緩かな勾率の屋根とで蔽ふた姿態に、希臘の神堂にも比肩す可き、端正典雅な麗しさを持つて居る。希臘の工匠達も藝術的に敏感である事をもつて知られてゐるが、天平の工匠達も、鋭敏に働く頭腦と、素朴な手腕とを持つた。此點で私達建築家は、大に反省しなければならない。器用な腕と、薄つぺらな頭腦とをもつた者は、先づ其の頭腦を啓發して、技法の謙抑を心がけねばならない。唐招提寺では正面の七間の柱間でも、皆同一間隔には割付けられなかつた。新藥師寺では中央の間が最大で、左右が小さい。此處でも、中央が大きく左右が次第に近接して、此用意が大きな屋根と支ふる軀體との力の關係を、具合よく表現する。大きい軒を受ける三手先の組物も、力強い尾棰を使用して構造的なもので、後代の斗拱のやうに單に装飾的なものでなく、太い柱に相應する。天平の工匠達の使つた細部の手法は、數多くはなかつたけれど、其表現には無限の力が籠つて居る。屋根の隅にした所で、軒下から仰ぐ隅木は、眞隅に突出して居るが、屋上の降り棟は振れ隅になつて屋根の上と裏とが違つた貌になつて居ると云ふ困難な施工を推行して居る。而して南北の勾配を緩かにして、側面での屋根の釣合を具合よくするに大なる效果をもつて居るが、かゝる細心な遣處は私達にとつては無上の教訓である。斯くて此の金堂は、其規模に於ても、其重要さに於ても、其出來榮えに於ても、今に遺る天平建築の、最優秀なるものの一つである。私は新藥師寺の本堂を、化粧をもせぬ素朴な、天平の美しい少女にも比して特に愛好するが、夫れに比すれば此堂こそは、莊麗であり、典雅端正であり、淑女にも譬へて敬愛せらる可き、天平随一の代表的の建築である。

抑當唐招提寺の創始は天平寶字三年八月、特に勅旨によつて、新田部親王の舊宅を、大唐鑑眞大和上に賜ひ、此處に戒院を起し、戒壇を設けた事に出來する。天平寶字七年五月、開基鑑眞遷化したが、諸弟子相傳へて、歴代朝家の庇護の下に、堂塔佛像次第に具備し、南都の一大寺となり、東大寺の戒壇院、下野藥師寺、筑紫觀世音寺の戒壇と並び立ち、特に鑑眞を開基とする關係上、律宗根本の道場として重きを爲した。天平時代には、金堂、羂索堂、不動堂、大日堂、彌陀堂、地藏堂、食堂、經樓、鐘樓、寶藏、僧坊等が成就し、後第五祖豐安僧正、平城、嵯峨、淳和、歴朝の御信任を辱くし、初志を紹述して、講堂、廻廊寶塔が出來上つた。かくして平安初期には、堂塔の莊觀全く完備した。併し之れから後は次第に廢滅する許りであつた。鎌倉時代の初期に再興の機に會して、堂塔が修理されたり、又戒壇堂、舍利殿、經樓、鐘樓、鼓樓、寶藏其他が再築又は新興され、爰に面目を一新したが、それからは又潰滅の時

ばかりが續く。寺傳では鑑眞大和上の唐土より將來した舍利を擁護する、本寺の鎭守、海德諸王の奇瑞により、本寺には火難がないと言ふ。實際不思議にも火災は尠い。併し、龍王も地震は護りきらないと見えて、震災は屢々襲つた。永正三年、文祿五年、等の大震災では堂塔多く破壞、顚倒した。歲月と風雨の不斷の侵蝕も亦大きい脅威であつた。寺勢は再興の力なくて、諸伽藍は次第に廢滅した。かくて數多の堂塔、伽藍の大半は湮滅し去つて、僅に、金堂、講堂、鼓樓、鐘樓、禮堂、開山堂、寶藏、經藏、僧坊等を遺すに過ぎない。本寺本來の面目たる、戒壇堂の如きも、幾度か興廢し、元祿九年の興立を最後とし、之も又廢滅して、今は戒壇さへ、四時草苔の裡に埋れて居る。

唐招提寺の金堂は、傳へて少僧都如寶が、有緣の檀主を率ゐて建立する所だと言ふ。如寶は鑑眞に隨行した胡國人で、東大寺の戒壇で鑑眞から受戒して僧となつたと、傳へられる。もと金堂と中門とを連ねて取り卷く、廻廊、門等は淳和天皇の勅捨によつて造られたと傳へられて居るが、之は文祿の地震に顚滅して、其後再興の事なく、即本堂は今孤り立つて居る。

金堂は正面七間、側面四面、單層で、屋根は四注本瓦葺で、屋根の大棟の兩端には鴟尾を上げて居る。其西方のものは天平の作で、他は元亨の補作である。鴟尾は法隆寺玉蟲の厨子等にもついては居るが、建築に遺るのは之れが稀らしい例

堂の正面は前にも述べたやうに、前方一面だけは吹拔の

つて、七間八本の圓柱が連柱として建ち並ぶ、其正面五間は、扉であつて、左右端は壁になつて櫺子窓がついて居る。兩側面各三面と背面中央一間を除いた六面とは、總て白壁で、櫺子窓が設けられる。軒を受ける組物は、もう完全な三つ斗を持つ三手先で、尾棰が力強く突出して雄大な氣分が溢れる。軒の棰は圓形の地棰と四角の飛檐棰との二重で、軒天井と支輪とが使用されて居る。支輪は使用され始めたと言ふだけで、まだ傾斜も緩かである。併し此等の斗拱の制には、前時代に見なかつた急速の進步が認められる。木部は總て丹塗りであつたが、今は皆剝落して居る、たゞ支輪間の板は微かに極彩色の跡を遺して居る。南面の扉には描かれた丸花紋の彩色文樣が、其彩色は既に失せて、僅かに胡粉のかただけが殘つて居る。

金堂の内部の成效も外觀に比して劣つては居ない、東西兩側の各一間と、北裏側の一面とを外陣とし、前方五間二面を内陣として居る。即外の吹き拔き柱廊の正面扉は、直ちに内陣に開くわけで、普通の外陣を四周にとり、又は外陣を前方に内陣を後にする配置とは、異つてゐる。之れは前方に吹き拔き廊をとつた爲めである。内陣は須彌壇を設け、中央に盧舍那佛、東に

藥師、西に千手觀音を侍し、梵天、帝釋、四天王の諸像を安置する。須彌壇の後部三間の柱間には、板壁を張つて障屏として居る。内陣の天井は、折上げの格天井で支輪小天井を備へ、天平の特徴著しい。虹梁四本が架つてゐる。三月堂とほゞ同樣の形式だが、之は一層壯嚴である。外部軒廻り斗拱の制に於て、前記に比べて著しい進化を認めるやうに、内部に於ても構架の技法が著しく發達して、玆に佛殿内部の壯觀の大成を示して居る。其手法は矢張り簡明で、反つて力强い印象を與へる。其の上此金堂では、格天井、支輪其他が總べてが彩色せられ、天井板、支輪板、虹梁等には極彩色を以つて、佛菩薩、寳相花、蓮草、瑞雲等を描き、格間、支輪、蟇股、柱頭等にも、亦極彩色を施して居る。本寺の古記錄によれば、須彌壇背後の板壁にも、佛菩薩の繪像が描かれてゐたのである。かくて本堂は今猶美しく彩られた天平の盛觀を思ひ起させるだけの遺彩を留めて居る。蓋し當初の陸離たる五彩の美は、佛堂の内に彩雲を漂はし、此世ながらに、淨土を現出した事でもあらう。

堂内の佛體に關する感想の委しい記述は、今暫く止めて置かう。規矩繩墨を職として、常に三角定規や、コンパスを手にする私には筆を執る事はあまり容易なことではない。其故に原稿もいつも締切りにも間に合はず、編輯者にも迷惑をかけすぎる。

此度も藥師寺拜觀までの感想を一轉として記述したいと思ひ乍ら、新作の姙娠裡に筆はたゆたい勝である。而してもう既に約束の日も過ぎた。其故に早く此稿のしめ縊りだけはつけなければならない。其れに唐招提等寺では案内の寺男が、不愉快な不親切な男であつた。其時分奈良御見學に下られた山階宮殿下が、當時御見學を御中止されたので、寺男の期待に反した不滿のとばしりは、私達にもかゝつて來たのである。古建築を見、佛像を拜し、古美術品を鑑賞する時には、氣分が大事である。其れには案内者のよし惡しなどにも關係する。案内のものは儼乎な物識りを要さない。穏かな氣持のよい、素朴な、親切者でありさへすればよい。併し世間には物識り男は多いが、親切な者は割合に少くない。再昨日弟と共に法隆寺夢殿に詣つた時の寺男は親切な男であつた。和かい上方なまりの口調で話して呉れる事の内容はつまらなかつたが、私達の心持はおとぎ話の國にでも遊ぶやうに長閑になつて、扉の開かれぬ事も佛體の拜めぬ事も不平にも思はなかつた。弟が南都の寺々を巡禮するとき、其處の寺男達が、皆此んな風に親切であつたならと祈つて居たが、今日の案内人はまたあまりに不愉快な男である。ぶつ〳〵と不滿を繰返しながら、絶えず私達を急きたてた。

本尊盧舍那佛は丈六の坐像で、よく其技法の特徴を示して

居る。義靜の本行で造られたと傳へられる。脇侍藥師と、千手觀音との內、後者は殆と實際に千本(僅に四十七本を缺く)の手を有するを以て里俗に有名で、且又本寺の諸像が寺傳では皆鑑眞の配下の人々の作となつて居るのに、此像一つ神怪な物語を持つて居る。天平寶字年中、天人來つて造る所で、霧深く地を閉して、肉眼を蔽ふ事七晝夜の後、此像の出現を見たと傳へられ、今も寺の西北二町許りの所に、霧山千手谷と稱する場所がある。かゝる傳說の爲めではないが、此堂內では此觀世音は最も強い印象を與へる。千の手の付け方もうるさい感よりも、反つて不思議な印象を與へる。その光背なども麗しい天平の特徴に富む作である。梵釋の二天は木像著色の等身像で、寺傳では如寶作と云はれて居る。木彫の細部に夾紵漆技の添補されたる點に、技術發展の歷史の上の興味が繋がる。四天王像は尋常の作に過ぎない。

講堂は金堂の直後に立つ、低い一重の壇上に立ち、九間四面、單層、屋根は入母屋本瓦葺の建築である。長大な風姿は落付いた觀を示して居るが、金堂の壯重と、典雅と、生氣とはない。けれども金堂に對して決して惡い講堂ではない。法隆寺の講堂に比べると屋根の構架などは輕快で、此の堂の力が安靜氣に富んで居る。蓋し講堂は禮拜のための本堂とは異つて設計さる可きを本旨とする。併も此講堂は其創設に於て、歷史に於て、かく成る可き運命を持つて居た。此の堂にも元平城宮の朝集殿であつたのを、本寺に勅賜されたものと傳へられる。卽和銅年中平城宮造營の時に成つたものである。而して移建の際特に佛堂として適するやうに改造されたのに違ひない。後建治元年、延寶年中、明治三十八年等の大修理に改廢されて、其間に色々の變化を受けた事であらう。特に建治の修理は、永い間の荒廢の後の修理であつて、且建築界に更新の氣の溢つた鎌倉時代の事でもあり、其時の變形は著しかつたに違ひない。其故に今の講堂は、特に其外觀は奈良時代の特徴を明示しては居ない。內部は一間四周の外陣と其の內部を內陣として列柱が取り圍んで居る。列柱の內本尊の背後の北側中央の二本だけに壁を設けて障屛として居る。內陣には今は天井を張り小天井及支輪を備へて居る、又中央本尊の上に當る一間は折上格天井とし、其下に木造須彌壇を設けて、本尊を安置する。內部でも鎌倉時代の改修がかなり著しく僅に和銅の遺制を殘すにすぎない。

講堂の元來の本尊は丈六の彌勒で、脇侍菩薩像と共に唐の軍法力の作と傳へられるが、今の本尊彌勒は鎌倉時代初期の作である。四天王は持國、增長の二天だけを遺して、之れは當初の一木彫である。其他當講堂內には、數多の木彫佛像がある。而して其多くは多少の缺損を生じて居る。中には佛首を失ひ、或

は僅かに佛頭だけを遺す、大破損のものもある。而して何れも共通の特徴を示して、當時の諸像が、鑑眞東征に隨從した工匠の一派の影響で、特殊の手法形態を有する事を察知する事が出來る。本寺では火災が稀であつたために、佛像の多くを遺し傳へた。併し又戒律の衰滅に連れて廢頽の運命も慘じめなものがあつた。多くの堂塔は煙滅したが、佛像だけは、それでも身首所を別にしながらも、僅に傳へられたのである。其の廢佛の中に、今も猶、光つた當初の藝術的靈光が輝く、首だけになつた、軍法力作と傳へられる菩薩の如きも、兩手を失し、右半身をそがれ、缺鼻缺唇の大自在菩薩の如きも、美しい藝術品である。

禮堂と舍利殿とは併せて一棟となり、金堂講堂の東側に、南北に縱長に建つて居る。桁行十九間を側面とし、梁間は前方三間後方四間の長大な建物で單層入母屋造である。此長い建物の前方八間が禮堂、北方十間が舍利殿である。舊僧房の東室を本寺中古の解脫上人が建仁二年に再興して、南方の一坊を禮堂とし、北に鑑眞大和上將來の舍利を安置して、舍利殿としたのである。鎌倉時代和樣の樣式の建築で、其の特徴の藤原期を繼承する和かな感が溢れて居る。此の堂は明治の修繕を加へないため、風雨に頽廢して、特に軒や椽の破損がひどいけれど、又結構物に見るやうな、懷古的な面白味がないでもない。禮堂南面の破風や又吹き放しの列柱の透りには、優雅な風趣が漲つて居る。禮堂の内陣は所謂解脫天井で、格天井の中央に更に鎌倉の特色の折上げ小組天井を作つて、本尊釋迦如來像を安置する。

新寶藏、經藏は弘仁二年義靜の創建を建仁二年に再興したと傳はる、三間三面の校倉造の小庫で、禮堂の東方に並び立つて居る。鐘樓は如寶の作つたものが、文祿の大震に倒壞し、其古材を以て再び造つたと傳はる。鼓樓は仁治元年の建立で、桁行三間梁間二間重層入母屋の建築で尋常の作品にすぎない。此の二つは、金堂の後、講堂の前、西と東に相對峙して建つて居る。

松の疎林の中に此等の大小の堂塔を見ながら、逍遙する中に、私達は自然の閑寂の中に吸ひ込まれてしまつた。寒がりで、いぢけて許り居る私が、不思議にも、今日の寒天にゆつたりした、長閑な氣持になつて、幾度か金堂の吹放をうろついたり、禮堂の和かい手法に見れ惚たりした。東征傳に遺されたやうに、非常な困難を押切つて、遙るばる渡來した鑑眞と其徒とが、本寺に落付いた時、本寺は必ずしも彼等の本國の佛寺より、大規模でも無かつたらう。然し聖上を始め衆庶の尊信に彼等の居心は決して惡くはなかつたらう。寺を建て、佛を造る熱心に彼等は故鄉を忘じたかも知れない。私は靜かに我國の文化が、鑑眞と其徒から受けた恩惠を考へた。

文學博士 新村出著 （新刊）

南蠻更紗

定價貳圓五拾錢
送料十七錢

趣味の名著出づ！

美文家として、南蠻研究の第一人者として知らるゝ新村博士の近業である。博士が珠玉の如き麗文、斷想にて幾多面白き題材を捉へ來りて明治以前の奇しき文化の跡を訪ねた近來類稀な文献にて、讀み去り讀み來りて身は其の時代にあるが如く、卷を掩ふ能はざるのものである。近來の好史家のみならず家庭、學校の必ず一本を備ふべき參考書であり、趣味の讀み物である。

◆雪のサンタマリヤ◆切利支丹文學斷片◆主聖聖祀の舊譯本◆切支丹宗の遺物◆日本最古の銅版畫◆南蠻趣味と和歌其他（三百年前の伺鈔）◆南蠻に關する俳諧その他◆眞宗と切支丹◆烟草と煙管◆時計傳來の歷史◆加留多の特殊と流行◆近世輸入服飾品と其名稱◆ちやるめる◆日本美術史上の新研究◆日本文學の海洋趣味◆海賊の話◆大西洋上より◆長崎再遊◆日本人の眼に映じたる星◆星に關する二三の傳說◆昴星讃仰◆星夜讃美の女性歌人◆花の名三つ四つ◆「ふれふれ粉雪」◆徒然草とその異本◆圖書館の一隅より◆地獄小話◆鸚鵡◆鷸鴴物語◆語原雜話◆エスペラントの[illegible]◆バクーニン來航の事など◆去來一家の事

東京芝愛宕下町　改造社　電話高輪四九九三
振替東京八四〇二

わが交友錄

文壇交友錄

菊池寛

友人（一人限りにて交際ひたることある人）

芥川龍之介。交友十年、後事を托すべし。

久米正雄。交友十二三年。例へば星の蔭は見えざる如き良友なり。但し、事は頼まれず。

山本有三。交友七八年。律儀にして苦勞性なれば、まさかの時に面倒を見てくれさうなり。

岡榮一郎。同六七年。好個の善人。

佐々木茂索。同上。グッドセンスあり。

小島政二郎。同上。律儀にして親切なり、秘事を明にすべし。

直木三十三。交友四五年、アテになるやうでアテにならず、アテにならざる如くしてアテになる。此の頃、段々アテになつてくる。

藤澤清造。金を借りられても、決して不快にならぬ男。グウタラの如くにしてしかも一脈の潔癖を有す。

佐々木味津三。交友五六年。人情を知り義理に明かなり。

横光利一。交友四五年。硬骨、信頼すべし。

川端康成。交友四五年。銳感明解、性格的に一條の新味を有す。

中河與一。同上四五年。神經質すぎる。

鈴木氏亨。交友六七年。

菅忠雄。同上七八年。隨分古きわれ〳〵のター坊なりしが、

近來作家としての素質を認められしは欣ぶべし。

中戸川吉二。交友五六年。往年の自然兒近來活躍せざるは惜しむべし。

三宅周太郎。同上。　信頼すべし。何かを頼むべし。

中村武羅夫。交友五六年。釣友なり。釣道にても、正義派也。いつか、約束した男が、先きへ舟を出したと云つて、江の島の海岸にて、痛憤之を久しくせしことあり。

藤森淳三。交友五六年。友人に數ふべし。震災當時、同居せしことある、慷慨家なり。友人に數へてよし。

知人（よく會ふと雖も二人限りにて交際せざる人）

里見　弴。知友六、七年。一座すること、屢々なれども會談したることなし、作家としては好きなり。

廣津和郎。同上。氣持よく會へる人、二人限りにて交際へば交際ひ得る人なり。

宇野浩二。同上。

田中純。　同上。

加能作次郎。同上。

水守龜之助。同上。

この人々、氣心はよく分り居れど、機會なきため、友達交際をせざるのみ。

加藤武雄。

豐島與志雄。

長田秀雄。

吉井勇。

久保田万太郎。

　皆同じ、機會あれば友人になれる人。

德田秋聲。先輩として敬意を表していゝ人。

近松秋江。やゝ前者と同じ。

齋藤龍太郎。

加宮貴一。

南幸夫。

石濱金作。

伊藤貴麿。

能島武文。

北尾龜尾。

關口次郎。

酒井眞人。

知り方に厚薄あれども、いづれも年少の知友なり。

松岡讓。　舊友なり。

江口渙。　舊友なり。

千葉龜雄氏。知人にして、むしろ恩人なり。

文壇以外

成瀨正恭。　友人の父。學資を給されたる恩人、十五銀行頭取。

都河龍。婦女界社長。紳士的なる溫情家。作家たる余を、好遇してくれる人也。

澤田正二郎。　それほど交際はなし。

市川猿之助。　同じ。

和田利彥。春陽堂主人。

小峰八郎。春陽堂番頭也。新進作家時代より、いろ〳〵世話になりたる人也。正直にして主家に忠實なり。

中根駒十郎。新潮社の支配人、老巧にして堅實也。實戰的柔道の達人。予の知れる限りにて此の人最も強さうなり。喧嘩に用ゐる一手を教へてくれしより、予も喧嘩に對する自信やゝ生じたり。

福岡益雄。金星堂主人。年少氣銳なる出版業者也。

木村義雄。青年棋士、將來の名人として將棋界注目の猛將。

萩原淳。同じく有望棋士。予の稽古對手也。

羽太銳治。醫師にして文學研究家なり。文學趣味は、漸く素人の域を脫しつゝあり。

松村みね子。日本婦人中もつとも學識ある婦人なり。

三宅やす子。その活氣橫溢せる未亡人振りに敬服しつゝあり。

太田菊子。婦女界編輯長、現代的に物怖せざる活動家なり。

大橋房子。歸朝後、多く消息を知らず。

中山豐三。プラトン社長。文藝趣味ある好個の實業家なり。

下島勳。芥川の懇意の醫師也。予の身體を常に心配してくれる人。

交遊録

近松秋江

交遊天下に遍しといふのも、あまり深みのあるものではないかも知れぬが、今日の所謂軟文學に携はつてゐる人達は、概して餘りに交遊の範圍が狹過ぎてゐるやうである。これはその人達の趣味や性格の自から然らしむるところであつて、爲方もないが、私共は屢々そのことを思ひ起して稍々寂寞に堪えない。

たとへばお正月になつた。不斷は四六時中職業のことで腦に寧日もないのだが、どうか數日間はそんなことから頭を解放して、すつかり別方面の話題などで氣持ちを洗濯したいと思ふことがあるが、さて何方を向いて見ても、そんな交遊もなく、結局やつぱり同じ職業の誰れ彼れのことを思ひ出す。併し交際はあまりに生存上の利害關係が密接し過ぎてゐると、どうも長閑な氣持ちになれない。さうかといつて、やつぱり多少の利害關係の類似共通がなければ、腹から眞劍になつて談笑したりすることも少ないものだが、その人が互に教養の汎い、何事にでも興味の豐かな人間である場合には隨分愉快な交遊關係を保つことが出來ると思ふ。

なべての世界に於て、人々は互に陰で惡口をいひ合つたりしながらも、尚ほ且つ生存上利害關係の共通してゐる者同志は、その交遊を絶ち難いものである。小説家は小説家同志でよく陰で惡口をいひながら、尚ほ且つ、他の世界の人間よりは近親な感情を抱いてゐる。畫家は畫家同志。政治家は政治家同志。醫者は醫者と、實業家は實業家と。

併し明けても暮れても吾々が小説家同志と商賈の話ばかりしてゐると、うだつてしまふ。各人みな自己の職業に熱心のあまり勢ひさうなることもあるが、少しは想念を他に轉じて、ほつとした輕い氣持ちになるのも精神の養生である。さういふ意味から私は、出來ることなら交遊の範圍を汎くしたいものだと思ふが、それは一朝一夕に作られるものではない。交遊は恰も茶器の如きものであつて、古い手澤の存するほど捨て難い味はひがある。そして又單なる風流遊戲からばかりでは交遊の關係は

深くなり立たない。何處か職業上に共通の利害があるとか、或は事業を共にして、快苦を等しく嘗めたとかいふやうな歳月の堆積も、親しい交遊關係を形づくるに必要な條件である。それゆゑ吾々の如く既に年齡も相當の老境に入つて、生涯の針路が一定して來たところでは、今更に新しい交遊關係を形づくる機會は甚だ乏しいわけである。

正宗白鳥氏

何といつても、自分と同じ職業の文壇の人間で、最も古く知つてゐるのは正宗君である。そのことは、去年の新潮の十二月號の人間隨筆にも一寸書いたが、明治三十一年の秋新學期早稻田の學生時代からの知合であるから、二十七年間の舊友である。二十七年——やがて三十年間の舊知といふことは、單に年數だけからいつても、棄て難い經歷がある。正宗君はその頃からもう、自分は直ぐにも死ぬやうな病弱を喞ちてゐたが、それから今日まで三十年の歳月を生伸びてゐるばかりか、文筆の人としての成功を收めてゐる。私は學校に入つた時分から不思議に割合に身體は健康を保つてゐたが、その前二十歳から廿一二歳までは兎角病弱に苦んだ。そして學校を出てからも、今から振顧ると胃弱と神經衰弱の外には存外健康を保つて來たが、やつぱり直ぐにも死ぬやうな不安に附き纏はれてゐた。何時かもそんな話をして、お互に思つたよりも生き過ぎたといつて笑つたことがあつたが、いくら生き過ぎても、やつぱりまだ、も少し死にたくないのが本音であらう。どうか、お互に長壽を保つて、今日の三十年の舊知を五十年の舊知までも續けたいものである。

田山花袋氏

田山花袋氏は先輩として、故人の島村抱月氏と殆ど前後ないくらゐの舊識である。しかし抱月氏は早稻田在學時代からの相識であつたが、花袋氏は、明治三十四年卒業後秋博文館に就職してからの相識である。が、書いたものは、まだ抱月氏を知らぬ以前から、愛讀してゐた。即ち僂指すれば二十三四年の舊知である。たとひ偶々文學上の意見に不一致のことがあつたり、互に言論の扞格があつたりしても、舊知といふことそのことに何とも棄て難い親しみを感ずる。況んや氏の近狀は文壇的の鬪爭場裡から解脱して、その近年頃に霜を加へた鬢髮の白さとゝもに倍々蒼古の雅趣を具へて來たところに日本の明治の文壇の長い歷史を偲ばしめるものがある。殊に氏は臨池の技が年とゝもに妙熟して來たのは文筆の人としての風格に一段の味はひが出來て來たやうである。

近いうちに一つ訪問して、いろ／＼書いてもらひたいと思つてゐる。

上司小劍氏

は、いつの頃からともなく親しくなつた人である。ずつと以前今から二十餘年も前正宗君が讀賣新聞に居た當初から、上司といふ姓は聞いてゐたが、知つたのはそれより大分後であつた。作品で「鱧の皮」を讀んでから俄然上司小劍といふ人が、はつきり私の意識中に坐席を占めることになつた。「鱧の皮」は、たしか大正三年頃の「ホト、ギス」の新年號に表はれたものであつたから割合に新らしいことである。

しかし上司君は、新潮の昨年の十月號の人間隨筆で私のことをいつてゐた處に書いてゐたやうに、お互に他人の生活に立入つて來ないところが、互の交際を傷ける氣づかひがなくつていゝ人である。その點に於て安易な氣持ちで交際ることが出來る。

支考が「今宵の賦」に、

その交りの淡きものは、砂川の岸に小松を浸せるが如し。深からねば淒からず、かつ味ならうして、人に飽かるゝなし。

といつてゐるのが、私が、上司君との間に形づくりたい關係である。

徳田秋聲氏

徳田秋聲氏の名を記憶するは恰も田山花袋氏と同じ頃かと思ふ。しかしその作品に最も敬服したのは、「黴」「たゞれ」「あらくれ」「奔流」「何處まで」の諸作以來であつた。是等の諸作は蓋し秋聲氏の最も特色を誇るものであるとゝもに蕪雜、卑俗なる人間生活を鮮かに取扱つて滋味ある人生味を以つて味ぢ付けた好個の完成藝術であらうと思ふが、吾々以後の新しい時代の者の興味を永く滿足せしむることが出來るか否かを思ふと、秋聲氏の特色ある完成藝術の爲に一點の寂しみを感ずる。

氏は上司氏と反對に他人の生活に立入つて來るだけ、それだけ深切である。なか／＼深切な人であるが、さりとてその深切に徹底的に任せつきりで安心してゐられない處もあるやうな氣もするので、やつぱり人との交りは上司氏の場合にいつたやうに支考が「今宵の賦」にいつてゐる程度に留めて置きたいものである。氏は私の知己の一人ではあるが、併し白鳥花袋兩氏ほどに、私の評價者ではないらしい。

正宗得三郎氏

いふまでもなく白鳥の次弟である。彼は、私と白鳥とがまだ、小石川の同心町の素人下宿に居て、早稻田に在學してゐた頃に初めて郷里から上京して來たのであつた。子供の時から繪が好きで上手といふので、東京に出て來てから暫らく經つて美

術學校の洋畫科の選科に入つた。その頃から私は殆ど彼の日常生活は知らずに過ぎた。が、兄の白鳥氏に次いで花袋氏よりもまだ舊い知合である。兄の白鳥よりも談話が陽氣で、氣分が輕快で、遙かに柔か味があつて、頭の透明なところは兄弟相似てゐるが、得三郎氏の方は交際にも積極的な態度がある。そしてなかなか深切である。畫家であつても世間的の事を何んでもよく判る常識の發達した人間で、私どもの、そんなことに心も留めなかつた時分に、都下で最好適の住宅地である東中野に廉價な地代で土地を借り、大正八九年の物價暴騰以前に今なら一萬圓以上は費る家を建てゝ落着いてゐる。フランスにも二度も行つて前後で五六年も居つて來たりした處になかなか仕事の出來る手腕を持つてゐることを示してゐる。生活の樣式にも藝術味が饒である。好い番號の電話などを具へてゐるので、私は時々に借りに往く。今は偶然私が此の東中野に借家をして住んでゐるからでもあるが、私に萬一の事でもあつたら、此の人など、先づ第一に來て前後の世話を燒いてくれさうに思はれる。

長田幹彥氏

との知合は、大正元年の九月の、確か廿五六日の頃、大阪南郊の玉手驛外の私の旅館に於て初めて來訪に接した時から始まつてゐる。世間からも、私と氏とは、文學的にもまた風流の遊びに於ても頗る因緣の深い物に見られてゐるが、その實長田君の書く物を讚美してゐるのは、私であつて、氏の方では格別に私の書く物を値好く買つてゐる譯でもない。正直にいふと、三上於菟吉君など「それでは貴下が損ぢやないか。」と、酒を豪つて時々忠告めいたことをいつてくれるが、長田君の方で、私の書いた物を、どの程度に買はうと買ふまいと、私は長田君の書いた物に好いところを發見するので、それを直截に口にするまでゝある。實際少しく輕薄に悧口に立ち廻はる氣になると、こゝらで——否な、も少し前から長田君の書く物など賞讚せぬ方が、私自身の文壇的立場から考へて得であるかも知れぬが、そんなことは私の氣の澄まぬことである。やつぱり長田君には好いところがある。立場の損得を忘れて自己の確信により、始終一貫長田君を賞讚する此の私を、世間は、も少し買つてくれるといゝのだ。併し長田君にとりては常習賞めの私が百度賞めるよりも、强敵の菊池氏か誰れかに一言賞めてもらつた方が遙かに有効であらう。

風流の遊びに於ても私と長田君とは全く違つてゐる。長田君のは眞個の遊びである。野暮らしい戀といふものは長田君には殆どないのだ。次のやうにいふと、私を少しく僞くしていふやうであるが、昔し大近松も赤穗義士の實錄を書いて「碁盤太平

記」を作したが、それは失敗であつた。然るに若い竹田出雲は忠臣藏を書いて大近松の及ばない成功をした。出雲は近松の弟子であり、長田君と私とはそんな關係は少しもないが、大近松の忠兵衛や治兵衛の野暮と眞劍とは、長田君のに比べて私の下手な藝術の方が餘計に含んでゐるのだ。けれども私は、花柳の酒席に於ける長田君の行儀の好い、面白い遊び振りは最も好むのだ。

この序にいつて置くが、私と長田君とを情話作家にしてしまつたのは、あれは新潮社の社長が、賢い商賣のかけひきから情話新集といふ叢書の題を案出したことに淵源してゐるのだ。あの叢書の中には田山花袋氏も谷崎潤一郎氏も亦た中村武羅夫氏も小栗風葉氏の名で書いてゐることを世人は承知ありたい。

三上於菟吉氏

と知つてゐるのは、長田氏とよりも少しく前からである。この人も長田君同樣に隨分ませた人間で、立派に世間的の常識の發達してゐる人である。同君との因縁も私はなか〳〵深いのである。時々私の惡口をも遠慮なく何かに書くが、それにも係はらず此の人の天性具へてゐる白鬼ズムが魅するのか、偶にしか會はないに係はらず此の人には、時々私の腹心を打明けて語ることがある。白面の惡黨のやうで、その實良家育ちの人柄な處が根にあつて、鷹揚な貴公子風である。私は、長谷川時雨女史に劣らず三上君を買つてゐる。(一月六日)

水上瀧太郎君と泉鏡花先生

久保田万太郎

水上瀧太郎君

わたしが豫科を出て、文科の一年になつたとき、水上君は理財科の三年だつた。――水上君は、その以前から、理財科の教室を拔けてはそのころヰツカス、ホールにあつた文科の教室へ永井先生と小山内先生との講義を聽きに來てゐた。だから、科

も違ひ、學年も違ふにかゝはらず、わたしたちは、ぢきに口をきゝ合ふやうになつた。――わたしのクラスにはこの間死んだ久米秀治がゐた。下のクラスには佐藤春夫堀口大學の兩君がゐた。

その時分、まだ、水上君は、水上瀧太郎といふ名前を持つてゐなかつた。本名の阿部章藏を阿部省三と書いて「スバル」に歌を發表してゐた。北原白秋、木下杢太郎、吉井勇諸氏の漸く顏をみせなくなつた寂しい「スバル」に、水上君の直情的な、自分をはつきり摑んだ歌は、佐藤春夫君の、美しい、才華の溢れた詩にならんで輝かしい存在をもつた。

その年（明治四十四年）の七月、水上君は、處女作『山の手の子』を「三田文學」に揭げた。つゞいて、十一月『新次の身の上』（後に『ものゝ哀れ』と改題）を同じく「三田文學」にのせた。このとき、はじめて、水上瀧太郎といふ假名を用ゐた。――水上といふのは泉鏡花先生の名篇『風流線』のそのなかに出て來る多恨なる工學士の姓、瀧太郎といふのは『黑百合』のなかに出て來る俠賊の名。――水上君は小學校に通つてゐる時分から泉先生の作品を愛誦してゐたのである。なぜさういふ假名を用ゐたかといふことは水上君の第三短篇集「心づくし」のなかに收めてある『心づくし』といふ書翰體の小說にくはしい。――要は世を忍ぶため、阿部とはつきり名告つてものを書くことは、何としても、周圍の事情が許さなかつたのである。

『山の手の子』『新次の身の上』の二作によつて忽ちみとめられた水上君は『ぼたん』を「三田文學」に『うすごほり』を「スバル」に、『沈丁花』を「新潮」に書くに至つて押しも押されもしない新進作家になつた。――が、大正元年、學校を卒業すると同時に、水上君は、『その春の頃』（三田文學）「途すがら」（新小說）の二篇を殘して渡歐した。――阿部章藏として經濟學研究のために。……

小泉信三、澤木四方吉、小林澄兄。――さうした諸君も、そのとき、水上君に前後して、みんな、イギリスへ、ドイツへ、フランスへ向つた。

西洋にゐる間も、始終、水上君は、「三田文學」へ原稿をよせた。『伊太利の女優』だの『フオーブス、ロバートソンの一世一代』だの『ファンニーの處女作』だのといふ觀劇記は、ゆたかな、純一な情感の底に潛んだ批評のまなざしの犀利をきはめたものがあり、構圖の注意ぶかさは傅彩の美しさと俟つて、水上君の人生に迫るとりなしの、小說の場合以上に、强く、根ざし深いもののあることをあきらかに感じさせる作品だつた。わたしたちはこと〴〵く感歎した。――外に西洋で書いたものに「海上日記」「汽車の旅」その他の小說、「良緣」その他の戲曲

があつた。

大正五年の十月水上君は歸朝した。さうしてすぐ明治生命保險會社に入つた。――かたはら『三田文學』に『貝殼追放』を載せはじめた。――これよりさき永井先生を失つて漸く衰微沈滯しかけた『三田文學』に一道の生氣を水上君は齎した。

が、間もなく水上君は大阪支店詰になつた。二年あまりの月日を東京を離れて暮した。『三田文學』にとつては不幸だつたといへ、水上君自身にとつては、その二年あまりの、寂しい、不如意な(といふことの要は土地の水に合はないことの)上方の宿屋住居がいよ〳〵水上君を藝術的に精進させた。――その二年あまりに、水上君は『日曜』及『大阪』の二長篇を大阪每日に連載した。――新しくして古い大阪に對する水上君の苛辣な觀察は、一部の、古くして新しい大阪人に歡んで迎へられた。――一度した約束はどんなことがあつても違へない水上君は、勿論、その間でも『三田文學』に『貝殼追放』をつゞけ、『新小說』『解放』『中外』等に出來るにしたがつて短篇をよせた。――『友情』『辻君』『霧の都』などがそれである。

大正八年の十月東京へかへつて赤坂氷川町にうちを持つた。後、三田にうつり、その三田にゐる間にいまの夫人都さんと水上君は結婚した。――都さんは俣野景藏氏のお孃さんである。――泉鏡花先生御夫婦、岡田三郎助先生御夫婦、里見弴君と一しよに、わたしは、築地の喜多の家ではじめて都さんにあつた。――大正十年の四月三日、神武天皇祭の晩で、御馳走になつてゐる間に酷いあらしになつたことを覺えてゐる。

それからこゝにざつと五年、水上君は三田から青山に越し、青山からまた麴町下六番町に轉じた。會社で總務主事助役といふきはめて忙しい役目を持つてゐる片手間で、その間に、『第二貝殼追放』『明窓集』『勁人』の諸著を世に問うた。――ことに第七集『勁人』の卷頭に揭げた同題の小說と『新潮』に發表した『罹災者』と『女性』に發表した『女事務員』とは、水上君が漸く姑息な『詩』の粉飾を捨てゝ、より深く、より大きな人生に直面しようとする一轉機を示すものとして、わたしたちに、今後水上君の藝術が水上君本來の深い才識社會智を作つてどう進展するかを思はせるものがある。――いへば、水上君は、かくれたるトルストイ學者である。

明治二十年十二月の生れだから、今年、わたしより二つ上の三十九、性、重厚にして峻嚴、沈靜で、強情で、生眞面目で、筋の違つたことだらしのないこと未練たらしいことを悪むことに於て文壇にその比を見ないが、同時に親切でいたはりがあり、謙讓でものゝ分りがよく、細心で、綿密で、明晰で、弱いもの

正しいものに味方することに於て、また、文壇に（とばかりいふまい、わたしの知つてゐるかぎりの廣い世間で）その比を見ない。——わたしが水上君を以て無條件に畏友とする所以である。

嫌ひなものは猫に慈姑（思ひ出すのは里見君の胡麻の嫌ひなことである）好きなものは讀書と酒——水上君の豪酒はおそらくは誰でもが知つてゐることだらう、だから事新しくわたしはいわない、たゞ幾ら飲んでも一絲みださないことだけをはつきりいへばいゝ。……

泉先生の『芍藥の歌』の、いま、手許にないことをわたくしは殘念に思ふのである。——なぜならば泉先生は『芍藥の歌』の主人公峰桐太郎を描くにあたつてわが水上瀧太郎を描いた——といふことは、わたしにいはせれば、峰桐太郎の一擧手一投足はそのまゝ泉先生の見た水上瀧太郎であらう。——もしこゝにその描寫の幾個所かを引くこと出來れば、それほどよく、それほどはつきり水上君の風丰をこゝに傳へうるみちは外にない。……とはいつても、水上瀧太郎が峰桐太郎ではないことは勿論である。

泉鏡花先生

三田に福島屋といふ本屋がある。水上君の古くからの買ひつけで、且、贔負のうちである。水上君の小說『貸さん』を讀めばその贔負にする理由が分る。——大正元年、西洋へ行くことになつたとき、水上君はわたしにいつて「福島屋にさう云つては置いたけれどみ落しがあるに違ひない。——福島屋でこれは氣のつくまいと思はれるものがあつたら、側から君、福島屋へさう云つてどん〳〵送らせてくれ給へ。」

泉先生の書かれるものについてわたしは後事を托された。——水上君が泉先生の小說を、まだ、小學校に通ふ時分から愛誦したことは前に云つた。——その位だから、熱い、何ごとによらず中途半端なことの嫌ひな水上君は、「しとげる」意氣でそれまで、いやしくも泉鏡花といふ署名のあるものは、たとへ一行二行の、どんな零碎たものでも、新聞に出たもの雜誌に出たものを問はず「時間」と「根」にあかしてこと〴〵くこれを尋ねつくした。——つまりは水上君の留守のあひだ福島屋とわたしとでその仕事を引きつぐわけなのである。

承知はしたものゝ此奴はことだと思つた。引きうけた以上には手落があつては口惜しい。が、泉先生は、いつ何どき、どんな遠くへ看板を擧げられるか分らない。四國、九州、朝鮮。——

「鈴木主水」（？）「宮川記」ともう一つ何だつたかは吉野左衞門のやつてゐた朝鮮の新聞に書かれたものである。——もつと近い大阪でも、いまなら何んでもないが、そのころでは取ツつき端がなかつた。これは先生にぢかにぶつかるに如くはないと思つた。——が、さて、誰に手紙をつけてもらへるあてもない。——からきし、まだ世間が狹かつた

と、その後、たまたまさういふ折があつて、飯田町の喜多の舞臺へいふところの文壇人として能をみに行つたことがある。——そのときゆくりなく先生にお目にかゝつた。——わたしは生田長江氏にたのんで紹介してもらつた。

ことの次第を話して、わたしは、一度お宅へおじやまに出たい旨をいつた。——いつでも、どうぞ、と、先生は愛想よくいはれた。

が、わたしの記憶にもしあやまりがなければ、その後、一年ほどわたしはお邪魔に出なかつた。その間に一二度、そのころ飯田町にゐた長田幹彥君と門口まで推參したことがあつたがいつも生憎お留守だつた。——一人で改めて出向くのに、麹町といふところ、そのころのわたしにとつてわけもなく遠く臆却なところだつた。——そのころわたしは駒形に住んでゐた。

どういふきツかけだつたか忘れたが、とにかく、でも、一年ほどしてわたしは、下六番町の、銀杏のそばのお宅のしづかな二階ではじめて先生とさしむかひにすわつた。——脇息のうへのおびたゞしい兎のおもやに驚きながら、わたしは、こと細かに水上君の人となりを——いかに水上君が聰明であるか、いかに水上君が廣量であるか、いかに水上君が眞實であるかを先生のまへに開陳した。——さういふ若いかくれた讀者のあることを是非みとめて頂きたい。——先生のために。——先生の藝術のために。——わたしはまじめにさういつた。——要は、さういふ方法によつて、在來の、いまゝでの、いふところの鏡花宗の人たちの輕浮さ氣障さいはれなさを偏へにわたしは否定しようとしたのである。

その日、わたしは、おもひもよらず先生のお宅で御馳走になつた。わたしが東京育ちといふところで御膳のうへに、鮪の、みるからいきのいゝ奴がまづあらはれた。——わたしは狼狽した。——御存じの方があるかも知れない、わたしの何によりの嫌物は鮪といふさかなである。——特異質といふ奴で、こればかりは、煮ても燒いてもいけない——況やそのなまのまゝをや……

『山の手でもこれだけは保證します。——どうぞあがつて下さい……』

わたしがいつまでも箸をつけないのをみて先生はいはれた。
――山の手でも。――わたしは恐縮した。――おづ／＼わたしはさういふわけでは毛頭ないこと、因果と、生臭いもの丶總じて口に入り兼ねることを、先生と奥さんのまへに白狀した。

『いや、これは……』

先生はいはれた。……そのとき、はじめて、先生もまたなまものを一切あがらないこと、お燗も煮えくり返るやうに熱くなければいけないこと、ひとり酒ばかりでなく、お茶でも何でも外でのむときは眼のまへでぐら／＼いはせなければ安心出來ないこと。――さうしたことをいろ／＼わたしは知つた。

遠慮なくいたゞいてすつかりわたしはいゝ心もちになつた。――調子にのつてわたしは先生のおばけの出る小說よりもおばけの出ない小說のはうがより結構であることをいつた。――先生をあやまるものはおばけだといふわたしのかね／＼の持論をはつきりぶちまけた。

では、どういふものがいゝのだと先生はいはれた。

言下にわたしは『女客』をこたへた。『祝盃』をこたへた。『玄武朱雀』をこたへた。『歌行燈』をこたへた。『風流線』をこたへた。

『さア……』

先生はどうして『女客』がしかく評判がいゝか分らないといはれた。――わたしはどうして『女客』といふものをわたしがそれほど買ふかといふことを縷々陳じた。

寒い晩でいつのまにか外は雪になつてゐた。――氣のついたときにはかなりもう積つてゐた。――十一時すぎ、わたしは、俥を頂戴してうちへかへつた。

それを御緣にその後とき／＼お邪魔に出た。――ある晩、それは夏のことだつたが、いつものやうに二階でおしやべりをしてゐると、ふと

『里見さんのところへ行つてみませうか？』

と先生はいはれた。異議なくわたしはおともした。――里見君のまだ山元町にゐる時分で、その晩、はじめてわたしは先生によつて里見君と相見た。

春陽堂から第一集『善心惡心』の出るすこしまへだつたと覺えてゐる。

もう一つ、本鄕座で先生の『日本橋』を伊井喜多村でやつたとき、『日本橋』の初版を出版した千章館（鏡花會の會員の法學士堀尾成章君のやつてゐた）のけんぶつに誘はれてみに行つたをり、先生につれられて樂屋に喜多村をたづねた。さうして稲葉家のお孝に扮した喜多村と先生の引合せではじめて知合にな

つた。――そのときは、喜多村も口をきかなければ、わたしもたゞあたまを下げたゞけだつたが、不思議な緣で、いまでは、遠慮のなさすぎるくらゐ遠慮のない附合をしてゐる。

大正五年の十一月、水上君のかへつて來たところで、わたしは、水上君を下六番町へ引つ張つて行つた。その日、コレラの流行るため今日で百日あまりも外へ出ないでゐるといふ先生を無理に誘惑して散歩に出、先生年來の御贔屓の大根河岸の初音へ行つて、夕飯を喰べた。――くはしくは水上君の『貝殼追放』のなかに『はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記』といふものがある。

星うつりもの變つて、水上君、いまでは先生と同町内に住んでゐる。わたしは淺草を離れて日暮里に住んでゐる。淺草にゐるとき以上に無精になつて、こゝのところ、先生のところへも水上君のところへも甚御無沙汰になつてゐる。――とはいつても、外では、先生にも水上君にも始終あつてゐる。――前記大根河岸の初音で、銀座の岡田で、横町の藤村で。……

地震後、まだ、商賣をはじめないでこゝに田圃の大金をいふことの出來ないのが寂しい。――先生もおそらく御同感だらう。

先生のおすきなもの、一に鷄肉(それもどんな熱い最中でも芋のあたり、佃煮のやうに煮くたらかさなければいけない)二にうどん、三に大根八つ頭のたぐひを煮たもの(前記「日本橋」のお孝の臺詞に「お粥腹のお姫様をうどんで口說いて、八つ頭をみて泣いたつて、まるでお精靈さまの濡場のやうだね。」とある)――わたしの靑柳を喰べるのを罵倒しながら御自分では蛤をあがる。――お嫌ひなものは、一に雷、二に犬、三に――さア何を擧げたらいゝだらう?――あんまりありすぎてこまる。……

唄は上方唄の『愚痴』――「露路の細みち駒下駄で」と「お江戶日本橋七つだち」。――煙草は水府。――先生が豆腐を豆府と書かれるのをみて水府の府を持つておいでになつたのだらうと笑てわたしはいつた。――『いや、それは……』と先生はわらはれた。

が、たゞし、先生が葉卷を愛用されるのをみて先生らしくないと云ふものはいまだ先生を語るに足らない。(十四年一月)

創り得た友

久米正雄

私は交際上の八方美人だと云ふ噂さだ。現に私と一番舊く、且つ深く識つてゐる菊池寛が、私の印象を書いた時、何處へ行つても直ぐ友を作ると、非難を含めた批評を加へた事すらある。が、凡て世の八方美人が、實は一番心じまりである如く、私は又決して、容易に人を容さない男だ。功利、非功利でする譯ではないが、私と云ふ男の性格は、一應は甘いけれど、一應から以後は、實に辛いやうだ。是は或ひは、もと明るさ一方だつたものに、一點深い暗黒な裏切りを受けて、それから生じた警戒意識かも知れぬが、少しは私の人の心を讀む聰明さに、頼つてゐるところないとは云へない。兎に角、交際は廣い。が、菊池の云ふ如く、決して出鱈目に、出た所勝負で、友を作つてはゐない。尠くとも一人の友と相許す迄に、時間は長くかゝつてゐる。里見弴は「結婚は長くかゝる」と云つた。が、私に云はせれば、女房と相許すより、里見弴と本當に友人となる迄、隨分永くかゝつた。今だに、一點城壁の痕を殘してゐる。それは、私は眞に同輩的な感じがなくては、ほんとの「仲間」的な感じでなくては、矢つ張り心の底まで許せぬ點からだ。少し兄事が勝ち過ぎると、矢つ張り心を緊めるからだらう。私には菊池のやうに、下のものを可愛がる親分肌も、里見のやうに下のものを薫陶する師匠肌もない。同輩になれなくては、深く交際へない。菊池などは私から云はせれば、下のものを可愛がるか、上に立つか、どうかしなければ、同輩感に堪へぬ男のやうだ。であるから、周圍には人が集るが、どうも孤獨な男だと思ふ。芥川の交友には、一種の癖がある。彼が前月の「半生」にも書いてゐるやうに、一種の才能の背景、趣味性の洗錬を求め過ぎるのか、一種茶呑み友達めく事すらある。そして才を以て集るが故に、機智の火花が友情を穿入させる事も多いだけ、沮止する傾きがある。そこへ行くと私は同輩感を持つだけ、子分はないが、友人的傾向は多い、と云ふ事になる。實際友は多い。が、友情上の無貞操ではない。

芥川、菊池の善友を右に、里見、吉井の惡友を左に、と云つたやうな區別は、既に撤廢されて、最早、彼らは私に取つて、いづれも舊知己感を深うしてゐる。が、併し、本當に、私の友人と云ふべきは、私が自分で得た友人と云ふべきは、實は田中純かも知れない。此の男には、私は求むる所のものがない。何をしても怒れない。ちつとも偉らくない代りに、壓迫しない。缺點だらけだが、分つてゐる。女房を貰つたら、純だけは危險だから、近づけるなと云はれた。が、僕は、女房を持つ時殊に、純を信賴した。女房も、初めは彼を何となく蟲が好かぬと云つてゐたが、私の親しみにほだされて、だん／＼好きになつて行き、今では矢つ張り一番親しみを持つてゐるやうだ。まさか女房を取られる恐れは、萬々ないと思ふが、ひよつとすると女房を寢取られたつて、怒れないかも知れない。——是は誇張だが。實際私は田中との間に、幾曲折があつた後、かうした友情、壓迫せず壓迫されず、強要せず強要されず、偉がらず馬鹿にされず。と云ふ境地を、築き上げ得た事を嬉しく思つてゐる。一つには、初め、彼が世間に誤解されゝばされるだけ、自分だけは彼を解つてやる、と云ふ、友俠めいた惡因緣がない譯でもなかつたが、一つには又、芥川菊池里見の所謂畏友諸君は、私がぶつつかつて得た友人であり、初めから友人にしなければならぬ存在だつたが、田中に至つては、少し誇張して云へば、發見して創り上げ得た友人と云ふ氣がするのだ。そして、いざと云ふ時でも、餘り「たより」になりさうもないが、その癖に親しい事は他に增して親しい友人だからだ。

二人の亡友

正宗白鳥

同じ時代に同じ國に生れて知合ひになるのは不思議な因緣である。同じ學窓に學んだり同じ職業にたづさはつたりしてゐる人々について考へると、ことに因緣の不思議さが感ぜられる。しかし、私は幼少の頃から、非常に親しかつた、何時になつ

ても忘れられないほどの友人を有つてゐなかつたやうに思はれる。今振返つて見ても、懐かしいのは書中の人物で、現實には存在してゐなかつたやうである。八犬士のやうにお互ひに玉を持つてゐるやうな友人があればいゝと熱心に空想してゐたが、幼少時代の遊び友達を、私は好かなかつた。それで、早くから遊戯よりも讀書に心を傾けてゐた。少年期青年期に於てさへ、私には所謂莫逆斷金の交りを結んだ知友は一人もなかつた。友人のある一人から強い感化を受けた經驗もない。

文學に從事して以來のいろ／＼な友人との交りは、なほ更淡々として水の如しである。文學を縁としての友人のうちで、比較的胸を披いて、私の私生活についても此方から打開けた話の出來た人は、中村吉藏氏德田秋聲氏などである。學生時代から遠慮なく交際してゐた德田秋江氏、七年間新聞社で椅子を並べてゐた上司小劍氏、何となく親しくしてゐた小川未明氏などが、文壇のうちでは、最も親密であつた私の友人である。

しかし、私は、ここでは、二人の亡友について思出して見よう。その一人は平尾不孤である。

私は早稻田卒業後直ちに學校の出版部に奉職して、文科の講義錄を編纂することになつたのであつたが、その時同じ出版部に、早稻田學報編輯員として、平尾不孤が入つて來た。彼れはすでに文學者として多少名を知られてゐて、大阪に住んで「小天地」といふ雜誌に關係してゐた。それが女學生との戀愛事件で、私書を新聞に出されたりしたゝめに窮境に陷つてゐたのを、坪内博士に救はれて出版部に入れて貰ふことになつたのであつた。（あの戀愛沙汰は今日では何でもないことなのだ）私は、どういふ人間であらうかと、好奇心をもつて彼れを迎へた。

彼れはヒョロ／＼と背の高い、ムツヽりした男であつた。私は毎日顏を合はせるので懇意になつて、よく一しよに方々をホツキ歩いた。その新宅をもよく訪問したが、當時世間的知識のとしかつた私は、彼れと妻君との關係や生活については深く考へることはなかつた。今になつて回顧してその眞相が推察されるのである。彼れの追憶記見たいなものは、かつて「友情」といふ短篇に書いたこともあるし、長くなるから除くが、彼れの一生は薄運であつた。もう少し生き伸びて自然主義勃興時代に筆を取つてゐたら、相當に力量を認められたに違ひなかつた。彼れの文學的素質は自然主義系統の作物に適してゐたのだ。小杉天外氏に接近して小田原へまで隨いて行つて、肺病に罹つて妻君に逃げられて、最後に京都で下宿屋を追出されて、二條城の堀に顏をあてゝ泣いたと云はれるまで、彼れは薄運に追詰められた

のである。私は、彼れが小田原から脚本の飜譯脚本の原稿を携へて私を新聞社に訪ねて來た時の謙遜な顏付を今も覺えてゐる。妻君難、生活難に苦んでゐたのだ。私から主筆に話しても、そんな原稿は無論新聞に出す譯には行かなかつた。それで一しよに本郷座へ佐藤歲三を訪ねて、賣込みたいやうなことを微見せたが物になる筈はなかつた。博文館へ持つて行くと、その飜譯はすでに、誰れかが飜譯してゐたことが分つた。そこへ、妻君から電報で、實家の父の病氣見舞に行くと知らせて來たが、その時妻君は永久に逃げたのであつた。

彼れの當時の惱みは私には分らなかつた。「平尾は馬鹿だ」とよく無殘な批評を下してゐた。私は、林田春潮兒玉花外氏等とゝもに、彼れの追悼會を淸風亭で開いたが、その會では、みんなが死者を非難した。あゝいふ追悼會は珍らしいが、彼れは死後唯一回きりの追悼會でまで惡く云はれて、薄倖な一生を完ふした譯である。(餘計なことだが、私自身は死後追悼會なぞして貰ひたくない。位牌の前で褒められたりケナされたりするのは若し死者靈あらば餘計なおせつかいと思はれるだらう)

文學者としての亡友のうちで、最も深く私の頭腦に印象を留めてゐるのは、平尾不孤の外には、何と云つても岩野泡鳴である。彼れは不孤よりも強かつた。

私は先日、新劇協會所演の「閨閥の眼玉」を觀て、拙いと思つたが、その後田山氏に會つた時の話に、「あれは初期のものでまづいが、岩野の晩年のものはなか／＼いゝよ」と氏は云はれた。私は、泡鳴全集を持つてゐないので、彼れの作品を讀返すことはないが、無論今讀んでも面白いだらうと思ふ。私は以前屢々彼れの作品と秋江氏の作品とは死後になつて一層光を放つだらうと豫言してゐたのだ。生きてゐる間は、實際の行爲と比較されて、獨立した作品の眞價を認められないのが損だと思つてゐた。泡鳴は不孤よりは長生をしたゝめに、生きてゐる間に充分に自己の持つてゐるものを現はしたが、しかし、これから文壇に於ける勢力も得られ、物質的報酬も潤澤に得られさうになりかけて死んだのは不運であつた。今泡鳴が生きてゐたら、さぞ賑かに活動してゐることであらう。菊池寬氏に對抗して文壇を賑かにしてゐるであらう。あの貧乏してゐた泡鳴が貸自働車にふんぞり返つて札びらを切つたり、合評會で大氣焰を吐いたりしてゐることを空想すると面白い。

私は泡鳴とはよく往來してゐたが、彼れの話を面白いと思つたことは滅多になかつた。氣の置けないいゝ人間なのだが、日常の話はガサツで大ザツパで、沒趣味極つてゐた。泡鳴を話の面白い人と思つてゐる人の多いのを私は不思議に思つてゐる。

私には今でも彼れについて一つの疑問を持つてゐるが、彼れは自分が空想に描いただけのことを、實際に行つたやうに思込んでゐたことがあつたのではあるまいか。彼れは決して、嘘を吐く男ではなかつたが、彼れの話に私の腑に落ちないことがよくあつた。女に關してはことにさうだつた。

とに角泡鳴はもつと生きてゐればよかつた。彼れが生きてゐたら、個人雜誌を出してゐたであらう。さうしたら私も彼の雜誌に知慧を貸してやらう。泡鳴を人言を耳に入れぬ我無者らな男のやうに云ふ人もあるが、必しもさうでない。彼れは、かつて、溫泉宿で會つた詰らない彫刻家の話を丸呑みにして、新聞へ五段詰の長論文を寄せて、編輯者たる私を惱ませたことがあつた。

私は泡鳴の手紙の一片も持つてゐないし、その著書の一冊をも持つてゐない。たゞ彼れの紀念としては、オスカーワイルドの「ペン、ペンシルと毒藥」とを持つてゐる。これは私の現在の愛讀書となつてゐる。

學校友だち

芥川龍之介

これは學校友だちのことと言ふも、學校友だちの全部のことにあらず。只冬夜電燈のもとに原稿用紙に向へる時、ふと心に浮かびたる學校友だちのことばかりなり。

上瀧嵬　これは、小學以來の友だちなり。嵬はタカシと訓ず。細君の名は秋榮（アキナ）。秦豐吉、この夫婦を南畫的夫婦と言ふ。東京の醫科大學を出、今は厦門の何とか病院に在り。人生觀上のリアリストなれども、實生活に處する時には必しもさほどリアリストにあらず。西洋の小說にある醫者に似たり。子供の名を汸（ミノト）と言ふ。上瀧のお父さんの命名なりと言へば、一風變りたる名を好むは遺傳的趣味の一つなるべし。書は中々巧みなり歌も、何も素人並みに作る。「新内に下見おろせば燈籠かな」の作あり。

野口眞造　これも小學以來の友だちなり。呉服屋大彦の若旦那。但し餘り若旦那らしからず。品行方正にして學問好きや。自宅の門を出る時にも、何か出かたの氣に入らざる時にはもう一度家へ引返し、更に出直すと言ふ位なれば、神經質なること想ふべし。小學時代に僕と冒險小説を作る。僕よりもうまかりしかも知れず。

西川英次郎　中學以來の友だちなり。僕も勿論秀才なれども西川の秀才は僕の比にあらず。東京の農科大學を出、今は鳥取の農林學校に在り。諢名はライオン、或はライ公と言ふ。容貌、營養不良のライオンに似たるが故なり。中學時代には一しよに英語を勉强し、「獵人日記」、「サッフオ」、「ロスメルスホオム」、「タイイス」の英譯などを讀みしを記憶す。その外柔道、水泳等も西川と共に稽古したり。震災の少し前に西洋より歸り、舶來の書を悉燒きたりと言ふ。リアリストと言ふよりもおのづからセンティメンタリズムを脱せるならん。この間鳥取の柿を貰ふ。お禮にバトラアの本をやる約束をしてまだ送らず。尤も柿の三分の一は澁柿なり。

中原安太郎　これも中學以來の友だちなり。諢名は狸、されども顏は狸に似ず。性格にも狸と言ふ所なし。西川に伯仲する秀才なれども、世故には西川よりも通ぜるかも知れず。菊池寛の作品の――殊に「父歸る」の愛讀者。東京の法科大學を出、三井物産に入り、今は獨立の商賣人なり。實生活上にも適度のリアリズムを加へたる人道主義者。大金儲したる時には僕に別莊を買つてくれる約束なれど、未だに買つてくれぬ所を見れば、大した收入もなきものと知るべし。

山本喜譽司　これも中學以來の友だちなり。同時に又姻戚の一人なり。東京の農科大學を出、今は北京の三菱に在り。重大ならざる戀愛上のセンティメンタリスト。鈴木三重吉、久保田万太郎の愛讀者なれども、近ごろは餘り讀まざるべし。風采瀟洒たるにも關らず、存外喧嘩には負けぬ所あり。支那に棉か何か植ゑてゐるよし。

恒藤恭　これは高等學校以來の友だちなり。舊姓は井川。冷靜なる感情家と言ふものあらば、恒藤は正にその一人なり。京都の法科大學を出、其處の助教授か何かになり、今はパリに留學中。僕の議論好きになりたるは全然この辛辣なる論理的天才の薰陶による。句も作り、歌も作り、小説も作り、詩も作り、甚も作る才人なり。尤も今はそんなことは知らぬ顏をしてゐるのに相違なし。僕は大學に在學中、雲州松江の恒藤の家にひと夏居候になりしことあり。その頃恒藤に煽動せられ、松江紀行一篇を作り、松陽新報と言ふ新聞に寄す。僕の恬然と本名を署

して文章を公にせる最初なり。細君の名は雅子、君子の好逑と稱するは斯る細君のことなるべし。

秦豐吉　これも高等學校以來の友だちなり。松本幸四郎の甥。東京の法科大學を出、今はベルリンの三菱に在り。善良なる都會的才人。あらゆる僕の友人中、最も女に惚れらるるが如し。尤も女に惚れられても、大した損はする男にあらず。永井荷風、ゴンクウル、歌麿等の信者なりしが、この頃はトルストイなどを擔ぎ出すことあり。僕にアストラカンの帽子を呉れる約束あれども、未だに何も送つて呉れず。文を行るに自由なることは文壇の士にも稀なるべし。「ストリントベリイの最後の戀」は二三日に譯了せりと言ふ。

藤岡藏六　これも高等學校以來の友だちなり。東京の文科大學を出、今は法政大學か何かに在り。僕の友だちも多けれども、藤岡位損をした男はまづ外にあらざるべし。藤岡の常に損をするは藤岡の惡き譯にあらず。只藤岡の理想主義者たる爲なり。それも藤岡の祖父に當る人は川ばたに蹲まれる乞食を見、さぞ寒からうと思ひし餘り、自分も裸に一枚になりて嚴冬の椽側に坐り込みし爲、とうとう風を引いて死にたりと言へば、先祖代々猛烈なる理想主義者と心得べし。この理想主義を理解せざる世間は藤岡を目して辣腕家と做す。滑稽を通り越して氣の毒なり。天下の人は何と言ふとも、藤岡は斷じて辣腕家にあらず。欺かし易く、欺かされ易き正直一圖の學者なり。僕の言を疑ふものは、試みにかう考へて見るべし。――芥川龍之介は才人なり。藤岡藏六は芥川龍之介の舊友なり、その舊友に十五年來欺されてゐる才人ありや否や。（藤岡藏六の先輩知己は大抵哲學者や何かなるべければ、三段論法を用ふること斯くの如し。）

その他菊池寛、久米正雄、山本有三、岡榮一郎、成瀬正一、松岡讓、江口渙等も學校友だちなり。然れども是等の友だちのことは既に一度以上書いてゐるか、少くとも諸公百年の後には何か書かせられる間がら故、此處には書かざることとすべし。只次手に書き加へたきは忘れ難き亡友のことなり。

大島敏夫　これは小學時代の友だちなり。僕も小學時代には頭の大いなる少年なりしも、大島の頭の大いなるには一歩も二歩も遜りしを記憶す。園藝を好み、文藝をも好みしが、二十にもならざるうちに腸結核に罹りて死せり。何處か老成の風ありしも夭折する前兆なりしが如し。尤も僕は氣の毒にも度たび大島を泣かせては、泣蟲々々とからかひしものなり。

平塚逸郎　これは中學時代の友だちなり。屢僕と見違へらしと言へば、長面瘦軀なることは明らかなるべし。ロマンテイツクなる秀才なりしが、岡山の高等學校へはひりし後、腎臓結核

に罷りて死せり。千塚の父は豊家なりしよし、その最後の作とか言ふ大幅の地藏尊を見しことあり。病と共に失戀もし、千葉の大原の病院にたつた一人絕命せし故、最も氣の毒なる友だちなるべし。一時中學の書記となり、自炊生活を營みし時、「夕日に鱶買ふ書記の細さかな」と自ら病弱を嘲りしことあり。失戀せる相手も見しことあれども、今は如何になりしや知らず。

淡として水の如し

上司小劍

私は幼い頃から、友だちといふものが殆んどなかつた。ほんの小藩ではあつたさうだが、昔しの領主ともいふべきものゝ家を父が襲いでゐたので、まだその頃は階級根性が故老の間に多く殘り、私を對等の位地に置いて、其の子供を遊ばせてくれる村人はなかつた。先方では尊敬してゐてくれるつもりか知らないが、私は『西さんの坊んち』として、村童から退けものにされた。西さんといふのは、私の家がお宮の境内の西の方にあるので、村人がさう呼んだのである。苗字を呼ばずして、方角で尊稱をつけるなんぞも、先づは殿さま待遇と言はうか。今から考へてみればばか／＼しい話だ。とにかく、さうして尊敬さるゝといふことが、幼い私にとつて、實に迷惑な話で、何一つ多くの子供たちの仲間入りは出來ない。私の家の者や、村の父老たちの眼を偸んで、村童の群に混つて面白く遊んでゐると、忽ち家の者か村の父老かに發見され、『まア坊んち飛んでもない』といふやうなわけで、引き分けられてしまふ。何んしろ、私の家へ來る時は、門前で草履を脫いで入る村人のまだ殘つてゐた時代だもの、たまつたもんぢやない。私の孤獨性は、この頃の幼い頭に十分染み込んでしまつたのである。

都會の學校へ行くやうになつてからは、『おまへ、おれ』で呼び交はす外形的親友も少しは出來たが、これも今は四散してしまつて、死んだか生きてゐるか、わかりもしない。都會といつても、地方では、東京とちがつて、昔し一中に學んだ人が、

今は知事になつたり、文壇の大家になつたりして、出世した人有名な人の同窓會を開くといふやうなことは、先づ出來ない。それに私のやうな孤獨性の人間は、學校にゐたとて、進んで親友を作らうとはしなかつたから、大勢が賑かに遊んでゐる時、獨り運動場の隅に立つて、空を眺めてゐるといふやうなことが多かつた。よしや東京の學校へ入つてゐたとしても、おそらく私には竹馬の友といふものが一人も出來なかつたであらう。『仙人、哲學者、結構人』そんな風に、私は都會の少年の仲間から呼ばれてゐた。

君子の交りは淡として水の如く、小人の交りは何んとかで醴(あまざけ)の如し、といふことが、小學にあつたと思ふ。私は君子でもないけれど、人と交るのは、誰れに對してもまことに淡として水の如くである。深く立ち入らぬ物寂しさを感じないこともないけれど、性分だから仕樣がないといふ習俗的の言葉で其のまゝ蓋(ふた)をしておく。醴の如く甘く濃い交りが腐らずにつゞいたら、人生の幸福此の上なしでもあらうか、腐つて不和になる小人の交りの實例を時折り見せられると、仲たがひをするほどに深い親友のない自分を嬉しいとも思つて、孤獨を讃美することがないでもない。

私はどういふものか、少年の頃に年長の友だちが多かつた。二十歳頃に可成り深く交つた人の中に、今も忘るゝことの出來ないのは、月輪石香といふ老人であつた。老人と言つても、其の頃四十一二であつたらうか、今時の四十一二とちがつて、其の頃の四十一二はずゐぶん老爺くさいものであつた。顎から頬から髯が長く、伸びてゐて、凄い顏をしてゐたが、きれの長い眼に優しさが見えて、所謂赤心を人の腹中に押すとでも言ふべき好人物で、義俠心も强く、友情に厚い男であつた。腹の底から親切で、隔てのない、平な心の人であつた。相手によれば、かういふ人こそ、斷金の友とか刎頸の交りとかいふやうなもの〻出來さうな人であり、また一片の好々爺ではなくて、奇骨稜々といふ風な變りものであつた。彫刻を業として、大阪の北野の萬歲橋附近の裏長屋に、出戻りの妹と二人で貧しくくらしてゐたが、貧を樂むといふ風で、今日食ふ米がなくとも、ニコ〳〵笑つてゐた。妹をば近所では細君だと思つて、さう呼んでゐたが、辨解するのも面倒くさいからと言つて、現在の戶口調査にも妻といふことにしてゐた。

『上(かみ)さん。』と私を呼びかけて、「君はこの老爺(おやぢ)のどこがよくて、かう懇意に附き合ふんぢや。それを一つ訊きたい。」なぞと、石香はよく言つた。同年輩に友人のなかつた私は、この石香と其の兄の眞宗坊さんとが、殆んどすべての友人であつた。「上さ

ん、まんだ買ひに行かうかい。」なぞと、石香は私を誘つたこともある。石香は私のことを『上さん』と呼ぶので、其の妹は『卯平さん』と聞いて、私の名をば卯平だと思つてゐた。それを石香は別に說明もしないでゐた。

二十歲前後から附き合つてゐる人に、唯一人の堺利彥氏がある。友人と言つてよいか、先輩と呼んでよいか、友人と先輩との合ひの子ぐらゐのところだが、ともかくも私の一ばん古い知人の一人で、今もなほ交際がつゞいてゐる。餘り深入りし合はない交際だから、喧嘩をすることもなく、箱根の山の鐵道の複線が、川を渡り山を潛つて、近寄つてはまた少し離れ、また近寄つてはまた離れ、さうして、鐵橋もトンネルも別々のを渡り、潛り、或る時は向ふに鐵橋があつて、こツちにはなかつたり、こツちにトンネルがあつて、向うにはなかつたり、いろ〱さま〲な形で、並行しながらつゞいて行く。しかし、並行線だ。決して交叉することにない。……といふ風の交りだ。私にはこれ以上の親友がない。

德田秋聲氏、正宗白鳥氏は、堺氏に次いで古いお附き合ひである。つゞいて近松秋江氏がある。つひ二三年來の知り合ひながら、久米正雄氏も逢つて氣もちのよい人である。其の他文壇の同業者にはさすがに知り合ひの人々が多い。しかし、少年時代からの孤獨性をつゞけてゐる私には、進んでこちらから訪問するといふやうなことが滅多にないので、偶然逢へば、古い友達や同じ文筆に携はる人たちは、皆氣持ちよく附き合へて、嬉しいと思ひ、これから頻々かういふ人々に逢ひたいと思ふのだが、倩さうも行かないで、二三ケ月から半年も逢はないでゐる人が多い。先輩の中で、(德田氏もむろん先輩だが)田山花袋、島崎藤村のお二人は、いつお目にかゝつても、嬉しい人で、何か知ら教訓を得ることが多い。懷かしい人々のうちの最も懷かしい方々である。人物評に渉つてはわるいが、正宗氏を世間では薄氣味のわるい人のやうに言ふものがあるけれど、よく附き合つてみると、冷かな皮の中に、温かい血を貯はへてゐて、底の方の熱を無理に押さへてゐるといふところがある。浮世の義理といふやうなことは、私なんぞよりもよく心得てゐて、よく果たす。それに冷淡を裝ひ(?)ながら親切で、人を嫌ひ(?)ながら人に好かれる人である。

其の他、近くに住む人とは、地理的關係上、逢ふ機會が多いので、つひ懇意にもなる。伊庭孝氏は同じ目黒で、蓄音機の同好者で、音樂に對する造詣が深いから、蓄音機を眞中にして、言はゞ恭敵といふ風の親交をつゞけてゐる。讀賣新聞時代、十年この方知り合ひである仲木貞一氏や土岐哀果氏もすぐ近くに

居るので、時々往來してゐる。仲木氏の息子の繁坊は、殆んど毎日私の家へ來てよく泊つて行く、私の最も小さい友達で、氣が利いてゐて、いろ〳〵の用を達してくれる。仲木氏も近頃五百圓のチェイを手に入れて、蓄音機友達に加はつたが、まだレコードが乏しいので、少し寂しい。何んしろ文部省の映畫音譜審査委員といふことだから、今にいゝコレクションが出來るであらう。とにかく蓄音機とか、寫眞機とか、獵とか、或は音樂の稽古事とか、碁將棊とか、或る種の遊興とかいふ、物を介しての交りは、特殊の親しみがあつて、言ふに言はれぬ味のあるものだ。

私は友達に乏しくて、寂しいとは思つてゐるけれど、其の代りに、手を翻へせば雲となり手を覆へせば雨、……といふやうな輕薄な友人は一人もないし、黃金多からざれば交り深からずと言つたやうな、いやな目を見たこともない。空想かは知らないが、世界中の人達を殘らず親友として、樂しく生活して行くやうな世の中に、早くなつて欲しいものだ。

交遊の廣狹

徳田秋聲

私は無精に慣れついてゐるお陰で、交遊は決して廣い方ではないが、自分では食物や其の他の趣味生活と同じやうに、さう干渉をしないつもりでゐるから、主觀的だが交友の範圍に入る人は相當に多い。その中には通り一遍の人もあるし、年に一度の年始狀で、その人を思ひ出すくらゐの人も甚だ多い。一度何かの因緣で、交渉の多かつた人が、双方の生活事情のために、記憶から殆んど消え去つてしまつたくらゐに疎々しくなるのは、何となし頼りなく感ぜられるものだが、其の人が餘り幸福でない場合、或ひは生死さへわからぬくらゐ、友人の誰彼にも存在の忘れられてゐるのは、殊にも果敢ない感じがする。

劇場の廊下などで、絶えて久しく謦咳に接しなかつた舊交の人と、ふと出逢つて、お互ひに久濶を叙するのは、むかし讀んだ

本を讀んだり、昔し見たきりで、絶えて出なかつた芝居を見ると同じような懷かしさで、特別の興味はわかないにしても、好い事をしたやうな氣のするものである。時とすると、挨拶をされて困る場合も可也多い。劇場に限らず、往來や電車のなかなどで、聲をかけられ、話をしかけられたりして、たしかに見覺えのある顏だが、何ういふ人で、何といふ人だつたか、何うしても思ひ出せないことが、忘れつぽい私には、近年殊に多いので、その人には誠にすまないと思つてゐる。またたしかにお互ひ知つてゐる筈であるやうな感じで、じつと顏を見合ひながら、私の方で思ひ出せないために、終にそれきりになつてしまふやうな場合などは、殊にも頼りのないものである。

交遊の廣汎にわたりすぎるのは、悪くすると生活を散漫にする嫌ひはあるが、しかし又た餘りに狹く限られてゐるのは、決して生活を豐富にする所以ではない。

友人では何と言つても、同窓といふものほど好いものはないやうに思はれる。職業上の友人も無論好いには好いし、心持の交渉から言つても後者の方に興味の多いのは勿論だけれど、それが同窓である場合には、殊にも親しみが多い。たとひ双方の我儘が出て、猛烈な論難なぞする場合でも、それが職業上のことであると、私交上のことであるとに拘はらず、お互ひに迷惑とか氣兼とかいふやうなものは、殆んど必要がない。敵視するやうな狀態におかれた場合でも、染みこんだ親しみは、容易に渝ることがない。さういふ點では菊池久米芥川なんといふ文壇の三人男は、づゐぶん果報に生れついてゐる人達だと羨ましく思ふ。

私にはさういふ友人はないが、しかし暫らくでも四高にゐたお蔭で、その時分の同窓會には通知をしてくれることになつてゐて、最近でも中川詮吉博士の歸朝を迎へ、松平市三郎氏の洋行を送つたり、又松平氏の歸朝を迎へるために同窓會に出席したりして、昔しの同窓に逢ふのは、甚だ愉快である。中には學界の權威もあるし、實業界の新進もあり、政治家も教育家も軍人もあつて、私なぞは不斷の交渉は少ないけれど、顏を合すだけでも當年白面の學生氣分に浸ることができる。その中には中川友次郎、中川忠順、清水澄、國府犀東、小幡酉吉、鶴見左右吉、堀内秀太郎、稻垣末松、春秋原左衛文、納富贅一、若林欽一、藤岡淨吉、山崎延吉、前川益以、その他色々の人を數へることが出來る。

文壇では何といつても、正宗白鳥氏と私交上で尤も接觸が多かつた。氏の言ふことは、ちよつとした芝居の批評でも、私に

は一番適切だし、又た一番私を知つてゐてくれるやうに思ふ。岩野泡鳴氏に死なれたことは、私に取つてはづゐぶん寂しい。あれほど親しくしてゐた秋江氏が、最近めき〳〵腕を上げて來たのは、私も尤も悅ぶところで、私交の上では忌憚なく口の利けるなかだと、今でも信じてゐる。君のことも頭の先きから爪先きまでわかつてゐる積りだが 許すや否やは疑問である。上司小劍氏が讀賣以來の畏友であるのは言ふまでもない。

鏡花君とは尤も親しいのが當然で、私は親しく思つてゐるが、これも君が許すか何うかは問題である。芥川君や久米君とも交りは辱くしてゐるが 中村武羅夫、葛西善藏、水守龜之助の三君などは色々の意味で、親交の深い方だが 殊に中村君とは年來尤も密接な私的交渉があるが、紫芳閣の足立欽一氏もづゐぶん私のことをやきもき思つてくれる方である。

眞山青果君とも、またちよつと切つても切れないやうな友情關係があることを書き忘れてはならないが、あれほど酒の介抱をさせられ、藝術論を闘はした小栗風葉君と、絕えて逢ふ機會のないのは、物足りないことの一つだと、思つてゐる。

武林無想庵氏もまた私の尤も好きな人の一人で、最近では餘り交渉がないけれど、決して他人行儀のなかではない。その外名古屋にゐる桐生悠々氏は竹馬の友で、三島霜川氏も文壇へ出る頃からの親友である。

人生の伴侶としての交友

田山花袋

△

この人生での伴侶は、妻にあらず子にあらず友達であるといふことは、度々私も考へることである。それは妻にしても子にしても大切なのは言ふを待たないが、何うもその交渉が肉體的なので、うまく行かない。ことに夫妻の關係は、おたがひの間が

餘りに平行しすぎてゐる。深く觸れたつもりでゐても却つて淺間なところで妥協してゐるやうな形がある。私の經驗では、奥の奥まで夫の心を理解するなどいふことは、大抵な妻には期待することが出來ないやうである。妻や子は日常生活の伴侶としては適當であるかも知れないけれども、深い心の友達とすることは出來ない。

△

それはいかに親しい友でも、體や心は矢張別々であるのであるから、友人なんてあてになつたものではないといふ風に考へることもあるにはあるが、深い心の孤獨に落ちた時にはことにさうした感じが深いが、しかもそこから浮び上つて來る時には、何と言つても友達が一番先きに力になつて呉れるものである。その孤獨の淵から熱心に引上げて呉れるものである。何と言つても、同じ教養を受け、同じ時代の空氣を吸ひ、同じ戀愛や功名の場を通つて來たものだけに、ぴたりと心と心とが觸れ合ふことが出來る。『そんなことを考へてゐずに出かけて行つて見やう。ちつとは心も慰むだらう？』私はかう思つてはよく友達の許へと出かけて行つた。

△

交友の中では、私は柳田國男君を最も早くから尊敬してゐた。君は私よりは年は四つか五つ下なのだつたが、却つて私が弟のやうであつた。いつもいろいろな話を聞いて、それに刺戟された。私が兎に角迷ひもせずに外國文學に入つて行つたのは、その大半は君の指導に由つたと言つて好いと今でも思つてゐる。それから、國木田君と島崎君、この二人は私になくてならない人と言つて好かつた。私のやうな鈍才が、碌々燃えもしないやうな心を兎に角燃やして今日までやつて來たのは、全くこの二君のお蔭だと思つてゐる。だから、私に取つて一番幸かつたのは、明治三十八九年頃——島崎君が『破戒』を、國木田君が『獨歩集』を公にして、二人とも一躍してすぐれた作家として世間に迎へられた時であつた。私は私一人取殘されたやうな氣がした。ゐても立つてもゐられないやうな氣がした。（兎に角自分も何か自分のものを出さなければならない。いかに拙くとも、拙いなりに自分のものを出さなければならない——）かう思つて私はいつも勤めてゐる社から戻つて來た。私は今でも毎日さういふ心持を抱いて、電車を下りて郊外の自宅へと戻つて行つたことを思ひ起した。

△

親友が自己の好敵手であるといふことは人生に生きる上に於て、最も幸福なことであらねばならなかつた。

△

その次きに、私は前田晁君と親しかつた。君と私とは、單に机を並べた同僚といふ間柄ではなかつた。私は種々な深い感化を君から受けた。君の潔癖から。君の眞面目な態度から。君の濁らない清い心持から。文藝上のことでは、幾年か早く生れてゐるだけに、私の方が多少の感化を君に與へてゐるかも知れないけれど、實際の方面では、私は常に君に負うところが多かつた。私はいつも君の眼の中に常にはつきりした判斷を見た。是非の判斷を見た。そして私はいつもそこから綱を戻した。私は深淵に墮ちるやうな危いところをそのために何遍となく免れて來たことを今でもはつきりと記憶してゐる。從つて倶に樂しむことも出來れば、倶に苦しむことも出來るのは君であると私は常に思つてゐる。それに、君はしつかりと藝術をつかんでゐて決して放たなかつた。世間並であることを願はず、流行兒であることを願はず、しかもいかなる艱難に處しても、竟にその保持したものを失はないといふその操持は、容易に他の眞似ることの出來ないものであると私は思つてゐる。

△

親しい友達といふ意味でなくとも、尊敬してゐる人達は澤山ある。眞面目にそれはその作品については、いろいろなことも言つてゐるし、失禮なことも言つてゐるだらうが、しかも藝術をしつかりと保持してゐる人達は皆なわが尊敬すべき友達だと言つて好いと私は思つてゐる。平生は無沙汰をしてゐても、相逢へば、決して他人だとは思つてゐない。中でも秋聲君だとか白鳥君だとかいふ人達は、長い間同じ道を通つて來てゐるだけに、ことに共通したところがあつてなつかしいと思つてゐる。小劍君や秋江君などにも常に深い親しさを持つてゐる。

△

孤獨といふことも人間には必要ではあるが、しかし交友はおろそかにはならないと私は思つてゐる。交友に對する心持如何に由つて、或は浮び或は沈む。またその交友の如何に由つて、あるものは砥礪し、あるものは荒廢する。文壇などでも一々考へて見ると、その一緒にやつたものの如何に由つて伸びたり萎

んだりしてゐるさまがはつきりそれと指さゝれるし、好いグルウプだの悪い群だのと言はれるのはそのためだといふことがわかる。それに、友情といふものは不思議なもので、いくら好きになりたいと思つても容易になれないやうなところがある。それに、若い時分には、友達も澤山出來るが、年を取ればとるだけ、さういふ機會が尠くなつて行く。それに出つても、昔の友達の言ふに言はれないなつかしい人生の色彩であるといふがわかろと思ふ。

芥川龍之介と萩原朔太郎

室生犀星

金澤へ芥川君が訪れて來た朝、迎へに出た私はまだ夜のあけないやうな仄暗い寝臺車の中に、なりの高い男がトランクを持つて立ち上つた姿を見て、何とか聲を懸けた。が、すぐその反對の座席から洋服姿のほそ長い芥川君がすつくりと立ち上つた。まちがへたなと思つた。

「君、間違へたね。」

「中がくらいもんだから……。」

「あいつは新婚ものらしくべたべたして不愉快だつたよ。」

車へ乗らうとする時に、その新婚ものも車に乗つた。車は町並みの家をまがり、ふつくりとした新樹を背後にした通りへ出ると、朝らしく人通りの影も爽々しかつた。

「なるほど、こりや靜かだな。震災後こちらへ來たときは靜かだつたらうね。」

「何だか却つて氣持の悪いやうな氣がした。山なんか何日うごき出すか分らないやうな氣がしてね。」

公園の入口で車が駐ると、三芳庵の別莊への段々を上り、茶室づくりの離れへ這入つた。十疊二間と、六疊の着がへ部屋と、玄關の間に、女中部屋のとなりに湯殿があつた。

「これをみんなつかふのかね。」

「一切そつくりなんだ、食事は崖下から搬んでくるのさ。」

芥川君は服のまゝ十疊二間通しの部屋の中を、あち行きこち往き昂然と歩きながら、墨繪の繪のある屛風にしやがんで覗いてゐた。これは相當に古いね、さう言ひながら心臟の惡い人のやうな息切れをさせた。

「おかしなものがあるな、ありや何んだらう。」

朝日の流れ込んだ深い森になつてゐる瀧の落ち口の、赤松の梢に桶のやうなものが結びつけてあつた。私もわかりかねてゐたので女中にきくと「あれは小鳥の餌箱でございます。」と答へた。

「はあ、小鳥に餌箱までやるのかな、こちらの小鳥まで仕合せだな。」

暫らくすると、昨夜ね、上野を出るときに金澤の方へ足を向けて寢てゐたんだが、目がさめると、何時の間にか上野の方へ足が向いてゐるんでちよつと吃驚りしたと言つたから、いやあれは柏原邊で汽車道がひつくり返つてゐるんだと、よく分らないが左う言つて置いた。

翌々朝、私は自分の家の前の土手を歩いてゐたら、約束通りに一臺の俥が川べりを走つてあるいて來た。せいの高い男ゆえちよこなんと俥の上に坐つてゐるやうな格好をして、どこか新進のお醫者さんめいて見えた。

「昨夜ね、風呂桶につかつてゐると、ふいにうしろの方のくらがりから、旦那さまと呼ぶものがあるんだ、よく見ると別莊番のおばあさんなんだ、そのだんなさまが恐かつたよ。何んでもよいからこのばあばあにもおかたみに一枚短冊をかいてくれと言つてね。」

私は短冊箱を取り出した。「おばばのだから紅い短冊を喜ぶだらう。」さう言つて一枚かいた。

「女中のおせんが湯呑をくれたから、何か返さなければならん。」

さう言つて吳服屋でうすもの一反を買つた。これでいいだらうねと言つた。禮儀に厚かつた。

翌日、桂井未翁、太田南圃の二老俳人と、詩人の小畠貞一君と芥川君、私などして前田家歷代の墓碑のある野田山へ遠足をした。亭々たる赤松の群立つた谷の間に、春蟬がじゆんじゆんと遠啼きをつゞけてゐた。疲れた五人はチヨコレエトの錫を爪先きに剝いてゐた。

「いゝな。」

芥川君は眼をほそめうつとりした。私も十年振りの登山だつたので、春蟬の濃いえぐい啼聲に心を浸した――いま僕のゐる宿

をよろこぶものは天下に誰がゐるかな。」「志賀直哉かな。」私はさうこたへた。「さう言へば志賀君ならよろこぶだらうね。」と言つた。

「南圃さんは古武士のやうなところがあるな。」

私は櫻の枝を持つて袴をはいた姿を指さした。「桂井さんはやはり俳人らしい。」芥川君はさう言つた。ふたりとも五十を出てゐて、北陸俳壇の双璧だつた。

前田家歴代の墓碑を見て山を下りかゝると、南圃さんが芥川君と一墓の碑銘を讀み合つてゐたが、南圃さんはすらすらと讀み下した。芥川君は南圃さんの讀めぬ字をよんだ。私は二人のうしろに立つて、金澤地方の墓碑研究の大家である南圃さんと、若い芥川君とにふしぎな時代の飽和を感じた。

茶店で一憩みして町の料理屋でひるめしを食べ、桂井さんのところで英國の古い地圖を見た。そして二老人は町にある古陶器の内見に出かけた。芥川君も私もすつかり草臥れてゐた。

「何といふ達者な老人だらう。」

私は芥川君のうすずみ色の曇りを帯びた、わるい二枚の前齒を見て、すぐホシ胃腸薬の二十錢の罐を思ひ出した。

○

大正六年の初夏だつたかに或る會合で、初めて芥川君にあひ、かへりに一緒だつた。

「あゝいふ會に出る女のひとには賛成しかねるところがありますね。われわれの女房はそんなことをしたがらないから仕合せですね。」

芥川君はさういふ親しい口をきいた。ゆだんのならぬ男だとなぜか左う思ふた。それからあとに私は同君の書齋をたづねたが、やはり歸りには親し氣なところが益々ゆだんのならぬ男だと思つた。大正十年ころには一ト月に一度くらゐ會つてゐたが、やはりその感じであつた。地震前二年くらゐから私は却つてゆだんしてもいい男だと思つた。ゆだんしてぼろを出してゐても、いいところはちやんと見てゐる、もう心をゆるしてもいいと、友をこさへることに疑深い私はさう思ふやうになつた。

「荻原さんでも芥川さんでもうつかり物がいへないやうな氣がする。」

詩人の多田不二君がいつか左う言つた。

荻原君と交際つた始めにも、やはりどこまで氣を許してゐるのか、また、どこまで往つていい友情だかが分りかねた。芥川君のやうに親しげにはせず、それでゐて卒氣ないところもなく、あるひは氣をゆるしてゐるやうにも思へて、一向あてをつき止

めることができなかつた。やはり、ゆだんのならぬものが底の方に喰つてゐるやうで、氣をゆるせずにゐた。こちらで左ういふと、僕はそんな氣なんか一向しないんだがね、さう言つて、

「君はどうかすると仲々うたぐり深いからね。」

と、萩原君が言つた。

「僕は誰とでも友人になれるが、ある一とところへゆくと、そこから滅多に通さないんだよ。」

と、芥川君がいつか僕は友人ができなくつてこまると言つた答へを答へて左う言つた。なるほど左うかなと思つた。いつか萩原君も同じいやうな意味で、僕は誰とでも話をする方だし友人になれるが、ずつと續いていかないんだよ、向ふでも、こつちでもたいくつしてしまふんだ、やはり氣心を知り合はないで表べばかりの友だちなんだからだね、と言つた。

まだ芥川君は會はない前に、

「君、芥川といふひとを知つてゐるかね、同じ田端にゐるんだがね。」

「知らんね、君は知つてゐるのか？」

「いや知らんよ、詩集を送つてから手紙のやりとりはしてゐるんだが、俳句をかいてくるよ、俳句はうまいね。」

「さうか、――。」

「あのひとの書くものは中々おもしろいぢやないか。」

と、左う萩原君が紹介した。

萩原君が金澤へ來たのは、大正二年ころだつた。そして古いうす暗い家や町を珍らしがつた。

「これは何だね。」

萩原君は西洋料理店で出したますのフライを甘美がつた。

「こんなうまいますは食つたことはないね。」

そして私が案内した或るしもたやの娘さんで詩をかくひとに會ふと、れいの神經質らしくからだのどこかを痙攣らせながら、人のよい笑顏をつくつて話してゐた。上品な、育ちのゆたかな、微塵も俗氣のない男振りであつた。「やはり想像とはちがつて君はまるで書生のやうな人だ。室生犀星といふ詩のかんじからくるものは、どこか弱々しい感じであつたが、まるで違つてゐた。」と言つて笑つてゐた。

「しかし僕の想像はちやんと當つてゐたよ、君はやはりそんな人だと思つた。」

私は左う言つてこの友を得たことを喜んだ。

東京で毎日會つてから、ゆだんしてもいい人からだと思つた。そしてしまひには、ゆだん仕すぎてしまつたと言つていい

くらゐであつた。

根津權現境内に涼しい木かげがあり、そこで二人はぶらぶら歩きながら鉛筆で書簡紙によく詩をかいた。そしては萩原君の下宿で二人で飯を食つた。私どもは新詩體といふことを能く口にした。それは日常の暮しが悲しくてひもじく貧しかつたので、私がいひ出した言葉であつた。さう言へば何一つ祈らずにゐられぬ有様だつた。祈れば木の實落つ、とか、魚ののぞみとどかず、松並木からからと鳴り、とか、さういふ詩が多かつた。

「君とかうして毎日飲んで歩いてゐると一日一圓づつ費る。」

萩原君は或る裏町を歩きながら言つた。それもその筈であつた。萩原君は何時でも私と二人前出さなければならなかつた。

しまひにどうも君とは惡緣だねと言ひ出した。私はそのときにも何日かはこの友を招宴する遠い一夕を、あてもない將來の日に酬える好意をいと甘い心もちでよく空想した。

爾來十年、一昨年の夏に赤倉溫泉へ二人で旅行をして、一浴の後に老鶯の聲を霧罩める谿間にききながら、むかし話にふけつてゐると、

「むかしの室生犀星がよかつた。」

と、萩原君は山の方を向きながら嘆息と好意とを交ぜた、ひ

とつの欲談としてぽつりと言ひ出した。私は何となく物悲しく往時を想ひめぐらした。が、なぜ萩原君が左う言つたか、分つたやうな解らないやうな氣がした。

「萩原君の新しいところは、あれは田舍にゐても東京にゐても同じ程度の新しさだね。」

芥川君はいつか左う言つた。

萩原君は田舍にこもりながら、今でもあのくらゐの大家を印刷屋の前へ通ると、萩原の子息が通ると言つて、いかにも、のらくら者のやうに聞えがしに囁くさうだ、その話をして萩原君は東京へ出たいと言ひながら、やはり田舍にゐる――。私はその話を氣の毒に聞いた。あのひとのお父さんお母さんも善い人であつた。べつに原稿料などを取らないでゐる萩原君を悠々として愛してゐられるところが稀れに見る、美しさであつた。それも一年にすれば十二三くらゐの詩をしか書かない。自然に詩壇の芥川君に擬せられ世の敬慕を惹いてゐるところも偶然でないやうな氣がした。

去夏輕井澤に遊んだとき、芥川君は帽子をかぶらないで散歩に出た。私は高原の日光が强烈だからいけないと言つても、か

れは聞かないで、

「紫外線はからだにいゝんだよ。」

と、昂然と歩いてゐたが、かへりに低いこえで、

「眼がふらふらする……。」

さう言つて木かげに寄つた。「だから先刻毒だといつたぢやないか。」といふと、「あやまる、あやまる。」と言つた。ひ弱いところがあつた。一ぺんは强情を言つても自分にわかれば譯なく强情をてつかいした。

佐藤春夫君の印象記に「芥川君にぬけたところが一つもない。」と書いてあつたが、私はそれと反對に芥川君くらゐぬけたところのある人はないと思つた。よくつき合ふと味のあるぬけ方をした。才物などといふより、何も彼もわかつた。俗人にさへ和することのできる人がらを持つてゐると思つた。俗人の道をすら坦々として歩むものはどれだけゐるだらう。ときとすると文學者らしい垢をも持つてゐないところを人は知らず私は床しく感じた。

急告

中央公論編輯部
奈加村秋舟

右の名刺を携帶して近畿、中國、九州方面を徘徊し、弊社支局を大阪に設立するにつき、中央公論誌上へ廣告の揭載、又は中央公論購讀勸誘を强請いたし居り候趣、弊社としては嘗て斯る勸誘を試みたること無之のみならず、將來に於ても決して斯種の行爲は致し申さず候に付、右御承知の上萬一右樣の者罷出候節は其筋へ御突出し被下度此段廣告候也

一月六日

中央公論社



日本一の
時事新報
朝刊十頁
夕刊四頁
外に毎週漫画附録添附
は木を選
んで棲み
事業の成功
を望む時先づ
時事新報
の廣告を思へ
文明の紳士は
權威ある新聞
を愛讀す
紙幅の擴大
と内容の充
實せる點を
考ふれば一ヶ
月定價一圓の
時事新報は最善
且つ最良の新聞
であります
東京京橋區南
鍋町二の十二
時事新報社
發行
全國各地に
取次店あり

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も一度「カロット」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其所で榮川堂主は自身來社せる所意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は巻煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね—、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね—」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も巻煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを少體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對するあき嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット（凡百日分）

パイプ ベークライト製付	壹組 貳圓五十錢	送料 内地 十八錢 臺、朝、樺 四十五錢
パイプ 象牙製サツク入付	壹組 參圓五十錢	引替送料 内地 三十錢 臺、朝、樺 五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて發品可仕候

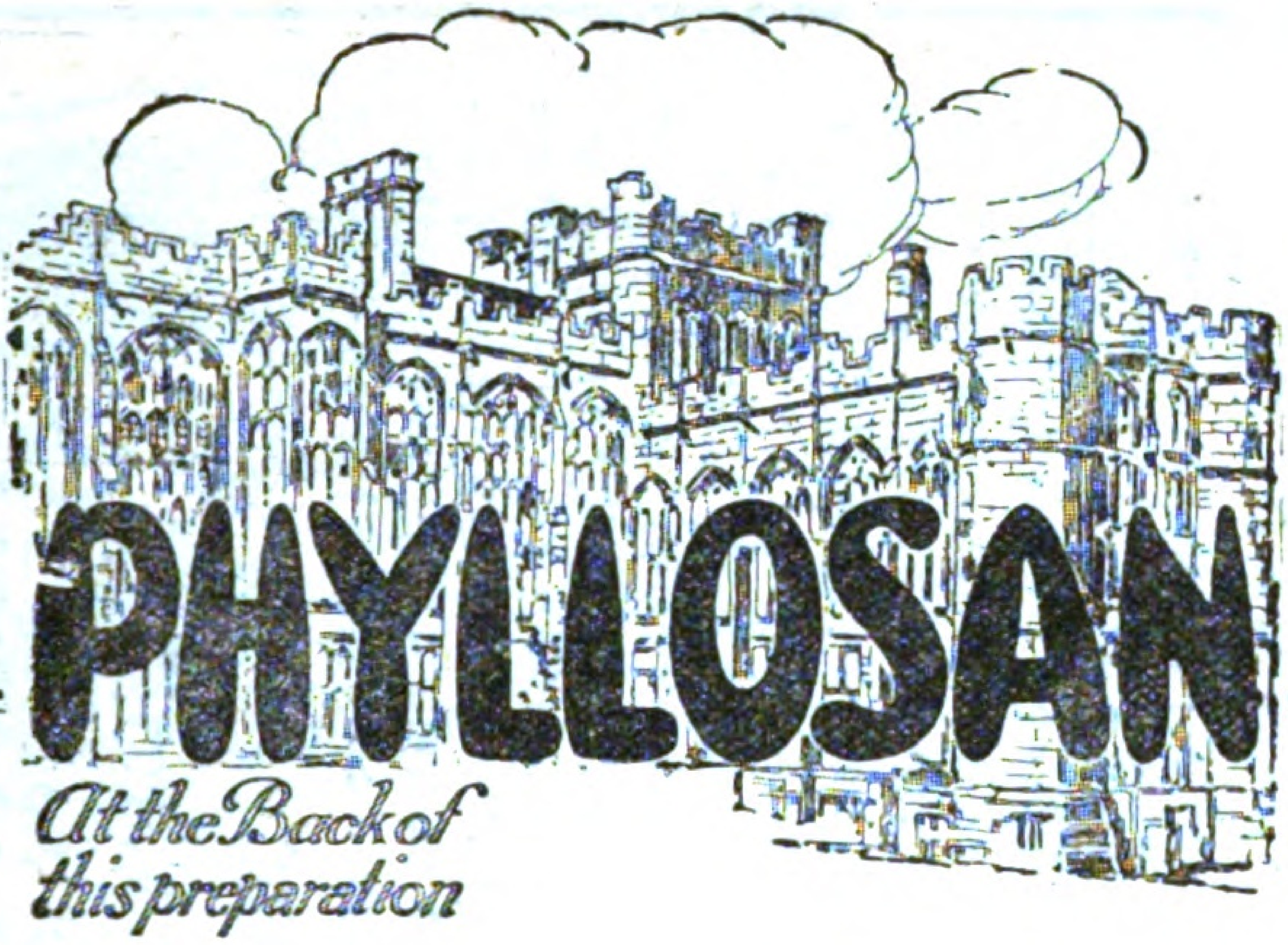
東京府大森入新井町不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區滝山町十三番地

代理店 天下堂



貧血症に著效ある葉綠素劑

フィローザン

瑞西ベルン大学教授
ピュルギー博士創製

貧血症の療法としては從來鉄の製劑が唯一のものである樣に考へられて居りました。ところが瑞西ベルン大学教授ビュルギー博士は多年硏究の結果、綠葉中に纖維で包まれてゐる葉綠素を人体に与へると、これが有力な血液構成素に変形すると云ふ事実を発見して世界の学界に大きな驚異を与へました。

多数の医家は爭つてこの說の当否を種々の貧血症に実驗したところ、其效力は從來用ひられてゐる鐵の製劑よりも遙かに優つてゐることが確認され、ビュ教授の名声は弥が上にも喧傳されました。この製劑はフィローザンと命名され販賣さるゝに至りました。

その服用は短時日に皮膚の血色を好くし、力量及食慾を恢復し、身神共に輕快を與へます。殊にこれまで最も難症とされた結核性貧血に対してすら、他の何れの補血劑を用ひた時よりもフィローザンを以て遙かに可良な成績をあげて居ります。

重病の後、胃腸病、結核又は腺病性の病気、婦人病、神経衰弱、ヒステリーに惱つてゐる人、產後の時などは血液の中の赤血球が減じて皮膚が蒼白となり、衰弱を伴ひ、貧血症の徵候を呈しますが、これ等の場合にフィローザンは最も早く確實に赤血球と血色素の含量を增加する作用があるため、內外の医師諸氏より多大の賞讚を博して居ります。

用量……一日四乃至六錠　包裝……一瓶六〇錠入……二円八〇　送料九錢

詳細說明書進呈

輸入元　株式會社　田辺元三郎商店
東京市日本橋區本町
振替東京一六六六三

各地著名藥店にて販賣す

想華

瞑想（續篇）

武者小路實篤

○

くり返して、自分の云ひたいことをはつきり云つて見やう。

自然はどうふるまはうと人間はどうすることも出來ない。

人間に出來ることは人間に與へられたものを、自己の目的に向つて生かすことが出來るだけだ。

足が與へられてゐるから歩く、歩く以上はころがりたくない。ちやんと歩きたい。最もよく足を生かしたものは、足を與へてくれたものに忠實である。

手についても、その他人間に與へられたもので、目的をもつてゐるものは、その目的に從つて鍛えてゆくなり、生かしてゆくなりするのが人間らしいことだ。

角力なんかとつても馬鹿氣てゐるが、しかし、人間の體力の發達したのを見るのは氣持がいゝ。その力強いのを見るのも氣持がいゝ、天與のものを鍛えぬき、生かしぬくのは、天與のものをゾンザイにするよりどんなに氣持がいゝだらう。

立派な體格、完全な體格は美である。勿論人間は體格ばかりのものではないが、體格の美を無視して否定することは出來ない。

美人が顏を美しくするのは、決してわるいことではない。美人は美人になる程いゝ。よしその美を利用する仕方がわ

るい時があつても、美そのものは讃美していゝ。醜い女が美人の惡口を云ふのは氣持のいゝものではない。しかし人間は顔さへ美しければいゝと云ふのではない。しかし顔の美しいと云ふことは、體格の美にまけないものである。勿論、他は他である。顔だけでかつても他でまければ仕方がないが、それは美人だからと云ふのではない。醜婦は他の點でいくらでも美人にかてるだらうが、顔で競爭するのは愚である。

目は人間にとつて大事なものではある。しかし人間は目だけではない。盲目で目あきより偉い人はいくらでもゐる。口だけで競爭すれば零だが他でまさることが出來る。

だが目が與へられてゐるものは、目を生かして美を求めるのは當然である。

與へられないものでやきもきするのは愚である。與へられてゐるものをどん／＼生かすことが立派なことである。このことは決して樂なことではない。又生かし切れるものでもない。それが皆生かし切れたら、人間は大した事を仕出かすであらう。自分達はあまり多くのものを與へられてゐるので、全部生かすことはとても一生かゝつても出來ない。

どんな小さいことでも熟練すれば段々進んでゆく、人間の頭も一面につゝこんでゆくとその方でいくらでも切りがない。與へられてないものゝことをかまつてはゐられない。

○

病人は氣の毒である。病氣にもいろ／＼あるが、しかしかゝつてしまつたら、なほせるものなら第一になほすのが大事だが、なほらなければ、自分に許された範圍で、自分の心をねり、氣持を鍛へ、氣分をおちつけ、そしてゆるされた僅かなよろこびを感謝し、すべてを天に任せて、或は信用出來る醫者に任せて、心をおちつけるより仕方がない。それは中々むづかしい時もあらう。苦痛に耐へない時は、泣いたりわめいたりもするであらう。だが自分の力にないことは何かに任せるより仕方がない。

心うれしく持つことが出來ればそれにこしたことはない。しかし病氣による。一寸した病氣で、熱もさう高くなく、生命の不安もない病氣は、たまにはいゝこともある。又生命の危險を眼前に見て、更に深いものに目をさますことが出來た人も少くない。さう云ふ人は賞讃すべきである。

○

人間は不可能なことをしないでも心はらくなはづだ。自分に可能でありながらずるけるのはよくない。賢い人は不可能のことと、可能のことをよく知る。人間に許されてゐることゝ、居ないことをよく知る。彼にとつては他人の不可能と見へることも可能のこともあれば、他人に可能と見へることの不可能のことを知る。元より賢い人も神ではないから、時に考へまちがひをするであらうが、しかし不可能と可能のことをよく知つて、無意味のことに心を勞しないことは事實である。そして自分のやるだけのことをやらないことは恥ぢるが、その他は恥ない。

○

奴隷で跛だつたエピクテートはローマの權力者とかう云ふ問答をしてゐる。

「私は誰でも牢獄にぶちこみたいものはぶちこむことが出來る」

「石ころのやうにですか」

「私は又鞭打したい人は鞭打することが出來る」

「驢馬をぶつやうにですか。それは人間を支配するのではありません。あなたが私達をどうすればいゝかと言ふことを教へるのが理性ある人間を支配する方法です、さうすれば私達は從ひます。それはよくないことだと言ふことを教へて下さい。さうすれば私達はさけます。私達をソクラテスが弟子を指導したやうに私達を指導して下さい。彼等の望むものとさけるものと、彼等の好むものと嫌惡するものとをよくわきまへ、人々の心をつかんだものが人々を支配するもの

と云ふべきである。「こうしろ。さうしてはいかん、云ふことをきかないものは牢屋にぶちこむぞ」かう云ふのは理性あるものを支配するのではありません。それよりはツオイスがしたやうにおしなさい。さもないとあなたが罰をうけます、損をなさるでせう」

「どんな損をする？」

「他ではありません、あなたが義務を果さなかつたと言ふ損です。あなたが神や人間に對する尊敬を怠つたことになり、道徳に背くことになります。之より大きな損害を見つけることは出來ないでせう」（譯者甚だ下手なこと恐縮）

多くの人はこんなことを言つても實行出來ないことを知りすぎ、エピクテートの言葉を笑ふであらう。しかし心ある人はこの言葉を聞いて本當だと思ふであらう。人間を人間以外のものとしてあつかふことに人々はなれすぎてゐる。しかし人間の内心は、いつまでたつても人間の内心である。牢獄や、罰だけを恐れはしない。自分が人間らしく生られないことを恥ぢる。

○

（自分はくり返し云はふ）
人間が人間を侮辱する！
自分の人間だと云ふことを忘れ
自分も死ぬものだと云ふことを忘れ
自分が罰を受けることを忘れ
子や孫の困ることを忘れ
人間が人間を侮辱する。

禍の種をいやが上に播きつこする。
いやなことだ。

○

人間が人間を助ける話
人間が人間を軽蔑する話、
お互に感謝しあふ話
ありがたい話だ。

○

釋迦はある處で豚の肉を食つた。
彼はその肉の毒なことを知つた。
すぐ他の人が食べないやうにそれをすてさした。
こゝまでは釋迦でなくとも出來るであらう。
釋迦はそのために
自分が死ぬことを知つた。
しかし少しも怒らなかつた。
少しもあはてなかつた。
勿論、かなしみもしなかつた。

これは一寸眞似が出來ない。
矢張り偉いと思ふ。

だが他の偉い人でもその位いは
やれるかも知れない。
さて釋迦は自分がそれを食つたゝめに
死んだことを弟子たちが知つたらう、
自分にわるい豚の肉を食はした人を
せめはしないかと思つた。
彼は悪氣のない人を
苦しめることを恐れた。
又食はした人が
恐縮しすぎることを恐れた。
其處で彼は、自分がその肉を食ふのが
さだめられた運命であること
だから決してその人をせめてはいけないこと、
又その肉で死んだことをその人に
聞かさないでくれと
弟子にたのんだ。

この思ひやりは
實に釋迦らしいゆきとゞいた
思ひやりとは思はないか。
他の人には出來ないことだ。

彼は苦しむ時は
隨分くるしんで
聲も出したが
頭がはつ切りしてくると
靜かに道をとき、
そして阿難たちの泣くのをなぐさめた。
あんなに教へておいたのに
まだ死別がそんなに悲しいのか。
彼は益々おちついてゐるが
弟子達はますます悲しむ。
佛陀の思ひやりの深さ
大きさ、

自分のことを思ふには
あまりに大きな愛、
佛陀らしいゆきとゞいた
くまなくてらす愛こそ
美しい極みではないか。
自分はその廣大なる思ひやりを思ふと
ありがたくならないわけにはゆかない。

○

思ひやりの廣大無邊と云ふことは、誰の心にもなり、誰の立場にもなつて、その心持や氣持を察して、その人の心持や氣持の同情すべき所を同情することである。人類の立場にたつことゝ同じである。他人と自分とは別ものではないのである。他人の氣持はお互に感じられるものである。そして他人のまちがつてゐることがあれば、その原因の原因を知つて同情して、そしてその上で反省すべきことは反省してもらうことである。同情すればこそ、他人の生き方のまちがいはなほ氣になるはづだ。たゞ思ひやりが足りないと、見當ちがいのことを他人に要求することになる、注意すべきである。

○

人類が進歩するのは、まちがつたことをまちがつたまゝ許すことではない。たゞ相手の氣持を知つて默つて見てゐる方がいゝ時は默つて見、云ふはうがいゝ時は云ふべきである。たゞどう云ふ時、默つてゐていゝか、又どう云ふ時默つ

てゐてはいけないかは、その人の賢こさと、思ひやりの深さによる。

他人の生命を愛せずに、他人に忠告するものは他人を侮辱するものである。尤も侮辱すべきものを侮辱するのは、必要な時もある。人間は實感でものを見ないと、輕蔑すべきものをかつぎ上げ、尊敬すべきものを輕蔑して、稻のなかに生へてゐる雜草を大事にして稻をぬきとる百姓のやうな馬鹿なことをして得意になる。耶蘇よりユダが偉くなつたり、孔子より宰予の方を偉くして得意がる人間なぞはその仲間と云つていゝ。

勿論、ユダや宰予より馬鹿な人間はいくらでもゐるだらう。だが耶蘇や孔子より偉くする必要はない。一寸そんなことをして見たいのは小ぼけ頭のくせである。

○

自分は自分より賢い人間、優れた所をもつ人間をすなほに尊敬出來るのには一寸修業がいつた。それが出來て始めて自分は精神的自由を得た。

自分より賢い人、自分より優れた人にあつて、教はりたいことはいくらでもある。だが自分は少しのことだが正格に知つてゐる所が强味である。

自分より頭はよくつても曲藝師は閉口、そんなことをしてゐる内に、馬鹿になる稽古をして、遂にわけがわからなくなる。十遍中がへりをうつたのはいゝが、どつちが上か下か忘れて死んだ飛行機のりがあつたとさ。

○

山は高きが故に貴からず、だから低きが故に貴しなぞと云ふ人間があれば馬鹿なことをはすやつである、それと同じことを云ふものがあるから御注意。

○

病的な人間は、人類の生長に害のあるものをよろこぶ。その刺戟をよろこぶ。彼等は内からくるよろこびにすなほにならず、又自分の内の好きに從ふより、時代の流行に從ふことに熱心すぎて、自分の心でものを感ぜず、周圍の感じでものを感じる。皆がいゝと云ふものはいゝと云はないと惡いやうに思ふ。自信がないものはなるべく自分の感じてゐることをかくさうとする。

しかしそれでは進歩がない。自分の信じる通り、自分の感じる通り、自分のつくられた通り、信じ、感じ、生ることが必要だ。その人は遂に人類の内心の要求と合致する。

○

馬糞も美しく見ないとわるいと苦心する男あり、馬糞を床間にかざつてよろこび、弟子くるごとに馬糞の美を讃美して「馬糞は馬の花ですな、之をつくることが出來るのが、馬の美しい所ですな。」

共處で弟子は云つた。

「人糞はどうです」

「あれも中々美しいものですな」

「あの臭いはどうです」

「あれも惜つて見ると中々いゝものです。自然は矢張り偉いですな。どんなものにも美はあるものですね」

弟子、すつかり感心して、自分の糞を床間にかざり、人々閉口するのを見ては

「話せない奴だな」と云つたさうだ。

○

稻も麥も雜草もひとしく愛するのが自然天道、

稻や麥をそだてゝ雜草をぬきとるのが人間、人道、人間は自分の生きるために役立つもの許りを愛し、役にたゝないものは放任し、害のあるものは無くす。これが人道、

と云ふやうなことを二宮尊德が云つてゐた。人間の嫌ふものをつくつて人間に必要なものを輕蔑する傾向は、農業方面にはまあないと云つていゝが。その他の方面、殊に思想的には決して少くない。

人間の價値をひくめてよろこぶものもよくある。馬鹿と云はざるを得ない。人間を殺すことを考へるなぞもその一つであり、他人を苦しめても自分だけ得すればいゝと云ふ考をもつものも、馬鹿と云つていゝ。

○

人間は缺點のないものではない。個人を理想化し、神の如く萬能と思ふものがあれば思ふ方が馬鹿である。缺點はあつても愛しないではゐられない處が人間らしい處だ。人間を愛すると云ふことは全部を愛するとで部分を愛することではない。親は子を愛するのは子が完全だからではない。僕が二十年以上仲よくしてゐる友は缺點のない男ではない。又女でもない。だが全部的に厚意をもつ以上、その友がどんなことをしても、友情はなくならない。尤も僕を侮辱してくればそれまでゞある。友情の大事なことは、缺點を認めても更に大きな美點を認めることだ。侮辱されてもなほつきあふと云ふのは奴隷のすることであらう。男子のすることではない。しかしいゝ所でつきあふので缺點の所でつきあふのではない。つまり心同志が愛しあふのだから、その他のもので變化しない。僕は世間から攻撃された時でも友達からは攻撃されなかつた。友達は僕の心を前から知つてゐて、世間がなんと云つても、世間よりは友達の方が本當のこと

を知つてゐるからだ。

どんなに社會から有徳のやうに思はれてゐても、冷酷なものや、他人を利用しようとするものに僕は嫌いだ。僕は心の動き方を愛するのだから、その動き方が面白い人なら、どんなことをしてもすきだ。心の動き方の賤しい處のある人はどんなことをしてもすきになれない。卑劣な人間、弱いものを利用する人間、心にたくらみのある人間、他人の弱點につけ込む人間、そんな人間は嫌いだ。

僕は道樂者も、酒のみも、人殺しだつて好きになれないとは云はない。弱者の弱點につけ込んで生血を執念深かく吸ふ人間なんか殺してもいゝと思ふ。

たとへば弱い女と無理に關係して、子供をつくり、それを堕胎させておいて、その罪をあばくと强迫して、その女を酌婦に賣つて、その女からたへず金をしぼりとるやうな奴は、殺しても悪いと許りは云へない。殺さないでそんな男の自由にならずにすめるに越したことはないが。他人の弱點につけこむことは氣持のよくないものである。男の恥づべきことだ。それを自分で弱點をつくらしておいてそれを利用するものは人間として、最も憎むべき人間の一人と思ふ。

他人の無知を利用して、殊に貧乏な人から、法律をうまくこぐつて、金をしぼりとる人間もあまりいゝ人間とは云へない。泥棒、殊に强盗はいゝとは云へないが、法律をこぐつて悪いことをする人間は更に賤しい。

人命を重じない人間も、恥づべき人間である。

やむを得ず、罪に落ちる人間は同情すべきである。わるだくみをして餘裕を持つてやつた行爲は、一時的にやつた行爲よりも罪が深い。自分の妻を生命保險に入れておいて、それを毒殺して金をとることを、常習としてゐる人の話を聞いた時は不快だつた。結婚式をあげる時から殺す計畫してゐるなぞとは罪が深いと思ふ。かう云ふ人間こそ野獸にも見

出せない不愉快な惡者である。思ひやりがなさすぎる者が不快なのは、人類の愛がゆきゝしないからである。あんまり愛に動かされない人間ははがゆい。

僕の家に三代つゞけてくる藝者があるが、話をすると、自分の藝者と云ふ位置を知りすぎて、ハンブルであつて、そして他人のよき行爲にたいする感受性が純粹である。自分は道徳的に一段下のものと思ひこんでゐて、他人のよき行爲に對しての尊敬がいかにも純粹で、そんな話をきくのが實にうれしさうなのが氣持がよかつた。他人のよき行爲や話に對する無感動なパリサイ人より、他人のよき行爲、又よき話にすぐ感動する罪人の力が人類から愛されるのは當然である。

男女間の問題も、純粹に動き、思ひやりのゆきわたつた話をきけば、不愉快ではない。たゞ相手をだましたり、相手の意志や、運命を傷つけて平氣なのは氣持がよくない。

自分は原則としては一夫一婦が本當と思ふ。しかし自分は例外をまるで認めない人間ではない。男女の話はこみ入つてゐる。他の人にはわからないことがある。犧牲者に同情をするのはいゝが、他人の情事に口を入れたり、批評したりする人間は利口には見へない。自分のことを氣をつけるがいゝと云ひたい。

しかし性慾はつゝしむにこしたことはない。性慾は罪とは思はないが、性慾のよろこびを刺戟したり、誇張したりすることは人間の高きにゆく力をよはめ、よき子孫を得ることにも益がないと思ふ。

自分は男女の問題については當人同志にまかせる。自分が無責任なことをし、はたに迷惑を與へれば、その點だけ、はたで拒絕すべきである。他の人の男女間のことを好奇心つよく、さぐつたり、噂したりする人間を利口とは思へない。だましたり、暴力をもちいたりする時はだまつて見てゐない方がいゝと思ふ。

しかし標準としては家庭をもつなら一夫一婦が一番、自然であり、健全であり、無難である。

だが愛する女が出來たからと云つて妻をおいだしたりしてはいけない。妻が合意ならいゝだらうが。しかし今後は女は女で獨立的になり、夫によつて自分の資格がきまらず、自己の資格によつてのみ、自己の價値がきまる時がくるであらう。

自分は他人の戀愛については超越してゐるものが利口と思ふ。相談された時は別だが、この問題は相談されても困る問題である。その戀愛の程度もわからず、周圍の關係もわからないからである。たゞこの場合も、虫のいゝことは禁物である。

○

自分は思ひやりのない人間は嫌いである。

心のあり場のわからない陰險な人間も嫌いである。

自分の眞價以上を他人に押しつけやうとするものも嫌いである。

がつ〳〵してゐる人間も、こせ〳〵してゐる人間も嫌いである。

うるさい人間、他人の沈默をふみにじるものも嫌いである。

おせつかい、他人の獨立性を平氣で傷つけるものも嫌いである。

他人のあらを見つけてよろこぶもの、

他人を利用しやうと思ふものも嫌いである。

嫌はれたいものは嫌つてあげる。好かれたいものは嫌はれる性質をすてゝくるがいゝ。

他人の心もわからずに勝手に小ぽけ頭で想像して何とか云ふ人間も好きにはなれない。

○

自分は思ひやりのある人間、他人の長所を認める人間、大好きである。
自分の仕事を忠實にする人間、他人に通じない處で良心を働かす人間、大好きである。
不平を云はずに自分の足りない處を認めるものも大好きである。
他人の幸福をよろこび、他人の不幸を同情するものも大好きである。
心の働きの緻密なもの、生長力の強い者、
淡白でいや味のないもの、
思慮深かくつて勇氣のあるもの。
利己的でないもの、
他人の缺點を認めると同時に自分の缺點も認めるもの。
皆好きである。
不純なものがなく、純粹なよろこびを知れるもの、大好きである。
太腹で自分の信じてゐることを平氣でやるものも好きである。
いぢけないもの、臆病でないもの。他人の思はくを恐れずに、自分の内心の要求通り生るものも好きである。
内から充實してゐるもの、
倒れても又起きあがるもの、

己の分を知るもの、
自分の力相當のことをして、おちついてゐるもの、
自分に正直なもの
大好き、大好き。

○

内心の要求
内の聲
人類の意志で進み
大木の枝のやうに
すなほに生きるもの
内からくるものと
外からくるもので
生命のよろこびを歌ふもの
參る時は參つても
起き上れる時がくれば
平氣で起き上つて進むもの
さう云ふ人間を

自分は讃美する。

○

世間の殻はどうであらうと
生る力を内に孵くもつものは
生られるだけ生きねばならない
殻が自づとわれるまで
内に力が出来れば
殻はわれる
そして新しき日を
皆が地べたにしつかと足をつけて、
迎へることが出来るのだ
世間の殻を恐れずに
生られるものは
生られだけ生て見やうね。

○

この世の中はどうであらうと
最も深い所から

わき出た泉は
流れる處にながれねばならない。

○

かたつむりのやうに
時にはかくれがに引こむとも
時さへゆるせば
身をのばし切つて
思ふ存分歩きまわつて見せる
稀代な大きな
頑丈なかたつむり。

○

經濟はどうであらうと
いくら損をしやうと
人間は内心の要求で
好き嫌ひをするものだ
嫌いなものは嫌つて
好きなものは好いてやる。

健全に好いてやる。
生きる爲には嫌いなことをしやうとも

○

生きる爲にはどんなことを
してもいゝ。
だが生きられる以上は
なるべく人間らしく生きたいものだ。

○

自分の云ふことは
わかり切つたことすぎる
所がわかり切つたことを
人間は力なしでまだ實行が出來ないのだ
そしてまちがつた考が
白日のもとに
威張つた顏してのさばつてゐるのだ。
だから自分はわかり切つたことを云ひ
わかり切つたことを實行しやうと云ふのだ。

○

僕達も人間
君達も人間
話せば心の通じる人間
人間同士よつて
人間らしく生きられないのは
あまり意氣地のない話ではないか。

○

人間はならぬ堪忍するが堪忍ではあるが、堪忍にもいろ／＼ある、卑屈になつては困る。遠大な志を持つが故に、又相手にするにはあまりに下らないが故に、或は相手が人間以上であるが故に堪忍するのはいゝ。堪忍したまゝひしやげて立ち上る力がなくつては困りものである。

○

人類の外面の歴史も大事ではあるが、自分の内に生る、人類の内面的生命は更に大事である。昔より今の方が全體としては進んでゐるが、個人としては昔の方が大きい人間が出たのは、内面的生活をわづかに外界にわずらはされずに感じることが出來、そのまゝにすなほに生きられたからと思ふ。今の人は力を小きざみに奪はれる。大きく内にたくはへて自づと動くと云ふことはむづかしくなつた。

たゞ人間の値打は内から動くと云ふ處にある。外面的生活を内のものにし切りそれを内から生かすと云ふ處にある。

世間には學問と暗記とを混同してゐる人がある。暗記は人間を馬鹿にしても利口にはしない。それは生命とは交渉はないものである。胃腑が牛肉は牛肉のまゝ、米は米のまゝの原形をたもつことに骨折つたら、人間の血は出來ずに人間の肉體はやせてしまうであらう。誰がかう云つた、誰がかう云つたなどと正確に覺えること許り骨折つて、その內にゐる人間の生命に役立つものを自分のものにすることを忘れてゐたら、その人の精神は貧弱になり、自己がなくなる許りである。自分の要求で勉强するのは暗記するためではなくつて、誰が云つたからではなくつて、自分の內面生活を豐富にし、正確にし、力づよくするために他ならない。

それは誰が云つた。いやその前に誰が云つた、かう云つたあゝ云つた、なぞと云つて自分の實感をそつちのけにする學者は昔から本箱學者と云はれて馬鹿にされてゐたものだが、今の學者にもさう云ふ人は少くない。さう云ふ傾向のない學者は一人もないと云ひたい。其處で僕のやうな人間が出ると、面喰ふのだ。僕は自分のよんだものを忘れることは名人だが、生活に同化することも、學者よりも遙かに名人である。だから生々してゐられる。一々字引きをもち出す必要はない。一々實感にてらして見ればいゝ。

いゝ胃腑の持主は醫者とは限らない。いゝ胃腸をもつてゐるものゝ方が食物から大事なものをとる。この食物のカロリがどの位いあるなぞと考へてゐるより、健全な食慾にまかせる方がいゝ。

讀書でも、勉强でもさうである。わざ〳〵忘れる必要もないが、覺える必要もない。內心の要求に任せるがいゝ。內心の要求なしに勉强するものは、生命をこわすにちがいない、自分の考を失なふにちがいない。」

尤も始めつから勉强好きでない人が、ある處までゆくと急に熱心になると云ふことはある。しかしそれも素質の問題である。勿論、素質もいろ〱あるから、他人にはわからない。セザンヌが畫でものになるなぞと考へた人は殆んどなかつたらうと思ふ。アンリ・ルーソーなぞは殊にさうである。しかし當人にとつてはやればやる程深いものが見へて來たにちがいない。素質のないことは、堂々めぐりをする。素質のあることはぴつたりした感じがして來て、進む道がわかるであらう。

僕は將棊などをしても、少しも頭がしつくりしない。すべる許りで、たゞ調子許りでやる、だから少しもうまくならない。畫をかいてもさうだ。たゞ自分の方の仕事をやる時だけ、全力がつくせる。頭が自づと動き、他に氣がむかない。自分の心と身體の全力が一つになつてくれる。勿論、自分の柄にあはないことをかくと氣が浮いてくる。

本をよむのでもさうだ。自分の要求に叶ふとすら〱よめ、よんだことが頭に入つてくるが、さもないととても頭が一緒になつてくれないからとてもよめない。

又よみたい時が來ないとよめない。まあ之は人にもよるが、その人その人獨特な生活の仕方で、一番自分にぴつたりした生活が出來るやうにすることが必要だ。それも內心の要求にそふ仕事をしてゆくのが一番いゝ。

○

一々ことにぶつかるたびに耶蘇だとか、マルクスだとかをひき出して話をしないと困る人は氣の毒である。內村さんは日本人にまれに見るいゝ素質をもつてゐる人と思ふが、あまりにバイブルを信じすぎ、研究しすぎるのを自分達は惜しく思つたことがあつた。

そんなことを云へば內村さんは怒るだらうが、ホイツトマンやカーライルが好きな處や、あのきび〱した感情の持

ち主の處が異端的な方面にも働くと日本は隨分特色のある文學者をもつことが出來たやうに自分は思ふ。

○

自分は耶蘇を益々尊敬し、益々その神の國を求める力に感心するが、そしてその時々に云つたことや、行つたことには實に感心し、完全だと思ふが、しかし耶蘇の言葉も忘れゝば、忘れて平氣である。一言一句まちがつては困るとも思つてゐない。又そのために自分の內面生活がかはるとも思はない。既に多くの影響はうけてゐるし、今後もうけると思ふが、それはその時々の要求による。

耶蘇はまだ云つた言葉は少ないからいゝが、マルクスなぞの一言一句をありがたがる人間は一生、それにかゝつても困るだらうと思ふ。暗記するだけで死んでしまふだらう。

內心の要求にきけ。そして自分の心に純粹なよろこびを與へない言葉は無視するがいゝ。

○

いざと云ふ時は他人の頭をたよるわけにはゆかない。

いざといふ時、一寸まつてくれと本をさがし出して、自分の決斷をきめるのは法律家のすることかも知れないが、人間のすることではない。

一々、この時はどう返事したらいゝか、どう云ふ態度に出るのがいゝか、他人にきかないと不安心なやうな人間をつくるものは利口とは云へない。

自分の頭相當に生るのが賢い。

○

世界で最も大きな仕事した人は他人の力によつて仕事をした人ではない。他人を命令したり、殺したりしてした仕事は、皆消えてゆく、消えてゆかないのは、人間の心の内に生れた眞理である。

釋迦、耶蘇、孔子、ソクラテス、他人の力で何かしたか、教へをひろめるには弟子の力をかりたかも知れないが、皆、自分の眞價だけで生た人だ。殺されてもなほ生る仕事は他人を奴隷にすることでは得られない。自分の眞價だけで生ることが、天意に叶ふのである。

○

世の中にはいろ〳〵のことが起るが、それをつらぬいて生てゆくものは眞理であり、人類の意志であり、更に天意である。（天意と云ふ字にひつかゝつてはいけない。）

自分の一生を天意に任せる。何ものも恐るゝことはない。

○

迫害さるればされる程生き

殺されゝば殺される程生き、

惡口云はれゝば云はれる程かゞやき出すのは、

天意に從つて生るものである。誰の心もゆり動かす力をその人はもつてゐる。精神的にも、恐らく物質的にも

○

面白いかな

生る處まで生て見ること

愛すべきものを愛し
讃美すべきものを讃美し
よろこぶ時によろこぶ。
窮するも亂れず
更にたち上れる時は
たち上る
生ることは
面白い哉

○

自分は自分の心がまだ完全でないことを知る。だがだん／＼得のいゝ方からはなれて公平に自分を見、又他人を見、どう云ふ生活をするのが本當か、またどう心を動かすべきかを、根本から知りたく思ふ。

○

人間の自力は小さい
人はいつ病氣し、いつ死ぬものかわからない。
だがわからないことは何かに任せて
許された範圍で自分を築いてゆかう
ものを正確に見る力と

自分の實感をます／＼鋭くして
自分の求めるものを求めてゆかう。
自分がこんな人間がゐてくれたらと
思ふ人間に自分を築いてゆかう。
こんな世界があつたらと
思ふ世界を築いてゆかう
一人でも生き、二人でも生き
三人でも生き
何百何千何萬
世界中全體でも生きられる道を
歩いてゆかう。

○

人爲でどうしてもさけられないものは
甘受するのが立派な人間
そして人爲でなくすことの出來る
禍は何處までもなくし
人爲で生むことの出來る

よろこびは何處までも生んでゆかうとするのが、
立派な人間

○

眞人の美しさ
暗をつらぬいて生きる
眞人の心の美しさ。

○

眞人が處々に、
頭をもたげて、
立つてゐてくれる、
たのもしく、
美しい。

○

自分の世界にとぢこもるものは死を恐れる、自分の仕事に執着するものも死を恐れる。自分でなければ出來ない仕事をするもの、そしてその仕事を完成しないものは死を恐れる。

自分は自分の創作の方面を考へるとどうしても死ねないと思ふ。今迄して來た仕事では浮ばれない。あまりに恥かしい、小さすぎたり未完成すぎたりする。そんなことは死んでしまへば同じだとも思ふが、生てゐる間、同じだと思へな

いやうにつくられてゐるから仕方がない。恥かしいと云ふ氣持は實につよい。自分は恥かしくないだけの仕事をしてゆきたい。自分は新しき村の仕事の方を思ふと、死はさう怖しくない。この方の仕事は、僕よりも適當の人があるし、僕が死ねば反つて金の方なぞも都合がよくなり、僕のしやうと思つたことがなほはつ切りして來、僕に任せて安心してゐる人々が立ち上つてくれると思ふ。そして僕にたいする人々の愛が僕のことを思つてくれてなほこの仕事を立派にしたく思つてくれると思ふ。もう少しは生てゐる方がいゝとは思ふが、さう浮ばれないとまでは思はない。何處かで安心してゐられる。村の生活の眞髓をつかんでゐる人もゐてくれる。

しかし文學、殊に脚本のことを考へると、まだ中々死ねない。自分がしたいと思つてゐる仕事が少しも完成されてゐないし、他の人にやつてもらうと云ふわけにゆかない。

北齋やルノアールなぞも同じ氣持で死ぬのをいやがつたらしいが、あの人達位いまで生ればともかく、今の自分ではなほたまらないと思ふ。

この氣持は人類が個人に與へた生命をのこりなく自分のためにしぼり取らうとしてゐる處からくるのだと思ふ。だからこの氣持はわるいものではない。しかしいつ死ぬかわからない人間にかう云ふ本能が與へられてゐるのは一方うれしくもあるが、ありがためいわくでもある。しかしそんな客觀する餘裕は自分にはない。出來るだけ立派に自分の仕事を完成して見たいと云ふ氣だけがつよい。

さうつくられてしまつたのだから、いくらそれが馬鹿氣てゐても仕方がない。

○

一人の男が山のなかに迷ひこんで其處で名も知らない可愛いゝ草花を見つけた。そして「せつかくさいてもこゝでは

誰も見る人はあるまい」と一人ごとした

すると草花は笑つて云つた。

「あなたは人間らしいことを云ふのね。私を見ることが出來ないのは人間には損かも知れませんが私には少しも損ではないのです」

「さうでしたね、蜂や蝶がくればいゝのですね」

「蜂や蝶には私の美がわかるものですか。あれ達にわかつて、私達の子供をふやすためにはもつとあくどい色で澤山です。もつと粗雜な出來で澤山、こゝに蜜があると云ふ札さへ出しておけばいゝのですから」

「それならあなたのつゝましい美しさは誰のためです」

「誰のためですか、私をつくつたものに聞いて下さい。私は何にも知らないのです。たゞ完全な美しい花をさかせれば、私はそれで滿足するのです。なぜ誰にもよろこばれないし、誰にも私の美が本當にわかつてもらへないでも平氣でよろこんでゐられるか、それも私は知りません。私をつくつたものの處へ行つて聞いて下さい」

「あなたをつくつたものは誰ですか」

「それは私も知りません。先づ地面に聞いて下さい。地面が知らなかつたら、御日様に聞いて下さい。お日さまがお知りにならなかつたら空氣にきいて下さい。お月さんに聞いて下さい、お星さんに聞いて下さい。又水に聞いて下さい。それでもわからなかつたら、誰に聞いたらいゝか知りません。然し知らないでも私は實に氣がはれ／＼してうれしいのです。今日は實にいゝ天氣ですね」

或る男は、

地面にきいたが、地面は答へなかつた。太陽にきいても、誰に聞いても答へなかつた。鳥がその男を見て「阿呆々々」と云つた。

「そんならお前は知つてゐるか」

「知つたらどんな御利益があるのかね。矢張り腹がへつたらひもじからう」

「利益なんかはどうでもいゝ、たゞ知りたいのだ」

「俺達は地球にはへたかびだよ。蛆蟲だよ。それ以上ぢやないのだよ。だれがつくりたくつてお前さん見たいな阿呆をつくるかね、阿呆々々、腹がへつたら飯を食へ、のどがかはいたら水をのめ、泣きたい時は泣いて、笑ひたい時は笑ひな、知りたい時はさて、お前さんの頭にきいて見な、世界で一番利口で馬鹿なのは人間の頭だと云ふぢやないか。阿呆阿呆」と鳥は云つた。

或る男は怒つて鳥に石をぶつけたら、鳥は逃げて、美しい草花は男にふみつぶされた。しかし男は別にそれには氣がつかずに、何處かへ行つてしまつた。

○

理窟はどうだつても、自分がどうしても辛抱が出來ないやうな苦しい目に他人を逢はすことはよくない。好んでさう云ふ處に入り込んだ人は別だ。又ずるさのために落ちこんだ人間はずるさをなくさずにはひ上ることが出來ないのは仕方がないが、社會の弱點で不幸な人が生れるのは、さけられるだけさけるべきである。他人の苦勞は百年でも辛抱する人間は、無知か、惡者か、無知なら敎へなければならない、惡者ならば反省をのぞんできかなかつたら制裁を加へてゝと思ふ。

だが第一に自分が悪者にならないことが大事である。

他人になぐられるのが好きな人だけ他人をなぐれ。

しかし他人をむやみになぐる人は自分もなぐられたい人だと見なしていゝさうである。

○

人間同志の關係は、法律さへなければ反つて簡單なのである。法律は法律以下の行爲をとりしきるにはいゝが、それ以上のことには力のなさすぎるものである。

○

神と人類はつれ立つて歩く。

人類は若々しく元氣である。

彼は時々神を愚弄するが、

神は赤坊にたいするやうに寛大である。

「神樣。あなたは萬能ではないのですね。」

「私を無理に萬能にしたのはお前ぢやないのか。私は自分について何にも云つた憶えはないよ。人間には私の心がわかる人もたまにはあるが、多くはつんぼの早耳で困るよ。私が萬能だなどゝ云ふのは、早耳先生の理想にすぎない。私は御らんの通り、たゞ存在するものすべてに平等に無關心なだけだ。平等に愛してゐると云はれても一向不服はないが、私の方ぢや別に氣にかけてはゐない。」

「あなたは私が亡びたつて別に困らないのですね」

「困るわけがないぢやないか、お前だつて死んで惜しいとも思ふまい。死んだ方が反つて樂だよ。反つてまちがいのない世界に入れるからね。第一うるさくなくつていゝだらう。」

「私はうるさくつても生きてゐたいのですよ」

「今に死んでも平氣になる時がくるよ。それ迄は苦勞さ、しかし苦勞のうちに希望もあるだらう」

「死んでも平氣になつたら、反つて面白くないでせう。」

「そんなことあるものか、さうなつてこそ本當の面白さがある。宇宙と同化し、宇宙と共にたのしむことは愉快なことだ。平和な日常生活のよろこび、勤勉のよろこび、仕事をするよろこび、春夏秋冬のよろこび、家庭のよろこび、友達同士のよろこび、自然をたのしむよろこび、心と心とふれあふよろこび、平和な靜かな永遠のよろこび、愛のよろこび、讀書や、畫を見るよろこび、音樂や舞踏をするよろこび、限りないよろこび、それにもまして靜かな死のよろこび、それがのこりなく味はへる時は、お前のよろこんで死ぬ時だ、だが、其處までゆくには一寸かゝるね。その道中もわるくはない。」

「しかし私はいつまでも滅びず、いつまでも生々としてゐたく思ひますよ」

「いくら思つたつて出來ないことは仕方がないが、しかしいつまでも生られるつもりでゐたらいゝだらう。死にたくつても死ねない時もあるものだが、死にたくならないにこしたことはない。いつまでも生きたいと思ふ處が面白い處だ」

「死ぬものが生きたがるのは面白くもあり、淋しくもあります」

「その淋しみが、又味の深いものではないかね。」

「味は深くなつてもあまりいゝものではありませんね」

「まあすなほに生きて見なさい。餘とると若い時とは又考へや、感じがちがつてくるかも知れない。お前今の邪説や、

實感であとのことを判斷しない方が利口だ。つくつた私の方がよく考へてゐるよ」

「それはさうでせうが、あなたは完全でもなく、親切でもなく、冷酷ですからな」

「内を見ろ、内を」

「外を見ないと云ふわけにもゆきませんからね」

「それは見てるのもいゝさ。外を見ないでは内は生きないからね。内が生て外が生る。しかし内の方が大事なのは云ふまでもない。内が主で外が從だからね」

「それはさうです」

「内からくるよろこび、要求のみお前を生かす。内のものに關係のないものはお前は生かしはしない」

「それはさうです。しかし内を生かすためにはそとがどの位い大事かと云ふことも知らなければなりません。外を見ないと一人天下になつて、勝手な空想をし、あなたを理想化したり、自分を買ひかぶつたりします。内からの力許り感じると世の中を馬鹿にしすぎます。いろ〳〵のことに出あふので、段々私はものが正確にわかり、空想ではおちつかなくなり、事實の尊敬すべきことを知ります」

「内と外が一つになることは大事なことだ、内も外も買ひかぶつてもいけないし、輕蔑してもいけない。自分の實力をかひぶつては勿論いけないが、見くびるのはなほいけない」

「自分の力がどの位いまであるかを知るのはむづかしいことです」

「だがたのしみはそのうちにあるだらう。お前の子供達が、あらゆる方面に少しづゝ實力がまし、又体得して行くことは、實にたのしみだらう」

「たのしみも多いのですが、はがゆいことはなほ多いのです。時々自分の力のないのにおどろきます」
「力のあるのにも感心することがあるだらう」
「それはうぬぼれる時もあります。しかしすぐ力がおとろへるのです」
「仕方がないさ。お前は人類だから。」
「それに人間達には馬鹿が多いので困ります。尤も百が九十九位いまでは愛すべき性質を何處かに持つてゐて、自分を生かすこと、自分の子供を生かすことに熱心ではゐますが、考へが小さく、見へる世界がせまく、一時的のこと切りわからないものが多く、たゞ生活するだけでやつとなのが多いのは困ります。特別の出來損ひは別としても」
「お前が利口になれば皆利口になるだらう。お前は自分に役に立つもの以外には冷淡だと云ふことは皆も知つてゐるだらう」
「處が知りませんね。本當に知つてゐる人はまああありませんね。一寸位い感じてゐる人はあるかも知れませんがね。皆自分一人で生てゐるつもりなのですよ。そして私やあなたはたゞ自分の爲にあるのだと思つてゐるのですから滑稽ですよ。自分がどんなにつまらないものかと云ふことは知らないのですよ。又それを知つたものは、其處の面白さをまるで知らずになぜ私を生んだのだなぞと小言を云ふのですからおどろきますよ。自分があんなに生れたがつて生れたと云ふことは知らないのです。しかし生れたがらしたのは誰かそれはわかりませんがね。人間は、私やあなたに許された大きな道を自由に歩いてゐればいゝのですが、そんな人間は少ないので、皆、わけわからずに勝手なことを云つて、生てゐて、どう生ればいゝかなぞと云ふことはまるで考へもせず、わからうともしないのですからね」
「それでよくお前は生々してゐるね」

「それは皆大事なことには無智なのですが、大體から云ふと盲目的に生てゐるものが多いので、さう云ふ人間は知らずに、私の云ふ通りに働いてゐるのです。小なまいきなのは取柄がありませんがね。なまぢつかの物知りでない、何にも知らないと思つてゐるものに反つていゝのがゐます。しかし知らないのですから、風のふきまはしでどうにでもなりますがね。しかし人間の智慧よりは私の力の方が勢がいいのですから安心は安心です」

「人間はそんなに馬鹿かね。わかり切つたことがわからないのかね。どうしてだらう」

「それは慾がいゝからですよ。自分の利害關係をはなれてものを公平に見ることが出來ずに、ただ得することばかり考へてゐるのが多いのですからね。頭を上げれば見えるものを、隅々許りに頭をつつ込んで、自分の頭を馬鹿にすることばかり考へてゐるのが多いのですからね。私がいくら無線電信で命令を送つたり、よろこびや、淋しみの詩を送つてやつても、少しも感じはしないのですからね。」

「それでよく生てゐられるね」

「だから死ぬこと許りこはがつてゐますよ。そのくせ、一寸したことで、すぐ慾を深くしすぎて死んでもかまはないと云ふ氣にもなるのですから滑稽です。大慾は無慾に似たりと云ひますが、他人を得させるのより自分が死んだ方がましだなんて云ふ奴も出てくるので、氣の毒も通りこして滑稽です。滑稽だと思つて見ると大概のことは腹が立ちませんが、馬鹿すぎるので出來なくつていゝ不幸な人間がどん〳〵出來るには一寸困りますよ」

「それでお前はどうしてゐるのだ」

「私は矢張り、人間にたへず見へもしなければ、聞へもしない、又人間にはわからない、心の波動を送ることで、人間が私の心に從ふ時本當によろこべ、私の心に從がはないと不安になるやうにしてゐますが、それを本當に感じる人間は

少ないやうです。しかしまるで感じない人間も居ないやうです。今に段々感じるやうになるでせう。人間は本當に得したことは忘れませんからね。」

「それなら急がしいから之でわかれるとしやう。まあ元氣に生きて見るがいゝ。段々面白いことがわかつて來て、自分の生きてゐることが自然と同化する喜びと全く一つになる時がくるだらう。その時になると、お前が今死を恐れてゐるが、なぜ自分が死を怖れたことがあつたのだらうと不思議になる時がくるよ。だがそれは秘密さ。其處までゆくにはそれだけの資格が出來なくつては駄目だ。中々やすつぽくは死ねないよ。それでは元氣でおいで」

「ありがたう」

○

個人が人類から來る愛をうけとるには、自分の心を何ものにもわづらはせられない時間をつくることが大事である。思ひわづらつてもどうにもならないことを、くよ〳〵思ふ時、その重荷は一先なげすてゝ、心をおちつけて偖、何が一番自分に氣になるかを考へ、それは氣にすれば何か効果があるかどうかを考へ、ない時は、心をおちつけてその氣になる元因を考へるがいゝ。其處に他人の缺點、社會の缺點を見出す前に先づ自分の缺點を見出すがいゝ。そしてこれが見出せた時、それをなくすやうに骨折つて、更に一歩進まうとするがいゝ。そして四方八方に氣をくばつて、どうすゝむのが一番いゝかを考へ、蟲のいい考はすて、他人に淋しさを與へてゐたら、これが正當であるか、どうかを考へて、心をなほすべきところはなほし、勇氣づけるべき時は勇氣づけ、なるべく何ものも恐れないですむやうに自分の心をおちつけ、そして自由にいゝと思ふ方に進むことが必要である。心に欲しいことがあつてはこれがつつかゝりになるがこれが過去つたことであり、どうにもならないことだつたら、そのおぎないを何かで返すことにして、くよ〳〵思はないのがいゝ。

常に内から力があふれるやうに心がけることが必要で、そのためには、最もよく人生を生かした人々に教へを受けるのがいゝ、その教へは當人に逢ふ必要はない。又死んでしまつた人で結構である。自分はさう云ふ時は、聖を見ることにしてゐるが、本を讀むのも隨分いゝ、そして其處で新しい力を得、心が充實してくれば、悦びを新たにして、自分を完全な人間に築きあげるやうにする。ものを正確に見、正確に感じ、正確に考へ、正確に行ひ、他人を不幸にしないで、自分を生かせる道を見出し、それに進めるだけ、進もうとする。

他人を不幸にして決して心の平和は得られない、心の平和なくして人類に愛せられることは出來ない。我利我利で目がくらんでゐては、正確にものがわかるわけはない。又他人を不幸にして一人の人間が本當に幸福になれるやうにつくられてゐては人間のつくられ方はまちがつてゐると云はなければならないが、決してそんなことはない　暴君は最もエゴイストの代表だが心のおちつきはない。心がます〱すさみ、荒れて狂氣ぢみるのが落である。アレキサンダーは暴君と許りも云へないが勢力が盛んになり、自分の感情一つで人を殺すやうになつてからは益々不幸になつていつたらう、そして子供達は皆殺された　アレキサンダーでなければディオゲネスになりたいと云つたさうだが、自分はディオゲネスの方がどの位アレキサンダーより偉いか知れないと思ふ、人間の心靈界の平和なよろこびを知ることは、全世界を征服するより、どの位大きい仕事かわからない　征服は人間の價値を上げるものでなく、さげるものであることはエピクテートの云つてゐる通りである。

心靈界のよろこびを完全に味ふことは宇宙と同化することであり、宇宙を占領することと以上である。

美人を暴力で服從させるのと、美人と相愛しあふのはどつちが美人を自分のものにしたことになるか、云ふまでもないことである。占領は、魂を自分のものにしたことにはならないのである。

自分が直接に人類のためになることを働ければそれにこしたことはないが、それが出來ない人はそれの出來る人の仕事をたすけることで人類から愛される。人類の魂を直接にふれることの出來ないものは、それをふれた人の心にふれることで、人類の心にふれることが出來る。

「天我をすてず」と云ふことを直接感じるのは元よりいゝ。しかし直接感じられなかつた人でもこの言葉をきいて力を内に感じた人は人類からくる愛を感じた人である。

太陽から來る光りを月は反射してゐるにすぎないが、それで誰が月を醜いと云ふ。自分の力相當のことをするものは皆美しい。力不相當なことをしやうとするものは馬鹿である。おちつきがなく、自由がない。

僕は自分では誰はかけないが、誰を見るよろこびは僕の生命を生かし、自然への愛、人類への愛を深くする。又それ等の力、愛を直接に感じるよろこびを受ける。

それは理窟ではない。理窟に反したことは皆下らない。よくない、しかし理窟以上のものをもたないものはつまらない。理窟以上、理外の理を尊敬し、何となくうれしい、何となくありがたいと云ふ感じが大事なのである。

それをよく知つたものが、内からくる力をすなほに感じるもので、我々をつくつたものゝ意志を感じ、そして人類のよろこびをよろこぶことが大事だと云ふことを知るのである。

たとへば大海を見て人間がよろこぶとか、平和な田圃路を歩いてよろこぶとか、そんなことは人智ではくだらないことにすぎなく見へる。しかしそれを下らなく見るのは馬鹿であつて、そのなんとも云へないいゝ氣持にすなほになれるものが利口なのである。

人類だつて、たゞ生長する器械にすぎないのではない。天空を見、大海を見、又平和な自然の内に雄々しく、おちつ

いて快活に生る巨人にすぎないのだ。

たゞ生存、種族保存、生殖作用一點張りのものではないのである。それならなにも我々は美を愛する必要もなく、古人の心にふれる必要もなく、空の色がなんであらうと、草原がどんな色しやうと、又小鳥が常に石灰を砂の入つた石鉢でひつかいたやうな聲を出さうと一向、我々は平氣であつていゝのである。人間と宇宙の調和こそ、我等の目ざす處であるが、我々が健康そのものゝ女よりも、美人を愛したり、我々が雜草より草花を愛したり、他人の行爲よりも心の動かし方に心を動かされたりする所が面白い。

しかし勿論、我々が死にたがらないこと、子や孫をこの上なく愛する所も面白い。生物が人間に來て心境界へ、全き目ざめをし、そして宇宙の美や調和の愛すべきを知り、そして人類全體が完全に向ふことをのぞむやうになれたことは實に愉快なことである。自分は鳥や毛物が美を感じないものとは思はない。草木だつて美を知つてゐるかも知れない。

人類の生存のために働くこと元より必要、

子孫を愛し、その立派な人間になるやう骨折ること元より必要、

次ぎの時代の人々のためを計る元より必要

同時に、すべての人が生き、すべての人の前にある。才能、生命、精神ののこりなく生るために働くこと元より必要、

同時に、宇宙と調和し、大なる永遠のよろこびをその内からくみとることのために益々働くこと大必要である。

そしてこの必要なことのために自分の小さい力を働かすものは、人類の名によつて愛され、又尊敬されていゝ人間である。そしてさう云ふ仕事を益々してゆく時、我々の心は内から滿ち愛され、天に守護されてゐるやうな氣持についな

り、自分を神の愛兒のやうについ思ひこむのである。

○

大生命のあとの大往生、
よくつかはれた生命には安らかな眠り、
平和、調和、涅槃、
途中でくたばるのはやむを得ない。
許された限り進んで見やうと思ふ。
人間として生てゐる間は、人間として生られるだけ生て見る。どんなものが人生の内に與へられてゐるか、
ダイヤモンドを探り出すものよりもつと熱心に自分は人類の意志をほりあてゝ、その意のまゝにすゝみたく思ふ。
自然を畏むが、
人間の間は人間として生き、
そして人間のために、働けるだけ働きたく思ふ、
愛する人々が人間に生れたこと、今後生れることを、いく分か幸福と思へるやうにしておきたいものだ。
人生には實に多くのものが與へられてゐるが、淋しくないものでもない、不安でないこともない。其處で更に勇氣づけられ、更に進みたくなり、更に人間のために働きたくなる。
悲觀許りはしてはやらない。（二四、九、一五、）



石と火

谷崎精二

一

『あゝ、つまらない、私、悲しくなつたわ。かうして日がとつぷり暮れて寒い風が吹き出す頃になると、私屹度悲しくつて死にたくなるのよ。』

榮子は男の樣に兩腕を組んで、脇の下へ掌を宛てがひながら、肩を並べた木暮には見向きもしないで獨語の樣に云ひ出した。

『又始まつた。』

木暮もやつはり獨語の樣に呟いた、何の爲めに人間は生きて行かなけりやならないか敎へて頂戴。』さうした十七八の少年が云ひさうな訴へが次ぎに彼の女の口から出るのである。そして木暮はひどく勿體ぶつた、或ひは又センティメンタルな顏をして、人間がどんなに辛くつても生きて行かなければならない譯を諄々として話

くのである。

夕方、行人が雑踏した日本橋通りを二人は歩いて居た。新橋からさうして大通りをずつと歩き續けて來たのだつた。

『あれを御覧なさい。』

木幕は西川蒲團店の前に足を留めて、直ぐ眼の前の十字街に立つて交通整理の任に當つて居る一人の交通巡査を指した。其れは自動車の運轉手などに對して非常に親切な爲め、近頃市中の自動車運轉手が醵金して金時計を贈つたとか云ふ事を新聞で報道された巡査で、彼の前を疾驅する自動車の運轉手は大概彼に擧手の禮をして行つた。腕に捲いた青い布の色がもうはつきり見えない夕闇の中で、其の模範巡査は縱横に走せ去る自動車の運轉手から絶えず擧手の禮を受けながらにこりともせず、兩腕を水車の樣にぐる〳〵廻して、彼の眼の前を行き過ぎる人や車に停れ、進め、の命令を與へて居た。

『ほら、運轉手が皆敬禮して行くでせう。』

木幕は榮子を見返つて云つた。

『さうね、どうしてなの？』

『運轉手たちにちつとも威張らないで親切にするので、皆から尊敬されて居るのさ。――唯あれだけの仕事なんだけれど、あれでも僕、生きがひがあると思ふな。皆に好意を持たれて生きて行くと云ふことは嬉しい事ぢやないかしら？』

『さうね。でも人から好意を持たれたつて、私にはする仕事が無いの。』

二人は暫く無言で其の交通巡査の姿を眺めて居た。三十代か、或ひはもう四十に手が屆いたかと思はれる小柄な男で、相變らず手を振り續けて車を意のまゝに停めたり、走らせたりして居る態度はひどく勇敢で、自信的だつた。

『あの調子で何もかも裁けたら？』

さう思ふと木暮の口許に悲しい微笑が浮び出た。生活の十字街で偶然出會つた此の二人に對して、誰か大きな權威を持つ者が現れて來て、彼と榮子とのどつちかに『停れ！』と命じ、もう一人に『進め！』と命じたら、其れで二人は別れてしまふ事が出來るかも知れなかつた。

『さうだ、本當に十字街頭で偶然出會つたのだ。もう一年此の女が家を飛び出すのを辛抱して居たら、其れでなければ俺があゝ云ふ處へ行き出すのがもう一年後だつたら、二人は出會はなくつても濟んだかも知れない。』

木暮は又そんな事を考へ始めた。

榮子は藝者で、今から六年前廿一の時に或るブルジョワの青年に戀されて結婚した。其の青年は當時大學生だつたが、滿一年間月に四十五回（毎晩通つて、其の上隔日に學校を休み、丁度授業時間だけ彼の女の處へ來て居た。）と云ふ熱心さで彼の女に通ひ續けた。榮子には其の頃深い仲の旦那があつたのを、其の青年は青年らしい生一本の情熱から突然彼の女の旦那を訪れて、彼の女と結婚する事を許してくれと頼み込んだ。物のわかつた其の旦那は彼の情熱に動かされて一時榮子と手を切る事を承諾したものゝ、やつぱり思ひ切れなくつて彼の女を他處へ匿まつた。青年は短刀を懷中にして榮子を見つけ次第刺し違へて死ぬ氣で彼の女の行方を探し廻つた。

さうした深い事情から辛くも結婚する事が出來た山名――榮子の新しい夫はさう呼んだ――と榮子は、最初の一二年の間夢の樣な幸福な時を過した。ハイカラな夫は全然背式な趣味の中に育つた妻に英語を教へ、ダンスを習はせ、派手な洋裝をさせて連れ歩いた。いつも島田に結つて居た髮を彼の女は七三に分け、お汁粉や蜜豆の代りに紅茶と西洋菓子が口に合ふやうになつた。利口な彼の女は夫の兩親や兄弟からも氣に入られ、夫の新しい趣味にもすつかり同化した。

だが放蕩な夫は妻がすつかり自分の趣味に適する樣になり、彼が其の爲めに向けた努力がもう不必要になつた頃、そろ〳〵彼の女に倦きが來て、又遊び歩く樣になつた。勝氣な榮子には其れが我慢がならなくつて家を飛び出してしまつた。夫も、夫の母親も、再三彼の女を訪れて歸宅を求めたが、どうしてもきかなかつた。一度云ひ出したら後へ引かないのが彼の女の性分だつた。

榮子は二十七で、まだ美しかつた。ハイカラな趣味と、勝氣な性格と、何處かまだ人妻らしい淑やかさとが、再び勤めに出た彼の女を、さうした仲間の女の中で際立つた者とさせた。そしてもう三十四になつて、二人の子持ちで、友達に誘はれて始めて紅燈の街へ足を踏み入れた木幕が彼の女を知つた。二人の戯れの戀から火の樣に強く、颱風の樣に烈しい情熱が湧き起つて來た。彼等は毎日の樣にいつも行きつけの家で落合つて、退屈するとよくぶら〳〵外へ出歩いた。木幕はそんな時、從者の樣に謙遜だつた。何處へでも榮子が行かうと云ふ處へ附いて行つた。そして行き交ふ人がまるで彼を眼中に置かないで、榮子だけをじろ〳〵眺めて過ぎるのに滿足して居た。

「少し疲れちやつたわ。タクシイに乘らたい?」

萬世橋迄來た時、榮子は木幕を見返つて云つた。彼は同意して停車場の廣場でタクシイを傭つた。

「どちらへ?」

運轉手は二人が坐席に乘込んだ後からドアをばたんと閉めながら問ひかけた。

木幕は榮子を見返つた。何處を指して車を走らせたらよいか、彼にはわからなかつた。

「麹町の五番町、外濠の電車の停留場があるでせう。あの側でいゝわ。」

榮子はかう命じてから、小聲で木幕に囁いた。

『私の元の家を見に行きませう。去年の地震で燒けちやつて、今小さなバラツクが建つて居るんですよ。』

自動車は須田町の大通りを一散に走り出した。片時でも木幕の心を自分の側から離すのを欲しない榮子は、彼がちよいとでも何か考へ込むと、直ぐ『何を思案して居るのです？』と問ひ詰めるので、彼は頻りに自動車の中で彼の女に話しかけなければならなかつた。其の癖彼は憂鬱だつた。自動車が電車と併行に走つて、電車の窓から乘客に車内を覗き込まれたりすると、妙にじわ〳〵と氣が涸れてしまつた。運轉手臺のメートルが時々かち〳〵音を立てゝ、料金の標示額を殖やして行くのも、財布の中が豐かでない彼には氣になつた。

『いくらするかな。二圓位なものかな。でもまだ後五六圓は殘る筈だ。』

そんな風に考へては、あわてゝ又榮子に次の質問を向けた。

『山名さんが散歩にでも出て來るところへぱつたり出會ひはしないかな？』

『さうね、なるたけ氣をつけて行きませう。夜だからわかるまいけれど、若し姿が見えたら私逃げ出すわ。』

自動車は九段上から濠に沿うて、五番町へ出た。

『其處でいゝわ。停めて頂戴。』

停留場の側迄來ると、榮子はさう云つて車を停めさせ、先きへ身輕に飛び降りた。料金を拂つて木幕も後から車を降りた。

『此の坂を昇つて行くのよ。自動車がはいるんだけれど、眼立つから。』

榮子は電車通りから右手の狹い、人通りの無い坂を上つて行つた。

『よくホテルへダンスに行つた歸りなどに山名と一緒に自動車で此の坂を通つたわ。洋服だもんだから冬は寒くつて、

足の先がぶる／＼顫へて來るの。」

木暮は默つて榮子の述懐を聞いた。純白な洋裝をして、タキシードを着込んだ美男の夫と並んで自動車のクッションに腰を下した彼の女の姿がふと眼の前に浮び出た。嫉ましさと云ふよりももつと變つた感情が、勿體なさとでも云つた樣な、感謝に近い感情が彼の心にあつた。彼の樣な氣の弱い男には、自分の身をへり下して、戀人を崇める事が、現在の喜びを二重にさせるのだつた。山名との家庭生活の話を始めるのはいつも榮子が機嫌が好い時で、木暮は實際又其れを聞くのが不快ではなかつた。美男で、金持で、多情で、だが結局親切で、善良な青年――彼は榮子の度々の物語から、山名をさう判斷して居た。山名は彼の女に忘れ難い記憶を殘して行つた。だが彼の女を彼とめぐり合はせ、かうして今彼の燒跡の家を一緒に見に行く機會を與へたのも、結局山名の仕業ではなかつたらうか。山名が彼の女を何處迄も愛し、そして又彼の女が彼の家を飛び出さなかつたら、二人は今も尚此の坂道を樂しげに自動車で馳け拔けて行つたかも知れない。

「まあ、Kさんのお邸も燒けたまゝだわ。皆さん別莊の方へ行つていらつしやるのかしら？」

榮子は坂を登つた處で右手の燒野原を見やりながらさう云つた。其れはKと云ふ子爵家の邸宅で、其處の息子と山名とが懇意であるらしかつた。實際あの大地震後一年以上もたつて居て、下町の商家などは粗末なバラックながら皆もう家が建ち、元通りの家族が住つて居るのに、此の邊は大きな邸宅の跡が崩れた石の塀や、枯れた立樹を殘して、まるで燒けたまゝで投げ棄てゝあつた。おそらく別邸などを持つて居る紳士が多いので、皆其の方へ引き移つて、本邸の再築を急がないのかも知れない。

「山名さんの家は何處？」

木暮は暗い往來で行手の明るい窓をあれかこれかと物色しながら問ひかけた。

『もう直きなんです。氣をつけて誰か來さうだつたら教へて頂戴。』

榮子はさう答へて足音を忍ばせた。

道が下り坂になつた處の片側の窪地に二階建の質素な洋館が建つて居た。坂道で踏みながら榮子はぢつと其の洋館の二階の窓に眼を注いだ。

『小さな、可愛らしい家ね。以前の半分になつてしまつたわ。』

そして彼の女はほつと深い溜息をついた。

『山名さん何處に住んで居るの？二階？』

大森の言葉に對して榮子は無言で頷いた。

本道の洋館の二階の窓は明るい火に輝いて居た。其のオレンヂ色の硝子窓と、黒い闇と、其の中で稍や佇みを見せた洋館の輪廓と、此の三つの色がいつまでも二人の眼を捉へた。春先か、夏だつたら、其の窓が開け放されて、中の人影が洩れて出たかも知れない。だが冬の初めの冷めたい夜氣に對して窓はぴつたり閉されたまゝで、硝子に映つたオレンヂ色の光は塗りつけた様に動かなかつた。

『どんな人だらう、今度の人は？』

榮子は呟きながら立ち上つた。山名が今下町の方の若い藝者をひかせて同棲して居る事を大森は彼の女から聞いて知つて居た。

『彼處に靜かな離れがあつたのよ。それからずつと廊下にたつて、此方が女中部屋で、其れからお湯殿があつて、中庭の向ふにお父さんとお母さんのお部屋があつて……』

榮子は小さな新築の洋館の周圍の空地を指しながら、燒けない前の家の間取りを木幕に說明した。其の父の事も、母の事も、彼の女の氣に入りの小間使の事も、木幕は皆彼の女からよく聞かされて居た。以前の華かな生活を誇る女らしい虛榮心――一概にさう云つてしまへない物が其處にあつた。榮子は本當に其等の人々を愛し、そして又其等の人々から親しまれた。夫の愛情が醒めて行けば行く程、周圍の家族との交渉は深くなつた。家を飛び出さうとする彼の女を皆が總掛りで引止めたのだつた。家出の最後の決心をする前、三日も四日も御飯を食べずに考へ込んで居た彼の女に、指先で無理に口をこじ開けて玉子と牛乳を飲ました優しい姑、『いゝかい、屹度歸つて來るんだよ。ほんの四五日頭を休めに實家へ行くつもりでなくつちやいけないよ。』榮子が家を出て行く時にさう云つて、當座の小遣にと小切手を書いて渡してくれたよく物のわかつた舅、――どうして榮子が其等の人々の慈愛を忘れる事が出來よう。彼の女の淋しい、賴り無い今の氣持が、ともすればさうした、つい去年迄の義理の父母の追憶へと戻つて行くのは當然だつた。そして今宵のあてもない散步に疲れて、ふと木幕を誘つて山名の住居を見に來ようとした事も。

『お父さんもお母さんも其れは好い人だつたわ。私をかあいがつて下さるのは、つまり山名がかあいゝからだからとは思ふんだけれど、其れでも餘り優しくしてくださるので、家を出る決心がついてからも、私なか〳〵思ひ切つて實行出來なかつたんですの。――お母さんは身體が弱くつてね、陽氣の變り目には屹度寢込むんですの。そんな時身の周りの事は一切私がしてあげなくつちや氣が濟まないんで、看護婦を呼んでも何の役にも立たないんです。そして少し熱が高くなると直ぐに私をそつと枕許へ呼んで、銀行の通帳や實印を私の手に渡し、お父さんはお人好しだし、與一（彼の女の夫の名）はのらくらものだからお前がしつかりして居てくれなければいけない。私が亡くなつたら此の通ひや實印はお前が大切にしまつて置いて、決して與一に渡してはいけないつて云つて下さるの。――私悲しくつて、いつもぼろ

く涙が出ちやふんです。」

闇の中にぢつと佇んで榮子は又姑の追憶を語り出した。其の優しい姑は直ぐ眼の下の窪地の洋館に住んで居て、おそらく曾て榮子に注いだであらう同じ愛情を新しい息子の嫁に注いで居るのだ。山名は其の新しい妻と樂しく語り合ひ、小間使は二度目の女主人に前と同じ様に忠實に仕へて居るに違ひない。そして其等の人々と今は全くあかの他人になつてしまつた榮子は、さうした追憶に到底溺れきれない今の淋しい心を何處に、誰の爲めに注がうとするだらう？

木暮は安んじて、謙遜な歡びに胸を顫はせて、そつと彼の女の手を握りしめた。

夜は暗く、船の上から燈台の火を見つめて居る時の様に、オレンジ色の窓の光が次第に二人の眼の前から遠のいて行く氣がした。

二

榮子はもう四月餘りも一切お座敷へ出ず、木暮の外の誰にも會はなかつた。

六年の間眞面目な家庭の主婦として暮して來たゞけ、彼の女は今更に藝者稼業の辛さが身に染みるらしかつた。木暮に會はない前から彼の女は決して稼業に熱心な女ではなかつた。どんなに呼ばれても氣に向かない時はお座敷へ出なかつたし、しつこく勸められても殆どお客を取らなかつた。たつた一人木暮の前にお客があつた。其れは彼の女の以前の夫と同じ私立大學を出た資産家で、木暮より三つ四つ年下だつた。勿論妻子がある身の上だつたけれど、彼は深く榮子を愛して居て、是非彼の女を引取つて一生面倒を見たいと云ふ望みを持つて居た。榮子は其の男の善良な氣質と、彼の女に對する温かな愛情とはよく認めながらも、さう彼を好いて居なくつて、其の申出を容易に承諾しなかつた。昔見—

―其のお客の名はさう呼んだ――は次第にあせつて、若し結婚が望みなら妻子を捨てゝ榮子と同棲してもいゝと迄云ひ出した。執拗に返答をせがまれて榮子はほと／＼困つて居た。

正直な彼の女は木暮に淸見の話をしてあつたし、淸見には又木暮の事を打開けて居た。

『あなた、私をどう思つていらしつて？』

委細を打開けて、そんな風に榮子から相談を持ちかけられると、木暮は何といつてよいかわからなかつた。榮子を愛する點では決して淸見に劣らない事を彼は信じて居たし、彼の女にもさう信じて貰ひたかつたが、貧しい彼にはとても近い將來に榮子を引取つて世話をする餘裕などは無かつた。

『僕は貧乏だし、とても君を幸福にする力は無い。決して恨まないから淸見さんの方へ行つて下さい。』

彼は再三榮子にさう諭した。

『さうね、離れて思ひ合ひませう、一生涯。』

榮子は一度そんな事を云つた。實際一時は彼の女は木暮を捨てゝ淸見に身を任さうと決心しかゝつたらしかつた。さうした彼の女の心の方向を何が急に變へさせたか、木暮にもわからなかつたし、おそらく榮子自身にもはつきりわからなかつたかも知れない。實際彼の女は其の頃迄、此の二人の客に對する好惡の情にさう隔たりを感じて居なかつたのだつた。木暮に會つて居る時は木暮を愛し、淸見に會つて居る時は淸見を愛して居た。或ひは反對に木暮に會つて居る時淸見を思ひ、淸見の坐敷に居る時、木暮を慕つて居たかも知れない。

木暮が妻子のあるのを打開けて居たのに、淸見が始め獨身だと僞つて居た事や、或ひは彼が道樂者で、もう一人外の土地の藝者をひかせて圍つて居た事がわかつた爲めであるかも知れない。だがそんな事は榮子が彼を愛して居れば許せ

る事だつた。若しかすると木暮の貧しい境遇に對する同情、――愛する女をみすく競爭者に奪ひ取られかゝつて恨み言一つ云へない哀れな立場に對するいぢらしさ、と云つた樣な物が彼の女の心に訴へかゝつたのかも知れない。だがそれとても彼の女が木暮を愛して居なければ大して問題ではないのだつた。結局木暮の持つて居る何物かゞ、いや、彼の全存在が、彼の女の愛情の上に重くのしかゝつて來たのに違ひない。彼の女は其の重みを拂ひかねて、其の下にへたばつた。そして同時に木暮の心にも強い感謝と、苦痛を作ふ歡びとを投げ返した。

『私もう決心しました。今日から決して清見さんに會ひません。無論他のお客の前へも一切出ません。私はあなたの物です。あなたゞけの物です。』

或る晩榮子は木暮の前で大きな二つの眼をほてらせながらさうした決心を打開けた。

だが清見はどうしても彼の女を思ひきれないらしかつた。相變らず彼の女に會ひに來たが、榮子はもう斷然彼の坐敷へ行く事を拒んだ。

木暮が榮子を呼んで酒を飮んで居るところへ、清見から彼に宛てた手紙が屆いたのは、さうして清見が幾度か無駄足を踏んだ後だつた。――あなたのお噂はよく榮子から聞いて居る。どうか一眼榮子に會ふのを許して貰ひたいと云ふ、慇懃な、そして思ひ餘つた文面だつた。

氣が進まない榮子を木暮は無理に追ひ立てる樣にして清見の處へやつた。ほんの一時間ばかりで、榮子は蒼白い顏をして歸つて來た。

『くやしいわ、私。』

さう云ひながら彼の女はいきなり手に持つた扇子を木暮の前に投出して、食卓の上に顏を伏せたまゝ泣き續けた。丁

度丈の事で、彼の女は木幕とお揃ひの扇子を持つて居た。そして其の扇子の骨がばら〳〵にされてあるのを木幕は眼に着けた。

『どうしたの？扇子を破かれたの？』

彼は榮子の顔を覗き込みながら問うた。

清見は彼の女がいくら呼んでも少しも來てくれないのを恨んで、彼の女に食つてかゝつたのだつた。そして彼の女が持つて居る扇子が木幕からの贈物である事を知ると、嫉妬の情から其れを奪つてずた〳〵に紙を引裂いた。

『今夜直ぐ妾子を實家へ歸すから是非俺と一緒になつてくれ。聞かなけりや殺すと云つて脅かすんですの。』

榮子は泣顔を伏せたまゝ云つた。

『其れでどうしたの？』

木幕は直ぐ問ひかけた。

『殺されても仕方が無い。いやな者はどうしてもいやだつて云つてやりました。さうしたらあの人はいきなり私に飛びかかつて咽喉を締めたんです。でも私ちつとも抵抗しませんでした。』

『何故急いで誰かを呼ばなかつたの？』

『其れは聲を立てれば誰か來てくれるとは思ひましたが、私そんな、首を締められる程の深い事情があの人との間にあると他人に思はれるのがいやだつたのです。――息が苦しくなつて、眼を白黒させたら、あの人はやつと手を放しました。そして今度は私の膝を抱き締めて、許してくれ、許してくれつて、おい〳〵聲を揚げて泣くんです。――私、これで首を締められたのは二度目よ。』

榮子はさう云つて、やつと少し氣持が直つたらしく顏を揚げた。

自分と結婚する前、彼の女を世話して居たSと云ふ男にやつぱり一度首を締められかゝつた事を木暮は前に聞いて居た。白石の熱心な嘆願に動かされて榮子と手を切る事を一度承諾した後、Sは急に又彼の女と別れるに忍びなくなり、一夜自動車で彼の女を郊外の旅館へ連込んで、やつぱり彼の女の咽喉を締めようとしたのだつた。

『あの時の方が餘程怖かつたわ。Sは本當に私を殺して、自分も一緒に死ぬ氣だつたんですもの。私もSに濟まなくつて、殺されてもいゝと思つて居たんです。だが今夜なんかは唯の脅かしで、私口惜しいだけで、ちつとも怖くはなかつたわ。』

木暮には清見のさうした狂暴な行動が憎いと云ふよりも寧ろいぢらしかつた。妻子があつて、しかも立派な教育と豐かな資産とを持つた身で、清見は全く彼の女の爲めに男の恥ぢも譽りも捨てゝ居るのだ。若し榮子が妻子を捨てろと云つたら、本當に彼はさうしたゞらう。死ねと云つたら一緒に死にもしたゞらう。

『あなたは清見程私を思つてくれないんです。唯私があなたの方が好きだから、清見を捨てる氣になつたので、本當はあの人の方がずつと私を思つてくれます。』

いつぞやさう云つた榮子の言葉を木暮は思ひ出した。實際清見は周圍のあらゆる人々に對して自分の我が儘を押し通さうとする男に違ひなかつた。だが其の我が儘な、情熱的な彼が戀敵の木暮に對してだけはいつも殷懃な、極く謙遜な態度を執つて居た。榮子が木暮を愛して居る事を知つて、木暮に惡く思はれまいとする卑怯な、打算的な態度——だが其れがもう破れてしまつたのだ。彼は嫉妬の情に驅られて、木暮が榮子に贈つた扇子を引裂き、明かに木暮に對して敵意を表しかゝつた。

『あなたは扇子を破られても平氣なのね。私がどんなに口惜しいか察して下さらないの？』

木暮が眼の前に投げ出された扇子をぼんやり見つめて居ると、榮子は苛々した語調でかう詰問した。

『平氣ぢやないさ。だが清見さんの氣持を考へると一概に憎いとは云へない。いぢらしいと云ふ氣もする。君はさう思はない？』

靜かな憂ひを湛へた眼でぢつと木暮に見返られて、榮子は急に又しほれかゝつた。彼の云ふ事におそらく彼の女は異存が無かつた。唯彼の女が愛して居る木暮から、今はもう明かに嫌ひになつた清見よりも、もつと強い情熱の閃めきを見せて貰ひたいのだつた。

そんな事があつてからも清見はまだ榮子を思ひ切れないらしかつた。木暮と彼の女とが會ふ家の前に彼がしよんぼり佇んで居る姿がよく見られた。木暮も、榮子も、清見に見つけられない爲めに、出入にかなり氣を配らねばならなかつた。勝手口からはいつたり、庭口からそつと忍び込んだりした。

一度木暮は二階の窓を細目に開けて、往來の向側の電柱にぼんやり凭れて居る清見の姿を眺めやつた事があつた。白い薩摩上布に黒衣の角帶を捲きつけ、細身のステッキを握つてぢつと身動きもしないで居る其の姿は乞食の樣にひどく哀れに見えた。

『およしなさいおよしなさい。』

榮子はさう囁いて木暮の手を強く引張つた。室内の影が障子に映るのを怖れて電燈は消してあつた。そして暗闇の中で木暮は榮子の手を強く握りしめながら熱い涙を二つの眼に湛へた。清見をさうした不憫な狀態に陷れた者は彼ではな

くして。榮子だつた。否、寧ろ清見自身の性格だつた。だが彼は何者かに對して手を突いて謝りたい氣になつた。そして一方榮子に對する愛着が、やがて又彼を破滅へと導く狂暴な力が、次第に募つて來るのをはつきりと感じた。

三

清見の妻が突然木幕を其の勤め先の會社に訪れて彼を驚かしたのは其れから間も無くだつた。

夏の盛りの日の午后四時近くだつた。退社時間が迫つたので木幕はそわ〳〵して居た。此の頃彼は家へは歸らずに大概社の歸りに其のまゝ榮子に會ひに行く事が多かつた。

『清見さんと云ふ方がお眼にかゝりたいと云つて來ました。女の方です。』

給仕がさう取次いで來た時、同僚たちは皆木幕をからかひ出した。身持の堅かつた彼が此の頃遊びに行き出した事は社内でも評判されて居た。

『木幕君、御奢り給へ。美人の訪問だよ。丁度四時の退社時間を待合せて、一緒に芝居へでも行かうと云ふんだね。』

そんな事を云ふ者もあつた。實際木幕も最初は榮子が清見の名を騙つて訪ねて來たのかと思つた。だがどうせ晩には此方から會ひに行く事になつて居たし、急用があれば電話を掛ければ濟む筈だつた。

階下の應接室へ彼が降りて行くと、二十三四の、派手な明石に紗の單衣帶を締めた美しい婦人が椅子に腰を下して、暑さうに華奢な手で扇子を使つて居た。其の華奢な手に十分ふさはしい、小さな、房のついた藤色の扇子だつた。

『私木幕でございます。』

木幕はさう云つて此の美しい婦人の前に頭を下げた。

『手前は清見の家内でございます。お眼にかゝつた事もございませず、突然お伺ひいたしまして何とも失禮いたします。――實は主人にも内證で伺ひました譯で。』

慇懃にお辭儀をしながら少し顏を赤らめて彼の女は木幕を見た。互に或る羞恥を感じた。そして又同じ程度の好奇心を感じた。

彼の女は美しかつた。襟元へ風を送つて居る小形の扇子に隱されてしまふ程顏は小さかつたが、色は純白で、眼鼻立ちはきちんと整つて居り、愛嬌のある、だが初對面の男をちつとも怖れない樣子から、彼の女がくらうと上りである事が察せられた。

『實は折入つてお願ひ申したい事がありまして參上した次第なんでございますが、お忙しいでございませうか？』

『いゝえ、もう會社はひける時間で、急ぎの仕事はございませんから、どうぞお氣遣ひなさらない樣に。』

榮子の問題で彼の女が來たといふ事は疑も無かつた。正直な榮子が木幕に清見の事を告げて居たと同樣に、清見にも木幕の姓名や職業を教へて居たので、清見の妻がかうして勤め先へ木幕を訪ねて來た事も不思議ではなかつた。彼の女が極く善良な、夫思ひの女である事を、木幕は榮子を通じて屢々聞いて居た。夫がどんなに家を空けて放蕩を續けても、彼の女は何とも云はないのであつた。夫がいつも幸福で居る樣に、世間へ出ていつても夫の身が立つ樣にと、唯其れのみを念じて居る。舊式な思想と貞操觀とを持つた女であつた。夫から榮子の噂を聞き、榮子に是非一度紹介して貰つて、今後仲善くつきあひたいとさへ望んで居ると云ふ事も木幕は聞いてゐた。

『實はあの榮子さんの事なんでございますが――』

清見の妻はかう云ひかけて扇子をぴつたり閉し、テーブルの上へ置いた。

『はあ。』

木暮も汗ばんだ兩手を膝の上に重ねて、彼の女が話しいゝ樣に視線を反らせた。

『御承知でもございませうが、清見があの人を大變好いて居りますんで…………』

彼の女の語る處に據ると、清見は榮子に會へなくなつてから毎日の樣にヤケ酒を呷つて方々の色街を歩き廻つて居るのださうである。馴染の幇間を連れてもう一週間も外で泊り續けて居る。正體無く醉ひ潰れる迄酒を飲み續け、何處へでも倒れて眠つてしまふ。眼が醒めればすぐ又多勢藝者を集めて酒宴を始める。興が冷めると自動車を驅つて又外の土地へ出かけて行く。『榮子！榮子！』賑かな座敷で、夜更の自動車の中で　時々彼はかう叫んではぽろ〳〵涙をこぼす。幇間が彼の健康に異狀を來すのを心配して　一度家へ歸へる樣にといくら勸めても、清見は此のまゝ醉ひ潰れて死ぬのだと云つてどうしてもきかないのだと云ふ。

『前から宅へも折々出入して居ます幇間なので、昨夜清見が醉ひ潰れて寢込んだ間にそつと手前の方へ電話をかけて、委しい事情を私に知らせてくれたのでございます。――とても我が儘な性分で、いつも云ひ出したら後へ引かないんでございますから、どうなる事か心配で、昨晩も私は夜通し起きて考へ込みました。私の身はどうなりましても構ひませんが、何とかして主人の心の濟む樣にしたいと存じまして、恥づかしさも忘れて伺つた次第でございます。』

彼の女はさう云つて小さな麻の手巾でちよいと眼を蔽うた。拭き取る程の涙は浮んで居なかつた。恥づかしさを紛らはす爲めであつたかも知れない。木暮の心を牽く爲めの一種の品の良い嬌態であつたかも知れない。木暮は默つて彼の女の言葉の續きを待つた。

『實は唯今榮子さんにお眼にかゝつて、是非清見に今後もつきあつて下さる樣にとお願ひいたしたんでございますけれ

ど、どうしてもいやだと云ふ御返事なんでございます。――あゝ云ふ處に居てもなかなかしつかりした氣象の方で、もう木幕さんの外どのお方にも會ひたくないときつぱりお云ひなさるんで。」

夫の遊蕩を憤つて家を飛出した榮子と、夫に滿足を與へる爲めに恥ぢを忘れて奔走して居る清見の妻と、此の二人の會見の模樣を木幕は今思ひ浮べてみた。清見の妻の舊式な思想を内心嘲笑ひながらも、やつぱり榮子は彼の女の熱心な願ひに心を動かされたに違ひない。だがさうして心を動かされながらも、自分の覺悟を決して變へようとしないのが榮子の性質だつた。清見の妻の樣な女性を或る意味で榮子は幸福だと感じたか知れない。だがさうした幸福はとうに榮子自身が投げ捨てゝ來た物だつた。女としての誇りから夫をさへ見捨てた榮子に、どうして清見の妻の願ひを聞き入れる事が出來たゞらう。

「お願ひでございます。本當に身勝手な事を申して何とも相濟みませんが、どうぞあなたから榮子さんに清見に會つて下さる樣にお話し下さいませんでせうか。私を助けると思つて頂いて。」

清見の妻はテーブルの上へ兩手を突いて靜かに其の上に頭を垂れた。木幕はその細い項を、腰を支へた汗ばんだ胸元を、暫くの間ぢつと見つめて居た。彼は彼女に女の弱さと同時に强さとを見た。どんな羞恥と侮蔑とを甘受しても一度得た人妻としての地位を失ふまいとする努力、夫の爲めに愛人を求めてやる事によつて妻としての地位を堅くしようとする利己的な、だがいぢらしい企圖、彼は其處にあの正直な、純情な榮子と正反對の物を見た。二人は同じく情熱を持つて居たが、榮子が其の情熱の爲めに妻としての地位を捨てたに反して、清見の妻は其の情熱を自分と夫との身を護る爲めに使はうとして居た。

「よくわかりました。私からあの人に話してみませう。尤もあゝ云ふ氣質の人ですから、なかなか承知しないかしれま

せんが。』

『其處をどうぞ一つ、私を助けると思召して。』

彼女はもう一度慇懃に頭を下げた。

清見の家庭の事情や、營業の狀態――彼は或る建物會社を經營して居たが、仕事の方は腕きゝの支配人に任せきりらしかつた――などを少しばかり話した後で、彼の女は改めて突然の來訪と無躾な願ひとを詫びながら歸つて行つた。

一人二人同僚が先刻から木幕と清見の妻との對話中應接室の前を通りかゝつて、隣のドア越しに室内を覗き込んで行つたりした。二人が思ひの外嚴肅な顏つきをして居るのと、清見の妻が人妻らしいきちんとした風采をして居るのとであてが外れたらしく、彼等は皆こそ〳〵事務室の方へ引揚げて行つた。そして木幕が彼の女を階下の出入口迄送つて歸つて來てからも、もう彼にからかはうとする者が無かつた。そして又實際彼は誰のどんな氣輕な冗談をも直ぐ反撥してしまひさうな、ひどく憂欝な考へに落込んだ表情を湛へて居たのだつた。

五時近くなると社員たちは皆歸つて行つた。木幕は洗面所で肌を脫いで汗ばんだ身體を拭き、涼しい日蔭が出來るのを待つて戶外へ出た。

電車が混雜してなか〳〵乘れさうもなかつたので、彼は停留場の近くのカフエーへはいつて腰を下した。

『どんな風に燦子に話してみたものだらう？』

ニツケルの皿に盛られたアイスクリームをちび〳〵匙で口の中へ運びながら、彼は考へ込んだ。唯賴まれた義理で話してみると云ふ以上に、彼には本當に清見夫妻を不憫に思ふ氣がかなり强かつた。だが燦子はもう斷じて清見に合ひたくないと云ふ。そしてそれは木幕の爲なのだつた。それを木幕から清見に會つてくれと賴むのは明かに矛盾であつた。

だが又さうした依頼を彼に敢てした清見の妻の行動は更に甚だしい矛盾であらねばならなかつた、

『結局榮子があゝ云ふ氣質を持ちながら、あゝした境遇に居ると云ふ事がいけないんだ。それが一切の禍根なのだ。』

さう考へると、次ぎに木幕には彼が彼の女を今の境遇から救ひ出す力が無い事が、そしてそれがわかつてゐながら彼の女にこんなに近づいて行つた事が、何よりも恥ずべき事だと感ぜられて來た。道德的の非難を受ける點では彼も木幕も同等であつたかも知れないが、境遇に許された自由と云ふ事になると、木幕の方がより多く責めらるべきであるに違ひなかつた。

アイスクリームの後で彼は更にソーダ水を飲んだ。カフエーを出てからいつも榮子と會ふ家へ行く迄の間に、電車の中で彼は又汗びつしよりになつて、シャツや猿股がぴつたりくつゝいた身體がひどく持ち運ぶのが大儀に感ぜられた。そして彼の心にも同じ樣に何かぐしよ／＼した、不氣味な物が上面に被ひ被さつた まだ家へ歸らないで何處かでやけ酒を飲み續けて居るであらう清見と、夫の身の上を案じてぼんやり家の中で考へ込んで居る清見の妻の姿が妙に眼先にちらついた。だがそんなに清見が我が儘で、放埒であり、彼の妻はそんなにも夫からなほざりに投げ棄てられて居ても、何かしら二人を堅く結びつける強い力が彼等の間に感ぜられるのだ。そして其れが表面どんなに熱烈に愛し合つて居ても彼と榮子との中には與へられてないのだ――そんな氣も頻りにした。

榮子は間もなく湯上りに白粉もつけず、髮を無造作に結び髮にして木幕の待つて居る座敷へやつて來た。

『今晩は。今夜は又昨夜より餘計暑い樣ですわね。』

彼の女はそんな事を云ひながら、いつもと同じ樣に落付いて彼と話をした。

『今日ね、清見さんの奥さんが訪ねて來やしない？』

木暮がさう問ふと、やつと彼の女は頷いて其の事を語り聞かせた。

晝過ぎにいつもよく清見が來た家から榮子の處へ迎へが來たが、彼の女は行かなかつた。二度目にその家のかみさんがやつて來て、清見の奧さんが唯一眼でいゝから是非あつてくれと賴むからちよいとでもいゝから來てくれとせがまれたので、止むを得ず彼の女は出て行つたのだと云ふ。

『どうぞ私を助けると思つて主人にあつてやつて下さいと手を突いて賴まれるんですもの、私困つちやつたわ。――主人は二三日前から新橋に居ます。居る家がわかつて居ますからこれから自動車で一緒に行つて下さいなんて云ふの。隨分變つた奧さんね。あんなに旦那に馬鹿にされて口惜しくもないのかしら。私にはとても出來ない事だわ。怒つて家を飛出してしまふ方が本當だと思ふわ。』

『どつちにも理屈はあるさ。だが僕はあゝして恥を忘れて賴みに來る　あの奧さんの氣持が不憫でならない。』

木暮はさう答へて、今日の夕方清見の妻が會社へ突然彼を訪問して、同じ樣な依賴をした事を彼女に告げた。

『其れでどうなすつたの、あなたは？』

榮子は大きな　熱つた眼でぢつと木暮の顏を睨んだ。

『とにかく私から話をしてみませうつて云つて置いたんだ。』

『そしてあなたは私に今後も清見に會へつてお勸めなさるつもり？』

榮子の聲は叱りつける樣な鋭い語調になつた。

『勸める譯ぢやないんだが、唯あの奧さんに氣の毒で――』

『男は勝手です、皆勝手です。山名だつて、清見さんだつて、あなただつて、皆同じです。――清見さんの奧さんの氣

持は私にわかつても、そんな事を引受けたあなたの氣持や、そんな事を頼む樣にしむけた淸見さんの氣持は、私にはわかりません。――淸見さんの奧さんが不憫で、私は不憫ぢやないんですか？男はいや。男は皆づるくつて、身勝手です。」

榮子はさう云ひながら開け放された窓の敷居に顏を伏て烈しくすゝり泣いた。無論木暮には彼の女の非難を尤もな物として受容れるより外にどうしても仕樣が無かつた。

四

榮子は今の境遇から救ひ出す事は木暮の當然爲さねばならない義務だつたが、現在の彼には到底出來さうになかつた。毎晩彼の女に合ひに行く爲めの費用を造へるのさへ、彼にはやつとの事だつた。妻子を捨てゝ彼の女と同棲する事――淸見が示したさうした熱情も彼には無かつた。いや、其れは熱情の問題ではなくつて、結局金の問題だつた。無資產の彼にはそんな思ひきつた事を決行すれば、彼自身も、榮子も、振り捨てた妻子も、皆忽ち食ふに困らねばならないのが明かだつた。彼には全く手の下し樣が無かつた。榮子に對する熱情が冷めて行くか、或ひは心身を燒き盡す程熾烈になるか、どつちかの經過をぢつと他事の樣に傍觀して居るより外は無かつた。

朝八時に勤めに出て、夜は十二時過ぎでなければ家に歸らないので、彼は殆ど妻子と顏を合せる暇が無かつた。石の樣に心の冷えた彼の妻は此の幾月の間殆ど彼に一言も物を云はなかつた。用があるといつも彼の机の上へ用件を認めた紙片を置いておいた。夫の遊蕩を憤つて家を飛出した榮子と、夫のために愛人を取り持たうとする淸見の妻と、そして又玆に夫の生活に全く沒交渉で、石の樣に冷かに押し默つて居る彼自身の妻と、――木暮は三つの女性の異つた型を見た。そして彼自身の妻の性格が彼には最も堪へ難く思はれた。夜遲く家へ歸つて彼が戸を叩く時、無言で雨戸を開ける

妻の、魚の樣に凝つた、無表情の眼は、彼の心から慚愧の情を追ひ拂つて、鈍い憎惡を吹き込んだ。

だが考へてみると其れは此頃になつて始まつた事ではなかつた。家を持つて十年近くの間、彼の妻は用が無ければ殆ど彼に話しかける事をしない女であつた。何かをかしい事があつた時でも、齒の裏へ舌の先をちよいと宛てゝ、『フウー』と云ふ微かな聲を立てるだけの事しかしない女だつた。岩にこびり着いた苔の樣に、唯置かれた場所に默つて生きて行くのが彼の女の事足りた生活だつた。そしてそれだけに又一度落着いた場所からは、自分が生きて行かれる限りどんな事があつても微塵も動かうとしなかつた。さうした彼の女の無感覺な氣質が十年の間に知らず識らず木暮の心を同じ樣に乾からびさせて居た。反應の無い處に感情を投げかけても無駄だつた。彼は家庭では妻と同じ樣に心を石に化した。妻が默つて居る時、彼も知らない人の前へ出た樣に言葉を落し控へた。妻が『フウ』と齒の裏から微かな聲を立てる時、彼も少しばかり苦笑してみせた。二人の子供は兩親に構ひ無く室内で騷ぎ廻つた。そして父と母とにはいつも別別に話しかけた。食物や着物の事は母親に、學校や買物の事は父親に――子供たちはいつの間にかさうして身の周りの事で兩親に相談する事柄を二つにきちんと分けて居た。

三四年前、彼が家庭のさうした憂欝な空氣に堪へかねながらも、まだ遊里に足を踏み入れた事が無い時分だつた。彼はふと或る用件で學校時代の友人を訪れた事があつた。

Tと云ふ其の友人は親讓りの豐かな資産を持ち、株などに手を出しながら他に是れと云ふ職業も無く安樂に生活して居た。彼は若い女優を妾にして自分の住宅の隣りに圍つて居た。木暮が訪ねて行つた時、Tの一家は丁度晩飯を食べて居るところだつた。Tの妻と女優上りの妾とが仲善く彼の前に居並んで笑ひ興じて居た。子供たちは『をばさん』と呼んで其の若い女優にすつかり馴ついて居た。

『よく來たね。早速一杯獻じよう。』

Tはさう云つて木暮に盃をさした。Tの妻と妾とが、代り代りに木暮とTとにお酌をした。終ひには二人の女が三味線を持ち出して小唄を謡ひ出した。Tは酒に醉つて眞赤な顔をしながら、さも此の世の事が滿ち足りた樣ににやり〳〵笑つて居た。

『何と云ふでたらめな家庭だらう。』

木暮は其の時さう感じた。

Tの家庭には凡そ家庭と云ふ物が當然備ふべき神聖さがまるで無かつた。だが一家の團欒——さうした物は普通の家庭とは變つた形ながらにはつきりと其處に認められた。Tは妻をも、妾をも、子供たちをも、皆それ〴〵に愛し、そして又彼等からも愛されて居る。彼の持つどんな感情も直ぐ一家の人々の胸に響いて行くのだ。家族の誰もが自由に話しかけ、互に眞情を吐露し合ふ事が出來るのだ。

『淋し過ぎる。俺の家庭はどの家庭に比べても餘り淋し過ぎる。』

醉ひ潰れたTを殘して、家へ歸る途中、郊外の夜更けの暗い垣根の間の小徑を一人とぼ〳〵歩きながら、木暮は其の時さう感じた。實際彼自身の家庭は淫蕩なTの家庭よりもつと憫れで、無内容で、子供たちもTの子供よりもつと不幸だとしか思はれなかつた。父が放埒でも、母が無智でも、子供はもつと幸福に育ち得る、家庭はもつと明るい空氣で充され得る。だが彼の家庭にはどんな温かな心をもひやりと萎縮させてしまふ冷たい石があつた。どんな明るい光をも遮り留める黒い幕があつた。子供たちは自然に朝から晩迄戸外で遊ぶ樣になつた。二人共女の子であつたけれども、彼の女等は男の兒と同じ樣に手足を眞黒にして往來で泥いぢりをして居た。其處には彼等の家庭に缺けて居る明るい日光と、

潑溂とした動作があつた。十年の間家庭の陰鬱な雰圍氣の中に閉ぢ籠つて居た木幕も、到頭堪へかねて家の外に心の憩ひ場を見出した。暗い家の中には彼の妻が羽根を抜かれた家禽の樣に、默々として、一人動き廻つて居た。

五

夏から冬へかけて相變らず木幕は毎晩の樣に榮子に會ひに行つた。退屈すると二人はあてもなく散歩に出た

『初ちやんの處へ行つてみませうか？』

或る晩榮子はさう木幕を誘つた。

初ちやんと云ふのは今年の春迄彼の女と同じ家に居た若い藝者で、丁度二廻りも年が違ふ男と四谷の方に二階借りをして同棲して居た。彼の女は廿二で、男は四十六だつた。男には丁度彼の女と同年の長女の外、三人も子供があつて、彼は或る銀行へ勤めて居た。大して教育も、才能も無い男らしかつたが、子供の時分から三十年近くも今の銀行に勤めて居るので、小さな銀行ではあつたが、相當の地位に居るらしかつた。彼は自分よりも二廻り年下の、何の取柄も無い醜い藝者の爲めに、（木幕は前に一度初子に合つた事があつた。彼の女は大きな、平たい顔をして髮は赤く、手足は勞働者の樣に太かつた。）妻子を振り棄てゝしまつたのだつた。

『さあ、行つてもいゝけれど、突然押しかけて行つて惡くはないかしら？』

木幕はまだ初子の愛人の田部と云ふ人に合つた事がないので、何となく氣がひけた。

『構はないわ。向ふだつて退屈だから屹度喜んでよ。だつてもう一年近くになるのに、お客樣なんて誰も來た事がないんだつて此の間初ちやんが淋しさうに云つて居たんですもの。』

結局木森は同意して、四谷の大通りで西洋菓子を少しばかり土産に買つて、初子の家を訪れた。

裏通りのしもたやの二階を借りて彼の女は其の二廻り年上の愛人と共に棲んで居た。

『まあ、よく來て下すつたわね。』

初子は格子口迄二人を出迎へて、いそ／＼二階の居間へ導いた。六疊と三疊の二間で、狹い三疊の方に長火鉢が置いてあり、彼の女は其の前で今迄雜誌か何かを讀み耽つて居たらしかつた。

『此處で結構だわ。』

榮子はさう云つて長火鉢の前へ坐りかゝつたが、初子は無理に手を執つて奥の六疊へ連れ込んだ。

『田部さん、お留守なの？』

初子は部屋の中を見廻してさう云つた。

『えゝ。ちよいと出て行つたの！』

『御用達？』

『さあ、何ですか。――今ゆつくり話すわ。』

やがて初子は火鉢やお茶道具を運んで來て、改めて二人に挨拶した。

『私田部と喧嘩しちやつたのよ。』

さう云つて彼の女は太つた赤い兩手を支那燒紛ひの瀬戸火鉢の上で擦り合せた。

『どうして？』

榮子はちよいと眼を見張つた。

『だつて昨夜田部が銀行から歸つて來るとね、田部の處の節ちやんから――知つて居るでせう。ほら、田部の一番上の娘で、私と同年なのよ――手紙が屆いたの。田部は其れを讀んで急にふさぎ込んぢやつたの。家のことを思ひ出し悲しくなつたのね。後で考へれば無理もない事なんだけれど、私癪に觸つて、そんなに妻子の事が氣になるならこれから直ぐに家へお歸りなさいつて、無理に手を引張つて外へ突き出してやつたの。』

彼の女はさすがに少し恥づかしさうに顏を俯つむけて、暫く言葉を切つた。

『それつきり歸つて來ないの？』

榮子は氣になるらしく問ひかけた。

『いゝゑ、さうしたら一時間ばかりたつてしよんぼり戻つて來たわ。そして俺が惡かつたから宥しくてれつて謝るの。あの人の立場もわかつて居るんだし、氣の毒だとは思ひながらも、私やつぱり妙な意地で、默つて居てやつたの。それつきり物を云はないで昨夜は寢ちやつたのですよ。あの人は直きすや／＼寢入つた樣でしたが、私寢床の中で眼をつぶつたまゝ、いつ迄もいろ／＼な事を考へてゐましたわ。そつと振返つてあの人の疲れた淋しい寢顏を見ると、涙がこみ上げて來る樣な氣持になるのだけれど、それで居て私剛情で駄目ね。今朝あの人が起きて恥づかしさうに笑ひながら、「どうだい、御機嫌はもう直つたかい？」と云はれると、急に又むつとした氣になつて、顏を反向けちやつたの。――あの人、悲しさうな顏をしてお勤めに出て行つたわ。』

木幕と榮子は默つて彼の女のさうした打開話を聞いて居た。初子の氣持も不憫だつたが、田部の立場は一層憫れに違ひなかつた、四十を越して、もう嫁にやらねばならない長女迄持ちながら、さうした家族を振り棄てゝ此の醜い、感情の苛立ち易い年若い女と同棲して居る、まだ會つた事の無い田部の姿が、――おそらく痩せた、もう髮の毛が大部白く

なりかゝつた、弱々しい、善良さうな眼つきをした田部の姿が、はつきり木暮の眼の前に浮んで來た。

二時間近く二人が話し込んで、そろ〳〵歸らうとして居るところへ田部が戻つて來た。

『おなたお客様よ。』

初子はいきなり立ち上つて階段の上り口の方へ馳けて行つた。彼の女の氣持ももう柔かに解けかゝつて居た。お客の前で、和解をするにも都合が良かつた。

『やあ、今晩は。よくいらつしやいました。』

田部はさう云つて坐敷へ姿を現した。木暮が略想像した通りの人柄だつた。だが髮の毛はまだ白くなつて居ず、其の代り額際が大分禿げかゝつて居た。

木暮は初子によつて彼に紹介された。

『お噂は始終伺つてゐます。』

そんな事を云ひながら田部はぽつ〳〵木暮に話しかけた。

『木暮さん、お酒の方は如何です?。』

『さあ、少し位なら飲めます。』

木暮がさう答へると、田部は直ぐ初子に耳打ちをして酒の用意をさせた。

大して酒飲みでもなかつたし、初對面の人とかうした處でゆつくり腰を落着けて酒を飲む氣もなかつた木暮は幾度か辭退しながらも、一杯一杯と盃を强ひられた。ほんの有合せのうにと燒海苔に、初子は近所から溫かい蕎麥を取寄せて二人をもてなした。

『あなたなんかまだお若いからいゝが、私はもう二三年で五十でしてね。初子と同年の娘があるんですよ。――此の人の將來の事を思ふと、いろ〳〵心配になるんですが、まあ、これも緣でして、今更仕樣がありませんしな。』

田部はしんみりとした語調でそんな事を云つた。だが、彼の現在は、少くとも案外無造作に初子と和解が出來た今宵は、彼はさう不幸でなさゝうだつた。時々初子の方を振返つて何か話しかける彼の眼には、世間並の夫の優しい愛情の外に、もつと精神的な、非利己的な、――娘の將來を思ふ父親の樣な、しんみりした配慮が添へられてあつた。おそらく彼と初子とを結んで引放さない力は、其の父親らしい非利己的な愛情であつたかも知れなかつた。

『どうぞ是非又近い中にお訪ね下さい。』

木幕と榮子が歸る時、田部は格子口迄初子と一緒に送り出てから云ひながら、暫く其處に佇んで二人の後姿を見送つて居た。彼には又此の二人が自分たちよりずつと幸福に見えたかも知れなかつた。

六

十時過ぎになつて木幕と榮子はいつも會ふ家へ歸つた。

『お歸んなさいまし。此の寒いのによく倦きずに方々お歩きですね。』

女中がさう云ひながら二人を二階の奥座敷へ導いた。家の裏側へ向いたたつた一つの靜かな八疊の座敷で、木幕はいつも其の部屋を二人の爲めに取つて置いて貰つた。『榮子の間――』彼等は戯れにさう呼んで居た。

榮子は座敷へはいると寒氣がすると云つて倒れた。女中が掻捲と湯たんぽを持つて來てくれた。

『其れよりも私お酒がいゝわ。お酒を熱くして梅干をコップへ入れて持つて來て頂戴。』

彼の女は蒼白い顏をして顫へながらさう呟いた。

女中が持つて來た熱い酒を梅干を入れたコップへあけて、彼の女はぐい〳〵飲み續けた。德利の酒は丁度コップへ二杯程あつたが、彼の女は忽ちの中に一人で其れを飲み盡してしまつた。

『苦しい、苦しい。』

榮子は今度はさう云つて胸を擦り出した。木幕が側へ寄つて彼の女の肩に手を掛けた時、榮子は大きな眼を見開いてちつと彼の顏を見上げた。

『あなた、どう思つて、あの初ちやんたちを？』

『どう思ふつて、氣の毒だと思ふね。』

『唯其れだけ、氣の毒なだけで、羨ましくはない？ぢやあ、私と違ふわ。』

肩を搖るがせて彼の女は邪慳に木幕の手を外さうと試みた。

『私あんな間借りをして、不自由な生活をして居つても、やつぱりあの人たちは幸福だと思ふわ。始終一緒に居られるから。喧嘩をしても、睨み合つても、やつぱりいつもあゝして同じ家に居られるから。――一緒に住まうと云ふ氣を持たない人は本當に好きになつたんぢやないわ。』

彼の女の非難は當然な物かも知れなかつた。四十を越したあの田部さへ四人の子供と糟糠の妻を捨てて居る。清見は榮子の爲めには妻子といつでも別れると云ふ條件で彼の女の愛を求めた。だが其の清見を捨て、一切の義理を捨てゝ木幕の爲めに勤めをしないで居る榮子に對して、彼は何をしたらう？

『不足だわ、不足だわ。私にはあなたの氣持がどうしても不足だわ。』

榮子にさう云つて、ぴつたり閉した眼瞼の間からはら〱涙を落しかゝつた。

かう云ふ烈しい女性の情熱にぶつかつた時、男は唯優しく宥しを求むるより外は無い事を木暮は知つて居た。彼は榮子の手を執つて自分の顔に押しつけた。彼も同じ様に泣いた。だが彼の流した涙は彼の女の情熱に危く壓倒されかゝつて、辛くも身を護らうとする卑怯な、利己の涙であつた。烈しく唸りを立てゝ居る激情の渦に知らず識らず彼自身も捲き込まれ、榮子の爲めに一切を捨てる氣になりきつてしまふ事を怖れて、彼はどうかして彼の心に強い力で働きかけて來る彼の女の現在の昂奮した氣持を取り鎭めようとあせつた。

『そんな事を云つたつて今どうにもならないんだから仕様が無い。同棲と云ふ事が第一の望みなら、あなただつて僕を捨てゝ淸見さんの方へ行つた筈だ。それがさうならなかつたのは、そんな事以外にもつとお互を結び合せる力が僕たちの間にあつたのだと思ふ。』

『そんな事は理屈です、唯の理屈です。私たちを結びつける力があればある程、一緒になりたくなるのは當り前ぢやありませんか。一緒になれば其の力がもつと強くなります。一緒にならなければ其の力はだん〱消えて行くんです。あなたは私より學問がある癖にそんな事がわからないんですか。』榮子はもう一度涙に濡れた眼を開いて彼を見上げた。『はつきり云つて下さい。あなたは私と一緒になりたいとちつとも思はないんですか?』

『思はなくはない。思つて居る。毎日さう思つて居る。』

木暮は吃る様な語調で答へた。冷たい魚の様な眼をした彼の妻の顔が眼の前に浮んで來た時、彼は榮子を喜ばせる爲めのもつと力強い言葉を投げかけようとしたが、父の留守の間母一人を家に殘して戶外で泥いたづらをして居る二人の子供のいぢらしい姿が次ぎの瞬間に彼の榮子に對する愛情の急激の傾斜を引き戻さうとして髣髴と現れ出た。

『思つて居るだけでせう。唯思つて居るだけでせう。だから私には不足なんです。』

榮子はもう一度苦しげに呻き聲を立てた。

『私死にたい、死にたい！』

突然さう叫びながら彼の女は身體中を烈しく揺り動かした。電氣を掛けた様に手足はぴく〳〵痙攣して、眼がぐつと釣し上つた。

『どうしたの？どうしたの？しつかりして！』

木暮は驚いて彼の女の首を膝の上へ抱き上げた。榮子は眼を閉ぢて舌をぐつと突出し、上下の歯を揃へて力一杯舌の中程の處を嚙んで居た。

『馬鹿な事をしちやいけない、馬鹿な事を！』

木暮はおろ〳〵しながら必死になつて彼の女の歯を押し開かうとした。舌を嚙んだ兩顎の力は恐ろしい程強くつて、容易に開かなかつた。彼の女がまるで意識を失つて居るのが何よりも始末に悪るかつた。彼は大聲を揚げて女中を呼んだが、下坐敷まではなか〳〵聲が屆かなかつた。あらん限りの力を指の先へ籠めて、やつとの事で彼は榮子の歯の間へ右手の食指を挿し込んだ。そして辛うじて舌を中の方へ押しつけた。そして彼の女の顔を膝の上でそつと引摺りながら柱の下のベルの側迄這つて行つて、彼は強くベルを押した。

『早く醫者を呼んでくれ。榮子が舌を嚙んだ。』

部屋へはいつて來た女中に彼は泣き聲でかう告げた。

近所の醫者が馳せつける迄、彼はさうして榮子の食ひ縛つた歯の間へ指を一本押し入れたまゝだつた。意識を全く失

ひながら、榮子はさながら烈しい愉しみからの樣に恐ろしい力で彼の指を嚙み續けた。齒の先が次第に彼の指の中へめり込んで行く氣がした。今にもぶつりと音がして指の先が嚙み切られる事を豫想しながら、木暮はぢつと身動きもしなかつた。指一本捨てる事によつて彼の女の命を救ふ事が出來れば、後で榮子はせめて其の覺悟に對していつも非難する彼の氣持の不足を免じてくれるだらうと思はれた。

十分ばかりして最寄の醫者が飛んで來た。

『はゝあ、癇ですね。癇を起したんですね。』

木暮の指を嚙み續けたまゝ正氣を失つて倒れて居る榮子の姿を見て醫者は事も無げにさう云つた。其れ迄榮子が自殺を謀つたんだとばかり思ひ込んで居た木暮は、其の一言でほつと救はれた。

醫者と、女中と、かみさんとが力を協せて榮子の口を開かせ、木暮の指を引抜いて、代りに手巾を啣へさせた。指には齒の跡が深く刻まれて、爪の色がまるで變つて居たが、幸ひに深い傷は受けて居なかつた。

醫者は直ぐ榮子の腕を捲くつて注射を施した。

『これで二三時間そつと寢かして置けば自然に直ります。今に囈語を云ひ出すか知れませんが、別に氣遣ひはありませんから。何でも思ふ事を皆云つてしまふんです。』

醫者はさう云ひ置いて歸つて行つた。

榮子をそつと寢床へ運び入れて女中たちが下へ降りてしまつてから、木暮は一人で枕許に坐つて居た。もう一時過ぎで、火の消えた火鉢に手を翳して居ると夜氣が水の樣に冷たく身に迫つて來た。痛む指先を時々擦りながら、彼はひえた飲み殘しの酒を啣つた。

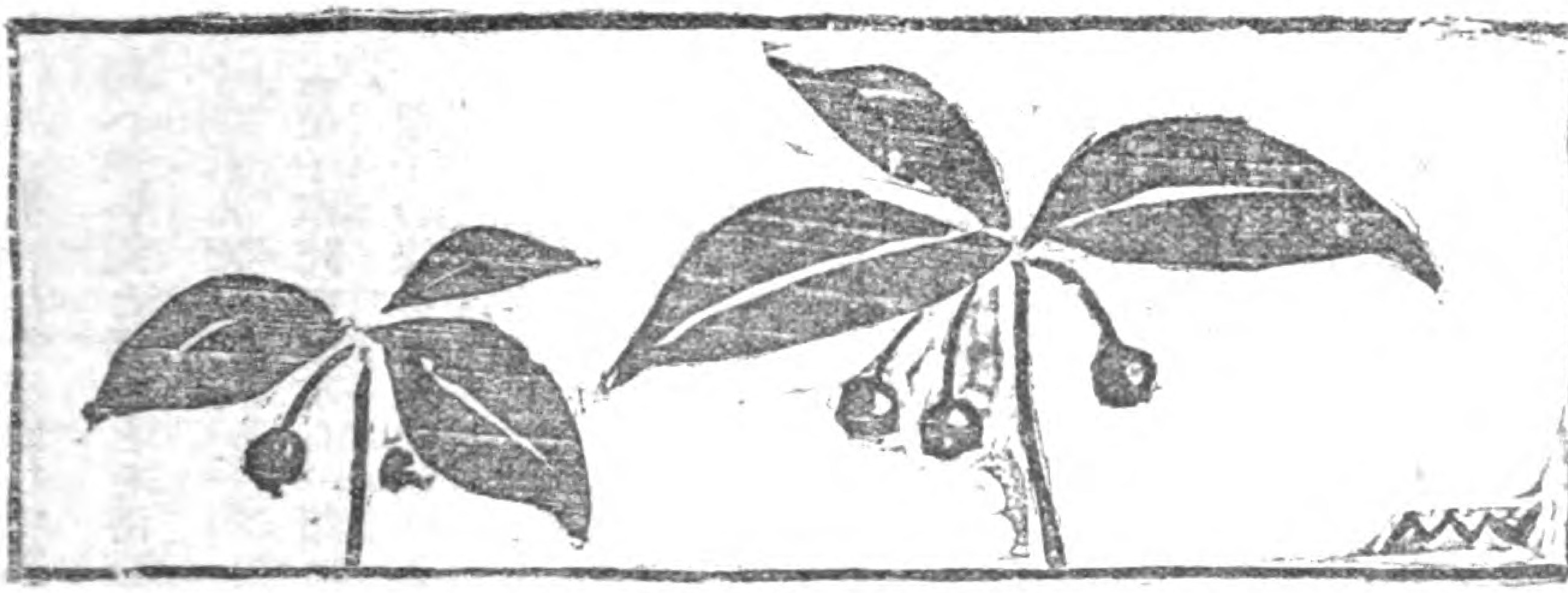
『今に囈語を云ひ出すか知れません。何でも思ふ事を皆云つてしまふんです。』
さう云つた醫者の言葉が彼の氣を引きしめさせた。果して一時間ばかりたつと、榮子は眠つたまゝ喋り始めた。だが其れは意味のわからない囈語ではなくして、本當に思つて居る事をはつきりと皆語り出すのだつた。
『……何です、今になつて又そつと手紙を寄越すなんて、男の癖にそんな恥ぢを知らない事がよく出來たものです。若しあの手紙を私がそつと今の奧さんの處へ屆けてあげたらどう？あなた、其れでも平氣で居られて？でもそんな事はよしませう、ね。元々私とあなたとは敵同士ぢやなかつた筈なんだから。』
其れは先の夫の山名に呼びかけて居る言葉らしかつた。山名が此の頃になつて又勤めに出た榮子に會ひたくなつて手紙を寄越したのだと云ふ事が其れで察せられた。
『……僕の方があなたを幸福にする事が出來るつて？幸福と云ふのはお互の氣持にあるんですよ。お金の事ぢやありませんよ。唯樂に暮したけりや、私好んで山名の家を飛出して來やしません。私の其の氣持がわからないあなたには私を幸福に出來よう筈がありません。お歸んなさい、さつさとお歸んなさい。あの優しい奧さんが心配して待つていらつしるでせう。』
其れは清見に云つて居る言葉に違ひなかつた。木暮が貧しい境遇なのを知つて、清見は富裕な自分の方が榮子をより多く幸福にする事が出來ると云ひ張つたに違ひなかつた。
『さあ、早く使をやつて頂戴。中澁谷〇〇〇番地の木暮さん、わかつて？早くですよ。……もう會へないかしら？會へなかつたら木暮さんに、奧さんに內證で每日お墓へお詣りに來て下さいつて云つて頂戴……』
女性特有のセンティメンタルな言葉が、苦しげな聲で述べられるのを聞いて居る中に、木暮は胸に溢れて來る悲しみ

に突き押される樣にして榮子の寢床の上へ平伏せになつた。そして彼の女の手を堅く握りしめて、蒼白い其の無感覺な顏へ熱い淚と接吻とを浴びせかけながら、榮子の情熱に完全に壓倒されて破滅の日に近づかうとして居る自らを限り無く憫れんだ。

『榮子が死ぬ氣なら一緖に死んでもいゝ。』

榮子の決心を追ひ馳ける樣に、あわてゝ彼もさう心の中で呟いた。

（完）



窓（一幕）

豊島與志雄

人

今村幹夫　三十二歳

同　房子　二十七歳

同　依子　五歳

堀川俊造　三十六歳

木谷淳子　十九歳

小池よね　五十三歳

松井悌治　二十四歳　登場せず

景

廣間。正面に窓一つ。右手に扉一つ。左手に扉一つ。中央に大きな圓卓。右手

奥に小卓。卓子のまわりや壁に沿ひて、大小種々の椅子數脚。小卓の上方に掛時計一個。他に何等の裝飾も家具もなく、居室でも、應接室でもなく、たゞ廣間の感じのみで足りる。――晩春の夜。掛時計は九時過ぎを示してゐる。劇の推移は、初め、舞臺の右手寄りのみにて行はれ、他の部分は空虚の感じであるが、次に、舞臺の三分の二ほどまで擴がり、やがて、舞臺全體を滿たし、空虚は全く消える。

中央の圓卓で、依子椅子の上に坐つて繪本を見てゐる。その前にはなほ七八冊の繪本が取散らされてある。よねが側について折紙を折つてゐる。右手奥の小卓に、今村幹夫ぼんやり兩肱をついてゐる。

今村。婆や。

　よね靜に顏を擧げて無言で振向く。

今村。お前はもう幾歳だつたかね。

よね。わたくしの年でございますか。まあ旦那樣は……。お母樣と同い年ではございませんか。

今村。うむ、さうだつたね。亡くなられてからもう八九年にもなるので、お母さんの年まで忘れてゐた。……今年幾歳になるんだい。

よね。五十三でございますよ。

今村。五十三……五十三か、なるほど……長いもんだね。僕はお前の乳で育てられて、それから、ずつとお前に働いて貰つて、今ぢやあ、自分の子供まで世話して貰ふやうなことになつて……變なもんだな。

よね。いゝえ、わたくしのことなら、一生かうして使つて頂くのが勿體ないくらゐでございますが、ただ、お嬢さまが

……。

今村。可哀さうだといふんだね。同感だよ、誰も彼も可哀さうさ。

よね。それも旦那樣のお心一つで、どうにでもなるではございませんか。

今村。所がその肝心な僕の心が、なかなか厄介でね……。まあもつと考へて見たいのだ。

よね。何もお考へなさることはないではございませんか。旦那樣お一人で、かうして家にぢつとしてゐらつしやいますところを御覽なさいましたら、奥樣だつて屹度……。

今村。覆水盆に返るつてわけかね。

よね。え？

今村。まあいゝよ。何れ僕の氣持をお前にそつくり話す時もあるだらうが……。（ふと氣を變へたやうに、立上つて依子の方へ歩み寄る。）依子、お前はほんとにいゝ子だ。天使のやうな子だ。だが、もうおやすみよ、ねえ。（子供の頰に自分の頰を押しあてる。）

依子。お父さまは？（眠さうな顏をしてゐる。）

今村。お父さんもぢきに寢てあげるよ。だから先に寢てゐらつしやい。ねえ、お前は天使のやうないゝ子だ。……婆や、もう寢かしておやりよ。

よね。はい。（躊躇の樣子。）

今村。寢る前に、お父さんが一度抱つこしてあげやう。

彼は依子を胸に抱き上げ、頰邊をくつつけて抱きしめながら、室の中を歩き廻る。

今村。子供を抱いてる氣持は天國の氣持だと、誰かゞ云つたやうな氣がするが……。お前はお父さんの天國だ。もうねんねなさい、ね。嬢やとおとなしく……。

彼は依子をよねの膝の上におろす。

今村。さあ、寢かしておやり。

よねは時計を見上げて、それからぢつと考へ込む。間。

今村。何を考へてるんだい。もう九時過ぎぢやないか。

よね。はい……まだ……。

今村。早いといふのかね。(よねの方をぢつと見る。)お前は今日はどうかしてゐるよ。依子はいつも、八時になれば一人で寢てゐた。房子がゐなくなつてからも、八時になればお前はすぐに　もう寢んねなさる時間だと云つて寢かしてゐた。いゝ習慣だよ。が今夜に限つて……。

よね。でも……奥様がゐらつしやいませんと　なかなかお眠りなさいませんから。

今村。それは分つてるよ。房子がをれば　八時には一人で先におとなしく寢るんだが、房子がゐなくなつてからは　僕が寢るまでは寢たがらない、そんなことはよく分つてるよ。……だが　もう一時間餘りも過ぎてるし、大變眠たさうな顏をしてゐたんだが……。依子、もう寢んねしたいんでせう　ねえ。(近寄つていつて、よねの胸に伏せてゐる依子の顏を覗く。)そうれごらん　もう眠つてゐる。

よね。あら　お嬢さま!

今村。シッ!折角眠つてゐるものを。寢かしておいで。

よね溜息をついて、依子を抱いたまゝ右手の扉から出て行く。今村は圓卓のところに坐つて、繪本をくつてみる。それから急に、やはり右手の扉から出て行く。間。今村酒瓶とコップとを持つてのつそり戻つてき、小卓の前に腰を下して、しきりに酒を飲む。飲みながら憂欝さうに考へこむ。間。よね出てくる。

よね。まあ、お酒を。

今村。依子は眠つたのかい。

よね。何にも知らずに眠つてゐらつしやいます。……旦那様、そんなことをなさいましては……。

今村。なあに、酒のありかはちやんと心得てるんだ。いゝよ、少しなんだから。

よね。でも、今晩だけは……。

今村。今晩だけだつて。

よね。いえ、あの……（狼狽の調子。）餘り召上りますと、お身體に障りますから。

今村。お前は今日は何かたくらんでゐるんだね。隠さうとしたつてちやんと分るよ。依子をいつまでも起しておきたがつたり、繪本をあんなに澤山買つてきたり、夕飯の時に酒をぬきにしたり……それから、第一お前の顔を見てごらん。……がまあいゝさ、何でもお前の氣の向くやうにするがいゝ。（酒をコップにつぐ。）たゞ酒だけは、僕の領分なんだ。（コップの酒を一息に飲み干す。）まあお坐りよ。面白い話をきかしてあげるから。

よね氣味悪さうに扉近くの椅子に坐る。

今村。（放心したやうな調子。）酒は憂鬱退散の護符つて話さ。いや實は馬鹿げた僕の空想さ。（酒をついで飲みながら）えーと、どう云つたらお前に分るかな……。さう、男子が出ていつてから、その翌朝すぐに、僕は依子をも家から出

してしまつた。それをお前は、いゝことをなさいましたと褒めてくれたね。だが實は、そんな殊勝な氣持からぢやなかつたのだ。房子からも淳子からも遠退いて、一人になつて考へてみたかつた、とさういふわけなんだよ。

よね。ごもつともでございます。

今村。分つてくれるね、それは有難い。そこで僕は、一人きりで靜に考へてみるつもりだつた。所がね、この家はお化屋敷なんだよ。

よね。まあ、何を仰言います。

今村。夜遲く、しいんとした中で、こゝにかうして坐つてゐるとね、いゝかい、どこかその邊に……いや、例へばこの椅子に、（横手の椅子を引寄せる）ぼんやり人の姿が見えてくる。そんな筈はないといくら思つても、いつのまにかぼーつと、（椅子の上に兩手で人の形を描く、）影のやうに姿が浮んできて、僕の方をぢつと見てゐるのだ。

よね。まあー。

今村。身内の者が死ぬと、その死んだ人の姿がいつまでも眼に見えるつて、よく世間で云ふね。ところが、僕のはそんな死靈ぢやなくつて、生靈なんだから始末が惡い……。

よね。それではやつぱり、奥樣の……。

今村。さあ、どちらだか。

よね。それでは、あの…………。

今村。どちらもなんだ。房子だつたり淳子だつたりする。しまひには兩方がごつちやになつて、譯が分らなくなるんだ。それが不思議にも、（酒を飲む、）酒を飲むとぱつとお化の姿が消えてしまつてね、ぽつねんと僕一人さ。（酒をつ

ぐ）
よね。（突然涙ぐんで、）お察し致します。わたくしも、わたくしも、旦那様がさうしてゐらつしやいますところを見ますと……。
今村。泣かなくてもいゝよ。僕は同情されるやうな人間ぢやないからね。僕はもつと蟲のいゝことまで考へてるんだ。實はね、こんなお化なんか引寄せるのは、僕自身の得手勝手な空想なんだよ。房子でもいゝ、淳子でもいゝ、いきなりこゝに飛び込んできて、僕が何を考へてゐやうと、誰のことを思つてゐやうと、そんなことはお構ひなしに、ただこの僕を……それが大事なんだよ……たゞこの僕を、しつかと抱き止めてくれたら……なんかつて空想してみる。笑はないでくれよ。蟲のいゝ考へなんだ。
よね。いゝえ、そんなことはございません。
今村。そこでね、餘り蟲がよすぎて、とんでもないことまで考へてみる。もし僕が死んだら……自殺してしまつたら、房子は、淳子は、どう思ふだらうかつて……。
よね。まあ、とんでもないことを、旦那様。
今村。いや、たゞ一寸した空想さ。何もかも僕が惡い、惡いけれども、もしこゝで、死んで見せつけてやつたら……と、その見せつけてやるといふ氣持が、馬鹿に出來ないでね……。
よね。いゝえ、いけません、いけません。奥様は屹度歸つていらつしやいます。今にも屹度歸つていらつしやいます。
今村。何を云つてるんだい。お前は考へ違ひをしてゐるね。僕の氣持がよく分らないのかな。……が、もう止さうよ。（酒を飲む。）たゞ一つ、これだけは誤解しないでおいてくれ。僕は今、房子に歸つて來て貰ひたくはないんだよ。歸つて

來たつてどうにもなるものぢやない。また歸つて來もしない。僕はお前よりもよく房子の性質を知つてゐる。僕が依子を愛しだしてから、房子は氷のやうに冷たくなつてしまつた。あの冷たさは元に戻せるものぢやないからね。

よね。いゝえ、そんなことはございません。屹度歸つていらつしやいます。（時計を見上げて、耳を澄す樣子。）

今村。歸つて來たつて駄目だよ。あの氷のやうな冷たさにふれると、僕の方で逃げ出さなければならない。僕の心がきまつたら、或は僕の方から迎へに行くかも知れないが、今はまだ……大事な時だからね、一人でゆつくり考へてみたいんだよ。……もし今僕が旅に出かけるとしたら、お前は留守をしてゐてくれるだらうね。

よね。お孃さまと私とで……。

今村。それより外に誰もゐやしないから、まあさうするんだね。依子を見ると、僕は胸が……胸が一杯になつてくる。弱蟲なんだね。それで、少し離れて、旅をしたい氣もするんだが……。

よね。それでも、奥樣がお歸りなさいましてからに……。

今村。お前は房子のことばかり氣にしてるね。嫌だな……がまあいゝよ、僕は旅なんかしないから。

よね。いゝえ、なすつてもよろしうございますから、奥樣がお歸りなさいました上で……。

今村。もう房子のことなんか云はないでくれよ。それより、お前は寢たらどうだい。

よね。いゝえ、わたくしはまだ……。

今村。可笑しいね、お前まで僕が寢るのを待つてゐるのかい。ぢやあ僕も寢るとしやうか。

よね。旦那樣、實はあの……。

今村。何んだい。お前は變な眼付きをしてゐるよ。

よね。はい、あの……本當のことを申しますと……。

よねが云ひ淀んでる時、左手の扉の外で、輕い物音と定かならぬ人聲とがする。これを聞きつけて、よねは不意に立上る。

よね。さうでございますよ、たしかに。

よねは駈け出して左手の扉から出て行く。今村はぎくりとしたやうに飛び上つて、そこに立ち悚む。間。よねを先頭に堀川傳藏と房子とがはいつて來る。堀川は散歩着めいた扮裝、房子は目立たぬぢみな美裝。房子が扉のところに立止つてるのを殘したまゝ、堀川は圓卓の側まで進み出る。

堀川。(馴れ馴れしい而かも冷淡な調子)其後は……暫くでした。

今村。(房子の方を見つめたまゝ、機械的に、)暫く。

堀川。房子がぐづついてゐるのでつい遲くなつて……九時のお約束でしたが。

今村。(矢張り房子の方を見たまゝ)九時の……。

その時、よねは何故ともなく右手の扉から奧にはいつて行き、次の會話の間に程よき頃また出てきて、扉口の椅子に控へる。

堀川。妹が參る筈でしたが、少し風邪の氣味なものですから、その代りになつて、僕が房子の伴をしてきました。伴をして來ただけです。話は大體聞きましたけれど、間にはいつて口を利かうといふのぢやありません。全く、夫婦喧嘩の仲裁くらゐ馬鹿げてるものはありませんからね。(苦笑。椅子について煙草に火をつける。)それで、房子をあなたに引渡しさへすれば、すぐに歸るつもりです。改めてゆつくり出直しますから。(房子の方を振向く。)何をそんなとこ

ろにぐずついてるんだい。自分の家ぢやないか。馬鹿だね。

房子は冷酷な表情で、眞直に歩み寄つて堀川の側に腰を下す。

堀川。は〻あ、絣木が澤山あるな。これだ、これだ。（絣木をくつてみる。）依子さんはもう寝たですか。

よね。はい。（おどおどしてゐる樣子。）

沈默。間。

堀川。（突然立上つて、今村の方へ。）ぢやあ僕はこれで失禮しますよ。

房子。兄さん！

堀川。何だい。まだ用があるのか。

房子。（決心したらしく、今村の方へ屹と顏を擧げる。）あなた、何の御話でございますか。

堀川。おい、何といふ口の利き方をするんだ！

今村は首垂れたま〻小卓の前に腰を下す。

房子。わたしはもう歸ります。

堀川。え、何だつて？

房子。話をしたいことがあるからと云つて、人を呼びつけておいて、自分は酒を飲んで醉つ拂つてるぢやありませんか。自分の方からやつて來るのが本當です。私を迎ひにやつて來るのが本當です。

今村。（ぎくりとして顏を擧げる。）それぢやあ……。婆や、お前はこんなことを……。

よね。はい。（突然泣き聲になつて、益々低く屈み込む。）奥樣、わたくしが嘘を申したのでございます。……お嬢さま

が……お可哀さうで……。始終お母さま、お母さま、と云つてお聞きなさいますし……晩も、私が一緒に寝てあげませんと、すぐに眼をお覺しなさいます。……それに旦那様も、あのあくる朝から、あの方をよそにやつておしまひなさいまして、一日一人で考へ込んでばかりゐらつしやいます。……もしこのまゝでいきましたら、恐ろしい……恐ろしいことになりさうでございますから……わたくしが、出すぎたことを致してしまひました。どうぞ、旦那様も奥様も、元通りに……。（すゝり泣く。）

堀川。あゝそんなことをこゝでもち出すんぢやない。いゝよ、いゝよ、どうだつて……。ねえ、今村さん、こんなことはどうだつていゝぢやないですか。何だつて穿鑿すりやあきりがないんですからね。……これは婆やさんの手柄だ。年寄りには手柄をさしておくものだ。お前もそれでいゝだらう。

房子。ぢやあやつぱり……みんなで謀し合して、私をこんなところに連出しなすつたんですね。

堀川。頑固だなあ、お前は。……然し僕はもう歸るよ。

房子。待つて下さい。わたし今村に聞くことがありますから。

堀川。後で聞いたらいゝぢやないか。

房子。いゝえ、今村はわたし一人だと、ぬらくらしてごまかしてばかりゐるんです。

今村。うむ。兄さんに加勢を頼みたいんだな。お前のやりさうなことだ。僕も贊成するよ。……堀川さん、ゐて下すつて構ひません。

堀川。證人になるわけですか。（苦笑する。）……だから僕は嫌だと云つたのに。

堀川は氣の毒さうに卓上の繪本を一冊取上げ、窓近くの長椅子に行つて腰掛け、煙草に火をつけながら、素知ら

ぬ風で繪本を見初める。

今村。(房子から眼を外らしながら、放心の調子で、)さあ何でも聞いてくれ。お前はさつき僕を醉つ拂つてゐると云つたが、まだなかなか醉つ拂ふには間があるよ。お前の來ようが早かつたんだ。

房子。早いも遲いもあるものですか。朝から醉つ拂つてゐて……。

今村。なるほど僕は何かに醉つ拂つてるかも知れないよ。だが……お前の來ようが早いといふのはね……何もかもさらけ出せば……僕はも少し一人で考へてみたかつた……と云ふのが一番手取り早くていゝ。考へてみた上で、心がきまつたら　或はお前の前に出かけていつて、跪いて許しを求めたかも知れない。跪くことなんか僕は平氣だからね。(憂鬱な微笑。)然し……まだも少し一人でゐたかつた。お前が戻つて來ようなどゝは豫期しないものだから、實は四五日旅をしてみようかなどと、婆やに相談してゐたところだつた。

よね。旦那樣　そんなことを仰言つては……。

今村。はゝあ、お前は心配してゐるね。有難い……が、まあお前はちよつと奧に行つてゝくれないか。僕はもうどうせ曝し物になつてゐるんだから、天下に恐るゝものなしといふわけなんだが、お前は……さうだ、依子でもみてやつてくれ。眼を覺さないやうに、天使の眠りを守つてゐてくれ。

よねはぢつと今村の顏を見守る。

今村。お前がゐると、僕は工合が惡いんだ。

よね。でも、旦那樣!

今村。いゝから、行つておいで。

よれはおづおづと、右手の扉から出て行く。間。

今村。僕はみんなから、誰からも離れて、一人きりになつてみたかつた。そしてはつきり自分の心をきめるつもりだつた。

房子。では悪いところへわたしが邪魔にはいつたわけですわね。

今村。また先廻りを初めたね。それがお前の癖なんだ。正面から物を受入れないで、先へ先へともぐりこんでゆく。

房子。あなたが正面から物を仰言らないからです。

今村。正面から物を云はないつて……いやそうぢやあない。お前が正面から物を聞かないからなんだ。

房子。（屹となる。）あなたは……淳子さんをどこへおやりなすつたんです。

今村。松井君のところへ預けておいた。

房子。松井さんへ……。あなたらしいやり方をなすつたものね。なぜ家へ置いときなさらないんです。

今村。家へ置いとく！……お前らしい云ひ方をしたものだ。そんなに僕の氣持を踏みにぢりたけりや、いくらでも踏みにぢるがいゝよ。お前はもう、自分達の生活を、僕達三人の生活を、踏みにぢつてしまつたわけなんだから、僕の氣持なんか藁屑とも思つてやしないんだらうからね。

房子。藁屑よりももつと安つぽいものですわ。いつも氣持、氣持つて、重寳な言葉ですこと。空つぽの中味もなんにもない氣持だけで、あなたは生きてゐらつしやるんです。

今村。なるほど、お前には氣持なんてものはちつともないんだから、僕が變になまぬるく不徹底に見えるんだね。……全く氣持なんて不思議なものさ。理窟でもないし、感情でも無いし……たゞあるがまゝの良心の騷みたいなものだ。

房子。良心の聲ですつて……。その良心の聲とかで、あなたは淳子さんを松井さんへお預けなすつたんでせう。

今村。お前がさう云ふなら、さうしといてもいゝさ。淳子はどこへも行く處がない。僕のところだけを頼りに國から出て來た。それはお前もはつきり知つてるね。そこで、學校を出て一人前の女優になるまでは、僕が或る點まで……何と云つたらいゝのかな……責任を負つて……。

房子。責任を負つて愛しておあげなさい。

今村。お前はそれだから話が出來やしない。お前の方から淳子をどうしたかつて聞いたんだらう。だから僕は、はつきり答へてるんぢやないか。

このあたりから、堀川は苛立たしさうに、時々繪本をばたばたさせる。それと共に、今村の投げやりなどこか上の空の調子が、次第に眞劍になつて來る。

今村。はつきり答へてるんだから、お前もはつきり理解したらいゝんだ。

房子。えゝ理解してゐますとも。松井さんのところが一番便利ですわ。いつでも呼び出せるんですから……。わたしは何とも申しませんから、今晩からでも、御一緒に旅行にいらつしやい。今となつて、誰がやきもきするものですか。

今村。そんな邪推をしてるんだな、お前は！　どうしてさうなんだ。いつも僕のことを惡意にばかり解釋して、お前には、自分の心が……生活が……大切ぢやないのか。

房子。だから私はあなたのところから逃げ出したのです。

今村。それだ、お前のその冷たさだ。僕はそのためにどんなに苦しんだか知れない。僕が淳子を愛するやうになつたのも、お前が餘り冷かだつたからだ。……過ぎ去つたことを云つても仕方ないが、僕の心がだんだん淳子に引きつけら

れてゆき初めた時、お前はなぜ僕を引止めてはくれなかつた。温い心で、がむしやらに、なぜ僕を抱き止めてはくれなかつたのだ。何か事が起り初めると、お前はいつも氷のやうに冷たくたつて、ぢりぢり僕を責め立てるばかりだ。僕の方で逃げ出さずにはゐられなくなる。

房子。だから、淳子さんの温い胸とやらに逃げ出しなすつたから、それでよろしいでせう。

今村。そこをお前がなぜ引止めてはくれなかつた、といふのだ。お前は僕の味方な筈ぢやないか。どこまでも味方な筈ぢやないか。それなのに、お前はいつも僕の敵にばかりなりたがる。なぜ味方になつてくれないんだ。

房子。ぢやあ誰が私をあなたの敵にならしてしまうんです。あなたこそ私をさうならせるんぢやありませんか。いつかの旅の時だつて、原稿を書きに行くと云つてお出かけになつて、何をなすつたのです。

今村。あれは僕が惡かつた。だから手をついて謝つたぢやないか。

房子。謝ればそれで濟むんでせうよ、あなたの方は。そして毎日、酒を飲み廻つたり、夜遅く出歩いたりして、結構なお身分ですこと。それが小説の材料とかになるんでせうから。

今村。それは僕の生活は、表面隨分だらしがないかも知れない。然し僕は自分の心までだらしなくはしてゐないつもりだ。夜遅く酒に醉つてゐても、しみじみとした涙ぐましい氣持で歸つてくる。その涙を、なぜお前は僕に心から流さしてはくれないんだ。お前はいつも、氷のやうな冷たさで、僕の心をも凍らしてしまふぢやないか。

房子。それならあなたは、なぜ私を氷のやうに冷たくならしておしまひなさるんです。

堀川。（苛立たしく言葉を挿む。）いつまで云ひ爭つてゐるんだ！（立上つて綴本を卓上に返しに來る。）水掛論の繰返しは御免蒙りたいね……一體お前は何が不滿なんだ。不滿の點をはつきり言つてごらん。……あなただつてさうです。

何が不滿か、それを具體的にはつきり云つたらいゝぢやありませんか。

二人は無言。

堀川。勿論、云ひ爭つてそれで胸がすくことなら、夜明しをして云ひ爭つても構はない。然し、あなた達のはまるでめちやです。めくら滅法に、互にぶつかりつこしてるんだから。夫婦の情合なんてまるでありやあしない。

房子。なくつたつて構ひません。

堀川。そりや、なくつたつて構はないかも知れないが……然し、男は女を操縦する、女は男を操縦する、そのお互の操縦がうまくかち合つて、歯車のやうによく喰ひ合つてこそ、家庭は圓滿にゆくものなんだ。然しお前達のやり方は、たゞ衝突するばかりで、相手を操縦しようといふ氣が全然ない。……どうです今村さん、こいつを少し操縦してやつては。

今村。私は教育者ぢやありませんから。

堀川。いやさう云はれると、僕は一介の會社員で何にも分らない男ですが……然しあなたは小説家で、人の心理には詳しいわけだし……。

今村。皮肉ですか。

堀川。（苦笑して、それからきつぱりと、）抽象的でなしに、具體的にはつきり仰言つたらいゝでせう。

今村の調子は、また次第に心の上の窓のものになる。

今村。それがどうもむつかしくつて……。たゞ、二度聞きたくないとは思つてるんですが……。

堀川。二度聞くとは……。

今村。まあ今後のことを考へてみるとですね、房子の望み通りの生活が自分に出來るかどうか、もし今後また淳子のやうな女が出て來た場合に、それに心が惹かれないかどうか、さうした見當がつかないで……。いや下らない老婆心です。

堀川。では、さういふ生活が出來るとしたら……。

今村。さうですね、房子の前に跪いて謝る、といふことになるでせう。

堀川。では、出來ないとしたら……。

今村。まあ何もかも破壞して、家庭制度を呪ふ、といふ段取ですかね。

堀川。あなたは、一體本氣で物を云つてるんですか。

房子。いゝ加減のでたらめですわ。あなたはまだごまかしてゐらつしやるんです。わたしがゐなくなれば、子供の世話にも困るし、月々の經濟のやりくりにも困るものだから、わたしを女中として家に引止めておきたいんでせう。そして御自分は勝手に、淳子さんと外を飛び廻りたいんでせう。それがあなたのお望の生活なんです。

今村。なるほど、お前はうまいことを云ふ。實際さうかも知れないよ。（極端に憂欝な表情になる。）僕はお前と淳子とどちらを選んだらいゝかと苦しんだり、どちらをも失ひたくないと苦しんだり……まだまだいろんなことがあるらしい。むつかしく云へば、お前は僕にとつては、今迄築いてきた自分の生活の全部と同じだし、淳子はまた、その生活を輝かす美しい日の光のやうなものだ。……どうすればいゝのか僕には分りさうもない。……どうすればその二つが一つになれるか、お前は知つてやしないかね。お前の心の持ちやうで……。

房子。わたしの心はもうきまつてゐます。わたしに氣兼ねなんかいりませんから、御自分の好きなやうになすつたらい

いでせう。（吐き出すやうな調子。）淳子さんと一緒になるなり、心中なさるなり……。

今村は不意に、房子の顏を見つめる。

今村。僕が心中するなら、相手はお前の筈だ。

房子。誰があなたなんかと。（ぎくりとしたやうに身を引く。）

今村。お前にはそれが分らないのかな。いや分らないかも知れない。

間。今村立上つて歩きだす。

今村。然し安心するがいゝよ。僕は死になんかしないから。

房子。あなたには死ねやしません、死ぬるやうだつたら……。

堀川。馬鹿な、いゝ加減にしないか。下らない。大事な事を忘れてしまつて……。（二人に無反應なのを見て、憤慨の調子になる。）あの向うには子供が眠つてるんだ。子供の手前も恥しくないのか。

今村，さうです，それですよ。（躊躇の樣子。）

その時、左手の扉の外に慌しい物音がする。一同振返る。間。扉から木谷淳子驅け込んで來る。粗末だがぱつとした派手な服裝、美貌、蒼ざめた顏色，室の中の樣子を見て、二三歩奥の方へいざりながら、棒のやうに立悚む。

間，今村四五歩進み出て行く。

今村。（急ぎ込んだ調子。）どうして、今頃、こゝへ……。

淳子。はい……。

今村。どうして來たんです。

淳子。先生、濟みません。(長椅子の上に伏してすゝりなく。)

今村。どうして來んです。はつきり云つてごらんなさい。

淳子はなほすゝりないてゐる。房子ふいに立上つて、避けるやうに窓近くの長椅子へ行く。今村びくりとして室の中を見廻し、腕を組んで室の前面を往き來する。間。

堀川。(皮肉な調子、)不思議なことがあるものですね、こゝに淳子さんが來合せるなんか。

今村はなほ歩き續けながら考へ込んでゐる。

堀川。もうお芝居は澤山だ！

堀川はつと立上つて左手奥の椅子の方へ行く。

堀川。(侮蔑を含んだ丁寧な調子。) 淳子さん、あなたはいゝところへ來合せました。何も泣くことはないでせう。あなたが泣くなんて、どうも不自然でいけませんよ。快活に……さう、いつか市川へ行つた時のやうに、快活にしてゐる方があなたには自然でいゝんです。快活にきつぱりと云つてのけるんですね。

淳子はぼんやり顔を擧げる。苦痛の表情をしてゐる。

今村。(圓卓のところに立止りながら、) さうだ、約束を破つて僕のところへ來た氣持を、はつきり云つてくれませんか。それによつて僕の心もきまりさうだから。

淳子なほ默つてゐる。間。

今村。(腰を下しながら初めは獨白の調子。) 僕は今日妙なことを知つた。二人きりだと本音を吐くけれど、人前では嘘をつきやすい……といふことはあべこべだ。二人きりだといろんな感情から嘘をつきやすい。然し人前では、本當の

心から出た確かなことが云へる。……その確かさです、僕が求めてゐるのは。（淳子の方をぢつと見る。）はつきりした気持で僕のところへ来たのかどうか、それだけ云つて下さい。

淳子。いゝえ、あたしそんな……。

今村。ぢやあ、どうして来たんです。

間。

房子。云へないんでせうよ、わたしの前では。……分つてゐます。（立上りかける。）

堀川。お前は黙つておいで。歸つてよければ僕が連れて歸る。

房子。人を踏みつけにするにもほどがあります。（今村の方へ、）あなた、もう私には御用はないんでせう。

今村。お前は！何を云ふんだ！（いきなり卓上の綴本を取つて投げつける。）

淳子。先生、待つて下さい……あたし、云ひますわ、何もかも……。

今村は一時の激怒を忘れたかのやうに惘然としてゐる。

淳子。松井さんが……松井さんがあたしを……。

今村。（以前の上の空の調子。）松井君が……どうしたんです。

淳子。松井さんがあたしを愛してるつて……。

今村。松井君があなたを愛してる……。

淳子。あたしを愛してるから……その愛を許してくれつて、いろんなことを仰言るんです。それで……。

今村。それで僕のところへ来たんですか。

淳子。えゝ。

淳子は眼を外らして空を見つめる。――以下彼女の調子は次第に夢想的になる。と共に、今村の調子は次第に眞劍になつてくる。

今村。松井君があなたを愛する……そんな筈はない。

淳子。そんな筈はないけれど……と仰言るんですの。けれど……先生の氣持は、ほんの一時的のものだが、私のは眞劍なんだからつて……。

今村。あなたは松井君のところへ行つてから、まだ……幾日にもならない。いつ松井君はそんなことを云つたんです。

淳子。昨日。

今村。昨日……どこで。

淳子。緣側にゐた時に……。

今村。緣側に……。あの狹苦しい庭の……。ふーむ、ひねこびた松が一本あつて、金魚鉢があつたつけ。

淳子。その金魚を見てた時でしたの。

今村。何と云つたんです。

淳子。……もう默つてをれなくなつたから打明けるけれど、怒らないでくれつて。それから……。

今村。あなたは何と答へたんです。

淳子。あたしには分りませんと云ひましたの。だつて、外に云ひやうがないんですもの。

今村。それきりですか。

淳子。それから……今日よ。
今村。今日、どこで。
淳子。二階の三疊で雜誌を見てゐると……。
今村。二階の三疊……あの東に高い窓のある疊に陰氣な……。
淳子。えゝ。あたしあの室をあてがはれてるんですの。……あすこで雜誌を見てゐると、不意にやつていらして……。
今村。え、やつて來てどうしたんです。
淳子。何だか話をしてるうちに、いきなりあたしの手を握つて……。
今村。そして。
淳子。そして……許して下さいと云つて、ぢいつとあたしの方を覗き込みなさるの。
今村。手を握つてあなたの方を覗き込んで……それから。
淳子。私はもうどうにもならなくなつたんだから、返事をきかしてくれと仰言つたきり、いつまでもぢいつと見つめてゐらつしやるんです。
今村。あなたは何と云ひました。
淳子。知りませんと云つたきり、默りこくつてゐました。恐くつて、どうにも出來なかつたんですの。
今村。恐い……何が恐いんです。
淳子。何だか知らないけれど……ひどく眞劍に迫つてゐらつしやるので、どうしようかと思つてると……ふいと出ていつてしまひなすつたの。

今村。それから。

淳子。それつきりですの。

今村。それつきり……。ほんとですか。

淳子。えゝ。

今村。いつのことです、それは……。

淳子。今日……。

今村。今日の……。

淳子。夕方ですの。

今村。そして、あなたは僕のことを云つたんですか。

淳子。いゝえ。知つてゐらつしやる筈ですもの。

今村。大體は話したから知つてる筈だが……然し……。

淳子。えッ！（夢からさめたやうにぎくりとする。）

今村。松井君は知らないんですね。

淳子。えゝ。だからあたし……先生に、先生にお話しようと思つて……。

今村。たゞ相談するつもりだけで來たんですか。

淳子。えゝ。

今村。本當にそれきりですか。

淳子。えゝ、何にも隠してやしませんわ。
今村。松井君が今夜何か云やしなかつたんですか。
淳子。いゝえ、何にも。御飯後すつと、あたしは階下にお家の方と一緒にゐたんですもの。そして、一寸買物に行つてくると云つて出て来ましたの。
今村。嘘ぢやないんですね。
淳子。えゝ。
今村。まだ何かありはしなかつたですか。昨日から……今日、あなたと松井君との間に……。
淳子。いゝえ、何にも……。
今村。たゞそれきりで……。（淳子を見つめる。）
淳子は物に怯えたやうに、長椅子の端まで身を引く。
淳子。先生は、あたしを……。（固くなる。）同じですわ、同じですわ……松井さんも丁度そんな風にあたしを見つめて……。
今村。同じやうに松井君が……。
淳子。さうです……えゝ、同じやうに、あたしにいろんなことを聞いて……。（両手に顔を伏せる。）
今村。（ふと我に返つたといふ風に調子を變へる。）いや、僕はたゞ變なことを考へてゐた。けれど實は……さうだ、たゞあなたに、何もかも投り出して僕のところに驅け込んできたと、さう云つて貰ひたかつた。
淳子。いゝえ、嘘です、嘘です。松井さんと同じに、あたしからいろんな秘密を……秘密がありはしないかと、嗅ぎつけようとなすつてるんですわ。さうでなけりや、あんな風にあたしを……。おゝ恐ろしい……。あたし、先生だけ

は、ほんとに信じてゐたのに、先生までが……。

今村。すると僕は、あなたに大變わるいことをしたやうになるんだが……。

その時堀川は、先刻から眉をひそめながら吸つてゐた煙草を、床の上に投りつける。

堀川。何といふことだ、淺間しい。白ばつくれるのもいゝ加減にしたらいゝでせう。なぜ男らしく聞かないんです。その男とどんな關係になつてるか、接吻くらゐはしたらうつて、さう直接に……。

今村。（陰鬱な眼付で堀川の方を見やる。）さうかも知れませんね、そんな風にとれるのなら……。

堀川。とれるとれないの問題ぢやない。實際さうなんでせう。卑劣な！……（淳子の方へ、）はつきり答へてやるがいゝんです、えゝ接吻しましたつて。

淳子顏色を變へる。

堀川。胸がすくやうにきつぱり答へてやるんです。

淳子。そんな……いゝえ、そんなことぢやありません。……先生だけは心から信じてゐたのに、やつぱり……同じです。みんな同じですわ。あんな眼付であたしを見て、その上こんな恥しい目に逢はして……。あたしもう誰も信じやしません。信ずるものですか。何もかも投げ出して……凡てを捧げてしまつたのに……。

堀川。え、何を云ふんです。

淳子。あたしもうどうなつたつていゝんです。輕蔑してお笑ひなさるがいゝわ。

堀川。うむ、そんなことに……。（立上つて、今村の方へ一二歩進む。）はつきり分りました。清い戀愛だなどゝ云つて……。

今村。僕はいつまでもそのつもりです。たゞ、誘惑に負けたかも知れませんが……。

淳子。誘惑ですつて、先生は……。先生こそあたしを……。あゝあたしは……。（空を見つめる。）

今村。（やはり堀川の方に、）誘惑と云つて悪ければ、魅力と云つてもいゝかも知れません。……さうだ、どうせあなたは私を生贄にしたいんでせうし、私も先程から甘んじて生贄になつてるんだから、何もかもさらけ出しませうよ。……房子が出ていつた晩のことです。今日のやうな暖い靜かな晩でした。……これだけ云へば、もうあなたの好奇心は滿足するでせう。

堀川。正氣ですか、それで。鐵面皮といふか何といふか！

今村。（堀川の言葉には頓着なく、）然し……やはりそれがいけなかつたのかも知れない。僕はそれから變な苦しみを受けてゐる。眞綿で……首ぢやあない……手足を縛られたやうな、身動きの出來ない苦しみです。

堀川。馬鹿な！

堀川は云ひ捨てゝつかつかと房子の方へ行く。

堀川。もう澤山だ。一緒に出かけよう。

房子は石のやうに固くなつて身動きだにしないでゐる。

堀川。どうしたんだ。歸らないのか。

房子はなほ無言。堀川茫然と佇む。――今村その方へ眼を移す。

今村。（やはり心では別のことをぼんやり考へてゐるといつた調子。）房子、お前は神妙に默りこんでしまつたね。あいた口がふさがらない……いやその反對かも知れないが、何と思はれたつて、僕はもう一言もないわけさ。その代り僕は逃

げも隠れもしない。何もかもさらけ出してしまつたんだ。皆の前で眞裸になつて曝しものになつてゐるんだからね。……ついでにもう一つ云つてあげよう。僕はお前が出て行つた時、重荷を卸したやうにほつとした氣持まで覺えた。淳子さんが……（淳子の方を向く。）さうだ、あなたに松井君の家へ行つて貰つた時も、やはりさうだつた。そして一人きりで……いや、なほ依子をもよそへやつてしまつたら、ほんとに晴々した心地になれたかも知れない。そんな風な變なものが、僕のうちには巣くつてるらしい。

堀川。ふン。重寶な口先だ。僞善が出來ないから僞惡をやらうといふんでせう。

今村。（堀川の言葉には無關心に、）ところが、そいつがやはりおかしいんだ。そのあとで……さう、婆やがよく知つてゐる……。（ふと思ひ出したやうに呼んでみる。）婆や……（耳を澄す。）婆や！

よね。（右手の扉の外から、）はい。

よね、立聞きでもしてたかのやうにすぐに出て來る。硬直した顏付でつゝ立つ。

今村。お前はそこにゐたのかい。僕が生贄にあがつてるところを見物したかつたといふわけか。

よね。旦那樣！……

今村。いゝよ、分つてるさ。お前だけは僕の味方だ。（ひどく憂鬱な表情。）さうだ、最後にも一度椅子でも並べてみるか。（自分の側に他の椅子を引寄せる。）一人でかうしてぢつとしてゐると、この側の椅子に、ぼんやり人の姿が浮んで來たものだ。そして僕の方を覗き込んで、眼に一杯涙をためて、いきなり僕に抱きついてくれる。無報酬に……僕がどんな人間だらうと、何を考へてゐやうと、報酬を求めない愛で、ただこの僕を抱きしめてくれる。（不意に眞劍な調子になる。）房子、お前はどうしてさう石のやうにしてるんだ。勇氣があつたら、こゝに來て、この椅子に座つてくれ。……

淳子さん、あなたでもいゝ。何と云ふ眼付きで僕を見てるんだ！さあ、この椅子に座つてくれないか。

房子は顔を外向ける。淳子は眞剣になつて歯をくひしばつてゐる。間。

今村。（元の放心した調子。）ふむ、誰も座つてくれさうもなささうだ。公然と要することが出來ないものとみえる。だが……僕だつてさうかも知れないからな。

堀川。（堪りかねたやうに、）まだ茶番をやるつもりですか。

今村。茶番……茶番はいゝ、……婆や、お前だ。お前がこの椅子に座るんだ。

よねは怖えたやうに、次第に扉口の椅子に腰を下す。

今村。恐がつてるんだね。何も恐がることはないんだか……。

房子ふいに立上る。

房子。（堀川に、）いきませう。

房子眞直に室を横ぎつて、左手の扉に手をかけようとする。

よね。あ、奥様……。

よね駈け寄つて房子を引止める。

よね。いけません、お歸りなさいましては。……嘘でございます。みな嘘でございますよ。わたくしはよく存じて居ります。

房子。何を知つてると云ふんです。

よね。よく存じて居ります。嘘でございますよ。旦那様の氣まぐれなんでございますよ。……いけません、いゝえいけま

せん。お嬢さまが……一番お可哀さうで……さつきも眼をお覚しなさいまして……、お歸りなさつてはいけません。

房子。お前に頼みますよ。（行かうとする。）

よね。い丶え、いけません。……せめてお嬢さまのお顔を見てやつて下さいませ。何にも知らずたすやすや眠つていらつしやいます。お顔を見てやつて下さいませ。

房子一寸躊躇の樣子。間。

淳子。（立上る。俯向いて額を押へてる今村の方へ、皮肉と絕望との調子。）さうよ、依子さんが一番い丶わ。可愛い丶……ほんとに可愛い丶お子さんですもの。こ丶に連れていらつしやるがい丶わ。屹度、みんなを見てお笑ひなさるでせうよ。誰も連れて來る人がなかつたら、あたしが……あたしが連れて來てあげるわ。

房子。（屹となつて、）依子は、あなたの自由にはさせません。

淳子。い丶え、あたし先生て云つてるんですの。……先生には、依子さんといふ立派なお子さんがおありなさるんだから、あたし……今こ丶に、連れて來てあげるわ。そして、そこの卓子の上に、先生の前に坐はらしてあげるわ。どんな顔をなさるか……これがあなたの可愛い丶お子さんだと云つたら……。面白いわ。あたし連れて來てあげるわ。

今村ふいに立上つて、椅子の背に身をもたせる。

今村。お前は……お前達は……子供を道具にして、それで恥しくないのか。依子は僕のものだ。お前達に指一本でも差させるものか。

今村右手の扉の方をぢつと見返り、それからぢりぢりと進んでいつて、扉から奥にはいる。——沈默。間。

よね。（突然恐怖に囚へられたやうな樣子。）奥樣、行つておあげなさいませ。早く……早く行つておあげなさいませ。

房子。お前が行つてみたらいゝでせう。

よね。いゝえ、奥様、早く……。乾度何か……。（行かうとして躊躇する。）

淳子ぼんやりつゝ立つてたのを、ふいに長椅子につゝ伏してすゝり泣く。

堀川。なあに、放つとくがいゝさ。子供を抱いて泣かしておくがいゝ。正氣に返るかも知れない。

堀川ふと氣付いたやうに、足元に落ち散つてる繪本を拾ひ上げて、圓卓の上に置きにゆく。

堀川。これはお前が買つてきたのかい。

よねは無言で一心に扉の方を見つめてゐる。

堀川。全く正氣の沙汰ぢやない。

間。――突然、扉の奥で一發ピストルの音が、餘り強くなく然しそれと知らるゝ程度に響く。

よね。あ、旦那様が……。

よね駈け出してゆく。一同駭然とする。房子と堀川は、よねの後に續いて扉の奥に駈け込む。淳子茫然と椅子からつゝ立つたまゝでゐる。間。――扉の奥で激しい物音がする。やがて、堀川は今村の腕をねぢ上げて引張り出してくる。今村の片手にピストルが握られてゐる。房子は依子を胸に抱きしめて出てくる。よねその後に從ふ。

堀川。（今村のピストルを奪ひ取りながら、振返つて、）どうした。

房子は胸にしがみついてる依子を押つ被さるやうに抱きしめたまゝ、安心したやうに圓卓のところに坐る。

堀川。怪我はないのか。

よね。（依子の手足にさはつてみながら、）はい、どこにも……。

堀川は今村から手を放して、室の右手を歩き廻る。今村は向ふ向きに窓縁によりかゝつて泣いてゐる。間。堀川はふと立止つて、今村の方に眼をつけながら、手のピストルを小卓の上に投り出す。

堀川。馬鹿な……人を駭かして！狂言だ。浅間しい狂言さ。

よね。（依子の身體をあらため終つてほつと息をつきながら、）よかつた……ほんとにどこにもお怪我はございません。

堀川。ない筈さ。初めから狂言なんだ。（屹と今村の方へ向返る。）も一度やつてみたらどうです。ピストルはその卓子の上にあるから、皆の前でやつてみたらどうです。

今村ふと振向く。呆けた眼付で室の中を見廻すが、誰れにも眼を留めない様子。

今村。僕にも分りかけてきた、凡てが……。

今村は口籠りながら、ぐるりと向ふを向いて、手荒く窓を開く。闇夜。いきなり身を躍らして、窓から外へ飛び出す。一同茫然とする。

よね。あ、旦那様が……。引止めて下さい、早く引止めて下さい。

誰も身動きもしない。

——幕——



寂しければ

――第四話――

久保田万太郎

『それが、その……』

『…………………』

『世の中つて奴は器用に出来てゐます。――見物を退屈させないやうに……』

『…………………』

『一番目が切れたと思へば、あと、二番目がひかへてゐます。』

『役者は?』

『一番目のやつぱり役者です。』

『みんな?』

『えゝ、みんな……』

『はて?』

『とても、この節は、見物には思ひつきません。』

『大した趣向だね。』

『いゝえ、それが、大した趣向ぢやアないんで。――どつちかといへば古風な。――見巧者には喰ひ足りないかも知れません。』

『ぢやアおわかさんが浮氣でも……』

『それなら分つてゐます。――さうでもして旦那にけじめをくはしたんだと、此奴、律に合うんですが……』

『といつて、まさか、豐島屋さんのはうに増す花が……』

『出來たんです。――出來たんです、それが……』

『其奴は……』

『ですから、その……』

『……………』

『らちもないといへば、その……』

『で、見當は?』

『日本橋です。』

『日本橋?』

『といつて藝妓ぢやアありません。』

『さる料理屋のお内儀さんでね。』

『…………………』

『……………』

『このお内儀さん、以前、吉原で華魁をしてゐました。――引かされて、しばらく、目黒のはうにおめかけをしてゐました。……』

『何だ、燒木杭か？』

『ですから、その……』

一年ぶりでそこへ足を入れた一日隔いたあくる日、店のかへりに、もう一度わたしは「しがらき」の暖簾をくゞりました。――何といふこともありません。また來ると黒髙屋さんにかたぐ〳〵約束した手前があるのと、思ひもつかず聞いた桔梗さんのことをもつとよく聞きたいのと、それともう一つ、一昨日の夕方からふり出した雨がその日まで持ち越し、じめ〳〵と、喰入るやうにさびしく、止むけしきなくふりつゞいてゐました。――店から、そのまゝ、眞つ直ぐうちへかへりにくいものが出來て、つまり、雷門でまた電車を下りました。――切るつもりもなく珠數を切つた奴で……

惡いくせで、油斷をすると、すぐ、道心が動きます。――どうもいけません……

その日も、はんぱな時間ではあり、ましてその天氣で、外にはだれもお客がありませんでした。――帳場で、主人が、一人ぽつねんともぐ〳〵やつてゐました。

『今日は、戲談ぢアない、火が戀しい……』

濡れた傘を立てかけて、そこに腰を下ろすなり、わたしは、テエブルにのせた火鉢のうへに手をかざしました。

『急に冬が來ました』

眼の縁をほんのりさせた主人は、愛想よく、すぐ、かうこたへました。

『豊島屋さんは……?』

ときくと

『まだ御出勤がありません、今日は……』

主人はわらつて

『一寸、昨夜、わけありで。――あれが、さア、うちをお出なすつたのが何時だつたらう?』

『…………』

『一時は、大丈夫、まはつてゐました。』

『あの降るのに?』

『えゝ、あの、ふるのに……』

『おつれは?』

『それが、あの、一昨日の長谷川さん。――あなたの、それ、御存じだつた……』

『あ、枯葉さん……』

枯葉といつたつて分らない相手と知りつゝわたしはさういひました。

『どうしたね、一昨日、あれから?――來たかね、その、何とかいふ朋輩……?』

『わたしのいつたとほり。――とう/\來ませんでした。』

『で？』
『昨夜、八時ごろ、鐵治をつれてヒヨツクリ入つてみえたぢやアありませんか。』
『…………？』
『お宅へかへらないんだから酷い。——一昨々日の晩以來……』
『と、豊島屋さんが、何とかいふその幇間。——鐵治といふか？——その幇間をつけて無理に吾妻橋からタクシイにのせたのは……？』
『乘つたことは乘りました。——乘せられてのりました。——が、吾妻橋をわたると、割下水の方へ行く奴を、左へ、向島のはうへ梶を曲げさせたと思召せ……』
『…………』
『お附き申してゐる太夫衆が太夫衆ならそんな間違ひは出來ません。——しかしこの間もいつたとほりの浚ひをしてうで小豆やをはじめたいといふ心細い料簡方の太夫衆です。——「それは、旦那……」ぐらゐたことは、まア、狼狽てゝいつたでせうけれど、結句そのはうが座敷にありつけるぐらゐで、ぐづぐづに、一しよに水神まで行つてしまつた奴です。』
『…………』
『その晩それから飲明しで　あくる朝、柳橋へ引上げた。柳橋から。今度は、新橋へ伸し、新橋から、夕方、神樂坂へ飛んで。一昨日の晩は牛込泊り……』
『果から果だ。』
『果から果……』

主人はうなづいて

『で、昨日の朝。――といつたつて十一時すぎ、ふり出しへもどつて、器用にわかれようといふことになり、田圃まで引上げてたものゝ、さて、雨はふつてゐる。――一つ風呂入つて、改めて、一ぱい飲む。――さうなつて切上げのつく筈がありません。――すぐ、また、へたへ／＼となつて何處かへ行かう。――何處かへ行つてもう一ぱい飲まう……』

『…………』

『それからまた一けん　石新道あたりのどこか待合へ行つたらしいんですが、氣に喰はないといつてすぐに飛出し、今度は泥溝の洋食屋へ行つてウイスキー。――で、向島へ行かう、もう一度向島へ行かう……』

『…………』

『驚いたのは淀治。――一合も飲むとトロリとしてしまふ奴が一日一晩飲みつゞけ。――もうへと／＼になつて客にたゞついてあるいてゐた奴です。――もう一度向島へ行つた日には命をしまひます。――狼狽てゝ、一生けん命になだめて、とにかくと店までつれて來きました。――と旦那がゐる。――さア旦那にあぶらを絞られまいことか……』

『…………。』

『無性に額ばかりこすつて、それがその、まことにその。――でも、もと／＼自分の蒔いた種です。――誰をうらむやうもありません。』

『だけど……』

わたしはいひました。――面白さうに話しつゞける主人を抑へて……

『あの人がそんな所作を。――いつさうなつたらう？』

若いに似ず、無口で　控へ目で　氣ぶつせいなほどものしづかだつたあの拈華さん。――わたしの知つてゐる拈華さんの顏がいまさらのやうに寂しく胸にうかびました。

『よく〳〵です。――よく〳〵のこつてす。』

主人はこたへて

『この間、旦那もいつたやうに、とき〴〵、すぎて、ずつこけることはあつても平生はもう内輪な、無駄をいはないごくの育のいゝ若旦那。――ずつこけたつて、いまゝで、ついぞそんなことのあつたことがありません。』

『以前でもそれは飲んだ。――みかけによらず强かつた。――だが、飲めば飲むほど陰氣になつた。』

『さア、さう被仰れば。――幾らかさういふことはあるかも知れません、いまも……』

『…………』

『とも〴〵機嫌よく、あがれば、それこそ洒落の一つもおいひになる、誰とでも安氣に口をおきゝになる。――が、底に。――うはべはさうでも底に、さう被仰れば、何かゝう殼に入つたものがかくれてゐます。――それがどこか浮かない顏になつて出て來ます。』

『さうある筈だ。』

『いへばその殼が毀れた。――といふのが一昨々日の晩……』

『さうだ、親方。』わたしはいひました。『その通りだ。』

『…………』

『殼の。――全くその殼の毀れた奴だ。』

『何にしてもつみの深いのは女。――旦那のやうな方でさへそのために精根を枯らしてゐるんです。――長谷川さんの
やうな若い方のさうなるのに不思議はありません。』

『さういへば豐島屋さん。――どうしてゐる、その後……?』

さうした話の汐さきにのつてわたしはいひました。

『相變らずか、おわかさんは?』

と、そのとき、主人はこたへました。

『それがその……』

話が廻りツくどくなつてすみません、そこで口がほぐれ、聞くともなくその後のその豐島屋さんの思ひもよらない話を聞きました。

が、聞いて、さうなるのがほんとうとわたしは頷きました。世の中のことがすべてまつとうに行くとすればさうなるのが當りまへのわけ。――さうならなければならないはうかわたしにいはせれば間違つてゐます。――豐島屋さんも、目黒の人も、かへりつくところへ兩方が返りつきした。

『結構ぢやアないか。――それで豐島屋さんの身分も立つ……』

わたしはさういひました。

『さういへば、まア……』

主人はわけもなくわらひました。

『だが、どこをどうしてさうなつたか?――それが聞きものだ。』

『それが、その、他愛もない話。——先方の御亭がコロリ死にました。』

『…………』

『おせつかいな奴があつて、それを、また、わざ／＼旦那のところへ注進したものです。——が、そのときはもう旦那は先刻御承知。——だつたといひます。』

『はて？』

『が、うつかりしてゐました。——眞逆と思つてうつかりしてゐました。——と、あるとき、何だね、親方、八つ頭つてものは惡く高いもんだね。——ふいとさう仰せがあつたぢやアありませんか？』

『…………』

『どうして御存じです、八つ頭の値段なんぞ？——いふと、なアに、この間さるところではじめて聞いて驚いたから。——何喰はぬ顔で、すぐ、話を横へ外らしなすつた。——可笑しいとふんでせい／＼手繰つてみると知つてゐるわけです。——疾うから、旦那、日本橋のそのうちの帳場へ呼びあげられて、晦日といふとパチ／＼算盤をはじかせられてゐます。——料理屋の主人なら八つ頭の値段を知つてゐるのに不思議はありません。』

『其奴はいゝ。』

『それからせッついてとう／＼泥を吐かせました。——實は三月ばかりまへから、男つ切がなくつてこまるといふからとき／＼み廻つてゐる。——だが、親方、これだけはつきりいつて置く、だからといつて嫉みつたらしいことは微塵もない。——それはさう思つてくれ……。』

『それは分る。——あの人ならさうだ。』

『一トくちに道樂ものと到底もいへない堅氣なところのある方ですから。』

『だから。』

『といつて長いことはあるまいと思ひます。——旦那の方でさうでも女のはうで打捨つて置くまいと思ひます。——工合が、その、そも〳〵のその亭主を持つたといふ奴にいろ〳〵緣のあつたらしいあんばいですから……』

『ぢや好きこのんで持つた亭主といふわけでも……？』

『ないんだから可笑しい、それが……』主人はうなづいて『いへば體よく喰はされた。——といふのは目黒の親指が死んで、そこをいとまになるときにたんまりしたものが懷ろに入つてゐます。——それを附目にすりこんでぐづ〳〵に一しよになつたらしい亭主。——だから女にすれば未練のありやうがありません。』

『…………』

『それにはおたがひが時節を待つ。——何年離れてゐようと、また、どうならうと、おたがひの料簡さへかはらなければそれでいゝ。——寺島の世帶を疊むときにかた〳〵さういつた約束があります。——いつぞや逐一申上げたとほり……』

『…………』

『いまさらそれを變改にしても可笑しなものでせう。』

『それは、まア……』

『さうとしたら、あなた……』

かぶせてさう主人がいひかけたとき、ふるので今日は閉めた硝子戸のそとに、暖簾を分けて、誰かそこに來たらしいけはいがしました。——ふり向くと、六十恰好の、坊主頭の冴えないかたちをした老人が、づぶ濡れの、しづくの垂れる

傘を持ちあつかひながら、片つ方の手で、端折つた裾を無器用に下ろしてゐました。――わたしの知らない顔でした。

『へ、よく降りますことで……』

硝子戸をあけると、その老人は、わたしのはうへ一寸こなしをしていんぎんに腰をかゞめました。

『あゝ、昨晩は……』

遠慮のない調子で主人はいひました。

『昨晩はどうも』

老人は、もう一度、しみ／＼頭を下げて

『お陰さまで……』

『どうしました、あれから？』

『いえ、どうも、あれから……』

叩くやうに一つ額を撫で、

『すつかり、その……』

わけもなく老人は歯の抜けた口だけでわらひました。

『まア、おかけ……』

『へえ、有難う……』

さういはれると、急に、狼狽てたやうにそこらをみ廻して

『あの、黒島屋さんの旦那はおみえぢやアございませんかしら？』

『まだおみえになりません。』

『あ、左様で……』

『何か御用?』

さうらしいのをみて主人はいひました。

『へえ、いえ……』

老人は間をもつて

『實は、その、お使者の役目を……』

『といふと?』

『へえ、長谷川さんの旦那の……』

『戯談ぢやアない。』

主人はいつそ呆れたやうに

『昨夜もかへらなかつたんですか、長谷川さん?』

『いえ、おかへりになりました。——昨夜はたしか明け方におかへりになりました。』

老人は狼敗て、

『わたくしが——手前がたしかにお送りいたしました。』

『お師匠さんが送つたんぢやア……』

『大丈夫、——昨晩ま大丈夫。——どうぞ御安心を……』

『だつてお宅へ歸つた方が……？』

『それが、その、——改めて、その、さきほど……』

『また……？』

『へえ、その、柳ばしへお出ましで……』

『ようござんす。』

急に主人は云ひました。

『承知しました。——旦那が見えたらさういつて上げませう。』

『まことに恐入りますが、もしおみえになりましたら電話を願ひますやうに……』

『承知しました。——その代り旦那が行くまで長谷川さんを外へうごかさない様にね、御師匠さん。——でないと……』

『それはもう、心得て居ります。』

『ぢやあ必と旦那は上げます。』

『では、どうぞ、さういふことに。——有難う存じます。——これでわたくしの役目のおもてが立ちます……』

で、間もなくその老人は『あなた、御免を……』とわたしに言葉を殘して硝子戸のそとに出て行きました。——わたしは、その、くたびれた小紋の羽織の脊縫を分けて出て行くうしろすがたをみるつもりもなくみ送りました。

『あれが兼治です、佐伯さん。』

わらつて主人はいひました。

『一ト目みて分つたよ。』

『あれでも、以前は、幇間芝居の立女形。——女が出來て仕方がなかつたといふ色男です。』
『だが、わたしは、まるであの爺さんを知らないが……』
『御存じないかも知れません。——今年の春、二十年ぶりとか三十年ぶりとかで吉原へ歸つて來たんださうですから。』
『ずつとゐなかつたのか？』
『あんまり、その、女が出來るんでつまりは身が持てなかつたんださうです。——あげく何とかいふそのころ有名だつた貸座敷のお内儀さんと悪いことをして——といふんですが、さうぢやアない。買はれた位のところだつたらうと思ひます。——これが表沙汰になつて吉原をずつと構はれてゐたんださうです。』
『大した素性を持つてゐるんだね。』
『で、まア、詫が出來て今年の春かへつて來た。——が、いゝ男だけで賣つてゐたんですから身についた藝といつては何にもありません。——旅ばかりあるいてゐたんで十から今の座敷の寸法はまるで分りません。——それには若いときつかひすぎた體がいまになつてたゝつて來ました。』
『あれで幾つになるだらう？——六十……？』
『まだ二三ぐらゐなもんでせう。——だがもうすつかり弱つてゐます。』
『…………』
『兼治さんもいゝけれど座敷で居眠りをするからこまる。——若い幇間は悪口をいひます。』
『眞逆……』
『いゝえ、眞逆と思ひますけれど……』

ふと、話が切れるともなく切れました。――と、外の雨の音が、飽くまで身うちに喰入るやうにふかく、寂しく聞えました。――まだ四時だといふのに眼にみえてあたりは暗くなりました。

『此奴は當分ふりだぜ、親方』

わたしはいひました。

『明日の二の酉もこれはつぶれです。』

主人はこたへました。

『明日は酉かね？』

『酉です。』

『ちつとも氣がつかなかつた。』

さういつてわたしは

『すみません、熱いのを一つ……』

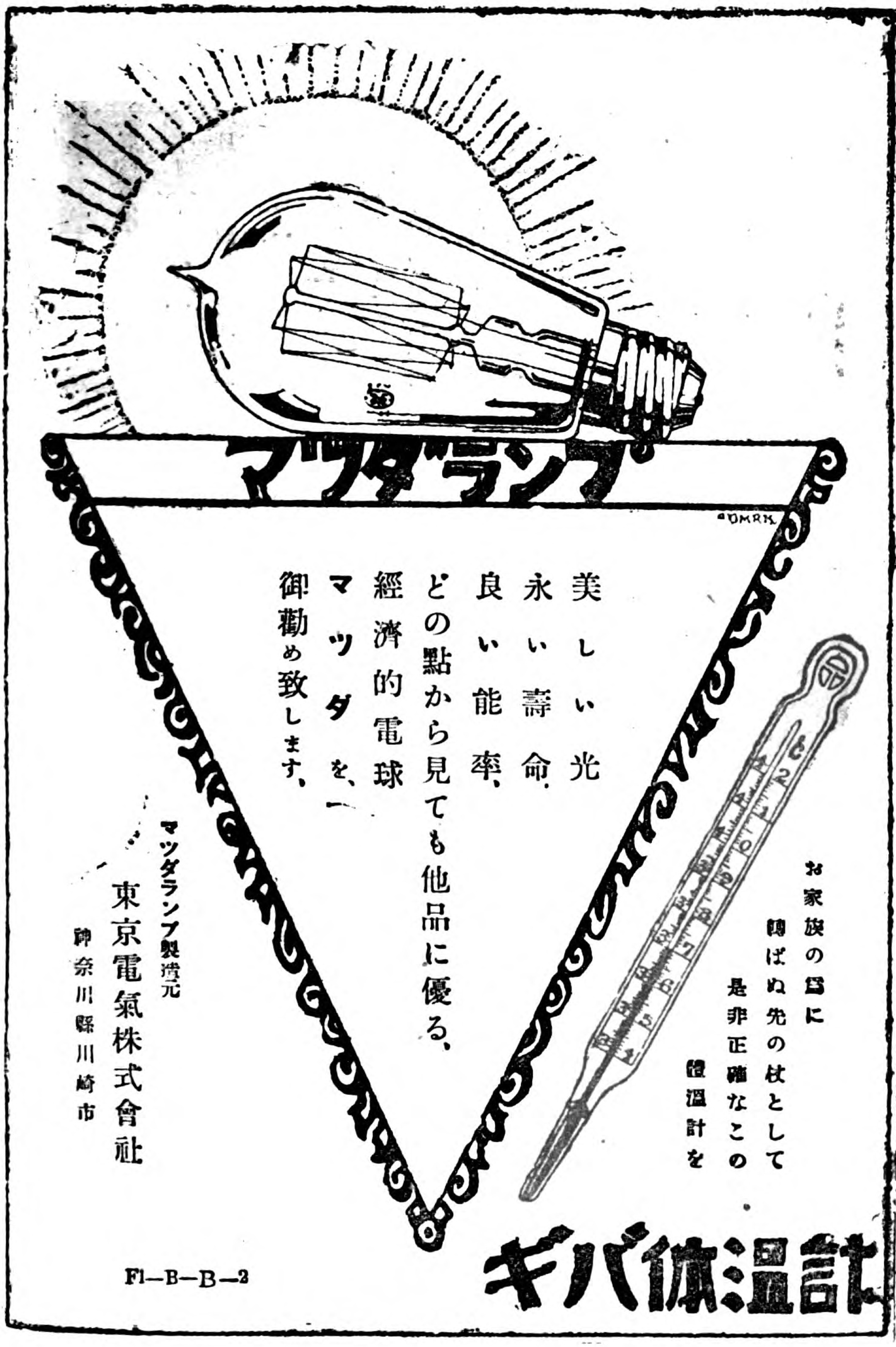
『へえ、お銚子……』

主人はこたへて、

『おい、熱くして……』

料理場の隅に腰をかけて夢中で雜誌を讀んでゐる少婢のはうへさういひました。――默つて、少婢は、雜誌を板のにふせるとぼんやり立ち上りました。

その日とう／＼豐島屋さんはすがたを見せませんでした。（十四年一月）



マツダランプ
美しい光
永い壽命、
良い能率、
どの點から見ても他品に優る、
經濟的電球
マツダを、一
御勸め致します、
マツダランプ製造元
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市
お家族の爲に
轉ばぬ先の杖として
是非正確なこの
體溫計を
ギバ體溫計
F1—B—B—2



戯曲

二つの太陽（六景）

――死せる父に――

秋田雨雀

（この戯曲は連續的に迅速に行はれる方がいゝ、スクリーン・セステムかカーテン・セステムの方がいゝ、寫實を必要としない、然し初期の表現主義の様式をとらない方がいゝ）

場面

第一景　室内（深い夜）
第二景　租界の四辻（淺い夜）
第三景　評議會（午後）
第四景　牢獄（朝）
第五景　假面舞踊會（夜）
第六景　室内（早い朝）

人物

父
青年
賣笑婦（數名）
通行人
犯罪者
評議員（數名）
囚人（數名）
看守（數名）
假面者（數名）

時

現代

第一、室内（深い夜）

父（盲目）
青年

父。もう晩いやうだ……俺れは朝から外を眺めてゐた……何も見えない、何も見やうとも思はない……俺れはもう疲れたのだ……休息が欲しいのだ……休息——休息の中でも一番大きな休息が欲しいのだ………

だが、俺れは俺れの背後にゐる俺れの子供の事を考へると、俺れは未だ死にたくないやうな氣がする……俺れはお前が今何んなことを考へ、何んなことをしてゐるか解らない……それが怖しいやうな氣がする……俺れは「死」を怖れてはゐない、だがお前の爲めに來る「生」のことを怖れてゐる……そんなことはお前にとつては餘計なことだと言ふかも知れない、然し俺れは自分の肉體と精神の傾向の中に、お前に對して恐怖を持つだけの理由を發見してゐる……それが俺れには怖しいのだ………

俺れはお前が未だ子供の頃には、例へ眼を閉つてゐても、お前が何をしてゐるか、何が欲しいか、何をしやうとしてゐるかちやんと解つてゐた……俺れはたゞそれを樂しみにして生きて來た……俺れは貧困の中からお前が立派に成長して行くのを喜んでゐた……俺れはお前が玩具なぞを手にして遊んでゐるのを、そつと背後から捕へてお前がいやがるのを無理に抱き上げて、お前の眼や鼻を弄つて見たこともあつた……お前の鼻が氷のやうに冷たくて、時々水鼻が唇の上にトンネルのやうになつてゐた……俺れはお前のお母さんがするやうに、時々その水鼻を自分の口で吸ひ取つてやつたこともあつた……俺れにはそれが嬉しかつたのだ………

だが、いつからか、お前は俺れの前からゐなくなつてしまつた……俺れは幾ら手を伸べてもお前の身體に觸れることが出來なくなつた……お前は兎のやうに何處かを跳び廻つてゐた、だが一度も俺れのところへ來やうとはしなかつた……俺れは最初にはお前に對して怒りを感じた、だが「お前が成長してゐるのだ」といふ考へが、俺れの怒りの感情を緩めて呉れた、そのお蔭で俺れにはそれより怖しい絶望がやつて來たのだ……

俺れはお前がどんな顏をしてゐるか知らない……お前は何んな事をしてゐるのだ？……お前は何をしやうとしてゐるのだ？

青年。お父さん、私は何にもかも解てゐる……あなたが何んなに私を愛してくれたか私にはよく解つてゐる……それでいゝのだ……あなたの私に對して與へて吳れたものは、それ自身にみんな價値があることなのだ。それで充分だ……

父。勿論俺れはお前から報酬を得やうとは思はない……俺れは愛情の交換をしやうとは思はない……俺れはお前の中にある俺れを怖れてゐるのだ……

青年。私はそんなことを信じたくない……

父。だが、お前の中に、俺れの中にあるあらゆるものが芽を出してゐるやうな氣がするのだ……殊に俺れの受けた晩年の苦痛がお前の胸の中で復讐の芽を出してゐるやうな氣がする……お前にはそれがほんとうに解つてゐないのだ……

青年。復讐の芽？

父。俺れはこんなことをお前に言ふつもりではなかつた……だが、俺れには今子供が暗黑に對して持つやうな同じ恐怖をお前に對して懷いてゐる……

青年。お父さん、私は光明を求めてゐる……お父さんの生涯見ることの出來なかつた光明を！

父。光明！……然うだ……その光明を求めて吳れ……俺れは六十年の間光明を探してゐたのだ……俺れはいつでも光明を求めてこの兩手を伸してゐた……俺れは身體全體の皮膚から日光を吸ひ取らうとしたのだ……だが光明は何處にもなかつた……

俺れは光明の代りに固い石を握らせられた……

俺れの全身は温い太陽の代りに、痛い霙や霰の亂打に逢つたのだ……最後に冷い牢獄の生活が俺れの晩年を見舞つて呉れた……

俺れはあすこではお前のことを考へないやうにしてゐた。……然し空氣のやうに、俺れの聯想の呼吸の中へお前が入つて來た時、俺れは一思ひに俺れの咽喉を締めつけて生活を斷ち切らうとさへ思つたことがある……俺れはそれをしなかつた。俺れはその冷い暗い生活の中から一筋の糸を見つけ出した……その糸は光つてゐた……それはお前の生活の方に引つ張られて行つた……

靑年。お父さん……然しそれが私の生活に何んな關係があるといふのです?……お父さんの生活はお父さんの生活だ……私はお父さんの生活によつて生きて行かうとは思はない……そんな權利はお父さんにはない筈です……お父さんは「遺傳」のことを考へてゐるかも知れない……お父さん、私は遺傳を無視して行きたいとさへ思つてゐる……

父。然うだ。俺れもそれを望んでゐるのだお前のために。……お前は俺れの遺傳と環境から解放されて呉れ……俺を思つて呉れるな。お前は俺れのやうな人間の生活を思ひ出したり、そのために働いて行かうとしたりしてはいけない……お前は全く別な明い世界へ行つて呉れ……そこでお前の生活を樂んで呉れ……お前の瞳光の中から俺れの姿を除き取つて呉れ……お前の血管の中から俺れの色を抜き取つて呉れ!……お前の耳にはいつでもいゝ美しい音樂だけが響いて呉れ!……お前の眼はいつでも明い美しい色だけを見て呉れ!。

靑年。お父さん、何うか私のことは心配しないでください……私は生きて行く……私は何んな處にゐても光明を求めて行くつもりだ……。

父。俺れは長い間洞窟の中にゐた……お前はその洞窟の中から這ひ出て呉れ……俺れはひどく疲れてゐる……俺れは人

眠りたい。

青年。お父さん、お休みなさい……お母さんは待つておいでゝせう……。

(青年は盲目の父を導いて右手に歩いて行く、)

あなたの手はひどく冷い!……。

父。お前の手はふるえてゐる……お前の年頃には俺はもつと〳〵肥つてゐた……お前はおど〳〵してゐる……お前は何を怖れてゐるのだ?……お前は何か心配事でもあるのか?……お前の眼の前に何があるのだ?

青年。(父の手を兩手で探りながら、)私は暗い!……私は眼を大きく開いてゐるけれど……然し私は厚い閉い暗黒に包まれてゐる……だが、お父さん、私はきつと……。

お休なさい!……。

ゆつくりお休みなさい!……。

(父と青年とは去る、)

第二、租界の四辻(淺い夜)

青年
賣笑婦
通行人
犯罪者

肥つた女。そりや、お前すてきだつたよ。………

瘠せた女。何が？………

肥つた女。總督の行列さ……そりや大變なもんだつたよ………

瘠せた女。それが何うしたつてんだへ？……總督のお召しにでも預からうといふのかへ？……馬鹿らしいにも程がある
よ………

肥つた女。お前さん大禮服つてもの見たことがあるかへ？………

瘠せた女。そんなものちつとも珍しかあないよ……そこの五十二番館邊りにや眼障りなほどぶらさがつてるぢやないか
……それに憚りながらあたしのレコはオフヰサーだつたからね………

肥つた女。オフヰサアとはちがふよ……

瘠せた女。オフヰサアだつて大禮服を着ますよ……

肥つた女。何しろそれや、すてきだつたよ……何千人といふ兵隊が棧橋の兩側に立つてるぢやないか……
總督の前を支那人の女が御亭主のやうな人と一緒に笑ひながら步いてゐたよ……總督つてのはいゝお爺さんだけれ
ど、お附の人達は皆若くてすてきだよ………

瘠せた女。すてきだつて、こつちのお客にはならないから心配しない方がいゝよ……

肥つた女。さう言つたもんでもないよ……飛んだ拾ひ者がないとも限らないからね……それに然うと、皆な何處へ
行つちやたつたんだらうね？

瘠せた女。阿片を吸ひに行つたよ……

肥つた女。　またあの支那人の店へかへ？……阿片はおよしよ、死んじまふよ……あれをやりつけたお陰であたしの友達が十人も死んでるよ……阿片をやりたいばつかりに十年も支那人の妾をしてゐる女もあるぢやないか……

瘠せた女。　死にたい奴あ、みんな死んじまつた方がいゝや……阿片でもモルヒネでも勝手にやるがいゝや……

（瘠せた女が左手の並木の方に行く。）

客。　あいつだ……

客。　すてきだな……

客。　まだ若いよ……

客。　きめておいでよ……

客。　（瘠せた女を追ひかけて行く。）

客。　（肥つた女に）おい〳〵。

肥つた女。　知らないよ……

客。　おい、何うしたつてんだへ……大變ご機嫌が悪いぢやないか？……男が逢ひに來ないのかへ……ペルシヤ猫みたへにいやに肥つていやがるぢやないか……

肥つた女。　知らないよ……

客。　棧橋まで行かう……今晩はフランス料理を御馳走してやるよ……

肥つた女。　暇があるのかへ？

客。　勿論さまだ……お前に逢ひたいばつかりに船を寄せたんぢやないか……

肥つた女。　お門違ひだよ……人面白くもない！……

客。　（女の肩に手をかける。）お門違ひなもんかへ……さあ、行かう……暇はとらせないから……

肥つた女。惡いことばつかりして歩いてるだらう……憎らしいね……

客。こんな可愛いのがゐるのだもの……誰が……

肥つた女。痛いよ……

客。可愛いんだよ……

肥つた女。人……

（肥つた女は男に抱きかゝへられるやうに右手に去る。）

瘠せた女。（青年と左手から。）おつ母さんが中風になつたの……それからあたしいろんな仕事をしてたわ……あたし何から話していゝか解らなくなつた……あたしもう駄目な女になつたんですから、あなたも何も聞かないでちやうだい……

青年。（女を痛はりながら。）僕も昔の僕ぢやない……何んとも思つてゐない……そしてお父つあんはおつ母さんを見てやらなかつたのかへ？

瘠せた女。お父さんが戰爭から歸つてから、お母さんと始終喧嘩ばつかりしてゐたわ……そして、その年の十二月にお母さんと私はよその家へ行つちまつたの、……

青年。よその家つて何處？

瘠せた女。よその家つて……叔父さんていふ人の家よ……

青年。叔父さん？………そしてお母さんは今でもその叔父さんの家にゐるのかへ？
瘠せた女。いゝえ………叔父さんて人はいやな人で、お母さんを撲つてばかりゐたの、………
青年。撲る？………その叔父さんてのはお前のほんとうの叔父さんぢやないのかへ？
瘠せた女。――そんなこと聞かないでちやうだい………あたし苦しいから………
青年。然うか〳〵………僕にもぼんやり解つて來たやうな氣がする………そしておつ母さんは今何處にゐるの？
瘠せた女。死じまつたの！
青年。何處で？その叔父さんの家でかへ？
瘠せた女。いゝえ。
青年。そんなら何處で？
瘠せた女。（半ば泣きながら）きかない身體でお母さんは這ひ出して行つたの………
青年。這ひ出して………
瘠せた女。（青年に倚り添ひながら、）井へはまつて死でしまつたの………
青年。然うか………僕はあのお母さんをよく知つてる………お前の少さい時から知つてゐた………お前のお母さんが僕の窓の下でよく洗濯をしてゐたのを知つてゐる………お天氣のいゝ時、僕が顔を洗つてゐると、水を汲んで呉れたことがあつた………お前は背伸びをして赤い小さな襦袢を物干に干してゐたのを覺えてゐる………お前はほんとに美しかつた………日光が當つてゐたつけ………お前はお稚子に結つてゐたね。………觀音樣のやうに美しかつた………
瘠せた女。（投げやりに）何もかも駄目………何もかも駄目………でも妙なものね………お母さんが死んだら、あた

しさつぱりしたわ………

青年。何うして？

瘠せた女。でも、お母さんと一緒に苦勞するのはいやだもの……あたし一人なら何んなことをしたつて暮して行けるんですもの………お母さんが死んでからあたしほんとに氣樂よ………なにまさかちかへば、死ぬだけのことですもの……ほんとに死ぬだけです………

青年。然うだ………死ぬだけだ………だが僕にはその決心がつかない………お前はいつからこゝへ來てゐるの？………僕はこんなところでお前に逢ふとは思はなかつた………

瘠せた女。まつたくですね………あたし今年で二年になりますの………あたしあなたにお眼にかゝた時何うしやうかと思ましたわ………

青年。僕も驚いた………僕は上海からこゝまでの間に一人も知つてゐる人間に逢はなかつた………一番最初に逢つたのがお前だ………

瘠せた女。でも、あなたは幸福で暮しておいでになるんでせう………

青年。僕も幸福ぢやない………お前のやうに裸になれないだけに、僕は一層不幸な人間かも知れない………お前はこゝを出やうとは思はないか？

瘠せた女。――――思はないわ………

青年。何故？

瘠せた女。何うもならないんですもの………あたしのやうな女………

青年。だが……もし……

(この時、突然鋭いピストルの音一人は同時に身を屈める。

一人の青年がピストルを擬しながら右手から疾走して來る。

青年の後をヨオロッパの兵士と支那の警官が追跡して來る。兵士も警官もピストルを擬して疾走して行く。)

瘠せた女。あの人だ……あの人だ……あの人だ……

青年。(女を制して、)靜かにしろ!

瘠せた女。あの人だ……あの人だ……あの人だ……

青年。一體何事だ!……何うしたんです?……

通行人。總督が殺られたんだ……窓から狙撃されたんだ……

通行人。總督は死なゝかつた……お客がやられた……Aの獨立團員だ……

通行人。總督といふ者はなか〳〵死なゝいものらしいな……

通行人。ピストルが惡いんだ……

第三、評議會(午後)

殖民地評議委員

秘書官長。閣下及び諸君!小官は數日の疲勞にも拘らず熱心にお集りくださいました諸君の御誠意と御勤勉に對して深く感謝の意を表するものでございます。誠に此度の事件は邦家、否な人類の爲めに慨はしい次第でありまして、實に

何とも言ひ表はすべき言葉もないやうな有様でございます。然し乍ら何事にもその原因及び結果がありまして、今回の不祥事そのものゝ現出を誘引いたしました、原因に關してはお互ひに深き考慮を拂ふ必要があることゝ存じます。抑もヨオロッパに於ける破壞的、唯物主義的思想傾向が、私供ヨオロッパ人を苦しめ、社會的進歩の唯一の保障たる近代社會の基礎を破壞し去らうといたして居るのであります。然しながら私達ヨオロッパ人は決して失望すべきではありません、Nil desperandum 今回の事件が私達民族を通じてヨオロッパ全體、否な人類全體に深い自覺を促したものではないでせうか？抑も善の創造的且救濟的勢力は………

大學教授。秘書官長、御言葉中ですが、もう少し簡單にお願ひ出來ませんでせうか……私供の總長は關節炎をお疾ひになつて居りますのを無理に出席をお願ひ致したやうな次第でございまして……總督は御無事でございますか？……犯人は捕縛になりましたか？……その點を早く御報告くださいませんか……

秘書官長。（非常に狼狽しながら、）これは實にご最もな御質問でございます。それでは閣下及び諸君、今回總督閣下御遭難の顚末を簡單に御報告申上げます。總督閣下は一九二三年△月△日午後一時三十分に我共和國軍艦△號にて當殖民地にお着きになりました、そして同日午後七時……

大學教授。それは存じて居ります……秘書官長、私は總督閣下は御無事でゐられるか、犯人が捕縛されてゐるかといふ簡單な、然し重大な事實をお質ねしてゐるのです……

秘書官長。さやう、眞に重大なる事實でございまして、誠に私供の責任は深く且つ大であると申さなければなりません、その點に關しましては……

大學教授。（馬鹿野郎！）秘書官長、私は責任なんて問ふてゐるのぢやありませんよ……頭腦を冷靜にしてください…

……總督は御無事ですか？先づこの第一問にお答えください……

秘書官長。幸にして御無事でございます……

大學教授。然らば總督狙撃の犯人は捕縛されましたか？……

秘書官長。即刻捕縛されました……

大學教授。犯人は如何なる種類の者ですか。年齢及び思想系統は？

秘書官長。年齢二十三歳、思慮判斷の不確定な一青年でございます。……思想系統は近來東洋人一般を支配してゐるところの民族自決主義に共通なもの丶やうにも思はれますが、こゝに最も留意しなければならないことは、彼の實行的方法には明かに、近來ヨオロッパ各國の經濟的、社會的、道義的並に宗教的秩序の破壞を試みやうとしてゐるところの彼の兇惡飽くところを知らないテロリズム、アナアキズム、コムミュニズム、ボルシエヴイズムに一味共通の點がないとは言はれないのであります。これ實に今日皆樣のご來會を請ひ、ご懇談をお願ひ申上げた所以でございます。就きましては、御病中甚だ恐入りますが、大學總長を議長に推薦申上げたいと存じます。

大勢。贊成〳〵！

大學總長。私はひどく年をとりまして、……それにひどく足痛を感じまして……

將軍。總長、年はお互樣です。……「國家」の爲めです……總長を戰線に立てとは申しませんぞや……

大學總長。私も「國家」のためには人後に落ちん積りです……だがひどく足痛を感じましてな……

（總長は教授に助けられて議長席に着く。）

大學總長。それでは私は僭越を省みず議長の席に着かせていたゞきませう。……秘書官長一體何のやうな事に就いて議

決するつもりなのですか？

秘書官長。犯罪人の所罰程度及び犯罪人の環境探査の範圍に就いて皆様のご意見をお伺ひいたしたいのです。

大學教授。いかゞですか……ご意見のある方はご遠慮なくお話しくさい……

高等法院長。私は今日の評議員會には發言しない方が自然かと存じますが……私は正直に申しますと、今回の事件を計畫的行動とは思ひますが、思想的根柢あるものとは信じないものであります……私の見るところによりますと、犯人は全く思想に關する智識及び判斷力を缺いてゐるもので、一見低能兒らしくさへ思はれるのであります。……かゝる低能兒を嚴罰に所することは却つて殖民地の人心を險惡ならしむる所因を作すものであると信じます……無論法は明かである必要がありますが、pede Poena claudo と申しまして罰することと緩かである方がいゝと思ひます……但しこれは高等法院長として申上げるのではありません……當殖民地高等評議會員として申上げるのであります……

大學總長。院長の御意見は消極論のやうで……

宗教局長。要するに彼等を愛さなすぎたのだと思ひます……私は十年間彼等に接してゐました……彼等は「神」を失つてゐるのです……彼等は決して狼ではないのです……彼等は愛すべき羊です……彼等は渇いてゐるのです。渇いてゐるものに禮儀を求むることは出來ません……

僧院長。「神」を誰が持つてゐませう……宗教局長は果して「神」をお持ちでせうか？……恐らく「神」は局長の胸の中にあるかも知れません……それとも局長室のデスクの中に……

大學總長　個人の感情で物を言ふのはお遠慮ください……またセンチメンタルな信仰問答は此際不用のことゝ思ひます……此度の事は要するに政治的犯罪の部類に屬すべきことで、信仰乃至教儀の部類には屬して居りません……それば

かりではありません、今日の會合は犯罪の豫防に關する問題を討議する種類には屬してゐないのです……結果に對する對策を討議するといふ現實的な問題を含んでゐるものと信じます……

本國人會長。教授のご意見の通りです……全く現實の問題です……ある意味で私供本國人の死生の問題です……「神」の問題ではありません、「人間」の問題です……

僧院長　「神」のことを考へずに「人間」のことを考へることは出來ません……

本國人會長。議長、發言中です！　私供にとつては要するに取引きの問題です……私供の死生に關する重大な取引きを不安な狀態のまゝで放置していゝか何うかといふことです……私に言はすれば私供本國人が總督政治に信賴し得るや否やといふ簡單な事實に歸納されるのです……私の經驗によりますと、私供本國人は餘りに殖民地人に對して好意を持ちすぎてゐたと思ひます……彼等は恩に馴れすぎた感がないとは言はれないのです……私はこの機會に徹底的に嚴格に彼等に臨む必要がありはしないかと思ふものです……

大勢。ひやひや……贊成……

大學總長。これは積極論のやうですな……時に私はひどく足痛を感じまして……

秘書官長。（總長に耳語す。）閣下及び諸君、總長は足痛を感ぜられるさうですから、出來るだけ早く議論をすゝめたいと存じますが……

將軍。然うちや……「然り」か「否」か……

刑事局長。私は犯罪の思想的背景より政治的背景を一層重大視して居ります……私はその方面に充分の注意を拂つて居りますが、諸君のご意見によつて私供は即刻方針を決定いたすつもりでございます……

將軍。私は武人で何も知らんもんぢやが……一體私供の政治が優柔不斷すぎると思ふのぢや……民族の消長は「力」の問題で、「力」のあるところには何事も起る餘地がないものだ……思想は「力」の缺陷から生れて來る……思想の內で考慮すべきものは「力」を保持するに役立つものだけなのだ……諸君は「神」といふ……「神」は「力」の所産で、「力」は國家の中に於いてのみ育成されるものである……近代國家の內で我國家ほど試練を受けたものはない……最後に何が役立つたか？……言ふまでもなく武力だつた……その武力によつて民族が「力」を得て來たのです……殖民政策は何によつて有終の美を爲すか？言ふまでもなく武力だ……「力」だ……「力」だ……「力」だ……

秘書官長。將軍、椅子にお氣をおつけになつて……

將軍。椅子の壞はれるのは椅子に「力」が缺けてゐるからである……國家もまた椅子のやうなものである……

大學教授。椅子と國家を一緒にされちや困る……

將軍。要するに我が共和國は自己の「力」に信賴すべきである。……女々しい感情論は我が國家の禍根を爲すものぢやと信ずる……「法は力によつて明かなり」ぢや……彼等に對する唯一つの方法は「力」を知らしむるにある……

……「力」を知らしむるにある……

秘書官長。椅子をその儘にしてお置きになつて……お負傷があつてはいけません……

將軍。私は積極論者ぢや……

大勢。ひや／＼……贊成／＼……

大學總長。私はひどく足痛を感じまして……それでは積極、消極の決を採ることにいたしませう……

大勢。異議なし……贊成／＼……

大學總長。積極論者はご起立を…………

（起立）

消極論者はご起立を…………

（起立）

積極論者多數と認めます。

（拍手起る。）

秘書官長。閣下及び諸君、小官は皆樣のご熱心を深く感謝いたします。今日の評議會が諸君のご努力によりまして無事終了いたしたことを國家及び總督のために祝福いたしたいと思ひます。…………共和國萬歲！

一同。共和國萬歲！

秘書官長。總督萬歲！

一同。總督萬歲！

大學總長。私はひどく足痛を感じまして………何しろひどく………

第四、牢獄（朝）

青年
囚人
看守

第一の四人。また夜が明けた………

第二。小鳥が鳴いてゐる………

第三。俺れはやつぱり生きてゐた………夜が明けると日が暮れる………だが光を見るのはいゝ………

第四。俺れは夜がいつまでも續けばいゝと思つた………光は痛い……光は殘酷だ………光は盲者だ………

第一。だが、やつぱり光はいゝ………光は可愛いゝ………みんなの手だけが白く光つてゐる………みんなの手をこゝへ出せ………みんなの手を光にあてやう………

（十四五人の四人が申合はせたやうに兩手を眞中に持つて行く。）

第一。みんな何が欲しかつたんだ………

何を摑まうとしたんだ？

第二。幸福だ。………だが幸福は何處にもなかつた………

第一。幸福なんてものは世の中にあるもんぢやない………幸福は過去か未來か夢の中だけだ………

第四。然うだ幸福はない、然し幸福はある………××××××××××××………××、××××××、××××××××××××、中にだけある………幸福は一つの階級にだけある………そこには幸福が溢れてゐる………

第三。幸福はそこにだつてないかも知れない………俺れは五十年の間それを信じて生きて來た………俺れはその幸福を取返へすことによつて萬人が幸福を得るだらうと信じてゐた………然し俺れはそれを信じられなくなつた………取り返へした幸福はやつぱり取返へした幸福で、俺達の幸福ではなさそうだ………取り返へした幸福はまた取返されないために守らなければならない………そんなら幸福は何處にあるんだ？………そんなものは何處にもありやしない……

…………

第四。ブルヂ・アナルキーといふ奴だ………そんなものは階級意識の痲痺から起る………でなければ初めからなかつたんだ………ない袖は振られない………

第三。それ位の理屈は俺れも昔から知つてゐた………だが俺れは空想で生きて行きたくはない………俺れは俺れの必要で生きて行きたい、口眞似で生きて行くのは耻しい………俺れは自分の哲學で生きて行き、自分の哲學で死んで行きたい………

第四。久振りで哲學といふ言葉を聞いたな………哲學で生きて行つた人間もなければ死んで行つた人間もありやしない………胃袋で生き心臟痲痺で死んで行くのだ………

第二。それもやつぱり概念にすぎないのだ………人間は瞬間瞬間に生きて行くのだ………俺は毎日夢を見ることにしてゐる………俺れは殆んど規則的に夢を見るやうになつた………俺れは夢を生活の中に加算して行くのだ。………俺は若い時「カーマ・スウトラ」といふ印度の經典を讀んだことがある………性慾の事を書いた經典だ………その中には性に關する驚くべき報告があつた………性交に關する科學的研究だ………だが正直にいふと俺れはそれを科學として讀んだのではなかつた………俺れはこゝへ來て偶然その夢を見た………俺れは老人だ、誰も笑つて呉れるな………俺れにはもう性の機能がなさゝうだ………だが不思議に夢の中では俺は若い青年になつて色々な女に接してゐるのだ

…………

第一。ファウストだ………

第四。出鱈目だ………

第三。エロマニアといふ奴だ……

第二。俺れはロシアを旅行してゐた頃、一人のポーランドの娘を知つてゐた……その頃は美しい十八歳の少女だつた……勿論俺れもその頃は若かつた……

第四。お前は幾つだつたへ……

第二。俺れは三十を越したばかりだつた……俺れはその少女を愛した……俺れは心からこの少女を愛した……俺れは然しこの少女に性的な何物も求めたことはなかつた……少女を愛すれば愛するほど俺れは純粋になつて行つた……俺れは長いシベリヤの旅行の間でもこの少女の事を考へると力を得た……

第三。プラトニツクラヴといふ奴だ……黴が生へてら!……

第四。默つて聞いてやり給へ……して少女も君を愛してゐたのかへ?

第二。俺れはほんとは知らなかつた……だが愛してゐたといふことは、後で解つた……ロシアを出發してから……

第三。そんなことあ、くだらないこつた……それが一體何うしたといふのだ……君の生活に何んな關係があるといのだ……

第二。その少女だ……俺れのカーマ・スウトラの夢の中に出て來るのは……俺れはなつかしく思つた……俺れは、だが、夢が醒めると淋しかつた……何ともいへない淋しさだ……

第四、マゾヒズムだ……變態性欲だ……センチメンタリズムだ……

青年。俺達はマゾヒズムだ……俺達はみんなマゾヒストだ……誰が俺達をマゾヒストにしたのか……俺れはこの老人を知らない……一度もこの老人と逢つたことがない……だがこの老人のカーマ・スウトラの話の中にすべて牢獄にゐた

人々の生活の夢が暗示されてゐる……俺達にとつて生活はその少女だ……カーマ・スウトラの夢を持たない俺達は淋しい……俺れも女を知つてゐた、然し俺れは一度もその女の夢を見たことがない……

第四。お前は一體誰だへ?……

青年。俺れは何んでもない……強いていへば巡禮だ……

第四。いつこゝへ入れられたんだへ?……

青年。一週間ほど前に……

第四。何んで入れられたんだへ?

青年。何んで入れられたのか俺れにも解らない……俺れは女と租界で話をしてゐた時やられた……それから一度も調べられたこともない……

第三。何かあつたのかへ?……お前はその女を何うかしたのかへ?……

青年。俺れはピストルの音を聞いただけだ……眞黑の力が俺れの身體におつかぶさつて來たのを感じただけだ……その力は俺れにフランス語の唾をひつかけた……俺れは「ごろつき!」といふ言葉だけが不思議に耳にいつた……

第二。ピストルなら、その對ひの檻房にゐる……始終何か胴鳴つてゐる……看守が何んなに叱つても平氣で胴鳴つてゐる……

青年。ぢや、捕つたんだね……いつ捕つたんだらう?……

第二。お前の來た日に入れられたやうだつた……あいつはやられるよ……そらお聞きまた胴鳴つてゐる……(この時、對側の檻房から演説でもするやうな聲がする。時々足踏みをする音。)

第一。何うせ死ぬのなら、溫和しく死んで行つたらよささうなものぢやないか……
第二。然うは行かないや……胴鳴る位は胴鳴らせてやるがいゝや……
第四。しつ！……役人が來た……あいつの檻房の方へ行くやうだ……
（一同聲をひそめて、役人の歩いて行く音を聽いてゐる。重い沈默が室を壓迫する。）
第一。あいつは連れて行かれる……あいつはもう歸つて來ないかも知れないぞ……
第三。みんな見ろ……あいつは行く……
第二。あいつは行く……
第四。あいつは行く……
青年。まだ若い！……生活が一杯だ……生活がやられる！……生活が何處へ行く……生活は飛ぶ……生活は風化する……生活は生へる……生活は充滿する！……
（十四五人の囚人は小さな空間の中からある者を凝視してゐる。呼吸だけ。）

第五、假面舞踏會（夜）

ダンスホールに接した一室

高等法院長
假面者
ボーイ

狐。（マスク、道化服）はゝゝ……………いやはや……お互に…………

犬。ご同様巧妙に……國家のために……

馬。誠にお目出たいことで……拙者は假面が少し大き過ぎるので自宅からの持運びには少々閉口しました……

ボーイ。（直立して、）何うぞあちらへ……

象。私はひどく足痛を感じまして……

狐。お似合ひですな……象とは正眞正銘です……殊によい思付きで……

象。お判りになりますか……何うぞ御内密に……

狐。お互様のことです……

象。私はひどく足痛を感じまして……

ボーイ。皆様お待ち兼ねです……何うぞあちらへ……

（假面者はこの室を通つて左のダンスホールの方へ行く。

ホールでは間もなく烈しい拍手が破裂する。

やがて、長い笑聲が續く。

オーケストラにつれてダンスの足音が響く。

東洋風の音樂。

拍手。

高等法院長。（嚴格な顏をして素面のまゝ右の室から、）皆お揃ひかね？……

ボーイ。（直立したまゝ）はい……皆樣お揃ひでございます……閣下のおいでをお待申上げて居られます……閣下のご扮裝は？……

高等法院長。扮裝？……

ボーイ。ご假面でも……

高等法院長。假面？……はゝゝ……假面にも及ぶまい……然ういへばヨオロッパにゐる頃、ある辯護士が私を法庭で假面と言つたことがあつたつけ……假面か……なるほど……

ボーイ。恐入ります……では、すぐにそのまゝであちらへ？……

高等法院長。私はひどく忙しい……然うしてはゐられないのだ……私は殖民地の幸福のためにこの一週間といふもの安眠もしなかつた……

ボーイ。はい……お祭し申上げます……

高等法院長。將軍も來てゐられるかね？……

ボーイ。はい……Ａ將軍は一番最初にご扮裝なさいました……

高等法院長。將軍は何んな扮裝をしてゐられる？

ボーイ。はい……それはその……どなたにも申上げないことにいたして居りますので……

高等法院長。なるほど……だが、私にはいゝだらう……私は初めからこの假面舞踊には加はらないことにしてあるのだから……

ボーイ。ではございませうが……今晩の規定になつて居りますので……

高等法院長。規定？……そんなむづかしいものがあるのか……私も法律家だ……何も法は曲ぐることを許さない……私は忙しい……私は歸る……
ボーイ。(狼狽して、)閣下お待ちを願ひます……それでは申上げます……
高等法院長。私は誰に對しても强制することをしない……
ボーイ。A將軍は、恐れ入りますが、豚でございます……
高等法院長。豚？………
ボーイ。はい、確に私の信じますところによりますと、豚に相違ございません………
(この時ダンスホールで高く痙攣的な笑が起る。)
高等法院長。(鞄を開いて書類を整理し初める。)なるほど豚か………すまないが私に紅茶を一つ持つて來て吳れないか…
……ひどく咽喉が渴く………
ボーイ。はい、畏りました………
(高等法院長は書類を點檢し初める。
ダンスの音がつゞく。
ボーイは紅茶を持つて來る。)
高等法院長。いゝ氣持になつた………木犀の香ひがするな………ヨオロツパの初夏が思ひ出される………お前はヨオロツパへ行つたことがあるか？
ボーイ。はい、まだ一度もございません………

高等法院長。ヨオロッパへ行きたいとは思はないか？………

ボーイ。參りたうございます……先の總督はつれて行つてやるとお仰有つてくださいましたけれども……

高等法院長，お前はよく言葉が出來る……感心な人間だ……本國へ歸る時はお前をつれて行つてあげやう……

ボーイ，閣下のお供が出來ますと，此上もございません……

高等法院長。何しろ言葉の出來ぬ者は私には人間とは思へん……言葉は誠に尊いものだ……人間の意思を傳へる一番正確な道具なのだ……何うも殖民地の人間は言葉を愛せないでこまる……

ボーイ。言葉……言葉……

高等法院長，言葉は精神だ……言葉を持たないものは精神を持たないものだ……

（この時第二のボーイは右手から入る。）

第二のボーイ。刑事局長がおいでになりました……

高等法院長，私に……此處へ……

（刑事局長入る。）

高等法院長，君は舞踏會へは加はらなかつたのですか？……

刑事局長。（緊張して）、なか／＼然ういたしては居られません……

高等法院長　その後、何か異狀でもありますか？……

刑事局長，異狀どころではありません……ひどく不穩です……彼等は殖民地至るところに集團して居ります……軍隊が解散を命じて居りますが，なか／＼命令に服從しません……或は此處が包圍されるかも知れません……

高等法院長。包圍？それはいかん……將軍を早く！ボーイ將軍を早く！……

刑事局長。いや、私は直接にお眼にかゝりませう……

高等法院長。（鞄を整理して小脇にかゝへる、）ボーイ、私の自動車を……

ボーイ。畏りました……

（ダンスホールでは激動が起る。

假面者は假面のまゝ左手から出て來る。）

狐。私は信じない……とても信じられない……とても信ぜられない……あり得べからざる事だ……

犬。私はありさうに思つた……だがやつぱり信ぜられない……

馬。責任は何處にある……私は先づ責任の歸するところを知らなければならない……

刑事局長。皆さん、お靜かに……不可効力です……ご諒解を願いたい……

高等法院長。私は權限内に於ける最善を盡したつもりです……ご諒解を願いたい……

豚。敵は何者だ？……敵は何の方向に居るのだ？……けしからん？……

刑事局長。何うかお靜かに……激動は得て失敗を招き易いものです……

豚。逡巡するものは敗北するものだ……私はいつでも積極論者ぢや……

高等法院長。私は秘密會議の開催を提議いたします……一刻も猶豫なりません……

豚。會議は何を產むか……そんなものは不必要だ……たゞやつけるばかりだ……「たゞ「斷」の一字あるのみぢや！……

高等法院長。將軍先づ假面をおとりください……皆樣も假面をおとりください……

（將軍は兩手で豚の假面を脫ぎとらうとする）

豚。　假面はとれない！………何うしたのだ假面はとれない！

大勢。　假面はとれない！

狐。　おゝ神よ………私の假面を！

犬。　おゝ、誰か私の假面をとつて吳れ………

象。　私の假面もとれない………それに私はひどく足痛を感ずる………

（假面者は泣き叫びながら室の中を縱橫に駈け廻り、或は這ひ廻る。）

高等法院長。　これは何うしたといふのだ………この事件の蔭には何事か潛んでゐるに相違ない………

刑事局長。　驚くべき陰謀です………ユデア的大陰謀です………

第六、室内（早い朝）

青年

青年。　（次第に明くなる光の中に立つ。）お父さん！私は今こゝにゐる………あなたは六十年間日光を見ずに生きて行つた、そして死んで行つた。………私はあなたのために二倍の光を求めて歩いて來た………だが光は何處にもなかつた………

私はこゝにゐる………暗の中にたつた一人で立つてゐる………笞打たれ傷けられたあなたの身體が私の前に倒れてゐる………私はその死骸を飛び越えて行く………道が消いてゐるらしい………だが光はそれを照して吳れない………

私は今何を見てゐるか，あなたには解らない……人は「神」を求めて惡魔を得たといつた……だが私は「神」を求めなかつた……私は到るところでたゞ「人間」だけを求めて歩いた……私は「人間」を求めて獸を得た……

私は多くの獸が獸を食つてゐるのを見た……小さな小羊の周圍に澤山の狼の集つてゐるのを見た……そしてその狼達は正義、人道を叫んでゐるのを見た……澤山の狐や犬が少しの餌のために……×××××××××××××……お父さん、一層驚いたことは……その憐むべき小羊供が同し小羊供の肉をしやぶつてゐることだ……

お父さん，然し私は失望しない……私はこの巡禮をつゞける……私の前に一枚の鐵の扉が立つてゐる……その扉の蔭に澤山の人の呼吸を聞いた……私はある時もう一つの太陽を見た……然しその太陽はすぐ私の視覺から逃げて行つてしまつた……その時から私の感覺の中に二つの太陽が出來た……私は太陽がたつた一つしかないと教はつて來た……私は幻覺にすぎないと思つた……××××××××××××××××××××××××……××××××！……もう一つの太陽が登りつめた時，その時たゞ五千年の間大地に曝された憐むべき小羊の骨を照すにすぎないかも知れない……××××××××××××××××××××××××××××××××××

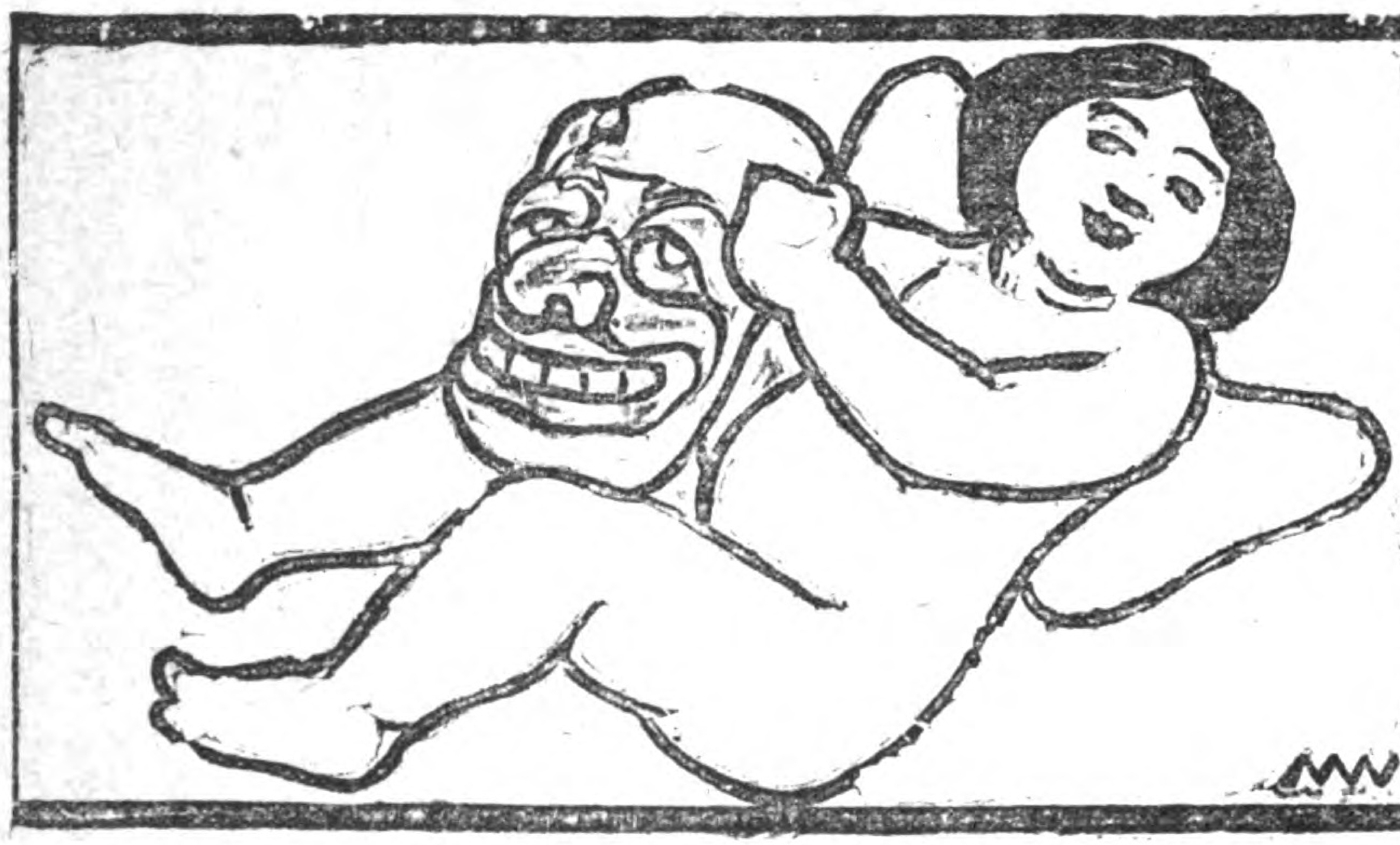
××××……

お父さん，今私は暗い……然し私は失望しない……私の心の中にある二つの太陽を何うすることも出來ない」

……私はこの巡禮をつゞける……

（立つたまゝ）

(La 31un de novembro, 1924)



三千代の嫁入

宇野千代

（一）

三千代の父は、廣島の縣病院に四月くらゐ居て、又、家へ歸つて來た。近所の人たちは肺病だと言つた。さう思はれるのも無理がない程、痩せて蒼くなつて、前よりももつと氣短かになつた。

或日、三千代に、ボーロを三斤買つて來いと言つた。そして、それを持つて吉村へ遊びに行つて來いと言つた。

吉村と言ふのは、三千代の亡くなつた母の姉の家であつたが、三千代の母が亡くなつてからは、つきあひをして居なかつた。三千代は、は朧氣乍ら、それが父の意志からだと言ふ事を感じて居たから、だしぬけに、今から吉村へ遊びに行つて來いと言はれると、氣味が惡かつ

た。病氣のせいで、父は、人の氣持を洗ひ立て過ぎるのだ。――父に知れないやうに偶には遊びに行くだらう。或は、行きたい行きたいと思つて居るだらう。今日こそ、俺が行かして遣る、さあ、行つて來い、行つて來い、――さう言つて居るやうな氣がした。

けれども、三千代は昔からの習慣通り、自分の考へをのべる事なしに、父の言葉に從つた。

吉村の家は、同じ町にあつた。三千代は、これまで一度も行つたことはなかつたけれども、誰から聽くともなく、それが吉村の家だと言ふ事を知つて居た。

――この家には、どんな人達が居るのであらう?――三千代は、そのお邸風な門を見上げた。三千代の父は、娘を嚴格に教育すると言ふよりも、偏頗な自分の好みから、どこへも外へ出した事がなかつた。三千代も、ずつと子供のころには、外へ出たいと思つたが、その中に、外へは出られないものと思ふやうになり、次第に外を恐れるやうになつた。そして、見知らぬ人や家に對して、微かな敵意を抱くやうになつた。――三千代は、その家の中に住んでゐる人達が、皆好きでないやうな氣がした。

賑やかな話し聲がして、兄弟らしい二人の中學生が玄關へ降りた。三千代の立つて居るのを見たが、そのまま、彼等の話しを續け乍ら、おもてへ出て行つた。

暫くして、伯母が出て來た。三千代だと解ると、非常に喜んで、離れの方へ連れて行つた。

「今日は誰も居ない。子供達は、今、運動會へ行つた。」

と言つた。

そして、幾度となく臺所の方へ立つて、うまい煮物や菓子を御馳走して呉れた。三千代は、默つて伯母のする事を眺め

るものがないやうなのを不思議に思つた。この家では、何時でも、無駄話しや間喰ひをして好いのだ。子供たちは、好きなところへ遊びに行つて好いのだ。——だがそれは何か間違つた事のやうに考へられた。

「三千代は、早く母親に死に別れて、可哀さうなものだ。」

と、伯母は繰り返して言つた。けれども、三千代は、死んだ母の事を何にも知つては居なかつた。若し、今生きて居て、何處かに居るものとしても、逢ひたいとは思はなかつた。その母が、死なないで、ずつと自分のうちに居たとしても、三千代が今よりもつと、仕合せになれようとは考へられなかつた。三千代は、伯母の言葉をくうに聞き流しながら、それでも、何か、その言葉から響いて來る情を感じた。三千代は、何となくこの伯母が好きになつた。

それは、ずつと子供のときであつた。三千代は、學校から歸るみちで、自分を待ちうけて居て、或時は赤い綿ネルのシャツを、或時は紙に包んだいが餅を呉れた女の事を、思ひ出した。

「うちへ歸つても、誰にも話しては不可ない。このいが餅は、歸るみちで皆喰べてお了ひ。」

さう言つた女が、この伯母であつた事を今、何と言ふ事なく感じた。けれども、三千代は、沈默つて居た。

伯母は、今度、二人で三千代の母の墓へ詣らうと言つた。そして、

「いつか、伯母が一人で、詣いた時、墓には草がぼうぼう生えて居た。誰も、手入れをするものがないと見える。」

と言つた。

三千代は、その言葉で、伯母が三千代の繼母を憎んで居るのを感じて、淋しい氣がした。

軈て、兄弟たちが歸つて來た。もう、運動會が濟んだのであらうか。——三千代は吃驚して立ち上つた。ここに、そんなに長い間居たと言ふ事は恐しかつた。如何して父のところに歸らう!

三千代は、日が落ちて、うす暗くなりかけた窓の障子を悲しさうに見た。

伯母は、兄弟の、兄の方に向いて言つた。

「三千代のうちまで送つてお上げ、三千代のお父さんは矢釜しい人だから、こんなに遲くなつて娘ひとりで歸ると叱られる。」

三千代はふと、この伯母がよく人をばかす狐のやうな氣がした。

（二）

三千代は、從兄の陽一に送られて、裏道を通つてうちへ歸つた。小川に沿ふた小道の傍らの稻は、重く穗を垂れて、歩くたびにざわざわ鳴つた。

みちみち、陽一の親しさうに話しかけるのに對して、三千代は言葉少なに答へた。三千代は、この從兄に氣が許せなかつた。自分とはまるで違つた境遇のうちに、何の屈托もなく育つた彼を恐れ且つ憎んだ。そして、陽一が三千代の學校の美しい友達の噂をよく知つて居て、氣輕に、その噂などをすると、三千代は、自分が輕んじられからかはれて居るのではないかと言ふ氣がした。

椽側に立つてこつちを見て居る父の姿が、裏木戸の竹垣の間から見えた。三千代たちが近づくと、父は椽側を下りてこつちを向いて歩いて來た。そして、木戸のところまで來て、先づ三千代の顏をじつと見、陽一の顏を見た。

「這入れ！」

と言つた。

三千代がさきに這入り、陽一がへんなつくり笑ひをし乍ら續いて這入らうとすると、父は、ぴしり！と音を立てゝ陽一の鼻さきへ木戸を締めた。

三千代はその音を聽いて、思はず眼を閉ぢた。と、いきなり、父はうしろから三千代の肩を突いた。病氣の父の、へんに指さきに許り集つた力を感じて、三千代は、そのまま、藪の草の中へのめつた。

一寸の間、三千代は動かなかつた。恐しい事を思ひ出したのだ。—— それは、ずつと子供のときであつた。今も父の居間になつて居る時計の間の、いろりに燗壜をかけて父は酒を呑んで居た。如何した事か三千代のほかには誰も居なかつた。三千代は、父の側にかしこまつて、酒を注いで居た。と、父が、——三千代は、父のそんな顔を見た事がなかつた。——醜い笑顔をつくつて三千代の顔を覗き乍らさう言つた。

「今日は何でも買つて遣るぞ！三千代の欲しいものは何でも好い、何でも好いから言つて見ろ！」

三千代は、少しづつあとすさりをし乍ら、沈默つて居た。父の樣子を信じる事が出來なかつたのだ。すると、父は、前よりももつと顔を寄せ笑顔をつくつて、何でも買つて遣るぞ、を繰り返した。ふと三千代は、これは何かの洒落かも知れないと思つた。そんな言葉は知らなかつたけれども、何となくそんな氣がした。自分も父と一緒になつて遊ばう、と思つたのだ。と、ほんのぽつちり、父に戯れて見ても好いのかも知れないと言ふ氣がした。

三千代は、嬉しげに笑つた。そして、ふと思ひ附いたままに、

「三千代はリボンが欲しい、赤いリボンが欲しい。」

と言つた。

——が、三千代は間違つて居た。父は面を被り替へた。兩手を擴げて、今にも飛びかかつて來るけはいを示し乍ら、

「何だと、リボンが欲しいと、たわけめ！よくものめ〳〵吐かしたな！」

と言ひ乍ら、あたりを見廻した。おぶひ紐を探して居るのだ。

三千代は聲をあげて泣いた。おぶひ紐は父のすぐ後の柱にかけてある。——

三千代は縛り上げられた。手を二本、足を二本一緒に縛つて、丁度、兎を吊るすやうに、天井から倒さに吊るされた。

三千代の小さい首は兩肩に挾まれて、半分下に垂れた。涙は耳の中へ、筋を作つて流れた。——軈て、三千代は死んだやうになつた。直ぐ下で、父はひとり酒を呑んで居た。

——父は、何でも欲しいものを買つて遣ると言つたとき、自分は何にも欲しいものはない、と即座に答へるやうに三千代を躾けたかつたのであらうか。或はただ、酒の上のいたづらであつたのかも知れない。しかし三千代は、長い間にさう思ふやうになつた。父には、さう言ふ殘虐性があるのだ。父は、自分のつくつた係蹄にかゝつて、弱いものが藻掻いて居るのを、これでもか、これでもか、と上からおつ冠して見たいのだ。——さう、思ふのは間違つて居るだらうか。だが、三千代は、さう言ふ父を怨んでは居なかつた。長い間に幾度か同じ事があつて、ぼんやりと、さう感じて居るだけだつた。

さうだ、今日のもさうだつたのだ、——三千代は、卓の上から這ひ上つた。泣きはしないのに、涙が三千代の、土で汚れた口の中へ流れ込んだ。

さきへ立つて行く父の、ひよろ長い肩さきが、呼吸をするたびに慄へた。見ると父は、下駄を穿いて居なかつた。

三千代は、井戸端へ走つて、父のために水を汲んだ。

（三）

その夜、父は三千代を呼んで、次のやうに言つた。

「お前は、暮れ方になつてあんな若い男と連れ立つて、人通りのない裏道を歩いた。お前は、誰も見るものはないと思つたのか。俺はお前を、少しも疵のない娘に育てたいと思つたが、もう駄目になつた。吉村のうちへは、今日明日の中に人を遣つて話をつけさせるから、お前は、今日一緒に戻つて來たあの男のところへ嫁に行け！」

三千代は、少しも辯解しなかつた。父は初めから、さう言ふ事を目論んで居たのかも知れないと言ふ考へが三千代の頭を掠めたが、彼女のたとへやうもない悲しさは、ほかの凡ての考へを消して了つた。彼女は嫁に行かなくてはならないのだ。こんなに、自分の家を愛し父を愛して居るのに、――三千代は、父の部屋を引き下つて、この思ひかけぬ災をひとり歎き悲しんだ。

三千代はまだ十五であつた。嫁に行くと言ふことはよく解らなかつた。學校よりほかのところへ行つた事のない三千代は、男と女の事もよく知らなかつた。少し前のころ、近くのお邸の娘のお松さまが子供を生んだと言ふ事を、父が輕蔑をこめて話したとき、三千代は自分が或時、學校へ行く道で出會した事のある同いどし位の美しい少年を、父や母や弟たちに對するのとは違つた心で思ひ出す事があるのを指さゝれたやうな氣がして、酷く怕れた。自分も もう少しでお松さまのやうに、子供が生れるところだつたと思つた。ひそかに誰かを思ふとき、ひとりでに子供が生れる、そして、それは非常に不名譽な事だと言ふとりとめもない考へが、大人の想像する事の出來ない神秘さで三千代を怕れさせた。

それほど子供であつた三千代は、今、父から、嫁に行けと言はれるのは罰として餘り酷いと言ふ氣がした。吉村へ行つて思はず遲くなり、その上、父の期待に背いて男と連れ立つて歸つたと言ふ事の罰なら藪の草の中でもつと足蹴にされて片輪になつてもその方がよかつた。貴樣は汚くなつた、だからもつと汚くなれ、さう言はれるのは堪へ難かつた。

――お父さん三千代は違ひます。――と、父の前では何にも言ふ事の出來なかつた三千代はひとりになつて、自分のあたまの中の父に言つた。

（四）

或る夕方、町役場の代書をして居る上田と言ふ老人が來て、三千代は吉村へ連れて行かれる事になつた。

この老人は、三千代の父が信用組合から金を借り入れるときや、地所の賣買をするたびにその書類を書く事を頼んで居て、のちには、父が道樂に飼つて居る小鳥をわけて遣つたりして、その話しに折々來る事があつたし、吉村の末の子を養子にして居る關係もあつたから、この緣談には一番適當な人だつた。それに、前にも言つたやうに、まるで他人でないのに、不自然に緣を絕つて居た兩家の間の懸け橋になるには、この老人のやうな、事を好まない靜かな人が宜かつた。こちらからも顏出しをせず、向ふからも誰も來ないで、ともかくも話しが運んだのも、そのためと言つて宜かつた。

行くまへに、三千代は父に呼ばれた。三千代が父の部屋へ這入つて行つたとき、父は蒲團の上に坐つて、自分の手のうらをじつと見て居た。町の醫者が來るたびに、手のうらを見ては血の色が好いとか惡いとか言ふのを三千代は知つて居たから、今、よその家へ行くときに、父のそんな樣子を見るのは何となく辛かつた。

「お父さん、行つて參ります。」

と言ふと、父は、沈默つて顏を擧げた。そして、暫く沈默つて居たが、軈て、いつもの感激のない鈍い聲で、

「行つて來い。」

と一言言つて、直ぐ行くやうに顎で部屋の外を指した。

三千代は、父から、何か、行く上は再びこの家へ歸つて來るなと言ふ風ないましめを聞く事と思つて居たので、それが、少し調子外れた氣がした。然し、何にも言はなかつた父の氣持はよく解つたやうな氣がした。そして、自分が吉村の家に居る間に、父がふいに死ぬのではあるまいかと言ふ惧れを抱いたのであつた。

三人の弟と母とは、玄關の、帘の吊してある大きな柱の蔭に立つて、三千代の家を出るのを見送つて居た。弟たちは、皆、顎を引いて白眼むやうな何とも言へない眼をして見て居た。子供たちは、生れおちるとから暗い家に育つて、姉にさよならを言ふ習慣さへ持つて居なかつたのだ。

母の顏は、帘の竹柄のために二つに分れて見えたが、母は、前へ出る事が出來ないのだ。三千代は、その眼を感じた。もう、その眼にもお別れなのだ。――この若い母は、三千代が三つのときから來て居たが、三千代に對する愛情、憎しみも良人に隱さなければならなかつたので、長い間の習慣からさうした事を口にする事はなかつた。三千代が父に打たれて居る時も、それを止める事が出來ないで、もの蔭から、三千代、堪忍おしよ堪忍おしよ、と哀願するやうなとても形容する事の出來ない眼をして見るのが常であつた。――その眼なのだ。三千代は、振り返つて、輕く頭を下げた。母が、三千代の吉村へ行く事を仕合せに思つては居ないのを感じて、その母を愛した。

暗い夜であつた。お下げに、瓦斯紡績の羽織を着て、ひとりぼつちで連れられて行く花嫁を、誰も見るものはなかつ

た。上田老人も何とも言ひはしなかつた。

町の中ほどに一つの長い橋があつた。その上まで來て、老人の提げて居る提灯の灯が、橋の下の暗い水にうつつてゆらゆら揺れ乍ら渡つてゆくのを、三千代は不思議なこころで見た。ふと思ひ出したのは、子供のとき父の酒を買ひに夜更けに暗い橋のそばを通つたときの事であつた。そこは狸が出ると言ふので、三千代は何か念じるやうに眼を閉ぢて歩いた。自分は父の言ひつけで行くのだ。もしこの恐しさが破れていよいよ最後だと言ふ時があつたら、父と言ふ存在が自分を捨てはしないだらうと言ふ、微かな意識があつた。三千代は、その意識に導かれて眼を閉ぢて通り過ぎた。――今日、三千代は、この橋を渡つて、どこかへ父のお使ひに行くやうな氣がした。吉村へ行くのは不安であつたが、自分は父の言ひつけで行くのだ。もし、この不安が破れて何か起つたとしても、父が自分を助けて呉れるだらうと言ふ小さいたのみがあつた。

寒い晩であつたが雨戸を外してあかあかと洋燈をつけた吉村の離れが、遠くから見えた。出迎へに出た伯母は、

「當分の間、話しだけと言ふ事にして、この家に馴染むまでは娘の積りで居ても好い。今夜はうちはだけで、ほんのしるしの酒を酌むのだから、」

と言ふ意味の事を言つた。

座敷には膳が列べてあつて、人々は坐つて待つて居た。三千代は言はれたところへ坐つて、言はれた通りに盃をとつた。その時、誰かがふふと笑つた。

酒が廻つて少し席が亂れたとき、上田の妻と言ふ女が立つて踊つた。その女の、齒を黒く染めた顔が面のやうに見え、踊りにつれて足を上げると、皺になつた足袋を穿いてゐるその足が、何か汚いものに見えた。もう一人、四十位の

女が三味線を彈いた。

三千代は、その踊りや三味線が自分のために催されたのだとは思はなかつた。三味線を彈いた女は酷く酒に醉つて、三千代と陽一とを列べて何か猥雜な事を言つた。三千代は、意味は解らないでその調子を感じた。そして腹を立てた。さつき笑つた女はこの女だと思つた。

その女は、三千代の亡くなつた母の一番妹だと言ふ事をあとで知つて、三千代は暗い氣がした。母の生れた家が、何か淫卑な家のやうな氣がして、そんな姉妹を持つ母までうとましかつた。

その夜、三千代は伯母のそばへ寢た。

（五）

あくる朝、眼を醒ますと、臺所の方で何か音がしてゐる。伯母は？伯母は側に寢てゐた。雨戸の節穴は仄かに明るいけれども、まだ夜は明けてゐない事が解つた。

三千代は、起きて好いか如何か、暫く蒲團の中にゐた。それから起きて次の部屋の唐紙を開けた。

そこには誰も居なかつた。三千代はその部屋を初めて見た。厠へ行かうと思つたが、その部屋を通つて行くのか如何ろか解らなかつた。三千代は一寸立つてゐた。

と、何か、呼び鈴の鳴るやうな微かな音がした。子供らしい好奇心から、三千代はもう一つ唐紙を明けた。すると、そこの雨戸の明いたところから、橫手にこの家の表門が半分見え、その閉されたまゝの門に自轉車を立てかけて一人の男がマッチを摺つて居るのが見えた。ゆうべのままの霧が、一粒づつ朝の光りを吸つてゐるとでも云ふやうな、仄明る

さであつたが、妙にはつきり見えた。

軈て、自轉車に赤い灯が點ぜられた。男はその自轉車のハンドルを潜り戸の方へ向けるとき、三千代の方を見た。そして、お前が居るのはさつきから氣づいて居ると言ふやうな落付いた笑顔を向けて、

「もう起きたのか」、

と言つた。

三千代は、その男が、昨夜式のとき居た男である事がわかつた。彼女は誰からも紹介せられなかつた。それだのに、今、この男が伯父である事を感じた。昨夜　式のときこの男と上田老人と二人　さうだつた。妙な式だつた。女許りが居て、男は二人きりだつた。――けれどもこの家に伯父が居ると言ふ事を少しも考へて居なかつた自分を、可笑しいとは思はなかつた。

自轉車を押して、伯父は出て行つた。潜り戸の間から二重廻しの袖が見え、そして消えた。三千代は　障子を締めた。伯父はこんなに早く何處に行くのであらう。――

けれども、三千代は誰にも訊かうとは思はなかつた。父の家に居たとき、何にも訊かないやうにする事を強いられ、今は　それが習慣になつて居た。

寢部屋へ戻ると　伯母が眼を開けたやうに見えた。そして、

「陽一か、」

と言つた。

「いいえ、」

「ああ、三千代か、まだ起きるのは早い。もう一邊ここへお這入り、」
伯母は、掛け蒲團を少し持ち上げた。そしてその序でのやうに首を上げて三千代の向ふを見た。小さい炬燵を距てて、そこには寢床が敷いた儘になつて居た。伯母はひとり言のやうに
「陽一の奴、たうとう戻らなんだ。ゆんべ位うちに居つても宜からうに、」
と言つた。
三千代は、その言葉が自分に關係があるやうに思つた。何となく肩が寒かつた。
寢て、直ぐそばに見る伯母の顏は、義齒を外して居たので、そのせいか優しい優しいお婆さんのやうに見えた。三千代は、夢の中で、これは夢なのだ、眼が覺めたら　こんな事は何もなかつたと言ふ事が分るのだ、と、夢の中の自分にはつきり言ふ事があつた。その氣持を今思ひ出した。けれども、このことはその氣持とはまるで逆つた。吉村へ來て、今伯母の寢て居ると言ふ事は夢ではないのだ。——
伯母は靜かな聲で話し出した。
「ずつと昔、三千代のお母さんが生きて居たころ、伯母は陽一を連れて、よく三千代のうちへ遊びに行つた。或るとき、裏の椽側で陽一におしつこをさせて居ると、そこへ三千代のお父さんが來た。そして、陽一のおちんちんを指のさきで揶揄ひ乍ら、陽一は大きくなつたらうちのお婿じやと言つた。そのときから、三千代のお父さんは勿論伯母は、陽一と三千代が大きくなつたら、二人を夫婦にする事に決めて居た。伯母はそれから、三千代の今のお母さんが來たから、惡いと思つたから三千代のうちへ行かなくなつたが、あの時のきめは忘れはしなかつた。それで、ときどき三千代を見たいと思つて、學校がひける時分にいいが餅やの五作かたの腰掛けにかけて待つて居た。——今、三千代が伯母のう

ち へ來たのを知つたなら、墓の下に居る三千代のお母さんはどんなに喜ぶか知れぬ。」
伯母の眼に或る感動が現れた。それは、三千代の胸に響くやうに見えた。が、三千代の眼に浮んで來たのは「草の下に居る母」の幻像ではなくて、椽側にしやがんで、おしつこをして居る子供をあやして居る父の姿であつた。それは非常に珍しかつた。
――では、父が自分を吉村へ寄越したのは、陽一と一緒に歩いたと言ふ訳ではないのだ。それだから、父は、先づ吉村へ遊びに來させたのだ。父の病氣が治らないと言ふ事を、誰となく信じて居る今、父は、死ぬまへに三千代を片附けて置きたいと思つたのだ。さうだ。父は、心にあつて、それを言葉に現せない許りか、憎惡をもつて遣るやうにさへ見える、そんな性質なのだ。――だが、ほんたうにさうだらうか、それにしても伯母の話しは餘りお伽噺しのやうではないか。矢つ張り罰なのだ。自分は、この家に來たく思つては居なかつたのだから、――

（六）

朝食のとき、陽一もその弟の晃も居た。それから上田の妻と一緒にそこの養子に行つて居ると云ふ末息子の芳雄も來て居て、賑やかだつた。
三人の大きな子供たちは、母を圍んで友達に言ふやう冗談を言ひ、何かせがんでゐた。中でも、芳雄は、上田の妻のところへ行つて、
「よう、お母さん、」
と言つて何か甘へ、又伯母のところへ戻つて、同じやうに甘へた。大きな食卓の上には昨夜のお膳のお下りが列べ

こあつたが、芳雄が甘へるたびに、二人のお母さんは自分の箸に御馳走を摘んで芳雄の皿へ入れて遣つた。皆、そのたびに笑つた。

伯母は、この子はおとん坊（末子）でいつまでも甘へて不可ない、と言つた。そして、上田の妻の方へ向いて、

「去年おうちへ行くまで、わしと寢てわしの乳首をねぶつてゐたのだからのう。」

芳雄はいいいいと言ふやうに頤を突き出した。

この、團欒は三千代には初めての經驗であつた。三千代は、皆が笑ふとき自分の頰が遲ればせに笑ひ、自分の聲だけが作り笑ひのやうに響くのを感じた。三千代の幼い弟でも、こんな風に甘へ、また甘やかされる事はなかつた。さうだ三千代は自分の心のどこかで、世界中の子供が、自分と同じやうな冷たさの中で育つ事を要求して居るのだ。――三千代は自分が僻んでゐるのが悲しかつた。それだのに、自分の笑ひ聲は自分を卑屈にするやうに思はれた。

陽一と晃とは、何か彼等だけの話しをして居る事があつた。三千代の耳に、陽一の聲がへんにはつきり聽えた。

伯母は、仕様のない人たちだ、と言ふ風に二人の方を見た。そして、誰にともなく、

「この人たちは、昨夜も歸つて來なかつたのですよ。」

と言つた。

上田の妻は、おやおや、と言ふやうに大きな眼をして見せた。

三千代は、伯母のその調子が、表面何氣なく裝つて心ではそんな子供たちを非難して居るとは思へなかつた。反つて、伯母のその言葉の中に輕い賞讃の感じを汲んだ。

この空氣は三千代を壓倒した。三千代は孤獨を感じた。陽一と晃とが話しあつて居る事柄は何か解らなかつたが、三

千代は、それが解ると言ふ風に、ときどき彼等の方へ笑顏を向けた。それは、三千代の悲しいお世辭であり、抗議であつた。

三千代は、自分の許嫁をほんたうの意味では愛して居なかつた。彼の方が三つ年上なだけであつたが、二人の成長の仕方がしつくりして居なかつた。三千代の眼には、彼が大人に見えた。大人、——子供の知らない世界を持つて居る人に見え過ぎた。三千代は自分の運命を信じそれに頼るために、この許嫁を愛して居ると思つて居るだけであつた。

二人は昨夜から、まだ一度も口を利かなかつた。陽一は三千代との關係を可笑しがり迷惑がつて居る風に見えた。こないだ、父の家まで送つて呉れたときの、氣紛れらしい親しさはなかつた。彼は三千代の眼を見ないために、故意に眼を反らす事があつた。三千代は陽一が自分に對する前のやうな感じのほかに、少しも自分を好いては居ない事を知つた。だが、それは、はつきりしたかたちを取つて悲しみになりはしなかつた。三千代は父の事母の事、弟たちの事、それからこの新らしい家の事でこころが一杯だつた。

朝飯が濟むと、陽一たちは揃つて學校へ出掛けた。三千代も少し遲れて出た。

この家から行く途中は、三千代に初めての道であつた。この國の古い名所になつて居るぎざぎざのある長い眼鏡橋を渡り切つて、左右に分れて居る道に來たとき、三千代はふいに、左の方へ曲る道の川ぶちの柳の木のところで、雨の降つて居ないのにすげ笠をした人が釣りをして居るのを見たやうな氣がした。が、よく見ると、そこには誰れも居なかつた。ああ、あれは昨日だつた、三千代は反對の道へ曲り乍らさう思つた。昨日は三千代はその柳の下を通つて學校へ來たのだつた。そこには、よく同じ人が釣りをして居たのだから、——

が、この間違ひは三千代を淚ぐましくさせた。三千代は自分を不幸に思つた。そして、その感じが不思議に三千代を

慰めた。

(七)

午後、學校から歸つて裏口へ廻ると、晃が、座敷に踏み臺を置いてそれに乘つて、棚の上で何か探しものをして居るのが見えた。

足音を聽いて三千代の方を振り返つたその頰が、五厘だまを頰ばつたくらゐぽこんと膨れて、手にも一杯つかんで居た。菓子をとつて居る、——三千代はまごまごした。そして直ぐに、好いのよと言ふやうな、自分もいたづら仲間へ這入つたやうな笑ひ顏をして見せようと思つた。

が、そのとき、晃はその大きな眼に敵意をこめて三千代を見た。三千代は狼狽てて眼を反らした。そして、そんな笑ひ方をしようとした自分を誰れにも氣附かれないやうに、すぽつと縮めたい氣がした。晃とはまだ知り合にもなつて居ない。そして、晃は自分を好いて居ない。——

三千代はこの前、伯母から晃の話しを聽いた。晃は生れたとき死ぬと思はれたほど弱くて、ほかの子供が歩くころになつて坐るだけがやつとだつた。からだが細く、へんに頭だけが大きく、そのために、坐つて居ても自分で自分の頭の重さに參つて居るやうに、斯う、と伯母はその格好をして、——少し前こごみに頭を据ゑて、一つところを見て居た。泣きもしない代り、むつとして片言も口を利かなかつた。——その、へんに大きな頭を前こごみに据ゑた格好が、三千代の眼に浮んだ。それは、一寸滑稽な然し人をけなすやうな格好だつた。色の蒼白い、大きな眼をした今の晃にもどこかその感じがあつた。——

だが、今、兄の眼に現れたものは、自分の悪いことを見つかつたと言ふより、もう一つ積極的な嫌悪だと思へた。三千代は、その敵意が解らなかつた。ただそれだけの事なのに、三千代は、椽側を上つて兄の立つて居る踏み段のうしろを通るとき、何か自分の中の臓腑が抜かれて行くやうな苦痛を感じた。それは、今朝感じた孤獨とは違ふ。三千代はへんに淋しかつた。

そこから、伯母に逢ふために離れへ行かうとすると、障子が明いて居て、行李から着物か何か出してゐる伯母が見えた。初め、何氣なくその方へ行かうとして、伯母の手にある着物が自分のだと解ると、三千代はどきつとして立ち留つた。伯母は耳が遠かつた。そして、三千代の立つて居る側はうす暗いのに、離れの障子一杯に日が射して居たから、伯母の方からは三千代が見えなかつた。三千代は一寸　行かうか如何しやうかと迷つた。

三千代はそのとき、今の兄の眼を思ひ出した。ふいに、伯母もそれと同じ眼をするやうな氣がした。三千代はそつと引き返した。だが　何故伯母は自分の行李を開けて見てゐるのだらう。――

三千代は、その行李の中が恥しかつた。袂のついた瓦斯の羽織が一枚あるぎりで　あとは筒袖の着古しの袷が二三枚と、洗濯した足袋、ネルの腰巻などが入つてゐた。三千代はずつと子供のときから、父の偏執な教育のために、必要以上に酷いなりをさせられた。冬になつても態ざと足袋を穿かせず、履物は藁草履に決つてゐた。學校へ行く途中、町の人達は三千代を見た。そして、眼がほや露に出して、可哀さうがつた。三千代は、その人達の様子から憐愍と一緒に輕蔑を感じた。が、長い間の習慣から三千代はその屈辱に馴れた。そんなとき　自分だけは違ふのだと思つた。何が違ふのか解からずにたださう思つた。――が、今感じた恥はそれとは全で違つた。三千代は、廊下を行つたり來たりした。

そして思ひ切つて離れの方へ歩き出した。

と、伯母がはつきりこつちを見た。その様子には少しも狼狽したところはなかつた。伯母の膝には、はぎ合せで拵へた襦袢の袖が擴げられて居た。

「三千代、三千代はこの行李の中にあるだけしか着物を持つて居ないのか、」

と訊いた。言葉よりもおだやかな調子だつた。

伯母は、自分に內證で自分の行李を探したのではないのだ、三千代はさう感じた。伯母のその調子が嬉しかつた。

「袂の長い、緋縮緬の下着やら、白綸子の重ねやらなこの紋附羽織やらはなかつたのか、」

伯母は重ねて訊いた。

伯母は何の事を言ふのだらう、──三千代は大きく頭を振つた。

「それでは、お前のうちの箪笥の中にはあるだらう、」

三千代は、そんなものは見た事がない、と言つた。

「そんな筈はない。お前の死んだお母さんは、このうちを親許にしてお嫁に行つたのだ、伯母が支度を手傳つて遣つた。そのとき、確かにその品物があつた。お前のお母さんは、死ぬとき、あの着物をみなお前に遣つて吳れと言つた。お前のうちにない筈がない。若しないなら、それはあのおていさんが着破つて了ふたのじや、」

と亢奮して言つた。おていさんと言ふのは三千代の今の母の名であつた。伯母は、お前のお母さんと言はずに、特に力を入れて、おていさんと言つた。

三千代は、そんな着物は少しも欲しくなかつた。若し、伯母の言ふ事がほんたうで自分のうちにそんな着物があつたとしても、そして、今はそれがなくなつて居るとしても、それは決して今の母のせいではない。父が放蕩のたしにし

のだ。——然し三千代は、それを伯母に言ひたくなかつた。

欠斎して居る伯母の前にじつと坐つて居ると、三千代は、ふいに、その着物を自分はちやんと知つて居たやうな氣がした。そして、その赤い白い美しい着物を、或日自分は何か鋭利な刃物でひき裂いたやうな氣がした。それだのに、自分は嘘を言つて居る。——ふと、三千代は或ることを思ひ浮んだのだ。

酒に醉つて氣狂ひのやうになつた父が、何か大聲に叫び乍ら、美しい女の着物を引き摺り出して、べりべり力まかせに引き裂いて居るのだ。母は簞笥の前に泣きくづれて、それを止めようともしない。——ああ、あれだ、あのとき父がひき裂いたのだ、父は放蕩のたいにしたのではなかつた。騷ぎが靜まつて、父は不思議な酒の作用に依つて、子供のやうにひーいと聲をあげて泣いて居る。母は、きれぎれになつた着物を掻き合せて居る、——三千代は、その母が死んだ自分の母か今の母か分らずに、朧氣な記憶を辿つた。それは靜かな恐しい空氣だつた。——

（八）

伯母は今しがた用足しに行き、子供たちは雜嚢を座敷へ放り出して、どこかへ遊びに行つた。三千代はひとり、部屋の中を歩いた。

家は廣く綺麗で氣持が宜かつた。三千代は好奇心をもつて、部屋から部屋へ歩いた。唐紙をそうつと開ける。——今まで見た事もない誰か、自分の好きな誰かと隱れん坊をして居るやうな、微かな嬉しさが湧いた。

素足に感じる疊の冷たさ、黑く高い天上、何も彼も宜かつた。陽一の勉强机が置いてある小さい部屋に這入つたとき、三千代は、ほう、と言つて佇んだ。そこには、雜誌や小說本を立てかけた書架があつた。三千代は、それを片附け

るやうにして一冊づつ手に取つて見た。

三千代のこゝろは樂しかつた。何と言ふ家だらう。この家には何でもある。そして、誰が見ても喰べても好いやうに、ついそこに放りぱなしにしてある。けれども、この家の人は、誰も讀みたがりもしないし喰べたがりもしないやうに思へる。――面白い事が澤山あるやうな家、それでどことなくきまりの附いてゐない家、――三千代は、足が踏み臺に上つて菓子を取つて居た棚を思ひ出した。あそこには何時でも菓子がある。そして、あの人は好きなときそれを取つても好かつたのだ。

三千代が、佛壇のある暗い部屋を通りかかつたとき、その暗い中で、金ぴかの半びらきになつたおずしが、ゆらゆらとはためいた。そんな筈がないと思ひ乍ら、へんな氣味惡さを伴はない、單純に、そばへ寄つて見たい氣だけした。――三千代にはそんな感じに親みがあつた。動かないものが動き、見えないものが見え、聽えないものが聽える。その感じは、ずつと孤獨の中に居た三千代にとつて慰めであつた。――

佛壇は立派なものだつた。

金襴の打敷、眞鍮の佛具、金の造り花、三千代は飽かず眺めた。よその佛さま、大きな小さい澤山の位牌、どこに居るか分らないこの家の祖先。

一しんに見て居る間に、三千代は一番奥の黑い顏をした眼の大きな佛像が、父によく似て居る、と思つた。が、こゝに片手を上向けにして坐つて居る父は、少しも三千代を叱つては居ない。

「お父さん、お菓子を一つ下さい。」

三千代は父の顏を見て言つた。三千代には その佛像が少し笑つたやうに見えた。

三千代は、お供への白い饅頭を一つつまんで口へ入れた。そして、指さきについた白い粉を父の顔を見乍ら、自分着物へなすつて拭いた。

明るい氣持だつた。三千代は椽側に出て、父の家でずつと子供のとき、誰も居ない隙にしたやうに、椽側の柱に兩手でつかまつてぐいと、うしろ側にからだを反らして空を見た。一寸あたまがくら〳〵した。白い動かない雲の間を唯つた一羽だけ渡つて行く鳥が、倒さに、這つて行くやうに見えた。

かあらす、からす、

三千代は、心の中で節をつけた。と、そこは父の家の椽側からと同じに見えた。自分の眉毛のぼんやり向ふに、向ふ堤の高い石垣が見え、肴賣りの女達が堤を越えて歸つて行くのが見える。三千代の空想は、女達の足に隨いて、見知らない村へ行く。その村には、三千代の知らないおばあさんがひとりで三千代を待つて居る。——

ほんとうに、顔をうしろ外に反らして見ると、空は土のやうに土は空のやうに見えた。三千代は、頭の上に續いて青い蕎畑を見た。そして誰か白い手拭を冠つた人が、その蕎畑の中に倒さにつゝ下つたやうに立つて居るのを見た。三千代は赧くなつて、急いで椽側へ戻つた。

こつちへ向いて笑つてゐたのは前の百姓やの小母さんだつた。

（九）

夕飯が濟んで皆が雑談して居ると、おもてで鈴の音がした。三千代は直ぐに、伯父が歸つて來たと思つた。自轉車を物置の方へ曳いて行くけはいがした。三千代は、こんなとき玄關へ行くのが行かないのかと皆の方を見たが、

誰も起ちさうにはなかつた。三千代も起たなかつた。

そこへ、

「やれ、やれ、―

と言ひ乍ら伯父が這入つて來た。

「戸棚の中にたこの煮たのが這入つて居ます。」

と伯母が言つた。「それからお酒は、燗壜のだけで今夜は我慢して下さい。つい、買つて置くのを忘れた。」

伯父は、よしよしと言ふやうな顔をして伯母の方を見た。その序でに、ちらりと三千代の顔を見た。そして、四角い辨當包みをそこへ置くと、子供がするやうに肩を一方にゆすつて着て居た二重廻しを脱いだ。

すると、思ひがけない着物を着た伯父が現れた。金ボタンのついた洋服の、伯父の體どほりに背中が膨らみ足が曲り、丁度、伯父のとしほどに古びたのを氣安げに着て居た。伯父は看守なのだ。三千代は、同じ服を着て居た人を見知つて居た。この町の二里位はづれに、その少年監獄があつた。――

伯母は縫物を持つて奥の居間へ立つて行き、子供たちもマントを冠つておもてへ出た。三千代は誰からも言葉をかけられず、ぼんやりと皆の起つて行くのを見て、自分ひとり起ちそびれた。

臺所の次の板の間で、伯父はひとりで夕飯を喰べて居た。燗壜を五徳にかける音、食器の觸れ合ふ音、酒を啜る音がへんなひろがりをもつて、三千代のところまで聞えた。三千代は、伯父が酒を呑んで了つたらこゝへ來るだらうと思ひ、何となくそれを待つやうな氣になつた。

三千代は、ながい間ものごころ附いてずつと、誰とも口を利かなかつたやうな氣がした。父の家の空氣は、誰とも交

渉なく生きる事を强いた。父の居ないとき、たまに、若い母と小さい弟たちと庭へ莚を敷いて、ちんころが轉がり合ふやうに體を摺りつけて遊ぶ事があつたが、いつ父が現れるか、その心配のために笑聲を出しはしなかつた。一番幼い弟まで、口よりは眼がほでものを言ふ事を知つて居た。父と口を利き、父から口を利かれるその二つの場合の、へんな公正?さをもつた聲だけが、ときどき家の中をつつ拔けて聞えた。——

今、三千代は、その强いられた沈默からひとりでに解放されるやうな氣が、ふいにした。このうちのせいか、さうではなかつた。三千代は柔いだ氣持で、いま臺所の板の間から聞えて來るもの音と話しを初めた。

——伯父さんはお酒が好きなの、——

——ああ、好きだよ。——

——伯父さんは毎朝あんなに暗いうちからお出かけになるの、——

——このごろは夜の明けるのが遲いのだよ。——

——伯父さんも、徵役人(囚人のこと)を綱でひつぱつてお歩きになる事があるの、——

その返事は、はつきりしなかつた。

軈て、伯父の起つてこつちへ來るけはひがした。三千代は、火鉢のそばの座蒲團を直した。しかし、伯父はそこには座らないで、部屋の隅の廣い板の臺の前に座つた。三千代は、伯父が自分に對してはにかんでゐるやうな氣がした　自分も伯父と同じ大人ででもあるやうな、この考が三千代には少しも可笑しくなかつた　それほど伯父の座り方が何か氣を兼ねたやうなそはそはした風に見えた。

伯父は顔を擧げて何か探すやうに天井を見た。そして、三千代の方へ向いて、

「ランプを此の上へ吊したいが、」

と言つた。

三千代は直ぐ起つて、自分の前にあつたランプを持つて行つた。伯父の額が酒のせいで拔け上つて紅く見えた。爐の上のかぶせをとると、中はミシンだつた。伯父は馴れた手付きで一寸手車を廻して見た。はにかんで、こんな隅へ座つたのではなかつたのだ。

伯父は起つて、さつき脱ぎ棄てた二重廻しを持つて來た。そして、その裾を針の下にあてがつて、ギチギチ縫ひ初めた。

三千代は輕い驚きを持つて伯父を見た。伯父もそれを感じたやうであつた。彼のおどけた丸顔に笑ひが浮かんだ。如何だい、伯父さんが遣ると可笑しいかい、と言ふやうに、だが、伯父の様子がその仕事に似つくはしくなり、その巧みさに疑ひがなくなればなくなるほど三千代は不異議な氣がして來た。そして、今しがたの續きのやうに、心の中で話かけた。

——伯父さん、そのミシンはどこから持つていらつしたのですか。——

その話しが聞えたやうに、伯父は手を止めて言つた。

「これは布哇から持つて戻つたのぢや、三千代は、こんな機械を見た事があるか。」

二重廻しの裏はすつかり綴れた。伯父は、一寸ランプのところへ擴げて出來榮えを見た。糸で吊した古い眼鏡が伯父の低い鼻の上で少し動いた。

三千代は不思議な感動をもつて、その平和な顔を見た。そして、

「學校で見ました。學校には二臺あります。」

と答へた。

ふと、赤いシャツの記憶が蘇つた。伯母が呉れたあのシャツは、この伯父が縫つたのだと言ふ氣がした。

伯父は機械にかぶせをして、煙草を煙管に詰め乍ら往時の話しをした。若いとき、伯母と一緒に錢儲けに渡つて、伯父はこのミシンと一緒に明るい提げランプを買つて來たのだ。そして、澤山の金を持つて歸つた。田を買ひ畑を買つた。裏に家作も建てた。

「だが、今はすつかりなくなして了つた。伯母は餘り、子供に學問をさせ過ぎる。」

伯父は呟くやうに言つた。そして、東京の名高い女學校へ行つて居ると言ふ長女の話しをした。

（十）

その夜から、陽一の寢床は三千代たちの部屋になかつた。三千代は同じ家に居乍ら、陽一を餘り見たことがなかつた。それは、不自然なやうに見えて三千代には自然な關係だつた。陽一の事は三千代の考への一部分をしめるだけであつたから。

人から愛された事のない三千代は、愛されたい欲望のために何かすると言ふ考へを持つて居なかつた。誰とも通りすがりのままの交渉で辛いとは思はず、又、それより深入りしようとは考へなかつた。この家へ來て幾日か經つても、伯母を初め陽一是などに對するよそ〳〵しい感情が少しも辛くなかつた。三千代には、不斷に、或程度のよそ〳〵しさを欲しがるやうなところがあり、その空氣の中に許り親しみが持てたと言つて宜かつた。

ただ一つ、伯母に對する感情だけ、三千代に新しい經驗であつた。この感情は、それからの長い間三千代の心で動

た。――

或る夕方、三千代は伯母と一緒に風呂場へ入つた。

伯母が裸になつて流し場へ下りて行つたとき、三千代は伯母と一緒に入つたことを悔いた。伯母の體は白く肥つて、若い女のやうに美しかつた。

「お這入り、」

と伯母が言つた。

三千代には何か豫感があつた。さう言ふ伯母の聲を、三千代の可厭な事を強いて居るやうに聞いた。

「お這入り、」

と伯母が又言つた。

三千代は着物を脱いだ。豆ランプの光りと湯氣の中から伯母の首から上が、晒し首のやうな冷たさを運んでこつちを見てゐるのが三千代に分つた。三千代は痩せて色が黑かつた。

簀の子の上を伯母の方へ近づいて行くとき、三千代は父のことを思ひ出した。

「かまきり！」

と父が叫んだ。

かまきりと言ふのは、痩せて色の黑い三千代の綽名であつた。父は怒りを含んでその綽名を呼んだ。三千代は父の怒りの中に微笑な愛情を吸んだ。さうだ、かまきりでも宜かつたのだ。それだのに、今は、そのかまきりが恥しく腹立しか

つた。

三千代は痩せた腕を伸して、石鹸をこすり乍ら、死んだ母もこの伯母と同じやうに白く肥つて居たのだらう。そして、自分が痩せて黒いのは父の遺傳なのだと考へた。

伯母は三千代の後へ廻つて背中を流して呉れた。そして、肩から首をこするとき、うゝと言ふやうな不明瞭な聲を擧げて、

「この耳のうしろのこけ（垢）はどうじや！」

と無遠慮な調子で言つた。そして、力まかせにごしごしとこすつた。

三千代は、そこがぴりぴりと痛むのをじつと我慢した。痛い、と言ふのは伯母の意地惡るな氣持を自分が氣いたやうに思はれさうで、それが可厭だつた。

暫くして伯母は又、うゝと言ふやうな不明瞭な聲を擧げた。そして、三千代の肩のところで何か透かして見るやうな格好をして、

「この頭の中のこけは如何じや、まるで、痂ぶたのやうになつて居るぞ！」

と言つた。

三千代は、じつとして伯母のその聲を堪えた。心の中で、伯母はまだ何か言ふぞ！と言ふ氣がした。三千代がさう思ふと直ぐ、三千代の動かない後姿に唆しかけられたやうに、伯母は又同じ調子で續けた。

「母親のないものは哀れなものじや。誰れも首や頭の中のこけをとつて呉れるものがないと見える。」

三千代はその聲を聴き乍ら、それを、自分が言はせたと言ふ氣がした。伯母に、三千代を憐れんで居るのではなく、

三千代の今の母を憎んで居るのだ。さう言ふ考へが言ひようのない明瞭さで三千代の心を衝いた。

三千代は、伯母の方へ瘦せた背中を向け乍ら、伯母の、母に對する憎くみをそのまま伯母の心へはね返した。

三千代はながい間、憎惡のあとに來る淋しさに責められた。そして、さつきのやうな自分を憎んだ。自分は、邪魔になる混り物のやうにこの家の中に居るのだと思つた。

體を拭いて着物を着ようとしたとき、伯母は向ふむきのまま、

「もう出るのか、」

と言つた。

伯母はしやがんで義齒を洗つて居るところだつた。唇が優しくすぼんで、まるで違つた人のやうな笑顔が、鏡の中から三千代を見た。

(十一)

その夜、伯父は歸つて來なかつた。

夕方になると決まつて歸つて來る伯父なのに、夜更けに歸つて來ない伯父を、誰も氣にせず、忘れて居るやうに見えた。三千代もその中に包まれた。そして、伯父の事を忘れて居た。

暁、電報で起された。

椽側に出て見ると、霙のやうな月夜だつた。犬を連れて電報配達夫が、前の葱畑に續いた白い小さい路を歸つて行くのがいつまでも見えた。犬は少しも鳴かなかつた。

伯母は、ひる間伯母が機嫌の好いときに上げるお經文のやうに、節を附けて長い電文を讀んだ。——伯父は囚人を護送する途中、福山驛で怪我をした。そして、今驛前の病院に居るから誰れか來い、とあつた。

伯母は大きな聲で晃を呼んだ。

離れの二階の窓から灯が動いて、臺ランプを持つた晃が出て來た。

「晃、お父さんが怪我をした、陽一を直ぐ呼んで來い、陽一は五作かたに居るぞ！」

「解つて居る、」

晃は無愛想に答へた。そして、大きな下駄を穿いて、電報配達夫と同じ道を走つて行つた。

五作かたに居る？そして、伯母も晃もその事を知つて居る。——その瞬間、三千代のあたまを五作かたの美しい娘の姿が掠めた。然し、想像は伸びなかつた。伯父の安否が、直ぐ三千代の心を占めた。

囚人が伯父の首へ鎖を卷きつけて居る有樣が思ひ浮んだ。伯父は晝のやうな月夜の鐵道線路に橫はり、囚人は靑い着物のまゝ黍畑の中に潛つた。汽車は幾度か行きすぎた。——だが、伯父は病院へ這入つて居るのだ。そして、誰かが、三千代が來るのを待つて居るのだ。——

晃が、陽一と一緒に戻つて來た。三千代は陽一の顏を見なかつた。

丁度、十二時二十六分の上りがあつた。皆、陽一をせき立てて支度をさせた。伯母は、驛まで行く自轉車を借りるために隣りの家へ行つた。

皆の騷ぎ方が伯父の存在を不似合にはつきりさせた。陽一が出て行つて、一寸ひつそりしたとき、三千代はそれを忍つて伯父のために微かな喜びを感じた。

陽一と摺れ違ひに、監獄から使ひが來た。伯父の怪我は大した事はなかつた。囚人が疾走中の汽車から逃げ出さうとしたので、續いて飛び下りようとしたとき、一寸足を挫いたのだと言つた。そして、この使ひに來た目の大きな便利屋の男は、歸りがけに、囚人がうまく逃げたと言ふ事をつけ加へるのを忘れなかつた。伯母の眉が一寸動いた。

三千代はあとで、囚人に逃げられたのは役の落度になると言ふ事を聽かされた。

「間抜けなはなしじや、」

と伯母は本氣で言つた。そして、雨戸を立てて寢た。三千代は長い間眠れなかつた。

翌日、福山から陽一の出した手紙が伯母の許へ屆いた。伯母は、

「陽一の奴、おかげで場所（繁華な土地）へ行けて、好い氣になつて遊んで居る事だらう。」

と言つた。

伯父の容體がごく輕いのだらうと三千代は考へた。

十二

明日は舊の十月二十日で、二十日惠比須と言ふえびす祭の日なので、兄は夕方から店飾りや山車を見に行き、伯母は上田の妻を誘つて祭の買ひ物に出掛けた。

三千代は、伯母の姿が門の外へ消えるのを待つて、離れの二階へ引き返した。すると、晝間掃除をしにその部屋へ來たとき眼を付けて置いた陽一の日記帳が、その時は本箱の上にあつて、今は机の雜誌の下にあつた。兄が隱したのだらうか、それとも何か直すとき何氣なくそこへ置いたのだらうか。

然し、三千代は余りそれを氣にとめなかつた。何よりも好奇心があつた。自分でたゞの好奇心だと思つて居た心が、それを早く讀みたがつた。

陽一は福山へ行くとき、それを隱さなかつた。隱すひまがなかつた。或ひは、その事に考へつかなかつたほど、それを重く考へて居なかつた。だから見ても好い、と言ふ氣がした。

讀んで行くうち、三千代は自分の思ひがけない氣持がそれに書いてある文字によつて、引き摺り出されて行くのを感じた。書いてある事は少しも意外ではなく、一字一句三千代の想像の通りであるのに、それに依つて引き摺り出される自分の氣持は、堪へられない辛さであつた。三千代は、そんな氣持が自分自身に氣付かれずに隱れて居た事を悲しんだ。

三千代は自分の自覺して居るよりも、陽一に嫉妬して居る自分を感じた。三千代の心は、許嫁と言ふ意味も恐らく夫婦と言ふ事柄をも充分に知り、それに就いて夢を持つてゐた。三千代は、このごろ自分が、陽一の外から歸つて來る足音を待つて居たり、それから學校へ行く途中歸る途中に、何れも同じ服裝をした中學生の中から、陽一の靴音だけを聽き分けようとしたり、そして、或る女學生雜誌の呼びものになつて居る或る女の書いた戀愛小說の會話をそのまま、自分と陽一とが交はす時の事を想像したりして居た自分自身を、今、はつとして感じ、憐れな見せものゝやうに自分で指さし眺めた。

この日記に書いてある事は何と云ふ事だ。自分の理性はこれを讀まない前から知つて居て、心はそれを知ることを避けた。そして、その反對を信じたがつた。この日記を見て、こんな辛い氣持が引き出される自分を惧れてゐたのだ。自分はこゝへ來てから一度でも醜い自分の顏や貧しい肩付きやを考へた事があつたどらうか。自分は鏡を見るさへ可厭がつてゐたのに、その可厭がつてゐる事を忘れたがり、態てすつかり忘れて了つたのであらうか。

あの、小學校の卒業式のとき、一番仲の宜かつた友達と二人で一番前の列の毛布の前に座り、それも氣取つて七分程向ひ合はせになつて手を握り合つて居るあの寫眞を自分は忘れたのか。色が眞つ黒で眼が落ち込んで居るために、おでこの額が酷く光つて尚おでこに見える。そして、自分の斜め七分に向いた方へ眞向に日がさして居たのだ。自分はあの寫眞からその友達と離れた。

その友達は自分よりずつと美しく、級の中でも一番美しかつた。そのために自分はその友達を好いてゐたのだ。その美しい友達は斜め七分に蔭に向いて、その陰影の深い顔をもつと餘情のある好い感じに寫して、三千代の醜さを際立たせた。そして、その友達と離れたのちは、自分より美しい友達を持つたことのない自分ではないか。

自分はそんなことをすつかり忘れて居はしなかつた。この間、伯母と風呂に入つたときあんなに腹が立つたのは、自分が醜くかつたからだ。それを伯母が、如何して氣附かないで居ると言ふ事があらう。

伯母は、自分がずつと子供のときの、今よりもつと痩せて顔色が惡かつたときの自分を知つて居るのに、そんな自分を如何して、唯つた一つのお伽噺のやうな昔の約束に依つて、陽一の嫁にする氣になつたのであらうか。

伯母は醜い自分をからかつたのであらうか。自分は、何にも知らない父を恨まず、伯母だけを恨む。そして、あの風呂場で感じた憎しみが今もつとはつきりしたかたちをとつて、伯母へ向ふのを感じる。

伯母はからかつたのではなく、陽一の氣紛れな遊びを、せめて三千代が同じ家に居ると言ふ事のために、少しでも制へようとしたのであらう。若しさうとすれば、何と言ふ愚かな智惠のない話しだ。その證據に、伯母は三日位で自分の企てた試みに倦んで了ひ、今では最早陽一と一緒になつて、陽一が夜泊りの相手の娘の家まで知つて居る。

そんなとき、自分はこの家のどこに坐つて居たら好いのか。今は伯父も居ない。自分にはもう十日も前から、この家

のどこにも坐つてるところはなかつたのだ。

自分は自分の邪魔なことを少しも知らなかつた。今自分が感じたことを、前から知つて居るものがあつたら、その者の眼から自分はどんなに見えた事であらう。陽一はこの日記の中で自分が邪魔な事をはつきり言つて居る。勿論十幾日かの間、口を利く事を避けた事が、この日記の通りのことを何よりも明らかに示して居たのだ。そして、晃も伯母も三千代、もう行つても好いころじやあないのか、と言はないだけだつたのだ。

三千代は恥と悲しみのために頁をめくる手が慄へた。然し、涙は三千代の傷いた心を慰めた。三千代は残忍な氣持で、次の頁により多い恥と悲しみとを見出すことを待つた。

長い間、三千代は孤獨と恥の中に自分の生れた暗い家を思つた。

軈て、玄關の開く音がした。三千代は日記を雜誌の下に隱し、台ランプを提げて廊下へ出た。

伯母は、

「寒む………」

と言ひ乍ら、後向きになつて格子の鍵穴に釘をさした。

晃は？　五作かいたか？——

三千代は伯母が持つて歸つたえびす大黒の菓子の笹に吊したのを、沈默つてミシン台の板の割目に立てた。

十三

祭の日になつた。

三千代は朝起きたとき、その日が新の十一月廿八日で自分の誕生日に當つて居ると言ふ事を何と言ふ事なく思ひ出した。そして、指を折り曲げて、自分がこの家へ來た日から十八日になる事を數へた。

さうした事は三千代の心を何となく輕くした。誕生日、十八日、三千代は、何かきりを附けたやうな氣がした。

朝から、上田の妻が手傳ひに來た。近在の親類緣者が來ると言ふので、皆忙しさうだつた。實際、ひるすぎになる子供を連れた女客が四組五組集つて來た。その中には男は居なかつた。

もつと後から來るのかも知れなかつたが、三千代は何となく、自分がこの家へ來た夜の宴會の事を思ひ出した。そして、今夜も黑く染めた齒を出して笑ふ上田の妻が立つて踊るだらうと思つた。三千代はその宴會に居たくない氣がした。皆、同じに齒を染めた（三千代にはそんな氣がした。）女達が、三千代を大きな聲で笑ひさうな氣がした。明らさまに笑ふのではなく何かに事よせて三千代の氣附かない事で笑ひさうな氣がした。

夕方近くなつて座敷に膳が列んだとき、三千代は女客の出這入りに紛れて、ひとり町の方へ出た。大變な人出だつた。屋根から上はまだ日が殘つて居るのに、祭の提灯と店のランプのために町は早く夜が來た。光りは空に屆かず、人々の頭の上に重なり合つた。

三千代は狹い通りの眞中へ押されて行つた。何にも見えなかつた。頭ばかりになつた人の海が、もう二寸もう三寸と首を伸すたびに波を打つのが、三千代の頭の上で感じられた。

男の着物のにほひと、見せものゝアセチレンガスのにほひが、押されるたびに鼻を掠めた。

とき〴〵人々の肩と首の間にすきが出來て直ぐふさがつた。そのすきは掛け小屋の中の演藝を見せる揚げ幕のやうに一寸の間、三千代の眼に店飾りの芝居人形や菓子で作つて珍しい玩具の山を見せつけがましく覗かせた。さきを赤く染

めたくじを引いて居る子供、父親らしいの〻肩車にのつて居る子供、何かせがんで買つて貰つて居る子供、それらの子供たちは皆、わがまゝを言ひ泣きじやくり、駄々つ子を賣りものにして居る憎まれつ子のやうに、誰かゝらあやされ宥められ乍ら、店飾りに一番近い青竹のてすりにすがつて見て居るのだ。

三千代は、幾度か胸を突かれた。人々の高くさし上げて居るえびす大黒の笹が、ときどき手を緩めて三千代の顔を横撫でにして、又ついと高く上つた。三千代はそれを防ぐために、頭を前に出し力を入れて歩いた。太鼓、かにの音に似た無數の下駄の音、わめき聲、雜音、三千代は直き頭が疲れた。

首を仰向けると、空には青い靄が殘つて居た。――では、この群集の中に居ないのは、あの自分の生れた暗い家の中の子供たちだけであらうか。自分はこゝに居て、この喧騷が、自分の生れて初めて見た際の夜が、あの、吉村の膳を列べた座敷の中から續いて來てゐるやうな氣がする。――

自分の坐るところは父の家。そして、その家から眼に見えない血脈に依つて送られる憎惡、不幸、冷酷は自分を包んで離さず、もう一度そこへ戻る事だけが、自分を救ふことを感ぜさせる。さう言ふ漠然とした感じが、へんな神秘と一緒になつて三千代の心を衝いた。

三千代は、祭の灯に背いて眼鏡橋を渡り、渡り終つて橋の袂の岐路に來たとき、躊躇なく左へ道をとつた。

そして、或る事を期待して、柳の木の下を見た。そこには、笠を着た釣りの人が居て、三千代がその方へ曲つたとき、合圖に答へるやうに一寸しやがんだ。そして、道具を片附けびくの魚を提げて三千代と同じ道を歩いた。

三千代はその男を知つて居た。祭の夜は川魚がひどく好い値で賣れるのだから。――

三千代は遠くから、父の家の窓の明りがないのを見た。父は寝て居るのだらうか。

（完）

二五、一、十三、

央公論大賣捌所

同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本鄉區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町		盛文館
同	北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前		共盛社
同	新町通り七條南入	大誠社
名古屋市富澤町		中京堂
朝鮮京城本町二丁目		日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　豐國通信社　日本廣告社
信賴社　金蘭社　一星社

一振替貯金 口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり
一郵券代用は謝絶す 但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢
　（集金委托料及送料共）
一中央公論及婦人公論 代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十四年一月廿三日印刷納本
大正十四年二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
發行所　中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二二（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

◉本號特價金壹圓　郵稅金三錢五厘

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

⊙本號特價金壹圓　郵稅金三錢五厘

東京小石川研精社印刷